
魔法少女リリカルなのはvivid ~ 過去と未来と現代の交差 ~

ガイド

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

魔法少女リリカルなのはvivid（過去と未来と現代の交差）

【Nコード】

N7933R

【作者名】

ガイル

【あらすじ】

ミッドガルで生活しているガイ・テストロツサ。航空戦実技でなのはに訓練され、ストライクアーツでヴィヴィオと知り合う。そんな生活の中でガイは聖杯戦争と言う大きな事件に巻き込まれる。そして、彼が召喚したサーヴァントとはヴィヴィオのオリジナルだった聖王家最後のゆりかごの聖王、オリヴィエ・ゼーゲブレヒトだった。

「話“出会いと運命の交差”（前書き）

はじめまして、ガイルと申します。

このたびは魔法少女リリカルなのはvivid〜過去と未来と現代の交差〜に足を運んでくださいますありがとうございます（

〜）m

なのはとFateの作品が好きでしたので、このようなクロスを考えて脳内構築を文章に書きとめようと始めました。

初めてですので、注意はしていますが誤字、脱字があるかもしれなのでご理解のほうをお願いします。

こんな作品を長い眼で読んでいただければ幸いです。

読者の皆様が興味を引けるような筆力になりますようがんばります。

一話“出会いと運命の交差”

????「あなたが私のマスターですか？」

それはこちらを見て静かに答える。マンションの一室に突然現れた女性。

第一印象としては綺麗な女性。顔が整っており、その優しいそうな瞳は左右の色が違く、左眼が紅で、右眼が翠。背は低い方だが、その全体から漂うオーラは周りの空気を静まり返すほど張りつめている事が視てわかる。あれは戦いで培ったオーラであろう。

服………ではなく、白と青を強調した騎士甲冑を着けて、長いライトブラウンの髪は邪魔だから後ろで縛っている。そんな女性が今、俺の住んでいるマンションの一室のダイニングで赤い術式の書かれている魔法陣の真中から突然現れたのだ。

俺「……………はい？」

俺はキッチンで料理を作っている最中だった。そこに、いきなりダイニングで眼を焼くような眩しい閃光が発したのだ。

驚いて目を瞑り、しばらくしてから目を開けると“それ”はそこに立ってこちらを見ていた。

その色の違うオッドアイはエプロンを付けず、黒いTシャツで黒いジーンズを履いて料理をしていた自分のことを映し出しているのだらう。

俺は頭に？マークを浮かべていた。

798航空隊 隊舎

俺の名前はガイ・テストロツサ。

798航空隊に所属している二等空士であり魔力ランクはC-。時空管理局に所属してから七年が立つが、未だに二等空士の魔力ランク-。

時々思う。自分は魔道士には向いていないんじゃないかって。それでも辞表を出さずに所属し続けているのは努力を怠らないで精進していけばきつと成果は出るだろうと思っっているからだろう。

同期に入った連中はどんどん昇格していくが。

ガイ「はあ……………」

俺は798航空隊の隊舎の横にある日の当たるベンチにコーヒーの入った紙コップを手に持って座って雲のない晴天の空を眺めていた。隊舎の周りは芝生でひき詰めており手入れが行き届いている。そこに何個かベンチがあり、その一つに座っている。そして、先ほど考えていた事が大きなため息に繋がった。

???「そんな大きなため息、どうしたの？」

と、そこに相手を優しく労わるような女性の声が後ろから聞こえてくる。

ガイ「あ、高町教導官」

振り向くとそこに居たのは高町教導官だった。

栗色の長い髪をサイドテールで結び、左手に紙コップを持ち笑顔で自分に寄ってくる。

この人の名前は高町なのは。四年前のJS事件を解決に導いた、機動六課のエース。あの大きな事件で高町教導官は大きな傷を負ったと聞いたが、二年前からご指導いただいた時から怪我をしているような素振りを一度も見せたことがない。

完治したのだろうか？まあ、訓練中に怪我が悪化して、高町教導官が倒れたりもしたら困るけどね。

高町教導官がこちらに歩いてきたので立ち上がる。高町教導官は俺が立ったのを見たからか右手を軽く振って俺の行動を止める。

なのは「あ、いいよ。座ってて。隣いいかな？」

ガイ「え？あ、はあ。よろしいですが」

高町教導官は笑みを絶やさず、ありがとうと一言言って俺の隣に座った。

立ちあがった俺も少し戸惑いながらもベンチに座る。

そして、高町教導官は紙コップに口をつけて一口飲んだ。黒い液体だったがおそらくコーヒーだろう。

なのは「ふ〜、やっと一息つけた〜」

高町教導官の表情が少し緩んだ。

なのは「で、何かあったのかなガイ君？そんな大きなため息ついて」

高町教導官はこちらに顔を向ける。

ガイ「あ……………いえ、さほど大きな問題ではありません、高町教導官」

そこ答えたのだが、高町教導官は目を瞑って首を振った。

なのは「あ、いいよ。今はお昼休みだし“なのは”で」

ガイ「公私混合はよろしくないかと」

なのは「あんまり頭が硬いとこの先大変だよ」

高町教導官は悪戯な笑みを浮かべて、にやははと笑う。

そう、俺は高町教導か……………なのはさんとは知り合い。二年前になのはさんが戦技教導官としてこの798航空隊の指導教導官になったのが初めての出会い。

訓練初日になのはさんとヴィータ教導官が部隊全員と模擬戦を行うと言われ、皆呆気にと取られていたが流石はJS事件を解決した機動六課部隊のエース達。

戦術を作ろうが戦略を練ろうが束になっても2人に傷1つ付ける事が出来なかった。それでも俺は最後まで立ちあがって2人に挑み続けた。当初の魔力はDだが、魔力ランクは低くても、体術や動体視力、反射神経などを徹底的に鍛えているため状況を素早く飲み込み、赤やピンクの魔弾を避け続けて、設置型バインダを避け、2人に近づいた。

そして、2人のプロテクションにやっと一太刀与える事が出来た。その時2人は驚きの表情だったのを確認して記憶が刈り取られた。

後になってなのはさんは

『魔導師としてガイ君は才能あるよ。どんな時も諦めないで向かってくる不屈の心を持っているしね。これからもよろしくね』

と、二年前にあって今に至る。この出来事だけじゃあ、ここまで気軽に話せる人にならないがきっかけはもう一つある。それはまた後に。

ヴィータ教導官も一緒にやってくることもあるが、今日はなのはさんだけのようだ。

ガイ「わかりました。“なのはさん”でいいですか？」
なのは「はい、よくできました」

なのはは名前を呼ばれて嬉しかったのか満面の笑みを向け、俺の頭を撫でてくる。
正直恥ずかしい。

ガイ「あ、あまり子供扱いはしないでください／＼」

俺はなのはさんを視界から外す。

なのは「ああ、ごめんね。そんな年じゃないもんね」

なのはは俺の頭に乗っけていた手を離して、再びコーヒーを飲む。俺も照れ隠しのため手にある紙コップに入っているコーヒーを飲む。考え事していたからか、時間がたち温くなっている。コーヒーの味わいが無くなっていた。

なのは「で、そのさほど大きな問題ではないことに対して大きなた

め息をしているガイ君は何をしているのかな？」

どうやら話を逸らす事は出来なかった。仕方なく俺は説明した。

ガイ「時空管理局に入ってから七年経って、もう18です。ここ最近
は魔力ランクも位も上がらず、C・Cの二等空士で留まっています。
なのはさんに才能があると言われましたけど、ちょっと不安になり
まして。俺には才能がないのかなと」

ガイは雲のない空を見上げた。なのはさんは隣で一生懸命聞いてく
れている。

ガイ「それに同期の奴らもどんどん昇格していきますからね…………

凹まない理由がありませんよ」

なのは「諦めちゃダメだよ」

なのはさんの言葉には今まで経験してきたような重く深みのあるで
凜とした声で言った。俺はそれを聞いてなのはさんの方へ顔を向け
る。表情も瞳も悲しそうというという表現がぴったりな顔だった。

なのは「諦めたらそこで成長は止まっちゃうからね、どんな時も諦
めない事が大切だよ」

ぐっと拳を俺の方へ向けた。その瞳は先ほどの悲しみは無く、決し
て諦める事のない強い眼をしていた。

ガイ「……………はい」

俺はそれを見て、まだ諦めるには早すぎると思った。俺は笑みをこ
ぼした。

そして、なのはさんが差し出している拳に俺の拳をぶつける。

ガイ「まだ、頑張ってみます」

なのは「“まだ”じゃない、“もっと”だよ……………“まだ”じゃ
“いつか”挫けちゃうよ。だから、もっと頑張って」

なのはさんからは満面の笑みをもらった。

なのは「それに、ガイ君は魔力値がC - だろうと、それを補っている部分が多いよ。もし、魔力値がA以上になったら私も勝てないかも」

そんなことないですよ、と俺は言った。なのはさんはふふっと笑い、紙コップに残っている残りのコーヒーを飲み終える。そして、立ち上がる。

なのは「さ、午後からは厳しく行くからね」

座っている俺を覗き込みながら言った。

ガイ「……………お手柔らかにお願いします」

俺も立ち上がり、2人は演習場へ移動した。

部隊長「本日の指導ありがとうございました！！！」
部隊一同「「「ありがとうございます！！！」」」」

演習場で本日の訓練が終わり、戦技指導官であるなのはさんに一同は礼をする。

部隊の皆のバリアジャケットはかなりボロボロだ。服の所々に大きな穴や破れた後、焦げてたりもしている。指導が厳しい事がよくわかる。

なのは「はい、皆さんもご苦労さま。しっかりダウンして疲労を取ってください。それではお疲れ様でした」

対してなのはさんのバリアジャケットは何一つ傷が付いていない。俺も一生懸命近づこうとしたが今日は一太刀を浴びせる事が出来なかった。

部隊一同「「「お疲れ様でした！！！」」」」

最後に礼をして皆は隊舎へ歩を進めていく。

なのは「あ、ガイ君」

俺も隊舎へ戻ろうとするとなのはさんに言葉を掛けられた。俺は歩を止めてなのはさんの方へ振り向く。

なのは「今日もあそこへ行くの?」

ガイ「はい、やらなければ鈍りますから」

なのは「そっか。それじゃあ、あの子の事よろしくね」

なのはさんは両手をくっつけてお願いするようなポーズを取って少し屈む。

ガイ「ええ。わかりました」

俺は踵を翻して隊舎へ戻った。

中央第4区公民館 ストライクアーツ練習場

ストライクアーツはミッドチルダで最も競技人口の多い格闘技であり広義では

「打撃による徒手格闘技術」

の総称でもある。

俺はデスクワークを終わらせて、ここにやってきた。

ストライクアーツは4年前に始めた。4年前のJS事件の時にガジェットの大群を止めようと必死に街を守っていたが、魔力値の低さからガジェットを止められず何機も街へ流れてしまった。

一生懸命訓練にも励んで、これでどんな敵からも街を守れると思っていたがその幻想は簡単に打ち砕かれた。

俺には決定的に魔力が足りていない。ならそれを補う何かを鍛えよう。

そう考えて始めたのがこれだ。今では結構な実力が付き有段を貰っている。

まあ、この実力が上がるのと、魔法のサポートや魔弾を避けるのに使っぐらいだからあまり意味はないけど。

???「あ、ガイさん!!!」

後ろから元気な声で俺を呼んでいる声があった。俺は振り向いた。

ガイ「よ、ヴィヴィにコロにリオ。来たか」

そこには動きやすい運動服を着た小さな女の子が3人いた。

頭に黄色いリボンを縛って濃い紫色をした髪をショートカットにしている黄緑色の瞳をして八重歯が目立つリオ・ウエズリーと、クリ

ム色の髪をツインテールにしてキャンディの形をしたゴムで結んでいる青色の瞳で大人しそうな雰囲気を持っているコロナ・ティミル。

そして、声をかけた張本人であるライトブラウス色の髪を両サイドでちよつと縛って、残りを下ろしている、左眼が紅く右眼が翠の虹彩異色の高町ヴィヴィオ。

3人がこつちに向かって走ってきた。ヴィヴィオはなのはさんの愛娘なのでなのはさんからよろしくと言われたのはこのヴィヴィオの相手をする事だ。

ヴィヴィオ「こんにちは、ガイさん!!!」

リオ「こんにちは!!!」

コロナ「こんにちは、ガイさん」

元気いっぱいの子3人組みだ。見ているこつちは微笑ましくなる。

ヴィヴィオ「ガイさん。今日もよろしくお願いします」

ガイ「んじゃ、やるか」

3人「はい」

俺はここに来るとこの3人組と組手をやることが多い。

一年前にストライクアーツの有段を取った頃、ここでちよつとしたイベントが行われた。

来た人全員の対戦をシャッフルして、トーナメントを行うものだ。身内どうしてやる人が多いストライクアーツは交流を増やしているこつちという考えのもと、当日にスタッフの人に言われたので会場内はどよめいていたが、いつも適当に相手を選んで組手をしている俺にとつてはあまり関係がなく、軽い気持ちでトーナメントに参加した。

ここは民間の人が利用している事が多いので有段者はあまりい無く、

それほど苦戦せずに決勝まで上り詰める事が出来た。

そして、決勝戦、対戦相手を見た時は驚きを隠せなかった。左眼が赤く右眼が緑の虹彩異色の小さな女の子だったからだ。小さな女の子がここまで勝ち上がったことに疑問が残る。

しかし、開始前に女の子はなのはさんが使っていたレイジングハートに似ているデバイスを持っていてそれを使い、なのはさんと同じサイドテールをした女性になった。たぶん、代役のデバイスだったのだろう。それを見たため、疑問は晴れてその女の子はなのはさんと関係のある子供だとわかった。

そして、試合はギリギリ勝つことが出来た。

それがきっかけで女の子……ヴィヴィオと通信端末のアドレスを交換して、組手をしたい時にはメールをするようになった。

名前を聞いた時は驚いた。なのはさんの養子の名前と同じだったのだから。それなのでなのはさんとの交流も少しずつ増えていき、気軽に話せる仲になった。

これが前の時に言っていたもう一つの理由だ。ヴィヴィオと知り合ってから、コロナやリオ、ヴィヴィオの師匠であるノーヴェとも知り合った。

俺たちはまずは体を解すためストレッチを始めた。

リオ「でも、有段者であるガイさんとかうやって一緒に練習できるのはいいですね」

リオは八重歯をちらちらと見せながら笑みをこぼす。なんとも愛らしい。

ガイ「お前たちは結構レベル高いし素質もあるからな。組手の相手として申し分ない」

コロナ「あ、ありがとうございます／＼」

コロナは褒められたからか俯いて顔を赤くした。こういう表情も愛らしい。

ヴィヴィオ「私たちは強いのですか？」

ヴィヴィオは疑問を聞いてきた。

ガイ「ああ。判断力と状況把握力があるのがわかる。正直、ここに居る奴らよりも3人の方が強いと俺は思っている。コロナは初心者クラスと言ってたが実力者として申し分ない」

俺が褒めてばかりいたからか3人は笑顔になっていた。リオなんかは瞳に星が輝いている。

こういう話をしているうちにストレッチは終わった。筋肉の緊張が少し取れた感じがする。俺はもう一度、腕をクロスして腕の筋を伸ばした。

ガイ「んじゃ、軽く組手するか」

3人「「「よろしくお願ひします」「」」

3人は礼儀が良いのか頭を下げた。

ガイ「お手柔らかに」

俺も礼を3人にして組手を始めた。

リオ「今日も楽しかったです!!!」
ガイ「こつちもいい運動になるよ」

ストライクアーツの練習が終わり、俺たちは中央第4区公民館から
帰路を歩いている。

最近連続傷害事件がこの付近で発生しているらしく、この子達と
練習したら帰りは家まで送るようにしている。組手をしてもらって
帰る時間が夜になるのだから送るのは必要なことだろう。俺と練習
して遅れたから夜の暗い道で傷害事件に会いました、だと申し訳な
いからな。

いつもはノーヴェもいるのだが今日は仕事が忙しくて来れないらし
い。

コロナ「今日も家まで送ってくださりましてありがとうございます」

コロナが頭を下げて礼を言う。

ガイ「気にするなコロ。最近こころ辺も物騒だからな。子供達だけで帰らすわけにもいかないだろ。組手をしてもらっているんだからその分のお礼だ」

ヴィヴィオ「ありがと、ガイさん」

ヴィヴィオは嬉しそうな口調で言った。表情も笑っている。他の2人も同じような表情だ。

ガイ「っと、そうだ。ほれ」

俺は先ほど缶ジュースを買ったのを思い出した。それを鞆から取り出す。

オレンジと書かれている黄色い缶ジュースだ。

ガイ「冷たいから美味しいと思うよ」

リオ「貰っていいんですか!？」

リオの眼が輝いている。

ガイ「ああ。今日のお疲れさんのジュースだ」

コロナ「ありがとございます」

ヴィヴィオ「わあ、ありがと」

3人に缶ジュースを渡す。皆はさっそく蓋を開けて一口飲む。そして、笑顔になった。

3人「おいしい、ありがとうございます」「」「」

こっちこそ元気いっぱいな笑顔を見せてくれてありがとう、だよ。お前らの笑顔を見ていると和むからな。

ガイは笑顔で答えた。そうしているうちにリオの家へ着いた。

リオ「じゃあ、コロナ、ヴィヴィオ、ガイさんまたね」

リオは元気に手を振って踵を翻し、家の玄関に入って行った。次にコロナの家に着く。

コロナ「では、ごきげんよう、ヴィヴィオ、ガイさん」

コロナは一礼をして家に入った。

ガイ「最後はヴィヴィオか」

俺たちはヴィヴィオの家に向かって歩き出す。

ヴィヴィオ「あゝあ、ガイさんともっとお話したいな」

ガイ「俺よりかはなのはさんと話していた方がヴィヴィオの為に
と思うぞ」

ヴィヴィオ「……………そういうわけじゃないんだけどね。コロナも
オモキつとガイさんともっと話したいと思うよ。私もコロナも
オモガイさんの事、尊敬しているよ」

ヴィヴィオは一瞬悲しい表情をしたかと思っただが、すぐ笑顔になり
俺を見上げる。

ガイ「俺はただのC-の二等空士だ。時空管理局に勤めてから七年
経った今もこのランクの低ささ。尊敬できるモノはないと思うが」

そう言ったが、ヴィヴィオは目を瞑り首を振って否定した。そして、
光彩異色の眼を開いて俺を見上げる。

ヴィヴィオ「ガイさんはとても優しいです。ガイさんには魅力的なもの………と言うと変ですね。尊敬できるモノ？うん、尊敬できるモノがガイさんにはあります。私が保証します。ですからそんな自虐的な事を言わないでください。こっちまで悲しくなっちゃいますから」

ヴィヴィオは最後に笑顔になった。流石は親子と言う所か。思いやりが人一倍強い。

なのはさんにも励まされた。

なのはさんから聞いた話だが、子供であるヴィヴィオはJS事件の時に利用され聖王のゆりかごのカギとなつてゆりかごを飛ばした張本人だ。ヴィヴィオは“最後のゆりかごの聖王オリヴィエ”のクロン体“聖王の器”であり、古代ベルカ王族の固有スキル“聖王の鎧”を保持していた。

古代ベルカ王族は自らの体に生体兵器“レリックウエポン”としての力をつけていたとされ、拉致された後スカリエッティによってレリックを体内に埋め込まれ、古代の戦船“聖王のゆりかご”の制御ユニットとして組み込まれしまった。

そこを機動六課が総力を上げてヴィヴィオを助け、ゆりかごは大気圏突破後宇宙で待機していたクロノ提督によって破壊された。

今、目の前にいるヴィヴィオは“聖王のクローン”としての自分の生まれも受け入れており、それを気にする事はもう無くなっている。

ガイ「ああ、ありがとうヴィヴィ」

俺はヴィヴィオの生い立ちをなのはさんから聞いていたのでヴィヴィオの言葉はとても深く強い言葉が秘められている事がわかった。

俺はヴィヴィオの頭を撫でてながらお礼を言った。

ヴィヴィオ「あ、ありがとうございます／＼」

何故かヴィヴィオは顔を赤くして礼を言ってきた。

ガイ「なぜ礼を言う？礼を言うのは俺だが？」

ヴィヴィオ「そ、そだね！！私、何してんだろ／＼」

ヴィヴィオは少し早歩きをして俺より前へ進んだ。そして、ヴィヴィオの家ことなのはさんの家へ到着した。高級住宅を思わせる庭付きの一戸建てでありここになのはさんとヴィヴィオは住んでいる。コロナトリオも高級住宅を思わせるような家だったがヴィヴィオの家もかなり大きい。

2人で暮らしているのに二階建の家は意味ないのではないかとここに来るたびに思ってしまう。

なのは「あ、ヴィヴィオ。おかえり。今帰りなの？」

と、後ろから何時間か前に聞いた声があったので振りかえる。そこには肩からバッグを下げて仕事帰りのなのはさんが立っていた。

ヴィヴィオ「うん、ガイさんに送ってきてもらった」

ヴィヴィオは笑顔で答える。なのはさんはそっか、と言って俺の方に笑顔を向ける。

なのは「ありがとね、ガイ君」

ガイ「いえ、練習相手になってもらってますから。このくらいはしない」と

俺は適切に答えた。

ガイ「では、俺はそろそろ帰ります」

俺は帰ろうとした。だが

なのは「よかつたらご飯食べていく？その方がヴィヴィオも喜ぶし」

なのはさんから食べていかないかと誘われた。

俺は物心がついたときから孤児院で生活していた。孤児院を出てからはずっと1人暮らし。だから俺は家族で食べる暖かな食卓に入りたいと思っていた。

なのはさんはそれを知っているからか来るたびに食べていく？と聞いてくる。なので家族の居るなのはさん宅に食事に誘われると断れない自分がある。

ガイ「……………お言葉に甘えてもいいですか？」

なのはさんとヴィヴィオは俺の言葉を聞いて満面の笑みを向けてくる。

なのは「それじゃあ、腕を振るって料理作らないとね」

ヴィヴィオ「私も手伝う。ガイさんに食べてもらいたい」

2人はやる気満々のようだ。俺はなのは宅に招かれた。

なのは宅

ガイ「何か手伝いましょうか？」

なのは「ううん、大丈夫だよ。ガイ君はお客様なんだから座って待っててね」

なのはさんはキッチンで料理をしている。今は野菜を炒めている最中だ。隣でヴィヴィオがお肉を切っている。

なのはさんから何もなくていいと言われたので俺はソファに深く座り目を瞑った。

なのはさんの空戦実技にデスクワーク、ストライクアーツなどを一日でしているのだ。体に疲れが溜まっていないわけがない。

視界から入る情報は膨大な量なので脳では常に処理を続けている。

それなので眼を瞑ることで脳に情報を送ることを減らすことが出来るので少しは楽になる。そのかわり暗闇の世界が広がってしまうがそれでも、なのはさんとヴィヴィオの話し声や食欲をそそる香ばしい匂いがしてくるので目を瞑っていても飽きる事がない。

ピンポーン

と、そこにインターホンの鳴る音がした。

なのは「ん？誰だろう？」

ヴィヴィオ「私が見てくるね」

ヴィヴィオが出ていく音がするのがわかる。そして、少しすると戻ってきた。

ヴィヴィオ「なのはママ」。フェイトママが来たよ」

なのは「あ、そういえば今日ご飯を食べにくるって言ってたっけ。忘れてた」

フェイトさんが来る？

俺はその名称に反応して眼を開けた。

フェイト「こんばんは、なのは」

と、同時にフェイトさんが視界に入る。薄赤の瞳に長い金髪の髪を腰当たりで縛って、スタイルがかなり整っていて優しいオーラがフェイトさんの全体から溢れているのが何となくわかる。

なのは「あゝ、ごめんね、フェイトちゃん。今日来るってこと忘れてた」

フェイト「え？ひ、ひどいよなのは……………」

フェイトさんはかなり落ち込んでいるのが見て分かった。忘れられたのだから仕方ないといえはしかたない。と、フェイトさんがこちらを向いた。

フェイト「あ、ガイ。こんばんは。久しぶりだね」

さっきの表情とは一変、優しげな頬笑みを向けてくる。

ガイ「こんばんは、フェイトさん。久しぶりです」

フェイトさんが声をかけてきたので立ち上がる。

この人の名前はフェイト・テストロツサ・ハラウン。時空管理局の執務官をしている。テストロツサが俺と同じ苗字なので、どこか遠い親戚で繋がっているんじゃないかなってちょっと思っている。フェイトさん自身はそんなこと考えていないと思うけど。

フェイト「今日はご飯食べに来たの？」

ガイ「はい。なのはさんのご厚意に甘えさせて頂きました」

フェイト「そつか。ねえ、もし良かったら私かなのはの家に来ない？一人暮らしはいろいろ大変だと思うよ」

フェイトさんも俺がマンションの一室で一人暮らししているのを知っている。孤児院から出てきたことも。

だからか、フェイトさんと会ったびにこのように言ってきてくれる。

なのは「私の家も別にかまわないよ」

なのはさんもこの会話に入ってきた。

ヴィヴィオ「え？ガイさん！！ここに住むんですか!？」

ヴィヴィオも話に入ってきた。その純粹無垢な瞳で俺の事を見つめながら。

正直に言えば、こんな美しい女性の方々と一つ屋根の下に暮らせる

のは男としては嬉しいだろう。だが……

ガイ「気持ちは嬉しいのですが、御二方のご迷惑になるわけにはいきません。今の生活でもしっかりとやっていけますのでこのままで」

俺はその申し出を断った。断ったことによりヴィヴィオが悲しい表情をしてしまった。

なのは「この〜、断るなんて何事だ〜」

なのはさんが冗談っぽく俺の頭に拳を軽くぶつける。

フェイト「それなら困ったときには何でも言ってね。力になるのなら協力するから」

フェイトさんは再び優しい頬笑みを向けてくれた。それを見ていると脈が少し早くなるのがわかる。正直、俺はフェイトさんの事が好きなのかもしれない。

ガイ「……………本当に困ったことになったら、どちらかの家に居候としてみてくださいもいいですか？」

その言葉にヴィヴィオは明るい笑みを浮かべた。

ヴィヴィオ「もちろんですよ!!!ね、なのはママ?フェイトママ?」

ヴィヴィオは本当に嬉しそうだ。その嬉しさは何処から来ているのだろうか?

なのは「そうだね、私もフェイトちゃんも大歓迎だよ」
フェイト「うん」

2人も微笑んでいた。皆お人好しだな、と思った。

ガイ「ありがとうございます」

俺はそう思いながらも感謝の気持ちでいっぱいだった。こんな一兵士のためにここまでしてくれる人たちが居ることに。

なのは宅 玄関前

ガイ「ごちそうさまでした。料理美味しかったです」

玄関前に俺は立っていた。玄関にはなのはさんとフェイトさんとグイヴィオがお見送りするために居る。

なのは「気をつけて帰ってね。最近ここら辺で連続傷害事件が出て
いるから」

フェイト「送って行くのか？」

ガイ「いえ、大丈夫です」

フェイトさんは過保護すぎるような気がしてならない。俺は18だ
ぞ……まあ、フェイトさんから見ればまだまだ子供かもしれない
が。

ヴィヴィオ「ガイさん。また明日」

ヴィヴィオが手を振ってくる。俺も手を振った。

ガイ「では、失礼します」

俺は一礼をして町の夜に歩きだした。

マンション

俺が寝食をしている部屋は三階の一室だ。階段を上って、二つ目のドアが俺の部屋だ。俺は鍵を靴から出してドアを開けた。

ガチャ

と、開けたと同時に隣のドアが開いた。中から1人の少女が出てきた。

ガイ「よう、アイン。これから出かけてくるのか？」

アインハルト「あ、ガイさん」

ドアから出て来たのは碧銀の髪を特徴的なツインテールに結び、左の大きな赤いリボンが印象的な少女。この子も虹彩異色で左眼が薄蒼で右眼が紫。名前はアインハルト・ストラトス。隣同士という事なので、ちよくちよく話をしている。

ガイ「今から出かけるのか？夜は連続傷害事件の犯人がまだうろついているかも知れないぞ」

アインハルト「い、いえ、きっと大丈夫だと思います」

何処からそんな根拠が出てくるのだろうか？

ガイ「何処かに行くなら一緒に行こうか？まだ危ないし」

その言葉にアインハルトは首を横に振った。

アインハルト「いえ、気持ちには有り難いですが大丈夫です。こう見えても私は強いですよ」

グツと拳を握る。可愛らしい服を着ているのでギャップが激しい。

ガイ「そう。なら気を付けて行けよ」

アインハルト「心配してくださいましてありがとうございます」

アインハルトはそう言ってぺこりと頭を下げた。

ガイ「それじゃ、おやすみ」

アインハルト「おやすみなさい」

俺は部屋に入ってドアを閉めた。

アインハルト「……………ガイさん、あなたともいつか一戦を交える
かもしれません」

私はガイが入って行ったドアをしばらく見つめた後、階段を下り始
めた。

ガイさんに嘘ついちゃった……………でも、これも悲願の為!!!

グツと表情を険しくして私は夜の街へと出かけて行った。

???? 『マスター。メールが一件届いています』

ガイ「おう、プリムラ。教えてくれてありがとな。開いてくれるか？」
プリムラ「了解しました」

風呂上りに、机に置いてあった十字架のデバイス……プリムラからメールが届いている事を知らせてくれた。クロスしている部分に核があり、説明もしたからか点滅している。

プリムラがメールを開いて、濡れた頭をタオルで拭いている俺の前にモニターが現れる。

差出人……高町ヴィヴィオ

件名……明日の用事

本文……明日はお暇でしょうか？もし良かったら、コロナとリオを連れてガイさんのマンションに遊びに行きたいです。

ガイ「明日は休日か。予定もないしな」

あの三人組と知り合ってから、何度かこの部屋に遊びに来ることがある。趣味であるピアノ以外はあまりモノを置いていないので遊ぶ物はあまり無いのだが、それでもあの三人組は来るたびに喜んでい

俺はモニターを操作して返信のメールを作った。

件名……Re：明日の用事

本文……特に予定はないからいつでも大丈夫だよ。

簡単に書いて、返信した。そして、1分もしないうちにプリムラからメール受信を知らせてくれた。

差出人……高町ヴィヴィオ

件名…………… Re: Re: 明日の用事

本文…………… ありがとうございます!!! 明日楽しみにしていますね
!!!! お昼ごろお伺いします!!!!

メール呼んでいるだけでも元気なヴィヴィオを想像出来てしまう。

俺はその内容を読んで苦笑してモニターを閉じた。

ガイ「ん、いい感じに疲れもたまってるし寝るか」

プリムラ「おやすみなさいませ、マスター」

プリムラがおやすみを言ってきた。1人暮らしたと言う人が居ない。それは確かに寂しいがデバイスが挨拶をしてくれるのだけでも随分と寂しさが減る。

ガイ「…………… おやすみ、プリムラ」

そのことに感謝しつつ、俺はベッドで横になって目を瞑った。

疲れが溜まっていたからかすぐに意識が闇の中に落ちていった。

なのは宅

ヴィヴィオ「コロナとリオに送信つと。クリスお願いね」

私の部屋にはふわふわと空中を浮いている物体があった。私の専用デバイス“クリス”。

首に青いリボンを付けた見た目は小さいウサギの形をしているが、術式はベルカ主体のミッド混合のハイブリッドという高性能なデバイスである。

デバイス自身が動けるといっておまけ付き。クリスは先ほどのガイさんとのやり取りの内容を編集してコロナとリオにメールを送信中だ。両腕を上げて、ジツとしている。

そして、送信が終わったのか両腕を下げて私に近づいた。

ヴィヴィオ「ありがと、クリス」

その言葉にクリスは軍隊のようにピシツと敬礼した。それを見た私は笑ってベッドに移り、横になった。

ヴィヴィオ「明日は久々にガイさんの家だ。えへ〜……………楽しみ」

私は少し顔が赤くなり、笑顔が絶えなかった。

翌日 昼

ヴィヴィオ「ガイさんの家についたね」

コロナ「そうだね」

リオ「入ろう」

私達はガイさんの住んでいるマンションの一室にやってきた。ガイ・テストアロツサと札には書かれている。

ピンポーン

私がインターホンを押す。しかし、出てこない。

コロナ「出てこないね」

リオ「寝てるのかな？」

ヴィヴィオ「もう一回押すね」

ピンポーン

しかし、2度押ししても出てくる気配がない。

ヴィヴィオ「んぐ、何処かに行ったのかな？」
リオ「とりあえず連絡してみようよ」

そうだね、と私は言ってクリスに頼もうとしたとき

ドン！！！！

3人「ひゃう！！！！」

ドアに内側から何かがぶつかる音がした。

コロナ「な、中で何があったの？」

私達3人は少しドアから離れた。

ヴィヴィオ「ガイさんに何かあったのかな!？」

リオ「わ、わかんないよ!!!!」

コロナ「ど、どうしよう」

私達は慌て始めた。

ガチャ

と、先ほど何かがぶつかったドアが開いた。

中から現れたのは、寝起きなのか頭がぼさぼさで、まだ少し寝ぼけている瞳を擦りながらこちらに顔を向けているガイさんが立っていた。

ガイ「ん、ヴィヴィイ達か……ああ、だからこんな激しく起こされ

たのか。つたく、もう少し優しく起こしてくれ」

プリムラ『約束したのですからちゃんと起きて下さい。私は何度もアラームを鳴らしたのに全く起きませんでしたよ』

ガイさんの胸には首から下げているデバイス……プリムラが核を点滅しながら不機嫌そうな言葉でガイさんを叱っていた。

ガイ「悪い、3人とも少し待っていてくれ」

そう言つて、一度ドアを閉めた。

3人「……」

私達3人は過ぎ去つた嵐を見ているような表情だった。

ガイ「悪いな、来てもらったのに寝てて」
ヴィヴィオ「ほんとです。お客さんが来るのだからちゃんと起きていてください」

4人はテーブルを囲んで座っていた。俺は戸棚にあつたお菓子とお茶を用意して3人を上からせた。俺は寝巻きから着替えて黒いTシャツで黒いジーンパンだ。

コロナ「先ほどの音はいったい何だったのですか？」

ガイ「あゝ、たぶん俺がドアにぶつかった音だ。眼が覚めたら玄關だし、後頭部が痛かったし」

プリムラ「しっかりと起きて下さい。でないと今度はもっと強力な

……………」

ガイ「わかったわかった。ちゃんと起きるからこれ以上強力なのはやめてくれ」

まあ、俺がこんな時間まで寝ていたのが悪い。ヴィヴィオ達に迷惑をかけた。ヴィヴィオは怒っているのかさつきから頬を膨らませている。

ガイ「ヴィヴィ、本当にゴメン」

俺は頭を下げる。

ヴィヴィオ「私は今日ガイさんの家に行くのを楽しみにしていたんです。それなのにガイさんはぐっすり眠っているし……………」

全面的に俺が悪い。約束したのに寝ていたのだから。

珍しくヴィヴィオは怒っている。あまりヴィヴィオには怒ってもらいたくないな。この子達にはやっぱり笑顔が一番似合うし。

ガイ「どうしたら機嫌を直してくれる？」

怒っているヴィヴィオを鎮めるためにも直接聞いた。

ヴィヴィオ「……………何でも言ってもいい？」

と、ヴィヴィオは脈ありのような発言をしてきた。

ガイ「俺に出来る範囲のことならな」

ヴィヴィオ「……………ん……………」

ヴィヴィオは俯いて小さな声で言ったので聞き取れなかった。

ガイ「ん？なんて言った？」

ヴィヴィオは顔を上げた。よく見ると、顔が少し赤い。

ヴィヴィオ「きよ、今日1日、お兄ちゃんって呼んでいい／＼？」

コロナ「え？」

リオ「ふえ？」

先ほどの怒った表情ではなく、今にも逃げ出したいくらいに顔を赤くして不安げな表情を浮かべるヴィヴィオ。

ガイ「え？」

脳が先ほどの言葉を分析できなかった。俺はヴィヴィオに怒られるような事をしたので何でも言う事を聞くことにした。当然、何か罰を受けるのだろと思っていた。

しかし、実際にヴィヴィオが言ってきたのは俺の事を1日お兄ちゃんって名称に変更するにだけだ。

思考がようやく動き始めた。明らかに変である。

ガイ「それで、ヴィヴィは機嫌が直るのか？」

ヴィヴィオ「うん、お兄ちゃん／＼」

ガイ「……………」

今のはちょっとマズかった。ヴィヴィオの純粹の瞳が頬を赤くして上目使いでお兄ちゃんと呼んできたのだ。不意打ちにもほどがある。

ヴィヴィオ「……………呼んでもいい？」

ガイ「あ、ああ」

俺が了承すると、ヴィヴィオは満面の笑みを見せつけた。よほど嬉しかったのだろうか。

コロナ「それなら私もお兄様と呼んでもよろしいですか？」

リオ「私も兄さんって呼んでもいいですか？」

これに乗じて2人も俺の名称の変更に意見を述べてきた。

まあ、こんな時間まで寝てしまい迷惑をかけたのはヴィヴィオだけではないので否定するつもりはなかった。

ガイ「ああ、構わないよ」

こうして今日1日、この子達の兄役を務めることとなった。

ヴィヴィオ達がカードゲームを持つてきてくれたのでそれを使って遊ぶことにした。

簡単にルールを説明すると初手5枚で猫のカードを使ってキャラやクライマックスカードを買ったりして、エンド時に手札を全て捨てて、新たにデッキから5枚カード引く。

デッキが無くなったら捨て札のカードをデッキにするので、捨て札を蓄えていき、他の人と対戦をして勝てば勝利カードをもらう事が出来るゲームだ。

それによって先に7枚勝利カードを揃えることが出来れば、このゲームの勝ちとなる。

対戦の時も対戦専用の山札のカードがあり、お互いにそれを1枚づつ引いてそこに書いてある能力修正を対戦しているキャラに付ける。ここで変なものを引いてしまえばキャラが優秀でも負けてしまう事もある。

リオ「それじゃあ、ヴィヴィオ。勝負！……！」

ヴィヴィオ「負けないよ、リオ！……！」

キャラ的にヴィヴィオの方が優秀である。リオが先に対戦専用の山札を引いた。内容は竹刀だ。能力修正により数値が上がった。

ヴィヴィオ「やるね、リオ。でも私も負けないよ」

ヴィヴィオも対戦専用の山札を引いた。内容はウニ。能力修正により数値が下がった。

リオ「お、私のキャラが勝った」

ヴィヴィオ「え〜、何であそこでウニなんて引くの〜」

結果としてリオがのキャラがヴィヴィオの能力血の下がったキャラを上回ったのでリオの勝ちだ。

勝利カードがリオに1枚手に入った。

リオ「これであと1枚で私の勝ちだね」

リオは八重歯を見せながら笑っていた。

現状、リオ6枚。ヴィヴィオ4枚。コロナ5枚。俺4枚だ。リオにリーチが掛っている。

ガイ「次は俺か。じゃあ、リオに対戦を申し込もうかな」

リオ「いいですよ兄さん」

ガイ「……………」

今までガイさんと言われ続けたので名称が変わるとどうも調子が狂う。

ガイ「……………キャラはリオの方が有利か」

リオ「これなら私の勝ちだね、兄さん」

リオは勝利を確信していた。俺は対戦専用の山札から1枚引いた。内容はウニ。先ほど居ヴィヴィオが引いたカードと一緒に。キャラに能力修正により数値が下がった。

ヴィヴィオ「あ、お兄ちゃん。それ引いたら最悪だよ」

どうもこの“兄”と言う言葉は聞くだけで背中がむずむずしてくる。

コロナ「でも、まだ大丈夫だよ、お兄様。リオが何を引くか分からないもの」

リオ「いやいやいや、私の勝ちだよね兄さん」

そう言っただけでリオは対戦専用の山札からカードを1枚引いた。

皆して“兄”と呼びすぎではないだろうか？と、俺は先ほどの3人のお願いごとに縦に首を振ったことに早くも後悔した。

リオ「私が引いたカード、それは……うなぎ……パイ？」

リオが引いたカードの内容はうなぎパイだった。能力修正……大幅ダウン。

ガイ「ん？そうになると俺の数値が下がったキャラでもリオのキャラに勝てるのか」

能力修正の値をつけてキャラを見比べた。俺のキャラが勝っていた。恐るべしうなぎパイ。

リオ「な、なんでこんなカードが入ってるの？これ引いたら勝てな

いよ
「

リオが涙目になって抗議した。

ヴィヴィオ「バトルがこのゲームの醍醐味なんだって。最後までやらないとわからないって書いてある」

ヴィヴィオが説明書に書いてあるものを読んだ。

リオ「なら、負けてたまるか」

リオはさっきの負けた試合とヴィヴィオの言った説明書の事を頭に入れ、それをバネにやる気を出した。

コロナ「盛り上がってきましたね。お兄様」

ガイ「……………そうだな」

またしばらく“兄”を言われ続けるのだろう。そう思うと少しため息が出た。

リオ「楽しかったです、兄さん」

玄関には3人組みが靴を履いている最中だった。結局あのカードゲームはやる気をMAXにしたリオが勝ってしまったのである。

ヴィヴィオ「私はうなぎパイを2回も引いちゃったよ、お兄ちゃん」

逆にヴィヴィオはあれからここぞっと言う場面でうなぎパイを2回引いて勝負に負け、結果はビリ。

コロナ「私は可もなく不可もなくですね、お兄様」

コロナは三位。特に引いたものはあまり能力修正されるものが無かったため、ある意味安定の戦いが出来た。

ガイ「やっと“兄”の言葉に慣れてきた」

俺は二位。ただ、名称が変わったので慣れるまでが大変でカードゲームどころではなかった。三人は俺に何か話すたびに“兄”の名称を言ってくるのだ。慣れるまでが本当に大変だった。

そして、カードゲームの後は雑談したり、俺がピアノを弾いたり、お昼寝をしたり。ここは日が良く当たる一室なのでひなたぼっこするには最適だ。

俺は壁に背中を預けて眠った。俺の膝にはリオとヴィヴィオが枕代わりに使って寝ており、コロナは俺に寄りかかって寝ていた。

なんだかねで夕方になってしまった。

ガイ「送らなくて大丈夫か？」

ヴィヴィオ「大丈夫だよ、お兄ちゃん。まだ暗くないから帰れば」

コロナとリオが先にドアを開けて出た。

ヴィヴィオ「あ、そうだ。お兄ちゃんに渡すものあったんだ」

と、ヴィヴィオは何かを思い出したかのように鞆から何かを取り出す。

ヴィヴィオ「はい、プレゼント」

ヴィヴィオが鞆から取り出したのはピンクの包み紙でラッピングされた包みだ。

ガイ「ん？貰っていいの？」

ヴィヴィオ「うん、いつもいろいろなことに付き合ってくれてありがとうを込めて、プレゼントにしたんだ」

ヴィヴィオは頬笑みを向けてくる。

ガイ「っふ。ありがとな」

こういう気持ちの籠った贈り物は貰うだけでも嬉しい。俺はヴィヴィオの頭を撫でた。ヴィヴィオは嬉しそうだ。

ヴィヴィオ「それじゃ、またねガイさん」

ガイ「ああ。またな」

ヴィヴィオもドアから出て行った。俺は鍵を閉めて、部屋に戻る。
ガイ「なんだかんだで楽しかったな」
プリムラ「マスターが楽しそうでなによりです」

机の上にあるデバイスであるプリムラが点滅しながら無機質な言葉で言うてくる。

ガイ「ヴィヴィからのプレゼントか……何が入っているんだろうな……まあ、何が入っていても気持ちいいから嬉しいけどね」

そう言いながら、ピンクの包み紙をほどいていく。箱が現れた。それを開けると

ガイ「ブレスレットか？」

全体が銀色でライオンのレリーフが刻まれている。

ガイ「へえ、カッコいいな」

俺はこのブレスレットが気に入った。

ので、早速付けてみる。見た目ほど重みもなくすんなりと腕に収まる。

ガイ「うん、これは素敵なプレゼントをありがとう、だな。ヴィヴィ」

俺は心も満たされて満足したので、ブレスレットを外してテーブルに置いて、俺は夕飯の準備を始めるのでキッチンへ向かった。

ガイ「人からモノを貰うつてのは嬉しいんだな」
プリムラ「嬉しそうだなによりです、マスター。」
ガイ「ああ、嬉しいね」

そして、冷蔵庫を開けて、夕飯の献立を決めて料理を作り始めた。

ガイ「今日は気分がいいし少し奮発だな」

冷蔵庫から取り出したのは、冷凍されている牛ステーキだ。いい日にはこういうものを食べたくなる。

ガイ「たれを作るか」

それを自然解凍しながらたれを作りはじめた。が、

ピ。ピ。ピ。ピ。ピ。ピ。ピ。

プリムラ「マスター！！！！未知の力があのブレスレットから溢れてきています！！！！」

プリムラが異様なほど大きい警戒音を出しながら、ブレスレットから未知の力が溢れ出して来たことを知らせてきた。

ガイ「なに！？」

俺はプリムラから聞いた言葉からブレスレットのあるダイニングへ目を向けようとした。

シュン

しかし、それは突然の閃光に遮られて目を向ける事が出来なかった。

ガイ「つく。何が起こってるんだ!!!!」

プリムラ「測定不能です」

そして、恐る恐る目を開けると、先ほどの閃光は無くなっていた。
が、今度は違うものがあつた。

???「……………」

女性だ。視界に入って来たのは1人の女性だつた。

第一印象としては綺麗な女性。顔が整っており、その優しいそうな瞳は左右の色が違く、左目が紅で、右目が翠。背は低い方だが、その全体から漂うオーラは周りの空気を静まり返すほど張りつめている事が視てわかる。あれは戦いで培つたオーラであろう。

服……………ではなく、白と青を強調した騎士甲冑を着けて、長いライトブラウンの髪は邪魔だから後ろで縛っている。赤い術式の魔法陣が足もとにあるのも確認できた。

その女性がこちらを向いて語りかけてきた。

???「あなたが私のマスターですか？」

ガイ「……………はい？」

何が何だかわからなかった。閃光がいきなり発したと思つたら今度は騎士甲冑をつけている女性が居るからだ。つい先ほどまでは日常であるヴィヴィオ達と遊んでいたのにいきなり非日常に連れていかれてたような感覚だ。

ガイ「あゝ、えっと……………君は誰？」

俺はそう言っつて右手の人差し指でその女性を指そうとした。

ガイ「え？」

だが、俺が気になったのは女性ではなくその手の甲に刻まれた紋章。いつの間に刻まれたのか分からなかった。

???「あなた様が私のマスターですね。何なりとお申し付けください」

女性はその紋章を見て俺の事をマスターだと言い出してきた。そして、相手に敬意を表するように片膝をついて頭を下げた。

ガイ「マスター？　いったいどういう意味だ？　それに君は誰だ？」

正直、整理が追い付かない。いきなり現れた騎士甲冑をまとった女性。そして、その虹彩異色。左眼は紅で右眼は翠のその瞳はまるで

……

???「はい。私の名は……」

女性は顔を上げた。

“オリヴィエ・ゼーゲブレヒト”と申します。

一話“出会いと運命の交差”（後書き）

書き出しの部分に戻るのにだいぶかかってしまったorz

結局はぜんぜん話が進んでいないって言うね……………。

筆力がまだまだだなと実感しました。

今回はアインハルトが絡んでいく予定です。

しばらくはほのぼのが続きますかね。

原作がほのぼのですからねw

vividとfateはライトとダークですからここを入り混ぜて
いきたいですねw

一言感想がありますと嬉しいです。

では、また(・・)(・・)／

追記

主人公の設定です

ガイ・テストロッサ

18歳

798航空隊 所属

二等空士

魔力のランクはC-

容姿はミッドガルにしては珍しく、ツンツンな黒い髪に黒い瞳。身長は175cmと一般男性の平均に近い。

運命を切り開くと言われていた花言葉として

デバイスはプリムラと名前を付けられた。

デバイスはベルカ式。

日本刀のようなしなやかな刀で鞘も付いていることからガイはこのデバイスを抜刀術として使う。

物心がついた時には孤児院に居て、親に纏わる話は一切知らない。

孤児院の園長曰く

「朝に孤児院の玄関の前で毛布に包まって泣いていた。」と言っている。本人は親の事に関してはあまり気にしていない。

孤児院は11歳の時に出て、798航空隊に所属。そして、4年前のJS事件によって11歳まで住んでいた孤児院が破壊され、園長や孤児たちは瓦礫の下に埋もれて、遺体となって現れた。

ガイは悲しみ、その事故から「魔法で誰もが不幸にならない世界を作る」と決める。

最初の頃の魔力のランクEと低かったが、7年間、努力をし続けてを通じてようやくC-までに成長。現在は管理局航空戦技教導隊の高町一等空尉の下で訓練されている。

ストライクアーツや居合などもやっており、魔力ランクは低くても、体術や動体視力、反射神経などを徹底的に鍛えているため状況を飲み込みやすくしぶとく戦う。ストライクアーツでヴィヴィオとも知り合って、たまに高町家にごはんを食べに行くこともある。

マンションの3階の一室に住んでいる。

趣味はピアノを弾く事。

口癖………お手柔らかに

二話“過去と絆の交差”（前書き）

あゝ、オリヴィエってどんな人物なんだろう？

vividの本で僅かにしか話さないからそこから性格をとらえる
しかない。

では、二話目入ります。

二話“過去と絆の交差”

マンシヨン

ガイ「ん〜」

俺は床に座って、テーブルを挟んで対面に座っている人物について考えていた。

第一印象としては綺麗な女性。顔が整っており、その優しそうな瞳は虹彩異色であり、左眼が紅で、右眼が翠。

背は低い方だが、先ほどは全体から漂うオーラを発しており、周りの空気を静まり返すほど張りつめていた。今はその矛も収まっている。

服ではなく、白と青を強調した騎士甲冑を着けて、長いライトブラウンの髪は邪魔だから後ろで縛っている。

目の前の人物が現れた場所には赤い魔法陣が残っていた。

この日常に合わない騎士甲冑をつけた女性が何処から来て、なぜここに来たのかいくら考えても分からなかった。

オリヴィエ「マスター」

と、テーブルを挟んで座っていた人物、オリヴィエが凜とした声でマスターと発した。マスターは俺の事を言っているらしいが。

ガイ「ん？んん、なんだ？」

俺はいろいろ考えていたことをやめてオリヴィエを見た。オリヴィエの瞳は揺るぎなくしっかりと俺の事を見ている。

オリヴィエ「……………ここは何処なのでしょう？」

ガイ「え？」

しかし、その揺るぎない瞳から一変、不安げな表情を見せる騎士甲冑の女性。まるで迷子の子供みたいな表情だ。今にも泣きそうである。

ガイ「……………ここは、ミッドチルダだ」

オリヴィエ「ミッドチルダ？」

女性……………オリヴィエは首を傾げた。場所が分かっていないようだ。

ガイ「俺も聞いていいか？」

オリヴィエ「はい。マスターの質疑にも答えるのがサーヴァントの使命でもあります」

サーヴァント？まあ、今はいい。

俺は先ほどの呆気な質問で冷静さを取り戻してきたので、一番気になることを聞いた。

ガイ「オリヴィエ・ゼーゲブレヒト。君は古代ベルカ諸王時代の戦乱の世の中で“聖王女”と呼ばれていたオリヴィエ・ゼーゲブレヒトか？」

訓練校の頃に歴史の講義で出てきた記憶があつた。それを思い出しながら目の前のオリヴィエと言ってくる女性に語る。

オリヴィエは昔の人物だ。今の現代に現れるわけがない。

だから、俺は目の前の人物はオリヴィエだと思わなかった。

オリヴィエの回顧録を読んで、オリヴィエに成りきる……………コスプレをしている人ではないだろうかと考えてしまう。

オリヴィエ「ええと、確かに“聖王女”と言われていた頃もありま

した」

先ほどの不安げな様子とは打って変わり、笑顔で語り始める。
「ココロ表情が変わる人物だなと思った。」

オリヴィエ「しかし、私は正統王女ではありませんでしたが継承権は低かったので、ほんの一時の間でしか言われません。それでも、後世にはそのように語り継がれていったのですね」

オリヴィエは目を瞑って胸に手をあてた。

昔の事を思い出しているのだろうか？

ガイ「君がオリヴィエ・ゼーゲブレヒトだという証拠はあるのか？」

だが、未だに目の前の人物がオリヴィエだとは信用できなかった。
時間軸がもともと違うのだから、その理由が分からないと信用しようにも出来なかった。

それを聞いたオリヴィエは静かに眼を開けて俺の事を見た。

オリヴィエ「……………“聖杯戦争”と言うのはご存知でしょうか？」

ガイ「聖……………杯戦争？」

オリヴィエの口から戦争という言葉が出てきて俺は歴史の講義の内容を思い出す。

しかし、聖杯と付いた戦争の名前は出てこなかった。

俺は記憶ないと言うと、オリヴィエは笑みを零して静かに語り始める。

オリヴィエ「聖杯は“万能の釜”または“願望機”とも呼ばれ、手にする者の望みを実現させる力を持った存在です。これを手に入れ

るための争いを聖杯戦争といます。聖杯によって選ばれた七人のマスターが、私たちサーヴァントと呼ばれる聖杯戦争のための特殊な使い魔を使役して戦いあいます。」

万能の釜？願望機？サーヴァント？

俺はオリヴィエが何個か発言した言葉の意味が理解できなかった。

オリヴィエ「マスター。貴方には何か願望がありますか？」

オリヴィエは一度この話を切って真面目な顔をして違う質問を俺に問いかけてくる。何かを期待しているような表情でもある。

ガイ「願望………夢か………」

ガイは天井を見上げる。ダイニングを明るく包みこむ蛍光灯がポツンと一つあるだけだ。

ガイ「魔法で誰もが不幸にならない世界を作る………あの時そう決めた。それが俺の願望だな」

ガイは目を瞑った。

脳裏に浮かんで来たのは4年前のJS事件によって11歳まで住んでいた孤児院が破壊され、園長や孤児たちは瓦礫の下に埋もれて、遺体となって現れた時の事だ。俺はその場で膝をついて号泣した。守ることが出来なかったからだ。育ってきた場所の思い出を。

JS事件がなければよかった。あの事件があったからこそ、孤児院に居た孤児たちは何もしていないのに不幸の目に会った。

あの出来事があったからこそ俺の夢は“魔法で誰もが不幸にならない世界を作る”と決めた。

オリヴィエ「……………そうですか。だから、私はあなたに召喚されたのですね」

俺は目を開けてオリヴィエを見た。オリヴィエはにっこりと微笑んだ。

冷静にオリヴィエを見ると、かなり美人だ。騎士甲冑を付けているが、それも着こなして様になっているのでオリヴィエ自身の魅力を引き立たせるアイテムにもなっている。

ガイ「……………どういう事だ？」

俺は今考えていた事は脳の隅に置いておいて、先ほどオリヴィエが言った事が気になった。

オリヴィエ「誰もが不幸にならない世界……………私も似たような世界を望んでいました。聖杯戦争はマスターとサーヴァントの願望が類似している場合、引きあいます。だからマスター、私は貴方にひかれて呼ばれたのでしよう」

ガイ「……………」

オリヴィエの言っている事が本当なのかどうかわからなかった。そもそも聖杯戦争と言う物自体が良く分からない。

オリヴィエ「それに、聖遺物の品物が近くにあるとそれにひかれやすくもありますので」

ガイ「あ……………」

ガイはテーブルの端に置いてあるヴィヴィオから貰ったブレスレットを見た。プリムラからこのブレスレットに未知の力が溢れてきたと言ってきた。

ガイ「これは元々は君のだったの？」

ガイがブレスレットを持ち上げて、オリヴィエに見せる。それを視界に入れたオリヴィエは喜んで、はいと答えた。

要するに俺の願望とこの聖遺物の一つがあつたのでオリヴィエが召喚されたと。

オリヴィエ「それにマスターの証として、マスターの右の手の甲に紋章が浮かび上がりましたでしょう？ それは私たちサーヴァントを役役するための制御みたいなものです。サーヴァントは歴代の英霊が具現化したものなので、マスターには絶対的な命令権がないとサーヴァント達は言う事を聞きませんからね」

ああ、確かに浮かんでいた。俺は右手の甲を見る。紋章が浮かんでいる。

この紋章はヴィヴィオがくれたブレスレットにレリーフされていたライオンの顔と同じ形をしていた。

ガイ「ん〜、整理が追い付かなくなってきた」

俺は頭を掻いた。なのはさんに頭が硬いと言われたが確かにそうかも知れない。こういう非日常な出来事に理解が追い付かない。先入観は捨てるべきだろうか？

しかし、脳に入ってくる情報が未確認の物が多くて処理に追い付かない。

プリムラが言っていた未知の力と言つのも気になる。

オリヴィエ「……………私の事信用できませんか？」

ガイ「あ……………」

オリヴィエが悲しげな表情で上目使いで俺の事を見る。その虹彩異色の眼を見ると昼間にヴィヴィオが上目使いをして見てきた光景と被った。

ヴィヴィオはオリヴィエの複製体だ。もし、目の前の人物がオリヴィエ本人だとしたら、今さっきヴィヴィオの光景と被ったのは多少ながら説明が出来る。

オリヴィエ「マスター？どうしました？」

口を開けて、固まっていた俺の事を心配したのかオリヴィエが不安げに聞いてきた。

ガイ「……………やはり君は本物のオリヴィエか？」

オリヴィエ「はい！！！！私はオリヴィエ・ゼーゲブレヒトです！！！！」

オリヴィエは理解して貰えそうなので喜びながら俺の言葉を肯定した。
なんか、オリヴィエと話しているとヴィヴィオと話している感じがしてしまう。

プリムラ『マスター。通信が来ました』

オリヴィエ「ひゃう！！！！」

と、そこにデバイスのプリムラから通信が入ったと連絡を受ける。突然、別の音がしたからかオリヴィエはびっくりしていた。これで本当に聖王女が務まるのかと内心思った。

ガイ「相手は誰だ？」

プリムラ『非通知で秘匿レベルが最大状態です。さらに普通の通信ではなく別ルートからの接触です。どうしますか？』
ガイ「非通知に秘匿レベルが最大……………ね。大将以上のクラスにしか通信できないものだろ、それ」

何となく嫌な予感がした。だが、出ない訳にもいかず俺はプリムラにモニターを開く様に指示した。
そして、目の前にモニターが現れる。

ガイ「……………どちら様ですか？」

俺は困惑した。映し出されたのは一面暗闇なモニターだったのだから。
顔を出したくないのだろうか。

???『君がガイ・テストロツサだな？』

だが、黒闇の中で何かが動くのが見えた。そこに人物はちゃんというようだ。

渋い声だと聞いて分かるので男だとわかる。

その上から視線の態度に俺は少しムツとした。

ガイ「人の名前を聞く時はまずは自分の名前を名乗るのが常識だろう？」

???『ふっ、これは失礼した。だが、生憎と私の名前は教える事が出来ん。強いて言うならば管理者とでも言っておこうか』

管理者……………ねえ、何の？と聞きたいがきつと教えてくれないだろう。

こんな秘匿レベルが最大の通信だ。

これは危険な橋を渡る前なのではないか？ここで橋を渡らず来た道を引き返してもいいんじゃないか？

一瞬、俺の気持ち揺らいだ。しかし、目の前のオリヴィエを見るとそんな気持ちもどっかにいってしまった。

それに、オリヴィエからいろいろ聞いたので、もう片足は橋を踏んでいる状態だ。

なら、前に進むしかない。

ガイ「で、こんな足を残さないような通信をして何か俺に用なのか？」

俺はこの管理者と言う奴の話聞くことにした。

管理者「ふっ、この通信も漏れないという保証はないから手短に話そう。ガイ・テストロッサ。君は今回の聖杯戦争の最初のマスターだ。喜びたまえ」

やはり、と俺は思った。このタイミングでこんな嚴重な通信が入るのだ。サーヴァントがどこに現れたのか瞬時に調べたのだろう。

ガイ「プライベートの侵害だな」

管理者「なに、これ以降は干渉せんよ。干渉する時だとすれば全てのマスターとサーヴァントが揃った時の聖杯戦争の始まりの合図ときだけだな」

そうですか、と俺は簡易に答える。

ガイ「聖杯戦争と言うのは公の場には出来ない理由があるのか？英雄たちをサーヴァントとして戦わせる………今まで聞いたこともない話だし」

管理者『ミッドチルダでは初めてだな。聞いた事はないだろう。この前は第五次聖杯戦争で管理外第97世界の地球のとおる土地で行われたようだ。そして、聖堂教会に観測された第727個目の候補の聖杯がここミッドチルダに存在すること。君がサーヴァントを召喚してくれたおかげで確認できたがね』

聖堂教会？聖王教会ではないのか？

ガイ「俺とオリヴィエを含めた七人のマスターとサーヴァントが揃った時、聖杯戦争は始まるのか？」

モニターの暗闇で管理者がフツと鼻で笑ったのがわかった。

管理者『ああ、願望あるマスターやサーヴァントが戦い合い、最後の一組になった時に聖杯が手に入る』

ガイ「……………殺し合いなのか？」

最後の一組になる……………それはつまり残りのマスターやサーヴァントは死ぬのだろう。

管理者『ああ、これは“戦争”だ。魔法に非殺傷設定が義務付けられているのこの世界で育った君には理解しがたいと思うが、殺し合い、これが本来の“戦争”と言う意味なのだ』

ガイ「俺は時空管理局の航空部隊の一員だぞ。これを本局に連絡したとしたらどうする？」

俺はカマをかけて見た。通信の秘匿レベルが最大なだけに本局の上層部が囁んでいる事がわかる。これで何か情報を聞き出せると良いのだが。

管理者『無駄だ。本局に通報しても私はその情報を揉み消せる。それに、もしそんな事をしたら君の大切な人を人質に取らなければならぬ』

ガイ「くっ……………」

分かってはいたが、カマかけは失敗した。

脳裏に浮かんで来たのはヴィヴィオ達の姿。

あの子たちが不幸になってしまふのは防がなければならない。

結局、この戦争に拒否権はなかったのだ。

ガイ「だが、都市内で殺し合いなんてものが起これば地上本部が黙って無いぞ」

管理者『そこは安心するが良い。聖杯戦争は人が居ない場所で行われる。人前では決して戦わない。掟で決まっている』

つまりは表舞台のない戦争なのか。

管理者『ふむ、少し長く話してしまったな。では、失礼する。今度、連絡した時が聖杯戦争の始まりの合図だ。まあ、君が最初のマスターなのでマスターが7人そろうのはまだ先だと思うがね。それまでは準備を怠らないように』

管理者はそう言って、一方的にモニターを切った。

ガイ「プリムラ、逆探知できたか？」

プリムラ『申し訳ありません、マスター。あと少しでしたが、相手にばれたようです。切られました』

プリムラには逆探知の命令をさせておいたが、やはり一筋縄では行かないようだ。

オリヴィエ「あ、あの……」

と、そこにオリヴィエが恐る恐る声を上げてきた。

ガイ「どうした？」

オリヴィエ「マスターは不安ですか？」

オリヴィエは優しく相手を包み込むような声で聞いてくる。

ガイ「まあ、不安じゃないって言えば嘘になるが……」

俺は一度眼を閉じて、そして、再び眼を開けてオリヴィエに笑みを浮かべながら見た。

ガイ「少なくともこの戦争を止めないと不幸になる奴が現れる。あの管理者の言葉を信じるなら聖杯戦争を止める事は出来ない。ならば、始まったらすぐに戦争を終わらせる。被害が出る前に」

オリヴィエ「ええ、そうですね。それに聖杯戦争に勝つことでマスターの願望も叶えることが出来ます」

願望……魔法で誰もが不幸にならないような世界……

ガイ「願望か……叶うといいな、俺もおまえも」

オリヴィエ「はい。そのためならばマスターの矛にもなり盾にもなります」

オリヴィエは頭を下げ、俺に忠誠を誓った。俺もオリヴィエの事を信用することにした。

ガイ「それに、悪かったな。最初のころはオリヴィエの事を疑って
オリヴィエ「いえ………何も知らなければ私の事を疑うのは当然の
事です。ですからマスターは気にしないでください」

オリヴィエは頭を上げて微笑んだ。

ガイ「ありがとう、オリヴィエ」

俺も笑った。

ガイ「うん、よし。まだ疑問がいくつか残ってはいるがとりあえず
夕飯を作り直すか」

俺は料理の作りかけが残っているキッチンに戻った。牛ステーキが
ちょうど自然解凍し終わっていた。

ガイ「オリヴィエ、夕飯食べるか？」

オリヴィエ「はい、頂けるのなら。何か手伝いましょうかマスター
？」

ガイ「ああ、いいよ。すぐに焼くから待ってな」

俺は解凍したステーキを二分割した。孤児院以来、久々に人に料理
を作るので腕がなった。

疑問はすべて解決したわけではないが今考えていても解決する問題
じゃない。

だから、俺はその思考を一度切った。

しばらくは聖杯戦争というのは始まらないのだから。

???

管理者「最初のマスターが君だったとはなガイ・テストロッサ……
…これも運命か……… 今後が楽しみそうだ」

暗黒の中で先ほどの管理者が笑っていた。

管理者「そして、召喚されたサーヴァントのクラスは………」

「ガイ、ファイター？」

オリヴィエ「はい。私のクラスはファイターとして召喚されました」

俺は夕飯を並び終えた時にちよくちよくと聖杯戦争の事についてオリヴィエと話をしていた。

因みに今のオリヴィエの姿は騎士甲冑を外している状態の姿であり、青と白の色を兼ね合わせたベルベット服だ。

流石にずっと土足で部屋に立っでいられるのも困ったので助かる。本人曰く、この体は霊体であり、甲冑も霊体化することが可能との事。

なので、しばらくは甲冑を着けさせないことにした。

オリヴィエ「他にも、セイバー、アーチャー、ランサー、ライダー、キャスター、アサシン、バーサーカー………例外もありますが、私

のファイターのクラスは聖杯戦争では初めてのようです」
ガイ「ふ〜ん、クラスねえ」

ファイターと言う事は拳で戦うのだろうか……まあ、ヴィヴィオもストライクアーツをしているのでオリヴィエのクラスもあながち間違っていない。

オリヴィエ「接近戦ではセイバーが優秀と言われておりますが、私のクラス、ファイターも後れをとりません。」

オリヴィエはグツと拳を握り、俺の事を見る。確かに心強い。
俺はオリヴィエにご飯を渡す。

ガイ「ああ、期待しているよ。オリヴィエ」

オリヴィエ「はい。あ、では、いただきます」

ガイ「いただきます」

オリヴィエは微笑んでご飯を食べ始める。ステーキを一口食べた。

オリヴィエ「……………凄いですマスター。これほどの美味しい食事を作るのですね……!」

ガイ「そ、そうか。そう言ってくれると嬉しいが」

オリヴィエが無邪気な瞳で輝いていた。まるで子供みたいだ。

聖王女であるオリヴィエから好評をいただいたので、少し嬉しかった。

そして、この温かい食卓。俺が憧れていたもの。
今までの家は一人で食べていたが、オリヴィエが居るだけでも家の食卓はかなり変わった。

オリヴィエの雰囲気がとても温かい。

ガイ「ありがとうな、オリヴィエ」

温かい食卓が取れたことで俺は嬉しくなって、オリヴィエにお礼を言った。

オリヴィエ「え？何にお礼を言っているのですかマスター？」

オリヴィエは何のお礼を言われているのかわからなかった様子だがそれでもいい。俺は嬉しかった。

聖杯戦争が終わるまでの間、オリヴィエは家に滞在することになった。しかし、オリヴィエの着る服が全くない。サーヴァントは姿を消せる霊体と聞いたが、俺の魔力が低すぎた原因と召喚時の不具合が原因で、霊体化することが出来ないようだ。

何か申し訳ない気持ちだったので、オリヴィエが日常生活を出来るように服を買いに行くことにした。

当然、俺の家に女性の衣服はない。よって服を買いに来たわけだが

……

ガイ「あゝ……………」

周りからの視線が痛い。今いる店はランジェリー店。いわば下着売り場だ。

もう一度言う。家には女性の衣服は何もない。下着ももちろんだ。服を買いに行こうとしたのだが、オリヴィエが

『まずは下着ですよマスター』

とオリヴィエが俺の手を引っ張って、ランジェリー店に強制的に入ることになった。

オリヴィエは少し離れたところで下着を選んでいる。

横顔を見ると嬉しそうな表情をしているのはいいが、周りを見ると男は俺だけだ。オリヴィエから離れているから視線が痛い。

オリヴィエ「マスター、これなんてどうですか？」

そこにオリヴィエが近づいて、下着を見せてくる。周りの客からは彼氏だと思ったのか、視線を感じる事が無くなった。

ガイ「お、俺の事は気にしなくていいから、自分で好きな物を選びなよ／＼／」

オリヴィエは恥じらうことなく手に持っている下着を見せてくる。俺はそれを直視することが出来ず、視線をそらした。

オリヴィエ「こういう時は男性の方に聞くのが良いと聞きましたので」

誰の入れ知恵だそれ？昔の人も変な事をオリヴィエに教えたものだ。オリヴィエ自身は箱入り娘……………と言うわけではないが、時折、ズレている常識を持っているのがわかる。

ガイ「俺もよく分からないから、気にいったものを買つといいよ」
オリヴィエ「そうですか……………」

俺が軽くあしらうと、オリヴィエは寂しげな表情をして少し俯く。それを見ているとまるで俺が悪い事をしている感覚に陥る。でも、ここで妥協するわけにもいかない。

ガイ「俺はちょっと恥ずかしいから、外に居るぞ。財布は渡してお
く」

オリヴィエに財布を渡して、返事を待たずに俺は店の外へ出た。

「ガイ……………」

俺は外に出て、夜空を見た。今日は雲一つもなく、大きな星が二つともくつきりと見える。

俺は右手を空へ軽く上げる。手の甲にはライオンの顔をした紋章が付いている。

サーヴァントへの絶対的命令権。

これがないとサーヴァントは命令を聞かない事が多いし、魔力供給も行えないという。

しかし、オリヴィエを見た限りだと、これが無くても一緒に戦ってくれそうな気がする。

ドカッ……………」

と、そこに遠くから音がした。

ガイ「何の音だ？」

俺は考える事をやめ、音のする方を見た。

ビルとビルの間にある薄暗い通路だ。路地裏に繋がっている道だ。先ほどの音は多分、何かが地面に叩かれた音だろう。

ガイ「プリムラ。いつでも動けるようにスタンバイしとけ」
プリムラ「了解しました」

俺は何かが起きていると考え、ネックレスで首にかけて持ち歩いているデバイス……プリムラにいつでも動ける状態にして、路地裏に入った。

ビルが夜の光を遮るようにして立っているため、入口の光しか頼るモノがなく薄暗い。少し進むと、右に曲がる曲がり角にあたった。

こういう場所では何かとぶつかる事こともあるので俺は壁沿いに寄った。

そして、俺は壁に背をつけて、ゆっくりと曲がり角の先を見る。

そこで見た光景に驚いた。

男性「いつてえ………」

男が一人うつ伏せで倒れていたのだ。

そして、その先にはその男を倒した張本人なのか後ろ姿で歩いていた。もうここに用はないのだろうか。見向きもしない。

薄暗いので特徴的なのは良く見えなかったが、あれは女性だろう。髪が腰まで伸びていたのが分かった。そして、その人物は曲がり角を曲がるうとした。

ガイ「まで……！」

俺は曲がり角から飛び出して倒れている男の前まで動く。その人物は曲がるうとした道で止まり、こちらを向いた。薄暗いからあまり見えないが、先ほどより近づいたので全体像が見えた。

背は高いが女性………と言っよりも幼げさが残っている少女に見える。碧銀の髪に顔を隠すためのバイザー。

???「あつ……………」

その人物は俺を見たとき、一瞬戸惑ったような声を漏らした。

ガイ「お前が噂の通り魔か？」

俺はそれを気にせずプリムラに手を触れて、いつでも動ける状態に構える。

しかし、あちらは何もせずただ茫然と立っっっいように見える。

???「はい、それを否定する理由はありません」

凜とした声。

先ほどの戸惑いとは違う。その声を聞いただけでもわかる。自分の道をまっすぐに貫く人物だと。言葉に迷いが無い。

ガイ「こんな事して何になるんだ？」

???「……………」

俺の質問には何も答えなかった。

返事の代わりに静かに構えた。俺も最大限に警戒をした。

ガイ「お手柔らかに」

少しの間の静寂。そして、

???「はああああ!!!」

ガイ「!!!」

ドガッ!!!

その人物は思いっきり拳を放った……地面に。

その威力は凄まじく、コンクリートの地面を簡単に砕いて、砂埃をまき散らした。

ガイ「くっ……見えない。」

プリムラ『対象者、離れていきます』

視界を遮られた俺はプリムラの言葉を聞いて、ハツとなった。

砂埃に紛れて逃げたのだ。俺はどうするか悩んだが、倒れている男をほっとく訳にもいかず、砂埃が晴れるまで動かないことにした。

しばらくして、恐る恐る眼を開けると砂埃は落ち着き、あの人物は居なくなっていた。

ガイ「あの拳を受けたらひとたまりもないな」

魔法なのかわからないが、簡単にコンクリートを叩き割ったのだ。

地面は粉々に割れていた。

生身の人間が喰らったら危険だろう。

ガイ「通り魔……ね」

俺は救急隊に連絡して、男を路地裏から連れ出した。

表通りに戻ると、救急隊が既に来ており、負傷した男を乗せて走り出した。

俺は上司に先ほどの事をモニター越しに説明した。しかし、そう言うのは地上本部に任せておけとの事。相変わらず、空と地上は仲が悪い。

オリヴィエ、「マスター。何処に行っていたのですか？」

隣にはオリヴィエが居た。手には紙袋を持っている。

下着を買ったのだろう。

ガイ「路地裏にな。最近ここら辺で連続傷害事件が起きてて、さっき連れて来た男も被害者だ」

オリヴィエ「喧嘩ですか？」

ガイ「まあ、そんな所だろ。被害者も被害届を出さないから事件に繋がらないけどね」

俺は先ほどの人物を思い出していた。あれは相当な実力者だろう。まともによつたら俺は勝てないかもしれない。

ガイ「まあ、この話は終わりな」

オリヴィエ「そうですね。あまり明るい話ではありませんし」

俺がオリヴィエの方を見ると、オリヴィエは笑みを見せる。

オリヴィエ「では、次は服ですね。買いに行きましょう。あ、これは返しておきますね」

オリヴィエはそう言って、俺に財布を返してきた。そして、俺の手を引っ張って歩き始める。

ガイ「そう言えば買い物途中だったな」

オリヴィエ「そうですね。早く行きましょう」

オリヴィエに引っ張られて俺は歩きだした。

俺はふと財布の中身を見てみると……

ガイ「……おい、いくら使った？」

ピクッ

オリヴィエは体をピクつかせて、歩くのをやめた。

オリヴィエ「え、え」と……………可愛いものがいっぱいありましたので／＼／」

オリヴィエはギョッと紙袋を抱き込んで申し訳なさそうに言ってきた。こちらを向かずに。

財布の中の金額が半分近く無くなっていた。

ガイ「使いすぎだろ」

下着だけでこんなに使われてしまった。

オリヴィエ「も、申し訳ありません……………」

後姿で謝るオリヴィエ。

ガイ「……………はあ、まあいいけどさ。服は程々にしとけよ」

俺はそれを見て、ため息をついてそう言うと、オリヴィエは振り向いて頭を下げた。

オリヴィエ「はい、ありがとうございます……！」

まあ、オリヴィエにお金なんて無いのだから仕方ないと言えば仕方ない。

魔力の低すぎで霊体化出来ない俺が悪いのだから。

ガイ「とつとつと、買いに行くか。お手柔らかに頼むぞ」
オリヴィエ「はい!!!」

オリヴィエは頭を上げて満面の笑みを見せた。

ヴィヴィオと同じでオリヴィエも笑顔が良く似合う。

オリヴィエの笑みを見て、俺も笑った。

マンション

買い物は無事終わらせる事が出来た。
代わりに財布の中身が全滅したが。

ガイ「こんなに買うとは思わなかった」
オリヴィエ「す、すいません、マスター」

テーブルに買った物を置いた。紙袋が10個以上ある。
オリヴィエが申し訳なさそうに言うてくる。

ガイ「まあ、いいけどさ。明日は貯金下ろさないとな」

俺は明日仕事に行く前にお金を下ろす計画を立てた。

オリヴィエ「あ、あの、開けてもよろしいですか？」

オリヴィエが恐る恐る聞いてくる。

ガイ「ああ、全部オリヴィエの物だから好きにしなよ。俺はシャワー浴びて寝るわ」

マンションに戻って来たのも夜遅い。
明日の仕事に支障がないようにシャワーを浴びてとっと寝ることにする。

風呂場に行く時、ふと、オリヴィエを見る。洋服を紙袋から取り出して見て喜んでるようだ。
その笑顔を見ているだけでも今日の買い物には意味があるものだと思っただ。

ガイ「あ、ヴィヴィにメールしとくか。プリムラ」
プリムラ「モニター開きます」

俺の前にモニターが現れる。俺はメールの文章を書き込んだ。

Ｔ〇……………高町ヴィヴィオ

件名……………プレゼント

本文……………プレゼントのプレゼントありがとな。とても嬉しかったよ。ところで、あのプレゼントは何処で手に入れたんだ？

俺はプリムラに送信しておくように命令した。夜遅いから帰ってくるのは次の日だろう。

あのプレスレットがオリヴィエを呼び水にした聖遺物であることは間違いないだろう。

まあ、今考えても仕方ないので俺はシャワーを浴びた。

俺はベッドが一つしかないので、オリヴィエに譲り、ソファアで眠ることにした。

オリヴィエは

『私はマスターとご一緒でも構いませんが？』

と言ってきたので流石にそれはマズいだろうと考えて、ソファアで眠ることに。

眼を瞑るとすぐに眠気が襲ってきた。

今日1日が長かった気がした。

聖杯戦争というシステムに片足を入れてしまったが、まだしばらくは始まらないとの事。それまでにやれることをやる。疑問も多い。オリヴィエが出てきた時の未知の力。見たことのない魔法陣。手の紋章。

疑問も多いが、一つ一つ片付けて行こう。

そう結論が出た時には俺の思考は闇に落ちて行った。

二話“過去と絆の交差”（後書き）

アインハルトが絡む予定だったけど、ちょっとしか出てこなかった。

オリヴィエと聖杯戦争の話でほぼ終わってしまったorz

次回こそアインハルトをちゃんと絡ませます。

オリヴィエの性格は実直で生真面目ではあるがどこかズレていて、感情的であり明るい性格。

マスターである、ガイが悲しんでいるとオリヴィエも悲しんでしま
う。

こんな性格で多分大丈夫かなw？

何か一言感想があると嬉しいです。

では、また（・・）／

三話“過去と現代の交差”（前書き）

アインハルトって一人暮らしだと勝手に予測している。

だって、親が出てこないんだものw

だが、漫画の中の一コマに一軒家が写っていたようなw

最後のほうは二人称が少し増えます。

誰が主観なのかを確認して読むと良いかと。

では、3話目はいります。

三話“過去と現代の交差”

???

ガイ「ここは？」

俺は立っていた。あたり一面が焼け野原。建物という建物は全て破壊されて燃えている。燃えた建物の煙と炎で空は赤黒く、焦げくさい臭いが……

ガイ「……………しない？」

俺は困惑した。ここはいつたい何処なのだろうか。

周りを見渡して歩きだした。どこまで見ても一面の焼け野原。戦争の後だろうか？

と、考え事をしていたが視界に人物が入り込んだ。

2人いた。1人は見ただけで分かった。オリヴィエだ。

初めて会った時の青と白を強調している騎士甲冑を着けているが所々ボロボロになっている。

そして、もう1人は膝について左腕を怪我しているのか右手で掴んでオリヴィエを見上げていた。男性だ。碧銀の髪ショートヘアで左眼が薄蒼で右眼が紫の虹彩異色。

オリヴィエみたいな騎士甲冑は付けてなく、羽織る形の服装を着て、それをベルトで縛った格好だ。たぶんマントも付いていたのだが焼け焦げて無くなったのだろう。

それにオリヴィエと同じく所々ボロボロだった。

ガイ「オリヴィエ!!!」

俺は彼女の名前を叫んだ。しかし、聞こえた素振りを見せない。

どういう事だ？2人とも俺が近くに居て大きな声を出しているのに
気付いていない。

だが、オリヴィエの口が静かに動き出した。

オリヴィエ「クラウド、今まで本当にありがとう。だけど私は行き
ます」

オリヴィエは優しい笑みをクラウドという人物に向ける。

これはオリヴィエの夢なのだろうか？

俺とはある仮説を立てる。夢は記憶の整理を行うために見る現象。

オリヴィエとは少なからず魔力で繋がっている。その影響でオリ
ヴィエの記憶に飛んだ……………？

クラウド「待ってくださいオリヴィエ！！勝負はまだ……………！！
」

俺が考えていても話は進んでいく。俺はひとまず考える事をやめて
2人の話に耳を傾けることにした。オリヴィエはクラウドの言葉途
中で止め、目を瞑って首を横に振り、右手を自分の胸に当てる。

オリヴィエ「あなたはどうか良き王となって国民とともに生きて下
さい。この大地がもう戦で枯れ果てぬよう青空と綺麗な花がいつで
も見られるようなそんな国を……………」

オリヴィエは眼を開けて、踵を翻し歩きだした。

クラウド「待ってください！まだです！！ゆりかごには僕が！！
」

クラウドが必死に叫ぶがオリヴィエの足は止まらない。代わりに右

手を上げてそれに答えた。

クラウド「オリヴィエ……！……！……！……！……！」

クラウドがその続きを言おうとした。しかし、突然世界が暗くなる。

マンション

ガイ「んっ………」

俺は眼を開けた。窓からの朝日の光が俺の体に当たり寝汗をかいて

いたようだ。

ベッドは光が当たらない所に置いておいたはずだが、なぜ光が体に当たるとのだろうか？

それに、いつも起きる時に見る天井の蛍光灯が微妙にズレている。

ガイ「ああ、そっか」

だんだんと脳が活性化していき、昨日の出来事が蘇ってくる。ベッドにオリヴィエを譲って、俺はソファで寝たのだ。

俺はソファから身を起こした。いつものベッドに寝ずに慣れていないソファで眠ったせいか体の節々が痛む。

俺は腕をクロスしたりして、筋肉の緊張を解す。何か夢を見ていた気がするが思い出せない。

ふと、ベッドの方を見る。そこにはオリヴィエが毛布を被り髪を解いて規則正しく寝息を立てて眠っていた。

ガイ「あつ……………」

そうだ、思い出した。

オリヴィエを見ていると脳裏に浮かんで来たのは辺り一面の焼け野原の光景。

ガイ「あれは夢だったのか……………」

夢の中で2人が話した言葉を思い出す。

オリヴィエは言っていた。

『この大地がもう戦で枯れ果てぬよう青空と綺麗な花がいつでも見られるようなそんな国』

これがオリヴィエの願望なのだろうか？だが、俺の

『俺の魔法で誰もが不幸にならない世界』

の願望に類似したとは思えない。もっと違う願望があるのだろうか？

オリヴィエ「ん、ん……………」

その時、オリヴィエの規則正しい寝息が乱れた。
俺は考えていた事を中断してオリヴィエを見た。

ガイ「まあ、オリヴィエにも叶えたい願望があるんだろうな。それは無理して聞く事じゃないか」

俺はソファから起き上がって机の上にあるプリムラを取りに行こうと動き出す。

オリヴィエ「ん……………」

オリヴィエは寝苦しいのか寝返りを打った。

ガイ「あ……………」

そこで全ての思考が停止した。寝返りでオリヴィエをかけていた一枚だけの毛布がベッドから落ちたのだ。

それだけなら思考は停止しないだろう。しかし、問題なのは……………

ガイ「なんで、下着姿なんだ…………… / / /」

オリヴィエは白い下着姿だった。

下着にはレースの飾りが付いており、明るい性格のオリヴィエに白はピッタシだ。俺はダメだと思いつつも下着に釘づけになる。

プリムラ『マスター、視姦はよろしくくないですよ』
ガイ「はっ！！！」

俺はプリムラから痛い言葉を貰い我に帰った。
止まっていた思考がようやく動き出す。

昨夜、俺はオリヴィエよりも先に寝ていた。昨日はいろいろあったからすぐに眠気が来たのが分かった。

そして、記憶が途切れる前にオリヴィエを見ると服を自分の体に合わせて鏡の前で見比べていた。あの後オリヴィエがどうしていたかは知らないが、まさかこんなおいs…………格好をして寝ていたとは。

ガイ「と、とりあえず毛布をかけ直さないとな／＼／」

俺はなるべくオリヴィエを見ないように毛布をかけ直す。

そして、ベッドから離れ机の前に移動する。

ガイ「それにプリムラ。あれは視姦じゃない」

プリムラ『視姦…………視姦する人間自体は相手に直接手は出さず、言葉などで命令して相手を辱めて性的興奮を煽る。今の行為と類似していると思いませんか？』

ガイ「まったく類似していないよ！！！」

プリムラ『相手に直接手は出さず』の所はあっていませんか？』
ガイ「……………」

どこでそんな言葉をインプットしたのだろうか？

少なくとも俺の記憶の中には無い。

後で技術者に問いかける必要があるようだ。

オリヴィエ「んんっ……………」
ガイ「あっ……………」

と、またオリヴィエの寝苦しい寝息を立てた。俺が怒鳴ったからだろうか。

そして、背後でゆっくりと起き上がる気配を感じた。

俺は恐る恐る振り向く。

オリヴィエ「ん、おはようございます。マスター」

少し寝ぼけている表情のオリヴィエ。上半身を起こしているため、毛布のかかっている場所……………騎士甲冑を着込んでいるとは思えない程の体のラインが細く白い肌が括れから見え、白いブラを付けているだけの状態だった。俺は急いで机の方へ向きなおった。

ガイ「な、なあ、オリヴィエ。寝る時はその……………下着だけで寝ていたのか／＼？」

オリヴィエ「え、ええ。そうですよ」

ガイ「オリヴィエには羞恥心つてのは無いのか／＼？」

オリヴィエ「え？羞恥心ですか……………あゝ、なるほど。マスターは私の今の姿に欲情してしまったのですか？」

背中越しからオリヴィエの間の抜けた声がする。まだ、脳が活性化していないのだろう。

恥ずかしいことも平気で言ってくる。

ガイ「と、とりあえず、俺は朝飯作るから……………オ、オリヴィエ。ちゃんと着替えるよ／＼」

俺は恥ずかしくなって、キッチンへ逃げるように駆け込んだ。

オリヴィエ「んん、いい天気ですねマスター」

そんな俺の心境も知らず、オリヴィエは腕を思いつきり伸ばしたのが分かった。

プリムラ『刺激的でいいのでは？』

ガイ「少し黙っててくれ」

俺はオリヴィエが着替え終わるまでキッチンから出る事が出来なかった。

今日の朝食は食パンにスクランブルエッグ、ウインナーとサラダの盛り合わせにスープ。
簡単に作れるので朝はこの献立が多い。

オリヴィエ「食欲がそそられますね。」

オリヴィエは半袖の白いブラウスに黒いロングスカートに着替えていた。

細かい所に装飾が付いており、元が良いからかオリヴィエ自身の魅力を引き立たせる服だ。

流石は王族と言うべきか。服のセンスが素人の俺でもわかる。

ガイ「いただきます」

オリヴィエ「いただきます」

俺らは食事を始めた。

オリヴィエ「はむ………美味しいです。マスター」

一口食べて、頬笑みをこちらに向けてくる。

オリヴィエは感情的だ。昨日一日、オリヴィエと話していて分かった。

だから、表情がコロコロ変わるのだ。

ガイ「あゝ、流石にマスターと言うのはやめないか？俺はオリヴィエに対してマスター的な事は何もしていないし」

オリヴィエ「そうですか？」

オリヴィエが微笑みながら首を傾げる。

オリヴィエ「まあ、マスターがそう言うのでしたら、名称を変えて言ってもかまいません。それに、マスターも私の事はオリヴィエと言うのは止めておいた方がよろしいかと」

ガイ「え？なんで？」

マスターの名称を変えてくれと言ったのだが、オリヴィエと言う名称も変えた方が良くオリヴィエが言ってきた。

オリヴィエ「戦争と言うのは情報戦でもあるのです。相手の情報を知ることから弱点などを調べてそこを突く。戦争では当たり前のことです。ですので、私の事をオリヴィエと言い続けるのもよろしくありません。何処から情報が漏れるか分かりませんので」

ガイ「……………なるほどな」

戦う時にオリヴィエと分かっていたら対策を取られてしまう。オリヴィエは武技に置いて最強を誇っていた。それなら、武技での戦いを仕掛せず、遠距離からの戦いをした方がいい。

俺にはオリヴィエの弱点は分からないが、知っている奴ならそこを狙ってくるのだろう。

ガイ「んじゃ、名称を互いに変えるか。オリヴィエは俺の事を普通にガイと言っても構わないだろ？」

オリヴィエ「そうですね。戦争への影響はないかと」

オリヴィエが俺に言う名称は決まった。後は俺がオリヴィエの事をなんて言うかだ。

ファイターでいいのではないかと思ったが、買い物の時のように街に出かけることもあるので街中で女性の事をファイターと言つのは何か変だ。

俺はあの焼け野原の光景を思い出した。

ガイ「リコリス……………」

オリヴィエ「え？今何と言いましたか？」

俺は小さく呟いた。リコリスの花言葉には悲しき思い出と言つものがある。あの焼け野原は悲しき思い出にピツタシだ。だが…………

ガイ「今のは無し」

オリヴィエに対して不謹慎だ。俺は再び考えた。

ガイ「……………フリージアってのはどうだ？」

オリヴィエ「フリージア……………花の名前ですか？」

ガイ「ああ。花言葉は純潔と言われているからオリヴィエにピツタシかなと思って」

フリージア、とオリヴィエは短く言って、目線を下げて少し考え込む。

オリヴィエ「フリージア……………いい名前です」

オリヴィエは俺の事を見て微笑んだ。

ガイ「んじゃ、苗字も少し変えてフリージア・ブレヒトでいいか？」
オリヴィエ「はい、構いません」

ガイ「なら……………フリー、よろしくな」

オリヴィエ「はい、ガイ」

俺たちは笑って残りの朝食を食べ終えた。

俺は食事の後片づけに洗濯物を干し終えて、798航空隊に行く支度を終えて靴を履いていた。

オリヴィエの洗濯物はまだないので俺がやったが今後は話し合う必要がある。多分、オリヴィエに洗濯を任せるしかないだろう。

俺は靴を履き終えたので立ちあがった。右手には昨日買った黒い指なし手袋をつけた。

これで手の紋章が人前に入る事はない。

ガイ「んじゃ、798航空隊に行ってくるから。お昼ご飯はラップしてある皿が冷蔵庫に入っているからレンジでチンしていつでも食べな。家から出てもいいけど、その場合は予備のカギでドアを閉めて行けよ」

オリヴィエ「はい。あ、それとガイ。歴史の本などはありませんか？」

俺は何処にしまったか思い出す。

ガイ「ああ、一番下の本棚に何冊かある。ベルカ諸王時代の物はあったかはちよつと記憶にないが」

オリヴィエ「いえ、あるだけでも十分です。もし足りないようでしたらお願いしてもよろしいですか？」

ガイ「ああ、知人に本に詳しい奴がいる。そいつに頼むから大丈夫だと思う」

俺はヴィヴィオを思い浮かべた。オリヴィエに頼まれたモノをヴィヴィオに調べてもらう。

何ともおかしな光景だ。そんな光景を思い浮かべて俺は小さく笑った。

オリヴィエ「聖杯戦争はまだ始まっていませんが気をつけてくださいね、ガイ」

俺はああ、と言ってドアを開けた。今から行っても十分に間に合う時間だ。

今日は少し早めに行つて、お金を下ろさなければならぬ。昨日は思わぬ出費が出てきて所持金が空だ。

俺はドアを閉めて空を見上げた。雲は少しあるぐらいだが晴れた。洗濯物を干すのにもちょうど良い。

ガチャ

と、隣からもドアを開く音がした。

そこから現れたのは碧銀の髪を特徴的なツインテールに結び、虹彩異色で左眼が薄蒼で右眼が紫、左の大きな赤いリボンが印象的な少女、アインハルトだった。

ガイ「よう、アイン。おはよう」

アインハルト「あ、ガ、ガイさん……………おはようございます」

アインハルトは俺を見た時、一瞬戸惑った表情を見せた。しかし、俺は特に気には止めなかった。

ガイ「これから学園か？」

アインハルト「は、はい」

アインハルトの服はSt・ヒルデ魔法学院の中等科の制服だ。首周りに赤いリボンを付けて白い半そでのYシャツに胸近くまである緑のロングスカート。

ヴィヴィオ達も同じ学園に行っているが、ヴィヴィオ達は初等科の制服がまた違う。

アインハルト「あ、あの、ガイさん!!!」

と、控えめな性格のアインハルトが声を張って俺の名前を呼んだ。

ガイ「ん？なんだ？」

アインハルト「あ、あの、その、昨日、お、お怪我とかしませんでしたか？」

いきなり何を言っているのだろうか？昨日はアインハルトと出会った記憶はない。

なのに何故怪我の心配をするのだろうか？

ガイ「ん、ああ。特に怪我はしてないけど」

アインハルト「そ、そうですか……………」

アインハルトはホッと一息ついた。

ガイ「……………???まあいいや。俺も仕事に行くし、そこまで一緒に行くか？」

アインハルト「は、はい。よろしくお願いします」

アインハルトはぺこりと頭を下げる。実によく出来ている子だ。

俺はそう思っている。ちょっと内気な性格でもあるが基本的にいい子だ。

アインハルトは俺の隣の部屋に住んでいる女の子。

隣同志と言う事なのでよくちよく話をし、アドレスも交換し
てあるのでたまにメールもする。

理由は知らないがアインハルトも一人暮らしをしている。

俺たちは歩きだした。

ガイ「学園は楽しいか？」

アインハルト「はい、勉強する内容も今後の経験になっていきます
ので、この生活に満足しています」

ガイ「ふっ、そうか」

控え目に話すアインハルト。

ガイ「アインはもうちょっと自分を出すといいで」

俺はそんなアインハルトの頭を撫でて言った。

頭に手を乗つけたからか、アインハルトの体が一瞬ビクツとした。

アインハルト「あ、あの……………／＼／」

アインハルトは恥ずかしそうにして俺の事を見上げる。

この状況をどうすればいいかわからない様子だ。

それを見ているとなんか面白い。

ガイ「ま、アインの性格だし俺が云々言う立場じゃないか」

そう言っつて、頭に乗つけた手を離す。アインハルトは俺が手を乗せた場所に自分の手を当てる。

アインハルト「ガイさんは私の事を子供扱いしすぎです……………」

むう、と言いながら抗議してくる。

ガイ「俺より年下だし当たり前だろ。たしか12だったよな？」

アインハルト「それはそうですね……………」

なんて答えたらいいかわからないアインハルト。

様々な表情を変えて戸惑うアインハルトを見ると面白くて退屈しない。

ガイ「とっ、俺はこっちだ」

話をしているといつの間にか、分かれ道に差し掛かっていた。

アインハルト「まだ話は終わっていませんよ」

ガイ「それはまた後でな。メールでも話をしてやるさ。じゃ、行ってらっしゃい」

アインハルト「……………行ってきます」

アインハルトが抗議をしてくるが、俺が送り言葉を送るとアインハルトはしぶしぶ言葉を返してきた。

アインハルトもヴィヴィオ達と同じでいい子だ。

しかし、笑顔は見たことが無い。いつか、アインハルトの笑顔が見れるといいな。

俺はそう思った。

プリムラ『マスター、メールです』

と、アインハルトとは違う道を進み始めたところでプリムラからメールが届く。

俺は、開いてくれと命令した。目の前にモニターが現れる。

差出人……………高町ヴィヴィオ

件名……………Re:プレゼント

本文……………おはようございます。プレゼントのプレスレッドを気に入って下さいますありがとうございます!!!送った私も嬉しいです!!!で、あのプレスレッドですが聖王教会のカリムさんから頂きました。私の複製母体である“聖王女”オリヴィエ・ゼーゲブレヒトの付けていた物らしいです。遺伝子情報などの血痕などは付いていないという事なので、私が持っていた方が良いと言われて渡されましたが、ガイさんに付けていてもらった方が私より似合うと

思いまして渡しました。こんなプレゼントで喜んでくれるか不安でしたが喜んでくれてとても嬉しかったです!!!

ガイ「…………やはり、オリヴィエの聖遺物か」

あのブレスレッドはオリヴィエが所持していた物であると。それなら、呼び水になるには十分だ。

798 航空隊 練習場

俺は仕事前にお金をおろして隊舎に入り、今日も管理局航空戦技教

導隊のなのはさんの戦技訓練が行われるので練習場に移動した。

今回はヴィータ教導官も指導に当たるようだ。

ヴィータ教導官、見た目がヴィヴィオと同じぐらいの背丈だが、幼げさは残っておらず、凜とした蒼い眼つきが印象的で紅い髪を三つ編みにしている。

ヴィータ「よし、前回、あたしは用事があって抜けて高町一等空尉だけで指導をしていたが今回は俺も加わる。テメエら、気合い入れて行けよ!!!」

部隊「……はい!!!よろしくお願いします!!!」「」「」

なのは「うん、じゃあ、まずは………」

今日はなのはさんとヴィータ教導官の2人で訓練が行われるのだ。

厳しいトレーニングになる事は必然だろう。

しかし、なのはさんの指導もウマイことながら、ヴィータ教導官も教え方が上手で部隊の1人1人のケアもしっかりと行ってくれる。

オーバーロードさせないように怪我させないようにと訓練中は細心の注意をはらっているのが訓練されている側でもわかる。

なのはさん曰く、

『ヴィータちゃんは教導官に向いているんだけど、本人が気づいていなくてね、無理やりに戦技教導隊に入隊させたの。最初は嫌がっていたけど、少しずつ教えていくことの楽しさを覚えてね。今では立派な教導官だよ。人をしっかりと育て上げる。たぶん私よりも教え方がウマイかもね』

と、にっこりと笑って語っていた。

確かにヴィータ教導官なら安心して訓練を受けられる。なのはさんも例外ではないが、ヴィータ教導官の方が教え方はウマイのは確かだ。

ヴィータ「おい、ガイ。今日はその軟弱な精神を鍛え直してやるから本気でこい」

口は悪いけどな。

訓練初日になのはさんとヴィータ教導官が部隊全員と模擬戦を行い、俺が最後の1人になって、2人のプロテクションに一太刀を与えた。それ以降、ヴィータ教導官はこの部隊に来るたびに俺に挑発するよくな発言をしてくる。

だから、俺の返す言葉はいつも1つ。

ガイ「お手柔らかにお願いします」

いつもの口癖を返すだけだ。

なのはさんが言うには、

『ガイ君がこの部隊の中で一番伸びる子だから、あんなに構っていいんだと思うよ。私もガイ君が一番伸びると思ってるし』

まあ、実際はなのはさんとヴィータ教導官の魔弾を避けるので精一杯ですけど。

そして、厳しい訓練は開始された。

798 航空隊 校舎

お昼休み。

俺はいつもの日の当たるベンチに座って、紙コップに入ったコーヒ
ーを飲んで一息ついていた。

ガイ「いてて……………」

俺は脇腹を押さえた。

今日の午前の訓練はやはり厳しいものだった。俺たち部隊全員でな
のはさんとヴィータ教導官と模擬戦と言う初日にやったものではあ
ったが、結果は惨敗。

最後まで立ちあがっていたのは俺だったが、今回は2人に近づく事
が出来なかった。見事な一撃を貰ってしまった。

やはり2人の実力は流石としか言いようがない。最初に近づけたの
は気のせいではないのだろうか？

俺は空を見上げる。

今日の天気は雲があるが晴れが無くなることはない。干した洗濯物

は乾くだろう。

オリヴィエは何をしているのだろうか？部屋で寝ている？何処かに出かけた？予備の鍵は渡しておいたから出かけられると思う。

どこかズレてはいるがそこまで箱入り娘ではないし大丈夫だろう。

ふと、右手を空に上げる。指なしの手袋を着けているが、この下にはライオンの顔の紋章が浮かんでいる。マスターの証ではあるが、正式な名前も分かっていない。

ガイ「はあ……………」

俺は大きなため息をついた。

昨日から分かったことと言えば、あのブレスレッドはオリヴィエの聖遺物だったと言っただけだ。

これからどうするか考えた。

ガイ「無限書庫……………か」

確かに、無限書庫なら何か情報がありそうだ。

ガイ「プリムラ、ヴィヴィにメールしたい。開いてくれ」

プリムラ「了解しました」

眼の前にモニターが開いた。俺は文章を作成した。

TO……………高町ヴィヴィオ

件名……………無限書庫の事について

本文……………ヴィヴィ、無限書庫の司書免許持っていたよな？今度、時間が空いたらでいいから俺を無限書庫に連れて行って探し方を教えてくれないか？後でお礼はする。

送信してくれ、と俺はプリムラに命令して、モニターを消した。無限書庫には一度も言った事が無かったので司書免許を持っているヴィヴィオに同行をお願いすることにした。ヴィヴィオは本が大の好きで初等科三年生には司書の免許を取ってしまうほどだ。

ガイ「何か情報が眠っていればいいんだがな」

俺は一口、コーヒーを飲んだ。

プリムラ「マスター、メールです」

ガイ「意外と早いな、モニターを開いてくれ」

あれから10秒も経ってないだろう。再び目の前にモニターが現れる。

ガイ「あゝ、そういえば……………」

俺は差出人を見たとき苦笑してしまった。

差出人……………アインハルト・ストラトス

件名……………今朝の話について

本文……………私は確かにガイさんよりかは年齢も幼いし、背も低いで
す。そして、私とガイさんは同じ時間の中を同じスピードで歩いて
います。背は追いつくかもしれませんが、年齢はガイさんより上にな
る事はありません。ですが、だからと言っていつまでも年下と言
う理由で私を子供扱いするのはどうかと思います。

差出人がアインハルトだからだ。今朝の話をまだ根に持っていたよ
うだ。背伸びしたい年頃なのだろうか？

メールを読んでいると思わず笑ってしまう。

ガイ「あゝ、なんて返すか」

俺はモニターを操作して、返信の文章を作る。

To……………アインハルト・ストラトス

件名……………Re：今朝の話について

本文……………俺たちは同じ時間軸を同じスピードで進んでいるからな。アインが俺より年上になる事はまずあり得ない。アインの論理だと俺が26になつて、アインが20になつても子供扱いをすることになるからな、確かに変だ。朝の事は訂正するよ。

俺は謝るようなメールを作成して送信してモニターを消した。

再び、コーヒーを飲む。すっかり温くなってしまった。

無限書庫からの情報収集、それに聖王教会にも足を運んでみる必要性はある。

いろいろやることが多い。

ガイ「はあ……………」

今宵2回目のため息が漏れた。

????「このベンチで、またそんな大きなため息……………どうしたの？」

と、そこに後ろから優しく労わるような女性の声が出た。俺の脳裏に1人の人物が思い浮かぶ。

それを確かめるために振りかえる。

ガイ「あ、高町ky……………」
なのは「今はお昼休みだよ」

脳裏に浮かんできた人物と一致した。

俺は高町教導官と言いつつになつたところをなのはさんが止めに入つた。

昼休みまで言う必要はないようだ。

ガイ「はい、なのはさん」

俺は立ち上がった。

ヴィータ「あたしもいるぞ」

ガイ「ヴィータ教導官まで」

なのはさんの後ろにはヴィータ教導官までいた。

ヴィータ「ほう、なのはは“なのはさん”であたしは“ヴィータ教導官”か。訓練の時は“高町教導官”とか言っていたのにな」

ヴィータが意地悪そうな笑みを浮かべて俺を見上げてくる。

背が小さいから俺を見上げる形になるのだ。

ガイ「変ですか？」

ヴィータ「ま、別に变じゃねえよ。あたしも訓練の時は“高町教導官”とか“高町一等空尉”とか言ってるが今は“なのは”って言うしな」

そう言つて、ヴィータ教導官は俺の座っていたベンチにドカッと座つた。

なのはさんもヴィータ教導官の隣に座る。

なのは「ガイ君も座わりなよ」

ガイ「あ、はい」

俺も先ほど座っていた場所に座った。なのはさんの隣だ。

2人を良く見ると、黒い液体の入った紙コップを持っていた。

そして、2人は一口飲んだ。

なのは「ふう、ようやく一息つけた」

ヴィータ「そだな」

2人の表情が少し緩んだのがわかる。

ガイ「……………何故でしょうか？デジャブみたいのを感じます」

気のせいだよ、となのはさんは笑いながら言った。

つい2日前にもヴィータ教導官は居なかったが、同じことが起こったような気がした。

ヴィータ「おい、ガイ。今は昼休みなんだしあたしの事は“ヴィータ様”でいいぜ」

ガイ「……………わかりました、“ヴィータさん”」

ヴィータ教導官が冗談っぽく笑って変な事を言ったので、俺は普通にヴィータさんと呼ぶことにした。

ヴィータ「……………ま、別にいいけどな」

ヴィータさんは片目を閉じてこの名称を了承した。

ヴィータ「今日の訓練はダメだな。みんな少し鈍っていやがる。おい、なのは。少し甘やかしていたんじゃないか？」

なのは「え、そんなことないと思うよ、ヴィータちゃん」

ヴィータさんが今日の訓練についてダメ出しをしてきた。

ヴィータ「皆の連携が少しだがズレていた。ガイは一生懸命連携を取ろうと必死だったのは分かったが他がそれに追いついていない」

なのは「ん〜、ならもうちよつと厳しくしてみる？」

ガイ「い、いや、流石にこれ以上厳しくすると部隊への士気に影響が出てしまいます」

そうか？、とヴィータさんは言い返してきた

あれより更に厳しく訓練されると流石に皆が持たないと思うが。俺は心の中でため息をついた。

なのは「で、何か困っているのかな？そんな大きなため息をついて？」

ガイ「……………」

なのはさんは話を戻してきた。

俺はなのはさんから視線を逸らした。なのはさんに今悩んでいる事を話せるわけがなかった。

地上本部をも手籠めに出来る人物が表舞台のない戦争を望んでいるのだ。それは他言無用と言う事を暗黙の了承としている。

誰かに話をしたらきつとヴィヴィオ達に不幸な出来事が起きるだろう。それは止める必要がある。

なのは「……………言えない事なの？」

俺がどう答えようかと考えていると、なのはさんから言ってきた。
俺はなのはさんの方を向く。

ガイ「……………はい、申し訳ありませんがこの問題は話す事が出来な
いです」

俺は申し訳なさそうに謝って頭を下げた。

何故なら、なのはさんの方を向いた時に悲しそうな表情をしていた
からだ。

俺のためにここまで思っていてくれるのに、何も言えない自分に自
己嫌悪したからだ。

ヴィータ「ガイ、お前が何をやるのかは聞かねえ」

と、なのはさんの後ろからヴィータさんの声が聞こえた。

俺は頭を上げる。ヴィータさんはなのはさんの横から顔をひよっこ
りとだしている。

ヴィータ「それはお前自身が解決しなけりゃならねえ問題なんだろ
？だから相談できねえ。それらな仕方ねえ。でもな、一つだけ約束
しろよ」

ヴィータさんはそう言って、ベンチから立ち上がって、俺の前に立
った。

ヴィータ「なのはを悲しませるような事はするな。それにヴィヴィ
オ達もだ。あいつらもお前の事を慕っているんだ。だから、悲しま
せるな。悲しませたら俺が許さねえからな」

ヴィータさんは真面目な表情をして拳を握って俺に見せてくる。

ガイ「……………はい、肝に銘じておきます。ありがとうございます」

俺はヴィータさんの言った事を胸の奥にしまつてヴィータさんをしつかりと見た。

ヴィータ「うっし、午後の訓練は基礎強化訓練だな。部隊全員が鈍っている印象があつたからな。徹底的に叩き直さねえと。行くぜ、なのは、ガイ」

そろそろ、昼休みも終わるようだ。

俺は残っているコーヒーを飲み干す。まったくもって温い。

なのはさんもコーヒーを飲んで少し苦い表情をした。

温くなってコーヒーの苦みが強くなつたのだろう。

そして、立ちあがる。

なのは「ガイ君。徹底的に鍛えるよ」

ガイ「お手柔らかにお願いしますよ、なのはさん、ヴィータさん」

俺の言葉に2人は笑みを零して練習場へ歩き出した。俺も後を付いて行った。

訓練は基礎強化だけだったのでいつもよりも早く終わった。

今日はデスクワークがなく訓練だけだったので、ここに居る理由はすでに無くなっていた。

なのはさん達も教導隊に戻って行ったようだ。

俺は校舎のロビーのソファアに座って一息ついていた。

ガイ「ん、メール来てるのか？」

プリムラ「はい、少し多いですよ」

プリムラはそう言いながら俺の前にモニターを開く。

差出人……………高町ヴィヴィオ

件名……………Re:Re:無限書庫の事について

本文……………はい！！！！ガイさんの役に立てるなら喜んでついて行きます！！！！ただ、私は休日に行けませんのでそれでよろしければですが……………。

差出人……………アインハルト・ストラトス
件名……………Re:Re:今朝の話について
本文……………分かっていただけて何よりです。でも、もし時を超える
事が出来たとしたら……………いえ、なんでもありません。

差出人……………ノーヴェ・ナカジマ
件名……………今日のストライクアーツ
本文……………今日は中央公民館に来るのか？ヴィヴィオ達は皆来る予
定だぞ？

差出人……………リオ・ウエズリー
件名……………ノーヴェさんについて
本文……………こんにちは、ガイさん。今日はヴィヴィオ達とストライ
クアーツをします。よかつたら来ませんか？それとノーヴェさんと
は今日初めて会うのですがどんな人でしょうか？ヴィヴィオとコロ
ナの先生と聞きましたが。

ガイ「こりゃまた少し多いな。」

計四つのメールが訓練中に来ていた。
俺は一つ一つ返事を書くことにした。

To……………高町ヴィヴィオ
件名……………Re:Re:Re:無限書庫の事について
本文……………ああ、行けるだけでも助かる。それじゃあ、次の休日
に行こう。時間はヴィヴィオに合わせるよ。

To……………アインハルト・ストラトス
件名……………Re:Re:Re:今朝の話について
本文……………時を越えて俺より年上の大人のアインに会ったらちよっ

とビックリするけどね。

To…… ノーヴェ・ナカジマ

件名…… Re:今日のストライクアーツ

本文…… 悪い。今日はこれから他に用事があるんだ。ノーヴェと
久々に組手やりたいがまた今度だな。

To…… リオ・ウエズリー

件名…… Re:ノーヴェさんについて

本文…… ごめんね。今日はこれから用事があるから行けそうもな
いや。それとノーヴェだが、ヴィヴィ達の先生なのは間違いじゃな
い。先生であることは否定しているが根はヴィヴィ達の事を思っ
ているいい人だ。

ガイ「送信してくれ」

プリムラ「了解しました」

プリムラがこれらのメールを一斉送信した。
しかし、一つ気になる文章があった。
アインハルトの文章

『でも、もし時を超える事が出来たとしたら………いえ、なんで
もありません。』

ここに何か引つかかるものを感じた。

ガイ「もし、時を超える事が出来たら………か」

俺の身近には1人いる。オリヴィエだ。

大昔のベルカ諸王時代の乱世の中で命を落としてしまったが聖杯戦

争のシステムでこの現世に召喚された。これは時を越えたと言ってもいいのではないだろうか？

ガイ「聖杯戦争……分らない品物だ」

俺は聖杯戦争というものに戸惑いを隠せなかった。

ミッドチルダ南部 抜刀術天瞳流 第4道場

俺は798航空隊校舎からこつちに足を運んだ。

ここは抜刀術天瞳流の道場。ここで居合の稽古をしてもらっている。

プリムラのデバイスは使う時になると刀と鞘の二つで一つのデバイスになる。

それなので必然的に抜刀術で戦う事が多くなる。

俺は定期的なここに足を運んで抜刀術を鍛えることにしている。

俺は道場の端で正座をして静かに目を閉じてた。隣にはデバイスであるプリムラが紅い鞘に鏢のない刀を納めている状態で置かれていた。

因みに俺が着ているのは袴だ。

「???」さて、今日もやるか」

そこに、凜とした女性の声が聞こえた。

俺は静かに目を開ける。

道場の真ん中には女袴を着た女性がプリムラと同じ鏢の付いていない刀を鞘に納めて左手に持ってこちらを見て立っていた。

ガイ「はい、師範代。今日もお願いします」

女性は静かに頷いた。青く長い後ろ髪は一つに縛って下ろし、鋭い目つきをしている。表情は笑っているが体全体から出ている何者も寄せ付けないオーラは只者ではない事を示す。

女性の名前はミカヤ・シエベル。俺と同じ歳で18。この若さにしてこの抜刀術天瞳流の師範代を務めるほどの実力者だ。

ミカヤ「別に師範代と言わなくても良い。貴殿はこの弟子ではないのだから。それに同じ年だ。敬語もいらないだろ」

ガイ「では、名前で呼んでも?」

構わない、と師範代は言う。それならばこれからは師範代の事をミカヤと言わせてもらおう。

ガイ「では、よろしく。ミカヤ」
ミカヤ「うむ」

ミカヤは少し表情を崩して笑った。

ミカヤ「だが、私よりも貴殿………：ガイの方がもはや実力は上だと思っただが」

ガイ「抜刀術は奥深いものだ。鞘走りから最大限に加速して放つ刀は人によって違う。ミカヤの抜刀術と俺の抜刀術は全く違う」

俺は刀になっているプリムラを掴んで立ち上がる。

ミカヤ「だが、ガイの抜刀術の流派は何処だと聞いた事があったがまさか、我流だとはな。我流で私の流派以上。代々受け継がれてきたこの流派が我流に負けてしまっただけは軽くショックを受けてしまっただよ」

ミカヤはそう言いながら、静かに左手で鞘を持ち右手で柄に触れ、半歩下がって静かに居合の構えに入る。帯刀はしていない。

ガイ「すべてはプリムラと試行錯誤して考えたモノですよ」

俺もミカヤと同じ動きをして静かに居合の構えに入る。ミカヤと同じく帯刀はしていない。

この部分は2人とも共通していた。

ミカヤ「では、始めよう」
ガイ「お手柔らかに」

一瞬の静寂。そして、

ミカヤ「天瞳流抜刀居合“水月”！！！」

ミカヤが一步で間合いに入り、刀を抜いて俺に迫った。

俺は刀を……………

ミカヤ「刀を抜かずして勝つとはな
ガイ「一度だけ抜いたさ」

俺とミカヤは立って、互いを見た。お互いの刀は鞘に収まっている。俺は先ほどの試合に勝った。

居合を始めた理由はデバイスの形にも関係していたが、一番の目的は反射神経や動体視力を高めることである。俺の魔力ランクはC-。他で補うしかない。

俺はミカヤの抜刀術を避け続け、時には鞘で受け止めた。帯刀しない理由は鞘で攻撃を受け止めるためだ。

そして、一瞬の間を突いてただの一度だけ抜刀した。

ミカヤ「一度だけ………本当に必殺の一撃だよ」

ミカヤの胸元の女袴には一閃の傷が残って切れていた。もちろん、非殺傷設定なので人体に影響はない。

無ければミカヤは死んでいた。

ミカヤ「“鞘の中の勝”と言うことわざが何処かの世界の言葉にあったな。確か殺人剣としてではなく、磨き上げた百錬不屈の心魂をもつてすれば、自然と敵を威圧出来る、これ即ち活人剣と」

ガイ「活人剣か、俺にも使えるといいな」

ミカヤ「ああ、意外とガイには素質があるかもしれんぞ」

ミカヤは笑った。最初に出会った時のオーラも無く年相当の笑みを浮かべている。

それを見て俺も笑った。

ガイ「静は動へ動は静へ………その円の繰り返しは居合の基礎だ。俺はこれを忘れない」

ミカヤ「そうだな。私も一度初心に戻るのも良いかもな」

ミカヤは自分の持っている刀を見た。

何かを思っているのだろうか？

ガイ「稽古を続けようか」

ミカヤ「ああ。まるでガイが師範代みたいだな」

そう言いながらもミカヤは微笑んでいた。

ガイ「買い物も済ませたし、後は帰るだけだな」

俺は道場の後、食料を買いに食料店に足を運んだ。これからはオリ

ヴィエと2人で暮らすのだ。いつまでも一人分だけの買い物と言うわけにはいかなかった。ビニール袋が二つ左手にぶら下がっていた。

プリムラ『2通のメールです、マスター』

ガイ「ああ、開いてくれ」

俺の目の前にモニターが現れる。

差出人…………… コロナ・ティミル

件名…………… ストライクアーツ

文章…………… こんばんば、ガイさん。今日はヴィヴィオとリオとノーヴェさんとウエンデイさんが公民館に集まりました。ガイさんも来てくれると嬉しかったのですが、ノーヴェさんが『たぶん、居合の稽古でミカヤさんのところだから仕方ねえよ』と言っていたので来れないのは仕方ないですね。それと、大人モードのヴィヴィオとノーヴェさんが組手をしまして皆から注目が集まりました。あの2人は凄いですよね。また今度、ガイさんと組手をお願いしたいです。

ガイ「大人モードのヴィヴィオとノーヴェは確かに凄いからな」

あの2人と俺のどれかが対戦すると周りに人が集まる。そんな見せるほどの物ではないと思うけどね。
もう1通を見る。

差出人…………… 高町ヴィヴィオ

件名…………… Re:Re:Re:Re:無限書庫の事について

文章…………… 私は休日は午前中に特訓するから午後からなら予定は空いています。楽しみしていますね あ、それと今日はイクスに会いました。私の故郷に咲いていた花と綺麗な写真を持って行きました

た。

ヴィヴィオからのメールだ。

イクス。本当の名前はイクスヴェリア。古代ベルカ、ガレア王国の王。

現在はいつ目覚めるかはわからない深い眠りにについている。2年前に起きたマリアージュ事件に関与していたらしいが詳しい事は知らない。今も聖王教会の一室で眠り続けていると聞いた。

“王”の繋がりだからか、ヴィヴィオはたまにイクスのお見舞いに行くことがある。

今日行って来たのだろう。

なにあともある、これで休日の午後の予定は埋まった。俺は返信する文章を作成した。

To..... コロナ・ティミル

件名..... Re: ストライクアーツ

本文..... こんばんはコロ。今日は行けなくてごめんね。あの2人は凄いからね。今度会った時は組手をやるっか。

To..... 高町ヴィヴィオ

件名..... Re: Re: Re: Re: Re: 無限書庫の事について

文章..... ああ、よろしく頼むな。それにヴィヴィオが会う事でイクスもきつと喜んでいるよ。

二つのメールを送信してモニターを閉じた。

ガイ「さて、帰るか。オリV.....フリーが待ってる」

オリヴィエの名前は迂闊に出すものではない。今朝オリヴィエに言われたので俺は外出している時は極力使わないようにした。

まだ慣れていないが。
俺は帰路を歩きだした。

夜の街頭

あたしは救助隊の整備調整に呼ばれたのでヴィヴィオ達の送りを妹のウエンデイに任せて救助隊の校舎に向かうため歩いていた。

ノーヴェ「あゝ、ガイが居ればもっと特訓になったんだがな」

????「あの人は反射神経に動体視力が並の人間ではありませんからね。あの人と組手をする時はいい特訓になりますよ。まあ、今日

は居合の稽古でしたけど』

機械的な言葉を言って来ているのは私のデバイス・ジェットエッジ。クリスタルの形をしている。ポケットに入れているがあたしの言葉に反応して答えてくれた。そして、モニターを見せてくる。

差出人……………ガイ・テストロッサ

件名……………Re：今日のストライクアーツ

本文……………悪い。今日はこれから他に用事があるんだ。ノーヴェと久々に組手やりたいがまた今度だな。

ノーヴェ「たくっ、ミカヤさんの所に行くならそう書けっの。ミカヤさんからのメールがあつてわかつたけどさ。しかし、居合をしているからあいつの反応は異常じゃねえよ。魔力ランクC-だと言つても侮れないぜ。もし本気の勝負をしても勝てないんじゃないか？」

ジェットエッジ「かも知れませぬ』

ノーヴェ「……………そこは嘘でもいいから勝てますとか言ってくれろと良かったんだけどな」

そう言いつつも、あたしは笑つた。

???「ストライクアーツ有段者、ノーヴェ・ナカジマさんとお見受けします」

ノーヴェ「……!」

誰もいない街灯道。そこに何処からともなく声が聞こえた。

あたしは周りを見渡した。そして、街灯の上に一人立っているのが分かつた。

あたしは見上げた。そいつが先ほどの言葉を言ってきたのだろう。

「????」「貴方にいくつか伺いたいことと確かめたい事が」
「ノーヴェ」「質問すんならバイザーを外して名を名乗れ」
「????」「失礼しました」

どうやら素直にこちらの話は聞くようだ。話を聞かない奴ではなさそうだ。

そいつは静かにバイザーを外した。

「????」「カイザーアーツ正統、ハイディ・E・S・イングヴァルド。
『霸王』と名乗らせて頂きます」

そいつは街灯から飛び降りた。碧銀の髪を軽くツインテールに結び、残りを下ろし、虹彩異色で左眼が薄蒼で右眼が紫。女性と言うよりもまだ幼さが残っている少女だ。

ノーヴェ「噂の通り魔か」

霸王「否定はしません」

そして、霸王は静かに聞いてきた。

霸王「伺いたいののはあなたの知己である“王”達についてです。聖王オリヴィエの複製体と冥府の炎王イクスヴェリアです」
ノーヴェ「……………」

あたしは今の言葉を聞いて、イラっとした。あいつ等はただの子供だ。

“王”だの何だのなんてのは関係ねえ。

霸王「あなたはその両方の所在を知っていると……………」

ノーヴェ「知らねえな」

あたしはきっぱりとそいつの言っている言葉を止めた。

ノーヴェ「聖王のクローンだの冥王陛下だのなんて連中と知り合いになった覚えはねえ。」

あたしは左手を胸に当て必死に語った。

ノーヴェ「あたしが知ってんのは、一生懸命生きているだけの普通の子供たちだ!!!」

霸王「……………理解できました。その件については他を当たるとします」

あたしは半歩下がった。いつでも動ける状態にするためだ。
変な動きをしたら対応するために。

霸王「ではもう1つ確かめたい事はあなたの拳と私の拳、いったいどちらが強いのです」

霸王は右拳をぐっと握って言った。

あたしは持っている鞆を地面に放り投げた。

数分前 同場所

アインハルト「……………変なメール」

私はモニターでガイさんからの返信メールを見直した。

差出人……………ガイ・テストロッサ

件名……………Re:Re:Re:今朝の話について

本文……………時を越えて俺より年上の大人のアインに会ったらちよつとビックリするけどね。

そんな事ないのに。時を越えることなんてありえない。

もし、そんな事が出来るとしたら……………

アインハルト「私は過去に行って、“王”達と戦うのかな」

今ほどの“王”よりも誰よりも強くなることの悲願のためにこうして街中をうろついている。しかし、この世界にはぶつける相手が居

ないのかもしれない。

最近そう考えるようになってきた。

私はモニターを操作した。モニターには1人の少女が写される。ノーヴェ・ナカジマ。薄赤い髪と少年的な容姿をした少女。

ストライクアーツの有段者であり、聖王オリヴィエの複製体と冥府の炎王イクスヴェリアの事を知っている人物。

彼女はこの時間帯はストライクアーツを終わった頃だろう。先ほど救助隊で部隊集合が掛けられたのを聞いたので、市民公民館から救助隊へと通るこの道を進むだろう。

アインハルト「私の拳とどちらが強いですか……………」

私はモニターを切った。

アインハルト「武装形態」

一言喋ると、リンカーコアから膨大な魔力が溢れ出すのがわかる。

そして、私は一瞬にして大人モードになった。

背も高くなる。お気に入りの赤いリボンは邪魔なのでこのモードでは付けない。

アインハルト「……………これなら、ガイさんの背より高いかも」

この場に合わないどうでもいい事を考えてバイザーを付ける。

アインハルト「悲願のため……………オリヴィエを守れなかった償い」

私はノーヴェ・ナカジマが通るのを待った。

1時間前 マンション

オリヴィエ「この本はなかなか面白いですね」

私はガイの言っていた本棚から歴史の本を探した。確かにガイの言っていた通り一番下の本棚に何冊もあった。

手に取ってタイトルを見ると、“新暦の全て”“伝説の三提督武勇伝”“ミッドチルダが出来るまで”などと近代時代の歴史の本ばかりだった。

そして、パラパラと捲ってみると面白くて読みふけてしまった。

オリヴィエ「もう少し前の時代の本が欲しいのですけどね。帰って

きましたら頼みましょう」

そう言つて、読んでいた本を読み終えた。

今の時間はちょうど日が落ちたの時間。因みにお昼の食事は難なく食べる事が出来た。

少し振りかえつてみると、冷蔵庫というモノに食事が入っていたので、それを恐る恐る開けてみた。

中はひんやりとした空気が漂つてあり肌に触れてびっくりしたが、これが現代の食料を冷却する装置だと分かった。

私が居た時代は魔法を駆使して冷凍していたというのに現代の技術は素晴らしいものになったものだ。

私はラップしている皿を取り、レンジと言う物を見る。あの小さな箱にも驚かされた。

ガイは簡単に説明していたのでそれを思い出しながら、皿を中に入れてレンジを操作する。

すると、どうだろう。床が回り始めて、中が赤くなつたではないか。そして、しばらくするとチンと言う音がしたのでレンジを開けてみる。

皿がホツカホ力になつて食事が暖かくなつていた。

今の現代は冷却と加熱を簡単に行える装置が出来たのだなお昼の食事の時に実感した。

オリヴィエ「あれには驚かされました」

お昼の食事を振り返つてみたがやはり驚きを隠せない。

現代の技術を侮れない。

オリヴィエ「さて、これから何をしますか……………」

少し考えて図書館にと言う所に行つてみようと結論付けた。本が豊

富にあるとガイの持っていた本に書いてあった。歴史を調べるのなら本が一番である。

場所も調べてある。ならばは行くだけだ。

オリヴィエは予備の鍵を使って、ドアを閉めて夜の街へと歩き出した。

オリヴィエ「ん？何事でしょうか？」

しばらく歩くと、2人の女性が道の真ん中で対峙していた。

ガイの言っていた連続傷害事件の容疑者でしょうか？

私は少し遠くから2人の容姿を調べた。

1人は薄赤い髪と少年的な容姿をした女性。一瞬、少年かと思ったが女性だ。

そして、もう1人は碧銀の髪を軽くツインテールに結び、残りを下ろし、虹彩異色で左眼が薄蒼で右眼が紫の……

オリヴィエ「……………うそ」

その特徴だけで分かった。その現実に触れ私は壁に身を寄せて隠れた。

オリヴィエ「クラウドと同じ……………」

私は驚きを隠せず、壁越しから2人の会話を聞いた。

碧銀の少女「伺いたいのはあなたの知己である“王”達についてです。聖王オリヴィエの複製体と冥府の炎王イクスヴェリアです」
薄赤の少女「……………」

私の複製体？どういう事でしょうか？

それに冥府の炎王もこの世界に居る？聖杯戦争で呼ばれた？
私の思考がフル回転しているのがわかる。
無理もない、あの碧銀の少女を見てからは一刻も早く真実にたどり
着きたい感情が湧きあがっているのだから。

霸王「防護服と武装をお願いします」
ノーヴェ「いらねえよ」
霸王「そうですか」

あたしは霸王と名乗っている幼げさが残っている女性を見る。

ノーヴェ「よく見りゃ、まだガキじゃねーか。なんでこんな事をしてる？」

霸王「……………強さを知りたいんです」

なんだ、只の喧嘩をしたいだけのバカか。

あたしは軽く構えて左足に力を込める。

ノーヴェ「ハッ！馬鹿馬鹿しい」

ドガッ！！！

あたしは左足を思いつき踏み込んだ。一瞬にして霸王に近づき、その勢いで左足の膝蹴りをかます。

しかし、それは霸王の右腕でがっちりガードされた。

あたしは続けざまに右手に魔力を込めたスタンエッジをぶつける。

ドゴオオ！！！

騒音が鳴り響く。それでも霸王は両腕でがっちりガードして擦り下がる。

そして、涼しげな表情をこちらに向ける。

ガードの上からとはいえ、不意打ちとスタンショットをマトモに受けきった。

言うだけの事あるってか。

あたしはポケットからデバイス、ジェットエッジを取り出す。

ジェットエッジ『セットアップ』

あたしの体が赤く包まれ一瞬にしてバリアジャケットに変わる。

動きやすくするために体に密着した服であり、固有武装である手甲

のガンナツクルとローラースケートの形をしているジェットエッジ、そしてウィングロードに酷似した能力“エアライナー”の三種を統合した、蹴りを主体とする格闘技術を行うためのバリアジャケットだ。

霸王「ありがとうございます」

霸王から礼を言われた。本気を出した私の事に敬意を表するように。

ノーヴェ「強さを知りたいって正気かよ？」

霸王「正気です。そして、今よりもっと強くなりたい」

なら、こんなことする意味はねえだろ。

ノーヴェ「ならこんな事してねーで、真面目に練習するなりプロ格闘家目指すなりしろよ!!!単なる喧嘩バカならここでやめておけ。ジムなり道場なりいい所紹介してやっからよ」

しかし、あたしの言葉は霸王に届く事はなかった。

霸王「ご厚意痛み入ります。ですが、私の確かめたい強さは……生きる意味は………」

そう言いながら、右拳を下げて左手を前に出し静かに構える。

霸王「表舞台にはないんです」

構えた、この距離で？

あたしとの距離はざっと10m弱。この距離で構えらるとなると空戦？射砲撃？

あたしは様々なシュミレーションをした。しかし、結果は予想外な攻撃だった。

ノーヴェ「……………って！！！」

シュン

霸王が一瞬にして詰めて右拳を放ってきた。
突撃か？

それをギリギリで避けたが霸王のその後の動きが速かった。
速い？違う歩法か。

ノーヴェ「っち！！！」

反応が遅れたあたしは霸王を懐に入られてしまった。

ドン！！！！

ノーヴェ「が……………！！！」

そして、一撃、腹に重たい拳を貫き打ち上げられた。

人の体を拳で持ち上げるほどの力を放ってきた。バリアジャケットを装着していなかったら内臓が破壊されていただろう。

あたしはその勢いを利用して大きく下がり距離を取った。
腹の痛みが強い。

霸王「列強の王達を全て斃し、ベルカの天地に覇を成すこと。それが私の成すべき事です」

左手を自分の胸の前に持っていていき語る霸王。

ノーヴェ「寝ぼけた事抜かしてんじゃねえよッ！！！」

腹の痛みは残っているがあたしは攻めることにした。ジェットエッジで霸王に駆け寄せて、ガンナツクルの拳を放ち続ける。霸王はそれを難なくガードする。何合も拳を交え続けた。

ノーヴェ「昔の王様なんざみんな死んでる！！生き残りや未裔たちだってみんな普通に生きてんだ！！！」

あたしは必死に霸王に語りづけた。聖王オリヴィエの複製体と冥府の炎王イクスヴェリアを探している…… ヴィヴィオやイクスを狙わせないように。

そして、最後の拳を放ち一度下がる。

霸王「弱い王ならこの手でただ屠るまで」

ノーヴェ「……………ギリッ」

あたしの脳裏に浮かんで来たのは眠っているイクスの傍らにヴィヴィオが手を取って話し続けていた光景。その光景を壊すだと？

ノーヴェ「この……………バカったれが！！！」

あたしの怒りの感情でミッド式の魔法陣を最大限に展開させた。腹の痛みも忘れるほどに。

足元から魔法で作られた道“エアライナー”が放物線を描き、霸王の前に降りる形に作られた。

ノーヴェ「ベルかの戦乱も聖王戦争もッ！！！」

霸王「！！！！」

“エアライザー”と同時に霸王の両足をバインドで動けなくした。あたしはそのまま“エアライナー”に乗り、霸王の元まで駆ける。

ノーヴェ「ベルカって国そのものも!!!もうとっくに終わってんだよッ!!!」

そのままの勢いでジャンプして霸王の顔面を蹴り込んだ。

ノーヴェ「リボルバー・スパイク!!!」

最大限の魔力で蹴りをかました。これなら相手は倒れるはずだ。そして、そのまま重力で地面に降りる……

ノーヴェ「!?!」

ガクン

はずだった。だが、突然体が空中で止まる。

霸王「まだ終わっていないです」

霸王は口から血を垂らしていた。しかし、あたしの足を掴んでいた。最大限の“リボルバー・スパイク”は命中したのだろう。当たった実感はあった。

だが、なぜ足が掴まれている？

そして、いつの間にかチェーン状のバインドが足に絡みついていた。カウンターバインド!?

体にもバインドが絡みついていた。

どうかしている。霸王は防御を捨てて反撃準備をしていたのだ。

霸王は静かに右手に魔力を込めて拳を握る。

霸王「私にとってはまだ何も」

そして、その拳をノーヴェの背中に放つ。

魔王「霸王断空拳」

ドガッ!!!

あたしはその攻撃を受けて一度、意識を手放した。

アインハルト「弱さは罪です……………弱い拳では……………誰の事も守れないから」

終わった。結局、この人も私の拳を受け止めてくれなかった。私はその事実にし少し悲しんで口から垂れている血を拭き、その場を離れた。

アインハルト「ガイさん、あなたなら私の拳を受け止めてくれますか？」

歩きながらモニターを開ける。そこには私が調べた限りの情報だがガイさんのプロフィールが現れた。

ガイ・テストロツサ。798航空隊所属、魔力ランクC-。しかし、ストライクアーツの有段者でもあり居合道場では師範代も一目を置いているとの事。

戦闘スタイルは抜刀術。動体視力や反射神経が並の人間ではないので状況判断にかけている。

アインハルト「ガイさん……………」

私は一言、隣同士で住んでいる人物の名前をあげる。

アインハルト「……………つつ！…！」

古びたコインロッカー室に入ったとき、体に痛みが走った。

彼女の一撃、凄い打撃だった。危なかった。この体は間違いなく強いのに。

アインハルト「武装形態……………解除……………」

私の心が弱いから。

そして、全身に駆け巡っていた魔力が収まってくのを感じて、私はいつもの姿に戻った。

お気に入りの赤いリボンが付いている。今は胸元が開いて布がクロスして肩まで覆っている白いワンピース姿だ。

帰ったら少しだけ休もう。眼が覚めたらまた……。

そう考えて、ポケットに入っていたコインロッカーの鍵を取り出して荷物を取ろうとした。

アインハルト「!?!」

ズキン!!!!

が、再び再び体全身に駆け巡った。その時に鍵を手放してしまった。そして、その痛みのをせいで立っていられなくなる。

だめ、こんなところで倒れたら………

そこで意識が途切れた。

ガイ「もう少しで家か」
プリムラ『後、1キロもありません』

俺は帰路を歩いていた。街灯とビルの放つ光で夜道もそれほど暗くはない。
ここら辺は少し過疎っている場所だがそれでも明るい。

ガイ「ん？」

俺はふと少し古びているコインロッカー室を見た。

ガイ「誰か倒れてる？それにあの碧銀……………」
髪を見てハツとなった。俺は急いでその倒れている人物に駆け寄る。

ガイ「アイン！！！」

うつ伏せに倒れていたのはアインハルトだった。
意識が無いが呼吸はしている。

ガイ「救急隊に連絡しないと！！！！」
プリムラ『いえ、待ってください』

俺が急いで救急隊に連絡しようとした。

ガイ「……………スキャンしているのか？」

プリムラ「はい。この人の体に問題はないようです。ただの疲労でしよう」

しかし、それはプリムラがスキャンしたことにより行わなかった。プリムラは魔力の状態、人体の症状などの簡単な診断は行える。

ガイ「……………疲労？」

プリムラ「はい、魔力の循環にも問題ありませんし。救急隊を呼ぶまでには至らないかと」

そうか、と俺は言っただけ少しホッとした。

ガイ「流石にここで横になっていたら風邪引くぞ」

プリムラ「家まで運ぶのがよろしいかと」

ガイ「……………マジか？」

俺はアインハルトを見た。見た目は少女に見えるが、それでも30キロ前後はあるだろう。そして、買い物をしたビニール袋も二つ持っている。

プリムラ「マスター、こここの鍵でしょうか。落ちています」

アインハルトの近くには鍵が落ちていた。番号が付いている。俺はそれを拾って、その番号のロッカーを開けた。

鞆とSet・魔法学園の制服が畳んで入っていた。明らかにアインハルトの物だ。

ガイ「……………計、何キロよ？」

プリムラ『頑張るしかないです。と、それとこの子の体をスキャンしたのですが首元に発信機が付いています』

ガイ「ん、マジか。何かあったのか？」

俺はアインハルトの首周りを見てみる。ああ、確かに小さな発信機が付いていた。

俺はそれを取って握りつぶした。

ガイ「ま、後で聞く必要があるが、とりあえずは……………」

俺は深いため息をついた。これから重労働が待っているのだ。ため息もつきたくもなる。

しかし、ため息をついても仕方ないのでアインハルトとその荷物を運ぶことにした。

少ししわくちやになるが鞆にアインハルトの制服を入れて、ビニール袋を左手に、鞆を右手に持ち、アインハルトを背負った。

背中越しにその柔らかな肌を当たっているが、今はそんな感じしている余裕もない。

プリムラ『これはなんてプレイですか？』

ガイ「少し黙っててくれ」

うん、後でプリムラの開発者に絶対に会う必要がある。

プリムラの発言を受け流して、俺は帰路を歩いた。

オリヴィエ「……………」

私は先ほどの対戦を見ていた。結果は碧銀の少女が防御を捨てて反撃に全てを注いで勝った。
しかし、そのスタイルはまさしく……………」

オリヴィエ「クラウド……………」

生前、最も親しかった人物のスタイル、霸王流だった。
真実を知るためにあの碧銀の少女を追う必要がある。
そう思ったが、倒れている薄赤の少女の事がほっとけなかった。

オリヴィエ「あの大丈夫ですか？」

私は薄赤の少女に近づいて声をかけた。

薄赤の少女「あ、ああ。何とかな。悪いちよつと動けねえや」

オリヴィエ「あ、待っててください。今、治癒魔法をかけます」

私は目を瞑り静かに詠唱を唱えた。少女の体は少しずつだが活性化を取り戻してきている。

オリヴィエ「終わりました」

私はニコツと笑って薄赤の少女に微笑んで見せた。

しかし、薄赤の少女は私の事を見て驚いた表情をした。

薄赤の少女「な、なあ、あんたのその眼って……………」

私はその言葉でハツとなった。

そう、この虹彩異色は聖王家でしか見られないモノ。無闇に見せるものではない。

私の事を世間に知られてしまうのは不味い。敵に情報が回ると困る。

オリヴィエ「い、いえ特に変わった眼ではありません……………それで

は私は急いでいますので、これで失礼します」

薄赤の少女「あ、お、おい」

私はその場を離れて、薄赤の少女の返事を待たずにガイのマンションに急いで戻りだした。

薄赤の少女を助けようとしたがこの姿だと外部との接触はあまりよろしくない。姿と変えないと不味い。

一応動かせるぐらいまでは回復できたはず。

私は今後の課題が出てきたので帰ってガイと相談することに決めた。

マンション

俺は自分の部屋に居る。

3階と言う事もあったのでアインハルト+荷物+食料はかなり辛かったが、何とか運ぶことが出来た。

そして、アインハルトのドアの前に着いたはいいが、無暗にアインハルトの荷物を開ける訳にもいかないし、このままほっとくことも出来なかったので、俺の部屋にアインハルトを入れた。

今はベッドで静かに寝息を立てている。

ガイ「腕がパンパンだ」

プリムラ「訓練不足では？」

ガイ「……………足りないのかな」

俺はソファで体を休めて溜まっている乳酸を取っていたが、インハルトのために夕飯を用意することにした。制服があったので多分学校帰りだと思うから夕飯はまだなのだろう。俺はキッチンに立った。

ガイ「オリヴィエは何処に行ったんだ？」

家には当然オリヴィエが居ると思っていた。どこかに出かけるにもこんな遅くまで出ていると心配になってくる。

まさか、聖杯戦争の関係者に巻き込まれたのではないかと。しかし、手がかりが何もないので部屋で待つことにした。インハルトもほっとけないしな。

俺は料理を始めた。しばらくして、

オリヴィエ「はあはあ、た、ただいま戻りました」

オリヴィエが帰ってきた。

慌てているような声が玄関から聞こえたが、その声を聞いただけで俺は安心した。

聖杯戦争に巻き込まれていたわけではない様子だから。

そして、すぐにオリヴィエが視界に入る。走って来たのか少し息が上がっている。

ガイ「お帰り、フリー。心配したぞ、何処行ってたんだ？」

オリヴィエ「は、はい。私は図書館に行こうとしたのですが……………」

アインハルト「んんっ……………」

と、そこでアインハルトが眼を開けた。

オリヴィエは発言することをやめて、ベッドの方に顔を向けた。

アインハルト「こ、こは……………」

アインハルトは起き上がる。

オリヴィエ「あっ……………」

ガイ「おう、起きたか」

俺はアインが目覚めたことにホッとしてオリヴィエはアインハルトを見て驚きの表情を浮かべていた。アインハルトの眼を見て驚いているのだろうか？

アインハルト「えっ……………」

アインハルトもオリヴィエの事を見て驚いていた。

アインハルト「オ……………リヴィエ？」

アインハルトが不安げな表情でオリヴィエの名前を言った。

ガイ「あっ……………」

アインハルトがオリヴィエの名前を知っていた……………ああ、そうか。そう言う事か。

今朝、見た夢。

クラウスも碧銀の髪に虹彩異色で左眼が薄蒼で右眼が紫だったでは

ないか。

ヴィヴィオもオリヴィエも虹彩異色の色は同じで左眼が紅く右眼が翠。

なら、アインハルトもクラウドスの複製体の可能性がある。

複製体では無くてもクラウドスのその子孫かも知れない。

少なくとも、クラウドスとアインハルトが何かで繋がっているのは間違いない。

ガイ「……………」

オリヴィエ「……………」

アインハルト「……………」

俺たちは何も発言することが出来なかった。

皆が皆、様々な思惑を感じているのだろう。

聞こえてくるのはフライパンに野菜を炒めている音と壁に掛けてある時計の針の音だけだった。

三話“過去と現代の交差”（後書き）

どこで切るか考えていたが、どこを切ってもいい感じに終わらなかつたから、どばつと書いたw

もし、長すぎだよこの駄目作家など思いましたら一言ください。

今後の参考にいたします。

しかし、大会も始まって新たに五人新キャラが参戦と藤真さんは言っていたけど、ミカヤさん忘れてるよw

ミカヤさんも新キャラですよw

ガイと同じ抜刀術なので一緒に稽古する風景を取り入れてみました。

まあ、今のところ“水月”しか技名がわからないし、技の内容もわからないので対戦風景はカットしました。

原作ブレイクは基本的にしませんので。

アインハルトの家は………わかりませんがw

そして、ミカヤさんの髪の色がわからない（マテッ

他の五人はカラーがあつたから良いけどミカヤさんはわからない。

黒じゃなかったら訂正しないとw

小説の訂正どうやるんだろw？

何か一言感想がありますと嬉しいです。

こんな小説ですが今後も読んでくれれば幸いです。

では、また(・・)(・)ノ

そろそろ、魔術の話を取り入れるべきだろうか？

いや、まだほのぼので行きたいw

四話“現代と現代の交差”（前書き）

今日はコンプエースの発売日。

これ投下したら速攻で買ってくるw

最近はおリヴィエが可愛く見えてきて仕方ないw

これも書いているうちに感情移入してしまったからだろうか……

では、四話目入ります。

四話“現代と現代の交差”

???

管理者「よかるう、君がマスターとして2人目だ。」

管理者は暗闇の部屋の中、1つのモニターを見ていた。
新しいマスターが参戦してきたようだ。

見た目は整った黒髪に30〜40の男性。上着である灰色のスーツを脱いで片腕にかけて、灰色のネクタイに白い長そでのワイシャツに袖なしの黒いセーターを着込んでいた。

パツと見れば一般社会の営業マンに見えるだろう。しかし、その瞳は静かに、そして強い意志が存在しているのがモニター越しから見てもわかる。

????」

そいつは静かにこちらを見ていた。

管理者「では、貴様が召喚したサーヴァントのクラスは何だ？」

????」……………キヤスターだ」

そう言つて、一方的に切られた。

管理者「キヤスターか……………そして、マスターの名は……………」

聖杯戦争は静かにそして、着実に開始のその時を刻んでいた。

マンション

ガイ「……………」

????「……………」

アインハルト「……………」

どのくらいの沈黙が流れたのだろうか。

私たちはテーブルを囲んで座っていた。

私はノーヴェ・ナカジマとの対決後、コインロッカー室の中で意識を失った。

そして、気がついたらガイさんのベッドで寝ていた。

ガイさんが私の事をここまで運んでくれたのだろう。ガイさんが居なかったらあそこで多分捕まっていた。それに関してはガイさんに

感謝します。

でも、今はこの人が誰なのかを知りたい。

「?????」

私は虹彩異色の紅と翠の鮮やかな瞳にライトブラウンの女性を見る。この人の瞳の……紅と翠の鮮やかな瞳、そしてこの容姿は霸王の記憶に焼き付いた間違うはずもない聖王女の証。この人はオリヴィエだろう、きつと。

ガイさんもこの人も何か落ち付かない様子で私の事を見ている。

アインハルト「……あなたは……」

「???」「は、はい!?!」

と、私は長い沈黙を破ることにした。真実を知るために。その人は少し高い声を上げていた。私の言葉でびっくりしたのだろうか?

私は拳を胸の前で握って話を続ける。

アインハルト「あなたは本当にオリヴィエ・ゼーゲブレヒトですか?」

そう、私はここを一番知らなければならない。でも、分かっていた。先ほどの高い声を上げてビツクリした表情は霸王の記憶のなかでも残っている。

しかし、ありえないのだ。昔に亡くなった人が現在に現れるなんてその人はチラッとガイさんの事を見る。

ガイさんもその人の事を見て困惑した表情で考えていた。2人は何かを隠している。

そして、ガイさんは覚悟を決めたのか真剣な表情で私に顔を向けた。

ガイ「アイン、これから話す事は誰にも言わない事を約束して
くれないか？」

ガイさんはこれから話すことを他言無用としてほしいと言ってきた。
オリヴィエがここに居る理由には訳がある。それも秘密的なものが。

アインハルト「……………はい、約束します」

私は真実を知るために、ガイさんの言葉に力強く頷いた。

アインハルト「……………はい、約束します」

アインハルトは俺の言葉に力強く頷いた。

真剣な表情でその虹彩異色の瞳には揺らぎが無い。

俺はオリヴィエを見る。オリヴィエはまだ戸惑いの表情が残っていたが俺の視線に気づき頷いた。

ガイ「単刀直入に言うよ。ここに居る人物はオリヴィエ・ゼーゲブレヒド。かつてベルカ諸王時代に“聖王女”と言われた人物で間違いない」

アインハルト「本当……………ですか？」

アインハルトはオリヴィエの事を見た。先ほどの揺らぎが無い表情とは一変、驚きと期待と不安の入り混じった瞳で。

オリヴィエ「……………はい、私はオリヴィエ・ゼーゲブレヒトです」

アインハルト「どう……………やって、この時代に？」

さて、ここをどうやって説明しようか。

聖杯戦争のシステムでここに居ると言う訳にもいかない。

ガイ「……………すまない、アイン。そこだけは説明できない」

俺はいくら考えても良い案が思い浮かばなかった。

聖杯戦争……………人が図れることのできる知識のものさしは普通の物だとそれは明らかに数値を越えている。

特殊なものさし……………聖杯戦争をはかる事が出来るものさしが必要だ。

俺もそうだったようにアインハルトも持っているものさしは普通の

物だろう。

だから、どう説明したらよいか分からない。

それに、そこを話してしまっただらきつと管理者が黙っていないだろう。

俺は普通に謝ることにした。

アインハルト「……………でも、あなたは正真正銘のオリヴィエです……………私の中の霸王の血が色濃く疼いて貴方がオリヴィエだと言う事に間違いないと」

オリヴィエ「霸王……………やはり、あなたはクラウド・イングヴァルドの子孫なのですね」

アインハルトはその言葉に頷いた。

その碧銀の髪、左眼が薄蒼で右眼が紫の虹彩異色の瞳。夢に出てきたクラウドと同じだ。

アインハルトはヴィヴィオのような複製母体ではなく、クラウドの子孫。

アインハルトとクラウドの繋がりが確かにあった。

アインハルト「碧銀の髪やこの色彩の虹彩異色。霸王の身体資質と霸王流」

そして、アインハルトは悲しい表情をしながら静かに語り始めた。

アインハルト「それらと一緒に少しの記憶もこの体は受け継いでいます。私の記憶にいる“彼”の悲願なんです天地に覇をもって、和を成せる、そんな“王”であること」

アインハルトは一度言葉を切った。オリヴィエを見る。

アインハルト「弱かったせいで、強くなかったせいで……………“彼”は“彼女”を救う事が出来なかった……………守れなかった!!!」

アインハルトの瞳が潤んでいるのがわかる。自分の中の霸王の血を必死にオリヴィエに語っているのだろう。かつて霸王が守れなかった彼女……………オリヴィエに。

アインハルト「そんな数百年分の後悔が……………私の中にあるんです。だけど、この世界にはぶつける相手がほとんどいない……………救うべき相手も守るべき国も世界も……………!!!」

アインハルトは涙を流して泣いていた。

数百年分の後悔……………想像を絶するモノだろう。

俺には想像出来ない。そんな思いをアインハルトはその小さな体で受け継いでいたのだ。

この世界ではそれを清算する手立てが無くて辛いのだろう。

アインハルト「……………ですが、オリヴィエ。どのようにしてこの世界に現れたかは知りませんが、私の中の霸王の血が貴方に会えたこととても温かい気持ち溢れてきます」

オリヴィエ「そう……………ですか」

オリヴィエはどう答えたらよいか分からない様子だったが、アインハルトの涙を見て笑みを作る。

そして、泣いているアインハルトに近づいて涙を指で取った。

オリヴィエ「まったく、クラウドも子孫にこのような辛い思いをさせて。もし会う事が出来たらお仕置をしませんかね」

そう言って、微笑みながらアインハルトの頭を撫でて抱き寄せる。

アインハルト「あつ……………／＼／」

オリヴィエ「その霸王の血から温かい気持ち溢れているの事は私にとっても嬉しいことです。クラウドとの生活は私も温かい気持ちにさせてくれましたから。それを教えて下さいますありがとうございます」

オリヴィエはアインハルトを抱き抱えたまま、お礼を言う。

オリヴィエ「ですが、その悲願は私では止める事が出来ない。それは私の事を守れなかったから出来た悲願。申し訳ありません」

アインハルト「……………はい、分かっています。今、オリヴィエが現れたとしてもこの悲願はオリヴィエが亡くなったのが原因で作られたもの。オリヴィエに向けるための拳ではありません」

そう、その悲願はオリヴィエが亡くなって作られたモノ。

それをオリヴィエ自身に向けては矛盾が生じてしまう。

だが、これではアインハルトの中にある悲願を……………その霸王の拳を受け止める者が居ない。

受け止める者がいなければアインハルトは数百年分の後悔に押しつぶされてしまう。今はオリヴィエが居るからいいが、聖杯戦争の後、どうなるかは分からない。

アインハルト「……………ガイさん」

ガイ「ん？」

と、アインハルトはオリヴィエの抱擁から離れて、俺の事を見る。

アインハルト「私と拳を交えてくれませんか？」

ガイ「……………俺か」

アインハルトの霸王の拳を受け止める者が必要。それは俺のような奴で受け止められるのか？

ガイ「俺なんかで霸王の拳を止められるのか？」

アインハルト「この世界にはこの拳を受け止めてくれる人が今まで居なかった。先ほど、ノーヴェ・ナカジマと街灯試合を申し込みましたが、彼女も受け止めてくれませんでした」

ん？まで。今、知っている名前が出てきたぞ。

俺の脳裏には薄赤のショートヘアの髪のヴィヴィオ達の師匠の姿が浮かんできた。

ガイ「ま、まで、アイン。さっきノーヴェと戦っていたのか？」

アインハルト「はい。彼女はかなり腕の立つ実力者でしたので申し込みました。彼女の一撃は破壊力抜群でした」

ガイ「……………もしかして」

俺とはある仮説を立てた。もし事実だったらノーヴェに謝りに行かないと。

ガイ「連続傷害事件の犯人ってアイン？」

アインハルト「……………はい」

アインハルトは一瞬戸惑ったが、真実を告げてくれた。確かに、最初に犯人を見た時も碧銀の髪だった。

ガイ「で、さつきはノーヴェと対決した。そして、その帰りにその一撃のダメージが強くてコインロッカー室で気を失ってしまったと？」

アインハルトは頷く。おそらくあの発信機はノーヴェエが付けたモノだろう。

ガイ「ノーヴェエに連絡しないと」

アインハルト「ま、待って下さい!!!」

ノーヴェエに連絡しようとモニターを開いたがアインハルトは必死になって俺に近づいて止めに入った。

アインハルト「私のこの連続傷害についてはちゃんと清算します。

ですが、最後にガイさん。私はあなたと戦いたい」

アインハルトが不安げな表情で俺の事を上目使いで見上げてくる。

ガイ「……………俺と対戦した後、ちゃんとノーヴェエに謝りに行くこと約束できるか？」

アインハルト「はい」

即答で答えた。

俺は軽く笑ってモニターを消した。

ガイ「俺で霸王の拳を止めれるか分からないが受けて立つよ」

アインハルト「ありがとうございます」

アインハルトは頭を下げた。

きゅつるるる

アインハルト「はっ……………／／／」

164

と、そこに誰かのお腹の鳴る音がした。
その音に反応したのはアインハルトだけだったので犯人はアインハルトだ。

アインハルトは顔を真っ赤にして頭を伏せた。

ガイ「そっぴや、夕飯を作る途中だったな。作るよ」

俺は笑って、立ちあがる。

アインハルト「あ、い、いえ／＼／＼そこまでご迷惑になるわけには……／＼／＼」

ガイ「霸王の拳を受け止めるためにもしっかりと栄養を取らないとな。アイン。お前も栄養をしっかりと取って全力の霸王の拳をぶつけて来いよ。俺なんかを受け止めれるか分からないけど」

アインハルト「は、はい………ありがとうございます／＼／＼」

まだ少し頬が赤いが、アインハルトは頭を下げる。

ガイ「あいよ。少し待ってな」

俺はキッチンに入って、料理を始めた。

しかし、一昨日は1人分の料理だったのに昨日は2人分、今日は3人分ときたもんだ。

一日ごとに人が増えるのか？

料理中、どうでもいい事を考えてしまった。これからアインハルトと対決するというのに。

市民公園内 公共魔法練習場

ガイ「デバイスもありか？」

アインハルト「ええ、構いません」

俺とアインハルトは少し離れて対峙してる。夜のこの時間帯は人も疎らになる。今は誰もいないようだ。

夕飯の食事を三人で食べた後、この練習場にやってきた。因みに料理の評価は2人から花丸を貰った。

その時は冷静に返したが、内心はかなり嬉しかった。

オリヴィエ「ガイとアインハルトも怪我には注意してください」

少し離れた場所のベンチにはオリヴィエが座っている。

オリヴィエはオリヴィエを知っている人に会うと正体がばれてマズイと食事の時に言ってきたので、とりあえずカモフラージュのために帽子をかぶせた。気休めにしかならないが、無いよりはマシだ。後は虹彩異色を如何にかしたいと。

今度、カラーコンタクトでも買ってくるか。ああ、また出費がかさむんだな。

アインハルト「武装形態」

と、考え事をしているとアインハルトが光に包まれて、背が高くなり、服装も変わって現れた。

碧銀の髪を軽くツインテールに結び、残りを下ろし、そして、その服装はクラウドが着ていたものに少し似ていた。

アインハルト「……………私の方が背が低い」

ガイ「何の話だ？」

アインハルト「いえ、なんでもありません。ガイさん。貴方も準備してください」

アインハルトは大人モードになって俺の事を見て何か不服のような発言をしたが、あまり気にしなかった。

ガイ「プリムラ、セットアップだ」

プリムラ『了解しました』

俺もプリムラに命令した。

俺は黒い光に包まれ、服はバリアジャケットに変わった。黒と白を強調するような服だ。黒いズボンにインナーは黒いシャツ。その上にロングコートの白い上着を着きている。

ベルトは手前でクロスするようになって二つ付いており、腰に刀と鞘が一对となったプリムラを帯刀するために使われる。普段は使わないが。

俺は刀となったプリムラの鞘を左手に持つ。

アインハルト「では、よろしくお願いします」

ガイ「お手柔らかに」

アインハルトは静かに右拳を後ろに下げ、左手を前に突き出して構えた。

俺も左足を半歩下げて、体を少し左にひねり、刀を腰の後ろに持つていき居合の構えに入る。

この距離で近接距離の構え？何をしてくる？

俺は少し離れている距離でアインハルトが拳を握って構えている事に疑問を持った。

ドンッ！！！！

その疑問は解決した。アインハルトは一瞬にして距離を詰めてきたのだ。その握っている右拳を俺に当てるために。だが、俺には視えていた。視えていたのなら最小限の動きで避けるまで。

アインハルト「！！！！」

アインハルトの右拳は俺のわずか手前をかすっていく。だが、目の前に無防備な状態にいるのなら刀を抜くにはチャンス。俺は鞘から鞘走りをして刀を抜く。

シユン

だが、刃が黒くそりが白いその刀は空を切っただけだった。横切りをした刀をアインハルトはしゃがんで避けた。

ダッシュした勢いを良く殺せたと俺はそこで思った。そして、アッパー気味に拳を突き上げてくる。俺はそれを半歩下がって避ける。

そして、左手に持っていた鞘でアインハルトに横振りを行った。

アインハルト「くっ!!!」

アインハルトはそれも避けて、大きくバックステップを取り距離を取った。

俺はゆっくりと刀を鞘に収める。

アインハルト「……………私の動きが視えていますね。無駄がありません」

ガイ「一応、鍛えているつもりだからな、動体視力は。それにアイン。よく突進の後に勢いを殺せてしゃがめたな。驚いたよ」

アインハルトの突進は速かった。運動エネルギーが膨大に働いていたのだろう。しかし、停止する時の静止エネルギーはその二乗のエネルギーがなければ法則上、止まらない。

膨大なエネルギーがアインハルトの体にあるのだろう。

アインハルト「一応、鍛えていますから」

アインハルトは俺と同じことを言ってきた。

冗談で言っているのか本気で言っているのかはわからないがあの澄ました瞳を見ると嘘とは言い切れない。

俺は背後に黒い魔弾を二つ作った。俺の魔力の色は黒。

あまり見かけない色だと開発者は言っていた。
確かに俺の周りには黒い色の魔力の人はいない。
アインハルトは俺が黒い魔弾を作った為か左手を前にして構える。

ガイ「ソニック」

俺がそう言うと、二つの黒い魔弾はアインハルトに向かって、飛んで行く。

アインハルトは動かない。そして、飛んできた魔弾がアインハルトに当たる寸前

ババツ！！！！！

ガイ「！！！！」

俺は驚いた。

それを手で受け止めたのだ。弾殻を壊さずに。

ふつうは障害物に当たったら弾殻は壊れてしまい飛行能力は失ってしまう。

しかし、それをアインハルトはその弾殻ごと受け止めていた。

アインハルト「霸王流……………」

アインハルトはその受け止めている魔弾の手を円を回るように回し

アインハルト「旋衝破」

それを投げ返してきた。

俺は驚いていたので一瞬、反応が遅れた。

その為、避ける事が無理だったので抜刀して一つ目の魔弾を横切り、刃を返してもう一つの魔弾を横切った。

だが、それは隙を作るには十分な行為だった。
アインハルトは俺の目の前に迫って右拳を放っていた。

ガイ「くっ……………」

ドガッ！！！！

俺はそれを何とか鞘で受け止めたが、威力が凄まじく大きく擦り下がる。

アインハルトはここぞと言わんばかりに俺の後を追い攻めてきた。擦り下がりながらも俺は納刀して、アインハルトの連撃の拳や蹴りを避け続けた。

ガンッ！！！！

そして、アインハルトの右拳を鞘で受け止めた。

ガイ「まさか、魔弾が返されるとは思わなかった」

アインハルト「ですが、二度目は通じません。あれでガイさんの隙を作れることはもうないで、しょう！！！！」

二言の会話。その会話の最後、アインハルトは左足を蹴り上げる。不意を突いたのだろう。

だが、俺にはそれが見える。俺は体を思いっきり右回転してそれを避ける。

アインハルト「！！！！」

アインハルトは鞘に体重をかけていた右拳が右にずれてバランスを崩す。鞘は右拳から離れたので自由になり、俺は右回転で一回転し、その勢いで抜刀をして

ドンッ

アインハルト「あぐっ！！！！」

アインハルトの隙が出来た横腹に一太刀入れた。アインハルトは表情を苦くして片膝をついた。

俺は刀を収める。

ガイ「俺の勝ちだな」

アインハルト「くっ……………」

アインハルトは必死に体を立ち上がらせようと足に力を入れている。しかし、力が入らないようだ。

ガイ「まあ、今日はノーヴェとも戦って体力が消耗していたんだろ？多分、それだから俺でも勝てたのかもしれない。料理の栄養はすぐに出るわけでもないし」

アインハルト「ガ、ガイさんも航空部隊の訓練や私を三階にまで運ぶ重労働を行って疲労が溜まっていたのでしょう？」

ガイ「訓練と実戦の疲労度はかなり違う」

俺はそう言っで、バリアジャケットを解除した。

アインハルト「ま、まだです。私はまだ戦います！！！！」

俺がバリアジャケットを解いたからかアインハルトが必死に抵抗をしてきた。

ガイ「この勝負は俺の勝ちだ。斬撃の相手だから動けない状態が続いたら首を落とされて終了だ」

アインハルト「そ、それはたしかにそうですが……………」

アインハルトは先ほどから立ち上がるうとしても立てずに何秒も同じ位置に片膝をついている。もし命の取り合いだしたら首を落とされて終わっている。非殺傷設定なので先ほどの一太刀は人体に影響はないが、非殺傷設定を無しにしたら間違いなく死んでいる。聖杯戦争が始まったら非殺傷設定は外さないと生き残れないのだろうか？

ガイ「……………それが殺し合いか」

アインハルト「え？」

俺は小さな声で刀をデバイスであるプリムラに戻して、首にかける。アインハルトは聞き取れていなかったようだが聞いてほしい言葉でもない。

ガイ「とりあえずお疲れさん」

俺はアインハルトに右手を差し出す。

アインハルト「……………武装形態解除」

アインハルトはしぶしぶと言った表情で大人モードを解除し、赤い大きなリボンを左側につけた少女に戻る。まあ、こんなんじゃないまだ霸王の拳を……………悲願を受け止められていないだろう。

アインハルトは俺の右手を掴んで立ち上がる。

オリヴィエ「すごかったですよ。ガイもアインハルトも」

と、そこに唯一の観客である帽子を深くかぶったオリヴィエがこち

らにやってきた。

オリヴィエ「あの“旋衝破”はかなりの努力と鍛錬が必要です。クラウスもモノにするのに数年かかったと言っていました。それを12歳のアインハルトが習得した。一体どれほどの鍛錬をしてきたのか想像が付きません」

ガイ「ああ、あの技には驚いた。反射でも吸収放射でもない。受け止めて投げ返したからな」

アインハルト「あ、い、いえ……………／／／」

褒められているからかアインハルトは頬を赤くして少し俯いていた。

ストーン

アインハルト「あっ」

アインハルトはその場で力なく座り込んでしまった。
今日は戦い過ぎたのだろう。

ガイ「やりすぎだ、そんなに体を酷使してまでやるからオーバーロードだ」

アインハルト「そ、そのようです」

アインハルトは体にまったく力が入らないのか力無く答える。
不安げな表情で俺を見つめていた。

オリヴィエ「ガイ、どうしますか？」

ガイ「……………はあ、ほれ」

俺はそんな光景を見てため息をついてアインハルトの前に背中を向けてしゃがんだ。

アインハルト「え？」

ガイ「乗れよ。家まで送ってやるから」

アインハルト「い、いえ／＼／＼そういう訳にも……………／＼／」

ガイ「対戦した責任もあるんだ。家まで送ってやる」

アインハルト「……………／＼／」

少しして、アインハルトは遠慮がちに俺の背中に体重を乗せてきた。そして、ふとももを掴んで立ち上がる。

オリヴィエ「アインハルト、顔が赤いですよ？」

アインハルト「あ、あう／＼／」

オリヴィエがアインハルトの顔を見たのか顔が赤いらしい。俺からは見えないけど。

そして、俺たちは歩きだした。

ガイ「とりあえず帰って、ノーヴェに連絡を入れないとな」
アインハルト「そ、そうですね／＼／」

そして、頭まで俺の背中につけてきた。

アインハルト「少しだけ眠ってもいいですか／＼／？」

ガイ「ああ、好きにしま」

アインハルト「はい……………あったかい……………」

そう言つて、すぐに寝息を立てた。

オリヴィエ「本当にこの子は霸王の悲願のために頑張っています」

ガイ「そうだな」

隣にいるオリヴィエが話してくる。この背負っている重みはアインハルトだけのものではない。きつと霸王の悲願の重みもあるのだろう。

オリヴィエ「この子には辛い思いをさせたいと思いました」

ガイ「それをさせたのは霸王の悲願の記憶だけだな。その原因を作ったフリーのせいじゃない」

オリヴィエが自虐的に話してきたので俺は否定した。

ガイ「アイン……………こいつが心から笑っている笑顔を見たいな」

オリヴィエ「……………そうですね」

それはいつ見れるのか分からなかった。霸王の悲願を消せない限り見る事はないのだから。

マンション

ガイ「と、いうわけだ」

ノーヴェ「と、いうわけだ………じゃねえよ!!!」

マンションに戻ってから俺は背中では寝ているアインをベッドで寝かせてた後、ノーヴェに連絡を取るためにモニターを開いた。因みにオリヴィエはシャワーを浴びている。

ノーヴェ「てめえが犯人かよ。発信機を壊したのは」

ガイ「そこは悪いと言えない」

俺はアインハルトを保護したあたりから対戦までの話をした………オリヴィエの事は話していないが。

ノーヴェ「で、お前も霸王の悲願のために、対戦してやったてえのか？」

ガイ「ああ。何とか勝つ事は出来た。でも、あんなんじゃ霸王の悲願は消えないだろうな」

つち、とノーヴェはモニター越しから舌打ちをした。

ノーヴェ「何でお前に勝ってあたしは勝てねえんだよ!!!」

ガイ「そんな事、言われてもな」

ノーヴェ「あ、もう今度会ったら組手な。ぜってえ負けねえぞ」

今度会ったらノーヴェと組手をする約束を強制的にされてしまった。実に困る。

ノーヴェ「で、その霸王の子……………アインハルトはお前の隣に住んでいたのか？」

ガイ「ああ」

モニター越しのノーヴェが真剣な表情になって本題に戻った。

ガイ「なあ、ここら辺で起きていた連続傷害事件の犯人はアインだけど、被害届は出ていないから何とかしてやれないか？」

ノーヴェ「なんだ？そいつを助けたいのか？」

ガイ「まあ、知らない仲ではないからな。」

俺はアインハルトが捕まってほしいとは思わなかった。霸王の悲願で連続傷害事件になってしまったこれを何とかして止めたい。

ノーヴェ「ま、被害届は出てないしもう喧嘩しないって約束が出来るんだったら署で少し話をして返してくれると思うぜ」

ガイ「本当か！？」

アインハルトが捕まらない事に俺は喜びを隠せず笑った。

ノーヴェ「ああ。それに、あたしも行く。あたしと対戦した時はあたしが先に手を出したからな。喧嘩両成敗ってことにしてもらおう」

ガイ「なら俺も……………」

ノーヴェ「先に手を出したのは聞いた話の限りじゃ霸王の子じゃな

いのか？』
ガイ「あっ」

確かにアインハルトが先だった。俺は後だ。

ノーヴェ『まあいいや。明日、朝に湾岸第六警防署に来いよ。』
ガイ「ああ。ありがとなノーヴェ」

その言葉にノーヴェは笑みを作ってモニターを切ったようだ。モニターが切られた。

俺は静かに寝息をたてて眠っているアインハルトを見る。

ガイ「オリヴィエには賛成だな。霸王の悲願でこんな女の子が苦しんでいるんだ。もし会えることが出来たら一発殴らないとな」

オリヴィエが言っていた事を思い出す。

『クラウドも子孫にこのような辛い思いをさせて。もし会う事が出来たらお仕置をしませんとね』

まったくだ。その悲願をクラウドの人生で叶えられればアインハルトもこんなにつらい思いはしなかったのにな。

俺は眠っているアインハルトの頭をそつと撫でた。

オリヴィエ「ガイ、お風呂が開きました。入るといいですよ」

と、そこに背後からシャワーを浴びていたオリヴィエの声がした。風呂から出たのだろう。

ガイ「ああ、わかった。俺もはい」……………」

俺は振りむいた。そして、今朝と同様、思考が停止して動きが止まった。

オリヴィエ「どうかしましたか？」

オリヴィエは裸体にバスタオル一枚を纏ったままの状態でこちらを向いていた。その細くて白い四脚を恥ずかしがること無く異性である俺に見せてくる。

ガイ「い、いいから何か着てる／／／！！！」

オリヴィエ「そう言われましても、脱衣所に服を持ってくるのを忘れまして」

俺は慌てたがオリヴィエは慌てるそぶりを見せることもなく、俺の横を通り過ぎる。そして、ベッドの傍に畳んである。服の山から白い下着を取り出す。

オリヴィエ「ガイは純情すぎですよ」

ガイ「オリヴィエが鈍感すぎだろ……………／／／」

そうでしょうか？、とオリヴィエが首をかしげた。

オリヴィエ「あっ……………」

と、その時、オリヴィエの体を纏っていたバスタオルが緩かったのかズレ落ちた。

ガイ「……………／／／」

俺は急いで玄関の方へ向きを変えて、風呂場へと移動（避難）した。
ガイ「オ、オリヴィエ、せめてもう少しくらいは羞恥心を持ってくれ／＼／」

俺はドア越しにオリヴィエと話した。

オリヴィエ「ですが……………」
ガイ「ちゃんと持ってくれ／＼！！！」

俺はオリヴィエに一言釘を刺して深いため息をつきその場にしゃがみこんだ。

ここの宿主の威厳と言うものは無くなりつつある……………元々ないと思うけど。

プリムラ「これはなんてプレイですか？」

ガイ「少し黙っててくれ」

そして、胸元にあるプリムラが先ほどの光景を見て一言発言した。
やはり、プリムラの開発者に聞きに行く必要性が120%ある。

俺は明日、開発者に聞きに行くことを決めた。

そして、風呂から出ると、青の縞模様の縦ラインのパジャマを着たオリヴィエがテーブルの前で座って、お茶を飲んでいた。

オリヴィエ「あ、ガイもどうぞ」

ガイ「ああ、サンキュー」

俺はオリヴィエからお茶をもらって、座った。

そして、一口飲んで一息つけた。

ガイ「今日はパジャマを着てくれるんだな？」
オリヴィエ「はい、下着姿で寝たいのも山々なのですがガイが駄目
というので」

オリヴィエは下着姿で寝る習慣があるらしい。それは刺激が強すぎる
ので俺はパジャマを着るように言った。
しかし、寝るときに着ることは無いと思っていたのか服を買いに行
くときにパジャマを買ってなかった。
仕方ないので俺のパジャマを貸した。

オリヴィエ「このパジャマという服はぶかぶかし過ぎです」
ガイ「寝るのは体の疲労を取るためだ。だから窮屈な服だと体が休
めないだろ？」

オリヴィエ「それはそうですが……………」

オリヴィエは何か言いたそうな表情をしたが一口お茶を飲んで、笑
みをこぼした。

オリヴィエ「さて、そろそろ寝ましょう。明日も早いのですよ」
ガイ「そうだな。っと、アインは寝たままか？」

俺は眠っているアインハルトのほうを見る。穏やかで安心しきって
いる表情で眠っている。

ガイ「起こすのも可哀想だな。オリヴィエ、ソファで良いならそ
こで寝なよ。俺は床でいい」
オリヴィエ「いえ、ガイはこの前私にベッドを譲ってくださいまし
たので今度は私が床で寝ます」

オリヴィエは昨日、ガイのベッドに寝たからガイがソファで眠ることになったことに申し訳なかったのか複雑な表情だ。

ガイ「いいよ。たまにはこういうのもいい」

俺はベッドを背中にしてもたれて眼を瞑った。

オリヴィエ「ガイがそのように申しますのなら………」

オリヴィエはしゅしゅといった表情でソファで横になった。

ガイ「昨日は言えなかったが、おやすみ、オリヴィエ」

オリヴィエ「はい、おやすみなさい、ガイ」

すぐに眠気が襲ってきた。アインハルトにオーバロードと言ったが俺もかなり体を酷使しているんだなと思った。そして、意識が闇の中に沈んでいった。

四話“現代と現代の交差”（後書き）

キャラクターのマスターが登録を完了しました。

伏線が多すぎてまだまだ謎のキャラですけどね。

今回は戦闘風景を取り入れてみました。

前はマンガ本にあった戦闘でしたので楽でしたが、オリジナルで戦闘するには相当な筆力が必要だと実感しました。

しかし、この四話目を投下しても時間軸は3〜4時間ぐらい。

展開が遅いw

まあ、ほのぼのは好きですけどね。

何か一言感想がありますとモチベが上がります（多分w

こんな駄作を今後も読んでいただければ幸いです。

では、また（・・）／

追伸

雑談コーナーって作ったほうが面白いのでしょうか？

結構ヒット数を伸ばしている作品にはこういうコーナーが入っていることがありますし……。

誰か教えてくれると嬉しいです。

五話“複製と子孫の交差”（前書き）

今月のコンプエースはミカヤさんの技名が一個あった。

……あんな技があるのか。

ガイはそれに勝てるのかなW？

では、五話目入ります。

五話“複製と子孫の交差”

マンシヨン

ガイ「んんっ」

窓からの朝日が部屋に光差す頃、俺は目が覚めた。

脳も徐々に活性化されていく。

そして、体全体にダルさが残っているのがわかった。

壁にかかっている時計の時間を見る。そろそろ起きないといけない時間だ。

しかし、体のダルさが残っているからか、このままもつと寝ていたい。そのような衝動が走る。

だが、仕事も家事もある。それは時間が決まっていられる行事だ。それがこの後の時間にあるから眠れるわけがない。

ガイ「んんっ」と

俺は二度寝の考えをやめて、ベッドの脇に預けていた背中を離して立ち上がり、腕を組みながら大きく腕を上へと伸ばす。

少し無理な体勢で寝てしまったようだ。体の節々が痛い。

俺は周りを見た。ベッドにはアインハルトが、ソファにはオリヴィエが静かな寝息を立てて眠っている。

俺は昨日、アインハルトと対戦をして何とか勝つ事が出来た。

アインハルトはあの後、背負っていた俺の背中であんなに寝たのだが、いっこうに起きる気配もなかった。それでベッドで寝かせることに。

オリヴィエが寝るところが無くなったのでソファに寝かせて、俺は床の上で寝た。

ガイ「航空実技に道場に重りを持ったフィジカルトレーニング（仮）」

にアインとの対決………で、硬い床の上で寝る」

俺は昨日の事を簡単に思いだした。
振りかえってみるとハードスケジュールだ。その上、硬い床の上で寝るのだ。

朝にダルさが残るのが理解できる。

俺はアインハルトの方を見る。表情は穏やかだ。
安心しきっているのだろうか？

ガイ「ま、必要な労働力かな」

俺はアインハルトの可愛い寝顔を見ていると昨日のハードスケジュールの事はたいして気にならなくなった。

ガイ「朝飯作るか」

俺はキッチンへ向かい三人分の朝食を作り始めた。

アインハルト「んっ」

料理を始めてからしばらくしてアインハルトが起きた。

アインハルト「こ……………こは？」

脳が活性化されていないのかぼんやりとした表情で俺の方を見る。

ガイ「おはよう、アイン。朝食の準備しているから少し待っててな」
アインハルト「え……………あ、はあ……………」

まだ、脳が動いていないのか俺の言った言葉にあまり反応しない。
これを見た限りだとアインハルトは朝が弱いらしい。
そして、しばらくして

アインハルト「あ！…！」

脳が活発に動き始めたのだろう。寝ぼけていた眼から一変、寝起きの顔を見られたからか頬を赤くした。

アインハルト「あ、あの、その……………／／／」
ガイ「アインは朝が弱いんだな」

アインハルト「うつ……………／／／」

何も言い返せないのか、顔を伏せて視線を俺からズラした。そして、玄関へと歩き出す。

ガイ「何処に行くんだ？今、朝食を作ってるぞ」

因みにメニューはパンにベーコンエッグとサラダの盛り合わせ。そして、スープだ。

アインハルト「あ、あの、シャワーを浴びたいので／／／」

アインハルトは昨日の対戦の後からずっと熟睡していたのだから汗を掻いたままなのだろう。女の子がそれを気にしないわけがない。

ガイ「ああ、行ってこい。朝食は食べるか？」

アインハルト「え？」

アインハルトは俺が言った言葉にキョトンとした表情をしていた。

ガイ「別に金を取るうなんて思ってないよ。皆で食事をした方が温かい食卓が出来るし」

温かな食卓。俺が羨ましかったモノだ。

アインハルトもこの食卓に混ざると俺は嬉しいと感じている。昨日の夕食の時も対戦前なので少しピリピリしていたが、それでもオリーブオイルだけでなく、アインハルトもいるとさらに温かくなった。だからか、俺は一緒に食卓を囲んでほしかったりする。自己欲望だが、アインハルトは首を縦に振ってくれるだろうか？

アインハルト「……………ええ、頂けるのなら頂きます。ガイさんの料理は美味しいですから」

アインハルトは了承してくれた。俺はその事実には笑って答えた。

ガイ「んじゃ、もう少ししたら出来るからそれまでにシャワーを浴びてきな」

アインハルト「はい。失礼します」

アインハルトは一言返事をして頭を下げ、自分の部屋のシャワーを浴びにドアから出て行った。

オリヴィエも起きて、アインハルトも戻ってきたので三人で朝食を取ることに。

オリヴィエ「相変わらず、ガイの食事は美味しいですね」

ガイ「ベーコンと卵を焼いただけだ。誰でも出来る料理だぞ」

アインハルト「それでも美味しいです」

1人暮らしをしている野郎の食事を美味しいと言ってくれる2人には感謝の気持ちでいっぱいだ。

温かい食卓はやはりいい。食卓はこうであってほしいものだ。

アインハルトは真面目な表情で、オリヴィエは微笑みながら食べていた。

ガイ「で、だ。アイン。朝食を食べたら湾岸第六警防署に行くぞ」

アインハルト「……………はい」

アインハルトは分かっていたからか静かに頷いた。

オリヴィエ「え？アインハルトは捕まるのですか？」

オリヴィエは驚いていた。昨日ノーヴェと話をしていた時はオリヴィエはシャワーを浴びていたからな。

知らないはずだ。

ガイ「いや、捕まりはしないさ。被害者から被害届が出ていないから、嚴重注意だけで終わるだろう」

オリヴィエ「そうですか。良かったです」

アインハルトが捕まらないと分かったからかオリヴィエはニッコリと微笑んだ。

ガイ「ノーヴェも今回の件は水に流す様だ。海岸第六警防署に来てくれる」

アインハルト「ノーヴェさんとガイさんにはご迷惑をお掛けしました」

アインハルトは食事をいったん止め、俺に頭を下げた。

ガイ「俺は別にいいけどな。ノーヴェにはちゃんと謝っとけよ」
アインハルト「はい」

今回の連続傷害事件は霸王の悲願を叶えるために行った事。アインハルト自身が悪いわけではないけど、ケジメはしっかりとつけないとならない。

ガイ「んじゃ、とつとと食べて行くか」
アインハルト「わかりました」

俺たちは食事を再開した。

海岸第六警防署 玄関前

家の洗濯物はオリヴィエに任せた。一通り洗濯機の使い方を教えたから大丈夫だとは思うが。女性物の服はいいが下着を俺が洗うわけにはいかない。王家である聖王女が洗濯するとは何か想像がしづらい。

そして、俺とアインハルトは湾岸第六警防署にやってきた。玄関前までやってくると、ノーヴェが立って待っていた。

ガイ「おはよう、ノーヴェ」

ノーヴェ「よう、ガイ。と、アイン……………ハルト……………だったけかな？」

アインハルト「……………はい」

アインハルトはノーヴェを見て、複雑な表情で頭を下げた。

ノーヴェ「ガイ、今度約束していた組手、相手になってもらうかな。」

ガイ「……………ああ」

ノーヴェ「今の間はなんだよ？」

ノーヴェがジト目でこっちを見てくる。そう言えば昨日そんな事を言っていた気がする。すっきり忘れていた。

そんな雑談もそこそこにノーヴェはアインハルトに顔を向ける。

ノーヴェ「アインハルト。今回の事件はすべて被害届は出されていない。だからあたしと一緒に行って路上喧嘩ってことにしてもらおう。それなら嚴重注意だけですむはずだ。それでいいよな？」

アインハルト「はい……………ありがとうございます。ノーヴェさん」

アインハルトは再びお辞儀をする。

アインハルト「……………あの、ノーヴェさん。怒っていますか？」

ノーヴェ「いや、別に怒っていないさ。さ、入るぞ。ガイはこれからどうするんだ？」

不安げな表情で見上げてきたアインハルトにノーヴェはどう受け取ったかはわからないが怒る様子はないようだ。

俺は心配していた。ノーヴェはモニターでは普通に喋っていたが実はかなり怒っていたのではないかと。

だが、それは杞憂に終わったようだ。

ガイ「ん、798航空隊に行くよ。それじゃ、アインをよろしくな」

そう言うと、隣に居たアインハルトが顔を上げた。

アインハルト「ガイさん。ありがとうございます」

アインハルトはぺこりと頭を下げた。
今日のアインハルトは頭を下げる事が多いようだ。

ガイ「ああ。ちゃんと叱られてこい」

俺は笑みを作って、冗談っぽく言った。

アインハルト「はい、ちゃんと叱られてきます」

アインハルトは表情をほとんど変えること無く言葉を真似て返してきた。その返し言葉は昨日の対決の時にも使われた気がした。そして、2人は湾岸第六警防署の中へと消えて行った。
俺は踵を翻して、その場を後にした。

湾岸第六警防署

私は今回の件で警防署の人にこつ酷く叱られた。

被害届は出ていないが、被害者が被害届を出したら連続傷害事件として捕まり起訴されるところだったと。

確かにそれは困る。霸王の悲願を達成する機会を失ってしまう。

それだけは避けたい。

警防署の人は今後、そんな事をしないと約束するなら嚴重注意で終わるとの事。私はそれを約束した。少し安心した。人に路上試合を申し込むのは難しくなったが、霸王の悲願の達成することは失われていないのだから。

今は全ての話が終わり、私は廊下の長椅子に座って考え事をしていった。

やることはたくさんある。

結局、なぜオリヴィエがこの現代に現れたのか。ガイさんは教えてくれなかった。なら1人で調べる必要がある。

それに……………

ピタッ

アインハルト「ひゃっ!!!」

私の右頬に何か冷たいものが当たり、私はびっくりして考えていた事が中断され、高い声を出してしまった。

ノーヴェ「よう、隙だらけだぜ。霸王様」

視界に入ったのは薄赤い髪のショートヘアをした少年的な容姿をし

た女性、ノーヴェさんだった。ノーヴェさんの手には缶ジュースがあった。それが私の右頬に当たったのだろう。

ノーヴェさんは私の反応が面白かったのか笑いながら缶ジュースを渡してきた。

私は慌てながらもそれを受け取る。

そして、ノーヴェさんは私と同じ長椅子に座った。

ノーヴェ「もうすぐ解放だけど、学校はどうする？今日は休むか？
アインハルト「行けるのなら行きます」

私は即答した。学園は休む気にはなれない。ためになる授業が多いから聞かないともつたいない。

ノーヴェ「まじめで結構」

ノーヴェさんは笑った。そう言った事が嬉しかったのだろうか？

そして、左手を耳に添えて、言い出しが少し言いつらいのか視線を私からズラす。

ノーヴェ「で……………あのよ、うちの姉貴やティアナは局員の中でも結構凄い連中なんだ」

ノーヴェさんの姉貴とティアナさん。

私がこの建物の中に入るとその2人が笑みをこぼしながら待っていた。ノーヴェさんに簡単に紹介された。

青い髪のシヨートヘアに緑の瞳をしている方がスバル・ナカジマさん。ノーヴェさんのお姉さんのようだ。

そして、もう1人がオレンジ色のロングヘアに青い瞳をしているティアナ・ランスターさん。本局執務官でスバルさんの友人だと紹

介された。

第一印象としてはとても穏やかな人たちだ。しかし、実際はスバルさんは人命救助の“エキスパート”の特別救急隊であり、ティアナさんは多忙で知られている執務官。どちらもハードな職であり、かなり忙しい。

そんな人たちが穏やかな雰囲気を出して、私の事を迎え入れてくれたので、私の事に時間を割いてしまっただけで申し訳なかった。今日は休暇日だと言っているから尚更だ。

ノーヴェ「姉貴やティアナは古代ベルカ系に詳しい専門家もたくさん知っている。お前がいう“戦争”がどんなものなのかはわかんねーけど」

ノーヴェさんは天井を見上げながらその人たちの事が凄い事を教えてくれる。

そして、こちらに顔を向けた。

ノーヴェ「協力できることがあんなら私たちが手伝ってやる。だから……」

アインハルト「聖王達に手を出すな………ですか？」

ノーヴェさんの言いたい事を先に言った。たぶんこれを言いたかったのだろう。

ノーヴェさんは合っていたからか目線をズラした。

ノーヴェ「ちげえよ。いや違わなくはねーけど。」

そう言って、再び私の事を見る。

ノーヴェ「ガチで立ちあつたから分かつたんだ。お前さ格闘技が好

きだろ？」

ノーヴェさんは私に笑みを見せながら言ってくる。

私が格闘技が好き？何故そんな事が言えるのだろう？

ノーヴェさんとはまだ一度しか対戦していないのに。

ノーヴェ「あたしもまだ修行中だけど、コーチの真似事をしてっからよ、才能や気持ちを見る目あるつもりなんだよ………違うか？好きじゃねえか？」

そんなこと考えたこともない。すべては霸王の悲願のため。

好きとか嫌いとかじゃない。

これはそのためにあるだけの物。

アインハルト「好きとか嫌いとかそういう気持ちで考えた事はありません」

私は右拳を胸の前で握る。

アインハルト「霸王流は私の存在理由の全てですから」

それが私のすべて。霸王の悲願は達成する。

それは霸王の血が流れているこの体だからこそ絶対に達成しなければならぬものだ。

ノーヴェ「……聞かせてくんねーかな？霸王流のこと……お前の国の事。お前がこだわっている戦争の事」

ノーヴェさんは両膝に両肘をつけて私の事見ている。どんな長い話でもきちんと言話を聞いてくれるようだ。

アインハルト「……………私は……………」

私はこれまでの事を話した。最愛の人物を亡くしてしまったために出来た霸王の悲願の事。

誰よりも強くなるためそのために路上試合を申し込み、挑んでいる事。

そして、この世界にはこの霸王の拳は誰も受け止める事が出来ないのではないかと諦め始めている事。

やはりこの話をするとき悲しい気持ちが溢れてきてしまい涙を流してしまう。

オリヴィエの事以外はすべて話した。ガイさんと約束しているため、オリヴィエの事は言わなかった。

ノーヴェさんは私が話を終えるまで静かに聞いていた。

そして、私の話をすべて終えるとノーヴェさんはグッと右手を握り締めてこう言った。

ノーヴェ「いるよ。お前の拳を受け止めてくれる奴がきちんといる」

798 航空隊 校舎

今は昼休み。

午前中はなのはさんとヴィータさんの航空実技だった。部隊全体が少し鈍っている感じがするとヴィータさんが言っていたので、今日も基礎強化練習を集中的に行った。
なかなかハード訓練だった。

これが今後のためになると良いのだがな。

プリムラ『マスター、メールです』

そう言っつて、俺の目の前にモニターが現れる。

差出人……………アインハルト・ストラトス

件名……………霸王の悲願

本文……………こんにちは。今朝は湾岸第六警防署まで一緒に来てくれました。ありがとうございます。そこでノーヴェさんといろいろと話をお聞きしまして、霸王の悲願を……………拳を受け止めてくれる人がいるらしいです。今日の放課後、その人に会ってきます。

ノーヴェの知り合い？ミカヤか？

俺は凜々しく、そして、いつも冷静沈着で長い青髪を後ろで縛って

いる抜刀術天瞳流師範代を思い浮かべた。
だが、これはただの憶測でしかない。

ガイ「相手は誰だろう？」

俺はそう言いつつ、返信の文章を作成した。

To……………アインハルト・ストラトス

件名……………Re：霸王の悲願

本文……………お疲れさん。どんな相手かは知らないけど全力でブツけてきな。ノーヴェが紹介した人だ。相当強いと思うよ。因みに誰だかわかるか？

ガイ「送信を頼む」

プリムラ「了解しました」

プリムラに送信するよう命令してモニターを閉じた。
少しして、メールが返ってくる。

差出人……………アインハルト・ストラトス

件名……………Re：Re：霸王の悲願

本文……………はい、ありがとうございます。全力をブツけてきます。
それで、その人の名前ですが聞かされていません。ただ、強いと言
つてくれているだけです。

ガイ「誰だか分からない相手……………か」

まあ、ノーヴェが紹介する人だから強い人であるとは思っけど。
返信メールを作成する。

To……アインハルト・ストラトス
件名…… Re: Re: Re: 覇王の悲願
本文…… まあ、相手が誰でもその悲願をちゃんと受け止めれる奴だといいな。俺だと無理だったし。

プリムラに送信命令をしてモニターを閉じた。
昨日の対決で俺では覇王の悲願を受け止める事は出来なかった。
アインハルトが全力を出せる状態だったら、きつと負けていただろう。

だから、そいつはちゃんと受け止めてくれる奴だといいたが。

プリムラ『マスター、メールです。二通着ました』

プリムラからメールが着信したと知らせて、考え事していた俺の前にモニターが現れる。

差出人……アインハルト・ストラトス

件名…… Re: Re: Re: Re: 覇王の悲願

本文…… ガイさんは強いですよ。機会があればまた対戦をお願いしたいくらいです。私もあの時は疲労が溜まっていました。が、ガイさんも疲労が溜まっている状態です。お互いに全力勝負したらどちらが勝つか分かりません。私はガイさんが覇王の悲願を受け止めてくれる人だと思います。

俺の事を買いかぶり過ぎだ。アインハルトから見れば俺なんて弱い。そして、もう一通の方を見た。

差出人……高町ヴィヴィオ

件名……今日の放課後

本文……ノーヴェが新しく格闘技をやってる子と知り合ったので、

喫茶店

ヴィヴィオ「ミッド式のストライクアーツをやってます。高町ヴィオです！！」

アインハルト「ベルカ古流武術、アインハルト・ストラトスです」

2人は握手を交わした。

仮説は当たってしまった。ノーヴェがアインハルトに紹介した人物はヴィヴィオ。ヴィヴィオに紹介した人物はアインハルトだった。俺はデスクワークを終わらせた後、この喫茶店に行くために歩いていた。途中でヴィヴィオ、コロナ、リオに出会ったので一緒に喫

茶店に行くことに。ヴィヴィオは今日会う子の事が気になっているのか、そわそわしたり時折笑みを零したりと落ち着かない。コロナとリオがそれを見るたびに笑っていた。

そして、喫茶店に着くとかなりの大所帯だった。

全員で8人。ノーヴェ以外は知らない人だ。

ヴィヴィオ達は知っているらしいが俺は初対面なので、まずはノーヴェの席に居た2人の女性を紹介された。

青い髪のショートヘアに緑の瞳をしている方がスバル・ナカジマさん。ノーヴェさんの姉さんらしい。髪の色が違うけど。

そして、もう1人がオレンジ色のロングヘアに青い瞳をしているティアナ・ランスターさん。本局執務官でスバルさんの友人。

2人は機動六課のフォワード陣だったと。それは確かに凄い。そして、向こう側に居る5人の紹介をしようと言ったところで

アインハルト「アインハルト・ストラトス。参りました」

アインハルトがやってきたのだった。

そして、先ほど自己紹介をして握手をした。

握手をしたアインハルトは戸惑いの表情を隠せなかった。

ヴィヴィオのその左眼が紅く右眼が翠の虹彩異色の瞳。オリヴィエとまさしく一緒だ。

複製体であるためその瞳もその色になる。アインハルトが戸惑うのも仕方ない。

ヴィヴィオ「あの……………アインハルトさん？」

アインハルトが悲しい表情をしていたからか、ヴィヴィオが心配そうな表情をアインハルトに向けてくる。

アインハルト「……………ああ、失礼しました」

ヴィヴィオ「あ、いえ!!!!」

アインハルトから握手を解いた。

ノーヴェ「まあ、2人とも格闘技者同士。ごちゃごちゃ話すより手合わせした方が早いだろ。場所は押さえであるから早速行こうぜ」

ノーヴェの言葉で皆は席から立ち上がり、公民館の中に移動するこ
とになった。

アインハルトは俺の事を見た。

オリヴィエとヴィヴィオ……………霸王の悲願の原因だった聖王家の人
物が2日連続で会うのだ。

アインハルトはどのように接したらいいのか分からない表情を浮か
べていた。

ガイ「ま、全力ブツけてみなよ」

アインハルト「……………はい」

そして、公民館の中へと移動した。

ヴィヴィオとアインハルトはコート内で軽くストレッチをして筋肉の緊張をほぐしていた。

2人は動きやすい体操服に着替えてストライクアーツ専用のグローブナックルに足から膝までカバーをしている膝当てを付けている。俺を含む残りのメンツは端の方で見学だ。ノーヴェはレフリーをするため2人の間に立っていた。

ヴィヴィオ「じゃあ、あのアインハルトさん！よろしくお願いします！……！」

アインハルト「……………はい」

アインハルトは最後にベルカ式の魔法陣を一度発動させて集中した。それを見たヴィヴィオは驚きながらも笑っていた。

ノーヴェ「んじゃ、スパリング4分1ラウンド。射撃砲と拘束はナシの格闘オンリーな」

そして、ヴィヴィオはトントントンと足でリズムをつけながら構える。アインハルトは静かに構える。

俺は2人と対決をした事があるが2人とも戦うスタイルが全く違う。

例えるならヴィヴィオは動、アインハルトは静だ。
それが今の構える状態から見てもわかる。

ノーヴェ「レディ・ゴー！！！！」

ノーヴェの合図と同時にヴィヴィオがアインハルトに向かって走り出す。

そして、残り三步でアインハルトに届く距離で

ダンッ！！！！

アインハルト「！！！！」

一気に加速して、アインハルトの懐に入る。ヴィヴィオはそのままアップパーを繰り出す。

アインハルトは一瞬、驚いていたが冷静にそれを受け止める。そして、そのままヴィヴィオのラッシュが入った。それもアインハルトは澄ました表情で受け止め、時には受け流す。

ヴィヴィオの拳がアインハルトに受け止める度に地響きが鳴るような大きな音がする。それほどヴィヴィオの拳は重いのだ。

ティアナ「ヴィ、ヴィヴィオって変身前でも結構強い？」

スバル「練習頑張っているからね」

外野は驚いていた。ヴィヴィオが10才であんなにも強いのは普通は驚く事だ。

俺も初めて会った時も驚きの連続だったしな。

そして、ラッシュをしていたヴィヴィオは地面を踏んでいる左足に力を入れて、それを軸にしてアインハルトの顔を狙うように右足で回し蹴りを放つ。

アインハルトはそれも冷静に対処して、顔を少し下げて避ける。

ヴィヴィオはそれでも諦めず、再びラツシュを再開した。2人がぶつかる度にコート内では大きな音がする。

アインハルトは表情を困惑していた。何か考えている様子だ。そのまま静かに右腕を握り構えた。

そして、ヴィヴィオが右ストレートを放つ。それを少し体を下げて避けた。

ヴィヴィオ「!!!」

ヴィヴィオは驚いていた。その拳が簡単に避けられてしまった事を。アインハルトはそのままヴィヴィオの懐に入り

ドンツ!!!

左手でヴィヴィオの胸を左手の掌手で突き、ヴィヴィオを大きく飛ばした。

大きく飛んだヴィヴィオを、薄いオレンジ色の髪の毛のボーイッシュな容姿をしたオットーとブラウンのロングヘアのディーチによってキャッチして飛んだ勢いを殺した。

ヴィヴィオは驚いて右手を振り上げて静止しているアインハルトの方を見る。そして体が小刻みに震えていた。武者震いというやつだろう。

ヴィヴィオは満面の笑みをアインハルトに向けていた。しかし、アインハルトは悲しい表情をして踵を翻した。

アインハルト「お手合わせ、ありがとうございました」

ヴィヴィオはそれを見て、慌ててオットーとディーチから離れてアインハルトを追った。

ヴィヴィオ「あの……あのっ!!! すいません、私何か失礼な事を……?」

アインハルト「いいえ」

アインハルトはそこはきつぱりと断った。

ヴィヴィオが悪いわけではないようだ。

ヴィヴィオ「じゃ、じゃあ、あの私……弱すぎました?」

アインハルト「いえ、趣味と遊びの範囲でしたら充分すぎるほどに」

趣味と遊びの範囲内……そう言われたからかヴィヴィオは悲しい表情をする。

俺はアインハルトはちよつと言いすぎかもしれないと思った。

アインハルト「申し訳ありません。私の身勝手です」

一応、アインハルトは謝罪した。

ヴィヴィオはそれでも必死に食らいついた。

ヴィヴィオ「あのっ……… すいません………今のスパーが不真面目に感じたなら謝ります!!!」

ヴィヴィオは両手を広げて必死に話す。

ヴィヴィオ「今度はもっと真剣にやります。だからもう一度やらせてもらいませんか? 今日じゃなくてもいいです。明日でも………来週でも!!!」

必死になって話すヴィヴィオに罪悪感を感じたのか、アインハルト

はチラッとノーヴェエの方を見る。
ノーヴェエは頭を掻いた。

ノーヴェエ「あー、そんなじゃまあ、来週またやつか？今度はスパージ
やなくてちゃんとした練習試合でさ」

ウエンディ「ああ、そりゃいいッスね」

デイエチ「2人の試合楽しみだ」

ノーヴェエの言葉にノーヴェエと同じ薄赤の髪ショートを後ろで簡単
に縛ったウエンディとブラウンの長い髪を一本に縛ったデイエチが
賛成した。

周りからも賛成の声が聞こえる。

アインハルト「……………わかりました。時間と場所はお任せします」

ヴィヴィオ「ありがとうございます!!!」

ヴィヴィオは頭を下げた。アインハルトは後ろを向いたまま何も反
応しなかった。

ガイ「……………聖王女と霸王……………か」

俺はボソツと言った。

オリヴィエの複製母体であるヴィヴィオ。クラウドの子孫であるア
インハルト。

時代は変わったが再び混じり合う事になった二つの名前。
これからどんな物語が始まるのか俺には分からなかった。

チンク「ん？ガイ。何か言ったか？」

俺の吐いた言葉は近くに居た、白い髪のロングヘアに右眼に眼帯

をして、背は低いがノーヴェ達の中で一番の姉であるチンクが反応した。

ガイ「いや、なんでもないさ」

俺は先ほど言った事がチンクに聞かれていなかったので受け流した。
“聖王女”と“霸王”の重みは意外と大きいのかもしれぬ。

その後はストライクアーツをやる流れではなかったので解散することになった。アインハルトはそのことについて何か申し訳なさそ

うだった。

今は公民館前に居る。

ノーヴェ「んじゃ、私を送って行ってやるよ」

アインハルト「いいえ」

ノーヴェがアインハルトの事を送ると言ってきたがアインハルトは否定した。

そして、ガイを見上げる。

アインハルト「ガイさんと帰ってもよろしいですか？同じマンションで隣同士ですし」

ガイ「ん？あ、ああ。別に構わないが」

俺は戸惑いながらも了承した。

ガイ「ただ、帰りにニヶ所、寄り道したいところがあるんだがそれでもいいか？」

アインハルト「構いません」

アインハルトは即答だった。

ノーヴェ「……………何かお前らつて仲がいいよな」

ノーヴェがジト目でこちらを見てくる。

ガイ「ま、隣同士だしな。こんなもんだろ？」

ヴィヴィオ「あ、あの……！」

と、反対側からヴィヴィオの声がした。振り向くとそこにはヴィヴ

イオが見上げて俺の事を見ていた。

ヴィヴィオ「アインハルトさんってガイさんの隣に住んでいるんですか？」

ガイ「ああ」

その言葉にヴィヴィオは複雑な気持ちになったのか表情が困惑した。

ヴィヴィオ「そ、そうなんですか。だから仲がいいんですね」

ヴィヴィオは表情が少し硬い笑みを作った。

それを見て変だなとは思ったが今日の出来事は少しヴィヴィオに堪えているのだろう。俺はヴィヴィオの頭を撫でた。

ガイ「来週、アインと対戦するんだ。今度はしっかりと本気で全力を出して行けよ」

俺は笑みを浮かべながらヴィヴィオの頭に乗っけていた手で撫でる。

ヴィヴィオ「……………はい」

ヴィヴィオは少し悲しい笑みを作った。俺だけではちょっと物足りないか。

ガイ「ま、何かあったらメールでもしなよ。愚痴相手ぐらいにはなってる」

アインハルト「……………その愚痴の内容の相手って私ではないのですか？」

俺はアインハルトの方を見る。アインハルトは少しムツとした表情

だ。

ヴィヴィオ「い、いえ。アインハルトさんに愚痴なんてありません
! ! ! !」

アインハルト「……………」

ヴィヴィオの言葉にアインハルトは何も答えずにマンションのある
道へ歩きだす。

ガイ「俺が寄るところは反対なんだが」

アインハルト「…………… / / /」

アインハルトはそこで止まって、そして、頭を下げて振りかえり逆
の道を進み始めた。

きつと間違えたからか顔が真っ赤なのだろう。それを皆に見せたく
ないと。

ガイ「アイン、先に行き過ぎだ。それじゃ、皆またな」

俺は残っているメンバーに挨拶をして、アインハルトを追った。

「ヴィヴィオ」……………」

私はガイさんとアインハルトさんの背中を見て複雑な気持ちになっていた。

コロナ「ヴィヴィオ、ライバル出現だね」
ヴィヴィオ「そ、そうだね」

コロナが隣で片目を瞑り言ってきた。確かにあれほどの実力を持っていて年が近いのだからライバルとして申し分ない。
でも、この複雑な気持ちはそういうものじゃない。

リオ「アインハルトさんはガイさんに懐いている感じだね」
ヴィヴィオ「な、懐いている!？」

コロナのさらに隣に居たりオの言葉に私は高い声を出してしまった。そう、この複雑な気持ちはきつとガイさんがアインハルトさんに取り残されてしまうのじゃないかっていう気持なのだろう。
私はきつとガイさんの事が……………」

ノーヴェ「ま、確かにそんな感じはしていたな」

ノーヴェも肯定してきた。ガイさんとアインハルトさんの雰囲気は他の人があまり寄せ付けないものがあつた。

デイド「陛下、大丈夫ですか？」

いろいろな考えをしていたので難しい表情になつていたのでらう。デイドに心配されてしまった。

ヴィヴィオ「う、ううん、大丈夫だよ。それにアインハルトさんから見れば私はレベルが低くて不真面目なんだよね」

ガイさんとアインハルトさんの事はひとまず脳の隅に置いておく事にした。

今は来週のアインハルトさんとの対決だ。

ヴィヴィオ「帰ろう、皆」

私は満面の笑みをして皆の方へ向いた。皆も私の事で考えてくれて嬉しかったけど、ここでよくよとしていても仕方ない。

アインハルトさんが何を求めているのか分からないけど精一杯伝えてみよう。高町ヴィヴィオの本当の気持ち。

店内

俺はカラーコンタクト買うために商品のカラーコンタクトの色を調べていた。隣にはアインハルトがジッと俺の事を見ている。

ガイ「なあ、アイン。フリーはどっちの色がいいかな？翠？紅？」
アインハルト「……………え？あ、はあ」

アインハルトは考え事をしていたのか俺の質問に答えなかった。

俺はそんなアインハルトを見て、手に取っていた商品を棚に戻した。

ガイ「ヴィヴィが気になるか？」

アインハルト「……………」

アインハルトは無言だったが、少しして頷いた。

ガイ「あの虹彩異色の瞳が印象に残るか？」

アインハルト「当たり前前です。私の中には霸王の悲願があるので、
から。あの虹彩異色の瞳は忘れる事が出来ません」

確かに、と俺は相槌を打った。

アインハルト「対戦してみてもわかりました。ヴィヴィオさんはまっ
すぐな技を持っていて、きつとまっすぐな心持っていて………だけ
どあの子は、だからあの子は私が戦うべき“王”ではない」

だからか。ヴィヴィオに“趣味と遊びの範囲内”と言ったのは。

ガイ「アインは気持ちを伝えることに不器用だな」

俺は笑ってアインハルトの事を見て、アインハルトの頭に軽く手を
乗つける。アインハルトは不器用と言われたからかムツとした表情
を浮かべる。

アインハルト「オリ………フリージアと出会って、複製体であるヴ
ィヴィオさんと出会って………」

オリヴィエは外出するときはフリージアと呼んでくれと頼んである。
理由は言えなかったがアインハルトは了承してくれた。俺はアイン
ハルトの頭から手を離れた。

アインハルト「なんだか複雑な気持ちです………」

不安げな表情で見上げてくるアインハルト。

ガイ「ま、来週にもう一回ヴィヴィとブツかってみるといいよ」

アインハルト「私はまたガイさんと試合をしたいのですが………」
ガイ「またの機会にな」

俺はアインハルトとの話を終えて、再び商品を手取る。

ガイ「紅のカラーコンタクトでいいか。アインもこっちでいいよな？」

アインハルト「ええ。紅で大丈夫かと」

霸王の記憶が残っているアインハルトから大丈夫だと言われたので紅のカラーコンタクトを購入した。

本局第四技術部 研究室

俺はこの研究室にやってきた。時空管理局本局は次元の中であり本局第四技術部はその中に存在するが、研究室はミッドガル都市にも置いてあるので俺はそこへ寄った。

流石に部外者は入れないので、アインハルトには外で待ってもらふ事にした。

俺は待合室のソファアに座つてとある人物を待っていた。

プシュー

と、空圧開閉式のドアが開いて白衣を着た一人の女性が入ってくる。

???「あ、ガイ君。久しぶりだね」

ガイ「お久しぶりです。マリーさん」

ショートヘアの翠の髪に丸い眼鏡が特徴的で背は俺よりは少し低いぐらいな人だ。いかにも精密機械やシステムに詳しそうな雰囲気を持つている。

彼女の名前はマリエル・アテンザ。愛称はマリーとなっているのでマリーさんと呼んでいる。

魔導師の装備のメンテナンスを主に担当している。マリーさんは俺の対面のソファアに座った。

マリー「で、私に何か用なのかな？」

ガイ「はい」

プリムラを作ったのもこの人だ。

俺は首に掛けてあるプリムラを取り出し、テーブルに置いた。

ガイ「最近、プリムラが卑猥な表現をするようになったのですが、このように設定したのはあなたですか？」

マリー「たとえば？」

ぐっ……………この人は俺に言わせるつもりなのか？

マリーさんの表情はキョトンとしている。

ガイ「……………視姦とか……………プレイとか」

俺は言いたくはないがプリムラが言っている卑猥な表現を言った。言っているだけで恥ずかしい。

マリー「ああ、それは私がちょっと試しに付けてみた機能よ。気にいってもらえた？」

ガイ「全然！！！」

マリーさんは思い出したように言った。マリーさんが犯人って事が良く分かった。

ガイ「元に戻してください」

マリー「元に戻すって、それが元よ」

ガイ「……………」

俺はマリーさんの言葉を聞いて絶句した。あれが元のプリムラだった……………だと！？

マリー「ガイ君は1人暮らしだって聞いたからね、1人でも寂しくならないようにそういう機能を付けたのよ」

ガイ「これからもっと酷くなる可能性はあるのですか？」

マリー「酷くなるとは酷い事言うわね」

マリーさんは頬を膨らませて子供みたく怒った。

ガイ「……………まあ、でもプリムラのおかげで1人暮らしでも寂しさはあまり無かったです」

マリー「でしょ！？プリムラにはちゃんと感謝してね」

感謝はしているさ。このデバイス……………プリムラが居なかったら、たぶん1人暮らしは耐えられなかったと思う。

マリー「それにしても未だにガイ君の魔力はC-なの？」

マリーさんが話を変えてきた。

ガイ「ええ。努力はしていますが最近ではC-から上がりませんね」

マリーさんはテーブルに置いてあったプリムラを手にとった。

マリー「この子の力はまだまだ伸びるんだけどね、ガイ君がBランクに上がったらもつとうまく扱えるわよ。デバイスはね、マスターの役に立てない事が一番嫌なの。この子も自分の力を全部使え切れていなくてマスターであるガイ君に役に立てなくてショックを受けていると思うの。デバイスにも感情はあるのよ」

ガイ「……………」

俺は何も言えなかった。魔力ランクの低さで愛機であるデバイスにも迷惑をかけているのだ。心の中で罪悪感が残った。

マリー「とりあえずBランクを目指して頑張ってみて。そうしたら

この子が新しい力を教えてくれるから」
ガイ「……………頑張りませんかね」

俺は笑った。つられてマリーさんも笑った。魔力ランクの低さ。やはりここがいろいろと問題を起こしているのだ。

ガイ「お待たせ」
アインハルト「少し遅いです」

研究室の外に出るとアインハルトが木にもたれて待っていてくれた。

入る時に先に帰ってもいいと言ったのだが、アインハルトは首を横に振った。

理由を聞いたが教えてくれなかった。

ガイ「帰るか」

アインハルト「はい」

俺たちは歩きだした。

ガイ「ん」と、食料はまだ残っているな。帰りがけに買いに行かなくて大丈夫か」

アインハルト「あ、あの……………」

隣にいたアインハルトは何か言いにくそうな表情で俺を見た。
俺はなに？、と言った。

アインハルト「わ、私もまた一緒にしてもよろしいですか？」

ガイ「ん？食事にかな？」

アインハルトは頷いた。多分、食事はあまり意味なく、オリヴィエと居たいから言ってきたのだろう。

まあ、それでも温かい食卓が出来るなら嬉しいが。

ガイ「俺としては暖かい食卓が出来るから大歓迎だよ。それじゃ、とっとと帰ろうぜ。フリーも待っている」

アインハルト「……………はい」

アインハルトは俺の言った事に対して僅かに微笑んだ……………気がした。

ゾクッ

ガイ「！！！！」

俺は突然、足のつま先から頭のとっぺんまで電撃が走るような感覚がして、身震いした。

誰かに見られている……………視線を感じる。

その視線は後ろから。その視線には途方もない量の殺気も含まれており、眼球1つの動きも視られているような気がしてならない。心臓を掴まれているような感覚に近く、呼吸もまともに出来ない。

こんな殺気を出している人物が後ろに居るのかはわからない。振り向けばわかる。

しかし、なぜだろうか。振り向いてはいけない気がした。振り向いたら何かが壊れてしまう。そんな気がしてならない。

アインハルト「あ、あの、ガイさん？」

隣に居たアインハルトは俺の表情がいきなり変わったことに戸惑っていた。正直、アインハルトに構っている暇がない。

だが、アインハルトは何ともない表情をしている。俺にだけこの鋭い視線を向けられているのだ……………殺意も。

そして、この背筋に凍るような感覚はあまりよろしくない。いつまでも続いていたら、精神がおかしくなってしまうのではないかと錯覚に陥る。

ガイ「ちっ……………」

俺は歯切りを鳴らして、意を決して後ろを振り返った。

そこには誰もいない夜道だ。そして、振り向いたからか心臓を掴まれているような感覚は無く、感じる視線も無くなっていた。

ガイ「はあ……………はあ……………」

俺の顔からは途方もない量の冷や汗をかいて、肺に詰まっていた熱い空気を吐きだして深呼吸をした。

アインハルト「だ、大丈夫ですか！？ガイさん！？」

隣ではアインハルトが心配してくれている。俺はあの殺気で思考がほぼ停止していたが、少しずつ動き出した。

ガイ「あ、ああ、心配かけてすまなかった。何でもない。早く帰ろう」

俺は早歩きでその場を離れることにした。

アインハルト「あ、ま、待って下さい」

アインハルトもついてきた。

ビルの屋上

そこには1人の男性が立っていて、都市を眺めていた。

????「ガイ・テスタロッサ……………」

その男性は呟いた。

見た目は整ったセミショート黒髪で黒い瞳の30〜40の男性。上着である灰色のスーツを脱いで片腕にかけて、灰色のネクタイに白い長そでのワイシャツに袖なしの黒いセーターを着込んでいた。パツと見れば一般社会の営業マンに見えるだろう。しかし、その瞳は静かに、そして強い意志が存在している。

先ほどはここから視える人物に殺気を含めた視線を送っていた。それを感知取ったからか、戸惑いながらもその人物は振り返った。その顔を見た時に理解できたのかその男性はフツと笑った。

????「これからか……………」

その男性は星が大きく二つある夜空を見上げていた。

マンション

俺はアインハルトと日常風景のマンションに戻ってきた。アインハルトは一度、着替えてくるとの事で自分の部屋に戻った。

俺は家で待っていたオリヴィエにただいまと言って、夕飯の準備をした。

先ほどの殺気はなんだっただろうか？本当に心臓を握られている感覚に陥った。

あの時の事を思い出すと、背筋に冷たいものが走るのわかる。

オリヴィエ「ガイ」

聖杯戦争は始まっているのだろうか？だが、管理者からの連絡はな

い。
だが、始まるとしたらあのような殺気に耐え続けなければならない。
正直、怖かった。だから、あの場から逃げ出した。

オリヴィエ「ガイ？」

やはり、俺は非殺傷設定というこの世界のルールに縛られていたからか、殺し合いというものに恐怖を感じる。これでは聖杯戦争は生きていけないだろう。
どうすればいい？

オリヴィエ「ガイ！……！」

ガイ「……………んっ？」

俺はキッチンからダイニングを見た。オリヴィエが心配そうな表情でこちらを見ていた。

オリヴィエ「どうしたのですか？いくら呼んでも返事はしませんし、暗い表情をしていましたが」

だが、オリヴィエを見ていると少しだけだが恐怖心が消えていた。そして、俺は野菜を手で水洗いしていたところだったのか、ずっと手に水道水が流れてしまい、手が冷えてしまった。

ガイ「ん、悪い……………考え事をしていた」

オリヴィエ「大丈夫ですか？」

ああ、と俺は相槌を打った。

オリヴィエ「もし困った事があつたら言って下さい。相談に乗りま

すし、必要であれば私がガイの矛になり盾にもなります」

オリヴィエは表情を凜々しくしてグッと拳を握る。

俺はそれを見て安堵感を得た。

ガイ「……………ああ、ありがとう、オリヴィエ」

俺は笑みを作ってお礼を言った。オリヴィエも微笑んだ。

ガイ「夕飯を作るからちょっと待っててな」

オリヴィエ「わかりました」

俺は料理を再開した。

私服に着替えたアインハルトがやってきて、三人で食事をした。その後、オリヴィエはシャワーを浴びに風呂場へ。アインハルトは出したお茶を啜って座っていた。

アインハルト「あの、ガイさん」
ガイ「ん？」

俺は食器を洗っていた。アインハルトから名前を呼ばれたので、一度蛇口を止めた。

アインハルト「帰り道の時にものすごい汗をかいて呼吸が荒かったですが、どうしたのですか？」

ガイ「……………」

なんて答えたらいいか分からなかった。オリヴィエがこの世界に居る事は教えたが聖杯戦争の事は教えていない。

ガイ「……………何でもないさ」

アインハルト「そう……………ですか」

アインハルトは力になれなかったからか悲しい表情をしてしまった。

ガイ「そろそろ戻った方がいいんじゃないか？」

壁にかかっている時計を見る。夜も遅い時間帯だ。

アインハルト「はい。では失礼します」

アインハルトは立ち上がって、お辞儀をして玄関から出て行った。横切る時に寂しげな表情をしていたのが分かった。

ガイ「悪いことしたな」

なんて説明したらいいか分からなかったので何も説明できない。

オリヴィエ「ガイ、お風呂が開きました。使ってください」

と、脱衣所からオリヴィエが出てきた。今度はバスタオル姿ではなくちゃんと寝巻きである俺のパジャマを着ている。

ガイ「ああ、皿洗いしたら入るよ」

オリヴィエ「そういえば、ガイ」

キッチンに入っている俺の隣にオリヴィエは来た。

オリヴィエ「あの、“かたーこんたくと”というものはどうやって使うのですか？」

ガイ「ああ、あれか」

言ってきたのは先ほどアインハルトと一緒に買ってきたカラーコンタクトの事だ。

ガイ「あれを眼に付けておけば眼の色が変わる。オリヴィエの虹彩異色の眼は一色に統一されるさ」

オリヴィエ「本当ですか!？」

眼の色が変わることになり嬉しかったのか、オリヴィエは体を寄せてくる。

ガイ「あ、ああ。これで外出はしやすいだろ？」

オリヴィエ「はい、ありがとうございます。これでガイの役に立てるような情報を集められます」

オリヴィエは満面の笑みを見せてきた。やはりオリヴィエは美人だ。

ガイ「俺のためか………ありがとな、オリヴィエ」

オリヴィエ「いえ、マスターであるガイに何も役に立てないのはシヨックですから」

ガイ「あっ……………」

そう言えば、マリーさんにも言われた。

『デバイスはね、マスターの役に立てない事が一番嫌なの。この子も自分の力を全部使え切れていなくてマスターであるガイ君に役に立てなくてシヨックを受けていると思うの』

ああ、そうだ。俺はデバイスやサーヴァントに助けられているのだ。だが、俺の魔力の低さから、プリムラは本来の力が、オリヴィエは姿を消せずに相手にはれる可能性があり、迂闊に行動が出来ない状態。

俺がすっかりしないといけないのではないか？ 聖杯戦争というものに足を突っ込んでいるのだから、それなりの覚悟がないといけない。さっきのような殺気に気後れしては、俺をマスターとしてくれているプリムラやオリヴィエに申し訳ない。

それに、俺の夢である『魔法で誰もが不幸にならない世界』を目指している。危険な事もある。だから、聖杯戦争も危険ではあるが俺

は歩みを止めてはならない。

ガイ「……………本当にありがとう、オリヴィエ」

オリヴィエ「……………はい、何か考えが纏まったようですねによりです」

俺が笑みを作ると、そこから何を讀み取ったのかオリヴィエは微笑んだ。

ガイ「皿洗い終わったら、お茶出すからちょっと待っててな」

オリヴィエ「はい」

オリヴィエはキッチンから出ていき俺は蛇口を捻り水を出した。

俺が風呂から出ると、オリヴィエはソファで眠っていた。

俺は別にソファでも良かったのだが、オリヴィエ今日は俺がベツドで寝てくれとのこと。

オリヴィエは毛布を一枚掛けて静かに寝息をたてて眠っていた。

プリムラ『マスター、メールです』

プリムラはそう言って、俺の前にモニターを映し出した。

差出人……………高町ヴィヴィオ

件名……………明日の祝日

本文……………こんばんは、ガイさん。私は来週のアインハルトさんの対決に向けて、帰ってから練習ばかりでした。一生懸命練習してアインハルトさんとの対決に全力を注ぎたいと思います。で、明日は祝日ですが、無限書庫に行きますか？私は予定は空いているので大丈夫です。

ガイ「ん？そういや明日は祝日だったな」

俺は壁に掛けてあるカレンダーを見る。確かに明日の日の数字は赤かった。何の祝日だったかは忘れたが。

俺は返信の文章を作成した。

To……………高町ヴィヴィオ

件名……………Re：明日の祝日

本文……………ああ、明日行こう。午後になったら、なのはさんの家に行くよ。

プリムラに送信の命令をしてモニターを閉じる。
少しして、返事が返ってきた。

差出人……………高町ヴィヴィオ

件名……………Re：Re：明日の祝日

本文……………はい！！！楽しみにしています！！！ただ、この前みたいに寝坊はしないで下さいね

文章から読み取ると、ヴィヴィオは俺が寝坊した事がちょっと心配の様子だ。

俺は読んでいると笑ってしまった。そして、モニターを閉じて、お茶を入れてテーブルに持って行き座った。

ガイ「なあ、プリムラ」

プリムラ「なんででしょうか？」

テーブルの上に合った、十字架のデバイスが核を点滅させて応えてくれた。

ガイ「俺の魔力ランクの低さにかっかりしていないか？」

プリムラ「そんなことはありません」

俺の言っている事に即答で答えた。

プリムラ「マスターは一生懸命努力をしているのが見ていて分かります。ですから私もそれに応えられるように全力を注ぎます。私を作って下さったマリーさんにはBランクになれば新しい力を使えるようになりますが、私が自己調整をしてC-でも使えるように努力をします」

ガイ「……………無理はするなよ」
プリムラ「その私を労わる言葉が演算能力を促進させます」

デバイスにも感情はある、とマリーさんは言っていた。確かにそうだ。

プリムラは機械的な反応はせず、本物の人と話をしているような感覚になる。

ガイ「ありがとな、プリムラ」

プリムラ「マスターの役に立つためには何でもします」

オリヴィエの気持ち、プリムラの気持ち。

俺はいろんな奴から支えられていると改めて知った。

俺はお茶を飲んで立ち上がりベッドへ移動した。明日は無限書庫に行って、調べる物を探す。

ベッドで横になると、久々の柔らかいベッドだったから直ぐに眠気が襲ってきた。

プリムラ「おやすみなさい、マスター」

ガイ「……………ああ、おやすみ」

プリムラがおやすみの言葉をかけてくれる。それだけで温かい気持ちになって意識を手放した。

五話“複製と子孫の交差”（後書き）

ん、なんかアインハルトの話になったような感じだw

まだ、vividの無いようだと言巻の後半部分ですね。

オリヴィエが外出解禁になったのでこれからはオリヴィエと交わる人が増えてくるかな。

しかし、効果音はやはり文章で表したほうが良いんじゃないかなって思い始めた。

・ーードンッ!!!!

・それは地の底から地上に向けて地響きが一気に足元から出てきた衝撃だ。

ま、この話は効果音を簡単に見ますね。

何か一言感想をくれるとモチベに影響する……………かもですw

今後もこの話を読んでくれれば幸いです。

では、また（・・）／

六話“理想郷と理論の交差”（前書き）

すみません、今回はちょっと短いです。

一気に進めても良いのですが、ここは一回切ったほうが良いかと思
いまして。

聖杯戦争も少しずつ進めませんかね。

では、6話目入ります。

六話“理想郷と理論の交差”

柳洞寺 山門

アサシン「秘剣……………」

アサシンは空中で私と剣を交えた後、階段の上段に着地して、後ろ向きから下げていた刀を静かに、そして流れるようにして刃を上にして顔の横まで上げて、私を視て構える。

私はその流れを魅入るように視てしまったため、追撃の機会が無くなった。

アサシンはこの日本の昔の侍。初めて会った時は敵である私にサーヴァントのクラスと真名を堂々と名乗り上げてきた。

真名は佐々木小次郎。しかし、物語世界において実在しない架空の人物であり、彼を演じるのに最も適した無名の剣士の亡霊が、佐々木小次郎という架空の英霊の殻を破った存在にすぎない。

蒼く長い髪をポニーテイルで縛り、蒼い瞳。蒼が特徴的な侍姿である。

あの異様な長刀。あまりに長尺な武器は小回りが利かず攻守ともに致命的な支障をきたすもの。懐に飛び込みさえすれば一気に突き崩せるのだが、その一歩が踏み出せない。

アサシンとはこれで二度目の対決だが、あの長刀をここまで使いこなすのは流石と言える。

その長刀が今狙っているのは階段の下段に居る私の首だ。

私は風王結界を外してあるエクスカリバーに魔力をこめる。エクスカリバーがそれに応じて眩い金色の光を刀身から光らせた。

セイバー「だああああ!!!」

私はアサシンに向かって、大きな一步を踏み出した。

アサシン「燕返しいい!!!」

アサシンも私の首を取るために大きな一步を踏み出す。互いの一步が互いの射程圏内に入る。

アサシンは一瞬にして三つの太刀筋を放った。

私の頭上から股下までを断つ太刀筋。

対象の逃げ道を防ぐ円の軌跡の太刀筋。

左右への離脱を阻む払いの太刀筋。

その全てが私に向かって放たれる。防御も回避も不可能。ならば私はその太刀筋と太刀筋の間からその太刀筋を放ったアサシンに向かって、エクスカリバーを振り上げる。

ズドンッ!!!

私達は互いの剣を振り斬った。

私のエクスカリバーがアサシンの胴体に一太刀入ったのがわかった。それによって、三つの太刀筋は消えて私が斬られることはなくなった。

ブシュ!!!!

アサシンの体に入れた太刀筋から血吹雪が流れた。アサシンは静かに構えを解いた。私も構えを解いて、アサシンを見る。

アサシン「ゆけっ……………」

アサシンは一言、小さく言った。

キャスターのルール違反によってこの山門を抛り所にされてしまっ

たサーヴァント。既に死んでいるキャスターがマスターとなつてサーヴァントを召喚することは、“生者のみが死者は甦らせられる”という原則に違反するため、強引に土地を依り代にして、“マスターが存在しない”状態で召喚したのだ。

私はアサシンの横を進み、そして、足に力を入れて、一気に山門を潜った。アサシンは魔力が尽きて実態を維持できなくなって消えるのだろう。

私はそれでもあのような戦士と最後まで戦えたことに誇りを持った。

柳洞寺

私が柳洞寺に到着した時にはギルガメツシュが士郎に向かって、後ろの次元から複数の武器を飛ばしたところだ。

セイバー「離れていてください、士郎！！！」

私は士郎の前まで加速して、エクスカリバーで放たれていた複数の武器を一閃した。

ドーンッ！！！！

魔力同士がぶつかったので大きな土煙が舞い上がる。私はそのまま土煙の中へ入り、ギルガメツシュに向かって、エクスカリバーで横振りした。ギルガメツシュはそれを避けて、複数の剣や槍の矛先が次元から現れている場所へと後退する。

セイバー「後は私が！！！」

私はギルガメツシュの方を見てエクスカリバーを構える。

金色の髪に真紅の瞳。灰色のズボンに第二ボタンまで開けたYシャツ。その上にズボンと同じがらの上着を羽織っている。服装だけを見れば一般人に見えるが古代の英雄王ギルガメツシュでありサーヴァントだ。

柳洞寺の敷地内はかなり荒れていた。コンクリートは粉々に割れ、至る所に武器が散乱している。中には折れている武器もあった。

士郎もギルガメツシュも互いの武器をぶつけ合っていたのだろう。

士郎「いや、俺一人で十分だ。セイバー」

セイバー「シロウ！！！」

私はギルガメッシュに警戒をしつつ、後ろに居た士朗に注意を向ける。

士朗「それよりも聖杯を止めている凜の事を頼む！！！」

私は士朗の方をチラリと見た。

薄い赤のかかった短髪に薄い黄色い眼。ジーパンと半袖のシャツを着ているが、所々、刀で切り裂かれている。

左手で右の腕を掴んでかなりポロポロ状態だったが、それでもその眼は諦めていない。

正直、士朗の事は不安ではあったが聖杯を止めている凜も心配だ。

私は葛藤の中、決断した。

セイバー「ご武運を」

私は士朗に向き、一礼してその場を去った。今はマスターである凜をサポートするために。

正直、私でもギルガメッシュに勝てる算段は立っていない。それほど強力な相手だ。だが、士朗にはあの固有結界が……アーチャーと同じ固有結界が使える。それはギルガメッシュと渡り合えることのできる術。

なら私は士朗を信用して、私は凜のサポートに回ることにした。

柳洞寺の裏手に回ると、そこは異様な光景だった。異様な形をした巨大な肉塊みたいなのが柳洞寺の池を埋め尽くしていた。

これが聖杯というのだろうか？ 私はこれを求めるために聖杯戦争に参加した？

私はこれのために世界と契約してここまで来たというわけだ。これが何でも望みを叶える聖杯とは思えなかった。

その肉塊は脈を打っているのかドクンドクンと動いている。その肉塊の中に見知った顔が誰かを担いで歩いていた。

セイバー「凜!!!!」

今はマスターの凜だ。

黒い髪を黒いリボンでツインテールに縛り、翠の瞳。

黒いニーソックスに黒く短いミニスカート。胸元に十字の紋章が付いている赤い服を着ている。

私は凜へと駆け寄ろうとした。

凜「駄目よ!!!!その泥に触れちゃいけない!!!!」

凜は必死になって私の行動を止めようとした。私はその言葉を聞いて黒い泥に入ることをやめた。

セイバー「ですが……………」

凜「こいつはもうすぐ弾けるわ。その前に宝具でぶった切っちゃって!!!!」

宝具を使ってこの不気味な肉塊を破壊する。凜が言ったのだ。それに従おう。

凜を担いでいる人物はたぶん士朗の親友、信二だろう。

聖杯の触媒にされてしまったのか今は意識が無い。

セイバー「では、早く外へ!!!!池に出てしまえば後は私が!!!!」

私はエクスカリバーを構えた。凜はそれを見て移動して見えなくなる。しかし、少ししても凜は出てこない。肉塊の塊に道を遮られているようだ。

私は玉碎覚悟でこの泥に入って凜を助けるべきではないだろうか？
そう考えていた矢先

シュシュシュッ シュン

頭上から幾度の武器があ肉塊に目掛けて飛んで行く。

セイバー「あれは……………」

あのように武器を飛ばしている人物は2人しか知らない。

1人は先ほど居た人物、ギルガメツシュ。もう1人は元々凜のサーヴァントだった

セイバー「アーチャー……………いえ、英霊エミヤ」

そう、アーチャーだ。アーチャーがこの複数の武器を飛ばしている。彼は士朗の理想を追い求めて英雄となった人物。

アインツベルンの城で士朗と死闘を繰り広げていたが、その戦いの決着後にギルガメツシュが横槍を入れて消えてしまったと思っていた。だが、まだ生存していたようだ。

私はニヤリと笑ったのが自分でも分かった。

アーチャーも凜の事が心配していたのだろう。凜が肉塊から現れた。アーチャーの武器が道を作ったのだろう。

凜「セイバー!!!お願い!!!」

凜はそう言いながら肉塊の外へ出て、池へと落ちる。私はエクスカリバーに全魔力を注ぎ込んだ。

凜の魔力なら問題なく打てるが、今は士朗にも分け与えている状態。士朗は固有結界を発動しているのが凜を通して分かる。だから、私

がこれを放つたら魔力が無くなってきつとサーヴァントの肉体が維持できなくなるだろう。だが、構わない。

私はエクスカリバーが金色に輝いたのを確認した。凜は池から出て芝生に転がり込んだ。

セイバー「エクス……………」

肉塊には未だに武器の雨が降り注いでいる。私は大上段構えでエクスカリバーを構えた。

セイバー「カリバー!!!!」

それを立て振りで放つた。

“勝利された約束の剣”^{エクスカリバー} 私の切り札。広域を両断する光を放つ。

見た目はビーム砲に近いが、攻撃属性は斬撃に近い。それが肉塊の中心に向かって放たれた。

ドゴーン!!!!

大きな音と衝撃があたり一面に駆け巡る。

蒼い光と黒い光。それが入り混じって、そして、黒い孔が現れたが蒼い光に包まれて消えた。あれが聖杯の正体だろう。

私の体には魔力が残されていない。 “約束された勝利の剣”^{エクスカリバー} は膨大な魔力を消費した。サーヴァントとしての肉体を維持できるだけの魔力はない。

凜の魔力を使って生存は出来るが、それでは今闘っている士郎に十分な魔力が届かない。今、私が居る必要はない。後は士朗と凜に任せよう。

私の髪を縛っていたシニヨンのようにしていた紐が解けて髪がはらけた。

凜「セイバー！！！」

私を呼ぶ声が聞こえる。私は微笑みながら凜を見た。今にも泣きそうな瞳で私の事を見上げてくる。

私は静かに笑った。凜を見ながら。

凜の泣きそうな表情、それがこの世界で見た最後の光景。そして、視界は闇に閉ざされた。

上下左右の感覚もあいまいな浮遊感がくる。

このまま再びあの丘に戻るのだろう。カムランの丘の麓に。

私はサーヴァントとしての契約から解放された後、“英霊の座”ではなくこのカムランの丘へと連れ戻される。まだ、この場所で果てるという運命を全うする直前にあるからだ。

私は現世での死を得て、正規に英霊となった上で召喚されたサーヴァントではなく、死ぬ直前に“世界”と契約し、死後の魂を守護者として差し出す代わりに、聖杯を手にする手段を取り付けた。

契約は聖杯の取得をもって執行される。それなので、私は聖杯を手にしに限り、何度だろうと、朽ち果てるはずのカムランの丘の麓に呼び戻されるだろう。

我が子の心臓を貫いたままで。次なる戦いに呼び招かれるまでの、永遠にして刹那の時間、安息という名の攻め苦のなかで。

だが、今回の聖杯戦争で聖杯がどんなものか知ってしまった。

あれは願いを叶える為の願望機ではない。前回の聖杯戦争では切嗣が強制的に三回連続で令呪の命令を私にさせて“約束された勝利の剣”^{エクスカリバー}で聖杯を破壊した。必死に令呪の命令に抵抗しようとしたが無理だった。

何故あの時、切嗣が聖杯を破壊しようなど考えていたのかわからなかったが、今なら解かる。

あれは存在してはならないもの。この世にあってはならないものだ。

???? 『果たしてそうかな?』

セイバー「え?」

暗闇の中から流れて低い声が聞こえた。それは一瞬、あの神父の言葉のような声だと思ったが、違う。こちらはもっと意味深い低い声をしてる。

その言葉を聞いたからから暗闇が晴れて、薄暗い四角い部屋に出来た。

セイバー「こ、ここは？」

私は戸惑っていた。本来は聖杯を手にすることが出来ず、カムランの丘の麓に戻るはずだった。次なる戦いに向けての。

しかし、ここは四角い部屋だと視覚で分かる。カムランの丘の麓ではない。

??? 『なに、そう戸惑う事ではないだろう』

セイバー「!!!!」

と、戸惑っていた私の目の前に何か四角い液晶のようなモニターが現れた。あれはテレビという奴の画面に似ている。だが、私には何が起きているか分からない。

??? 『まあ、私の事は“管理者”とでも言ってくれ』

正直、この人物の名前などどうでもいい事だが、今は少しでも情報が欲しい。

セイバー「ここはどこですか？管理者」

管理者『今は君では理解しうる場所だ。順に説明していこう』

私が来た事の無い場所？英霊の座か？だが、まだ“世界”との契約は成立していない。

私はその言葉で考え込んでしまう。

管理者『君は聖杯を欲しくはないのかね？』

セイバー「聖杯だと？」

考えていた私に管理者は聖杯の話を持ちかけてきた。

だが、先ほど聖杯戦争をしてきたばかりではないか。あの後はどうなっていたかはわからないが、士朗と凜ならきつと良い道へと進んでくれるはずだ。

それが何故この四角いモニターにいる人物から聖杯という言葉が出てくるのだろうか？

管理者「あの正体は“この世の悪のすべて（アンリマユ）”だ。冬木の聖杯は聖堂教会に観測された第七百二十六個目の聖杯候補だ。“願望機”としての役割も確かに持つており、儀式的完成によってもたらされる膨大な魔力を用いれば大抵の願いは叶えることが可能だ。しかし、第三次聖杯戦争においてルールを破って召喚されたあのサーヴァントが原因で、聖杯が溜め込む“無色の力”は汚染され“人を殺す”という方向性を持った呪いの魔力の渦と化すようになり、それ以降、冬木の聖杯は人を貶める形でしか願いを叶えられない欠陥品になってしまっている」

セイバー「……………」

私は愕然とした。今までもとてきた聖杯が実は人を貶める物ではないものであると。

そのサーヴァントによって破壊されてしまった聖杯のために、切嗣がマスターだった第四次聖杯戦争、士朗がマスターだった第五次聖杯戦争、管理者の言っている事があっているとしたら、この二つに参戦していた私はこれを求めて戦っていた事になる。

私が償う罪と終わらない罰を終わらせるために参戦していた聖杯戦争は無意味だった。いや、士朗たちと出会ったのは無意味ではなかったが、本来の目的である理想には届かないと。

管理者「確かに、冬木の聖杯は欠陥品だ。だが、それ以外の聖杯が存在し、“無色の力”のままではあるとしたら？」

セイバー「え？」

このモニターに出ている管理者が他にも聖杯があると言ってきた。モニター越しも暗くて人物が特定できないが、渋く低い声は印象に残る。私はモニターに釘付けだった。

管理者『この世界、この星のミッドチルダに存在する。すでに2人のマスターが登録された』

この世界？私は管理者が言った言葉に疑問が残った。

セイバー「この世界……とは？」

管理者『ああ、この世界は地球というものは存在しない。いわば別世界と言える』

セイバー「別……世界？」

私は話がついていけなかった。この世界が士朗たちが居た世界とは違うと言うのか？同じ世界での時間軸の超越ならサーヴァントによって二回行われたからわかる。

だが、世界そのものが違うと？

管理者『やはり理解に苦しんでいるようだな』

そんな様子をモニター越しから笑っているのか、管理者の体が少し揺れているのがわかる。

セイバー「ええ。私の理解を明らかに超える出来事です」

笑われている事に屈辱を覚えたが、この状況下では少しでも情報が欲しい。この状況下を知っているのはこのモニターに映っている管理者だ。逆上されて話を止められたら困る。

管理者『例えたとすると、地球という地図があるとする。その地図があればその地図内で迷う事無く目的地へ行けるだろう。だが、ここは地図の外側に位置する。地球という地図では歩けない、歩いてみても全く違う所へ出てしまう。この世界ではこので地図が必要なのだ』

セイバー「つまりは“世界”の範囲外の世界だと？」

管理者『まあ、君の主観的から見るとそのようになるだろう』

少し理解できた。ここの世界は地球が存在する世界とは違うのだ。私は外側の世界に出てきてしまったようだ。

セイバー「何故私はここに出て来たのですか？」

少し疑問が解けたが新たな疑問も浮上する。私がここに出てきた理由だ。

管理者『“ワームホール理論”というのを知っているか？そこから少し繋がっている』

セイバー「ワームホール理論？」

聞いたこともない単語が出てきた。それと私がここに居る理由とどう関係しているのだろう。

管理者『ワームホール理論。二つの穴があり、それはトンネルで繋がっている。そのトンネルは、通過時間ゼロで通り抜けられる。二つの穴がどれだけ離れていてもな。しかし、ワームホールのトンネルは超重力が掛っており、開通すると同時に潰れる。なので、かかる重力を無効化するためには工夫が必要だ。それがこの“エクゾチック物質”だ』

管理者は手のひらに物体を乗っけて見せてくる。薄暗くても蒼く光っており宝石のような形をしているのがわかる。

管理者『これはマイナスの重さを持つ質量で、重力に反発する。エクゾチック物資を注入してワームホールを安定させれば、瞬間移動は可能でもある』

小難しいこと言っているが、用はそれがあるからトンネルが安定してその“ワームホール”を通ることが出来ると管理者は言っている。

管理者『この世界と地球のあった世界にも繋がっている“ワームホール”が存在する。時空管理局の船はまた別のやり方で移動しているがそこは省略する。理論で行くと、開通していてもトンネルが塞がったままだ。ここを通るためにはこの“エクゾチック物質”が必要となる。そして、私はワームホール空間にこれを繋げたことによって、世界と世界は繋がった。そして、私は見た。“英霊の座”をな』

セイバー「なっ！！！」

英霊の座を生身の人間が見たというのか。あそこは肉体を持っていては行くことのできない神秘の場所だ。この人物はここを視たという。

管理者『まあ、偶然ではあるがな。繋がった場所が“英霊の座”だったというのは。そこで面白い人物が居た。それが君だ』

その人物はモニター越しの暗闇の中、腕を私に向けているのがわかった。

管理者『君はセイバーのクラスで存在していたかのように見えた。しかし、それはただの抜け殻でこれから入る予定の自身が聖杯戦争に参戦している。確かに聖杯戦争中はそうなるだろう。だが、聖杯戦争が終わって“英霊の座”に戻るかと思えばあの丘へと戻ったではないか』

管理者はどこまで私の事を知っているのだろうか？私が参戦していた戦いを見ていた、と。そして、第四次聖杯戦争で敗北した私があのカムランの丘の麓で我が子の心臓を貫いたまま、次なる戦いに呼び招かれるまでその時間軸の中で停止していたことも知っているというのか？

管理者『君はサーヴァントとして召喚されていたはずなのにまだ死んでいないではないか』

セイバー「ええ、私は聖杯を手にして死ぬという契約を“世界”としている。聖杯を手にした暁に契約が執行される。私は聖杯を手に入れるまで何度も同じ時間軸で止まっているあの丘へと戻る」

私は世界との契約の内容をその人物に伝えた。相手からいろいろと情報を得ているのだ。私も何か情報を渡さなければ感じが悪い。

管理者『ああ、そうさ。君の契約は確かに面白い。だから、今度は……………』

ピキーン……！

セイバー「……！！」

セイバーの目の前に赤い円の紋章が現れた。

セイバー「これは……………サーヴァントの召喚の紋章……！！」

私もあの紋章から現れたことがある。ここにサーヴァントが現れる？そのサーヴァントと私を戦わせようと言うのか？

管理者『案ずるな。君は今回の聖杯戦争では……………』
セイバー「つぐー！！」

突然、私の右手の甲が光りだす。そして、それは刻まれた。令呪だ。その三画はサーヴァントを使役するための絶対の命令権。それが無いとサーヴァントを使役することが無理に近い。それが何故私の体に刻まれた？

管理者『君は今回の聖杯戦争ではマスターだ』
セイバー「な、なに？」

衝撃の事実だった。過去二回、サーヴァントとして戦った私が今度はそのを使役するマスターになるのだ。あり得ない。

管理者『別に不思議なことではなからう？“生者のみが死者は甦らせられる”という原則に反してはいない』

確かにそうだ。死者が死者を蘇られたことによって、ルール違反をしたキャスターに召喚されたアサシンは拠り所であるあの山門でしか存在出来ず、存分に戦えなかったのだから。

管理者『ここに飛んでくる前、君の体に魔術回路を組み込ませてもらった。マスターから魔力を供給されていた体であつたし組み込む事は容易かつた。ただし、その体はやはり魔力で維持されている。魔力が尽きたら再びあの丘へと戻ることになる』

セイバー「まで、それでは“世界”との約束が違う！！！私は死ぬ

直前に“世界”と契約し、死後の魂を守護者として差し出す代わりに、奇跡を生み出す聖杯を手にする手段を取り付けた!!!」

これでは“世界”との契約が違ってくる。死後の魂を守護者として差し出すのはサーヴァントとして使役されることを意味する。それはいまだ生きながらえている私が過去二度、サーヴァントとして参戦した裏付けにもなる。

だが、マスターと成ってしまうと、この因果律は破綻してしまう。

管理者「別に間違っていない。死後の魂を守護者として差し出すのはあくまで死んでからだ」

セイバー「で、ですが……………」

管理者の言っていることに私は戸惑う。

管理者「それに“世界”はこの世界には存在しない」

セイバー「あつ……………」

そう、ここは別世界。私と契約した“世界”は存在しない。存在するのはこの世界。

管理者「ワームホールを繋げることによって君をこちらに招き入れることも出来た」

だから、この世界では“世界”との契約は成立しない。だが、負けて魔力が尽き、消えれば一度、再び英霊の座に戻る。そして、私のことを見失っていた“世界”が私を見つけ再びカムランの丘の麓と聖杯戦争のループに飛ばされるのだろう。

世界と世界は干渉しあえない存在だからこの世界に“世界”は干渉できない。

管理者と討論をしているうちに、召喚の紋章から1人の男性が召喚された。見た目はかなり身長が高い。

管理者『君は三人目のマスターだ。七人のマスターが揃った時、今回の聖杯戦争は開始される』

セイバー「ま、まで、私が聖杯戦争に参加するなど一言も……………」

管理者『君は聖杯の奇跡が欲しいのではないか？』

セイバー「……………」

私が今まで求めてきた理想。だが、その理想のために従者や盟友、第四次聖杯戦争で円卓の騎士の一人、“湖の騎士”サー・ランスロットにも怨まれたこともわかった。

だからか、自分は王にふさわしい器ではなかったと感じ、新たに王の選定をやり直すために聖杯を……………それを叶えるために聖杯という奇跡の代物を追い求めてきた。

私が聖杯戦争に参加しない理由はないのは当たり前だ。しかし

セイバー「こんな事をして貴方に何のメリットがあるのですか？」

眼前に映し出されたモニターの人物の真意が分からなかった。切嗣みたいに言葉をまったく交わさないわけではないので、少しは話せる人物だと思うが。

管理者『……………すべては運命だよ。セイバー』

その人物の泣いて低い声が一瞬戸惑ったかのように思えた。だが、それは次の言葉では再び泣いて低い声で戸惑いもない口調だった。

管理者『では、君は三人目のマスターだ。そして、そのサーヴァントのクラスは？』

ランサー」「……ランサー。真名は“ゼスト・グランガイツ”」

戸惑っていた私の代わりに召喚されたサーヴァントが管理者に答え
た。

六話“理想郷と理論の交差”（後書き）

セイバーはUBWルートから参戦しました。

そのほうが、士郎とフラグを立てずにガイとの……はやりませんけどねw

そのほうが、今後の話が面白くなるんじゃないかなと。

佐々木小次郎との対決は最後まで書きたかっただけですw

一応“生者のみが死者は甦らせられる”という理論を出しておきたかった訳でもありますが。

セイバーがマスターです。

セイバーがマスターです。

大事なことなので二度言いましたw

しかし、簡単に魔術回路を組み込む管理者っていったい何者だw？

感想が一言ありますとやる気につながる……かもしれないですw

今後もこの小説を読んでくれれば幸いです。

では、また（・・）／

4月だ。社会人だ。時間が……orz

七話“複製母体と複製体の交差”（前書き）

社会人になってしまった……orz

時間がなかなか取れなくなってきたから、週に一回のペースで更新できるか出来ないかですかね。

楽しんでいる方（いないと思うがw）、更新が遅くなってしまうて申し訳ありません。

このぐらいのペースになります。

では、七話目入ります。

七話 “複製母体と複製体の交差”

マンション

ガイ「んっ……………」

俺はいつもの起きる時間に脳が覚醒し始めた。

最近日は昇るこの時間帯に起きるのが習慣づくようになった。

休日は遅くまで寝ていてヴィヴィオに怒られてしまったけど。今日は祝日だが同居人がいるので、朝食を作るためにここ数日はこの時間に脳が覚醒する。

久々にベッドに寝たからか横向きで眠っていた体にダルさが無いのがわかる。

俺は眼を開けた。

オリヴィエ「すーすー」

俺は眼を閉じた。目の前にあり得ない光景があったからだ。俺は確かめる為にもう一度眼を開けた。

オリヴィエ「すーすー」

二度見ても光景が変わることはなかった。

俺が寝ているベッドにオリヴィエが俺の方に寝顔を向けて寝ていた。シングルベッドに俺とオリヴィエが1枚の毛布で寝ている状態だ。密着状態に近い。

昨日のオリヴィエは俺にベッドを譲ってソファで眠っていたはずだ。

それが何故俺の寝ているベッドで寝ているのだろうか？

疑問は残るがそれよりも今のオリヴィエの姿がマズい。俺の渡した

縦ラインの青縞のパジャマを着ているのだが、第2ボタンまで外しているため、胸元が肌蹴て白いブラがチラリと見えている状態だ。俺はダメだと思いつつもオリヴィエの胸元の白い生地眼がいつてしまう。

プリムラ『また視姦ですか？』

ガイ「……………」

プリムラからまた痛い言葉をまた貰ってしまった。

俺はオリヴィエの胸元から視線をズラして起き上がり毛布から出てオリヴィエに毛布をかけ直した。

ガイ「なあプリムラ。なんでオリヴィエはベッドで寝てんだ？」

プリムラ『夜中にベッドに移ったのを確認しました』

オリヴィエは夜中にこっちへ移ってきたらしい。理由は分からないか。

ガイ「……………起きたらオリヴィエに聞くか」

俺はオリヴィエの綺麗な寝顔を見て、ベッドから降りた。

オリヴィエはやはり美人だということ朝から再確認された……………羞恥心の足りなさも再確認された。完全に眼が覚めた。

ガイ「朝飯作るか」

俺はキッチンへと移動した。

プリムラ『マスター、メールが届いています』

キッチンに入った俺の前にモニターが現れた。

差出人……………アインハルト・ストラトス

件名……………朝食

本文……………ガイさん、おはようございます。あの、もし良かったらですが、今日の朝食、私の手料理でよろしければ食べに来ませんか？一昨日から食事のお世話になりましたのでそのお礼をしたいので。

アインハルトからのメールだ。食事のお誘いだ。

昨日は帰り道に壮大な量の殺意が背中越しから感じて冷や汗をかいた。

その時に隣にいたアインハルトはマンションに帰ってから事情を聞いてきたが聖杯戦争の事なので話すことが出来なかった。それが原因なのか、仲間外れにされたと思っているのか帰り際に見えた寂しげな表情が忘れられない。

このお誘いはアインハルトに何回か食事を作ったお礼と昨日の事について聞く機会を設けたいのかもしれない。

ガイ「ま、仕方ないか」

アインハルトの好意も無碍に出来ないので、俺は部屋を出て隣人のドアの横に付いているインターホンを押した。少ししてアインハルトが出てきた。

アインハルト「あ、ガ、ガイさん」

ガイ「おはよう。メール返すより口頭で返す方が早いと思ってな。アインの手料理楽しみにしてるわ」

俺は笑顔で答えた。いきなり俺が来たからかアインハルトは戸惑っ

ていた。

アインハルト「え、あ、あの……………」

ガイ「んじゃ、少ししたらフリーと行くわ」

俺は伝えるだけ伝えて部屋に戻った。

オリヴィエ「あ、ガイ。おはようございます」

ガイ「あつ……………／＼／」

部屋に戻ると、胸元を肌蹴たままのオリヴィエが起きたところだ。俺は入った瞬間、180°。転回して視界からオリヴィエの姿を消した。

ガイ「とりあえず羞恥心を養え／＼／」

オリヴィエ「ガイは純情ですね」

そう言つて、後ろから服を脱ぐ音がした。

ガイ「なあ、オリヴィエ。何でベッドで寝ていたんだ？」

オリヴィエの羞恥心の無さに、まだ少し心臓が早くなっているが聞くモノを聞く事にした。

オリヴィエ「……………さあ？」

少しの間があつたが戸惑いのない普通の声が返ってきたのでオリヴィエ自身も分かっているらしい。

プリムラ「寝ぼけていたのでは？」

ガイ「寝ぼけてソファからベッドに来るか？」

首に掛けてあるプリムラから言ってきた。

プリムラ『音声を聞いたものだど“ベッド”』とか言って、マスタ
ーの寝ているベッドに入っていましたか？』

ガイ「……………そこまでしてベッドで寝たかったんだな、オリヴィエ」
オリヴィエ「え？」

オリヴィエはベッドで寝たかったらしい。それが寝ぼけて行動に移
ってしまったと。

ガイ「悪かったな、オリヴィエ。今度から好きなだけベッドで寝て
いいから」

俺がベッドで寝るたびに寝ぼけてベッドに入られてしまっっては困る。
オリヴィエの羞恥心の無さに寝不足になりそうだ。これからはオリ
ヴィエにベッドを譲った方がいい。

オリヴィエ「ガ、ガイ！！何か勘違いをしています！！！」

と、後ろから足音が大きくなってきた。そして、オリヴィエが俺の
背中部分の服を両手で思いつきり掴んで抗議した。

ガイ「ち、違うのか？」

俺は背中からのオリヴィエの気迫に少し戸惑いながら聞いた。たぶ
ん今のオリヴィエの姿は先ほどパジャマを脱いだから下着姿のまま
なのだろう。俺は振り向く勇気が無い。

オリヴィエ「私はベッドで寝たいなど思っておりません！……ソ
ファーが硬いなど思っていないません！……」

ガイ「……………」

オリヴィエは今の発言で本音をちよつと入れたのが分かった。俺は
ちよつと嘘を言ってみた。

ガイ「……………プリムラがオリヴィエは“軟らかい”ベッドで寝たが
っているような事を言っていたが」

オリヴィエ「そ、それは……………それです！……」

オリヴィエは一瞬戸惑ったが、開き直ったようだ。だが、この嘘に
オリヴィエが釣れた。やはり柔らかいベッドで寝たいようだ。

アインハルト「あ、あのガイさん。食事の用意が……………」

と、そこにドア越しからひよこつと顔だけを覗き込んできたアイン
ハルトが俺らの光景を見て固まった。無理もない。確認はしていな
いがオリヴィエは下着姿で俺の後ろに居て、必死に何かを言ってい
る光景なのだから。

アインハルト「あ、あの、そ、その……………ごゆっくり／＼／」

ボタン！……！

何を勘違いしたのかアインハルトは顔を真っ赤にして思いつきりド
アを閉めた。

ガイ「……………これは勘違いしたかな」

オリヴィエ「何のことです？それよりも……………！！！！」

アインハルトの部屋に入りずらくなった。オリヴィエが後ろから必死に抗議をしている声を聞きながら、アインハルトの部屋にどうやって入るか俺は悩んだ。

ガイ「アインの部屋ってトレーニング器具がいっぱいあるんだな」
アインハルト「…………… / / /」
ガイ「しかし、女の子の部屋って初めて入るけどアインの部屋は質素な感じだな」
アインハルト「…………… / / /」

ガイ「可愛い服が多いのに部屋は質素というギャップが……」
アインハルト「ガ、ガイさん!!!」

俺は座っているアインハルトに顔を向けた。顔を真っ赤にして俺の方を見ている。俺はアインハルトに目撃された後、結局、アインハルトの部屋に入るようになった。アインハルトの好意を無碍には出来ない。

オリヴィエは着替えてアインハルトの隣で座っていた。俺は入ったときからアインハルトにどう接していいか分からず、部屋の中を立って見回っていた。

アインハルト「あ、あの、ご飯出しますので座ってくださいノノ」

言葉の最後の方は俺の顔を見る事が出来なくなって、立ってキッチンへと逃げて行った。

オリヴィエ「アインハルトはどうしたのでしょうか？」
ガイ「………はあ」

俺はアインハルトにどうやって誤解を解いてもらうか考えていたがため息しか出ない。答えが出ない。俺はしぶしぶテーブルの前に座った。

少しして料理が運ばれた。アインハルトも朝食は簡単に作っているようだ。トーストで焼いた食パンにベーコンエッグ、コーンスープに野菜サラダ。

アインハルトは料理を運んでいる時もチラチラと俺の事を見る。そして、全ての料理がテーブルに並べられてアインハルトはテーブルの前に座った。

3人「いただきます」

俺らは食パンにバターを塗って一口食べた。バターの風味が口の中に広がり、それをパンが吸収されて歯ごたえを感じさせてくれる。まあ、食パンにバターはベターだが。

アインハルト「……………」

アインハルトは食べながら俺の事を見ている。視線を合わせるとサツと視線を逸らす。居心地が悪そうだ。

オリヴィエ「美味しいですよ、アインハルト」
アインハルト「……………ありがとうございます」

隣に居たオリヴィエが微笑みながら評価した。高評価を貰って、アインハルトは居心地の悪さは少しは無くなったようだ。ここはアインハルトの部屋なんだがな。

ガイ「なあ、アイン」
アインハルト「は、はい？」

アインハルトは俺の方を再び見る。ちょっと戸惑っている様子だ。今、思うのも変だが、やっぱりアインハルトのこういう表情は見ていて面白い。

ガイ「さっきの出来事は誤解だからな。変に理解しないでくれよ」
アインハルト「私がガイさんの部屋を覗いた時ですか？」

俺は頷く。アインハルトはそれを見て、少し驚いた様子だ。

アインハルト「ガイさんとオリヴィエで付き合っていると思ったのですが」

ガイ「あ……………やっぱりそう思っていたか」

やはり変に思われていたようだ。しかし、俺とオリヴィエが付き合いと誤解されていたとは……………まあ、あの状況は確かにそう思うだろう。俺とオリヴィエが付き合い……………金がかかりそうだ。

オリヴィエ「いえ、私は……………私には……………」

と、食事をしてきたオリヴィエが食べかけのパンを置いてこの会話に横槍を入れてきた。俺とアインハルトはオリヴィエに視線を向けた。オリヴィエは目を瞑って胸に右手を当てる。

オリヴィエ「クラウスとの婚約の儀を行う予定でしたので、私の生涯の伴侶はクラウスです。ガイではありません」

ガイ「……………」

その声は迷いもなく透き透つてとても綺麗な音だった。だが、何故か俺の胸には少し寂しさが残ったのが分かった。まあ、俺ではオリヴィエに釣り合わないのは分かっていたが。これが身分の違いというモノだろう。

オリヴィエ「ですから、アインハルト。その話を誤解しないでください」

アインハルト「え、ええ……………そう言われると、私の中の“霸王”の血から嬉しさが込み上がってきます」

そう言って、2人は笑った。

ガイ「……………とりあえず、誤解は解けたのか？」

アインハルト「はい。変に誤解して申し訳ありません」

アインハルトは俺の方を見て頭を下げた。

ガイ「ま、解けたならいいか」

俺はパンにガブリついた。

アインハルト「あ、ガイさん。今日、空いていますか？もしよろしかったら特訓に付き合ってほしいのですが」

ガイ「もぐもぐ……………んっ、っど。悪い。今日は用事がある。今日じゃなければ時間が空いた時に特訓の付き合いはしてやるよ」

俺は食べたモノを飲み込んでアインハルトに返答した。その返答にアインハルトは少し表情を暗くしてしまった。

だが、今日はヴィヴィオにお願いして無限書庫へ行くと約束した。

アインハルト「……………わかりました。では、また後日に」

ガイ「ああ、悪いな」

そう言っただけ俺たちは食事を再開した。

ガイ「オリヴィエは無限書庫に行くか？」

俺とオリヴィエはアインハルトの部屋から出て、自室に戻ってきた。洗濯物はオリヴィエに任せて、俺は部屋を掃除していた。洗濯物を干していたオリヴィエがこちらを向いてはい、と言って返事した。俺の洗濯物とかも干してもらっているので変な感じはするが、俺がするよりかはマシだ。

オリヴィエ「そこは本が豊富なのですよね？」

ガイ「ああ。無いものは無いと言われているからな。いろいろと調べるとモノがあるからそこへ行こうと思っただ。ヴィヴィとも約束したし」

オリヴィエ「ヴィヴィ？」

俺の言った言葉にオリヴィエは反応した。

ガイ「正式名は高町ヴィヴィオ。オリヴィエ、君の複製体だ」

オリヴィエ「私の……………」

オリヴィエは自分のクローンが居ることに驚きと戸惑いと不安が表情に出ていた。そして、少し俯いて視線を逸らした。

ガイ「会ってみるか？」

俺は聞いた。自分のクローンに会う事にどう思っているのか気がなつたから。

オリヴィエ「……………ええ、会ってみたいです」

その表情に驚きと戸惑いと不安はなく、凜々しい表情だった。気持ちが決まったのだろう。

ガイ「んじゃ、カラーコンタクトして行けよ。オリヴィエだとわかると困るのだから？」

オリヴィエ「そうですね。髪型も少し変えておきましょう」

俺たちは無限書庫に行くことになった。その前になのは宅へヴィヴィオを迎えに行かないと。俺たちは準備を始めた。

なのは宅

俺とオリヴィエは昼前になのはさんの家の前にやってきた。

オリヴィエは紅いカラーコンタクトに髪をツインテールをして帽子をかぶっていた。これならパッと見ただけではオリヴィエとは思われないだろう。

だが、やはり容姿が良かったせいか、道中、視線が集まっていたのが分かった。

俺は隣で歩いていたら俺の方にも視線が集まっているのが分かった

……殺気も含めて。

ガイ「……………はあ」

思い出したただけでため息が出ってしまった。

オリヴィエ「どうしました、ガイ？」

隣に居たオリヴィエが俺のため息を聞いて声をかけてきた。

ガイ「いや、何でもない」

俺は考えを切り替えて、インターホンを押した。

なのは「はい」

少しして、中からなのはさんがドアを開けて笑顔で出迎えてくれた。

なのは「あ、ガイ君。こんにちは」

ガイ「こんにちは、なのはさん」

俺も笑顔で答えた。

なのは「あ、今日はヴィヴィオと無限書庫に行くんだよね？」

ガイ「ええ、お昼ごろにこっちで合流する予定です」

そっか、となのはさんは言って俺から視線を外した。その視線は俺の隣に居たオリヴィエだ。

なのは「そちらの方は？」

オリヴィエ「私はフリージア・ブレヒトと言います。よろしくお願
いします」

オリヴィエは微笑んで礼儀よく頭を下げた。王族育ちだからか社交
辞令はしっかりとされているようだ。

なのは「あ、は、はい。私は高町なのはっています。よ、よろし
くお願いします」

それを見てなのはさんも慌てて頭を下げて挨拶をした。なのはさん

が慌てている……珍しいものを見た気がした。
2人は頭を上げた。そして、なのはさんは俺の方へ視線を向けて悪戯な頬笑みを見せてきた。

なのは「ガイ君の恋人？」

ガイ「い、いえ」

今度は俺が慌てた。オリヴィエとの関係をどのようにしておくのか考えていなかった……マスターとサーヴァントの関係。そのように言ってもわかるはずもない。

オリヴィエ「私とガイは主従関係の仲でありますよ」

ピキッ

今、この周りの大気の空気が5 くらい下がった気がした。その原因はなのはさんだろう。オリヴィエの言った言葉に何を感じたのか、頬笑みをこちらに向けているが、体から放たれているオーラはどす黒いものを感じる。

なのは「……………どういう事かな、ガイ君？」

ガイ「え、え」と……………」

なのはさんのオーラに圧迫され、俺は少し後ろへと下がった。なのはさんの頬笑みが怖い。

その原因となったオリヴィエは何も分かっていない様子だが、こちらもなのはさんの気迫に圧倒されて冷や汗をかいていた。

ヴィヴィオ「あ、ガイさん……！」

と、後ろから元気な声が聞こえた。
振り返るとそこにはピンクのジャージ姿のヴィヴィオが走ってきた。
かなりの練習量をしてきたのだろう。体から湯気が出ているのが肉
眼で確認できる。

俺の前で足を止めて息を整えて俺の方に笑みを向けて顔を向けた。

ガイ「や、やあ、ヴィヴィ」

オリヴィエ「あっ……………この子が……………」

俺はなのはさんのオーラに圧倒されている状態なので、普通に喋る
ことが出来なかった。隣に居たオリヴィエはヴィヴィオの顔を見て
驚きを隠せていなかった。左目が紅で、右目が翠というその虹彩異
色の瞳が自分の複製体だという事を裏付けているからだ。

なのは「あ、ヴィヴィオ。お帰り。ノーヴェの訓練キツかった？」
ヴィヴィオ「なのはママ、ただいま。キツかったけどいい訓練
になったよ」

親子2人で笑って会話していた。なのはさんからのどす黒いオーラ
は無くなっていった。

ヴィヴィオ「で、こちら方はどちら様ですか？」

ヴィヴィオはオリヴィエに視線を移した。オリヴィエが自分の複製
体に会った事で戸惑いを隠せなかった。

オリヴィエ「あ、わ、私は、フリージア・ブレヒトといいます」

オリヴィエは何とか自己紹介をした。

ヴィヴィオ「初めまして。私は高町ヴィヴィオっています。よろしく願います」

ヴィヴィオは笑って挨拶をして頭を下げた。オリヴィエもつられて頭を下げた。

俺は戸惑いを隠せない。複製母体と複製体の接触。2人の正体を知っている人がいたら、俺みたく戸惑うだろう。

ヴィヴィオは頭を上げた。

ヴィヴィオ「わゝ、フリージアさんって綺麗ですね」

オリヴィエ「あ、ありがとうございます」

ヴィヴィオが目を輝かせてオリヴィエを見上げた。

ヴィヴィオはオリヴィエだと分かっていない様子だ。フリージアがオリヴィエ・ゼーゲブレヒトだとバレる事はないようだ。オリヴィエだと思われてはいけない。何処から情報が漏れるか分からないからな。

ヴィヴィオ「ガイさんとお知り合いなのですか？」

オリヴィエ「そ、そうです。私とガイは……………」

そう言っつて、俺の方へと視線を向ける。先ほどの失言で大気の温度が下がったのが分かったからか、俺との関係の発言を言わない事にしたようだ。

ガイ「……………この前、ストライクアーツで知り合った。俺よりも実力は上だ。ヴィヴィオも後で対戦してもらおうといいぞ」
ヴィヴィオ「本当ですか!？」

俺は嘘をついて誤魔化した。親戚とも言いたかったが親の顔も知ら

ない俺がそんな事を言うのも変だ。

ヴィヴィオ「じゃあ、フリージアさん。今度、対戦しましょう！！」

オリヴィエ「え、ええ、わかりました」

ヴィヴィオは満面の笑みをオリヴィエに向けた。オリヴィエはそれを見て最初は戸惑ったが微笑んで答えた。

なのは「それじゃあ、お昼にしようか。ガイ君たちも食べる？」

ガイ「あ、はい。頂けるのなら」

なのはさんはどす黒いオーラを見せる事は無くなって頬笑みをこちらに向けた。

なのは「さっきの事、気になるんだけどな」ガイ君

ガイ「……………」

突然、なのはさんからの念話が頭に響いた。先ほどの事について追及されそうだ。今はどす黒いオーラは無いけどなのはさんの頬笑みが怖い。

なのは「ちよつと人が多いからガイ君には手伝ってほしいんだけど」ガイ「……………はい、手伝います」

キッチンで質問攻めにあう事が分かっていたが、否定もできない。

なのは「それじゃあ、入って入って。フリージアさんも。ヴィヴィオはシャワー浴びてきなよ」

こうして昼飯をなのは家で頂いた……キッチンでなのはさんから
質問攻めにあっただが。

ピンポーン

テーブルで俺となのはさんの料理を食べ終えてお茶を頂いていた頃、
インターホンが鳴った。

ヴィヴィオ「私、出てくるね」

私服に着替えたヴィヴィオが玄関へと向かった。少しして、足音が

増えて戻ってきた。

リオ「こんにちはは、なのはさん、ガイさん!!!!」
コロナ「こんにちは」

ヴィヴィオに迎え入れられてリオとコロナがやってきたようだ。

なのは「いらっしやうい」

ガイ「よう、リオとコロ」

ヴィヴィオ「2人ともこっちだよ」

そして、ヴィヴィオがソファアに誘導して2人はソファアに座った。

オリヴィエ「あちらの方々は？」

隣で座っていたオリヴィエが聞いてきた。

ガイ「ん？あれはヴィヴィの友達だ。頭に黄色いリボンを縛っている子がリオ・ウエズリー。クリーム色の髪をツインテールにしている子がコロナ・ティミルだよ」

オリヴィエ「そうですか。ご挨拶をしませんと」

オリヴィエは立ち上がって、ソファアに向かった。入れ違いでヴィヴィオがこっちにきた。

ヴィヴィオ「なのはママ、ジュースある？」

なのは「うん、ちょっと待っててね」

なのはさんも立ち上がってキッチンの冷蔵庫を開けに行った。

オリヴィエ「初めまして、フリージア・ブレヒトといいます」

リオ「綺麗……………」

コロナ「う、うん／＼」

後ろではオリヴィエの容姿にリオとコロナが言葉を現せていないようだ。声を聞いただけでも分かった。

ガイ「ヴィヴィ。リオとコロナも連れていくのか？」

ヴィヴィオ「うん、ガイさんが無限書庫に行きたいって言ったら、私たちも行きたいって言ってきたから誘ったの」

まあ、賑やかになるには構わない。2人もフリージアの事をオリヴィエだとは思っていないだろう。

俺も椅子から立ち上がってソファアへと移動した。リオとコロナはうつとりとした表情でオリヴィエを見ていて、オリヴィエは困惑していた。

オリヴィエ「あ、ガイ」

オリヴィエは俺の方に顔を向けてホツとした表情を浮かべた。俺が来たから2人からの視線を離せると思ったのだろう。

ガイ「フリーも座りなよ」

オリヴィエ「はい、ガイ」

俺とオリヴィエはソファアに座った。

ガイ「リオとコロナは無限書庫に行った事あるのか？」
リオ「え、あ、う、うん。行ったことあるよ／＼」

オリヴィエを見てうつとりしていた2人は俺の声で現実に戻ってきたようだ。まだ顔が赤いが。

コロナ「私たちが出会ったのも無限書庫だもんね」
リオ「うん」

2人はお互いを見て笑った。

ガイ「俺は初めて行くから分からない事があつたら教えてくれ」
リオ「うん、いいよ」

コロナ「はい」

2人は笑ったまま俺の方に顔を向けて承諾した。

ヴィヴィオ「はい、ジュースだよ」

ヴィヴィオが2人のジュースを持ってきた。

2人はヴィヴィオにお礼を言つてジュースを貰った。

コロナ「ガイさん。聞きたい事があります」

ガイ「ん？なんだ？」

コロナが一口ジュースを飲んで、再び俺の方に顔を向けた。その表情はやや真剣さが窺えた。

コロナ「ガイさんとフリージアさんってどんな関係なのですか？」
ガイ「……………」

またこの質問をされてしまった。俺はどうやって答えるか悩んだ。

時空管理局本局 管理局データベース“無限書庫”

ガイ「うお……………」

俺は無限書庫に入って、敷地が視界に収まりきれないほどの膨大な広さに開いた口が塞がらなかった。奥の終着点が見えない。

オリヴィエ「す、すごいですね」

オリヴィエも戸惑いを隠せていない様子だ。これほどの広さに膨大な量の情報が眠っているのだ。

聖杯戦争の情報も見つかると思いき期待を持てた。

ヴィヴィオ「初めてくる人には驚いちゃいますよね」

俺とオリヴィエの隣に居たヴィヴィオが俺らの事を見て苦笑しながら言った。リオとコロナもヴィヴィオの近くに居る。

リオとコロナにもオリヴィエとはストライクアーツで知り合ったと言った。特に疑問を持っていない様子だったのでオリヴィエだとバレル事はないだろう。

リオ「ガイさん、ここで何を調べるんですか？」

ガイ「まあ、いろいろとな………っと、ここは無重力か」

俺の体が自然と浮かんた。重力という力が無くなって、ちよつとした力で行きたい方向へと飛んで行けるようだ。

オリヴィエ「え、わ、わわわ!!!」

オリヴィエも体が浮いた。初めての経験なのか、かなり慌てた。オリヴィエは空戦の経験がないのだろうとこの時、思った。

ヴィヴィオ「フリージアさん。良かったら一緒に同行しますよ？」

オリヴィエ「え、ええ。お願いします」

リオ「あ、私も」

ヴィヴィオとリオは笑い、オリヴィエは少し落ち着いて3人は無限書庫の中へと入って行った。

コロナ「ガイさん、良かったら私が一緒に探し物を探しますよ？」

ガイ「ん？ああ、お願いしようかな」

こうして、無重力の中で探し物を探し始めた。

30分後

ガイ「……………全く無いな」
コロナ「そうですね」

俺は調べ物をコロナに頼んだ。

“聖杯”というキーワードで探す物をお願いしていたのだが持って来てくれた本のタイトルは“聖杯伝説”“聖書の聖杯”“アーサー

王の聖杯探求”などとこの世界のモノではない情報が多い。

元は管理外第97世界の地球の話ばかりだ。管理者もその世界で“聖杯戦争”が行われていたと言っていたのだから世界観は間違っていない。

だが、“聖杯戦争”の内容の情報が全くない。類似していたものでもこの世界で“聖王戦争”というものが存在していたらしいが意味は全く違ってくるのだらう。ここまで“聖杯戦争”というものが厳禁に秘匿されているとは思わなかった。

コロナが一生懸命 “聖杯” というキーワードの本を探して持ってきてくれているのだが俺が探しているモノじゃないとわかると寂しい表情をしてしまう。

コロナ「ガイさん、ごめんなさい。お役に立てなくて」

ガイ「いや、コロはよく探して来てくれてる。俺が1人だったら調べ方も全く分からずにこういう本も見つけることは出来ないさ」

俺はそう言って、寂しい表情をしているコロナの頭を撫でる。

コロナ「あ、ありがとございます／＼／＼そう言ってくれますと嬉しいです／＼／」

撫でられて嬉しいのか、コロナは頬を赤くして俺の事を見上げて微笑んでくる。

やっぱり、ヴィヴィオもコロナもりオも笑った方がいい。寂しい表情をされてしまうと何とかしてやりたいと思ってしまう。俺はコロナの頭から手を離れた。

コロナ「でも、ガイさんはいったい何を調べているのですか？聖杯というキーワードだけではあまり抽象的で大雑把な調べ方になってしまいます」

ガイ「ん〜、まあ確かにそうなんだけどね」

聖杯戦争とも言えず、なんて言おうか考えた。なのはさんとヴィー
タさんにもこの事は話していない。

ガイ「ゴメンね。ちょっと言えないかな」

俺は素直に頭を下げ謝った。どう言い訳してもコロナを納得でき
るような事は出来ないと分かったから。

コロナ「いいですよ。ガイさんのプライベートまで土足で踏み込む
わけにもいきませんから」

俺が頭を上げてコロナを見ると落ち着いた表情で俺を見ていた。

コロナはあの三人の中で一番落ち着きのある少女だ。ヴィヴィオと
リオが突っ走っていくのをコロナがストッパーのような感じで存在
している。

そして、どんな時も一歩下がって冷静に対処している。それが性格
に繋がっているしコロナの優しい部分なのだろう。俺はそう思っ
ている。

ガイ「悪いな、ほんと」

だから、今はこのコロナの優しさに甘えることにした。聖杯戦争を
一般人に教えることはできないから。

オリヴィエ「わっ！！！」

ガイ「うわっ！！！」

と、コロナと話し終えた時、オリヴィエが逆さまになって上から俺

の視界に入ってきたので俺は驚いた。この無重力空間の中では上下左右の平衡感覚が全くない。オリヴィエが逆さまに見えるが、実際は俺が逆さまに居るのかもしれない。無重力なのでスカートも捲れることはない。

オリヴィエ「ガイ、驚きましたね」

ガイ「いや、そりゃあ、な」

オリヴィエは悪戯な笑みを向けて俺の驚いた顔を見て満足していた。

ヴィヴィオ「フリージアさんって結構お茶目なんですね」

リオ「うん。それに話を聞いていて面白かったです」

と、さらに視界にヴィヴィオとリオも入ってきた。

ガイ「フリーは何を探していたんだ？」

オリヴィエ「ええと、オリヴィエの回顧録とかを探していました。

読んでいましたが結構感慨深いものですね」

自分の記録だし感慨深くなるだろ。アルバムを見ているようなものだ。それに後の者たちがどのように評価をしているのかも気になるのだろう。

オリヴィエ「しかし、この無重力空間ってのは面白いですね」

ガイ「ああ、空を飛ぶのとはまた違う感覚だな」

オリヴィエは未だに上下逆さまだ。

オリヴィエ「ですが、この中を動くのにはまだ慣れませぬね」

オリヴィエが少し動こうとして力を入れた。

オリヴィエ「え、わ、わわわ!!!」

ガイ「っと」

オリヴィエが力の加減を間違えて、そのまま俺の方へ向かってきた。俺はオリヴィエをキャッチした。

オリヴィエ「す、すみません、ガイ」

ガイ「あっ……………」

だが、上下逆さまにキャッチしたのでオリヴィエのスカートの中の白い生地が丸見えだった。

ヴィヴィオ「あっ」

リオ「えっ」

近くに居たヴィヴィオとリオもオリヴィエのスカートから見える事に気付いた。

ガイ「わ、悪い／＼」

オリヴィエ「ガイ？何を謝っているのですか？」

俺はオリヴィエから視線を外して、少し離れた。

やはりオリヴィエの羞恥心の無さは困る。下着を見られてもオリヴィエは平然としているのだから。

ヴィヴィオ「ガイさん……………顔がニヤけてますよ」

ガイ「マ、マジか」

ヴィヴィオからジト眼で見られてしまい事故とはいえ、ちょっとシ
ョックだった。

ヴィヴィオ「そ、そんなに見たいですか／＼／？」
ガイ「え？」

ヴィヴィオがスカートの裾を握って頬を赤くして俯いていた。今に
もスカートを上げようとしている。

ガイ「い、いやいやいや！！！！ヴィヴィ！！！！落ち着け！！！！」

それは流石に不味い。俺はヴィヴィオを宥める為にヴィヴィオの肩
を掴んで必死に言った。

ヴィヴィオ「で、でも……………／＼／」
ガイ「いいから落ち着け」

俺は肩に掴んでいた手をヴィヴィオの頭に乘せて撫でた。ヴィヴィ
オは頬を赤くしたまま俺の事を見上げた。

ガイ「俺が悪かった。だからそんな事は絶対やっちゃダメだぞ」
ヴィヴィオ「……………はい、分かりました」

ヴィヴィオは頷いてくれた。
しかし、ヴィヴィオがこんな行動に出るなんてどういった心境で行
ったのだろうか？

オリヴィエ「私はもう少し調べ物を探してきますね」

オリヴィエは無重力の中を移動した。

ガイ「さて俺も、もう少し調べるか」

コロナ「手伝いますね」

リオ「私も手伝います」

ヴィヴィオ「わ、私も」

俺の調べモノに3人は手伝ってくれるようだ。その気持ちは嬉しかった。

俺たちは無限書庫から出て本局の廊下を歩いていた。結局“聖杯

戦争”というものは見つからなかった。

ヴィヴィオ「調べモノは見つからなかったですけど諦めないで下さいね」

ヴィヴィオが俺に笑顔を向けてきた。

ガイ「無限書庫に調べモノが無いものとはな。その事実には驚いたよ」「無限の知識の倉庫」といわれていた無限書庫にも“聖杯戦争”の情報が無い。

ガイ「……………ごめん、ちょっとトイレ行ってくる」
リオ「じゃあ、ここで待ってますね」

ああ、と俺は言って、皆と離れた。

本局に来たのなら調べる物はまだあった。俺はプラグのある場所を探した。

そして、少し歩いた先に広場があり、壁際に何台かのモニターがあった。その下にプラグがあり俺は十字架状態になっているプリムラの下の部分のカバーを取り、刺し込んだ。

端末機能も付いているので本局からデータベースへ潜り込めることも出来る。それ相当のリスクも背負うが。いわゆるハッキングだ。

プリムラ「何を調べるのですか？」

プラグに刺し込んでいるプリムラが聞いてきた。

ガイ「上層部の管理局員の名簿一覧表が欲しい」
プリムラ「プロテクトが厳重に付いています」

モニターにエラーが表示された。やはり調べることはできないか。あまり長いことプリムラを差しておくと思わぬ足が付いてしまう。最後に俺はもう一つだけプリムラに命令した。

ガイ「じゃあ、管理外第97世界の地球生まれの地球出身の管理局員の人を探してほしい。名簿じゃなくてもいい。地球から来たという記録が残っている物があればいい」
プリムラ「了解しました。少しお待ちください」

モニターにはプリムラが動かしているのからか黒い画面にもものすごい量のプログラムが流れてきた。

そして、1つの画面が出てきた。プログラム化されているのでプログラム言語を学んでいない俺の眼では読めない。

プリムラ「該当する人物が複数出てきました。コピーして私の中に保存しておきますか？」

ガイ「ああ、頼む」

了解しました、と言ってプリムラは処理を行った。

プリムラ「終わりました。足は付いていないと思います」
ガイ「と、信じたいね」

俺はプリムラをプラグからとり首にかけ直した。幸い周りには誰もいないのでここに居た事は監視カメラに映っているだけだ。監視カメラから見てもこんな所でハッキングをしている人物がいるとは思われないだろう。普通にモニターを見ているだけに視えるだろう。

ガイ「俺が読めるように言語化しといてくれ。後で見る」

プリムラ『了解しました』

このデータが得られただけでも本局に来たかいがあつた。管理者が管理外第97世界の地球での“聖杯戦争”を知っているのなら、管理者が地球の出身である可能性がある。後で確認しておこう。

俺は来た道に戻り、皆と合流した。

なのは宅

なのはさんの家に戻るとなのはさんとフェイトさんが出迎えてきて

くれた。

フェイト「ガイは何を調べていたの？」

ガイ「え、ええと……………いろいろです」

無限書庫に行ったメンバーはソファに座って、ちよつと遅いおやつを食べていた。

本局に行った時間は約4時間ぐらいだ。今の時間は4時半。まだ、家に帰るのは早いとリオが言ってきたので、ヴィヴィオの提案でなのはさんの家へ行くことに。

そして、俺の隣に居たフェイトさんが今日の話を積極的に聞いてきた。ヴィヴィオ達と一緒に行きたかったのかもしれない。

フェイト「はじめての無限書庫はどうだった？」

ガイ「開いた口が塞がりませんでした」

フェイト「そうなんだ」

フェイトさんが微笑んで笑ってくれた。

ガイ「……………」

俺はついついフェイトさんを魅入ってしまう。フェイトさんを見ると心臓が少し早く動いているのがわかる。

俺はこの人の事が好きなのだろうか？自分の気持ち分からない。

ヴィヴィオ「むっ」

リオ「ん〜」

コロナ「……………」

俺の視界には入らないが、3人の視線が俺を見ている気がしてなら

ない。

フエイト「ん？どうしたの？私の顔をじっと見て？」

ガイ「あ、い、いえ、なんでも無いです／＼」

俺はフエイトさんから視線を外して、誤魔化すようにテーブルに置いてあるお菓子を手にとって食べた。その時に3人と目が合った。3人はすぐに視線をそらした。

オリヴィエ「ガイ、なのはのキャラメルミルクが甘くて美味しいです」

ヴィヴィオ「あ、フリージアさんも美味しいと思いますか？なのはママのキャラメルミルクは格別ですよ」

ええ、とオリヴィエは言つて2人は微笑んだ。2人とも遺伝子レベルは一緒なのだから好みも似ているのだろうか？

なのは「フリージアさん。そう言ってくれると嬉しいな」

なのはさんは評価をただけて嬉しかったのか微笑んだ。

ガイ「ん、いい時間ですね。俺はそろそろ失礼します」

壁に掛けてある時計を見る。5時過ぎ。ちょうど良い時間帯だ。

オリヴィエ「あ、では私も」

俺とオリヴィエは立ち上がった。

なのは「あ、ガイ君とフリージアさんご飯食べていく？」

いえ、と俺は言って断った。帰ってからいろいろとやることがある。

フエイト「送って行くのか？」

ガイ「いえ、大丈夫です。では、失礼します」

オリヴィエ「失礼します」

ヴィヴィオ「またね、ガイさん」

俺とオリヴィエは皆にさよならと言われて、なのはさんの家から出て行った。

コロナ「ガイさん、フェイトさんにメロメロだったね」
リオ「そだね〜」

ヴィヴィオ「フェイトママがライバルだと勝てないよ」

私達はガイさんとフリージアさんが出て行った後、雑談をしていた。なのはママとフェイトママは夕飯の準備をするためキッチンへ。リオとコロナは夕ご飯を食べていくようだ。

リオ「それにあのフリージアさんって人も美人だしガイさんと仲がよさそうだし」

ヴィヴィオ「ライバルがいつばいだよ〜」

コロナ「そうだね」

3人はテーブルに突っ伏して、ため息をついた。

ヴィヴィオ「でも、ガイさん……………今日は何か隠し事をしているような感じがした」

コロナ「ヴィヴィオも思った？」

リオ「え？え？」

私とコロナはガイさんの異変に気付いた。リオは眼を点にして首を傾げている。

ヴィヴィオ「私達とは一歩下がって離れている……………まるで他人のような感じ」

コロナ「うん」

リオ「ガイさんのプライベートがあるからじゃないの？」

そうかもね、と私はリオの言葉に相槌を打って、再び溜息をした。

「ヴィヴィオ、ガイさんの力になれば嬉しいのに。私達はまだまだ力が無い子供だね」

私の言葉に2人は頷いた。しかし、コロナが頷いた後、言った。

「コロナ、でも、これから頑張って力をつけて行くんだよね？」

「ヴィヴィオ、うん!!!」

それを聞いた私は即座に頷いて満面の笑みを2人に向ける。

「ヴィヴィオ、そのためにも来週に行われるアインハルトさんとの対決に頑張らないとね」

そう、来週は再びアインハルトさんとの対決。私の中の全てをぶつけないとね。

私は思考を切り替えた。アインハルトさんに勝てるように頑張らないとね。

リオとコロナが笑って私の方を向いてくれたので私はガッツポーズをして微笑んだ。

マンション

ガイ「プリムラ。データの言語化は出来たか？」

プリムラ「はい、見ますか？」

俺は頷いた。目の前にもモニターが現れた。

オリヴィエ「何かを調べていたのですか？」

ガイ「管理者が誰なのかを調べてた」

俺はモニターを操作して、コピーしたファイルのデータを開いた。

プリムラ「該当した人物は4名ですね。陸士108部隊のゲンヤ・

ナカジマ。時空管理局武装隊、戦技教導隊、教導官の高街なのは。

時空管理局特別捜査官の八神はやて。そして、時空管理局本局、元

帥のNoname」

ガイ「ノーネーム？」

俺は最後に行った人物に疑問を持った。ノーネーム……そのよう

に記録が残されているのだろうか？プリムラの言った言葉にオオム返して聞いてしまった。

プリムラ『名前が無いのか、これが名前なのかはわかりません』

この元帥以外の人物なら知っている。皆、機動六課に繋がっている人物だ。だが、この元帥は全く知らない。元帥と言ったら栄誉元帥のラルゴ・キールではないのか？

ガイ『このノーネームはラルゴ・キール元帥なのか？』

プリムラ『いえ、ラルゴ・キールは別の所に記録が残っています。このノーネームと同一人物である可能性は低いです』

そうか、と俺は言っただけで考えた。地上本部をも掌握することが出来る人物ならこのくらいのランクは必要だろう。表には出てきていない元帥が存在するのだろうか？発表していない人物。それとも上層部のほとんどがこの聖杯戦争を知っているとしたら、結局、俺は手のひらで踊らされているだけだろう。

ガイ『とりあえず、管理者は元帥レベルの人物だという事が分かっただけでも今日の情報収集に意味はあったかな』

俺は今日の行動に結論をつけてモニターを閉じた。

オリヴィエ『ガイ。情報になるかどうかはわかりませんが、面白い物を無限書庫から見つけてきました。』

ガイ『ん？何の情報だ？』

対面に座っていたオリヴィエを見た。部屋に戻ってきたオリヴィエの眼はカラーコンタクトをはずして虹彩異色の眼に戻し、髪形をシ

ニヨンのようにした。オリヴィエの手には一冊の本があった。

オリヴィエ「アーサー王の聖杯探求」です。タイトルに書いてあるようにアーサー王ではありませんが、その側近の騎士たちが聖杯を求め続けている本です。もし、この聖杯が“聖杯戦争”の聖杯と同じものだとしたら、アーサー王や円卓の騎士たちがサーヴァントとして現れるかもしれません。こちら辺の人物の情報を調べておいてもよろしいかと」

その本はコロナが見つけてきてくれた本だ。

なるほど。現れるサーヴァントを予測しておくことも大事だという事だ。準備は万端にしておいた方がよい。

俺は本を手に取り黙読した。確かに人物名と特徴なども載っている。例えば、円卓の騎士の1人であるガウエイン卿。

彼の武器はアーサー王が所持していた“勝利された約束の剣”の姉妹剣であると言われている武器、“転輪する勝利の剣”エクスカリバー・ガラティーンを所持している。

アーサー王の聖剣は星の光を集め、ガウエイン卿の聖剣は日輪の熱線を集めると言われている。

太陽の騎士……とも言われており、正午において最大限に力を発揮させる。

なら、昼に戦わず、夜に戦えばよい。そうすれば太陽の恩恵を受けられないガウエイン卿との戦いがやり易くなる。

ガイ「へ〜、戦争の情報収集するのは重要なんだな」

オリヴィエ「そうですよ、ガイ」

オリヴィエは即答して微笑んだ。

ガイ「なら、アーサー王の騎士たちの情報も集めておくか。ついで

に歴史に登場した重要人物なども調べておくといいかもな」
オリヴィエ「はい、手伝いますよ」

俺は聖杯戦争が始まるまでは情報収集を行った方が良いと分かった。
始まってからでは遅い。準備は万端にしておかなければ。

ガイ「オリヴィエ。聖杯戦争は頑張ろうな」

オリヴィエ「ええ、参加したからには勝ちに行きます」

グツと拳を前に突き出してきた。俺はそれに自分の拳をぶつけた。
殺し合いになるのは必須だろう。だが、俺はオリヴィエが居ると安
心できた。オリヴィエの事を信用しているからだだろう。

聖杯戦争の開始の時間が刻まれていく中、オリヴィエとの絆も少し
ながら繋がった気がした。

七話“複製母体と複製体の交差”（後書き）

ピンと来た方、流石です。

私はF a t eのエクストラをプレイしましたw

あれはなかなか面白かったですね。

アーチャー使えるのが良かった^^

と、まあ、最初から本文の話から脱線してしまいましたねw

ほのぼのな一日にしました。

しかし、未だにヴィヴィオとアインハルトの対決すらいつていない
というね…………orz

何か一言感想がありますとありがたいです。

では、また（・・）／

八話“魔術師と暴君の交差”（前書き）

脳内ではすべてのマスターとサーヴァントを描いています。

それをどうやって自分の筆力で表せるかがこの作品での課題ですね。

がんばって筆力を鍛えていこう。

では、8話目入ります。

八話 “魔術師と暴君の交差”

廃墟した家

アルトリア「聖杯……………」

私はミッドチルダ東部にある森林地帯にポツンと建っている廃墟した一戸建ての中で、木製の古びた丸いテーブルとセットになっている木製の椅子に座っていた。

ゼスト「マスターは聖杯が欲しいのか？」

私の対面の椅子に座っていた男性が凜とした表情で張りのある声で聞いてきた。黒い髪に黒い瞳で巨躯の戦士。年は3〜40歳代だろう。しかし、その瞳は戦いの中で長年培ってきた眼をしている。ちよつとやさつとでは揺らぐことが無い。この家は目の前の男性が別荘で使っていた家らしい。壊されずに残っていたのでしばらくはここを拠点にして動く事になる。

今回の聖杯戦争では私はマスターとして参戦することになった。その証拠に右手の甲に令呪が刻まれていた。彼はマスターを守るために召喚された私のサーヴァント。ランサーのクラスなので槍使いなのだろう。

アルトリア「私の事は普通に名前で呼んでもらって構いません」
ゼスト「そうか。なら、アルトリアで良いか？」

私は頷く。アルトリアは歴史上ではそのように明記されていない。名前が広がっていても私がアーサー王であると知られることは無い。私はゼストの質問に答える。

アルトリア「何でも叶う事の出来る聖杯ならば私は欲しい。王である私の存在を無かったことにしたい」

脳裏に浮かんで来たのは、アーサー王として君臨し続けてきた自分自身の姿。民を想い、行動した結果、誰も付いてくる者はいなかった。

『王は、人の気持ちが変わらない』

円卓を去る間際に残された、あれは……一体誰の言葉だったか。

『王ならば、孤高であるしかない』

そう自らに言い聞かせ、ただ救国の道ばかりを探し求めながら、いったい私は、どれほど多くの者たちの想いを、苦悩を、見過ごしてきたのだろうか？

忠勇の内に散ったガウエインは、使命に殉じたギヤラハッドは、その最後に何を胸に懐いたのか。彼らはもしや、至らぬ王を戴いた事を後悔し、未練を残しながら果てたのではないか？

遂げたかった理想を、救いたかった人々を……私が王であったばかりに、滅び去っていた全てのモノがある。

私は王としての資格は無かった。こんな私はそもそも、王になるべきではなかった。だから聖杯への願いは、その奇跡によって私が王であったことを無かった事にしようと決めた。

ゼスト「……私には王というモノの苦悩というのは分からないが、聞いた限りだとアルトリアは現実から逃げているような印象を感じた。王の責務の重さから逃げ出さたくて聖杯を求めている」

ランサー「……ゼストには私がアーサー王であることを話している。

私の話を聞いていたゼストはその瞳を私から外さず正論をブツけてきた。

アルトリア「……………そうですね。私は王だという事に苦悩して現実から逃げている。全てを無かったことにして、私に従って来ていた騎士たちの無念や怨念から逃げたくて聖杯の奇跡にすがっている」

私は分かっていることなのだがその正論が眩しすぎてゼストから視線を外して斜め下を見る。私を責めているゼストが眩しく見える。だからか、このままゼストに叱ってくれた方が私の中の贖罪という重みも少しは楽になる気がした。

ゼスト「だが、アルトリアという王があったからこそ、円卓の騎士たちが居たのではないか？」

アルトリア「え？」

ゼストは叱るような口調はせず、口調を少し和らげて、相手を労わるような声を私に向けた。

私という王が居たからこそ、その円卓の騎士たちが居た、と？

ゼスト「運命は一度だけだ。だが、この聖杯というものはその運命を変えることが出来る。あった事を無かったことするという事も可能だ。だが、アルトリア。お前はその騎士たちの無念や怨念を無くしたいと思っただけでも、全てが無かったことになるのだから騎士たちの理想や思考などを全て失うという事になるのだぞ？その気持ちを考えて事があるか？」

アルトリア「あつ……………」

全てを無かったことにする。それは、それまでに積み重ねてきたその者たちの理想や思考までも無かったことになる。全てが無くなる

とはそういう事なのだ。

ゼスト「私も昔は“ゼスト隊”という部隊で活動していた事がある。部下も持った。私が部隊長としてやらなければならぬ事は部下へのケアだった。この部下にはこのように接する、あの部下にはこうやれば強くなる、などとな。それによって生じた部下たちの理想や思考がある。部隊長としてそれを失わせるわけにはいかないものだ」

ゼストも王ではないが人の上に立って指示を出していた頃があったらしい。だから、私の願いに対して経験論から真っ直ぐな意見をブツける事が出来たのだろう。私のやり方では結局、騎士たちは救われないと。

アルトリア「……………ゼストは良い騎士です。貴方みたいな者が王になるべきだった」

私は悲しく微笑んでゼストの事を見た。このような者が王になるべきだ。私のような者では王として立つてはならない。

ゼスト「アルトリアも良い騎士だ」

だが、返してきた言葉は私を褒める言葉だった。私は思わぬ返しにキョトンとした表情で顔が固まった。

ゼスト「アルトリアは自分を責めているが、王になっただけの技量、知識などがあつたからこそ王になれたのだ。自分の事を責めているが、だが、それならそこだけは誇りに思うべきだ」

アルトリア「ゼスト……………」

私はゼストの瞳を見た。揺るぎのない強い瞳だ。そのような人物が

私の事を良い騎士と言った。なら、そこだけは誇るべきだろう。

アルトリア「ありがとう」

私は頭を下げた。目の前の人物は私などとは違う。“騎士王”と言われたこともあるが、それは目の前の人物からすれば擦れてしまう。目の前の人物に“騎士王”とつけたい。

だが、気になる。目の前の人物はいったい何者なのだろうと？私は顔を上げた。

アルトリア「ゼスト、あなたはいったい何者なのですか？」

これほど冷静に私の事を分析して把握したのだ。私の事をそこまで理解出来ること言う事は私と同様にかかなりの場数を踏んで来たのだろう。私の言葉にゼストは目を瞑った。

ゼスト「私はもう二度死んでいる」

アルトリア「え？」

二度死んでいる。ゼストの口から思わぬ言葉が出てきたので思わず言葉が出てしまった。だが、その言葉で無理やりだが私とゼストには共通点が存在していることがわかった。

私は二度サーヴァントとして死を迎えた。ゼストも何故二回死んだのかはわからないが、それが私がマスターとして呼び水になったのではないだろうか？

ゼスト「地上本部の罠に陥り、部下を1人失わせてしまい、私も死を迎えた。だが、とある科学者によって私は蘇った。命は短かったが、いい仲間もいた。そして、二度目の死。全てを後輩に託して消えたのだが、こうして再び地面に足をつけて歩く事になるとはな」

ゼストは眼を開けた。その瞳はいつもと変わらない、揺らぎのない強い眼をしていた。

ゼスト「アルトリア。私の願望は……………」

ゼストの願望を私はしっかりと胸に刻んだ。この者はやはり素晴らしい人物だ。主従関係を入れ替えても良いと考えてしまう。この者が王だったら騎士であった私は生涯忠誠を誓えると想ってしまうほどだ。

この者となら聖杯をとれる。何処からきた想いかはわからないが確かな自信があった。

アラル港湾埠頭

アインハルト「……………」

何時になく、アインハルトの表情が引き詰っていた。俺とアインハルトは廃墟倉庫区画へと移動している。これから行われるのはヴィオとアインハルトの二度目の対決だ。

オリヴィエも行きたがっていたが、ノーヴェが来るとわかると行くことを諦めてしまった。

一度、虹彩異色の眼でノーヴェと対面してしまったらしい。それだとバレルの可能性があるので部屋でお留守番してもらおう事にしてもらった。

俺は無限書庫に行った後は歴史に出てくる有名な人物の特徴を調べ続けていた。聖杯戦争まで何も準備しない訳にもいかないのでやることはやろうと決めた。おかげで歴史に関してはかなり知識がついた気がする。

そして、昨日アインハルトからヴィヴィオとの対決する場所に一緒に来てほしいと言われた。俺も2人がギクシャクしているのは気になっていたので二つ返事で返した。

ガイ「緊張しているのか？」

アインハルト「……………ええ」

ガイ「リラックスしとけよ」

俺は笑ってアインハルトの頭を撫でた。アインハルトの表情が少し柔らかくなった気がした。

ガイ「ま、頑張れや」

アインハルト「はい」

そして、廃墟倉庫区画の広場へと進んだ。

ヴィヴィオ「……………」

ヴィヴィオが中央で静かに立っていた。隣にはヴィヴィオのデバイスであるクリスがふわふわと浮いている。

周りにもこの対決を見るのために前回集まったメンツが揃っていた。アインハルトは一度眼を閉じて深呼吸をして、静かに眼を開いた。

アインハルト「お待ちせしました。アインハルト・ストラトス参りました」

ヴィヴィオはこちらを向いた。

ヴィヴィオ「来ていただきましてありがとうございます。アインハルトさん」

ぺこりと頭を下げるヴィヴィオ。それを見てアインハルトはどう受け止めたらよいか分からず困った表情をする。

俺は観客席へと移動した。

リオ「ガイさん、こんにちわ」

コロナ「こんにちわ」

元気な子供たちが挨拶をしてきた。俺も簡単に挨拶をする。しかし、やはり友達が心配なのかヴィヴィオを心配そうに見つめている。

ガイ「ヴィヴィも頑張って鍛えてきたんだろ？毎日特訓したって言うメールが来るよ」
チンク「ヴィヴィオは毎日頑張っていたからな。ノーヴェが自慢していた」

コロナ達の隣には同じくらいの背をしている右目に眼帯をしているチンクがいた。並ぶとチンクもコロナ達と同じ学年なんじゃないかっと思う。

チンク「……………何か変な事を考えていなかったか、ガイ？」
ガイ「い、いや、何も考えていないよ」

俺はチンクから視線を離してヴィヴィオとアインハルトを見た。

ノーヴェ「ここは救助隊の訓練でも使わせてもらっている場所なんだ。廃倉庫だし許可も取ってあるから安心して全力出してもいいぞ」

今回もジャツチをするノーヴェが指揮を取っていた。

ヴィヴィオ「うん、最初から全力で行きます」

ヴィヴィオは浮いていたクリスを掴んで構えた。アインハルトも静かに構えた。

ヴィヴィオ「セイグリット・ハート、セットアップ！！」
アインハルト「……………武装形態」

白と碧銀の光が周り一帯を包んで2人は一瞬にして大人モードになった。アインハルトの大人モードは前見た格好だ。ヴィヴィオの大人モードはなのはさんを少し真似ているからか、サイドテールにし

て黒いインナーに薄い黒く薄い装甲の鎧を着てなのはさんと同じ白いバリアジャケットを羽織っている。

リオ「ガイさんはどちらを応援するんですか？」

ガイ「……………どっちも、だな」

どちらも俺との関わりはある。どちらかだけを応援するという事は出来ない。

ノーヴェ「今回も魔法は無し格闘オンリー五分一本勝負」

ノーヴェは右手を上げた。

ノーヴェ「それじゃあ試合開始ッ！！！」

ノーヴェ、「それじゃあ試合開始ッ！！！」

ノーヴェさんの合図で試合は始まった。構えているヴィヴィオさんを見る。

綺麗な構え……油断も甘さもない。いい師匠や仲間にもまれて、この子はきつと格闘技を楽しんでいる。私とはきつと何もかも違し、霸王の拳を向けていい相手じゃない。

私は静かに構えた。

私はいい師匠や仲間なんてものは存在しなかった。ずっと霸王の悲願を達成するために孤独を貫いてきた。でも、マンションに引越した時に隣に居たガイさんがマンションの使い方をいろいろ教えてくれた。第一印象が優しい人だった。

それだからか、ガイさんと居ると時折、温かい気持ち胸の中に感じた。霸王の記憶でもないのに温かい気持ち溢れてくる。だから、ちよくちよくガイさんとはメールしている。返信が来ると嬉しい。これが仲間っていうのかな？

私は一度思考を切り替えた。今はこんな事を考えている場合じゃない。

でも、結局霸王の拳を受け止めてくれる人物は現れなかった。ガイさんが受け止めてくれそうな気がするが、ガイさんは私との再戦を拒んでいる。理由を聞いてみたら

『俺では霸王の拳を受け止められない』

の一点張り。そんなこと無いのに。たとえガイさんの魔力が低くて

もあの動体視力と反射神経はひけを取らない。もしかしたら受け止めてくれるかもしれないのに。

眼の前の少女はこの霸王の拳を受け止めてくれるのだろうか？

私は気合を入れ直して、ヴィヴィオさんを見据えた。

ガイさんが視ている。うつつ、緊張する。でも、そんな事を考えている場合じゃないよね。

私はアインハルトさんの姿を見据えた。アインハルトさんからはものすごい覇気を感じた。何処に隙があるのだろう。たぶん探しても見つからないと思う。それに凄い威圧感。一体どれくらいどんな風

に鍛えてきたんだろう。勝てるなんて思わない。だけど、だからこそ一撃ずつで伝えなきゃ。

私は走り出した。それに応じてアインハルトさんも走り出す。

ドコンッ！！！

アインハルトさんの右拳が早い。私は腕をクロスしてそれを胸前で受け止める。ものすごい音がした。腕にはピリピリした感覚が残った。なんて重い拳なのだろう。

アインハルトさんはそのまま左拳を顔面に放ってきたので私はそれを紙一重でかわす。再び右拳が襲ってきたがそれを左腕で受け止める。何度か組手を交わしたが、アインハルトさんの肘が襲ってきたのでそれをしゃがんで避ける。アインハルトさんの腹に隙が出来た。私は右拳を構えて放った。

私の全力。私の格闘戦技！！！！

ドコッ！！！！！

その拳をアインハルトさんの腹にクリーンヒットした。

アインハルトはヴィヴィオが放った右ストレートを腹に受けてその衝撃で擦り下がった。ヴィヴィオはそのまま追撃をするため走り寄って左ストレートを放つ。だが、それは簡単に受け止められ、アインハルトからの連撃が飛んできた。アインハルトは冷静に分析している。慌てることがない。

ガイ「……………でも」

俺は2人の表情を見て笑みを零した。

リオ「ん？ガイさん、どうかしましたか？」

隣に居たりオが俺の発言を聞いたのかこちらに声を掛けてきた。コロナも俺の方を向く。

ガゴツ！！！！

そうしてるうちに、ヴィヴィオがアインハルトの拳に合わせて、カウターパンチを放ちアインハルトの顔面にヒットした。アインハルトは下がった。

ヴィヴィオ「はあああつ！！！」

ヴィヴィオが追撃を始める。

ガイ「2人とも楽しそうだな」

コロナ「そうですか？」

リオ「そうかな？」

俺の言った言葉にコロナとリオは理解できていないのだろう。確かに2人は真剣勝負で真剣な表情をして対決をしている。とても楽しそうには見えないだろう。

ガイ「表情は真剣でもなんだか楽しそうな雰囲気が2人から流れているんだよ。気のせいかな？」

俺はアインハルトを見る。真剣な表情をしているがどこか楽しそうに対決をしているような感じがする。見ていて何となくだが。ヴィヴィオは全力を出して楽しんでいるのは目に見えて分かっている。ヴィヴィオはそう言う性格だからな。

これならアインハルトが笑顔を見せる日は近いかもしれないな。ヴィヴィオが何とかしてくれそうだな。

アインハルト「霸王断空拳」

ヴィヴィオ「！！！」

ドコンッ！！！！

と、2人が組手を何合か交わしている内にアインハルトの拳がヴィヴィオの溝に当たり、ヴィヴィオを吹き飛ばして倉庫へ激突した。

ノーヴェ「一本！そこまで！！！」
アインハルト「はあはあ……………」

ノーヴェが試合を止めた。今回もアインハルトの勝ちのようだ。コロナ達がヴィヴィオへと走っていく。たぶんアインハルトが防護を抜かないように気をつけていたから大丈夫だろう。

ガイ「楽しかったか、アイン？」

俺は武装形態を解除したアインハルトに近寄った。その言葉を聞いてアインハルトは俺から目を逸らして答える。

アインハルト「……………この気持ちは楽しいというものなのでしょう？胸の内からうずうずと何かが疼いているような感じがします」
ガイ「ヴィヴィイは積極的だから、消極的なアインとは相性が良いかもな」

アインハルト「わ、私は消極的では……………」

ふらっ

アインハルトの体が傾いた。そのまま俺の体へとぶつかってきた。

ガイ「大丈夫か、アイン？」

アインハルト「す、すいません……………あれ！？」

アインハルトは離れようとしているがうまく力が入らず戸惑っている。

ノーヴェ「ラストに一発カウンターがカスってたろ。時間差で効いてきたか」

ノーヴェが先ほどの最後の場面を解説した。アインハルトの“霸王断空拳”に合わせて、ヴィヴィオがカウンターを放っていた。確かにカスっていたがカスるだけでここまでのダメージだ。ヒットしていたら結果は逆だったかもしれない。

ガイ「ま、ダメージが抜けるまではじっとしてろよ」
アインハルト「……………／／／」

アインハルトは何も言わず俯いてしまった。

ノーヴェ「お前らってやっぱり仲がいいよな」

ノーヴェがあきれた表情でジト眼をしてこちらを見てくる。

ノーヴェ「……………で、ヴィヴィオはどうだった？」

ノーヴェは追及するのをやめて、アインハルトの意見をきいてきた。

アインハルト「彼女には謝らないといけませんん」

アインハルトは俺から離れた。大分ダメージも抜けたのだろう。

そして、目を瞑る。

アインハルト「先週は失礼なこと言ってしまいました。訂正しますと」

ノーヴェ「そうしてやってくれ、きつと喜ぶ」

ノーヴェは片目を閉じて笑った。このような結果になって満足なようだ。

アインハルトはそのまま、ディーチの膝枕で気を失っているヴィヴィオに近づいた。その表情にはさまざまな思考が入り混じっているように見えたが、そつとヴィヴィオの手を掴んだ。

アインハルト「はじめまして……………ヴィヴィオさん。アインハルト・ストラトスです」

前に一度、自己紹介をしたがあれは嘘のアインハルトの姿だった。今は本物のアインハルトが挨拶をしている。

ガイ「それ、ヴィヴィオが起きている時に言っただけよ」

アインハルト「……………恥ずかしいので嫌です／＼」

だが、相手が起きていないと挨拶としての意味がないだろう。アインハルトは俺の言った言葉に対して頬を赤くして嫌がった。

アインハルト「何処か休める場所に運びましょう。私が運びます」

アインハルトは気を失っているヴィヴィオを背負って歩き出した。

ガイ「素直じゃないね」

コロナ「そうですね」

近くに居たコロナが相槌をしてくすくすと笑った。

とりあえず、アインハルトにはヴィヴィオが居るから大丈夫だと思う。霸王の悲願に苦しまずになりそうだ。俺は今回の2人の対決でそう思った。

ミットチルダ都内

2人の対決後、俺は都内へと足を運んだ。アインハルトも付いてくるような事を言っていたが、ヴィヴィオが起きた時に対決した張本人が傍に居ないとダメだろう、と言って、置いてきた。皆も休憩所でヴィヴィオを見ていた。

俺も居てやるべきなのかもしれないが、やることがあるので席を外して貰った。

やることとは都内にある書店や本屋を徹底的に漁ること。

無限書庫に“聖杯戦争”というモノがヒットしないのならこのような所に存在するのではないかと考えて、無限書庫から戻ってきた次の日から行動に移した。いつもは仕事の後なので時間があまりとれなかったが、今日は休日なので残りの時間を全て検索に費やせる。

オリヴィエにも来てほしいものだが、生憎と連絡手段がない。オリヴィエが通信端末を持っているわけもなく、念話もなぜか使えない。仕方ないので1人で検索する事にした。とはいえ、これで何店舗回ったのだろうか？数えるのも面倒になってきたので10以降は数えていない。

これほど探し回っているのに1つも“聖杯戦争”という言葉がヒットしない。

情報操作されているのか？

そんな事さえ思ってしまう。こつも情報が見つからないと探し回った疲労と精神からの疲れで思考が鈍り始める。今日はもう部屋に戻ってゆつくりするべきではないかと、簡単な方へと考えが行ってしまう。

それはダメだ。俺は頭を振って、思考を切り替える。まだ、探そう。きつと何処かに情報は眠っている。そう思いながら、曲がり角に入ってしまった。

????「きゃー!!!」

ドンッ

と、出会いがしらで誰かとぶつかってしまった。その人物は尻もちをついてお尻をさすっていた。

相手は女性だ。黒い髪を黒いリボンでツインテールに縛り、翠の瞳。黒いニーソックスに黒く短いミニスカート。胸元に十字の紋章が付いている赤い服を着ている。

ガイ「すまん、考え事をして周りの注意をしていなかった」

俺はそう言っつて、右手を差し出す。

????「まったく、ちゃんと確認しなさいよ」

その女性は文句を言いながらも俺の差し出した手を握って立ち上がった。背は俺よりも低く、160cm位だろう。見た目はとても良い容姿をしている。眼つきは鋭い。だが、街中を歩いていたら声をかけられるのではないか？

女性はスカートについた埃をパンパンと叩いて叩き落とす。

???「ま、誰しも考えなければならぬ事はあるし、いいわ。今回は無かったことにするわよ。でも、今度こんなことあったらタダじゃおかないからね」

女性は少し怒ったような表情をして俺の事を覗き込んだ。

ガイ「あ、ああ。悪かった」

???「ん、ならよし。それじゃあ、またどこかで会う事があったら会いましょう」

女性は綺麗な頬笑みを俺に見せつけて、人ごみの中へと消えて行った。

ガイ「綺麗な人だったな」

俺は去り際に見せた頬笑みが脳裏に焼き付いてしまった。なのはさんやフェイトさんとはまた違う綺麗な女性。多分俺と同じぐらいの年だろう。幼げさが少し残っていた。

ガイ「つと、検索検索」

俺は頭を掻きながら次の書店へと移動した。

「????? あの人………僅かながら何かを感知した」

私は先ほどの人とぶつかった後、路上からとあるアパートへと移動した。そして、その中に入って、鍵を締める。

「????? 『奏者よ、もう出ても良いのか?』」

頭の中に声が反響した。私は頷く。

シュン

そして、私の目の前に人物が何処からともなく現れた。金髪の髪に翠の瞳。鮮やかな赤のドレスに、随所に施された金の刺繍があり、大きく腰下まで開いた背中中のラインがある。スカートの前が半透明なシースルーになっており白い下着（レオタード状のインナースーツ）が丸見えになっている。

私は最初に見たときにはセイバーだと思った。顔が瓜二つなのだから。だが、実際に話してみると全くの別人だった。

???「しかし、ここも随分と古びた部屋だの、凜よ」

凜「それには同意」

私達は部屋を見渡す。所々ボロが目立つ。天井の一部は穴が開いているし、フローリングではあるが、長年掃除をしていないからかなり汚れが目立っている。部屋の角には必ずと言っていいほどクモの巣も張ってある。

凜「はあ、掃除するわよ、セイバー」

セイバー「なんと、奏者は余に掃除をしると申すか!？」

全く、このセイバーの性格はひどい。召喚してからそれほど日は立っていないが性格はある程度分かった。我儘な王様気質で唯我独尊タイプだ。

だが、真名が何なのか聞こうとするとマスターである私に嫌われたら耐えられないからと真名を隠す。そういう可愛らしい一面も目撃できた。

見た目は前のセイバーに瓜二つだが中が全然違う。顔が似ているからどうもやりづらい時もあるが、割りきることも大事よね。前のセイバーは凜々しくて大人しくて私的に嬉しかったのに。

凜「私だって嫌なんだから、一緒にやりなさい!!!」

セイバー「嫌じゃ！美しいものなら余は好きだがこの汚い部屋は流石に我慢ならん！！！」

凜「だから掃除しなさいつての！令呪を使つわよ！？」

私は長そでの赤い服を腕までまくって、令呪を見せる。同じ場所に同じ紋章が刻まれている。それを見せたからかセイバーは少し大人しくなった。

セイバー「もつたいないことするな。それに、そなたは美しいのだからこのような掃除は家臣の物にやらせておけばよかるう」

凜「……………褒めたって何も出ないからね。それに家臣なんていないわよ」

私は腕まくりしていた服を下ろした。

セイバー「凜も短気でなければ良き術者だと言うのに、性格に難ありだぞ、奏者よ」

凜「流石に貴方に言われたくないわ！！！」

私はセイバーに指をさして怒鳴った。こんな我儘な王様気質で唯我独尊タイプなサーヴァントに言われたくない。

セイバー「余は美しいモノが好きなのだ。英雄、色を好むと言うしな！美少年は良い。美少女はもっと良い。何であれ、美しいものは大好物だ！！うむ、奏者も美少女である」

凜「うっ……………／／／」

そんな事を言われたらなんて返せばいいのよ、バカ。私はセイバーから視線を外した。

凜「わ、わかったわ。私が掃除するからその間は霊体化してなさい
／＼／＼」
セイバー「うむ、任せたぞ」

そう言つて、赤いセイバーは満足したような表情で消えた。霊体化したのだ。

私はため息をついた。家訓に“どんな時でも余裕を持って優雅たれ”を実践するとある。今はとても余裕をもって優雅など保てない。今回の聖杯戦争は巻き込まれた様なものだ。あの第五次聖杯戦争の後、私はアーチャーとの約束で士朗の事を面倒見ることになった。別に士朗の事は嫌でもないしほつとくと勝手に“正義の味方”を指して走り続けてしまう。走り続けるのは別にいいけどちゃんと順序を踏まないと意味が無い。

私はさつそく、学校の放課後に士朗を教室に呼んで魔術の勉強をさせようと思った。そして、薄い赤のかかった短髪に薄い黄色い眼の士朗が教室に入ってきた瞬間、私と士朗の間に大きな“穴”が現れた。

放課後の教室

凜「な、何よこれ……………」

士朗「な、なんだ？」

私達は突然現れた黒い“穴”に驚きを隠せなかった。それは“穴”と言っには変だ。黒い“丸”と言っべきだろう。トンネルの内部の壁が塞がって先が繋がっていないように見えるのだから。

凜「と、とりあえず、害は無さそうね」

士朗「大丈夫なのか？」

士朗が険悪した表情のまま私の所まで近寄ってきてくれた。こんなイレギュラーは困る。

士朗「これは、ギルガメッシュが引き込まれた“孔”に似ている」
凜「でも、あれは無くなったはず。今回の“穴”は聖杯とは関係ないわ」

聖杯はセイバーが破壊してくれた。その中であつたグロテスクな黒い泥も一緒に。正直、あんなもののために、アインツベルン・遠坂・マキリの三家がそれぞれの思惑から協力したことで始まつた聖杯戦争の正体だつたと。

私はあの聖杯の正体を知ったとき絶望感で胸の中に満たされてしまった。

今まで苦勞して求めてきたモノは願望機ではなかった。人を殺すことしかできないモノだったのだから。

「????」それは冬木の聖杯は欠陥品だったからだ
2人「!!!!」

突然、声が教室内に響いた。渋くて低い声、それは一瞬、あの神父の言峰のような声だと思っただが、違う。言峰は私の目の前でランサーの宝具“刺し穿つ死刺の槍”ゲイボルグで心臓を突かれたはず。もはや現世に存在しない。そして、今まで何も行動を起こさなかった“穴”が行動を起こした。

ゴゴゴッ!!!!

塞がっていた“穴”が開いた。そして、中からの吸引力が人が、踏ん張って留まることが出来ないほどの威力で教室内を襲いかかった。窓ガラスは割れ、机などがどンドンあの“穴”の中へと吸い込まれる。

凜「な、なんなのよ!!!!」

士朗「うわああああ!!!!」

無論、私たちもそれに抵抗できるわけ無く“穴”へと吸い込まれた。そして、一瞬にして小さな薄暗い部屋に出てきた。私は何とか着地をした。

凜「あれはなんなのよ、士朗」

私の隣に居た士朗に声をかける……が、その言葉に帰ってくる声が無かった。私は周りを見た。先ほども隣に居た士朗が居なかった。それだけではない。机などが先に吸い込まれたのにそれらも存在しない。この部屋に吸い込まれたモノが何も無いのだ。部屋には何も無い状態。私は不安と恐怖で胸に満たされた。何が起きてもおかしくない状況。周りには頼れる存在の士朗もいない。私の顔に冷や汗をかいているのも分かった。

??? 『なに、そう緊張することではない』

凜「!!!」

シュン

突然、私の前にモニターが現れた。私は驚いた。電子機器全般がダメな私でもわかる。これは現段階の地球の技術力では無理な技術。それが私の目の前で行われているのだ。驚かないわけがない。モニターは真っ暗だが人がいることが分かる。

凜「あ、あなたは誰？」

管理者『私は“管理者”と名乗らせてもらっ』

管理者………聖杯の？

私の脳裏には第五次聖杯戦争の監督者だった、言峰綺礼が浮かんできた。いつも私をコケにしているような表現をしてバカにしてくる八極拳の師匠。

管理者『先ほど言ったはずだ。冬木の聖杯は欠陥品だ』

凜「な、何を言っているの？」

冬木の？なら、聖杯は他にも存在する？

管理者『いろいろ順を追って説明しよう』

管理者からいろいろな話を聞かされた。

冬木の聖杯の正体は“この世の悪のすべて（アンリマユ）”で、聖杯が溜め込む“無色の力”は汚染されて“人を殺す”という方向性を持った呪いの魔力の渦と化して、冬木の聖杯は人を貶める形でしか願いを叶えられない欠陥品であること。

だが、この星のミッドチルダにも聖杯が存在し、“無色の力”のままで存在し、今はマスターが少しずつ参戦していること。

ここは地球と言う星があつた世界ではなく“ワームホール”で別世界にやつて来たことなど。

とてもじゃないが信用できない内容ばかりだ。

私は表情を硬くして考え込んだ。

管理者『今は三人のマスターが登録された』

凜「士郎は何処に居るのよ？」

信用できない奴から聞くのも変だが情報が豊富にあるこいつからは色々と聞けそうだ。同じ“ワームホール”に吸い込まれたのに、出てきたときには隣に居なかつたのだから。

管理者『ああ、あの“贗作”か』

凜「……………今、なんて言つた？」

私の中に怒りの感情がこみ上げて来たのが自分でも分かつた。確かに士郎の“投影”は本物に近い武器を投影することが可能だ。それは偽物ともいえる。だが、モニター越しに映っている管理者は表現を悪くした言い方で士郎の事をバカにしている。

アーチャーに頼まれた士郎をバカにされて私は怒っている。

管理者『あいつもこの世界に来ている。暇があれば探してみるといい』

凜「あなたが私たちを連れてきたんでしょ!!!!」

私は声を高くして怒鳴った。

管理者『前の聖杯戦争で生き残ったマスターが居ると盛り上がると思っただけ。なに、今回の聖杯は“無色な力”を持っている。願望機として申し分ないだろう。安心すると良い』

凜「私は一度も参戦しようなんて……………!!!!」

管理者「だが、喜ぶといい凜。君が願っていたクラス……………セイバ―で聖杯戦争を望めるのだぞ」

私の言葉を遮って管理者は私の事をマスターとして登録しようとしていた。だが、最優のサーヴァントと謳われるセイバーのクラスが私のサーヴァントだったことになる。と気持ちが一瞬揺らいだ。

前回のセイバーが私の純マスターになってくれる。前は一時的だったとは言えセイバーのマスターになったのだ。人前には表情を出さなかったが嬉しかった。

ピキーン!!!!

凜「な、召喚の紋章!!!!」

私の目の前に赤い召喚の紋章が現れた。そして、私の腕に前回の聖杯戦争と同じ形をした令呪が刻まれた。

管理者『召喚は私がやっておいた。クラスはセイバーだが何を引くかはわからんがな』

そして、召喚の紋章から人物が目を瞑りながら地面からゆっくり現

れた。金髪の髪に翠の瞳。鮮やかな赤のドレスに、随所に施された金の刺繍があり、大きく腰下まで開いた背中の中のラインがある。スカートの前が半透明なシースルーになっており白い下着（レオタード状のインナースーツ）が丸見えになっている。

凜「せ、セイバー？」

私はその容姿を見て、前回参戦していたセイバーが脳裏をよぎった。あのセイバーと瓜二つなのだ。あの忠義なセイバーが私のサーヴァントになってくれると思った。

セイバー「問おう。奏者が余のマスターか？」

凜「……………はい？」

だが、その口調で脳裏に浮かんでいたセイバーの姿は消えた。セイバーが“奏者”や“余”などと言った記憶はない。

凜「貴方、セイバーでしょ？」

セイバー「うむ、余はセイバーだぞ」

凜「エクスカリバーは持っているの？」

セイバー「えくすかりばー？」

そのセイバーは私の言った言葉の意味が分からなかったのか首をかしげた。召喚されたセイバーは前回のセイバーではなかった。

凜「あなたはアーサー王？」

セイバー「誰だそれは？」

私はガクつと顔を落とした。前回のセイバーの真名は知らなかったがエクスカリバーからアーサー王だったって事は分かっていた。だ

が、目の前のセイバーはエクスカリバーを知らないと言っていた。

凜「私が貴方のマスターよ。で、あなたの真名は何？」

私は気を取り直して腕に刻まれた令呪をセイバーに見せた。セイバーはそれを見て私がマスターだと分かって頷いた。だが、

セイバー「……………どうしても真名を答えなければならぬか？」

凜「ええ、パートナーである貴方の真名を知っておいた方が聖杯戦争を有利に進めるわ」

セイバー「だが、断る！！！」

凜「はあ!？」

セイバーは真名を明かそうとはしなかった。

セイバー「余の真名を明かして美しいマスターに嫌われたら耐えきれん……………／＼／」

セイバーが頬を赤く染めて視線をそらした。私に嫌われたら耐えきれない？

凜「セイバー……………貴方“反英雄”なの？」

“反英雄”とは悪によってかえって善を明確にし世を救ったもの。忌み嫌われる存在でありながら崇め奉られることになった者を差す。

セイバー「……………かもしれんな。余は“暴君”とも呼ばれていた事がある」

セイバーからの覇気が少し小さくなった気がした。セイバーは眼を

閉じた。このセイバーは“反英雄”なのかもしれない。真名をマスターに教えて関係を断ち切られるのを恐れているのだ。

凜「……………分かったわ。真名は聞かないであげる」

セイバー「すまぬ、奏者の心使いに感謝する」

口調から王族であることは間違いない。“暴君”と“王族”で後で調べてみる必要があるわね。

管理者「話は纏まったか？」

と、セイバーが現れてから今まで声を出さなかった管理者が問いかけてきた。

凜「正直、聖杯戦争はもうやりたくないんだけど……………土朗はこれがまだ続いていたと知っていたらきつと参戦してくるわ。私は土朗を止めないといけない」

管理者「ふつ、では、遠坂凜は四人目のマスターだ。サーヴァントのクラスはセイバー。登録しておこう」

モニター越しから小さく笑い声が聞こえる。何か苛立ちを覚える。

セイバー「貴様、マスターの侮辱は許さんぞ」

と、セイバーの左手にはいつの間にか赤と黒のラインの捻れた特徴的な剣が握られていた。剣には銘として“regnum caelorum et gehenna”と刻まれているのが確認できた。意味は、確かラテン語で“天国と地獄”。

その捻じれた特徴的な剣は精密に鍛錬されて作られたモノだろう。

管理者「ふつ、貴様の剣は怖いな。モニター越しでもその剣からのオーラがこちらに伝わってくる」

セイバー「隠れていないで出てきたらどうだ？」

管理者「生憎とまだ表に出れないのでな。では、凜よ。次の連絡した時は聖派戦争の開始の狼煙だ。それまで住む場所がないと思うので、1つ部屋を貸そう。好きに使い」

凜「あ、ま、待ちなさい！！！」

薄暗い部屋からモニターが消えた。

凜「まったく、またこれに参戦するとはね」

セイバー「奏者は二度目か。なら心強い」

ありがと、と私は相槌を打って周りを見渡した。ドアがポツンとあった。他には何も無い。窓も電球も。

凜「変な場所ね。それに……………」

私は目を瞑って意識を集中した。大気中に存在する魔力の量が測れた。その量は地球にあった魔力とは比べ物にならないほど膨大だ。

“魔術”の特性は、術の構成を練る際に、自分以外の魔力……………要は大気中に存在する魔力を集めて、自分自身の魔力と一緒に練り上げる。それを制御することによって初めて“魔術”というモノを扱う事が出来る。

私たち魔術師は“魔術”を秘匿で扱う事によって、魔術師を増さず大気^{マナ}の魔力を減らさないようにしている。それでも地球の大気^{マナ}の魔力は減り続けていた。

だが、ここには膨大な量の魔力^{マナ}が殆ど手付かずの状態だ。

凜「……………今回の聖杯戦争は頑張っ行ってける……………かな」

魔術師は自らの許容量を超えた魔術を使つてはならない。それは術者の身を滅ぼ諸刃の剣。

私自身の許容量を増やすには時間がかかる。その代りに宝石に魔力を蓄えておくことはできる。これほどの膨大な量の魔力だ。^{マナ}私自身を強化して行ければ“魔術”を強くしていける。

私はこれからの行動の算段を考えてそして、微笑んだ。マスターがサーヴァントに敵わないなんてことはない。士朗だつてサーヴァントと渡り合えたのだから、私にだつて。

セイバー「うむ、余のマスターは頼もしく思えるぞ」

凜「ええ、しっかり働いてもらうわよ。セイバー」

セイバーは強く頷いた。そして、霊体化して消えた。

私はドアへと足を進めた。そして、ドアノブには一切れの紙が張りついていた。それを見るととある場所までの地図が書かれていた。たぶん、これから使う部屋への道筋だろう。

凜「あのバカも探さないかね」

私はため息をつきながら、ドアを開けた。眩い光が私を包んだ。

アパート

凜「やっと、終わった……………」

私はモップに体重をかけてはあ、と疲れた息を吐いた。部屋はだいぶ綺麗になった。1人暮らししていくには丁度良い広さだ。

セイバー「マスターよ。ご苦労であつた」

凜「やっぱり、あんたにもさせるべきだつた」

赤いセイバーが姿を現した。私がすべてやると言ってしまったので最後まで私1人でやったが、やはりこのサーヴァントにもやらすべきだつた。

先ほどの行為は後悔している。

凜「しかし、あの管理者つてやつはどこまで“聖杯戦争”の事を知っているのかしらね」

私は自分の姿を見た。黒いニーソックスに黒く短いミニスカート。

胸元に十字の紋章が付いている赤い服。これは前回の“聖杯戦争”の時に浸かっていた服だ。教室の放課後に“ワームホール”に入っただので制服姿のままだったが、この部屋に来ると丸いテーブルの上はこの服が畳んで置いてあったのだ。それとこの世界の通貨なのか、お金がいくらか置いてあった。

セイバー「まあ、それが戦闘服なら良いではないか。では、さっそく豪華なご飯を食べようではないか」

凜「駄目よ。ここにあるお金しかないんだから節約していかないと」

この世界の通貨は分からないがあまり多くは置いていないだろう。宝石を買えたら買ったかったが、学生鞆の中にある宝石しかない。

凜「はあ、どこの世界に行っても節約するなんてね」

セイバー「余は儉約などやったことない」

凜「あんたに聞いていないわ」

聖杯戦争が始まるまではまだ時間はある。それまでに私自身をどれくらい強化できるか。それに、目の前のサーヴァントの正体も知っておきたい。

凜「ねえ、セイバー。あなたの真名はやっぱり聞いちゃ駄目？」

セイバー「すまぬ、余の真名は教えることはできん。だが、時が着たら必ず真名を教えよう」

そう、と私は相槌を打った。

凜「なら、それ相応の働きをしなさいよ」

セイバー「うむ、マスターの期待に添えよう」

セイバーは自信のあるような表情をして強く微笑んだ。
確かに腕には自信がありそうね。

凜「さて、それじゃあ、いろいろ準備をしないとね」

私は今後の活動を赤いセイバーと一緒に考えた。

八話“魔術師と暴君の交差”（後書き）

f a t e / e x t r a から赤セイバー参戦しました。

ええ、あの技を描写したかったのですw

やっている人はわかる。やっていない人は私の筆力で想像してね（無理言っなw）。

赤セイバーとの対決する人物はもちろん……。

何か一言感想がありますとやる気が上がります。

今後もこの作品を読んでくれたら幸いです。

では、また（・・）／

九話“日常と勉強の交差”（前書き）

一度、章を分けたほうが良いかなって思っている。

日常編と聖杯戦争編に。

では、九話目入ります。

九話 “日常と勉強の交差”

マンション 夜

ガイ「うゝあゝ……………はあ」

俺は椅子に座って机に向かっていたが長時間座っていたせいで腰が痛くなって、奇怪な声を出して気力の無いため息をつきながら机に突っ伏した。

オリヴィエ「根を張りすぎですよ、ガイ」

同居人であるオリヴィエがテーブルの前に座って紅茶を飲みながら注意してきた。

机の上は開いている本が散乱している。無限書庫から戻ってきた日から一週間ぐらい経つが“聖杯戦争”の情報が全くない。都内の書店や本屋を全て漁ってきたが何処にも情報は無い。

歴史上の重要な人物を調べてはいるが、やはり根本的な“聖杯戦争”の情報が無いという事が心に残る不安を拭えないでいる。

ガイ「それでも……………」

俺は机から起き上がってオリヴィエの方を見る。

紅茶を優雅に飲む姿は王族の雰囲気を出している。そんなオリヴィエを見てみると心に安堵感を覚える。

オリヴィエは俺の視線に気づき、こちらに顔を向ける。

ガイ「オリヴィエが居てくれると安心するかな」

オリヴィエ「ええ、マスターを守ることがサーヴァントの役目でもあります」

オリヴィエは優しく相手を労わるような笑みを向けてくる。俺も笑って、椅子から立ち上がった。しばらく座っていたため、血行が少し鈍っているのが分かった。腕を思いっきり伸ばして、体の緊張を解す。

プリムラ「マスター、メールが来ています」

首に下げていたプリムラからメール着信が来たと教えてくれた。俺の目の前にモニターが現れる。

差出人……………高町ヴィヴィオ

件名……………勉強会

本文……………こんばんは、ガイさん、ヴィヴィオです。実は来週から前期試験が始まるので、勉強をしているのですが、良かったらコロナとリオを連れてガイさんのマンションで勉強会をしたいと思います。ガイさんに勉強を教わりたいですがダメでしょうか？

ガイ「勉強会？」

ヴィヴィオ達がウチに来て勉強会をしたらしい。わざわざ俺のところでやる意味があるのだろうか？

オリヴィエ「ヴィヴィオ達がこの部屋に来るのですか？」

と、モニターを覗き込んできたオリヴィエが質問してきた。

ガイ「俺なんかよりも、もっと勉強出来る人の所でやればいいと思うんだがな。なのはさんに教えてもらうのが一番だと思うが」
オリヴィエ「ヴィヴィオはここが居心地いいと思っているのでは？」

隣にアインハルトも居ますし」
ガイ「ああ、なるほど」

オリヴィエの言葉に俺は納得した。ヴィヴィオはアインハルトの事を気にかけている。もっと仲良くなりたいのだろう。そのために近くに居る俺の所に来たがるのも説明がつく。

この前の2人の対決はオリヴィエに話をしてある。オリヴィエは自分の複製体であるヴィヴィオとクラウドの子孫であるアインハルトが仲良くなったことはオリヴィエ自身も嬉しいのだろう。この話をした後、オリヴィエはしばらく上機嫌だったのだから。

ガイ「ま、明日は仕事休みだしな。別にいいか」

俺はモニターに入力をした。

To.....高町ヴィヴィオ

件名.....Re:勉強会

本文.....ああ、ウチに来てもいいよ。なんなら、アインも呼んでおこうか？

アインハルトも呼ぶ返信を書いた。そして、プリムラに送信するよ
うに命令した。すぐに返事が来た。

差出人.....高町ヴィヴィオ

件名.....Re:Re:勉強会

本文.....はい、ありがとうございます！！アインハルトさんも呼ぼうとしたのですが、まだちょっとメールを出し辛くて。いつかは気軽にメール出来る仲になりたいですが、今回はガイさんにお願
いします。では、朝の九時頃にお伺いしますね。それでは、おやす
みなさい。

アインハルトはあまり人と接したことが無いからか、無邪気に近寄ってくるヴィヴィオにどう接したらよいか分からないのだろう。だから少し離れて接しているように見える。なのでヴィヴィオは負い目を感じて、気軽に接しずらくなっているのだろう。

明日の勉強会で気軽に話せる仲になればいいけどな。何はともあれ、明日の予定は埋まった。

オリヴィエ「ガイはたまに息抜きをするべきですよ」

ガイ「……………そうだな」

調べものも全然進まないし、たまには息抜きをするのもいいかな。だが、この“たまに”が“いつも”にならないようにしないと。

ガイ「たぶん一日勉強会すると思うからお昼ご飯のおかずを買いに行かないと」

冷蔵庫の食材は明日の朝食でちょうど切らすぐらいの量だ。新たに買う必要がある。

ガイ「まだ、食料店は開いているかな」

壁に掛けてある時計を見る。まだ食料店は開いている時間帯だ。今から行ってもまだ間に合う。

オリヴィエ「私も行きます。聖杯戦争がまだ始まったわけではないですが、注意はしませんと」

ガイ「ああ、心強いボディーガードだ」

俺は笑って、財布を持って部屋を出た。オリヴィエも紅いカラーコ

ンタクトをつけて立ち上がり俺の後をついてくる。

ガイ「っと、アインにも連絡しとかないとな」

ドアを閉めてから先ほどアインハルトも勉強会に誘う事になっていたのを思い出した。メールよりもすぐ隣にあるインターホンを押した方が早い。俺は隣のインターホンを押した。

ピンポーン

アインハルト「はい。あ、ガイさん」

少ししてアインハルトがドアを開けて顔を出てきた。青いパジャマ姿で髪を解いているからか碧銀の髪をすべて下ろしている。風呂に入った後だから顔も少し赤く髪がしっとりとしているのがわかる。髪をおろしたアインハルトはまるで別人だった。オリヴィエもツインテールにした時があっただが、女性は髪形で印象が変わることが良く分かる。

アインハルト「あ、あのガイさん？」

顔を合わせてから一度も発言をしていない俺に困ったような表情をして俺の事を見上げてきた。

ガイ「あ、ああ。悪い。アインの髪型が変わるところも印象が変わるんだなって思ってた。髪を全て下ろしているアインも結構可愛くなって思った」

オリヴィエ「ええ、私も今の髪形は可愛いと思います」
アインハルト「え、あ、ありがとうございます／＼／」

俺とオリヴィエの評価にアインハルトはモジモジしながら頬を赤く染めて顔を伏せてお礼を言った。やっぱりアインハルトのこういう表情は面白い。

ガイ「つと、話がずれたな。アイン。明日、俺の部屋に来ないか？」
アインハルト「えっ／＼／？」

アインハルトは未だに真っ赤にしている顔で俺の方を再び見上げる。あまり表情は変わらないが満悦そうに何かを期待しているように見えた。

ガイ「ヴィヴィ達が俺の部屋で勉強会をするんだとさ。アインも誘った方がいいと言つてな。Set・ヒルデ魔法学院は来週から前期試験があるんだろ？」
アインハルト「……………」

だが、俺の発言でアインハルトの表情から期待感は無くなり、はあ、とため息をついた。

ガイ「ん？アイン？」
アインハルト「いえ、なんでもありません」

俺では今のアインハルトの表情が読み取れない。

アインハルト「では私も明日、ガイさんの部屋にお邪魔します。時間は何時ごろですか？」

ガイ「ああ、9時過ぎにでも来てくれれば」
アインハルト「わかりました。ところでこれから仕事に？」

俺は家で寛ぐような服装ではなく、航空部隊の服を着ている。俺は

798航空部隊から帰宅後、着替えずに上着だけを脱いで調べモノを調べていた。だから、アインハルトに誤解されている。

ガイ「たぶん勉強会は一日中やると思うから皆の昼飯の食材を買いに行くところだ」

アインハルト「そうですか」

アインハルトはチラリと両眼とも紅い眼をしているオリヴィエの方を見る。

アインハルト「あの、私も同行してもよろしいですか？」

ガイ「ああ、構わん。フリーといろいろ話すといいさ」

アインハルトの視線の動きでオリヴィエと話をしたのだと分かった。

そして、少し待っててください、とアインハルトは言ってドアを閉める。

オリヴィエ「……………」

ガイ「ん？どうしたフリー？」

ふと、オリヴィエを見るとさまざまな思考を巡らせているからか表情を硬くして、アインハルトが閉めたドアを見つめていた。

オリヴィエ「ガイ、私は過去の人物です。アインハルトが求める“聖王”は昔に死んだ私ではなく今を生きているヴィヴィオです。私に気持ちを向けてはいけない」

ガイ「そう思いつつもアインの気持ちを無碍に出来ないんだろ？」

オリヴィエ「……………はい」

オリヴィエは答えの出ない問題に表情を険しくして俺の問いに素直に答える。

ガイ「でも、時間の問題だと思うよ」

え？、とオリヴィエは言っただけで硬くなっていた表情を少しだけ柔らかくして俺の方を見る。

ガイ「フリーは2人の対決を見ていないからな。俺はあの2人が対決していた時、とても楽しそうに見えたよ。表情には表れなかったけど雰囲気は和やかだった。たぶん近いうちにヴィヴィとアインは良い友達になるよ。ヴィヴィは気持ちがあっただけだから」

オリヴィエはまだ理解しがたい様子だ。実際に対決シーンを見ていくわけではないからな。アインハルトとヴィヴィオが仲良くなった光景を見たらオリヴィエは安心するだろう。

アインハルト「お待たせしました」

ドアが再び空いて、私服姿のアインハルトが出てきた。髪もまた特徴的なツインテールにして、左側に大きな赤いリボンをつけている。髪を全て下ろしているアインハルトは斬新だったが、いつものアインハルトの方がやはりいい。

ガイ「んじゃ、食材買いに行くか」

俺の言葉に2人は頷いた。オリヴィエの戸惑いも分からなくはない。過去のオリヴィエが現代のクラウスの子孫のアインハルトと共に居るべきではない。アインハルトは同じ時間軸のオリヴィエの複製体

であるヴィヴィオと居るべきだ。決してオリヴィエではない。

次の日

俺の部屋は1人暮らしをするには丁度良い広さなのだが、今は俺も合わせて6人いる。5月も中旬。流石にこの人数では部屋に熱気が籠ってしまうので、エアコンを使って空調を調整して快適な温度に保った。

テーブルにはヴィヴィオとコロナとリオとアインハルトの教科書やノートが開いていた。皆、ペンを走らせている。

俺は椅子に座って、テーブルを囲んでいる皆の方を見て、オリヴィ

エはベッドに腰掛けている。

だが、勉強している初等科組は何やらそわそわして勉強にあまり集中していない。部屋に入ったときからそわそわしている。

ヴィヴィオ「というか……………」

ヴィヴィオが走らせたペンを止めて、驚いた表情でオリヴィエの方を見る。

ヴィヴィオ「今までスルーしていましたが、フリージアさんはガイさんと一緒に住んでいるんですか？」

オリヴィエ「え？私ですか？」

ガイ「……………ああ」

コロナもリオもペンを止めてヴィヴィオの言った言葉を肯定するように首を縦に振って、オリヴィエに期待と不安の入り混じった表情で見つめていた。

そういえば、ヴィヴィオ達にはオリヴィエがここに住んでいると言っていないかった。

ヴィヴィオ達が部屋に入った時に普通にオリヴィエが居て、何かを言いそうだったがアインハルトがすぐ来て、そこから聞くタイミン
グを失っていたのだらう。

ガイ「フリーはただの居候かな」

ヴィヴィオ「ただの……………」

コロナ「居候……………」

リオ「……………だつて!？」

初等科組は目を大きく見開いて驚いた様子だった。しかし、アインハルトが表情を変えず発言してきた。

アインハルト「……………フリージアさんはガイさんの家にホームステイしてきたんです」

決してこちらに視線を移さず、ノートにペンを走らせている。アインハルトはうまく話を合わせてくれるようだ。

ガイ「言い方が悪かったな。フリーはホームステイ。このミットチルダの文化を学びにやって来た」

ヴィヴィオ「ホームステイ……………」

コロナ「それでガイさんと……………」

リオ「一緒になれた……………」

初等科三人組は何を考えているのか俺にはもはや理解できない。俺は椅子から立ち上がって四人の居るテーブルに顔を出す。

ガイ「Set・ヒルデ魔法学院って意外と難しい事やってんだな」

俺はヴィヴィオのノートを見た。そこに書かれている数式は理解は出来るが、それは俺が訓練校の時に習ったモノだ。訓練校は一般レベルの中等科辺りの知識から教えられるが、この数式はその一般レベルの中等科二年ぐらいのレベルだ。

ヴィヴィオ「フリージアさんはガイさんのホームステイ……………」

俺がテーブルの近くまで来たのに全く気づかず未だにぶつぶつと言っているヴィヴィオ。コロナもリオも同じだ。

俺ははあ、とため息を一回ついて両手を叩いた。

三人「わっ！！！！」

乾いた音が部屋に反響する。弾けるような一瞬の音が自分の世界に入っていた三人を現実に戻すことが出来た。

ガイ「勉強会をしに来たんだろ？」

ヴィヴィオ「う、うん……………ゴメンなさい」

ヴィヴィオは俺の話を聞いていなく、本来の目的である勉強会をしていない事に対して悪いと思ったのか小さく縮こまってしまった。

ガイ「ま、いいけどさ。それにアインの居る中等科もやっぱり高いんだな」

アインハルト「え？」

アインハルトは話が振られるとは思わなかったのか、ペンを止めて戸惑った表情で俺を見た。アインハルトのやっている問題は一般レベルの高等科レベルの問題だ。ここら辺まで来ると教えられるかちよつと怪しい。

ガイ「アインのレベルになるとちよつと俺では教えることが難しくなるかも」

アインハルト「あ、い、いえ。ガイさんの分かる範囲で教えてもらえれば大丈夫です」

ガイ「……………」

まるで最初から俺の事に対して期待して無さそうな言い方だ。そうなるうちよつとアインハルトの問題を解いてみたくなる。

ガイ「アイン、ちよつと見せて」

アインハルト「あっ!？」

俺はアインハルトからノートを取って、最初のページを開くためパラパラと捲る。

アインハルト「ま、まっつて下さい!!!」

ガイ「ん？」

俺は最初のページへが開いたと思った瞬間、真横からありえない速度でアインハルトの手が現れて一瞬にしてノートが視界から消えた。そのありえない速度に俺は何が起きたのか判断できなかった。

アインハルト「か、勝手に人のノート見ないでください／＼／＼」

ガイ「Set・ヒルデの中等科は何をやっているのか気になったから見たかったんだが」

アインハルト「……………こ、ここには……………／＼／＼」

アインハルトは顔を真っ赤にしてギユウツとノートを胸に押し当てる。それほど見られなくなかったのだろう。

そんな行動をすると何か悪かったような罪悪感が生まれる。

ガイ「悪い。自分が書いたモノを見られたくないよな」

アインハルト「……………え、ええ／＼／＼」

俺はアインハルトに謝り、中等科の教科書をパラパラと捲った。

ガイ「……………まあ、この教科書ぐらいなら何とか教えられるかな。確か訓練校で習ったノートが本棚に……………」

俺は立ち上がって本棚から訓練校に使ったノートを何冊か抜き取る。そして、アインハルトに高等科クラスで使ったノートを、ヴィヴィ

才達には中等科クラスで使ったノートを渡した。

ガイ「俺が使っていたノートだ。たぶん参考になると思う」
リオ「ありがとうございます!!!」

ここ一番に元気にお礼を言ってきたリオ。よほど難しかったのだろう。俺のノートを鷲掴みにして捲る。

リオ「うわ、ガイさんって几帳面なんですね」

ガイ「講義中は聞いたこと、ためになる部分とかをノートに写していただけだ。後で読み返すためにな」

コロナ「取っても分かりやすいです」

ヴィヴィオ「うん。そだね」

初等科組は満足な様子だ。ヴィヴィオとリオは俺のノートを見ながら自分の問題を見比べて、コロナは俺のノートからいろいろとメモを取っている。

オリヴィエ「ガイのノートが好評ですね」

ガイ「この学院はレベルが高いしな。何かしらの参考書があればある程度は頑張れるだろ」

俺はチラリとアインハルトの方を見た。ノートを渡した初等科組は満足げな表情に対して、アインハルトは俺のノートを凝視したまま動いていない。いや、眼だけは動いている。

アインハルト「すごいですね。事細かく書かれていて、参考になります」

アインハルトは尊敬の眼差しを俺の方へ向けて感心した表情を浮か

べていた。

まあ、訓練中に事細かにとったノートが皆に役に立ててよかった。その後もお昼まで俺のノートが役に立ち、たまに質問されたけど答えることが出来た。

ガイ「さて、そろそろ昼か。何か食うか？」

俺は壁に掛けてある時計を見る。そろそろ午になる時間だ。俺は昨日買ってきた食材を思い出して何の献立にするか考えながら皆に聞いた。

ヴィヴィオ「あ、もうお昼だ」
コロナ「そうだね」

皆も時間がお昼になる時間帯だと知った。それほどまで勉強に集中していたのだろう。

リオ「ガイさん、私たちはお弁当を持ってきているから大丈夫だよ」
ガイ「ん？ そうなのか？」

三人は頷いて鞆から可愛いお弁当を取り出す。事前に用意してあるのなら昨日はそれほど食料を買わなくて良かったかな。まあ、食料はほぼゼロだったし、しばらくは保てるだろう。

アインハルト「では、ガイさん。作るのは三人前で大丈夫かと」
ガイ「そうだな。俺とフリーとアインの三人分だな」
三人「あっ」

と、俺の発言に初等科三人の声が被った。三人とも何かを分かったような何かを見落としていたような表情だ。

ガイ「ん？ どした？」
ヴィヴィオ「あ、あの……………」
オリヴィエ「ガイ、お腹が空きました。早く頂けると嬉しいのですが」

ヴィヴィオが何かを言おうとしたがオリヴィエが割り込んできた。それほどまでにお腹が空いているのだろう。

ガイ「ああ、わるい。今、作るから」

アインハルト「私も手伝います」

腹を空かせているオリヴィエのために俺とアインハルトはキッチンに入った。三人分なら簡単に作れるオムライスにすることにした。アインハルトも賛成した。

冷蔵庫から卵、玉ねぎ、ウインナー、ケチャップを取り出す。

コロナ「ガイさん」

と、キッチンにひょいと顔を出すコロナ。

ガイ「どうした？」

コロナ「……………わ、私たちもガイさんの料理を食べてみたいのですがダメですかノノノ？」

ガイ「アインも作るぞ」

コロナ「あ……………」

アインハルトの事を忘れてしまい、申し訳なさそうにしてアインハルトに頭を下げる。アインハルトはたいして気にしていないようだ。

ガイ「んじゃ、コロナ達はお弁当があるからオムレツでいいか？流石に作ったものを食べないわけにはいかないだろ？」

コロナ「はい、ありがとうございます」

コロナは満面の笑みを浮かべて再び頭を下げる。オムレツを食べられることに嬉しかったようだ。

アインハルト「六人前ですね」

ガイ「少し時間がかかるな」

俺とアインハルトは調理を始めた。

そして、二十分後。オムライス×3つとオムレツ×3が出来た。アインハルトの料理の腕前もなかなかのモノだった。卵を溶くときに隠し味でマヨネーズに水を少量入れるという発想は思い浮かばなかったが、そうすることで卵がふつくらした。

アインハルトが調味料を調整した卵で作ったオムライスを見ているととても美味しそうだ。お腹が空いてしまう。

ガイ「お待たせ」

アインハルト「お待たせしました」

テーブルにオムレツ×3とオムライス×2と並ぶ。あと一つはスペースの問題でおけないので机の上に置いた。俺が食べる分だ。そして、皆が席に着く。

6人「いただきます」

皆が一口、俺とアインハルトが作った黄色いモノを食べる。

ヴィヴィオ「美味しいです!!!アインハルトさん、ガイさん」

コロナ「うん、このふつくらとした卵が美味しいです」

リオ「ぽっぺたが落ちる」

オリヴィエ「スプーンが止まりません」

料理をしていない人からは高評価を貰った。これは結構嬉しい。心の底から満足感がこみ上げてくる。アインハルトもそのように感じているのか頬を赤くしながら戸惑っていた。

確かにおいしい。アインハルトのアドバイスが良い料理を作れた。

ガイ「さ、これを食べて午後も頑張って勉強をしていこうか」

俺の言葉にオリヴィエ以外の皆が頷いた。

オリヴィエ「そう言えば、ガイ」
ガイ「ん？」

俺は昼食で使った食器を洗っている所にオリヴィエに呼ばれた。

オリヴィエ「今まで気になっていたのですが机の隣にあるピアノは使っているのですか？ガイが弾いている姿を見たことが無いです」

ガイ「あゝ、あれか」

机の隣には電子ピアノが置いてある。これなら場所も取らないし、ヘッドホンを装着すれば音が漏れることもない。ここ最近、ごたごたして弾いている暇が無かった。

ガイ「たまに弾くよ」

オリヴィエ「ではその演奏を聞いてみたいです」

ガイ「……………あんまり人前では弾きたくはないんだがな」

オリヴィエ「いえ、ぜひ聞いてみたい」

オリヴィエは音楽が好きなのか、積極的に押ししてくる。まあ、久々にピアノの音を聞くのも良い息抜きになるか。

ガイ「わかった。少し待つてな」

オリヴィエ「楽しみにしています。皆にも伝えておきますね」

オリヴィエはキッチンから離れてダイニングへ戻った。俺も皿洗いを終わらせてダイニングに戻る。

ヴィヴィオ「ガイさん、ピアノ弾いてください」

ガイ「わかった」

ヴィヴィオ達が期待感を持った眼をこちらに向けてワクワクした表情で待っていた。

最後に弾いたのはこの前ヴィヴィオ達が遊びに来た時だ。それから聖杯戦争に足を突っ込んで心に余裕があまり持てなかった。ピアノを弾くという考えが無かった。まだ、このような日常に居るならピアノを弾くという考えがあってもいい。

俺はピアノの前の椅子に座った。深呼吸を一回して両手をピアノに

添えて眼を瞑った。そして、静かに演奏を弾き始めた。

）
）

ガイの弾いたピアノの音が体中に静かに波紋のように響き広がっていく。ガイの演奏はゆったりしていて、聴いているこちらが気持ち良くなる。眼を瞑ると山の中に自分が居て、近くに流れている川の音が聞こえてくる風景が脳裏に浮かぶ。

曲は知らないが、それでも音の中にガイの想いが入り混じっているのがわかる。この曲をミスらずにちゃんと聞かせたい、そんな責任

感ある想いがわかる。

私はクスツと笑い眼を開けた。そんな肩を硬くして弾かなくてもよいのに。

周りを見るとヴィヴィオもコロナもりオも眼を瞑り、脳裏に先ほど私が思い浮かべていた光景を思い浮かべているのか、うつとりした表情をしている。よほどガイの演奏が心地よいのだろう。

アインハルトはその虹彩異色の眼を開いたままガイを凝視していた。その表情は私でも読み取れない。

アインハルト「……………ガイさん」

その言葉もどのような感情を込めて言ったのかもわからない。そして、眼を瞑って曲を聴く事に専念した。アインハルトの気持ちはどのようになっているのかはわからないが、それでも曲を聴いている時は私ではなくガイに気持ちを寄せている。それは良い事だ。過去の存在である私よりも現代に存在する人たちに気持ちを傾けて欲しい。これが私のアインハルトに対する思いだ。

私も再び眼を瞑る。先ほどの光景は浮かんでこなかった。そのかわり、昔にクラウスがピアノで弾いてくれた光景を思い浮かべた。

王宮の一室にランドピアノが真ん中の少し高い段差に置いてあり、演奏者が披露する場だ。そこにクラウスがピアノを弾いて、私は近くの椅子に座ってその心地よい音色に心を奪われていた。戦時中とは思えないほどほのぼのとした一面だが、だからこそ、この記憶が印象深く残るのだ。

オリヴィエ「クラウス……………」

私は誰にも聞こえないように小さくボソツと共に笑い共に武の道を歩んだ者の名前を言った。

ガイ「このぐらいやっとならば大丈夫だろ」
ヴィヴィオ「うん、とても勉強になりました」

時刻も夕方どき。ピアノの演奏の後は勉強に専念した。俺のノートも有効活用してくれたので最低でも八割は取ってきてくれるだろう。

ガイ「んじゃ、明日からがんばれよ」

リオ「はい！！！！ありがとうございます！！！！」

一番元気なリオが元気よく挨拶をした。あんなに勉強漬けだったの

にこれほど元気を残している。どれだけ体力が多いのだろうか。

コロナ「それじゃあ、そろそろ帰ろうか」

ヴィヴィオ「そだね」

初等科組は荷物を整え始めた。

勉強会中もヴィヴィオは積極的にアインハルトに話をしてきたがアインハルトはどうしたら良いか分からない様子だったが、最後の方は少しずつだがヴィヴィオの話に合わせて話すようになった。この調子ならヴィヴィオが気軽にメール出来るような仲になるだろう。

ヴィヴィオ「それじゃあ、コロナ、リオ、帰ろう」

ヴィヴィオの言葉に2人は頷く。初等科組は荷物の整理が終わったようだ。三人とも荷物を持って立ちあがった。

ヴィヴィオ「ガイさん、勉強教えてくれてありがとうございます。」

これで明日からがんばれます」

ヴィヴィオは笑ってぺこりと頭を下げた。コロナとリオも頭を下げる。

ガイ「良い点数を期待するかな」

オリヴィエ「皆さんは勉強を頑張っていましたから大丈夫ですよ」

俺とオリヴィエも笑みを返す。

ヴィヴィオ「それじゃあ、またね、ガイさん、アインハルトさん、フリージアさん」

コロナ「失礼します」

リオ「お邪魔しました!!!」

ガイ「ああ、またな」

アインハルト「では、また」

オリヴィエ「頑張ってくださいね」

元気いっぱいな三人は部屋を後にした。三人とも元気が有り余っていないか？

ガイ「若い子は元気だね」

アインハルト「ガイさん、それは年寄りの発言に近いです」

隣に座っていたアインハルトが突っ込みを入れてきた。俺は年寄り扱いされてちよつと凹んだ。だが気を取り直して、アインハルトを見た。

ガイ「アインは勉強は大丈夫なのか？」

アインハルト「ええ、特に問題はないです」

アインハルトも試験の準備は万端のようだ。だが、急にアヒル座りをしてたアインハルトは両腕を股に挟んで体をもじもじさせて頬を赤らめながら視線を逸らした。

アインハルト「もし、もしですよ………テストで満点取れましたらご褒美をもらってもいいですか／＼？」

ガイ「褒美？」

こくん、と頷くアインハルト。

ガイ「………ま、その方がやる気が出るだろうしな。いいよ」

俺は少し考えたがその方がアインハルトもやる気が出るだろう。俺は了承した。

たぶん霸王の拳を受け止めてくれるために対決をしてくれとかだろう。俺では意味はないがアインハルトがブツけてきたいのなら交えてもいいかな。一度対戦した後、俺では意味がないと分かったから避け続けてきたが。

アインハルトは表情は変わらないが雰囲気明るくなった気がした。

アインハルト「はい、ありがとうございます／＼」

まだ頬が赤いままでお礼を言ってきた。

オリヴィエ「アインハルト。褒美は何を求めているのですか？」

アインハルト「つつ！？そ、それは言えません／＼！！！」

そう言っつて、とつと身支度を揃えて立ち上がった。

アインハルト「そ、それではおやすみなさい／＼」

そう言っつて、風のように部屋から出て行った。

途中でゴンツとコンクリートに何か当たった音がしたが聞かなかった事にしよう。

ガイ「アインも元気だね」

オリヴィエ「それは年寄りの発言に近いのではなかったのですか？」

ガイ「……………」

俺も歳かな、と齡18歳で一瞬考えてしまった。

二日後

俺は798航空隊に居た。いつもの訓練とデスクワークだ。今日の訓練はなのはさんだけのようだ。ヴィータさんは別件で来れないらしい。因みに今は雨が降っている。

なのは「はい、訓練終了。ダウンしてから上がってください」

部隊長「ありがとうございます！！！」

部隊「「「ありがとうございます！！！」」」」

雨が降っていたので部隊は傷だらけの泥まみれだ。土砂降りではないがそれなりに振る量が多い。なのはさんは雨で濡れているだけで

傷は付いていない。

教導官はなのはさんだけだが今日も模擬戦でなのはさんに近づく事が出来なかった。近づけた時と近づけない時の違いはなんだろうか？俺は考えながら隊舎へと戻るために歩く。

なのは「あ、ガイ君」

と、後ろから明るい声で言葉を掛けられた。俺は振り向く。

ガイ「どうしました？高町教導官。早く戻らないと更に濡れますよ」
なのは「まあ、どうせ着替えるしね。今さら更に濡れても関係ないかなって。で、ガイ君にはちょっと話があるんだ。ご飯のときでいいかな？」

構いません、と俺は言う。まだ昼休み入る前で、周りにも部隊の人たちがいるのでなのはさんを高町教導官と言っておく。

なのは「それじゃあ、今日はいつものベンチは使えないから食堂でいいよね？」

ガイ「わかりました。ではお昼休みの時に」

なのはさんがうん、と言ったのを確認して俺は踵を翻して隊舎に戻った。

食堂

ガイ「訓練合宿？」

なのは「うん、そなの。これが二回目だけだね」

俺となのはさんは窓際の席で定食を食べながらなのはさんの話を聞いていた。この食堂は結構な広さを持っていて300人は座れるスペースを思っている。うちの部隊はそれほど居ないんだがな。

窓際は女性たちに人気で晴れた時は遠くまで景色が見える時もある、今は雨で景色を見るようなことはないが。

なのは「オフトレーニングや休暇訓練とも言うかな」

ガイ「いつから行くのですか？」

なのは「ヴィヴィオ達の試験が終わってから行くの。だからあと二日後だね。その間のこっちの訓練は無いから自主トレになるね」

そのトレーニングならヴィヴィオ達も確かに良い経験になる。アイ

ンハルトも行ければさらに良いだろう。

なのは「で、この訓練にガイ君も来ない？」

ガイ「……………はい？」

俺はなのはさんの言葉に理解が一瞬、遅れた。なのはさんの言葉を分析すると、その訓練に俺も誘われているのだ。部外者である俺に。

ガイ「俺のような一兵士にそこまでしてもらわなくても……………」

なのは「ん〜、ガイ君が来てくれるとヴィヴィオが喜びそうなんだけどな」

ガイ「え？何ですか？」

俺が行くとヴィヴィオが喜ぶのだろうか？せっかくの休みならのんびりと知り合いや家族と羽を伸ばして、そして訓練することが大事だろう。部外者である俺なんかが行っても仕方ないと思うが。

なのは「そこは自分で知らないかね」

ガイ「は、はあ……………」

俺はなのはさんの言葉の意味が理解できなかった。

なのは「で、どうする？ガイ君も行く？行くなら部隊長に話をつけてくるけど」

ガイ「……………俺なんかよりもアインを連れて行った方が……………」

なのは「そっちもぬかりないの」

俺の発言がなのはさんの発言で消されてしまった。

ガイ「アインも来るのですか？」

なのは「今、交渉中らしいね。あ、それとヴィヴィオから聞いたんだけどガイ君の部屋にホームステイしているフリージアさんも誘うといいと思うよ。ストライクアーツがガイ君より強いって聞いたし、それにガイ君の恋人……………」
ガイ「ち、違います！！！」

今度はなのはさんの発言に俺の発言を重ねて消した。少し大きな声を出してしまったのでなのはさんも眼を大きくして驚いた表情をしている。

ガイ「あ、す、すいません」

なのは「あ、うん。私も確認もせずになんかと失礼なこと言っちゃったね。ごめん」

なのはさんはバツが悪そうにして視線を逸らす。

ガイ「い、いえ。でも、フリーも誘っていただいてもよろしいのですか？」

なのは「うん、構わないよ。大人数の方がいろいろ出来るしね」

なのはさんの訓練を徹底的に出来るのなら聖杯戦争が始まる前に根性を鍛え直すのもいいだろう。

ガイ「わかりました。よろしくお願いします」

なのは「うん、それじゃあ部隊長さんに言っておくれ」

俺は頭を下げて、なのはさんは笑って了承してくれた。話し込んでしまったからご飯がすっかり冷たくなってしまった。

帰り道

ガイ「雨……………久々だよな」

帰り道は人の多い所をなるべく通って帰ることにしている。聖杯戦争は人が居ないところではないと行われぬ。まだ、始まってはいないがオリヴィエが近くに居ない時はこのように用心を怠らない。俺は濡れないように傘を斜めにして空を見上げた。まだ夕方なので薄暗い雲は見える。その薄暗い雲は空一面を覆っている。これはしばらくくすみそうにもない。

雨が降る薄暗い雲が視界に入り、ザーっと水が重力に逆らって落ち

て地面にぶつかる音がああ時の光景を思い出す。

4年前のJS事件。

それによって11歳まで住んでいた孤児院が破壊され、園長や孤児たちは瓦礫の下に埋もれて、遺体となって現れた。俺は泣いたまま小さな子供を抱き抱えて空を見上げた。その時も雨が降っていた。薄暗い雲が視界を覆う。

守れなかった後悔や事件に対する嫌悪感や復讐感のダークな感情が心の底からこみ上げてくるのがわかる。だが、それをぶつける相手もない。ぶつけてもいけないのだ。

雨がこの心の中のダークな感情を少しでも洗い流してくれると思っただが、顔に当たる一粒すらも今はうつつとしい。

孤児院に居た孤児たちは何もしていないのに不幸の目に会った。

あの出来事があったからこそ俺の夢は“魔法で誰もが不幸にならない世界を作る”と決めた。孤児たちの不幸な出来事が起こらないように。

雨は訓練中にも降っていたが、訓練に集中しないとならないのでこのようにゆっくり考える時間は無かった。雨が降って外に出てゆっくりする時間があると脳裏に浮かぶのはやはりああの時の事件。

ガイ「雨は嫌いだな……………」

プリムラ「ああの時の事を思い出していましたか？」

首に掛けてある待機モードの十字架の姿のデバイスが俺の言葉を聞きとって質問を促した。

ガイ「ああ」

プリムラ「ああの時は申し訳ありません。私の力不足で」

ガイ「いや、あの時は俺も誰でも守れると思って自分を過信していた。そのため当時のプリムラを思う存分発揮できなかった」

俺は厳しい訓練を積み重ねてきたからこれで都市の皆を守れるとあの時、思った。だが、“アンチマギックファイナルAMF”というモノがガジェットと呼ばれるものに搭載されてまったく力だが出せずにいた。そのまま、何機も都市に侵入された。

そして、孤児院が破壊されて孤児たちが……自分の過信がガジェットというものを良く調べなかったのが進入されてしまった原因の一つだ。

ガイ「聖杯戦争……始まったら被害が出る前にすぐに終わらせないと」

プリムラ「私も死力を尽くします」

プリムラの言葉に俺は微笑んだ。こんな自分でもデバイスはしっかりとサポートしてくれるのだから。

ガイ「………帰るか」

俺は帰路を急いだ。

マンション

ガイ「と、いうわけだ」

オリヴィエ「強化訓練ですか」

ああ、と俺は答える。仕事が終わって、部屋に戻りオリヴィエなのはさんと食堂で話をしていた内容をオリヴィエに伝えた。オリヴィエも誘われている。

ガイ「“聖杯戦争”前に一度鍛え直そうと思ってな。準備をしつかりしないと」

オリヴィエ「そう……………ですな。一度ガイを徹底的に“虐め”鍛えた方が“聖杯戦争”で生き残れるかもしれません」

ガイ「……………」

オリヴィエの発言のどこかに可笑しな言葉が入り混じっていたのが分かった。

ガイ「“虐め”鍛える？」

オリヴィエは腕を組んで、顎に手を添えて発言していたが俺の言葉

に満面の笑みをこちらに向けて、はい、と答える。

ガイ「……………はあ、まあいい。俺は徹底的に自分を叩き直すよ」
オリヴィエ「いい心がけです」

俺はため息をつきつつも自分の魔力ランクの低さが欠点なのでその分、何かで補わないと。

ガイ「アインはどうなったんだろうな、メールしてみるか」
オリヴィエ「確かに気になりますね」

俺はモニターを開いてメールを作成した。

To……………アインハルト・ストラトス

件名……………強化合宿

本文……………こんばんは。アインも誰からか聞いたかはわからないけど、強化合宿に誘われたる？行くのか？

俺はプリムラに送信を命令した。少しして返信が帰ってきた。

差出人……………アインハルト・ストラトス

件名……………Re：強化合宿

本文……………こんばんは。はい、ノーヴェさんから聞かされました。四日間ですがいろいろと良い経験が積みそうなのでご同行させていただきます。ただく事になりました。ガイさんも行くのですか？

どうやらアインハルトも行くようだ。俺は返信の文章を作成した。

To……………アインハルト・ストラトス

件名……………Re：Re：強化合宿

本文……ああ、俺も行くよ。強化合宿の時はよろしくな。

プリムラに送信を命令する。

ガイ「強化合宿の間に“聖杯戦争”が始まらなければいいが」

オリヴィエ「ですが、今のガイではまだまだ生き抜くには辛いでしょう。徹底的に鍛えませんか」

オリヴィエが自分の胸の前に拳を握った。何とも心強いが、同時にこれから行われる訓練に俺は生きていけるのかと、思ってしまった、はははっ、と乾いた笑い声しか出なかった。

九話“日常と勉強の交差”（後書き）

強化訓練にガイとオリヴィエが参戦しました。

C-のガイが徹底的に虐められる訳ですねw

強化訓練が終わったら聖杯戦争スタートにする予定です。

何か一言コメントがあると嬉しいです。

では、また（・・）／

十話“合宿と思考の交差”（前書き）

今月号にミカヤのカラーイラストが載っていた。

青髪だったorz

訂正してこないとねw

では、十話目入ります。

十話“合宿と思考の交差”

マンシヨン

ガイ「で、どうだった？」

俺はテーブルの前に胡坐をかいて座っていた。俺の視界に映っているのは正座をしたSt・ヒルデ魔法学院の制服を着ているアインハルトだ。何やら緊張した面持ちで俺の事を見ている。オリヴィエはベッドに腰掛けて俺たちの事を見ていた。

アインハルト「これが結果です」

そして、一枚の紙がテーブルに置かれた。俺はそれを手に取り眺めた。

書かれていた内容は前期試験の内容だ。5教科の点数が記載されている。

100・100・100・98・100。

惜しくも満点に届く事が出来なかった。

ガイ「一つ間違えたんだな」

俺は見終わった紙をテーブルに置いた。

四日前に前期試験の勉強会をこの部屋で行った。ヴィヴィオとコロナ、リオにアインハルトの四人が来て一生懸命勉強していた。そして、アインハルトが帰り際に満点だったらご褒美が欲しいと言ってきた。

アインハルト「悔しいです」

アインハルトは表情を曇らせて、テーブルに置いてある紙の点数を見ている。

ガイ「でもいい点数だな。俺はあまり教えていなかったが、アインは頭がいいんだな」

アインハルト「文武両道です。片方が優秀でも意味がありません」
オリヴィエ「そうですね。アインハルトの言っている事は間違いじゃありません」

オリヴィエが柔らかな頬笑みを作ってアインハルトの苦労を労うようにして見る。王家育ちのオリヴィエにとっては、文武共に優秀でなければならぬのだろう。そうしなければ名家の名が廃ってしまう。だから、アインハルトの話に頷いたのだ。

ガイ「まあ、褒美は満点だったらの話だが、これくらいは……………」
アインハルト「いえ、ダメです」

俺の言葉をアインハルトが割り込んで遮った。アインハルトは何にも動じない凜とした表情をしていた。

アインハルト「約束は約束です。満点でなければ意味はありません」
ガイ「……………アインが言うんならそうしようか」

アインハルトの純粹で真っ直ぐな瞳を向けられた事に俺は同意した。

オリヴィエ「ですが、アインハルトは何が欲しかったのですか？」
アインハルト「そ、それは……………内緒です／＼」

オリヴィエが聞いた言葉にアインハルトは頬を赤く染めて視線をそらした。

ガイ「何か欲しかったのか？」

アインハルト「ひ、秘密です／＼この話は終わりにしましょう／＼」

アインハルトが必死な表情でこの話を終わりにしたがっていたので無理に聞く事もないと思った俺は話を変えることにした。

ガイ「さて、これからノーヴェと合流して、なのはさんの所に行かないとな」

今後の行動はノーヴェと合流して、なのはさん宅へ赴き、そのまま首都から臨行次元船で無人世界カルナージへ行く予定だ。なのはさんに誘われて休暇訓練をカルナージでやることになった。“聖杯戦争”が始まる前の強化訓練には丁度良い。

オリヴィエ「ノーヴェとはうまく話を通せると良いのですが」

ガイ「カラーコンタクトしていれば問題ないと思うけどな」

オリヴィエは一度ノーヴェに虹彩異色で会ってしまった。そのためにノーヴェにオリヴィエの正体がばれてしまうのではないかとオリヴィエ自身が懸念している。

アインハルト「あ、ガイさん。そろそろ出ないと時間が………」

ガイ「ん？お、もうこんな時間か」

壁に掛けてある時計を見る。そろそろ出ないとノーヴェとの待ち合わせ場所に間に合わなくなる。

ガイ「アインは準備大丈夫か？俺らは昨日のうちに用意したけど」

アインハルト「大丈夫です。今、着替えて取ってきます」

アインハルトは立ち上がり、部屋を後にした。オリヴィエも紅いカラーコンタクトをつける。

ガイ「まあ、うまく話を合わせればノーヴェも気にしないよ」
オリヴィエ「だといいですけどね」

俺の言葉にオリヴィエは小さくため息をついて微笑して返してきた。その瞳はどちらも紅。これならフリージアと名乗っているオリヴィエが聖王家である事がバレる事はぐっと低くなる。

オリヴィエの不安を取り払うように俺もオリヴィエに笑みを返した。

ガイ「な、さっきの不安は杞憂に終わったる？」
オリヴィエ「はい」

俺は隣を歩いているオリヴィエにだけ聞こえるように声のボリュームを小さくした。前には薄赤いショートヘアのノーヴェエが隣に居るアインハルトと話をしながら歩いている。先ほどノーヴェエとオリヴィエの2人は挨拶を交わした。ノーヴェエはオリヴィエを見て何か思い当たったような素振りを見せたが、オリヴィエの眼を見てその素振りは無くなつて、普通に会話をした。

やはりノーヴェエが気にしていたのは眼なのだ。聖王家だけに表れる左眼が紅く、右眼が翠の虹彩異色。それが出会った時に強く印象に残っていたのだろう。今のオリヴィエはカラーコンタクトで虹彩異色ではない。だからノーヴェエは助けてもらった時の人物と容姿が似ていても、追及はしてこなかった。眼が違うだけで別人だと認識したのだろう。

ノーヴェエを騙してしまったことに罪悪感が残ったが、何処から情報が漏れるか分からないこの現状、いたしかたないと俺は思った。

オリヴィエ「ガイは私がばれないと確信していたのですか？」

ガイ「ん〜、まあ何となく。騙してしまった事に対してはちよつと罪悪感が残ったけどな」

オリヴィエ「申し訳ありません」

オリヴィエは苦虫を噛みしめたような表情で俺に謝罪した。

ガイ「気にするな。情報の重要性は高い事は分かっている。ノーヴェエには悪いが嘘を言うしかない」

俺はオリヴィエの表情を和らげようと笑みを向けてオリヴィエをフオローした。

ノーヴェ「おい、着いたぜ」
ガイ「ん？もうか」

ノーヴェから声が聞こえたので正面を向く。そこにあるのは一戸建ての家。なのはさんの家だ。
ノーヴェは俺らに一言言った後、インターホンを押した。

ピンポーン

ヴィヴィオ「はい」

少しして、玄関のドアが開きヴィヴィオが顔を出した。

アインハルト「こんにちは」
ヴィヴィオ「アインハルトさん！？ガイさん！？フリージアさんま
で！？それにノーヴェ！！！」
ノーヴェ「それに”ってなんだよ”それに”って”

ヴィヴィオが俺たちを見た瞬間、声のボリュームが一気に跳ね上がって笑みを絶やさない。まるで思わぬ客が来たような素振りだ。俺たちも行くことを聞いていなかったのだろうか？

アインハルト「異世界での強化訓練とのことなのでノーヴェさんからお誘い頂きました。同行させていただいても宜しいでしょうか？」

少し頬を赤らめて同行することの旨を言ったアインハルト。

ヴィヴィオ「はい！！も〜全力で大歓迎です！！！」

眼に星が輝きながらアインハルトの手を掴んで必死に振っている姿は本当に嬉しそうだ。

ヴィヴィオ「ガイさんも来るのですか？」

と、視線をアインハルトから俺に向けてきた。

ガイ「ああ、少し鍛え直そうと思ってな。部外者で悪いが俺とフリーも一緒に行かせてもらおうよ」

ヴィヴィオ「ううん、全然部外者じゃありませんよ。ガイさんもフリージアさんも大歓迎です！！！」

ヴィヴィオは未だにアインハルトの手を握ったまま笑っていた。

フェイト「ほらヴィヴィオ、上がってきてもらって」

ヴィヴィオ「あ、うん／＼」

奥から来たフェイトさんの言葉に未だにアインハルトの手を掴んでいたヴィヴィオがその事実気づいて慌ててアインハルトから手を離れた。

ヴィヴィオ「アインハルトさん、ガイさん、フリージアさん、どうぞ」

アインハルト「お邪魔します」

ガイ「お邪魔します」

オリヴィエ「失礼します」

そして、ヴィヴィオが手招きをしてなのはさんの家に入った。

フェイト「あの子やガイが同行するって教えなかったの正解だったね」

ノーヴェ「はい、予想以上に」

先頭を歩くヴィヴィオがフェイトさんを過ぎてから笑みを浮かべてノーヴェに耳打ちをした。それを聞いたノーヴェは苦笑いして返した。

ガイ「俺やアインの事をヴィヴィに言っただけで無かったですか？」

フェイト「うん。その方がヴィヴィオ、驚くかなって思っただけ」

フェイトさんが優しく頬笑みを浮かべ俺の事を見た。

ガイ「……………」

やっぱり駄目だ。フェイトさんの笑顔を見ていると脈が速くなる。自分でも顔が赤くなるのがわかる。やっぱりフェイトさんの事が好きなのかな？

オリヴィエ「どうしました、ガイ？顔が赤いですよ？」

ガイ「あ、ああ、いや、何でもない／＼」

フェイト「風邪ひいちゃった？」

そう言っただけ、心配そうな表情で近づいて俺のおでこに手を当ててくるフェイトさん。視界に入ったのはフェイトさんの心配そうな表情の顔と胸。胸元が少し開いているような服だから胸に目がいつまう。気になっている人がこんな至近距離に居るからさっきからドクンドクンと心臓の音がうるさく感じる。

フェイト「ん、熱は無さそうだね」

そう言つて、フェイトさんは手を離れた。

ガイ「大丈夫ですよ。俺は何ともありませんからノノ」

ノーヴェ「……………はっは、ん、ガイ。お前、もしかしてフェイトさんの事……………むぐう！！！」

何か言いたそうな表情で話そうとしていたノーヴェの口を俺は必死に手で塞ぎ込んだ。

ノーヴェ「にや、にやにしゅやう！！！」

フェイト「えつと、大丈夫？」

ガイ「はい、お気になさらずに！！！」

俺はそう言つて、ノーヴェの頭をヘッドロックしてずるずるとダイニングへと連れて行った。この合宿訓練はいろいろと大変そうだ。

車内

皆で一緒のトレーニング&旅行ツアー。クリスとの遠出も初めてだし、アインハルトさんやガイさんも一緒だし。

私は自分でも笑みが消えることが無いくらいの喜びを覚えているのが分かった。今回の旅行は前回とはまた違う楽しさがある。アインハルトさんとも練習できるし、ガイさんとも本格的に対戦できるし、もしかしたらフリージアさんともぶつかり合う事が出来るかも知れない。

ヴィヴィオ「アインハルトさん。四日間よろしくお願いしますね」

私は座席の後ろを振り向いて後ろに居るアインハルトさんに声をかける。

アインハルト「はい。軽い手合わせの機会などあればお願いできればと」

ヴィヴィオ「はい。こちらこそぜひ。あ、ガイさんは寝ているんですね」

両サイドにはノーヴェとガイさんが居る。ガイさんは寝ているよう

だ。左肘を車の縁に掛けて、体重を左側に掛けるようにして眼を瞑っている。本当はガイさんともお話ししたかったけどガイさんはフエイトママが車を走らせたときから眠っていた。結構疲れているのかな？それならそつとしておこつ。

アインハルト「車動かしたときから、ずつと寝てますね」
ヴィヴィオ「そつとしておきましょう」

私は受け答えしてくれたアインハルトさんに笑みを作って喜んだ。少し前までは無視されたりしたけど、全力でぶつかつたあの対決からアインハルトさんとは少しずつ仲良くなった。こうして気楽に話を出来るのって、ガイさんが勉強会などでアインハルトさんをお呼びしてくれたおかげだよ。

私はアインハルトさんの隣に居るガイさんにありがとうと小さく言つて、座席に座り直した。隣にはフリージアさんの膝の上に乗っているコロナが顔を赤くして笑っていた。ちょっと恥ずかしがっているけど嫌がっているわけではない様子だ。リオもその隣で笑っている。

今回の合宿訓練の四日間、私はとっても楽しくなりそうな気がした。

無人世界カルナージ

「????「みんないらつしゃい」

首都から臨行次元船で約四時間。一年を通して温暖な大自然の恵み豊かな世界。それがカルレージの世界だ。

この世界は無人の世界ではあるが2人の住人が住んでいた。それが今、笑顔で出迎えてくれる人物だ。

メガーヌ・アルピーノとルーテシア・アルピーノの2人の親子である。ロングヘアの紫の髪に赤薄い瞳。ルーテシアの方は後ろにリボンをつけている。容姿も髪型もここまでそっくりな家族は珍しい。ルーテシアは古代の本や知識などに詳しく、ヴィヴィオ達と年が近い。ため、ヴィヴィオ達と仲が良いらしい。

なのは「こんにちは」

フェイト「お世話になりますっ」

2人の言葉に来た人たちはそれぞれ頭を下げたり手を振ったりしてアルピーノ家族に挨拶した。

メガーヌ「皆で来てくれて嬉しいわー。食事もいっぱい用意したか

らゆっくりしていったね」
スバル「ありがとうございます!!!」

スバルさんやティアナさんとは航空で待ち合わせをしていた。今日のメンツは元六課メンバーのフォワード陣が集まるとの事。あの最強とも言われていた六課メンバーが一つに集まるのはなかなか無い。今回の合宿は来て正解だろう。

コロナ「ルーちゃん!!!」

ヴィヴィオ「ルールー!久しぶり〜!!!」

ルーテシア「うん、ヴィヴィオ、コロナ」

子供たちも挨拶を始めた。ルーテシアはリオの方へ向いた。

ルーテシア「リオは直接会うのは初めてだね」

リオ「いままでモニターだったもんね」

ルーテシアはリオの頭に手を置いて撫でた。

ルーテシア「うん、モニターで見ているより可愛い」

リオ「ほんとーノノ?」

子供同士はすぐに打ち解けやすいモノだな。

ヴィヴィオ「あ、ルールー!!!こちらがメールでも話した……」

アインハルト「アインハルト・ストラトスです」

ぺこりとアインハルトは挨拶をして頭を下げる。

ルーテシア「ルーテシア・アルピーノです。ここの住人でヴィヴィ

オの友達、14歳」

にっこりとアインハルトに笑って答える。

コロナ「ルーちゃん、歴史とか詳しいんですよ」

えっへん、とワザとらしく威張って笑うルーテシア。そして、今度は俺とオリヴィエの方に視線と笑みを向けてきた。

ルーテシア「そちらの方々はガイ・テストロッサさんとフリージア・ブレヒトさんですか？」

ガイ「ああ、よろしくな。ルーテシア」

オリヴィエ「よろしくお願いします」

俺らも軽く挨拶した。

ルーテシア「ヴィヴィオからはよく聞いています。ヴィヴィオはガイさんの事が……」
ヴィヴィオ「わーわー!!!」

ヴィヴィオがルーテシアに近づいて、大声を出してルーテシアの発言を止めた。

ガイ「どうした、ヴィヴィ？」

ヴィヴィオ「な、なんでもないよ／＼!!!」

ヴィヴィオは何とか必死に作ったような笑みをらこっちに向ける。その必死な表情に俺は深く追求するのをやめた。

ルーテシアは口元をヴィヴィオの手で押さえられているが表情は笑っている。

ヴィヴィオは、ははは、と乾いた声で笑っていた。2人の笑いは同じ笑いではなかった。

スバル「あれ、エリオとキャラはまだですか？」

メガーヌ「ああ、2人は今ねえ……………」

????「おつかれさまですっ！！！」

と、後ろから高い声がした。振り返ると男女の2人が薪を集めていたのが両手に持って歩いてきた。

フェイト「エリオ、キャラ」

フェイトさんの声が嬉しそうに弾んでいた。この2人に会えるのがよほど嬉しいのだろう。

赤髪に薄青い瞳の男の子がエリオ・モンディアル。ピンクの髪に蒼い瞳のキャラ・ル・ルシエ。フェイトさんの養子だ。どのようにして養子にしたかは聞いていないが、フェイトさんには夫は存在していない。その事にちよつとホツとしている自分が居る。

俺は2人の事はモニター越しで話をしたことはあるが会ったのはこれが初めてだ。

スバル「わーお！エリオまた背が伸びてる！！！」

エリオ「そ、そうですかノノノ？」

キャラ「わ、私も少し伸びましたよ！！！！1.5?!!!!」

最初モニターで見た時は驚きを隠せなかった。こんな小さな子が六課チームの前線メンバーで戦っていたのだから。よほど才能があったのかレアスキルを持っていたのだろう。

だが、驚きもしたが、それと同時に当時この子達が10才くらいで戦っていた事に少し胸を痛めた。子供が武器を持って前線に立たせ

たやり方の六課に憤りを感じた。常に人手不足な時空管理局は幼い子でも能力が高いと雇われることも多々ある。管理局のやり方だがどうも俺にはそのやり方に賛同しかねる。俺が798航空部隊に所属したのは13歳の時。訓練校の期間と合わせても11歳の時に軍に所属している身だ。人手不足であるがために雇用年齢が低いのは確かに認める。

だが、それでも体格も精神年齢もまだ幼い子供たちが軍に所属しているというのは良くないと思っっている。こういう子供共達には軍服を着て頑な表情をしているよりも私服を着て笑顔で笑っているような光景に居てほしいと思う。

フェイト「アインハルト、フリージア、紹介するね。2人とも私の家族で……………」

エリオ「エリオ・モンディアルです」

キャラ「キャラ・ル・ルシオと飛龍のフリードです」

フェイトが家族を紹介した。キャラの上には小さな龍が飛んでいた。キャラの召喚獣らしい。俺はモニターで知っているからいいがアインハルトとオリヴィエは初めてだ。

アインハルト「アインハルト・ストラトスです」

オリヴィエ「フリージア・ブレヒトです」

エリオ「うん」

キャラ「よろしくねアインハルト、フリージアさん」

4人は挨拶をすました。そして、エリオとキャラが俺の方を向く。

エリオ「ガイさん。モニターでは何度かお話をしましたが実際に会うのは初めてですね」

キャラ「そうですね、ガイさん」

ガイ「ああ、そうだな」

2人とも笑って語りかける。何というか、ここの人たちは部外者である者に対して簡単に打ち解けやすい。俺もアインハルトもオリヴィエも例外ではない。

がさっ

アインハルト「!!!」

ガイ「!？」

と、そこに近く草むらから何かが現れた。明らかに人ではない何か。人のような形をしているが、目が四つあり、尻尾も付いており、体全体が何か硬いモノで覆われているような姿。右手には細長く鋭い刃のようなものが付いており、背中には山菜が詰まった籠が……。

ガイ「ん？籠？」

俺やアインハルトは驚いてそれに構えていたが、敵だと思ったわりには山菜が入っている籠を背負っている場違いな装備だとわかると、ちよつと気が抜けた。

ヴィヴィオ「あー!!!アインハルトさん！ガイさん！ごめんなさい！大丈夫です!!!」

コロナ「あの子は………」

2人が俺たちにあれは敵じゃないと必死に言ってくる。

ルーテシア「私の召喚獣で大事な家族、ガリユーって言うの」

主が挨拶したからかスツと右手を胸の前に持ってきて頭を下げるガ

リユー。

アインハルト「し、失礼しました／＼／」

ガイ「わ、悪かった」

コロナ「私も最初はびっくりしましたー」

俺とアインハルトはルーテシアの家族に構えてしまった事に悪気を感じて謝った。ルーテシアはそんな事は気にしないような素振りで笑った。

オリヴィエは殺気が無いと分かったからか何も行動しなかったのだろっ。

メガーヌ「さて、お昼前に大人の皆はトレーニングでしょ。子供達はどこに遊びに行く？」

ノーヴェ「やっぱりまずは川遊びかと。お嬢も来るだろ？」

ルーテシア「うん！」

子供達は川遊びのようだ。保護者的なモノでノーヴェが付いて行くらしい。

ノーヴェ「アインハルトも来いな」

アインハルト「はい……………」

アインハルトはあまり満足げな表情はせず俺の方とチラリと見た。トレーニングに参加したがっている顔だ。

オリヴィエ「私もトレーニングの方でよろしいのですか？」

なのは「ん、フリージアさんは子供達と遊んでいてもいいですよ。訓練は管理局に所属している人達が行うものですから」

そうですか、とオリヴィエは言って少し考える。そして、笑顔をなのはに向けて言った。

オリヴィエ「では、子供たちと少し遊んできます」

なのは「うん、楽しんで来てね」

なのはも笑って答える。

なのは「じゃ、着替えてアスレチック前に集合しよう！」

大人たち「はい！！！」

ノーヴェ「こつちも水着に着替えてロッジ裏に集合！」

子供たち「はい！！！」

水着！！！！とアインハルトが顔を真っ赤にして言った気がしたが遊ぶメンバーに男性は居ないんだからそんなに恥ずかしがらなくても。

しかし、男って俺とエリオしか居ないんだな。

改めて皆を見ると男女の比率が明らかに変であることを認識した。

水辺

リオ「あたしいちばーん!!!」
ヴィヴィオ「あーリオずるい!!」

水着を着たヴィヴィオとコロナとリオとルーテシアが走って川に入っていく。私は川辺に立っていて隣には水着の上に着用を羽織ったノーヴェとアインハルトが居た。私は着替えていない。水着を使うとは思っていなかった。なのでガイとの買い物時に買わなかった。それでも子供たちの笑顔を見ているだけでも満足できる。

ヴィヴィオ「アインハルトさんも来てくださーい!!!」
ノーヴェ「ほれ、呼んでるぞ」

ノーヴェが川に入っている子供たちを指しながら上着を脱ぐことに照れているアインハルトに声をかける。

アインハルト「ノーヴェさん。出来れば私は練習を……」
ノーヴェ「まあ、準備運動だと思って遊んでやれよ」

2人はコソコソと話をする。

ノーヴェ「それにあのチビたちの水遊びは結構ハードだぜ」

その言葉にアインハルトは少し困惑した表情になった。私も多分同じ表情だろう。アインハルトは私に顔を向けた。

オリヴィエ「遊ぶ時は遊ばないと損ですよ。アインハルト」

アインハルト「え、ええ。わかりました」

アインハルトはそう言って上着を脱いで水着姿になって川に入り始める。

リオ「あ、アインハルトさんどーぞー!!!!」

ヴィヴィオ「気持ちいいよ」

それに気付いた子供たちが手招きをしてアインハルトを歓迎した。

オリヴィエ「アインハルトもいい友達を持っていいですね」

ノーヴェ「お前もそれに含まれているんだろ？」

オリヴィエ「……………そうですね」

ノーヴェが笑顔を向けて言った言葉にどう返したらいいか一瞬悩んだが、アインハルトとは友達であることに間違いではないので頷いた。

ノーヴェ「しかし、フリージア。お前の事を見た時は路上喧嘩の時に助けにきてくれた奴かと思ったんだけどな。容姿がそっくりだし」

オリヴィエ「ですが、その人の眼は虹彩異色なのですよね？」

ノーヴェは今朝話をした事を持ちかけてきた。

ノーヴェ「ああ。もしそいつにあつたらお礼を言わないとな。それにあの虹彩異色の色は聖王家にしか現れることのない色だった」
オリヴィエ「……………」

やはり、ノーヴェに秘密をばらすわけにはいきませんね。情報はどこから漏れるか分かりませんから。でも、お礼をしてくれるという気持ちは私の胸の中にしまつときましよう。それはきつと現実になる事はありませんから。

オリヴィエ「ですが、本当にアインハルトにいい友達が出来て良かったと思っっています」

私は路上喧嘩で助けた人物の話を終わらすためさっきの話に戻した。それにノーヴェが軽く苦笑した。

ノーヴェ「お前って結構アインハルトの肩を持つよな。なんかあんなのか？」

オリヴィエ「ガイの部屋にホームステイした時から隣に居たアインハルトにもお世話になりましたから」

私はにつこりと笑って子供たちから視線を離してノーヴェに顔を向ける。

ノーヴェ「アインハルトはたぶん格闘技が好きなんだと思うんだ。フリージアも格闘技してるんならアインハルトの相手になってやれよな」

オリヴィエ「そう……………ですね」

アインハルトの中の霸王の悲願は私に向けるべきものではない。私

が死んだことによつて出来た悲願を私が受け止めては矛盾が生じる。アインハルトの霸王の拳をぶつけるべき相手は現代の私の複製体であるヴィヴィオです。

ノーヴェ「そんな固い顔すんなよ。別に霸王の拳をぶつけさせてくれって言ってるわけじゃねんだ。ただ単純に格闘技戦をしてくれってことだ」

オリヴィエ「あ……………」

ノーヴェの言つた言葉に私は頭にハンマーを叩かれたような衝撃を受けた。確かに霸王としてぶつかり合うのでは無く、“ただ”の格闘技戦なら悲願云々は関係ない。霸王も聖王も関係ないのだ。

オリヴィエ「……………今度、アインハルトとひと勝負しますか」

ノーヴェ「そうしてやれ。アインハルトも喜ぶ」

ノーヴェは歯を出して笑つた。そういった結果になつたことに嬉しかったようだ。私の事をオリヴィエだと知っているわけではないが、単純にアインハルトが格闘技でぶつける相手が出来た事に喜んでゐるのだろう。

オリヴィエ「……………ガイから聞いた話ですが、ヴィヴィオは聖王女の複製体。アインハルトは霸王の血が含まれているんですよ？」
ノーヴェ「ああ。アインハルトの中の霸王の血はやはり聖王女に惹かれてゐると思うんだ。だから、私は2人を合わせるようにした」

そうですね、と私は軽く笑つて水遊びをしている子供たちに向き直す。ノーヴェも子供たちに向き直す。アインハルトも水遊びをしているが、皆より出遅れているような気がする。むしろ他の子供たちが水遊びに慣れている感じがした。

ノーヴェ「それにあいつは何だかほっとけないしな」

オリヴィエ「アインハルトは現代に生きている人物ですからね。霸王や聖王などに縛られず忘れて、年相応の笑顔をしてくれるといいのですけどね。ガイもアインハルトには心から笑ってほしいって言っていました」

ノーヴェ「そうだな」

アインハルトの中にある霸王の悲願はそう簡単に消えるものではない。ですが、私の隣に居るノーヴェはアインハルトを現代の子達に拳を交えさせてくれている。

私はそのことに心の中でノーヴェに感謝した。

ノーヴェ「で、話は変わるがフリージアもガイの事が好きなのか？」

オリヴィエ「も？」

ノーヴェは悪戯な笑みを浮かべて私の事を視てきた。「も」ってところちよつと違和感があった。だが、最初の言葉には返答しないと。

オリヴィエ「いえ、私には婚約者が居ますから」

ノーヴェ「いつ、こ、婚約者……！」

ノーヴェは驚きを隠せないでいた。私に婚約者がいることにそんなに驚く事なのだろうか？ああ、オリヴィエだとは知らないから無理もないですね。

オリヴィエ「私のことはさておき、私“も”というのは？」

ノーヴェ「あ、ああ。あたしの主観だけどヴィヴィオやアインハルトはガイの事を好きそうな気がすんだが気のせいか？あの2人だけ

じゃなくてコロナヤリオもな」

オリヴィエ「そうでしょうか？私には仲の良い兄弟に見えましたが」
私には少なくともガイとアインハルトが接している時は仲の良い兄弟だと思っていた。しばらく観察していればヴィヴィオもコロナもリオも兄弟に見えてくるだろう。そのような雰囲気勉強会の時に感じた。

ノーヴェ「兄弟ねえ……でも、あいつらがガイと居る時はなんだから嬉しそうな表情をしているんだけどな」

オリヴィエ「頼れる兄に見えるからでは？」

ノーヴェ「頼れる兄！？ぶぶっ！！！」

頼れる兄という言葉にノーヴェは笑いを堪えてオウム返しをしたが、押さえることが出来なかったので吹いてしまった。

オリヴィエ「そうでしょうか？ガイの事を見ている限りでは面倒見が良い気がします」

ノーヴェ「あ、あいつには似合わねえよ」

未だにふるふると体を震えて必死に笑いをこらえている。そして、少しして落ち着いてきたノーヴェ。

ノーヴェ「で、フリージアはどう思っているんだ、ガイの事？」

オリヴィエ「信用できるパートナーです」

私は即答で答えた。召喚されてから二週間ぐらい経つがガイは信用できる人物だ。困ったときに色々手助けしてくれるし、皆からの信用も厚い。

ノーヴェ「……………ガイを信用しているんだな」

オリヴィエ「あの人は良い人ですよ」

アインハルト「私も、そうおもしろい、ます」

そこにアインハルトが息を切らしながら川から上がってきた。他の子達よりも先に体力が無くなったのだろう。よたよたと歩いて、私たちの近くにある岩の上に座った。

ノーヴェ「なあ、アインハルト。アインハルトはガイの事が好きか？」

アインハルト「え？」

オリヴィエ「いきなりですね」

ノーヴェがアインハルトに温かいお茶を注いだ紙コップを渡しながら隣に座って、さっきの話をアインハルトに向けた。その質問の意図に最初は分からなかった様子だが、脳が先ほどの言葉を理解し始めたのか、どんどんアインハルトの頬が赤くなっていった。

アインハルト「べ、べ、別にそんなものではありません／＼ガイさんは兄のような人です／＼」

ノーヴェ「あらま、フリージアと同じ答えが返ってきた」

ノーヴェは私と同じ回答をした事に先ほどのリアクションよりも反応が薄かった。

ノーヴェ「じゃあ、ガイがフェイトの事を好きかもしれない事には気にしないか」

アインハルト「！！！」

アインハルトは何に反応したのか分からないがものすごい速さでノ

「ヴェに顔を向けて、真実を告げられて驚きを隠せないような表情をしていた。

その表情にノーヴェはニイッと笑った。確信したようだ。

ノーヴェ「なんだ、やっぱりガイの事が好きなのか？」

アインハルト「あ、い、いえ、そんなことは……………／／／」

先ほどの反応が墓穴を掘ったと分かったのか、アインハルトは否定しようにもどのように否定すればいいのか分からない様子だ。

ノーヴェ「その水着姿もガイに見せたかったんだろ？」

アインハルト「あ、あう……………／／／」

撃沈して、もはや何も言い返せなくなったアインハルト。アインハルトの水着は黒いビギニに近く、胸は前で、下は横で縛るようなやつだ。大人の雰囲気を持ち出す水着である。

オリヴィエ「まあまあ、ノーヴェ。アインハルトを虐めるのもそのへんで」

ノーヴェ「ちえ、結構気になっていたんだがな」

アインハルト「……………／／／」

アインハルトは縮こまってしばらく何も言えなくなってしまうた。

その後は“水斬り”というモノをアインハルトは教わって、ヴィヴィオとお昼近くまでやり続けていた。私はそれを見て微笑んでいた。

メガーヌ「さーお昼ですよー！皆さんー」
子供たち「はーいっ！」

メガーヌの言葉で子供たちが走ってこちらに向かってくる。俺たち大人組はアスレチックでなのはさんの訓練の後、昼食の準備をしていた。やはりというか、フィジカルトレーニングだけなのはさんの訓練はかなりキツかった。なのはさんやスバルさんはあまり疲れていなかったが、他は息を切らしてしまった。なのはさんの訓練は厳しい。

なのは「おかえりー」
スバル「みんな遊んで来た？」
ルーテシア「もーバッチリ！ー！」

子供たちは元気だ。そこに今朝ぶりのオリヴィエがこっちに向かってきた。

オリヴィエ「ガイは訓練どうでした？」

ガイ「キツかったよ。流石はなのはさんってとこだ」

なのは「これでも教導戦技官ですから」

えっへんと分かりやすく威張ったなのはさん。

オリヴィエ「ふむ、サボってましたら私が地獄の特訓メニューをガイにさせるところでしたのに」

ガイ「……………」

どうやら、この四日間オリヴィエに“虐め”鍛えられるようだ。――昨日の夜に俺に言った言葉を思い出した。

なのは「フリージアさんの訓練もキツイのですか？」

オリヴィエ「いえ、教導戦技官である貴方には敵いませんよ」

ふふっ、とオリヴィエは笑う。

なのは「うん」

と、なのはさんはそのオリヴィエの笑みを見て顎に手を添えて考え事をした。そして、他の人と話をしながら俺に念話してきた。

なのは「ガイ君はフリージアさんのことどう思っているの？」

ガイ「どう、とは？」

なのは「好きなの？フリージアさんの事？笑っている姿もそうだけど、フリージアさんはかなり美人だし」

なのはさんは俺がオリヴィエに対してどのような感情を持っているのか興味があるらしい。

ガイ『世話の掛る同居人つてところですかね』

なのは『……………それだけ?』

ガイ『恋愛云々はありませぬ。フリージアには婚約者がいるらしいので』

なのは『こ、婚約者!?!』

なのはさんは念話の中で驚いていた。それでもチラリとなのはさんを見ると平穩を保っている表情で皆と笑ってる。その同時処理できるマルチタクスは凄いなと思う。

なのは『ま、まあでも、それは部外者である私が聞くべきではないね』

ガイ『そうですね。フリージアもそこを聞かれると戸惑うでしょうし』

メガーヌ「あらあら、ヴィヴィオちゃん、アインハルトちゃん、大丈夫?」

アインハルト「いえ……………あの」

ヴィヴィオ「だ、大丈夫……………です」

念話を終わらせて周りを見ると、メガーヌさんがアインハルトとヴィヴィオの事を心配していた。俺はそつちに視線を移す。2人ともなんだか体をプルプルさせて、あまり動けない様子だ。

ノーヴェ「2人で水斬りの練習、ずーっとやってたんですよ」

メガーヌ「あらー」

メガー又はノーヴェの補足で内容が分かりあらあと言った表情で苦笑していた。

ふと、アインハルトと俺は視線が合った。だが、アインハルトはすぐにフィツと顔を赤くして逸らした。

ガイ「？」

ちょっと変だったが特に気にせず料理の盛りつけを続けた。そして盛り付けも終わり、皆で俺が望んでいた温かな食卓のような雰囲気でお昼を食べ終えた。

ルーテシア「ベルカの歴史に名を残した武勇の人にして初代の霸王」

私達は今、書籍で一冊の本をテーブルに置いて皆で見ている。その本の内容は……………

ルーテシア「クラウド・G・S・イングヴァルト。彼の回顧録。もちろん現物じゃなくて後世の写本だけだね」

婚儀の儀を交わす予定のあったクラウドの回顧録だ。その開いているページにはクラウド自身の挿絵が描かれている。クラウドを描いた人はうまい。クラウドそっくりだ。

私はそれを見て微笑んだ。

コロナ「ルーちゃん、アインハルトさんの事は？」

ルーテシア「ノーヴェから大体聞いているよ。霸王家直系の子孫で初代霸王の記憶を伝承してるって」

そう言つて、ルーテシアはページをめくる。そこにはまた違う挿絵が写されていた。

ルーテシア「オリヴィエ・ゼーケブレヒト。聖王家の王女にして最後のゆりかごの聖王」

そこには私自身の姿が描かれていた。私にとてもよく似ている。これを描いた人には褒美を差し上げたい。ルーテシアは私の事を見る。

ルーテシア「こうして見ると、フリージアさんってこのオリヴィエ

つて人に似てますよね」

リオ「確かに」

コロナ「うん」

残る2人も私の事を見る。似ているも何も本人その者だから描いている人が下手くそじゃない限りは似ているだろう。

オリヴィエ「オリヴィエの回顧録を見たことのある人には似ているねって言われることがあります。ですが、私はオリヴィエではありませんよ。聖王家の証である眼が虹彩異色ではありませんし」

コロナ「そうだよ。オリヴィエが生きていた時代は古代ベルカ諸王時代だもんね。生きていたとしたらかなりのお年寄りさんだよ」

そうですね、と私は相槌をうつ。確かに時間軸を跳躍してきたこの身は今の時間軸に合わせると年齢はとうに三ケタを超しているだろう。だが、この姿でいられるのも“聖杯戦争”の恩恵を受けているからでもある。

ルーテシア「話を戻すけど、クラウスとオリヴィエの関係は歴史研究でもいろいろな諸説あるんだよね」

コロナ「そもそも生きた時代が違うって説が主だよ」

いえ、コロナ。私とクラウスは同じ時代に生きていました。訂正したいところですが、私がオリヴィエだと知ってしまったては意味がないので黙ることにする。訂正したい気持ちはいっぱいですが。

ルーテシア「うん……でもこの本では2人は兄弟みたいに育ったってなってる」

ええ、ルーテシア。それが真実ですよ。決して私とクラウスは別々

ではない。

リオ「オリヴィエって確かヴィヴィオの……複製母体だね」
ルーテシア「まあ肖像画とか見る限りあんまり似てないし普通に“ヴィヴィオのご先祖様”でいいと思うけど」

だよな、とリオは相槌する。そうになるとヴィヴィオは私の遠い孫みたいなものでしょうか？それはそれでちょっと複雑ですが。ここで何も言えないのは仕方ないですね。クラウスの回顧録を見れると聞いたのでついてきたのですが訂正できないのはちょっと辛い。

コロナ「でも、なんで聖王家の王女さまとシュトウラの王子様が仲良しだったんだらうね？」

リオ「あ、そういえば」

ルーテシア「オリヴィエがシュトウラに留学って体裁だったみたい。シュトウラと聖王家は国交があったしね。ただ、オリヴィエはゆりかご生まれの正統王女とはいえ継承権は低かったみたいだから、要は人質交換だったんじゃないかな」

ルーテシア、人質交換ではないですよ。戦争時代の人質交換なんて印象が悪い。現にコロナとリオが手を握り合ってブルブルと震えている。

コロナ「戦国時代の人質ってアレだよな？歴史小説にもよく出てくる……」

リオ「裏切ったら人質を処刑しちゃいますって……」

ルーテシア「それぞれ」

ルーテシアは怯えている2人を見て微笑んで肯定する。

そこを笑って肯定しないでいただきたい、ルーテシア。ああ、否定

したいが言えいのが辛い。

そう思っていたが、ルーテシアは次のページをめくってその言葉を打ち消すくらいの事を言った。

ルーテシア「でも、2人にはそんなこと関係なかったみたい。この本の途中はオリヴィエ殿下とのことばかり」

オリヴィエ「……………そうですか」

私はクラウドが私の事ばかりを思っていてくれている事実には唇が緩んで微笑んだ。

ルーテシア「嬉しそうですね。フリージアさん」

オリヴィエ「……………ええ、こんな時代でも国は対立しているのに仲が良いとはいいと思いません」

コロナ「そうですね」

肯定してくれたコロナに嬉しさを私は感じた。後世にはこのように記述されて残っているモノがあるのは嬉しかった。それを読んでくれている人もいるのも嬉しい。

私はいろんな意味で歴史に名を残したが、良い結果に残ってくれてよかったと思う。

私達はしばしその本を読んでいた。

訓練場

ガイ「はあああああ!!!」
なのは「早いね、シュート!!!」

午後の訓練は模擬戦だ。俺はなぜかなのはさんと一対一で勝負することになった。当然勝てる見込みはない。

今、一太刀を入れるために少ない魔力を浮遊するために使用してなのはさんに向かって飛んでいるが、前方からはピンクの魔弾が目視で確認しただけでも10個以上存在して俺に目がけて飛んでくる。

プリムラ「数は13です。注意してください」

ガイ「細かい数字ありが、とう!!!」

俺はプリムラに礼を言いながらピンクの魔弾を避けつつ進む。刀モードになっているプリムラを左手で握りながら、目の前で魔弾を操っているなのはさんの行動を3手、5手、7手先の予測を立てていく。

ガイ「両サイド!!!」

俺は飛行を止めて空中で急停止した。その目の前で両サイドからピンクの魔弾が俺の事を挟撃するために飛んできて互いにぶつかり合い白い煙が視界を覆った。

この攻撃が命中しなかった場合の次の手は……。俺は眼を瞑る。魔弾が飛ぶ音がこちらに向かって数発飛んできているのが聞こえた。

プリムラ『二時と三時、それに十一時の方角からです。距離は二時から三時、そして十一時の順に早いです』

プリムラが魔弾の熱源反応を時計の向きで教えてくれた。視界がダメなときはデバイスが役に立つ。俺はこの煙から出るため、一気に前へと出た。

俺は煙から出てきたが二時の方向には眼と鼻の先にピンクの魔弾が迫っていた。

ガイ「つく!?!」

俺はそれを紙一重で避けて、三時の方向の魔弾を鞘走りをして抜刀し切り捨てた。十一時の方向から来た魔弾は無視して、視界に入れているなのはさんに向かって一気に飛ぶ。それにより十一時の魔弾は簡単に避けることが出来た。そのまま、なのはさんの所まで……

ガイ「つと」

進めなかった。俺はなのはさんと一定の距離を置いて空中で停止した。

なのは「ガイ君はよく先を読んでるね」
ガイ「なのはさんの魔弾がいつもより少し遅かったです。ここに誘ってましたね」

俺は鞘に刃は黒く、そりは白い刀を納刀して居合の構えに入る。レイジングハートを構えて標準を俺に定めているなのはさんの前には見えない設置型のバインドが二つ、罠として設置されていた。肉眼では確かめられないが、これまでのなのはさんの行動からここに誘われていたことが分かった。バインドにかかったら最後、いつきに攻められて終わってしまう。

なのは「ガイ君の動体視力や反射神経は並の人間じゃないからね」
ガイ「魔力ランクは低いですから他で補っているだけです」

俺はそう言いつつ全神経を集中してなのはさんを見た。なのはさんはその行動に対してにっこりと頬笑んで右手を上げた。

なのは「いくよ。シュート!!!」

なのはさんの周りに浮遊していたピンクの魔弾が全て俺に向かって放たれた。その数は数えるだけでも面倒だ。俺は下がる気はなかった。足に少ない魔力を貯め込み、それを一気に放つ。

ドンッ!!!

それが瞬間的な爆発を起こし、エネルギーを拡散させた。それに乗って俺は一気に前へ飛ぶ。魔弾と魔弾の間、設置型のバインドとバインドの間をすり抜けた。そして目の前には………

なのは「バスター!!!」
ガイ「つく!!!」

ちようどなのはさんが俺に向かつて砲撃を放っていた。俺の予測ではまだチャージ中だと思っていたが、なのはさんは俺の予測のさらに上を読んでいたようだ。前もってチャージしていたのだろう。俺は避けることは不可能と判断して鞘と黒いプロテクションを展開させてそれを受け止める。

なのは「まだまだ行くよ!!!」

ガシュガシュ

なのはさんのレイジングハートから二つ銃弾が排出された。カートリッジシステムを使ったのだろう。更に砲撃の威力が上がった。俺は受けに回ったことを後悔したが時すでに遅し。その威力は俺の防御をすでに上回っていた。

プロテクションは一気に破壊されて、鞘で受け止めながらも砲撃の衝撃を受けて大きく後ろへ飛ばされてしまった。

ガイ「~~~~っつ」

俺は苦痛の表情で左腕を右手で押さえた。鞘を持っていた左手に衝撃が伝わった。左手から左腕にかけて、砲撃の威力を受け止めきれずに残った衝撃で未だにビリビリとした感覚が残っている。

なのは「はい、いったん終了ね。それだと、すぐには私の魔弾を避けられる事は出来ないでしょ?」

と、目の前になのはさんが映っているモニターが現れて、優しく声をかけてきてくれた。

ガイ「え、ええ、なのはさんの砲撃の威力は絶大ですよ。生半可な覚悟じゃ止められないですね」

俺は表情を苦くしていたがなんとか笑みを作って答える。それを見てなのはさんは笑みを向けてくれた。

なのは「ふふっ、ありがとね。でも、私もちょっと危なかったな。前もってチャージをして無かった危なかったかも」

そうですか、と俺は相槌をうつ。結局、今日もなのはさんに一太刀を浴びせることが出来なかった。何か足りない。一番最初の時は一度だけ通ったがあれはただの偶然だろうか？初心に帰るのが重要かもしれない。

なのは「この後はウォールアクトをやるんだよね？」

ガイ「はい、フェイトさん達と行う予定です」

なのは「じゃあ、フェイトちゃんの指示に従ってね」

そう言つて、モニターが切れた。俺は左手で握っている刀を見る。

ガイ「大丈夫か？プリムラ？」

プリムラ「ダメージの損傷はほぼありません。ただ、マスターの魔力残量があまり無いですね」

ガイ「ま、それは仕方ないさ。魔力ランクはまだまだ低い。それに後はフィジカルトレーニングが主だし、ほとんど魔力は使わないさ」

俺は頭をかいて、フェイトさんが居るビルの構造物の所まで飛んで行った。何か足りない。それを見ける事が出来たらきつと何かが変わると思う。今のままでは聖杯戦争では生き残れない。

フェイト「あ、ガイ。これからウォールアクトやるよ。準備して」
ガイ「はい」

俺は思考を切り替えてフェイトさんの指示に従ってその後のトレーニングを行った。

なのは「じゃあ、午後のトレーニングはここまで……！」
元フォワード陣・ガイ「お疲れさまでした……！」

日も傾き、空が茜色に染まるころ、なのはさんの訓練は終わった。締め合図が終わった途端、緊張の糸が切れて体にどっと疲れが押し寄せてきた。

ガイ「……………つ、疲れた」

俺は挨拶が終わった後、その場で座り込んだ。今日のなのはさんの訓練はいつも以上にハードなトレーニングだった。六課のトレーニングだと聞いた。だが、疲れを見せているのは俺だけのようだ。他の人たちを見ると皆、涼しい顔をしている。流石は元六課メンバーか。

エリオ「大丈夫ですか、ガイさん？」

キャラ「簡単な治癒魔法なら掛けられますよ？」

エリオとキャラが心配そうな表情で俺に近づいてくる。俺は首を振って、大丈夫、と言っただけ言って立ち上がった。こんな子供たちよりも先にバテるのは良くないな。これは単に俺の練習量が足りないだけだ。元六課メンバーとか関係ない。練習量の比率だ。

なのは「ガイ君には、まだ六課のトレーニングは辛かったかな」

ガイ「うちの部隊でやっている航空戦技訓練とはレベルが違いますね」

俺は笑いながらもストレッチを始めて乳酸を残さないように筋肉の緊張を無くす。

なのは「さ、上がって上がって。ここは明日の準備があるからガイ「はい」

ストレッチを軽くやったので多少は筋肉への疲労が取れたと思う。俺はストレッチを終わらせて、スバルさん達の後について行った。

コロナ「おつかれさまでーす」

スバル「あー、おつかれ」

帰り道に訓練を見学をしていたのかコロナやリオ、ルーテシア、オリヴィエ、ノーヴェが待っていた。

スバル「あれ？ヴィヴィオとアインハルトは？」

リオ「2人で一緒に練習中です。多分まだ夢中でやっていると思いますよ」

ヴィヴィオとアインハルトは随分と仲が良くなった気がする。気軽にメールを送れる仲になれたのかな。

オリヴィエ「ガイ。あの動きはなんですか？」

ガイ「え？」

オリヴィエは俺の前に来ると突然怒ったような表情をして俺のこと叱ってきた。声を荒くしているオリヴィエに周りにいた人たちは驚いて、オリヴィエを見た。

オリヴィエ「あんな動きをしていたら、命を落としますよ」

ガイ「……………確かに突っ込み過ぎたきがした」

オリヴィエ「気をつけてくださいね」

オリヴィエが軽く笑い、ああ、と俺は頷く。戦争はこんなものじゃない。目の前に居るオリヴィエがその戦争の中で活動していたのだ。説得力は十分にあった。だから、オリヴィエの近くに居ると安心で

きるのも事実。暖かな食卓みたいな暖かな気持ちにさせてくれる。包容力があると言っべきか。

ノーヴェ「なんかフリージアってガイの姉さんのような存在だな」
ガイ「……………ああ、そうかもね」

もし、上の兄弟がいたらこんな感じなんだろうか？無い物ねだりしていても仕方ないけど俺は想像した。オリヴィエ姉さん……………やっぱりお金がかかりそうだ。

俺は今、脳内で色んなものに散財しているオリヴィエの姿を見て苦笑してしまった。

少し歩くと、森の中でヴィヴィオとアインハルトがミッド打ちをやっていたところを発見した。

コロナ「やつぱり、ずっとやっていたんだ」
ヴィヴィオ「あははー、ちょっと気合入っちゃって」

帰り道も随分と賑やかになった。

ノーヴェ「近代格闘技のミッド打ちもなかなか面白いだろ？」
アインハルト「はい……………良い練習になりました」

アインハルトはヴィヴィオと特訓して満足げな表情だった。

ヴィヴィオ「ママ達はまだ？」
キャロ「少し残って練習の仕上げだって」
エリオ「2人で飛んでいるんじゃないかな」

あの練習量の後にまだ動いて準備をしているのか。流石元六課のエンジニアだ。練習量が半端ない。

ルーテシア「さて、お楽しみはまだまだこれからよ。ホテルアルピ
ーノ名物、天然温泉大浴場にみんな集合ね!!!!」

ガイ「温泉?そんなものまであるのか?」

俺が驚いたようにして口を開くとルーテシアは得意げな表情で笑う。

ルーテシア「まあ、ちょっと大きく作っちゃって一つだけなの。先
に女性陣でいいですよね?」

ガイ「ああ、女性の方が多いしな」

エリオ「そうですね」

男が2人しかいないこの合宿訓練。何をするにも女性が優先になる。

ガイ「じゃ、晩飯を作っているメガー又さんの手伝いでもするか」

エリオ「はい」

話をしているうちに宿泊ロッジに辿り着いた。

温泉には女性陣が先に入り、出てきた時に晩飯が出来たので先に夕食を済ませた。夕食も温かな食卓で食べることが出来て満足だった。

そして、今の温泉は男性陣が入ることになっている。陣と言っても俺とエリオただけだけど。右手の甲に浮かんでいる紋章を隠すために体に巻くタオルの他にもう一枚、タオルを持って右手に巻いていた。

ガイ「あゝ、温まるわゝ」

エリオ「そうですねゝ」

俺たちは湯船に肩まで浸かって、訓練で頑張ってくれた体を癒していた。

ガイ「なあ、エリオ。1つ聞いてもいいかな？」

エリオ「はい、なんででしょう？」

隣で座っていたエリオが爽やかな笑みをこっちに向ける。あの訓練の後だというのに元気だな。

ガイ「エリオってどのような経緯でフェイトさんの養子になったの？あ、話したくないければいいけど」

俺は家庭内の事だからあまり部外者に話すものではないと思い、付け足し補足した。フェイトさんが養子を取った経緯を知りたかった気になる人の事はちよつと調べたくなる。

エリオ「いえ、別に隠すようなものでもありませんから」

だが、エリオは特に気分を損ねた様子もなく、笑ったまま語り始める。

エリオ「プロジェクトF”って知ってますか？」

ガイ「ん〜、知らないな」

エリオ「正確に言えば“プロジェクトF・A・T・E”ですね」

ガイ「フェイト？」

俺の言葉にエリオは頷く。フェイトさんの名前と同じだというのは偶然なのか？

エリオ「内容は大雑把に言えばクローン技術ですね。別の物に“記憶転写”を施し、新たな生命を誕生させるモノです。僕はそれによつて生まれてきました」

ガイ「じゃあ、エリオはクローン？」

エリオは笑いながらも頷く。どうして、クローンだと相手に知られても笑っていられるのだろうか？

エリオ「ちなみにフェイトさんもその技術で生まれたクローンです
ガイ「……………!？」

頭の側面から硬い何かがぶつかった衝撃のようなモノが走った。エ

リオには悪いけど驚きを隠せない。クローン技術は人権の尊重を著しく悪くさせるものであり、命を弄ぶようなもだと言う事なので禁止されている。その禁忌によってフェイトさんもエリオも生まれてきているのだ。そんな驚きの表情をしている俺を見てエリオは語り始める。

エリオ「僕のモンディアル家には1人の子どもがいました。その子の名前もエリオ・モンディアル。僕のオリジナルですね。その子が病死した時に秘密裏でプロジェクトFの技術を行って僕を誕生させました。しばらく一緒に親と生活をしていましたが、局にその技術がバレて、親と引き離されてしまいました。親は必死に抵抗していましたが、僕がクローンであることを突き付けられたとたんに親が抵抗を止めてしまい、また、研究施設での非人道的な扱いを受けて一時期極度の人間不信に陥っていたこともありました」

言っている事はすごく重く暗い話だ。それをエリオはいい思い出話のように語っている。フェイトさんの教育が良くてもあまり思い出したくない話だと思うのだが。トラウマ級の昔話を簡単に語る事が出来るのはエリオの精神が強いのだろう。

俺の周りにはどうしてこう、俺よりも年下の子達がこんなに強いんだろう。ヴィヴィオにしるアインハルトにしる。

エリオ「研究施設でフェイトさんが僕の事を見つけてくれて保護してくれて、医療センターへ治療していた頃も極度の人間不信だったので誰も信用できなくて」

エリオは一度、温泉のお湯を手ですくって顔にかけた。ふー、っと息を吐いて続きを語る。俺は静かに耳を傾けた。

エリオ「あの時はとにかく悲しくて自分の不幸を誰も分かってくれ

ないって怒ってて。だけどフェイトさんが、まだ僕の保護責任者になつてくれる前の本当は僕のことなんて無視しても良かったはずのフェイトさんが会いに来てくれて、八つ当たり気味でぶつけた魔法を……あの人はバリアも張らずに受け止めてくれました。自分も同じように生まれただって」

フェイトさんが過保護すぎる理由はこの時も発動していたのか。これほどまでに過保護なのはフェイトさん自身が何か経験した事が教訓になっているのだろう。

エリオ「それで正式に保護責任者になつてくれて、本当にずっといんな面倒を見てくれて。会いに来てくれるたびいつもにこにこして、うれしそうで、いろんなことを教えてくれて、遊んでくれて……なのにワガママを言ったりもして。たくさん心配かけて優しくしてもらって、それがどれくらい幸せだったのかもやっと分かってきました。フェイトさんには感謝しても足りないくらいです」

流石にエリオの辛い過去話だ。殊勝に笑いながら話しかけていたが、エリオの表情に少し曇った。当時、フェイトさんに迷惑を掛けてしまった事が申し訳なかったのだろう。

ガイ「いい母親を持ったな。エリオ、フェイトさんを泣かせるような事はしちゃダメだよ」

エリオ「もちろんですよ」

エリオが爽やかな少年の笑みを作り、瞳には強い意志が籠っていた。フェイトさんのために色々と何かしてあげたいのだろう。親孝行みたいなものか。

ガイ「なあ、“プロジェクトF”ってフェイトさんに関係が合った

技術なのか？」

エリオ「フェイトさんの親がその技術を作り出したと言っていましたね。私のオリジナルが死んだから、とか言っていました」

クローンである2人の生まれ方はその技術を使った人物の寂しさを埋めるために作られた命だ。これは命を弄んでいるとも言いかえられる。そう考えると2人の事が可哀想だと思ってしまう。

エリオ「すいません、そろそろ上がりますね」

ガイ「ああ、話してくれてありがとな」

いえ、とエリオは相槌を打って笑みを浮かべながらお風呂から上がって行った。

俺はふう、と息をついて夜空を見上げる。ここも星が大きく見える。エリオがフェイトさんの養子になるまでの過去話を聞いてしまったが、その内容にフェイトさんがクローンだったというのは驚きを隠せなかった。“プロジェクトF”はあまり良い技術ではない。でも、2人を見るとクローンだとは思えないほど明るい。

ガイ「……………クローン、か」

俺は孤児院で共に生活していた今は亡き子供たちを脳裏に思い浮かべた。もし、その子供たちのクローンが作れるとしたら。JS事件のあの時の日だったら俺は、子供たちが再び笑ってくれたらと思うと、その技術に手をつけている自分が居るだろう。

禁忌だと知っていても。フェイトさんやエリオの親がしてしまった事には同情を得ることは出来る。だがそれは人の領域を一步踏み外したものだ。決して良いものではない。

クローン技術の世間の影響と反抗など、その事について少し考え込んだ。

ガラララッ

と、そこに入口の扉が開いた音がした。エリオが忘れ物でもしたの
だろうか？考え事をしてから十分位たっただろうか。そろそろのほ
せてしまうので出るのも良い。

俺は入口の方へ視線を向けて出るためにタオルを持った。

オリヴィエ「あ、ガイ」

ガイ「……………は？」

私は脱衣所で服を脱ぎ始めた。お風呂よりもクラウドスの回顧録を読みたく、食事の後も見続けて温泉に入るのに少し遅れてしまいました。

まあ、この時間帯なら誰も入っていないと思いますから、のんびり入りますか。カラーコンタクトはまだ外さない方が良いでしょう。他にも入っていない人がいるかも知れませんが。

私は下着も脱いでタオルを持って扉を開けようとした。

なのは「あ、フリージアさん」

フェイト「まだ入ってないのですか？」

と、そこになのはとフェイトが脱衣所に入ってきた。

オリヴィエ「なのは、フェイト、訓練お疲れ様です」

私は2人を労った。夕食ギリギリまで明日の準備をしていたらしいのでメンバーの中では一番、疲労度が高いだろう。

なのは「うわ〜、フリージアさんっていいスタイルしてますよね〜」

なのは私の生まれたままの姿を見て率直な感想を言ってきた。

オリヴィエ「そうでしょうか？私が見る限り、なのはもフェイトも良いスタイルをしていると思います」

そんなことないですよ、となのはが軽く否定する。フェイトは心配そうな表情をして私に声をかける。

フェイト「ごめんね、フリージア。そのままじゃ風邪ひいちゃうよ

ね。先に温泉に行つてて。私たちもすぐ行くから」
オリヴィエ「わかりました。ご厚意ありがとうございます」

私が笑つて、フェイトも微笑む。
そして、私は扉を開けた。

ガラララッ

開けた先に見えた光景。それはとても広い温泉浸かっていた男性が視線をこちらに向けて温泉から出ようとしていた。その人物はすぐに分かった。

オリヴィエ「あ、ガイ」

ガイ「……………は？」

ガイは一瞬何が起こつたのか分からなかった様子だが、裸体の私を見るとすぐにその視線を逸らして背中を向けて温泉に入り直した。

ガイ「な、なんでここに居るんだよ／＼！！入つたんじゃないのか／＼？」

オリヴィエ「いえ、少し読みたい本がありましたので読みふけてしましまして」

そう言いながら、ポチャンと音をたててガイの隣に入る。ガイは私の方に視線を向けようとはしない。いや、向かないように必死に耐えていたの方が表現に合う。そんな必死な行動に私は軽く笑つた。

オリヴィエ「そんな恥ずかしがらなくても」

ガイ「少しは恥ずかしがれよ／＼俺は出るぞ／＼」

ガイは温泉の中でタオルを下半身に巻いて私のほうを向かないように上がるうとした。

なのは「さ、お風呂入ろう、フェイトちゃん」

フェイト「さつき、フリージアが入って行っただし、少しお話でもしようかな」

ガラララッ

と、先ほど脱衣所に居たなのはとフェイトが入ってきたようだ。

なのは「あれ？ガイ君？」

フェイト「え？」

ガイ「なのはさんとフェイトさん!？」

なのはもフェイトもガイの存在に気付いた。私は2人の方に視線を向ける。バスタオルを体に巻いている姿だ。

フェイト「あ、ガイ、まだ入ってたの／＼/?」

ガイ「す、すいません、すぐに出ますんで／＼」

フェイトは異性であるガイが居た事に恥ずかしかつたからか、少し頬を染めてバスタオルをギュッと締め直す。私には理解できませんが。

オリヴィエ「なのはもフェイトも入らないのですか？」

なのは「うん、ガイ君が居ると、ね／＼」

なのはも少し頬が赤くしながらバスタオルの結び目に手をかけて、後ろを向いているガイの方に何ともいえないような笑みを浮かべる。

ガイ「す、すぐにで、出ますので／＼／」
オリヴィエ「そんなに焦らなくても」

ガイは私の言った言葉を聞いているような素振りは見せず、タオルで下半身を覆っている格好で温泉から出て、なのはやフェイトを視界に入れないようにして風呂場から出て行った。

フェイト「うん、ちょっと恥ずかしかったかも／＼／」
なのは「だよね／＼／」

そう言いつつ、2人は私の入っている温泉にゆっくりと浸かった。

なのは「はあ、あつたかい」
フェイト「そうだね、癒される」
オリヴィエ「確かにいいお湯です」

私たちは温泉に肩まで入った。2人は疲れが溜まっていたのか、表情が緩んでいる。完全に気が抜けたのだろう。

なのは「でも、ガイ君ってさフェイトちゃんの事好きなんじゃないの？」
フェイト「え？そ、そうなの？」

ガイがフェイトの事が好き？それは初耳ですね。私は2人の会話に耳を傾けた。

なのは「何とかいうか、ガイ君はフェイトちゃんが居るとなんだか嬉しそうな表情をするし、フェイトちゃんと話している姿は楽しそうだったよ」

フェイト「で、でも、それだけじゃ好きだとかはわからないでしょ

？」

フェイトはちょっと戸惑っている様子だ。

なのは「それにさつき、去り際にチラッとフェイトちゃんの姿を見たような」

フェイト「ふえ！？」

フェイトはバスタオルを巻いていたとはいえ体を見られた事に驚きを隠せない様子。

オリヴィエ「ですが、ガイは私の裸体を見た瞬間、視線を逸らす純情過ぎな人ですよ。そんな人が去り際にフェイトの姿を見ますかね？」

なのは「あ、嘘がばれちゃった？」

なのはは片目を閉じて、舌を出して笑った。私は先ほどの言葉はなのはの嘘だと分かった。自分も恥ずかしがっていたのだから、ガイを見ている暇はないと思ったからだ。

フェイト「ガイは私の事が好きなのかな？」

なのは「ん？フェイトちゃん、ガイ君と付き合いたいなの？」

なのはがそう言うとフェイトは首を横に振る。

フェイト「私なんかよりもフリージアの方がガイの事詳しく知っていきそうな気がするから、付き合うならフリージアの方がいいんじゃないかな？」

フェイトの自分よりも私を選んだ方が良いという事を聞いたなのは

は笑いながらも少し暗い表情をしてしまった。

オリヴィエ「ですが、私には婚約者がいますので
フェイト「こ、婚約者!？」

やっぱり、となのはから聞こえた気がした。フェイトは知らなかった様子で驚いていた。

オリヴィエ「名前は秘密です」

なのは「いいですね〜フリージアさん。私にもそんな人いないかな
」
フェイト「なのはもガイはどう?」

今度はフェイトがなのはにガイのを進めてきた。だけど、なのはは少し困った表情をした。

なのは「うん、ガイ君も悪くないんだけどね。不屈の心を持つてるし。でも、ヴィヴィオがね〜」
フェイト「ああ、そっか」

フェイトはなのはが皆まで話していないが納得した表情をした。私には分からない。だから聞いてみる。

オリヴィエ「ヴィヴィオがどうしたんですか?」
なのは「ヴィヴィオはガイ君の事が好きなんだよ」
オリヴィエ「……………そうなのですか?」

まだ観察している時間は短かったが、兄弟のような雰囲気を出していたガイとヴィヴィオだと思っていただけになのはの言葉は衝撃を受けた。

なのは「ま、でも、ガイ君のほうはヴィヴィオ達に兄弟のように接しているような雰囲気を持っていただけだね」

オリヴィエ「ええ、確かに」

なのはが私と同意見だった事に嬉しさが胸に膨らんだ。やはりガイとヴィヴィオ達は周りから見れば兄弟のように見えるようだ。

フェイト「……………」

フェイトはふう、と息をつき夜空を見上げる。何を思っているかはわからない。

オリヴィエ「ガイは幸せ者ですよ。こんなにガイのために考えてくれている人がいるなんて」

なのは「ガイ君は過去に少し苦い経験をした事があるからね」

フェイト「うん。だから、1人暮らしをしているガイが寂しいと思うからこつちに来てもいいよって何時も言ってるんだけどね」

フェイトは過保護すぎだとガイは言っていたが、この状況からすればなのはも過保護な性格だ。

フェイト「ガイには幸せになってほしいね」

なのは「うん」

オリヴィエ「……………」

私はその事に素直にうんと頷けなかった。これから始まる聖杯戦争で彼は幸せを掴めるのかはわからない。もしかしたら死という絶望になってしまいかもしれない。それを防ぐために今回の訓練に参加したのだ。

2人からガイの幸せを願っている事を聞いたので私はそれを確実に叶えさせるために、ガイをこの合宿で“虐め”鍛えませんかね。

オリヴィエ「人徳が厚いですね、ガイは」

私は2人に微笑んだ。2人もその言葉を聞いて軽く笑ってかもね、と頷いた。

部屋

ガイ「はあく、びっくりした」

俺はベッドにうつ伏せで枕に顔を埋めていた。先ほどの出来事が脳裏に浮かんできた。

オリヴィエが温泉に入ってきて、その後になのはさんとフェイトさんが入ってきた。チラツと見えてしまったが、なのはさんもフェイトさんもバスタオル姿でありながら浮かび上がるラインは整ったスタイルと認識するには十分だった。

ガイ「……………心頭滅却だな」

俺は脳裏に浮かんでいた先ほどの光景を振り払って考えることをやめた。明日は練習会が行われる。大人も子供も皆混じった陸戦試合。ようは皆で模擬戦だ。

先ほどチームメンバーを割り振られた紙を貰った。確認しようと思っただが

ガイ「眠い……………疲れたな」

疲れを取るための睡魔には勝てることが出来ず、そのまま意識を手放した。明日に支障が出ないようにしっかりと睡眠を取ることにした。

十話“合宿と思考の交差”（後書き）

やっと十話。されど聖杯戦争はまだ始まらないw

のんびりと時間軸は進んでいけばこんなものですかね。

何か一言感想いただけると嬉しいです。

今後もこの小説を読んでくだされば幸いです。

では、また（・・）／

十一話“集団と集団の交差（前編）”（前書き）

やはり魔術と魔法の価値観や観点の違いって難しいですね。

いろいろ調べていろいろ考えていろいろな結論が出ました。

今回はその一つの結論を簡単に表示していいことと思います。

魔法と魔術の価値観や観点の違いはキャラクターによって考え方が
違いますからね。

では、十一話目入ります。

十一話 “ 集団と集団の交差（前編） ”

アパート

凜「なるほどね……………」

私は黒い縁の丸い眼鏡をかけて、丸いテーブルに向かってペンを走らせて座っていた。丸いテーブルの上には様々な本が開いた状態で重なっていた。

私がかちらの世界にきて1〜2週間ぐらい経つだろうか？最初にこちらの世界にきて買った物は言葉辞典だ。こちらの世界の文字がまったく読めない。言葉は通じるのに文字は互いに別ものであるのは少しおかしい。

ともあれ、言葉辞典で何とか言葉を読めるようになっていき、この世界の在り方についていろいろと考えることにした。最初はこの都市が出来る成り立ちを調べるために歴史の本を買おうと考えていたが、都市の中を歩いていると、所々に“魔法”という単語が言葉や文字などに含まれていて眼や耳を疑った。

この世界では“魔術”の上位互換でもある“魔法”が当たり前のよう存在して、その技術を活用して発展している。秘匿情報の“魔術”の上をいく“魔法”が日常生活に溶け込んでいる事に驚きを隠せない。それと同時に“魔法”を使い続けているのにこの世界の魔力はほとんど失われていない事に疑問が残る。

なので、私は“魔法”に関する様々な本を買って、“魔法”に対して徹底的に調べることにした。

凜「とりあえず疲れたわ〜」

私はずっと文字と睨めっこしていたので目が疲れた。本から視線を離して眼鏡を外し、そのまま後ろへ倒れた。はあ、と息をついて天

井を見上げる。視界に入るのは丸い電灯が付いているだけの天井だ。

セイバー「奏者よ、だいぶ疲れているようだの」

と、声とともにこの部屋のもう1人の住人であり私のサーヴァントである赤いセイバーが私を見下ろすような形で逆さまに映って視界に入る。

凜「やっと山場を越えて張りつめていた緊張の糸が切れて、脱力感が一気に来たって感じよ」

私はふう、と息を吐いてセイバーを見た。そんな様子を見たからかセイバーが子供のような無邪気な笑みをした。

セイバー「奏者はずっと調べモノばかりで部屋を出ていないのだ。気分転換に何処かに出かけようではないか」

凜「ダメよ。この“魔法”というモノを調べ終わるまでは安心できないわ。山場を越えたと言ってもまだ全てのからくりは理解していない。今回の聖杯戦争は“魔法”を使うマスターが多いはず。それの対策をしないと不利になるわ」

出かけたがっているセイバーの意見をきって、私は徹底的に調べたいと主張する。

この世界は“魔法”が基準となっている。“魔法”を根本から理解しないと対策を取る事が出来ない。いつ始まるかもわからない“聖杯戦争”があるのだから、それまでに何とか対策を取らなければ。しかし、自分の意見をきられてしまったのにセイバーは表情を変えずに今の現状を上げてきた。

セイバー「だが、今のマスターを見ると、研究があまり進んでいる

ようには見えないのだが？」
凜「つく……………」

痛いところを突かれた。確かに文字が読めるようになるまで3日ぐらいかかったが、そこから“魔法”を理解しようと今まで調べ続けていたがあまり進んでいない。“魔術”と“魔法”の思考観点が違うから理解するのに時間がかかるが、このままのペースでいけば“聖杯戦争”が始まる前にきつと“魔法”を根本から理解することが出来ないだろう。山場を越えたとはいえ、それはやつと“魔法”がどのような成り立ちで出来ているかを理解できただけだ。まだ、根本的な理解から対策まではほど遠い。

セイバー「そもそもマスターは“魔法”の何に対して困惑しているのだ？“魔術”の知識なら多少、“魔法”に関しては知識はあまり無い余だが、整理がてらに余に話して見るがよい。その結論から第三者からの意見を述べよう」
凜「……………そうね」

私は第三者の視点から新たな情報があるかもしれないので、今まで調べたモノをセイバーに話してみるのも良いと思い、セイバーの言葉に同意して、上半身を起こした。目の前には丸いテーブルの上で私の理解の外にある情報を開いて待っている本の山が視界に映る。対面にセイバーは座った。

私は一度、部屋を見渡した。ここに来てから、“魔術”の実験道具をいくつか購入しているため、机にはピーカーや試験管などが置かれていたが、他は来て掃除した時の状態のままだ。

特に飾りを付けるような事をするつもりは無いし、金も配られただけだから最低限の生活用品と必要な物しか買えない。嗜好品である紅茶も節約しないと。

セイバーは部屋を飾ろうとしない私に対して不満を言ってきたが、

現状は贅沢を行う事は出来ないと思われ、説得して何とか理解してもらった。あれだけしつこく迫って来たのだから、このセイバーの英霊は成金生活をしてきたのではないだろうか？

凜「で、“魔法”の事についてなんだけど」

私は思考を切り替えてセイバーに今まで調べてきたモノを語り始めた。

凜「魔法” っていうのは“世界に元々存在する概念”を媒体として、生成した術の構成を対象となる概念に渡し、術の発動そのものは術者ではなく、概念側でやってもらうというもの”
セイバー「ほう、つまりは“魔法” っていうのは“術者”と“概念”の二つで成り立っているのだな」

ええ、と私はセイバーに相槌を打ち、話を続ける。

凜「特性としては、どうしても“設計図を渡して術を発動してもらおう”という手順が必要になるの。だから術者の力量がどれだけ上がっても、詠唱完了から発動までのタイムラグをゼロには出来ない。けど、発動に必要な“概念”の使役さえ出来れば、時として術者の力量を超える術を使用出来るわ。また、その性質上、複雑な術でも決まった構成を渡してやれば、ある程度までは補完できる”
セイバー「なんだ、“魔法” っていうのは“概念” とやらに頼りっぱなしではないか」

うむ、と何故か誇らしげにセイバーは頷く。

このセイバーは“魔法” に何やら興味津々のご様子だ。セイバーにとっても“魔法” は新たな領域の知識なので知りたいのだろう。私はまあね、と言って続きを説明する。

凜「“概念”を使用するってことは使用した分だけ“概念”は消費していくの。元の値に戻すにも長い年月が必要。“魔術”の視点から見ると、この“概念”というのは魔力に値するわ。言い方は変わるけど“概念”と魔力は同じモノよ」

セイバー「言葉が違うだけで同じモノか。だが、それだと………」
凜「そう、“魔法”の都市なのにこの世界に来た時に調べてみた魔力が膨大に残っているのはおかしいの」

来た時に調べた魔力はほとんど手づかずの状態。これほど“魔法”が日常生活に侵食しているというのに。

セイバー「なら“魔法”を発動させる触媒は魔力ではないのではな
いか？」

凜「ええ、答えは多分この雑誌に書いてあるモノだと思う」

私は開いている一冊の雑誌をセイバーに見せた。タイトルは“独占！！エース・オブ・エースの実態”と書かれている。表紙には栗色の長い髪をサイドテールにして、白を特徴的に表している服やロングスカートを着て、凜とした表情で長い杖を構えている人物が映っていた。

セイバー「これは？」

凜「中を読んでみたけど“デバイス”というモノがこの人の魔力を調整して徹底的にサポートしているんの。“デバイス”はこの杖の赤いコアのこと」

とんとん、と杖の部分を突いてセイバーに教える。セイバーはそれを見て頷き、雑誌を手に取りパラパラとめくる。だが、すぐに表情を頑なにして怒った表情を見せる。

セイバー「読めぬではないか!!!」

凜「まあ、この世界のミッドガル語を覚えないと読めないわね」

私は雑誌に書かれている文字が読めずに口をへの字にして怒っている表情のセイバーに子供を甘やかすような頬笑みを向けて苦笑した。セイバーはその雑誌を様々な本が散乱している丸いテーブルに置く。

凜「この人はオーバーSランクの魔力の持ち主なんですって。この世界は魔力にランク付けされているのね」

セイバーはほう、と呟き、私の話に再び耳を傾けてくる。私はそんなことどうでもいいけど、と付け足して、その雑誌の表紙の人物を見た。詳しくはその人物が持っている杖を見ていた。

凜「ここからは私見なんだけどこの“デバイス”が“概念”の代わりになって、“設計図”を発動させる事が出来るんじゃないのかなと考えているの」

セイバー「その“デバイス”が“概念”の役割を果たしているのか」
凜「推測の域だけどね」

まだ確たる証拠はない。一度、この“デバイス”というモノが見れる機会があればいいのだけど。私は丸いテーブルに肘をつけて右手を顎に付けて、右手に体重をかけて雑誌からセイバーに視線を向ける。

凜「それに、この世界は“魔導”というモノが存在する。独自のエネルギー運用技術が存在して、時空管理局という所で活用されているわ。この雑誌に載っている人物も時空管理局の一員で“魔導師”と呼ばれているらしい」

容姿も結構な美人よね。“エース・オブ・エース”という肩書も付いている。時空管理局の切り札なのだろう。

凜「たぶん、“デバイス”を使わないで魔力を行使すると、それは私が提示した理論の“魔法”になると思うの。で、“デバイス”を使う事によってそれは“魔法”ではなく“魔導”になるって感じね。だから、大気に存在する魔力はほとんど使われることが無いって結論なんだけど、何か異論ある、セイバー？」

私は肝心な所で凡ミスをする悪癖がある。先祖代々の遺伝らしい。実に困ったスキルよね。失敗をそれを阻止するために、大きな事をした後は周りに確認することが大事だ。

セイバー「おおむね、“魔法”については理解したつもりだ。“魔導”というモノは“デバイス”を見ないと何とも言えぬが」

それには同意するわ、と私はセイバーに賛同した。でも、それは科学の技術らしい。私とは相容れぬものかも知れないわね。

そう考えているとセイバーが先ほどの雑誌の人物に指をさして質問してきた。

セイバー「1つ疑問がある。この人物の魔力ランクはどのように決定したのだ？」

凜「人にはそれぞれ“リンカーコア”というモノが存在するらしいの。その量や質によってランク付けされているわけ」

ほう、とセイバーは興味津々な様子で私に詰め寄る。私はそれに左手を置いて制し、肘を丸いテーブルから離して、姿勢を戻す。

凜「まあ、“魔術”の観点から考えてみるとそれは人の魔力の源、もしくは生命力の部分ってところかしらね。私たち“魔術師”はそれを疑似神経の“魔術回路”を作って精製して魔力にして術^{イテ}を行使しているわけだし。元をたどっていけば原点は“魔法”も“魔術”も同じだというわけ」

セイバー「用は原点の使い方次第で“魔法”にも“魔術”にも化けるのだから、奏者も“魔法”が使えるのではないか？」

凜「そこは何とも言えないわね」

私は軽く笑って首を振り、セイバーの意見を可とも不可ともしない言葉で返す。

凜「魔法」と“魔術”は扱うチャンネルが違うから両方使える人物はたぶん存在しないと考えているわ。1つの入れモノにそれと同じ質量で異なるチャンネルが2つあっても、2つは入らないものでも……」

そこで、私は“聖杯戦争”のルールを思い出して口にした。

凜「マスターになるための最低限の条件は“魔術回路”が有ること。これが無いと参加資格である“令呪”を聖杯から受け取れない」

セイバー「だが、この世界の住人達は“魔法”に特化しているのだろうか？それだと“魔術回路”など元々チャンネルが違うのではないか？」

凜「そうなのよね。もしかしたら、この世界の住人がマスターだつてことはないかも知れない。地球から私のように呼ばれた“魔術師”だけかもね。でも、“魔法”はまだ未知数だから何とも言えないわ」

私はこの矛盾を解けないから先へ進めない。もし、“魔法”と“魔

術”両方を使うとしたら……。

凜「両方使えたら化け物かもしれないけど“魔術”が暴走するわよ。きつと」

私はセイバーから視線を離し、天井を仰いだ。

“魔術”の術の発動は“魔法”とは違い、術者自身が完全に制御しなければいけない。“魔術”の特性としては、術の構成を練る際に自分以外の魔力……要は大気中に存在する魔力を集めて、自分自身の魔力と一緒に練り上げる。でも、限界以上に魔力を集めようとすると自滅するから、術者が自分の力量をしっかりと把握しておくことが必要。

ここに“魔法”を行うための“概念”としている魔力を大気から取り込んだら、“魔術”と併用して集め過ぎて自滅する。自身で精製するモノが魔法分野で存在しているとしても“魔術回路”と併用できるモノとは思えず、暴走してしまうだろう。

この2つは相容れぬ存在、1つのモノに同じ質量の異なるチャンネルは2つと入らないのだ。

セイバー「確かに“魔法”というモノはもう少し調べた方が良さそうだな。しかし興味深いモノでもある。うむ、美しいモノだとしたら尚更だ」

凜「……あなたは結局そこにたどり着くのね」

私は誇らしげに微笑むセイバーを見てため息を吐いた。

ここ1〜2週間、セイバーと共に過ごしてきて分かった事だが、このセイバーは美術の心得でもあるのか美しいモノを好む性質のようだ。美しいものなら男も女も愛でるといって寛容なお方だ。

どうやら私も美しいモノの分類に入るようだ。それは嬉しいのかどうかは分からないけど。

凜「まあ、とりあえず、今後も“魔法”に関して調べていくわよ」
セイバー「うむ、どのようなものか期待しておるぞ」

そう言つて、セイバーは満足したのか霊体化した。

凜「結局、第三者の意見は聞けなかったわね。まあ、『美しいモノ
だとしたら』がセイバーっぽい第三者の意見よね。さ、続きやろう
かな」

私は軽く笑つて、ん、と言いながら腕を思いつきり伸ばして、黒
く丸い眼鏡をかけて再び丸いテーブルに開かれている本に目を通し
始めた。

????

フェイト「好きだよ、ガイ」

ガイ「え？」

眼の前にはフェイトさんが真剣な表情でその迷いの無い赤黒い瞳を向けて好きだと発言してきた。いきなりの事に俺は戸惑った。

フェイト「だから、ね……………／／／」

シユルルル

ガイ「フェ、フェイトさん／／／」

フェイトさんは恥じらいながらも服を自分から脱いでいく。俺の目の前で服の脱ぐ音をしながらフェイトさんが一枚一枚服を脱いでいく。そして、なぜかバスタオル姿になって勢いよく俺に抱きついてくる。フェイトさんの胸が当たる感触が何とも言えない。

フェイト「ギュってしたいな……………そのまま……………／／／」

ガイ「あつ……………／／／」

急接近して、頬を赤く染めて俺の事を見た後、眼を瞑ったフェイトさんの姿を見て、俺は……………

ゴンッ！…！

ガイ「つつ……………」

と、いきなり後頭部にハンマーで叩かれたような強い刺激を受けた。それと同時に視界からフェイトさんが消えた。

ガイ「……………夢？」

俺はベッドから落ちていた。先ほどの刺激はベッドから落ちた時に受けた衝撃だ。毛布も一緒に落ちていたので多少は衝撃を和らげたのだろう。

ガイ「あれは……………」

先ほどの夢の出来事を思い出す。フェイトさんに告白されて、服を脱いでいき抱きつかれて、その後は……………

ガイ「うわぁ……………」

最悪な夢を見たと認識した。いや、最高の夢だろうか？夢は寝ている間に脳の整理を行っている時にたまに見れると聞く。あの夢を見た原因は昨日、温泉でフェイトさん達に合ったことだろう。その時にチラリと見えてしまったフェイトさんとなのはさんのバスタオル姿を見て脳で映像が残って、あの夢を見てしまったわけだ。

あんな夢を見た後にフェイトさんの顔を平常心のままで見れるだろうか？

ガイ「……………怪しいな」

多分、無理だろう。俺ははあ、とため息をついて窓の外を見る。まだ薄暗い時間帯だが、あと三十分もすれば日の出が現れるだろう。そつえば昨日、チーム戦を行うためにメンバー表が配られた紙が

渡された。昨日は疲れて寝て確認してなかったが、どのようなチームになっっているだろうか？

俺は二度寝する気もおきなかったのでテーブルに置かれていた一枚の紙を取るために起きた。紙を手に取りチームを確認する。

赤組

F A …… アインハルト、ノーヴェ、ガイ

G W …… フェイト

W B …… コロナ

C G …… ティアナ

F B …… キャロ

青組

F A …… ヴィヴィオ、スバル、フリージア

G W …… エリオ

W B …… リオ

C G …… なのは

F B …… ルーテシア

ガイ「前線メンバー多いな」

俺も前線メンバーに加えられている。オリヴィエも前線メンバーのようだ。

そういえば、オリヴィエとは戦った事が無い。“聖杯戦争”の前に実力を知っておくのも悪くはない。

まあ、人数も同じだし、1対1で対決するだろう。ヴィヴィオかスバルさんかオリヴィエか。

ガイ「少し体を動かしておくか」

これから始まる大きな模擬戦に少なからずも気持ちが弾んでいるのだらう。子供が親におもちやを誕生日に買ってくれと約束してくれて、それまでの日を毎日のように数えて楽しみにしているような気持ち。

このような楽しみを待つ気持ちは久々に感じた様な気がした。

ガイ「浮かれてるな。いろんな人と対戦できるかもしれないこの状況で」

俺は苦笑いしながらも、今の自分の気持ちがわかっていて。

プリムラ『私も精一杯のサポート致します』

ガイ「ああ、頼むぜ、プリムラ」

これから行う模擬戦はいろいろと経験を積めることは出来そうだ。“聖杯戦争”が始まるまでにやれるだけの事はやっておこう。俺は朝練を行うために着替えて部屋を後にした。

森

コロナ「ブランゼルはいい子だね。賢いし私に合わせてくれるし」
ブランゼル「ありがとうございます」

私は昨日の夜にルーちゃんから渡されたインテリジェントデバイスの起動調整のために朝早く起きて、森の中で調整していた。この子は本当に賢い。見た目は短剣にバラのような形をした造形品が鍔の部分についた形をしている。
この子はすぐ私の魔力に合わせてくれるし、ゴーレムも私が想像したものとほぼ同等な出来上がりだ。

コロナ「うん、これなら今日の模擬戦頑張れるね」
ブランゼル「そうですね」

私は笑ってブランゼルの待機モードに戻した。後は模擬戦で頑張るだけだ。

コロナ「戻ろうか」
ブランゼル「ええ。ですがこの近くに魔力反応がありますね。誰かいるんでしょうか？」
コロナ「え？誰だろう？」

ブランゼルから魔力反応有りと言われたので誰が居るのか少し気になった。

コロナ「ちよつと挨拶して行こうか」

ブランゼル「こつちです」

近くに人がいたのなら挨拶ぐらいはしておかないとね。

私はブランゼルに言われた方向に歩を進めた。少し進むと少し広がつた空間が出来ている場所に出た。そこに1人の人物が背を真っ直ぐにして胡坐をかいて、手を組んで眼を瞑っていた。

コロナ「あ、ガイさんだ」

私はその人物がガイさんだと知って、少し脈が早くなったのが分かる。近くにガイさんが居たことに嬉しさを感じた。ガイさんがしている胡坐の上には鞘に納めている刀が寝かせてあった。

ガイさんの周りの雰囲気は何処となく穏やかで静かだ。まるでガイさんの周りだけ周囲とはかけ離れていて、別世界に存在しているのではないかと思うくらいだ。

ガイさんは先ほどから動かない。寝ているわけではないようだが何をしているのだろうか？

私はガイさんに近づくと事にした。

コロナ「私が近づいても目を覚まさないね」

ブランゼル「寝ているのでは？」

ガイ「……………寝ているわけじゃないんだがな」

コロナ「ひゃう!？」

突然ガイさんが発言してきたので私は驚いて変な声を出してしまった。ううっ、結構恥ずかしい。

コロナ「ね、寝てたんじゃないんですね／＼」
ガイ「座禅を組んでいた。精神統一するためにな」

私は顔が赤い事に自分でも分かっていて。さっきの変な声をガイさんには聞かれたくなかった。

ガイさんはそんな私の気持ちも知らずに静かに目を開けた。

ガイ「……………コロの新しいデバイスか？」

コロナ「あ、うん、私のデバイスだよ。ブランゼルって言うんだ」

私の手に持っているブランゼルに興味があるのかガイさんの眼がそちらに向いていた。

ガイ「いい名前だな」

コロナ「えっ……………」

ガイさんはブランゼルという名前が良いと言って笑ってくれた。最初は一瞬何を言ったのか分からなかったがそれが褒められている事だと認識すると、とても嬉しく感じた。それは私が付けた名前だから。

コロナ「あ、ありがとうございます、ガイさん。ガイさんのデバイスもいい名前ですよ。たしか、プリムラって花の名前ですよ？」

ガイ「男には似合わない名前だよな」

ガイさんは苦笑しながら私に笑みを向けてくれる。

ガイ「ま、でも花言葉は“運命を切り開く”だからプリムラって名前は好きだね」

プリムラ『ありがとうございます、マスター』
コロナ「そうだったんですね。知らなかった」

運命を切り開く………なんか、ガイさんにピッタリ合うような言葉だと思った。何故そんな風に思ったのかはわからない。ただ、単純にそう思った。それだけ。

コロナ「今日の模擬戦は私たちチームですね」
ガイ「そうだな。よろしくなコロ」

ガイさんはそう言って、立ちあがる。
今回のチームはガイさんと一緒。それがとても嬉しいと思っているのはガイさんには内緒だよ。

ガイ「そろそろ戻るか」
コロナ「はい」

私はその思いを胸の中にしまって、私たちは宿泊ロッジに戻るため歩きだした。

コロナ「ガイさんは模擬戦前に精神統一していたんですね」

私は当たり前のような事を聞いた。たぶん私は少しでもガイさんと長く話をしたいからこんな当たり前なこと聞きたいのだと思う。それはYesと答える質問しかないと思っていたがガイさんからは予想外な言葉が返ってきた。

ガイ「あゝ、いや模擬戦のためにしたわけじゃないんだよね。模擬戦に向けて朝練はしといたけど」
コロナ「え？」

精神統一は気持ちを引き締めるために行うもの。それを模擬戦の前にやるのだから、模擬戦に向けて行っていたものだとばかり思っていた。

コロナ「えつと、では何のために？」

ガイ「……………自分の整理したものにちよつと嫌気がしてね。平常心を保つ為に行つただけさ」

良く言っている意味が分からなかった。私が困惑した表情をしていると、ガイさんは軽く笑つて、気にしないで、と、優しく声をかけてくれた。

フェイト「あ、ガイとコロナ。おはよう」

と、宿泊ロッジに戻ると、フェイトさんが笑顔で出迎えてくれた。他にもティアナさんやキャロさんが朝食の準備をしていた。

コロナ「おはようございます、フェイトさん」

私は頭を下げた挨拶をした。しかし、いつまでたつてもガイさんの挨拶が聞こえなかった。私は頭を上げて、ガイさんの方を見た。

ガイ「あ、え、えつと……………／／／」

何故か眼を泳がせて言葉に出来ない様子で顔を赤くしていた。緊張しているのかな？この前の無限書庫に行った帰りにヴィヴィオの家でガイさんはフェイトさんにメロメロのような感じがしていたし。ガイさんはフェイトさんの事が好きなのかな？それはちよつと嬉しくない。

フェイト「どうしたの、ガイ？あ、も、もしかして昨日の夜のことに思い出しちゃった／＼／＼？」

き、昨日の夜！？ガイさんとフェイトさんはいったい何をしていたんですか？す、すごく気になるんですが。

ティアナ「フェイトさん、その言い方ちよつと誤解を招きかねますよ。それとも、ほ、本当に……………」

フェイト「え？あ……………ち、違うよ／＼／＼」

フェイトさんは近くに居たティアナさんに指摘されて、とても恥づかしい事を言つたのを自覚したのか赤くしていた顔がさらに赤くなつて困つたような表情をした。

私はものすごく気になって仕方がない。

コロナ「あ、あの、御二人は昨日の夜、何を……………」

2人「…なんでもない(の)！！！！」

2人の言葉が見事に重なつた。私はびっくりして次に出す言葉の聲が出なかつた。気になる事を聞きたかつたのにこれでは聞けそうもない。まあ、後で聞いてみるのもいいかも。

そして、しばらくの間、2人の中の空気はちよつときこちないような雰囲気だつた。

訓練場

なのは「はい、全員揃ったね」

訓練場には俺を含め、大人子供の計14人が居た。

フェイト「じゃ、試合プロデューサのノーヴェさんから!」

ノーヴェ「あ……………あたしですか?」

ノーヴェはちょっと戸惑ったような表情で皆前に出てくる。

ノーヴェ「えー……………ルールは昨日伝えた通り、赤組と青組、七人のチームに分かれたフィールドマッチです」

そして、ポケットから小型の端末機械を取り出した。

ノーヴェ「ライフポイントは今回もD S A A公式試合用タグで管理

します。あとは皆さん怪我のないよう、正々堂々頑張りましょう」

ノーヴェの簡単な説明が終わった。ライフポイントが無くなったら負けというライフ戦の模擬戦だ。

フェイト「じゃあ赤組元気に行くよ！」

なのは「青組もせーの！」

皆「セットアップ!!!」

2人の合図で皆がセットアップを始めた。皆が一瞬にしてバリアジヤケットの姿に変わった。俺もバリアジヤケット姿になり、左手にいつもの感触があるかを確かめる。しっかりとデバイスであるプリムラの刀を握っている。

アインハルト「ガイさんと勝負したかった」

と、隣で少し悔しそうな表情をしている大人モードのアインハルトが居た。

ガイ「あつちにはフリーやヴィヴィが居るぞ。相手にとって不足はないと思うが」

アインハルト「……………そうですね」

アインハルトは一度眼を閉じて再び開いた。そこには気合いをこめた眼をしていた。考えを切り替えたのだろう。

コロナ「ガイさん頑張りましょう」

ガイ「ああ、頑張らないとな。魔法戦になったら俺が一番足を引っ張りそうだ」

魔力ランクはチーム内でも皆の中でも最下位だ。オリヴィエはどのくらいかはわからないけど、“聖女王”と言われているくらいだから相当高いと思う。

コロナ「できたら、サポートしますね」

ティアナ「でも、序盤は多分ポジション同士の1on1よ」

フェイト「均衡が崩れるまでは自分のマッチアップ相手に集中ね」

そう言われて、コロナはちょっと悲しんだが、すぐに笑顔になる。

ガイ「頑張るか」

コロナ「はい」

俺の言葉にうなずいてくれた。

メガーヌ『それではみんな元気に……………』

と、皆の前にメガーヌさんが映っているモニターが現れた。後ろにはルーテシアの召喚獣ガリユールとキャロの召喚獣フリードリヒが居て、ガリユールが銅鑼を叩くハンマーを持っていた。

メガーヌ『試合開始！』

ドン！！！！

メガーヌさんが試合開始の合図をしてガリユールが銅鑼を叩いた。ついに始まった、陸戦試合の模擬戦。俺は銅鑼の音を聞いて思考を切り替えた。これから行う戦いに集中しないと。

ノーヴェ「エアライナーツ！！！！」

ノーヴェが掛け声とともに足元から魔法で作られた黄色い道、“エアライナー”が会場全体に縦横無尽に駆け巡り、空中での道を作った。

ノーヴェと同様に、あちら側の陣営からも青い道がノーヴェの作った道と入り組んで会場全体を覆った。

ノーヴェ「んじゃ、姉貴と対決してくるわ」

ノーヴェは一足先に先陣を切って“エアライナー”に乗り走って行った。青い道はどうやらスバルさんが作った物らしい。ともあれ、これで足場はかなり出来た。

ガイ「さて、アイン。ノーヴェに続くか」

アインハルト「はい」

俺たちFWもノーヴェに続くために“エアライナー”の上に乗って進み始めた。

アインハルト「もし良かったらですけど、ヴィヴィオさんの相手をお願いしても？」

ガイ「お？意外だな。アインはヴィヴィと対決するのかと思ったが」
アインハルト「フリージアさんと対決してみたいのです」

アインハルトがヴィヴィオではなくオリヴィエと対決をしたらしい。俺は少し考えた。多分、霸王の悲願とは関係ないと思う。ただ単純にオリヴィエと拳を交えたいのだろう。

ガイ「いいよ。思いっきりブツけて来いよ」

俺はアインハルトを激励して笑みを向けた。

アインハルト「ありがとうございます」

それを受け止めて、アインハルトの表情が引き締まった。俺はヴィ
ヴィオ、アインハルトはオリヴィエの相手だ。相手にとって不足は
ない。むしろ魔法戦なら俺の方が不足だ。俺も気を引き締めないと
な。そして、俺たちは別れた。

ガイ「ヴィヴィか」

ヴィヴィオ「ガイさんが相手なんだね」

黄色い道に俺が、青い道には大人モードになったヴィヴィオが立っていた。サイドテールにして黒いインナーに黒く薄い装甲の鎧を着てなのはさんと同じ白いバリアジャケットを羽織っている。

ガイ「アインじゃなくて残念か？」

ヴィヴィオ「ん〜、アインハルトさんとも勝負したいけど、ガイさんとも勝負したいし。どっちでも私は嬉しいよ」

ヴィヴィオは笑顔で答える。

ガイ「なら、期待に添えるように頑張らないとな。そういや、魔法戦だとヴィヴィオとは初めての対決だな」

ヴィヴィオ「うん、負けないよ」

ヴィヴィオは静かに右拳を握り、左手には魔力を込めているのか白い魔法を収束して構える。

ガイ「お手柔らかに」

俺も右に体を捻って、刀に右手を添えて構えた。そして、

ドンッ！！！

ヴィヴィオの一步で互いの距離が0になった。踏み込みの強い突撃だ。そのまま右拳のストレートを俺に向けて放つ。それを俺は半歩、右に動いて紙一重で避ける。そして、すれ違う時に抜刀しようと思つた時、さらにヴィヴィオの速度が上がり驚いた。これでは抜刀してもヴィヴィオに当たらない。

ガイ「っ!？」

そして、俺の周りに何時の間にか白いバインドが存在して、今にも俺を縛りつけようと収束している。すれ違いざまにヴィヴィオが設置したのだろう。バインドが体に触れる瞬間、俺は跳んでそれを避ける。

そこにヴィヴィオが真上から右足を振り下ろした踵落として蹴りをブツけてくる。早い連撃だ。相手に攻撃をする隙を与えてくれない自由の利かない空中戦。魔法で飛ぶにも目の前にヴィヴィオが居るので間に合わない。そのため俺はその蹴りを鞘で何とか受け止めるが、威力が強くて、大きく下へと落ちて行く。このままだと地面にぶつかるので飛行するために足に魔力を込める。

ヴィヴィオ「一閃必中！」

だが、さらに追撃を行うヴィヴィオは今まで使われなかったヴィヴィオの左手を前に出して、拳に溜まっている魔力が解き放つ。ヴィヴィオの目の前に小さく丸い球体の魔弾が現れる。それを右拳で思いつきりぶつけた。

ヴィヴィオ「デイバインバスター!!!」

なのはさんもよく使う、高速砲の“デイバインバスター”だ。魔力が砲撃のように俺目掛けて飛んでくる。飛行する暇も与えてくれない。

ガイ「っく」

俺は避ける事は無理だと悟ったので、刀を鞘走りして抜刀した。その刃は黒く、そりは白い刀の切っ先が砲撃に当たる瞬間、刃を一番

鋭い砲撃の垂直角度からズラすように手首を捻った。その結果、砲撃が右にズレて地面にぶつかり大きな衝撃が辺り一面に広がった。

「ヴィヴィオ、いつ、砲撃を逸らした!？」

ヴィヴィオは驚きながら青い道に着地する。俺も鞘に刀を納刀してヴィヴィオの乗っている青い道の下段に流れている黄色い道に着地して安堵の息を吐いた。

ガイ「ふう、あの砲撃は早いな。少しかすったよ」

砲撃の軌道をズラす為は無茶をした。それでも、冷静さを保って相手に何ともないように思わせる。

だが、あの砲撃の軌道を完全にズラすことが出来ずに右肩から肘にかけて外側のバリアジャケットが砲撃によって削り取られていた。しかし、それで冷静さを保っているように見せかければ、相手に二度目は通じないと思わせる事が出来る。

ガイ：3000 2500

かすっただけで俺のLIFEが500も奪われた。あれをマトモに受けたら一発KOだ。

さっき砲撃を捌ききれたのもまぐれに近い。刃が当たる瞬間など本当に一瞬だ。その一瞬のうちに魔力の威力を外へ逃がすため、手首を捻って何とか軌道をズラしたのだ。

同じことをもう一度やれと言われたら出来ないと思う。経験と時間が足りない。それに何度も使っていると手首を痛める原因になる。

俺は眼を瞑った。俺は先ほど行った行動の考察を考えるのをやめ、思考を切り替え、眼を開いた。今度は俺からヴィヴィオに向かって跳んだ。ヴィヴィオも表情を険しくして構え、背後に白い魔弾がチ

ヤージを始める。

ガイ「魔法は使わせないさ。格闘戦技に持ち込む」

俺はヴィヴィオの手前に流れている青い道に一度、足を付けて速度を上げるために魔力を足に溜めて一気に跳び、ヴィヴィオに向かって鞘を握っている左手で左拳廻打を放つ。

今度はヴィヴィオが速度を上げた俺に驚いた様子で、背後にある白い魔弾のチャージをやめ、すぐに俺の左拳を受け止めるためにヴィヴィオは腕をクロスしてガードする態勢に入った。

ドカツ!!!

ヴィヴィオ「~~~~っ!!!」

ヴィヴィオが痛みを耐えるような苦い表情をして俺の左拳廻打を受け止めた。

拳の中に石を入れていると硬さを増すように今の俺は鞘を握っているのだ。いつもより拳は硬い。

そのまま、俺は刀を抜いて、刃を返して横斬りを行う。それはヴィヴィオの白いプロテクションで止められた。

ヴィヴィオ：3000 2600

今の二つの行動で400削れたようだ。

ヴィヴィオ「っく。この!!!」

ヴィヴィオはこの防戦一方の状況を覆そうとしているのか空いている足で垂直に足を振り上げる。

俺はそれが視えた。そのため、次の行動をすぐに立てた。

鞘と刀をヴィヴィオから離して、一步下がり、それを避ける。そして、再び勢いをつけてヴィヴィオに近づき、右足の前蹴りを蹴る。ヴィヴィオが蹴りを振り上げるのを予め視えていたので俺の行動のほうがワンテンポ早く、ヴィヴィオは右足を振り上げてを終わった状態だったので俺の蹴りをガードすることが無理に近く、それをまともを受けて大きく後ろへ下がる。俺は鞘に刀を収めながら追撃をしようとした。

ガイ「っつ」

だが、それは左肩にある衝撃が加わってバリアジャケットが削り取られ、追撃の機会を失った。

ガイ「あの無理な体勢からカウンターか。ヴィヴィもなかなか動物視力を持つてるな」

俺が前蹴りをヴィヴィオに当てた瞬間、ヴィヴィオの左拳のストリートが放たれて俺の左肩にクリーンヒットした。俺はそのカウンターは予測できなかったのでマトモに受けてしまった。

少し離れた所にヴィヴィオが黄色の道に何とか着地して息を整える。

ガイ：2500 1600

ヴィヴィオ：2600 2200

ヴィヴィオ「ガイさんはやっぱり凄い!!!!」

ヴィヴィオは息を整えながらも満面の笑みを俺に向けて楽しそうな声をして褒めてきた。

ガイ「ヴィヴィの方が凄いよ。あの体勢からカウンターを狙えるの

は流石だよ」

俺も笑いながらヴィヴィオの事を褒める。あのカウンターであるダメージ。俺の魔力値が低いのも原因かもしれないが、ヴィヴィオはやっぱり強い。

ヴィヴィオ「ガイさんだって砲撃を逸らすような事が出来るんだもん。凄いよ」

互いに褒め合う。そして、お互いに再び構えた。

ガイ「ヴィヴィオと対決するのも何だかんだで楽しいよ」
ヴィヴィオ「え？あ、ありがとうございます」

俺は笑みを零してヴィヴィオと戦えたことに純粹に楽しかったと思えたことを伝える。違う事を褒められたからかヴィヴィオはちょっと戸惑いながらも礼を言ってくる。

ガイ「行くよ」

そのせいでヴィヴィオの集中力を一瞬失わせてしまったので、これから動く事をヴィヴィオに言う。ヴィヴィオはそれを聞いて、気をひき締めて笑顔から真剣な表情に変えた。

プリムラ「ヴィヴィオから魔力反応有り」
ガイ「な、いつの間に溜めた!？」

プリムラの魔力検知にヴィヴィオの魔力が反応して知らせてくれた。それを聞いた俺は驚いた。終始、ヴィヴィオを注意深く見ていたが、魔弾をチャージする工程を見ていない。

俺の驚いた表情を見たヴィヴィオは真剣な表情を崩して笑みを向ける。ヴィヴィオの後ろには魔弾が数発、作られていた。魔法陣も魔弾と同時に現れてチャージが完了している状態。どのような原理を行ったのかはわからない。

ヴィヴィオ「ソニックシューターアサルトシフト」!!!」

プリムラ「全部で五発です」

ガイ「あ、ああ」

俺は驚きながらもヴィヴィオが放った魔弾の弾幕をどのように受け止めるか考える。アインハルトなら俺の魔弾を止めた時のように“旋衝破”で返してくるだろう。俺はそんな高等技術は持ち合わせていない。砲撃をズラしたのもマグレに近い。

俺は避けとガードする態勢に入りながら後ろに黒い魔弾を二つをチャージし始める。俺の魔力だと満タン状態から作れる魔弾は八発。一度に作れる魔弾は二つ。魔法で飛行するとその間は他の魔法が使えない、という制限が掛る。先ほど足に魔弾一個分の魔力を込めて飛んでしまったので残りは七発分の魔力しかない。

貴重な魔力を消費するのであまり使わないようにしているがこの状況は必要なので二つ分チャージを始める。

その間に魔弾の弾膜が飛んでくる。一発目の魔弾を避け、二発目は鞘走りから抜刀して切り捨てる。残り三発。

ちょうど、チャージが完了したので魔弾をブツけて相殺した。残り一発は鞘で受け止めた。

ヴィヴィオ「隙ありますよ!!!」

ガイ「!?!」

流石に魔弾に集中しすぎたようだ。俺の隣には左拳の左拳廻打を放ったヴィヴィオが居た。

鞘は魔弾を受けた衝撃で動かすのに遅れて間に合わない。刀も抜刀した状態でヴィヴィオに合わせている暇がない。魔弾も放ってしまった。プロテクションも遅い。出来るとしたら……

ドガツ!!!

ガイ「がはっ!!!」

ヴィヴィオの左拳が思いっきり俺の溝に当たった。そのまま勢いよく俺は大きく飛ばされて後退して青い道に何とか着地する。

ヴィヴィオ「っつ」

だが、ヴィヴィオの胸部に大きく一太刀が斜めに刻まれてバリアジヤケットがはがれた。あの一撃を当たった後、俺は抜刀している刀を斜めに斬り込んだ。刀は引きながら斬ると威力が増すのでヴィヴィオの打撃の威力を利用して飛ばされながらもヴィヴィオの体に一太刀入れた。肉を切らせて骨を断つ………まではいかないが、ヴィヴィオにも相当なダメージを与える事は出来た。

ガイ：1600 200

ヴィヴィオ：2200 1100

あの一撃がかなりでかかったようだ。ヴィヴィオに1000以上のダメージを与えることが出来た。

キャロ「ガイさん。このままだと負けてしまいます。前半戦からFW陣を失うわけにはいきませんので戻りましょう」

ルーテシア「ヴィヴィオも結構ダメージ受けすぎたわね。ガイさんも戻るようだし、一旦戻った方がいいわ。ガイさんを落とせばか

なり戦況が変わるんだけどね、悔しいけどキャラの方が召喚魔法の速度は速い」

と、2人の間にモニターが二つ現れて、互いの陣のFBが戦いに挟んでくる。

ガイ「ああ、頼む」

ヴィヴィオ「うう、ガイさんと決着付けたかったよ」

ヴィヴィオは苦笑いしながらも悔しそうな表情を俺に向けてくる。

ガイ「また対戦するだろ。こんな序盤に落ちるわけにもいかないしな」

ヴィヴィオ「うん、次こそ決着付けるね」

そして、俺の真下にピンクの魔法陣が現れた。ヴィヴィオの真下にも紫の魔法陣が現れている。

ガイ「互いに生き残れたらまた対決だな」

ヴィヴィオ「うん!!!」

無邪気な笑みを俺に向けてきた。それほど次に対戦することが出来ることが嬉しかったようだ。

俺も笑いながらキャラの召喚魔法によってFBへと戻って行った。

オリヴィエ「私の相手はアインハルトですか」
アインハルト「はい」

私は黄色い道の上に立っていた。オリヴィエも青い道の上に乗って私の事を見つめている。オリヴィエは白と青を強調した騎士甲冑を着けて、ライトブラウンの髪はシニヨンのようにして後ろに縛っている。

その姿は紛れもなく霸王の記憶の中に残っている姿、戦闘服のバリアジャケットだ。

記憶にも残っている。だが何故、オリヴィエが現代の今、ここに居るのか分からない。オリヴィエと初めて会った後にいろいろ調べたが昔の人物がどのようにして今の現代に居るのか分からない。ガイさんが答えてくれるのが一番いいですけど、それは無理な話です。ですが、目の前にオリヴィエが居る、それが現実なのだ。

アインハルト「……………フリージア、私個人としては貴方と拳を交えたい。あなたを超えたい」

オリヴィエ「ええ、構いませんよ」

アインハルト「え？」

オリヴィエの即答に私は目を丸くした。オリヴィエは私と拳を交えることはないと思っていた。私の中には霸王の悲願が存在する。この悲願はオリヴィエの死が原因で出来たモノ。オリヴィエ自身に向けるモノではないのだが、拳を交えることがあればその悲願にも触れてしまつかもしれないだろう。だが、オリヴィエはそれでも拳を交えることに頷いてくれた。

オリヴィエ「そんな変を顔をしなくても。悲願を受け止める事は出来ませんが、ただ拳を交えるだけなら受けて立ちますよ」

アインハルト「ただ拳を交える……………」

オリヴィエは悲願云々でもないと言っている。ただ拳を交えたいだけのようだ。私は考えた。

霸王の悲願、私の願い。霸王流を証明すること。あのゆりかごの日のオリヴィエより強くなって私たちの悲願を叶える為に。

そして、眼の前にはそのオリヴィエ自身が居る。オリヴィエ自身に向ける悲願ではない。だが、ただ単純に拳を交えるだけなら悲願も関係ない。悲願を考えなければオリヴィエはヴィヴィオさんと同じぐらいの好敵手だろう。

アインハルト「ええ、わかりました」

私の提案を受け入れてくれたオリヴィエに感謝です。

オリヴィエ「では、行きます」

アインハルト「はい」

オリヴィエは左手を前に出して、指と指の間を閉じて手とうのようにして手首を上げ、体を右に少しひねって右拳を後ろに下げ構える。構えは“聖王流”でも“霸王流”でも変わらない。だが、オリヴィエの構えまでの動きが完璧で私は見惚れてしまった。やはり“聖王女”と言われていただけの事はある。私もオリヴィエと同じようにして構える。

オリヴィエ「“聖王聖空弾”」

アインハルト「“霸王空破断（仮）”」

オリヴィエの右拳から白い魔弾一発だけだが飛んできた。だが、その速度は速い。私も拳から魔法の真空刃を放つ“空破断”でそれをなんとか相殺する。まだ完成していないので魔力の安定はしないがなんとか形には出来た。

その間にオリヴィエが私の眼の前までに来て、左足の回し蹴りを振り放っていた。

それを右腕でガードする。とても重い蹴りだ。私は歯をくいしばって何とか受け止める。

そのままの体勢で左拳廻打を放つ。オリヴィエはそれを右手で握り受け止めた。逆に考えれば片腕と片足を封じ込めたので、オリヴィエ自身の体重を支えている一本の足に脚払いを行う。オリヴィエは脚払いをすることが分かったのか、その一本の足で後ろに跳んで一気に下がった。そして、青い道の上で一呼吸を置いて私の事を見据えた。

アインハルト：3000 2800

オリヴィエの左足の回し蹴りは強力だった。ガードしてもダメージ

を受けた。私が放った左拳廻打はダメージを与える事は出来なかつたようだ。

オリヴィエ「アインハルトと戦っているとクラウドを思い出しますね。やはり“霸王流”は強いですね」
アインハルト「ありがとうございます。」

オリヴィエは私の事をクラウドと同じだと言ってくれた。嬉しいけど私はクラウドもオリヴィエも超えないと“霸王”の名を………覇を成すことが出来ない。

アインハルト「ですが、私は貴方を超えたい」

私はそう言つとオリヴィエは微笑む。私は構える。

オリヴィエ「ええ、望むところです」
アインハルト「行きます」

今度は私からオリヴィエに向かって突撃して右拳のストレートを放つ。オリヴィエはそれを受け流す。そして、右拳廻打を放ってくる。私はそれをまともに受けた。

オリヴィエ「!?!」
ガシャ!!!

だが、受けた後、その受けた右拳を左手で掴みオリヴィエの体中にバインドが巻かれていた。私は防御を捨てカウンターバインドでオリヴィエを縛った。私は右拳に魔力を込めた。

オリヴィエ「そうでした。防御を捨て、攻撃に特化したモノ………

それが“霸王流”」

アインハルト「そうですね。これが“霸王流”です」

私は右拳の魔力を解放した。

アインハルト「“霸王断空拳”」

オリヴィエ「っぐ」

ドカツ!!!

オリヴィエの背中に私の“断空拳”を思いっきりブツけた。クリーンヒットしたのが分かった。私の“断空拳”の衝撃で青い道が壊れて、その青い道の上にいたオリヴィエと共に重力に沿って落ちて行く。

アインハルト 2800 2300

オリヴィエ 3000 600

オリヴィエをここで落としておけばこの戦いは有利になる。私は追撃をしようと動こうとした。

ティアナ「アインハルト、ストップ!!!」

と、目の前にティアナさんの写っているモニターが表示された。両手に銃型のデバイスを持って常にオレンジの魔弾を飛ばしている。その魔弾はここからも目視できるがそれは逆方向からのピンクの魔弾と相殺している。

ティアナ「今のダメージならフリージアさんは一旦下げられる。この隙に先陣突破で斬りこんで!!! ガイはヴィヴィオとほぼ相討ちで互いにFBに下がっているからFBからの邪魔はされないとと思う。」

そのまま青組のCG、なのはさんの所へ!!!」

ガイさんはヴィヴィオさんとほぼ相討ちで下がっている。ちょっと心配ですが、ガイさんが再び復帰した時にやりやすい環境にしておくのも良いですね。それになのはさんの魔弾を止めることが出来ればその分ティアナさんの魔弾がいろいろな場面でサポートに回せま
すし。

アインハルト「……………はい!!!」

私はティアナさんの提案に頷いた。そして、チラツとオリヴィエが倒れている場所を向いた。オリヴィエはまだ立ち上がらない。

だが、何かオリヴィエと戦っていて少し違和感があった。あの“聖王女”であったオリヴィエが私のカウンターバインドを読めなかったのだろうか？クラウドとの戦いも霸王の記憶の中では何度かやっているのだから“霸王流”がどのようなスタイルなのか分かっていたはず。さっきの言葉も演技のように思えてくる。まるでワザと負けたような気がしてならない。

しかし、私は今考えることではないと判断して、思考を切り替えて先陣突破の任を受けて走り出した。

私はアインハルトの“霸王断空拳”を受けて、地面に叩きつかれていた。体全体に痛みが走る。あの攻撃も受け止める事は出来た。だが、ガイとうまく魔力の補給が出来ていないこの現状、“聖杯戦争”に向けて体内に存在する魔力を温存しておかなければならない。それなので、私の戦い方もいろいろと制限が付いてしまう。ガイの魔力値が上がれば魔力のラインが安定することが出来ると思いますけど。

私はアインハルトが走り去って方向を見た。すでにアインハルトの姿は無い。こんな闘いではアインハルトは満足していないでしょうね。

ルーテシア「フリージアさん大丈夫ですか？」

と、私の目の前にルーテシアが映っているモニターが現れる。

オリヴィエ「ええ、ちょっとダメージはデカいですがなんとか大丈夫です」

私は表情を苦くして上半身を起こす。それと同時に私の真下に紫の魔法陣が展開された。

ルーテシア『とりあえず治療するからいったん戻しますね』
オリヴィエ「ええ、ありがとうございます」

私はルーテシアの治療を受けるために提案を受け入れた。そして、召喚魔法によって私は今居る場所からFBまで下がった。

ヴィヴィオ「あ、フリージアさんも戻って来たの？」

そこにはそわそわしながら再出撃を待っているヴィヴィオが居た。ダメージも私ほどではないが結構受けている。たぶん相手はガイだろう。

オリヴィエ「ええ、アインハルトは強いですね。あの子はきっと強い子に育ちます」

ヴィヴィオ「アインハルトさんも強いんだ。うー、再出撃したらガイさんとアインハルトさん、どっちとも戦いたいな」

オリヴィエ「ですが作戦があるのでしょう？」

ルーテシア「そう、あの作戦があるわ」

話を聞いていたルーテシアが私たちの会話に入ってきた。そして、戦場に出ている青組全員のモニターがルーテシアの周りに現れる。

ルーテシア「青組一同、ヴィヴィオとフリージアさんが復帰したら例の作戦に移ります。いつでも動けるようにお願いします」

青組一同「了解!!!」

モニターに映っている全員から了承を得た。

なのは「あ、アインハルトちゃんが来たね」

アインハルト、もうなのはさんの所へ来たのですか？早いですね。

アインハルト「ヴィヴィオさんのお母様！一槍お願いいたします！

！！」

なのは「私でよければ喜んで！」

なのはのモニターからアインハルトの声が聞こえる。私との対決後、そのままだと思うのでライフもあの時から変わっていないだろう。

なのは「青組CG高町なのは各員に報告。まもなく赤組FAアインハルトちゃんと接敵！射砲支援が止まります。赤組CGとFBの支援攻撃に要注意！」

青組一同「了解！！！！」

なのはの砲撃支援が無くなりましたか。その間にティアナの砲撃にチャージする時間を与えてしまいますね。

私は陣形の表が映っているモニターを見る。ヴィヴィオがガイとほぼ相討ちで2人ともFBに下がっている。FBのスバルは相手のノーヴェとGWとWB同士も未だに一对一だ。私とアインハルトの対戦以外は場の流れは変わっていない。アインハルトがなのはに対してどのような結果になるかで流れは大きく変わる。

オリヴィエ「……………まるで戦場の陣形の一部ですね」

ボソツと私は誰にも聞こえないように呟く。このような陣形表などを見て、思案することはよくやった。戦時中は常に先を見据えなければ不利な状況になり味方の死が絡んでくる。脳裏に浮かんで来た

のは、かなりの数の味方の死体が転がっていた焼け野原に私が涙を流しながら手で一生懸命、味方の死体を埋める墓を掘っている時の戦場の跡地の光景。私の判断が一つミスるだけで、味方が死んでいくことを実感した。これが戦場なのだ。だが、今は違う。事件は存在するが戦争は起きていない。

オリヴィエ「守りませんとね……………」

ヴィヴィオ「ん？何を守るんですか？」

と、隣でヴィヴィオが今言った言葉を拾っていたようだ。笑みを向けながら聞き返してきた。私は先ほど思い出していた思考をやめて切り替えた。

オリヴィエ「……………いろいろですよ」

ヴィヴィオ「そうですね。なんか思いつめているような表情でしたので、ちょっと心配します。何か困ったことがありましたら言ってみて下さいね」

ヴィヴィオが満面の笑みに切り替えて笑う。これが今、現代に生きている私の複製体。思いやりのある優しい子。この子なら特に心配もいりませんね。

オリヴィエ「ありがとうございます、ヴィヴィオ」

私はヴィヴィオに礼を言っただけで頭を撫でる。ヴィヴィオは撫でられた事に嬉しかったのか少し頬を赤く染めながらも笑みを絶やす事は無かった。

この笑顔を守るために“聖杯戦争”を勝ち抜かないといけませんね。私は陣形表のモニターを見ながらこの模擬戦の今後の動きと“聖杯戦争”の行動をどのように行つか色々と思いを回し始めた。

十一話 “ 集団と集団の交差（前編） ” （後書き）

模擬戦を全部書くとかなり長くなるので二つに分けました。

と、言ってもプロットはありますが書いている時間が無いw

仕事が忙しくなってきた。

魔法と魔術の価値観や観点の違いはやはり難しい。

今回は魔術視点からの考察です。

今度説明するときは魔法視点からの考察かな。

何か一言感想があると嬉しいです。

では、また（・・）／

十二話“集団と集団の交差（後編）”（前書き）

仕事はかなり忙しくて、前の更新から二週間たってしまっていて申し訳ありません。

平日は書いている暇もない。土日は仕事の疲れでぐったり。

何とかまとめられたので上げます。

では、十二話目入ります。

十二話 “ 集団と集団の交差（後編） ”

なのは「アクセルシューター弾幕集中」

なのはさんの周りにピンクの魔弾がどんどん集まって来る。その一つ一つが星の光りのように見えた。私はそれでも前に進んだ。

なのは「シュート！！！！」

一斉にピンクの魔弾が私に向けて飛んでくる。私はそれを“旋衝破”で軌道を変えて避け続ける。
その間になのはさんの砲撃のチャージが完了していた。

なのは「ファイア！！！！」

真正面から来られると威圧感のある砲撃が私に向かって放たれる。けど、私は臆することなく、その砲撃にタイミングよく右拳のストリートを当てる。

ドゴッ！！！！

なのは「あらっ？パンチで相殺！？」

なのはさんは予想外な出来事にちよつと戸惑った表情を浮かべた。私の拳で砲撃がはじけ飛んだのだから。私はそのまま拳を握り直して、なのはさんの元へと走り出す。そして、握り直した右拳の中段突きを放つ。

なのは「っつと」

それを難なくなのはさんはデバイスでガードした。そのまま連撃を続ける。だが、その全てがガードされ、時には避けられている。攻めている気がしない。

読まれているみたいに関がられている。だけどこのまま攻め続ければ……。

ドガッ!!!

私の左拳がなのはさんのガードを崩した。

開いた！右拳廻り打入るッ！

なのはさんの顔面に向かって、右拳を打ち込む。それがなのはさんに当たった感触はあった。だが、すぐに違和感が右手から現れる。

アインハルト「!？」

右手にはピンクのバインドでしっかりと縛られて、腕までチェーンバインドが巻かれていた。

捕縛盾！？誘われた!!!

ガードが開いたのもここに導くためにワザとガードを甘くしていた。昨日ガイさんとなのはさんの一対一を見ていましたが、ガイさんは魔弾を避け続けてここぞっという所で攻めずに止まりました。この設置型バインドを予測していたのでしょうか。流石です。

猪突猛進な私とは大違いですね。

なのはさんは少し離れて、デバイスを構える。その矛先に魔力が圧縮しはじめた。私を打ち抜くために。

アインハルト「くっ………!!!」

私は必死にバインドを外そうと力を加える。だが、ギシギシ言うだけで外れることはない。

ガシャ

なのはさんのデバイスから銃弾が排出が放出された。砲撃はもう放たれてしまう。

砲撃！？避けられない。防御！？無理……………

私の中で様々な思考がフル回転する。そして、一つの結論が導き出された。

なのは「エクセリオンツ……………」

私は足先から力を加えていく。

先ほどのオリヴィエとの戦いで使った技、拳から魔力の真空刃を放つ“霸王空破断（仮）”。昨日の“水斬り”から試行錯誤で作った技。

足先から下半身へ、下半身から上半身への回転の速度を作り出し、その力で拳を押し出す。

その技を作り出す工程の回転の力でブチブチとその力に勝てず音をたててチェーンバンドが切れていく。そのまま、一気に拳を前へ押し出し、真空刃を作り出しなのはさんに向かって飛んで行った。

なのは「！？？」

なのはさんは思わぬ攻撃に驚き、デバイスの矛先を私から離れた。そして、避ける暇もなくそれをマトモに受けたようだ。

なのは：2500 2000

私自身も驚いていた。オリヴィエの時よりも魔力が安定して放つ事が出来た。この短時間でここまで安定度を高められた事に喜びを覚

える。いや、もしかしたらオリヴィエの時は少なからず緊張していたのかもしれない。だから、なのはさんの時は心を落ち着かせて放つ事が出来た。

だが、いまは模擬戦中。そんな事を考えていると、なのはさんからの砲撃が飛んできた。私は考え過ぎていたので反応が遅れ、その砲撃を何とか紙一重で避ける。

だが、後ろにはすでになのはさんが大きく振りかぶって、周りにピクの魔球と一緒に魔力が放たれた。

なのは「ストライク・スターズ！！！」

ドゴゴゴオン！！！！

先ほどの砲撃とは比べ物にならない大きな砲撃が私に向かってきた。私はそれを受け流そうとした。だが、全く効かない。そのまま、砲撃を受けて地面に叩きつかれた。

アインハルト：2300 80

私は体をうまく動かす事が出来ない。ダメージがかなり大きかったようだ。

受け流すどころか完全にのみ込まれた。あれが本物の砲撃。

なのは「びっくりしたあ。打撃の威力でバインドを砕いちゃった」

なのはさんは驚いた様子を浮かべながらその表情は嬉しそうだ。なのはさんは私に止めを刺すためにデバイスを構え直そうとした。

パコーン

なのは「あいたーッ！？」

だが、なのはさんの後頭部にオレンジの魔弾がクリーンヒットして、涙目になり、私への止めの砲撃は飛んでこなかった。

なのは「いつつ……たあ〜！！この弾丸ティアナ!？」

なのは：2000 1100

なのはさんが後頭部を擦りながら飛んできた魔弾の方を振り向く。私からも確認できた。そこに居たのはティアナさんだ。ティアナさんの周りにはオレンジ色の魔球がパツと見で数える事が出来ないくらい量がチャージしてあった。

ティアナ「アインハルト、よくやったわっ！おかげでチャージとシフトも完了！これが赤組勝利の篝火……クロスファイア・フルバーストツツ!!!」

ティアナさんの周りにある魔球から魔力が解放され魔弾が四方八方に飛んでいく。味方への援護支援の魔弾だ。これで戦況は私たち赤組の方へ優勢に傾く。

なのはさんがティアナさんに注意を向いている隙に私の真下にピンクの魔法陣がされて視界が変わった。

キャロ「おかえり、アインハルト」

FBのキャロさんが視界に入った。

今のが召喚魔法。遠距離からのモノの移動を可能に出来る魔法。その魔法で私は敵陣からここまで一瞬にして戻ってこれたのだ。

キャロ「すぐ直すからまた前線復帰宜しくね」

アインハルト「あ……はいっ!!!」

キャラさんのデバイスから温かい治癒魔法が私のから全体を包み込む。傷が少しずつ消え始める。

ガイ「しかし、アインは凄いな」

アインハルト「え？」

私は声がした方を振り向いた。そこにはガイさんが私と同じキャラさんから治癒魔法を受けて待機していた。ヴィヴィオさんと対決後、FBまで下がっていたのだ。なのはさんとの対決に集中しすぎてすっかり忘れていました。

アインハルト「あ、み、見ていたのですか？」

ガイ「ああ。なのはさんにあそこまで近づいて一傷、負わせる事ができるなんてな。アインは凄いなと思うよ」

先ほどの戦いをガイさんは見ていたようです。ちょっと恥ずかしいです。

ガイ「俺だとなのはさんの元まで行けないんだよね。最初の時は近づけたがそれは本当にたまたまだと思う」

そう言いつつ、ガイさんは左手に持っている刀を見て、握ったり離したりして感覚を確かめている。

アインハルト「いえ、ですが私も猪突猛進でした。ガイさんのようにもう少し状況を理解できるようにしていきたいです」

私も先ほどの戦いで反省しないといけない部分が多々ありました。そこを直していかないと次へと進めません。

私が言った言葉にガイさんは笑みを零して右手を私の頭に寄せた。

ガイ「自分の欠点を見つけられたのなら後はそれを克服していくだけだ。頑張れよ」

そう言つて、私の頭を撫でてくれた。キャロさんもいるのに結構恥ずかしいです。

アインハルト「ま、また子供扱いですか／＼でも、あ、ありがとうございます／＼」

ガイ「まだ子供だしな。年下とかは関係ないし」

私はガイさんから視線を離し、まだ私を子供扱いしているガイさんにちよつとムツとなりながらもお礼を言った。きつと顔が赤くなっているのだろう。自分でもわかる。

キャロ「仲いいね、2人とも」

そんな様子をキャロさんが微笑みながらこちらに顔を向けてくる。

ガイ「ま、部屋が隣同士で付き合いがちよつと長いしな」

キャロ「……………ふふっ、そうだね」

キャロさんが何かを思ったのかちよつと間を置いてガイさんの言葉を肯定し私の方を優しく見つめた。まるで応援しているような表情で笑っている。

何を応援しているのかはわかりませんが。

アインハルト「……………え？」

ガイ「ん？どうしたアイン？」

と、私は少し戦場の雰囲気が変わったことが気になり声を出してしまった。それをガイさんが拾ってきた。私はぶつかり合う音が絶えない戦場を見つめた。ガイさんもすぐに気付いた様子で戦場を見た。

ガイ「……………戦場の流れが変わっているな」

アインハルト「ええ」

キャロ「あ、ルーちゃんとリオちゃんがこっちに接近中!!!!」

戦場の流れが変わったようだ。

ルーテシア「ありや、ノーヴェが攻めてくる」
ヴィヴィオ「ほんどだ!!!」

モニターにはノーヴェがスバルを振り切って私たちFB陣へ高速移動で近づいてくる。ノーヴェは今のうちにルーテシアとヴィヴィオと私を潰すことを考えているのだろう。

ヴィヴィオ：2600

オリヴィエ：1300

オリヴィエ「私はまだダメージが抜けていませんね」

アインハルトとの対戦後、それほど時間は立っていないので回復する時間が少なく、あまり回復されていない。前線に立つにはまだLIFEが心もとない。

ヴィヴィオ「フリージアさんはまだ待機してて下さい。ルールー！私はこんだけ治ってればもうへいき！」

ルーテシア「うん……アインハルトもガイさんも治療中だし、コロナのゴライアスもダウンしてるここが好機かな」

ノーヴェが映っているモニターの他に、コロナの作りだしたゴーレムがダウンしているモニターとガイとアインハルトが治療を受けているモニターが表示された。

ガイとアインハルトは何か話しているようですね。

そして、ここに居ない青組のメンバーのモニターも表示してルーテシアが発言した。

ルーテシア「青組のみなさん！予定よりちょっと早いですが、作戦

発動しますッ！」

青組「『了解ッ！』『』」

ルーテシアの合図で皆が動き始めた。

ルーテシア「フリージアさんもある程度、回復出来ましたら援護を
お願いしますね」

オリヴィエ「はい、ありがとうございます」

ヴィヴィオ「じゃあ、いつてきまーす！」

ルーテシアとヴィヴィオも戦場へと走り出した。私はこのFB陣か
ら戦場全体を眺めた。

いたる所で金属のぶつかり合う音や魔弾を打ち出す音がする。

青組の作戦、それは2on1の状況を作り出すこと。

ヴィヴィオとスバルでノーヴェに。

なのはとエリオでフェイトに。

リオとルーテシアでキャロに。

状況が有利に傾いたら行う各個撃破作戦。ガイとアインハルト、コ
ロナのゴーレムがダウンしている今が確かに好機。

このような作戦に私も参加できなかったのは残念です。今は治療に
専念させんと。

私は目を瞑った。

先ほどティアナさんから連絡があった。防衛をしながら戦闘箇所をなるべく中心に集めてほしいとの事。そこに集束砲で一網打尽にするらしい。

キャロ「ガイさんとアインハルトは防護バリアで守るからそこでじつとしててね！」
アインハルト「ですが……………」

キャロもティアナの作戦を遂行するため戦闘を中心で行うために前へと行くようだ。

俺たちの居るFB陣にはルーテシアとリオが来ていた。リオは大人モードになっており、身長も伸びて濃い紫色をした髪はロングヘアでチャイナ服のような格好だ。

やはり女性は髪形で随分と印象が変わるモノだ。

ガイ「リオも大人モードになれたのか。驚いた」

リオ「えへへ、この模擬戦まで内緒にしたかったんだけど、お風呂の時にびっくりして大人モードになっちゃったんだ」

俺が驚いていたからカリオは八重歯を見せながら嬉しそうな表情を浮かべる。しかし、お風呂の時に大人モードになってしまったという状況って一体……。

キャロ「青組メンバー、そう簡単に落ちたりしないよ！そうだよ、
コロナ！？」

コロナ『そのとおりですっ！』

コロナが映っているモニターが現れた。後ろには倒れていたゴールムが起き上がり始めた。

キャロ「じゃあ、ここから離れるけどある程度回復したら援護してね」

キャロはそう言って笑みを向けて、俺たちからルーテシアとリオから離すためにFB陣から戦場へと駆けだした。ルーテシアとリオもキャロを撃墜するために後を追った。俺たちはキャロの防護バリアで守られていた。

アインハルト「怖い気配がする。この乱戦、意外と早く決着がつく
かもしれません」
ガイ「アインハルトはよく気配を読めるよな。俺は大雑把にしかわからない」

そうですか？、とアインハルトは当然のような事をしているのに質問され、ちよっと呆けた表情で俺を見る。

アインハルト「まだまだ未熟です。もつと鍛錬を積んでしつかりと気配の読みや技を磨いて向上しませんと」

アインハルトは気配だけではなく他にも強い部分を持っているのにまだ上を目指したいようだ。その切磋琢磨の気持ちの持ちようは流石といえる。

ガイ「……………なんか、負けてられない気持ちになるな
アインハルト「え？」

ボソツと言った言葉はアインハルトには何を言っているのか分からなかったようだ。アインハルトのその切磋琢磨な構えの姿を見ると自分はまだまだ未熟なのだなと思った。

ガイ「何でもない。少し話すぎたかな。俺は大雑把にしか分からないが戦場の空気も変化したのが分かった」
アインハルト「……………そうですね」

俺は目の前にモニターを表示させた。2on1をしている皆の戦闘状況だ。

スバル「はあああああ！！！！」
ノーヴェ「つぐー！！！！」

最初に見たのはノーヴェVSスバル&ヴィヴィオの対決だ。スバルの右ストレートがノーヴェのクロスしてガードしている上からぶつかった。威力がデカイからか空中へと飛ばされる。その上からヴィヴィオが回し蹴りを放っていた。

ヴィヴィオ「リボルバースパークッ！！」

ノーヴェ『ああっ!!』

ノーヴェ： 1800 240

2人の連撃にノーヴェのLIFEも0に近い。援護に行きたいが戦っている場所が相手のCGとFBの間の位置だ。とても今からでは間に合わない。

次に見たのはフェイトVSなのは&エリオの対決。

フェイトさんの後ろにしっかりとなのはさんがついてきて魔弾を飛ばし続けている。それをうまく避けているが、このままではマズい。

フェイト『ソニック』

バルディッシュ『ソニックフォーム』

フェイトさんと愛機デバイスであるバルディッシュの掛け声でフェイトさんの装甲がかなり薄くなり、ライオットの二刀流になった。

ライオット同士は柄で魔力の紐で繋がっており魔力を均等にしているようだ。フェイトさんから聞いたことがある。

確か、“新・ソニックフォーム”だったか？実物は見たこと無かったけど。

初めて見たが武装も軽くなって露出度が凄いと思うのだが。肩とか太ももとかほぼ晒してる状態だし。スピードを上げるといってもここまでやるとは。

アインハルト「ガイさん………鼻の下が伸びてませんか？」

ガイ「マ、マジか？」

隣に居たアインハルトが俺の事を半眼で呆れたような表情で見えた。よほど変な眼で見ていたのだろう。

だが、今のフェイトさんの姿を見てちょっとドキマギしてしまうの

が男ではないのか？

そして、その姿になったフェイトさんはスピードをさらに上げて、なのはさんの魔弾の弾幕を振り払った。

が、フェイトさんの上から壁走りして降りてきたエリオがストラダを振り下ろしていた。

フェイト「あっ！？」

思わぬ奇襲にフェイトさんはそのままその攻撃を受けた。薄くなっていたバリアジャケットはおへその部分から破れ、胸が見えそうで見えないというギリギリの状態だ。

エリオ、それは狙ってやっているのか？

フェイト：1700 340

ガイ「うわぁ／／」

俺はそれを魅入ってしまった。

プリムラ「視姦ですか？」

アインハルト「……………ガイさん」

その様子をプリムラとアインハルトはしっかりと見ていたようだ。

アインハルトからは低い声が聞こえた。

それに、プリムラ。その使い方はまた間違ってるぞ。

ガイ「あ、わ、悪い……………」

俺は謝りながらもアインハルトを見た。先ほどの呆れた表情から一変、少し恥ずかしそうな表情で右手を握って口に添えて視線を斜め下に逸らしていた。

アインハルト「ガ、ガイさんは胸がでかい方が好きなのですか／＼？」

ガイ「あ、い、え、ええと……………」

アインハルトからの思わぬ言葉に脳が動いてくれなかった。

アインハルトはこの戦いの最中に何を言っているのだろうか？

ガイ「な、なんでそんな事聞くんだ？」

アインハルト「あ、い、いえ、そんな深い意味はありません。ガ、ガイさんはどんな大きさが好きなのかなと思います。ガイさんも男性なのでそこからそう言う事にも興味があると思います／＼／」

アインハルトは戸惑いながらも最後の方は早口に喋った。

ガイ「……………ご想像にお任せします」

アインハルト「では、小さい方ですね」

何故か返事が即答で帰ってきた。

ガイ「……………根拠は？」

アインハルト「その方が……………／＼／」

アインハルトは最後まで言葉が出てこなかったようだ。その先がものすごく気になる。

ガイ「まあ、いい。大分話がズレた」

俺は話を戻すためにモニターを見た。最後の対戦状況だ。キャロVSルーテシア&リオ。

キャラが追い詰められつつあるが、何か作戦があるのか表情に笑みが見れた。

キャラ『アルケミック・チエーン!!!』

キャラの魔法陣から魔力の鎖が現れて飛んでいき、ルーテシアとリオに飛んでいく。

ルーテシア『うっふふー 当たらない当たらない!』

それを難なく避けるルーテシアとリオ。

キャラ『それはそうだよ、当てるためじゃなくて撃墜のための布石だから!』

コロナ『ナイスです、キャラさん!』

と、ルーテシアとリオの真横からゴーレムが現れて、コロナはその肩に乗っていた。

コロナ『ゴライアスバージブライトツツ!』

ゴーレムの左手が右手首を掴んでルーテシアとリオに右手を向けられていた。そのまま、右手は回転を始めた。

コロナ『ロケット・パーーーンチ!!!』

その右手は本体を離れてルーテシアとリオに向かって飛んできた。

2人『へっ?』

予想外な攻撃に2人は眼を大きくして驚きそのまま、

ドコーン!!!

それが命中した。

ルーテシア：22000

リオ：17000

コロナ『撃墜成功ッ!』

キャロ『勝利の?ッ!』

2人は勝利のポーズを取った。この状況で勝てたことが良かったのだろう。2人はとても嬉しそうだ。だが、

パコーン

キャロ『へうっ!?!』

ビギッ

コロナ『!?!』

キャロの後頭部に一発のピンクの魔弾が命中し、コロナにはピンクのバインドで縛られた。

なのは『はい、キャロ撃墜、コロナちゃん捕獲!』

先ほどまでフェイトさんを追っていたなのはさんがこちらに来ていたようだ。

キャロ：17000

キャラは先ほどの一撃でLIFEが0になった。

コロナ『えー！なのはさんいつのまに！？』

なのは『勝ったと思った時が危ない時！！現場での鉄則だよー！』

片目を閉じてにこやかに笑うなのはさん。そして、そのレイジングハートを大きく振りかぶって構えた。

なのは『プラスター1ツッ！』

なのはさんの周りに複数のビットが現れ、レイジングハートとビットに魔力をチャージし始める。

ガイ「集束砲………か。ここまで届くのか？」

アインハルト「わかりませんが、この防御バリアがあるからある程度はカバーできるかと」

ガイ「そうだといいが」

キャラがダウンしているのにまだこの防御バリアが展開されているのは術者から制御を離れ、独立行動の魔法なのだろう。とても俺にはマネできない。

と、そこに別モニターが表示された。映っているのはティアナさんだ。

ティアナ『赤組生存者一同ッ！！なのはさんを中心に広域砲を撃ち込みます！コロナはそのまま！動ける人は合図で離脱をッ！』

なのは『分割多弾砲で敵残存戦力を殲滅！ティアナの集束砲を相殺しますッ！』

先ほどのモニターに映っているなのはさんもティアナさんを注意を

向けているようだ。

ガイ「しかし、集束砲同士がぶつかり合うってことは……………」
2人「スターライトーブレイカーーツッ！！！」

2人の溜めていた魔力が一気に解放され、互いの砲撃がぶつかり合
って大きな地響きと衝撃と魔力が戦場一帯に走った。地面は剥がれ、
建物という建物は全て破壊された。

ガイ「だよな、つと、ここまで衝撃が来るか」
アインハルト「まるで最終戦争みたいだ」

そのぶつかり合った衝撃の余波がここまで飛んできたが防御バリア
があるのでそれほど感じる事は無かった。
そして、その衝撃の余波が無くなり、戦場には音がほとんど無くな
って、瓦礫の山と化した。俺は状況を確認するためにモニターを操
作した。

フェイト：0
エリオ：0
コロナ：30 キャロが居ないので回復不可。 戦闘不能。
なのは：0
スバル：0
ノーヴェ：0
ティアナ：110
ヴィヴィオ：1800
オリヴィエ：2000
ガイ：2300
アインハルト：1350

ガイ「あれ？ヴィヴィがほぼダメージを受けていない？フリーはF
Bに居たから集束砲は受けずにLIFEが残っているのはわかるん
だが」

アインハルト「スバルさんが守ったようですね」

そう言えば、スバルさんは特別救助隊に所属している。そこで身に
付いたモノでヴィヴィオを守ったのだろう。

そして、そのヴィヴィオは速度を上げて、ティアナさんへと向かっ
ていく。オリヴィエもヴィヴィオより少し遅れているが、ティアナ
さんに向かっている。

ガイ「よし、ティアナさんを助けに行くか」

アインハルト「はい！！！」

俺たちもティアナさんを助けるためにティアナさんの元へと移動を
始めた。この模擬戦も終わりが近いようだ。

ヴィヴィオ「ティアナさん、行きますッ!!」
ティアナ「来なくていいけど…ッ!!」

私はティアナさんの弾丸を避けて近づく。そして、右拳を当てようとした。

アインハルト「霸王空破断（仮）」

しかし、ティアナさんの前にアインハルトさんが来て、私に向かつて何かを放っていた。それは魔力の真空刃だった。さっき、なのはママに一撃を与えたモノ。それによってなのはママは一瞬動きを止めてしまった。あまり当たりたくはないけど、当たってもいいからティアナさんを倒そうと単発の“ソニックシューター”を作った。

オリヴィエ「はああああ!!」

だが、後ろから来たフリージアさんがそれを左手の手刀でそれを受け止め、右の中段突きをそれに当て、ベクトルを180度変え、アインハルトにはね返した。

アインハルト「!？」

アインハルトさんも帰ってくるとは思っていなかったのか驚いた様

子だ。“空破断”を放った後の動作中だったので、避けることもガードすることも出来ない。

ガイ「ソニック」

そこに、ガイさんがアインハルトさんの前に来て黒い魔弾が二つ“空破断”に飛んでいき相殺した。

ガイ「ヴィヴィ。ティアナさんはやらせないよ」

ヴィヴィオ「ううん、ティアナさんは撃墜したよ」

ガイ「え？」

と、言つてガイさんはティアナさんの方を見る。アインハルトさんもティアナさんの方を見る。

ティアナ「ご……ごめん、ガイ、アインハルト。さっきでもうやられちゃった」

アインハルト「ええっ？」

ティアナ：1100

2人とも驚いている。私のソニックシューターがティアナさんに飛んで行ったのを2人は見ていなかったようだ。2人が驚いてくれて私はちよつと嬉しかった。

オリヴィエ「ヴィヴィオ。最後の対決です。気を引き締めましょう
ヴィヴィオ「はい！！！」

私はちよつと浮かれていたようだ。フリージアさんに指摘されてたので気を引き締め直す。

ガイ「俺たちも気を引き締め直すか」
アインハルト「はい」

ガイさん達もティアナさんの撃墜に驚いてはいたが気持ちを落ち着かせて私たちの方を見た。

状況は2 on 2だ。こんな状況は初めて。フリージアさんとの連携が重要だ。それでも、どんな事が起きるのか期待が高まってしまう自分がいる。

ダンつと大きな音がした。それと同時にガイさんの姿が一瞬ブレた。そして、いつの間にか目の前にガイさんが居て、左手にある鞘から刀を抜く瞬間だった。まったくもって速い。

速い！ガード！？間に合わない！？

私はその速さに全ての反応が遅れてガイさんの攻撃が当たるのは明らかだった。

オリヴィエ「はっ！！！！」

だが、隣に居たフリージアさんが右ストレートを放ち、ガイさんの左手に持っている鞘に当たる。フリージアさんは先ほどのガイさんの動きが見えていたようだ。

ガイ「くっ」

その衝撃で刀を鞘から出す抜刀動作が出来ず、動きが一瞬止まった。私は今ならガイさんを狙えると思い、左拳廻打を打つ。

それをガイさんはなんとか右手で受け止め握る。

アインハルト「はあああ！！！！」

と、そこにガイさんの真上より少し前にアインハルトさんが体を捻って垂直な右足の回し蹴りを私に放っていた。ガイさんはきつとアインハルトさんが落ちてくるギリギリに後ろへ下がってぶつかるとを避けるのだろう。

私もそれを避けようとしたが、左手はがっちりガイさんの右手で握られて動けない。私は慌ててしまった。慌ててしまい脳がうまく働いてくれない。ガイさんが下がったら私も下がればいいのだが、そのタイミングが分からない。そんな様子をガイさんは見て軽く笑っている。ガイさんは困だったのだ。

オリヴィエ「聖連拳」

ガイ「つつ!？」

だが、視界からガイさんが消え、握られていた左手が自由になった。フリージアさんが何か衝撃を与えてガイさんが飛ばされたようだ。私は自由になったのでアインハルトさんの回し蹴りを腕をクロスしてガードする。威力が大きすぎて私の立っている地面が少し凹んだ。その間にフリージアさんがアインハルトさんに右拳昇打を放った。アインハルトさんはそれを無視して私に左掌手の中段突きを下から突き上げるように放った。それは私が右膝を上げて何とかガードするが大きく飛ばされた。

その後はフリージアさんの右拳昇打がアインハルトさんに当たるはずだった。

オリヴィエ「!？」

だが、その拳はアインハルトさんを挟んで放物線に飛んできた黒い魔弾に当たり、動きが止まる。その間にアインハルトさんは私に追撃を行うために私に向かって走り出した。ガイさんは飛ばされても先の状況を読んで魔弾を撃っていたようだ。凄いです、ガイさん。

ヴィヴィオ	:	1	8	0	0	1	2	0	0
オリヴィエ	:	2	0	0	0	1	8	0	0
ガイ	:	2	3	0	0	1	2	0	0
アインハルト	:	1	3	5	0				

オリヴィエをガイさんに任せて、私はヴィヴィオさんに追撃して右ストレートを放った。それをヴィヴィオさんは両腕をクロスしてがっちりガードする。

さらに、左拳廻打を放つがそれもサイドステップで避けられる。そ

の後も攻め続けるが避けられガードされる。少し前にアラル港湾埠頭でやった人物と同一とは思えないほどだ。

相手の攻撃を覚えて対策する学習能力。速くて精密な動作。何より相手の攻撃を恐れずに前に出て打ち込める勇気！それらが重なって出来上がるこの子の戦闘スタイル。

私が右スレートを打つとそれを最小限の動きでヴィヴィオさんは避けて左拳廻打の横顔に当てた。

ヴィヴィオさんはカウンターヒッターだ!!!

アインハルト：1350 750

とても重い一撃。その衝撃で私の体が左に傾いた。ヴィヴィオさんは更に右手を握って表情を硬くした。

ヴィヴィオ「一閃必中！アクセルスマッシュ!!!」

ゴウンッ!!!

その右手はとても威力のある昇打。不思議な加速で飛んできた。それを私はまともに受けて意識を手放した。だが、手放す直前、私は左回し蹴りの反撃を行った。どうなったのかはわかりませんが。

ガイ「はああああ!!!」
オリヴィエ「はっ!!!」

俺はあの黒い魔弾を飛ばした後、ヴィヴィオをアインハルトに任せて、オリヴィエと対決することにした。俺の鞘走りから抜刀した刀をオリヴィエは臆することなく右の手甲でガードする。そして、互いに少し離れ、俺は納刀した。

2on2が始まる時に使った突撃の加速。足に魔力を溜めこんで一気に解放して、その威力を利用した移動方法。魔弾二つ分の魔力を消費して行ったので、ヴィヴィオには一瞬消えたように見えたのだろう。オリヴィエには反応されたが。

そして、アインハルトに返された“空破断”を相殺するために二発、先ほど一発使ったので、魔力は空に近い。魔弾を打つ魔力は無いし、空も飛ばない。

俺は今考えているモノをやめて、目の前に立っているオリヴィエを見た。

ガイ「アインの“空破断”を返したのも先ほど俺を飛ばしたのも技の一つか？」

オリヴィエ「ええ、“旋聖破”と“聖連拳”です。“旋聖破”は受け止め、魔力で出来ているモノなら拳をブツけてベクトルを反対にして返す技。アインハルトの“旋衝破”のように受け流して返すのとは少し違いますが、似たようなものです。“聖連拳”は拳に魔力を込めて、一瞬のうちに三つの打撃を相乗して打つ拳です。威力はそれなりに高まります」

ガイ「……………」

それなりに？かなりの間違いないのか？あれをまともに受けた俺にとつてはかなりの威力だと思っただが。

俺は開いた口が塞がらなかった。

これらの技の前には“聖王”が付くだろう。近くにはティアナさんが居るからその言葉を付けられないようだ。

ガイ「やっぱりフリーは強いな」

オリヴィエ「まだまだです。それに本気を出すことがまだ出来ませんし」

あれで本気ではないと。このサーヴァントはどれほど強いのか分からない。俺が全力を出しても赤子の手を捻るようなモノだろう。

なら俺はいつもより多めに左に体を捻り、鞘を腰の後ろへと持っていき、立ち居合の構えをする。

オリヴィエも左手を前に出して、指と指の間を閉じて手と手のようにして手首を上げ、体を右に少しひねって右拳を後ろに下げ構える。辺りは静寂に包まれる。ヴィヴィオとアインハルトの対決も終わつたようだ。音が聞こえない。そのどちらもちちに援護に来ないという事は相討ちなのだろう。今は確認している暇はない。

ガイ「“天瞳流抜刀居合”……………」

その静寂は俺の一言で解除された。

俺が次に行く動きはミカヤの戦闘スタイルである天瞳流抜刀居合だ。魔力をほぼ使う事なく、斬撃の威力を上げることのできる居合。俺の我流とは大違いで型もしっかり出来ている。だが、この型は俺にあまり合わない。波長が何か違う。だが、それでもミカヤは俺の事をあの道場に置いて相手をしてくれる。あの道場は居合の練習をするのには最適の場所だ。行けなくなると少し困る。

一応、一つだけ天瞳流抜刀居合の技を使えるものがある。それを今、オリヴィエにブツけるために魔弾を一発も作る事の出来ない僅かな魔力を込める。バリアジャケットを維持する魔力だけは残す。

ガイ「水月」

ミカヤは“水月”を二連以上叩きこめる。流石は師範代だ。俺は一連だけだ。

俺が言った言葉と同時にオリヴィエが俺に向かって走り出す。その一歩が速い。常人には見えない速さだろう。だが、俺には視えた。俺は腰を低くして、上半身を少し屈めて、腰の回転を生かして、鞘から鞘走りしてタイミングよくオリヴィエの腹部に目がけて抜刀した。

いつもより大きく腰を捻ったのは腰の回転を抜刀の威力を高めるため。

居合は抜刀の瞬間こそ最速が完成する。静止した姿に勢いが秘められているモノだ。天瞳流抜刀居合はその最速を上げるために徹底して鍛えられた流派だ。腰の回転を上げるために魔力の力を使っている。それによって抜刀時の最速が底上げされている。その回転から生まれた威力は他の流派とは一線を画している。

オリヴィエ「!?」

オリヴィエはいつの間にも自分の懐に俺の抜刀している刀が襲ってきたのか分からなかったのだろう。腰の回転からすでに抜刀する時の速度は最速にたどりつき、鞘走りからの抜刀はその速度のまま放たれている。

腰の動きなので相手からは確認することが難しく、抜いたと思った瞬間、目の前に己に傷をつけようとしている刀がある状態だ。

ドカツ！！！

その刀はオリヴィエの腹部にクリーンヒットした。だが、

オリヴィエ「っぐ、「聖連拳・二撃」」

ガイ「！？」

それを食らってもカウンターを放ってきた。先ほどの“聖連拳”だ。それを両手で打ってきた。計六発。動きは右拳廻打から左ストレートと二発しか殴ってないがその威力は六発分だ。俺は抜刀したばかりなのでそれを避けるすべもなく、プロテクションする魔力も残されていなかったのでそれを胸部にマトモに受け、胸部の部分のバリアジヤケットが破れ大きく飛ばされたが何とか地面に着地した。

ガイ「~~~~っ！！」

凄まじい威力だ。まるで昨日のなのはさんの砲撃を受けたような衝撃だ。そして、息が出来ない。肺の空気を全て排出されてしまい、取り込むのに時間がかかる。さらにビリビリとした痛みが胸部に残る。右手で押さえているがそれで痛みが消えるわけもない。

ガイ「っは、はあはあ……………」

何とか呼吸をする事が出来た。肺に溜まった熱い空気を排出して、斬新な酸素を取り込む。

ガイ「はあはあ」

息を整えるまでもう少し時間がかかりそうだ。

その間に右手でモニターを開いて皆のLIFEを確認した。

ヴィヴィオ：1200 0

アインハルト：1350 0

オリヴィエ：1800 100

ガイ：1200 0

ヴィヴィオとアインハルトは相討ちのようだ。それに先ほどの戦いでオリヴィエのLIFEを最後まで減らすことが出来なかったようだ。ちよつと残念だ。

この戦いでオリヴィエの戦い方が少しわかった。

オリヴィエはカウンターヒッターに近いスタイルのようだ。本来なら俺の抜刀術を避けてカウンターして来たのだろう。予想外の抜刀の早さに体が追い付かずに当たったと考えられる。

メガーヌ「はい、試合終了〜〜！」

そこに別モニターからメガーヌさんとシスターの格好をした水色の髪に愛嬌のある幼気な風貌の少女が居た。確か名前はセインで元戦闘機人らしい。

メガーヌ「勝者は青組ですね〜」

メガーヌさん言葉でこの模擬戦は幕を閉じた。

ガイ「はあはあ………負けたか」

ようやく息を整えることが出来た。俺は刃が黒く、そりが白い刀を
持っている右手を見た。天瞳流抜刀居合は確かに凄まじい威力を出
すことが出来るが、右手や腕への負担が大きい。未だにピリピリと
した感覚が残っている。もともと天瞳流抜刀居合とは肌が合わない。
俺は納刀してバリアジャケットを解いた。何はともあれこの模擬戦
は終わったのだ。

なのは「それでは皆さん！」
皆「「「お疲れさまでしたー！」「」」

構造物もほとんどが壊れた模擬戦場の場所でのなのはさんが締め挨拶をした。そして、皆が雑談を始めた。俺もその一人だ。

ガイ「あゝ、もう少しでフリーのLIFEを0に出来たんだがな」
オリヴィエ「ですが、あの抜刀術は驚きました。あれほど早い抜刀術は見たこと無かったです」

ガイ「ま、あれはあまり使わないから。俺との肌が合わない流派だからな」

俺は片目を閉じて、右手をふるふると振った。まだ、しびれが残っている。それにオリヴィエが本気になったらあれも簡単に避けられてしまうのだろう。

ノーヴェ「あの流派ってミカヤさんの所のか？」

ガイ「ああ、そうだ。抜刀の最速を極めている流派だからな。その速さと威力は高い」

と、皆と雑談していたが、ふと、アインハルトを見ると表情を少し暗くして、何かを思っているのか右手を握ったまま胸の前に置いて一点を見つめていた。見つめている先に居たのはヴィヴィオ達だ。いや、それは見ているだけで頭の中では何かを考えているのだろう。

ガイ「どうした、アイン。疲れたか？」

一点を見つめているのは疲れているのか何か思考中かのどちらかだ。思考中だと思うが、あえて外れの方を言ってみた。

アインハルト「……………いえ、この模擬戦をもう少しやってみたかったと思います」
ガイ「ま、確かにな」

アインハルトは先ほどの模擬戦では物足りなかったようだ。もつとやってみたいが一回きりの模擬戦だ。ま、その意見には賛成だが。この模擬戦はためになる事が多かった。

なのは「じゃあ、おやつ休憩と陸戦上の再構築したら2戦目行くからな」

フェイト「2時間後にまた集合！」

皆「……は……い……!!!!」

俺とアインハルトとオリヴィエ以外はなのはさんとフェイトさんの言葉に返事を返した。

アインハルト「え？え？」

ガイ「ん？」

オリヴィエ「……………2戦目？」

俺たち三人は疑問が残り頭の上には？マークが出ているのだろう。

ヴィヴィオ「あ、あれッ!?言つてませんでしたっけ？」

そこにヴィヴィオが慌てて補足に入った。俺たちは頷く。

コロナ「今日一日で三戦やるんです！」

リオ「休憩挟んだり、作戦組み直したりして！」

三戦やる。その言葉にアインハルトの表情が明るくなってきたのが

分かった。よほど嬉しいのだろう。まあ、俺も嬉しいけど。

アインハルト「よかった。もっとやりたかったんです」
ヴィヴィオ「はいっ！」

ヴィヴィオも笑みを作って答えた。

そして、その後は二戦目と三戦目を行った。作戦を変えたり、メンバーをトレードしたり。この三戦でかなり鍛えられたような気がした。

宿泊ロツジ

ガイ「疲れた〜」

オリヴィエ「まったくです。これほどの鍛錬を行ったのは本当に久々です」

俺は温泉に入って部屋に戻った。その時にオリヴィエが話をしたいとの事で部屋に入れた。俺も話があるので丁度良い。俺は椅子に座り、オリヴィエはベッドに座った。

オリヴィエは少し湿らせているライトブラウンの髪を全て下ろして、湯上りで頬が少し赤くなっている。オリヴィエの浴衣姿も何と云うか様になっている。オリヴィエには何を着せても似合いそうだ。元が良いからな。

ガイ「で、話というのは？」

俺は今考えていた事を脳の片隅に置いて、話を催促する。それを聞いて、オリヴィエがちょっと戸惑ったような表情をしてきた。

オリヴィエ「わ、私の戦いを見てどう思いましたか？」

ガイ「オリヴィエの？」

オリヴィエは少し緊張した面持ちで頷いた。今ここに居るのは俺とオリヴィエだけだ。フリージアとは言わず、オリヴィエと言うことにした。

オリヴィエ「その………がっかりとかしませんでしたか？こんなに
も実力が低いサーヴァントだったなんて」

今日の模擬戦を見て、オリヴィエの実力が低いとなぜ言えるのか？オリヴィエは自分を過小評価している。

ガイ「いや、俺はこれほどのサーヴァントが居るならとても心強い
と思ったが」

オリヴィエ「本当ですか!？」

ぐいっと、オリヴィエが立って必死な表情をして椅子に座っている
俺に近づく。

腰をおって俺に顔を近づけてくるから、胸元が少し空いて谷間が見
える。

ガイ「あ、ああ／＼／」

オリヴィエ「良かったです」

オリヴィエはホッと一息ついた表情になって笑みを向け、再びベッ
ドに座る。オリヴィエと暮らして少し経つが、こういうところに羞
恥心を持ってほしいと常々思う。

ガイ「……………過小評価し過ぎだ。オリヴィエは強い。それは今日の
模擬戦で物語っていることだ」

考え事を切り替えるのも大変だが先ほどの会話に戻した。

オリヴィエ「ですが、私はガイとの魔力が上手く繋がっておりませ
ん。更なる実力を出すためにはガイの魔力が必要です。これでも色
々と制限が掛っています。ガイの魔力がもっと上がれば嬉しいので
すが」

ガイ「そう言えば模擬戦の時にも言っていたな」

まだ全力を出せないらしい。その原因はやはり俺の魔力の低さだ。
それが原因で使える技も使えないのだろう。俺はその事に関して負

目を感じた。

ガイ「すまないな」

オリヴィエ「いえ、気にしないで下さい。その分、私がしっかりと働きますので」

それは心強い、と俺は相槌を打った。

オリヴィエ「それで、ガイの話というのは？」

ガイ「ああ、今日戦った時に使った技を詳しく教えてくれ。作戦を立てる時に役立てるからな。今は使えないが俺の魔力が上がったら使える技などがあれば教えてくれ」

ええ、とオリヴィエは言っただけで先ほどの戦いで使った技の説明と他に
ある技の説明をした。

使った技を纏めてみると、

聖王聖空弾……………一発の魔弾を撃つ。だが、一発に件の魔弾とは比べ物にならない量の魔力が込められているのでスピードは速く威力は高い。

聖王聖連拳……………魔力を帯びた拳で殴る。魔力によって一瞬のうちに三つの打撃を相乗して打つ拳。

聖王旋聖破……………相手の技を手刀で受け止め、魔力で出来ているモノなら聖連拳とは異なる魔力を帯びた拳をブツけてベクトルを反対にして返す技。反射に近い。だが、投擲などの実像があるモノは受け止められるだけで返す事が出来ない。

と、言った感じになった。他にも色々知った。

この三つが今の俺と魔力がほぼ繋がっていない状態で魔力をあまり消費せずに使える技らしい。

オリヴィエ「時にガイ。“宝具”というのを知っていますか？」
ガイ「ほうく？」

オリヴィエが少し話題を変えてきた。俺はどういうものか分からなかったので首を横に振った。

オリヴィエ「“宝具”とは人間の幻想を骨子にして作り上げられた武装の事です。英霊は、生前彼らが持っていた武器や固有の能力や特徴、あるいは彼らを英霊たらしめる伝説や特徴が具現化したもので、伝承由来通りの“宝具”があります」

ガイ「ふ〜ん。ならオリヴィエも“宝具”を持っているのか？」

オリヴィエはい、と答える。そして、柔らかい表情で悪戯っぽい笑みを浮かべて俺を見る。

オリヴィエ「何だかわかりますか？」

ガイ「……………“聖王のゆりかご”？」

オリヴィエと言えば、聖王家で最後に“聖王のゆりかご”に乗った人物で、敵戦力を壊滅的なまでに追い込んだと言われている。

オリヴィエ「ええ。ですがこれは多大な魔力を消費してしまいますので本当に必要な時にしか使わないでしょう」

だが、“聖王のゆりかご”が宝具だとはな。なのはさんに聞いた話だが、ゆりがこを起動させるには聖王家の奏者自身が制御ユニットにならなければならないモノだと。あまりいい話ではない。

俺は立ち上がってオリヴィエに近づく。

ガイ「それは……なるべく使わないで行きたいな。出来れば使わないでほしい」
オリヴィエ「ガイ？」

俺はオリヴィエの両肩を両手でガシッと押さえてオリヴィエを見る。

ガイ「ゆりかごを動かすのにオリヴィエ自身が制御ユニットにならないといけないんだろ？」
オリヴィエ「……そこまで知っていましたか」

オリヴィエは俺から視線を離して、少し悲し表情をして笑みをこぼす。

ガイ「“聖杯戦争”中に自分が犠牲になればいいという自己犠牲な考えないでくれよ」
オリヴィエ「ですが、マスターを守りたい気持ちはあります。たとえ自分が犠牲になっても……」
ガイ「だから、その考えをやめる」

俺ははあ、とため息を吐いて、オリヴィエの肩から手を離す。

ガイ「そんな事をして残された者の気持ちを考えて事があるか？ クラウスの時もそんな考えをしてゆりかごに乗ったのか？」
オリヴィエ「えっ……ど、どうしてそのことを？」

オリヴィエは俺がクラウスとの出来事を知っている事に驚いている。まあ、夢で俺の脳の整理ではなく、魔力が少しだけ繋がっているオリヴィエに繋がって、オリヴィエの脳に記憶されているモノを見たただけだ。

ガイ「夢で見た。俺とオリヴィエは少なからずとも魔力で繋がっているからな。オリヴィエとクラウスの最後の会話の所を見た」
オリヴィエ「……………」

オリヴィエは何も言わず、顔を伏せた。

ガイ「悪い、勝手にオリヴィエの記憶を見て。だが、残された者の気持ちも忘れないでほしい」

オリヴィエ「……………ええ、そうですね。ガイの言う通りです」

オリヴィエは何を思っているのか表情では理解できない。いつも明るい性格な彼女だけに考えて寡黙になるとまるで別人のようだ。

ガイ「なんか暗い話になっちゃったな」

オリヴィエ「そうですね」

なんだかとても微妙な雰囲気部屋を覆っていた。正直気まずい。オリヴィエと居て、気まずいと思ったのはこれが初めてだ。

俺はどのようにしてこの雰囲気を打ち破ろうか考えていた時、

ヴィヴィオ『ガイさん』

そこにモニターが現れて、少し表情の硬い笑顔のヴィヴィオがベッドに寝転がって映しだされた。俺はヴィヴィオがこの雰囲気を打ち破れそうだと思ったので、ヴィヴィオと話をするために声をかけた。

ガイ「ん？どうした？」

ヴィヴィオ『良かったら私たちの部屋に来ませんか？今日の模擬戦の話をしているので、ガイさんから見た感想でいいのですが、私たちの動きや技などがどんなものだったか教えてください』

ヴィヴィオの後ろには、リオ、コロナ、アインハルトがベッドで困ったような表情で横たわっていた。

オリヴィエ「皆さん大丈夫ですか？」

リオ「う、腕が上がりません……………」

コロナ「起き上がれないです」

子供たちはどうやらオーバーロードのようだ。アインハルトも体をプルプルさせている。そんな子供たちの様子を見ているとなんか微笑ましい。後先考えずに一生懸命やって今の状況になっているのだから。

ヴィヴィオ「あ、フリージアさんもいたのですか？」

オリヴィエ「ええ、ガイと少し話をしていました」

ヴィヴィオ「じゃあ、フリージアさんもどうですか？フリージアさんの戦闘スタイルも参考にしたいです」

何というか、今の2人には一子相伝という言葉が合っている気がする。師であるオリヴィエから弟子であるヴィヴィオに技を引き継がせる。ヴィヴィオは少し特殊だけど聖王家の家系であることには違いない。今は高町家の家系だけだ。

ガイ「ああ、フリーも連れてそっちに行くよ」

ヴィヴィオ「はい、待ってますね」

ぎこちない笑みを浮かべてモニターが消えた。かなり疲れているようだ。

ガイ「子供たちは元気だな」

オリヴィエ「そうですね。あの笑顔を守りませんと」

まったくだ、と俺は相槌を打ってヴィヴィオ達の居る子供部屋に移動することにした。先ほどの気まずい雰囲気は無くなった。その事に俺はちょっとホッとした。

ヴィヴィオ「え？あの砲撃を逸らしたのは偶然なんですか？」
ガイ「ああ、冷静な表情を浮かべてはいたが内心はビクビクしていたぐらいさ。あんなのをまともに受けたら一発で落とされると思ってたな」

俺とオリヴィエは子供部屋にやってきた。モニターに映っていた通り、ヴィヴィオ達はベッドで横になって必死に体を起こそうとしているのだが、筋肉に乳酸が溜まりすぎたのか動かすたびに悲痛の表情を浮かべて蹲る。

なので子供たちは寝ながら会話をしている。しばらくすれば軽くは動かせると思うが。

ルーテシア「でも、ガイさんとフリージアさんの対決も凄かったですよ」

子供たちの中でも特に疲れた様子を見せないルーテシアは椅子に座って、モニターを表示させた。映っていたのは俺とオリヴィエが対決しているシーンだ。

俺が“水月”を抜く瞬間から始まっていた。

アインハルト「あんなに早い抜刀術、見たことありません」

ガイ「フリージアも同じこと言ってたな」

オリヴィエ「はい」

天瞳流抜刀居合がそんなに珍しいモノだろうか？ミカヤからは代々から伝わる流派と聞いていたから昔からあると思ったが。

ガイ「だが、当たったはいいが、フリーの反撃が来るとは思わなかった。意外とタフなんだな」

オリヴィエ「一応、鍛えていますから」

オリヴィエは意地悪な笑みを浮かべて答える。だいぶ前に俺が言った事を真似てきたような気がした。

ルーテシア「そういえば、アインハルトはこういう試合って初めてだよ。どうだった？」

ルーテシアが話を变えてきた。アインハルトは何とか体を起こせるまでに回復したようベッドから起き上がった。

アインハルト「はい……………とても勉強になりました」

ルーテシア「スポーツとしての魔法戦競技も結構熱くなるでしょ」

他の子供たちも体を起こしてアインハルトの言葉を聞く。

アインハルト「はい……………いろいろと反省しましたし、自分の弱さを知ることできました。私の世界は……………見ていたものは本当に狭かったと」

ルーテシア「今日の試合が良かったんなら……………この先こんなのはどうかかって……………」

ルーテシアはそう言いながら皆の前にモニターを表示させる。映っているのは野球場のようなドーム状の球場に似た場所で歓声の音が聞こえてきた。

ガイ「これは？」

オリヴィエ「コロッセオみたいな場所ですね」

ルーテシア「D S A A（ディメンション・スポーツ・アクティビティ・アソシエーション）公式魔法戦競技会。出場可能年齢、10歳から19歳。個人計測、ライフポイントを使用して限りなく実践に近いスタイルで行われる魔法戦競技」

ルーテシアの説明に俺とアインハルトはモニターに釘づけになった。

ルーテシア「全管理世界から集まった若い魔導師たちが魔法戦で覇を競う、インターミドル・チャンピオンシップ」

コロナ「私たちも今年から参加資格があるので………出たいねって言ってたんです」

ヴィヴィオ「そうなんです！」

アインハルトに子供たちが更に説明を加えた。アインハルトはモニターからヴィヴィオ達に振り向く。

リオ「全国から魔法戦自慢が続々集まって来るんです！」

ヴィヴィオ「数は少ないですが格闘型の人も！」

ルーテシア「自分の魔法、自分の格闘戦技がどこまで通じるか確かめるのにはすごくいい場所だよ。ちなみに今年は私も出る……！」

グツと右拳を掲げてガッツポーズをとるルーテシア。それを見て、ヴィヴィオ達が喜ぶ。アインハルトは皆の言葉を聞いて顔を俯かせている。何を考えているのだろうか。

俺もこの競技は初めて聞いたので、考える事は多い。顎に手を置いてモニターを見つめていた。

ガチャ

なのは「はあい。みんなー。栄養補給の甘いドリンクだよー」

そこにエプロンを着た、なのはさんとメガーヌさんがジュースの入ったコップを子供たちの人数分持って入ってきた。

皆はそれを喜びながら受け取る。

メガーヌ「あら懐かしい。インターミドルの映像？」

ルーテシア「そー、今、アインハルトとガイさん、フリージアさん

に出場の勧誘してたの」

ガイ「え？俺もだったの？」

オリヴィエ「私もですか？」

どうやら俺やオリヴィエも誘われていたようだ。そういえば、オリヴィエの年齢はいくつなのだろう。まあ、オリヴィエ・ゼーケブレヒトという名の戸籍がこの世界に存在していないので身元証明が無いから出れないだろう。俺は参加資格はあるから出れなくはない。

ルーテシア「ガイさんは出れますけど、フリージアさんはお幾つなのですか？」

オリヴィエ「私は21ですね」

まあ、そのくらいだろう。俺より年下なのもおかしいし、30を超えているような養子でもない。

ルーテシア「すいませんがフリージアさんは出れないですね」

参加資格がないからかルーテシアは申し訳なさそうな表情をして謝った。

オリヴィエ「いえ、お気になさらずに」

オリヴィエは特に気を悪くした様子もなくモニターに映っている映像を見ていた。

ルーテシア「どう、アインハルト？出たくなってきた？」

アインハルト「あ……………その……………」

アインハルトはモニターを見てから、心ここにあらずな様子で考え

事をしているような感じだ。そこにルーテシアが声をかけてきてどうやって返すのか戸惑っていた。

ヴィヴィオ「アインハルトさん！」

そこにヴィヴィオが隣か表情を硬くして急接近してきた。

ヴィヴィオ「大会予選は約2カ月後先の7月からですから……私
もまだまだ鍛えます。だからもつともつと強くなって、公式試合の
ステージでアインハルトさんと戦いたいです！」

そのまっすぐな気持ちにアインハルトは困った表情を消して、一度
眼を瞑って、そして、凜とした眼をしてヴィヴィオを見据える。

アインハルト「ありがとうございます、ヴィヴィオさん。インター
ミドル……私も挑戦させていただきたいと思います」
ヴィヴィオ「はい！！！」

アインハルトの良い返事にヴィヴィオは嬉しそうだ。

アインハルト「ガイさんも出場するのですか？」

そして、その見据えた瞳はヴィヴィオから俺に向かれた。

ガイ「俺？」

コクンと頭を縦に一回振って頷く。他の子たちも俺に視線が集まっ
てきた。だが、俺には“聖杯戦争”というモノがもうすぐ始まるモ
ノだと思っている。インターミドルは二カ月後先だがそれまでに“
聖杯戦争”が終わるかはわからないし、俺が生きている保証もない。

生きている保証………か。

ガイ「悪いな。その時期はちょっと野暮用が入って出れなそうに無さそうだ。出場はしないでおくよ」

アインハルト「ガイさんは出ないのですか？」

俺の言葉にアインハルトは悲しそうな表情で少し暗くなってしまった。ヴィヴィオ達もそんな表情だ。

ヴィヴィオ「ガイさんとも公式試合で当たりたかったです」

ガイ「ああ、悪いな」

俺はそう言ってヴィヴィオの頭を撫でてやった。俺の心境を分かっているのかオリヴィエは表情を硬くして悲しげな瞳を俺に向けていた。

ルーテシア「では、もし時間が空いたら参加してくださいね」

ガイ「………ああ」

俺は少し遅れながらも返事をした。

なのは「………」

なのはさんが何か言いたそうな表情で俺の事を見ていたが、すぐに視線を逸らして子供たちと会話した。

子供部屋を後にした俺とオリヴィエは俺たちも別れて部屋に戻り、冷蔵庫に入っているペットボトルのミネラルウォーターを一口飲んで、窓の外を見た。雲一つない夜空がいくつもの星の輝きに覆い尽くされて、幻想的な光景だ。

ガイ「……………少し外に出るか」

俺はその光景をもっとみたく部屋を出る事にした。だが、その行為は先ほどの考えていたものをなるべく考えたくない様子にして、別の思考をするために行っている。自分自身でも分かっていた。

外に出て俺は見上げた。夜空がより一段と鮮やかに見えるようになった。周りからは虫の鳴き声が程良いボリュームで静かな雰囲気だ。周りに漂っている。

今は少し夜風が吹いていて、肌に冷たい空気が当る。

ガイ「はあ……………」

生きている保証。先ほど考えていた思考が頭に浮かんでしまい、ため息が漏れた。どれだけ他の事に思考を集中させても不安なモノは頭に浮かび上がってしまう。人間とはそのように出来ている。そして、無意識でも先ほどの事を思考してしまう。

“戦争”というモノが始まるのだから命がけだ。“誰も不幸にならない世界”。そのような夢を叶える為にこの戦いに参加する。

だが、もしかすると先ほどのように楽しく雑談を出来る事は永久に無くなってしまうのかもしれない。

皆の居る場所が何か眩しく感じてしまった。そこに戻れるのか、それもと永遠に……………」

???「また大きなため息だね」

と、思案していたからか後ろから優しく労わるような女性の声が聞こえてきて、今、思考していたモノが中断されて後ろを振り向いた。

ガイ「なのはさんですか」

なのは「うん、なのはさんだよ」

と、笑みを零しながら俺の隣へと近づいて夜空を見上げた。

なのは「いい夜空だね」。とっても幻想的だよ」

ガイ「そうですね」

俺もつられて再び夜空を見る。その星一つ一つが輝いてとても綺麗だ。

なのは「……………ねえ、ガイ君」

俺は名前を呼ばれたのでなのはさんの方を向く。なのはさんは見上げながら言ったようだ。

なのは「ガイ君の考え事って、前に私とヴィータちゃんとの会話で話す事が出来ない内容の事？」

なのはさんは決してこちらに顔を向けることなく夜空を見上げ続けて言葉を投げてきた。

それは少し前になのはさんとヴィータさんと話をした時の内容だ。なのはさんは前回もため息をしていた俺と今回が被って見えたのか、同じ内容なのだろうと思っているのだろう。

ガイ「……………ええ」

俺は静かに頷いて夜空を見上げた。

なのは「それってフリージアさんとも関係するの？」

ガイ「……………なぜ、フリーが出て来るのですか？」

なのはさんからの思わぬ人物が出てきたので、言葉を絞り出すのに少し時間がかかった。

なのは「フリージアさんが来た時とガイ君の悩み事はここ最近に起きた事だからね。フリージアさんがうちに来たのはガイ君が悩み事を始めた後だからいつ来たのかは分からないけど、ちょっと関係性があるかなっと思って」

ガイ「……………」

俺は絶句してなのはさんを見た。この人の洞察力と推察力は流石だ。ポジシヨン上、必要不可欠だからかなり鍛えられたのだろう。

ガイ「いえ、フリーは関係ないです」

なのは「ふん」

多分、このような嘘を言っても、なのはさんにはすぐ嘘だと見破られてしまうのだろう。だが、なのはさんは分かっているような表情ではあるがそこから先は言っただけでこなかった。

なのは「で、やっぱりそれは今も話せない事なの？」

ガイ「はい。心配してくれてとても嬉しいのですが内容は話す事が出来ないのです」

そっか、と言ってなのはさんは見上げることをやめて、俺の方を向いた。その表情は優しい笑みだった。

なのは「前にも言ったけどヴィヴィオ達を悲しませるような事はしないだね」

ガイ「……………はい」

俺が返事するとなのはさんはよし、と言って手を組んで大きく腕を伸ばす。

なのは「んっ、と。それじゃ、そろそろ戻ろう。あんまり夜風に当たっていると風邪ひいちゃうよ」

ガイ「はい」

なのはさんには迷惑ばかりかけてしまった。今度、お礼を込めて何か送ろう。

俺となのはさんは宿泊ロッジへ戻った。

ルーテシア『まあ、ガイさんの参加申請書も出しておくんだけどね』

ガイさんが私たちの部屋から出て行った後、ルールーはガイさんの参加申請もしておくと言って部屋を後にした。そうしてくれると私も嬉しい。もし、ガイさんが大会に出てきてくれたら私も皆も大喜びだ。

アインハルト「んっ……………」

と、考え事を終えてそろそろ意識を手放そうとした時、ゴソツと私の隣でアインハルトさんが動く音がした。

皆、寝ていると思ったけど、アインハルトさんも考え事をしていたのだろうか？それとも何かの拍子で起きてしまったと。

そして、ベッドから降りる音がした。ギシツと音がしたので窓際の椅子に座ったのだろう。確かあそこにはフリージアさんが昨日置いていった霸王の回顧録の本があった気がした。

パラパラと捲る音がする。それを読んでいるのかただパラパラしているのかはわからない。

アインハルト「クラウス……………私はそこで戦ってきていいですか？いつかあなたに追い付いて、いつかあなたを追い越して、あの日のオリヴィエより強くなって私たちの悲願をかなえるために……………」
ヴィヴィオ「……………」

私はアインハルトさんに背を向けるようにして横向きに寝なおして眼を開けた。やはりアインハルトさんは霸王の悲願を忘れていたわけではないようだ。

アインハルト「あ……………ガイさん」
ヴィヴィオ「!?!」

私は一瞬体を動かそうとして、何とかその衝動を止めた。アインハルトさんがいきなりガイさんの事を言うからびっくりした。

そして、アインハルトさんの動く気配がして静かに部屋を出て行った。

私も起き上がって、窓の外を見た。確かにガイさんが居た。

その表情はここからだとは良く分からない。

と、そこになのはママが来て何かを話しをしている。少し離れた所の茂みにアインハルトさんが居た。どんな会話なのか気になっているのかな。

ヴィヴィオ「まあ、私もだね」

私も部屋を出て外へと出た。アインハルトさんとは反対側の茂みに隠れてガイさんとなのはママの会話を聞く事に。

なのは「前にも言ったけどヴィヴィオ達を悲しませるような事はしないだね」

ガイ「……………はい」

私達を悲しませるようなこと？なんだろう？

なのは「んっ、と。それじゃ、そろそろ戻ろう。あんまり夜風に当たっていると風邪ひいちゃうよ」

ガイ「はい」

そう言つて、2人は宿泊ロッジへと戻つた。

私もアインハルトさんが戻る前に部屋に戻らないといけないので、2人の後を追うようにして宿泊ロッジに入って、部屋に戻りベッドに入って目を瞑る。

少しして、アインハルトさんも戻ってきて私の隣に横になったようだ。

それにしても私達を悲しませるような事をつて何だろ？ガイさんが私たちに何かをして悲しむこと……………ガイさんが居なくなることかな。皆はそれで悲しくなると思う。

アインハルト「ガイさん……………オリヴィエ……………」

アインハルトさんから何か聞こえた。ガイさんとオリヴィエ。2人の名前が出てきたがどのような関係があるのだろうか？

アインハルト「あの二人なら……きつと……」

そう言った後は、アインハルトさんから静かな寝息を立て始めた。

ヴィヴィオ「ガイさんと……オリヴィエ？」

アインハルトさんの口から出てきた2人の共通点はいったい何なのだろう。今の私には分からないことだらけだ。

いろいろと考えているうちに意識が遠くなり始めた。眠気が襲ってきたのだ。私は意識を手放す前にアインハルトさんの方を向いた。アインハルトさんはとても美しい寝顔で眠っていたが、なぜかその眼からは涙が滲んでいて、そして、一滴の涙が頬をつたって零れ落ちた。

何かを思っているのか何かの夢を見ているのかはわからない。

ヴィヴィオ「アインハルトさん……」

それを見て、私は静かに意識が薄れていつて眠りについた。

十二話“ 集団と集団の交差（後編） ”（後書き）

今月のコンプエースの結果は俺的にちよつと残念。

ミカヤのスタイルの説明があつたが、その前に書いた内容が似ていて良かったとちよつとほつとした。

戦闘シーンの描写は難しいですね。

まだまだ筆力が足りないかな。

しかし、技名が全て漢字だと厨二病的な感じであまり好きじゃないんだが、アインハルトの技名が霸王くなのでオリヴィエも聖王くじゃないといけませんよね。

だが、自分の好きな技は

超究武人霸斬・ver5（FF7AC
トランザム（ガンダム00

とか、ねくw

自分が粒子化する技が好きですね。

厨二乙w

何か一言感想がありますと嬉しいです。

では、また（・・）／

十三話“終わりと始まりの交差”（前書き）

区切りがいいところで切ると、少し短くなってしまいました。

ですが、ここが多分一番良い区切りだと思います。

では、13話目入ります。

十三話 “ 終わりと始まりの交差 ”

合宿3日目。前日が模擬戦三連戦という事もあったので午前中は訓練はオフのようだ。

ヴィヴィオ「ガイさん、フリージアさん。早く来てくださーい！！」

今はこの合宿に来ている無人世界カルナージの大自然を楽しむため、ヴィヴィオ達とノーヴェで昼食の入ったバスケットを持ってピクニックに行くようだ。俺とオリヴィエも一緒に行くことになった。

ガイ「元気だね」

オリヴィエ「年寄りの発言ですよ」

隣に居たオリヴィエが苦笑しながら俺の方を見る。会話をしながらも足は止めない。

ガイ「いや、ヴィヴィ達の元気さは他の子供たちとは違っと思ってさ」

オリヴィエ「確かに、あれほど活気溢れている子たちは滅多に居ませんね」

そして、皆が待っている場所までたどり着いた。

コロナ「ノーヴェさん。どのあたりに行くんですか？」

ノーヴェ「そうだな。山の景色がよく見えるところがあるんだ。そこで昼食を取るとウマイぞ」

リオ「本当ですか!？」

リオは大喜びのようだ。

ルーテシア「うん、あそこの景色はとっても絶景なの。皆と見るとまた違うかもね」

ルーテシアも笑いながらノーヴェの意見に賛成した。

ガイ「俺は午後から訓練が始まるから、食事を取ったら戻らないとな」

アインハルト「私も参加してみたいです」

近くに居たアインハルトが少し羨ましそうな瞳で見上げてきた。俺はそのアインハルトの頭に手を乗つけた。

ガイ「やめとけ。子供がいきなり出来るレベルじゃない。基礎をしっかりと叩きこまれた後なら大丈夫だが」

エリオやキャロは機動六課に所属していた時はたつぷりシゴかれたと聞いた。なのはさんの訓練は並大抵のものじゃないからな。俺がなのはさんの訓練によくついて来れたなって、時々思う。

なのはさんの指導がウマイからかな。ヴィータさんの方がウマイって言ってたけど。

アインハルト「……………結局、一度もガイさんと対決していません」

昨日の模擬戦三連戦は最後の試合だけトレードをしたが、最後のチームもアインハルトと一緒だった。

アインハルトとの拳を交えることが昨日は無かったのだ。それが悔しいのかアインハルトは顔を伏せている。手元にあるバスケットを

握っている手に力がこもり、ギョツとしているのが分かった。訓練でもなんでもいいから俺ともう一度対決したいのだから。そんなアインハルトを見て俺は軽いため息を吐いて笑みを作り、アインハルトの頭に手を乗つけた。

ガイ「ま、後で対決してやるから。今はこの時間を楽しもうぜ」

そして、頭を撫でてやった。

アインハルト「……………また子供扱いですか／＼」

口ではそんな事を言っているが俺の手を振り払う様子もないので嫌ではないようだ。むしろ少しうっとりして俺の事を見上げてないか？バスケットを持った手も緩んでいるようだし。

ルーテシア「おやぁ？おやおやおやぁ〜？」

そんな様子を見て、ルーテシアが意地悪な笑みを浮かべて近づいてきた。

ガイ「ん？どうしたルーテシア？」

アインハルト「な、なんででしょうか？」

ルーテシア「アインハルトはガイさんの事……………」

アインハルト「!？」

ババツ

今、アインハルトの動作が全く見えなかった。目の前に居たアインハルトはいつの間にかルーテシアの口を右手で抑え込んでいるところだった。左手にはしっかりとバスケットを持っているあたりが凄

い。

ルーテシア「んーんー!!!」
アインハルト「はあはあ……………へ、変な事言わないでくださいノノ」

ルーテシアから何を言いだそうとしたのかはわからないが必死な顔で真っ赤にしているアインハルトを見た限り、恥ずかしい事なのだろう。

俺は聞かない事にした。

ヴィヴィオ「やつぱり……………」
コロナ「アインハルトさんも……………」
リオ「はあ……………」

そんな様子を見てヴィヴィオ達は何やら真剣な面持ちだ。

ガイ「どうしたヴィヴィ達？」
ヴィヴィオ「え!? あ、う、ううん。何でもないよ！」
ガイ「そう? ならいいが」

真剣な表情から一変、笑みを作って俺の方を向いた。俺は再びアインハルトの方を見る。

ガイ「大丈夫か？」
アインハルト「はい、私は大丈夫ですのでノノ」
ガイ「いや、アインじゃなくてルーテシアの方」
アインハルト「え?」

アインハルトは俺の言葉に気付いてルーテシアの方を見た。ずっと口と鼻を押さえられていたせいか息が出来ずに白眼になっていた。

口から、アインハルトの指と指の間から白い何かが出てるぞ。あれが魂か？

アインハルト「あ、し、失礼しました！！！」

アインハルトが急いで手を離すと、口から出ていた白い何かが入っていき、白眼から虹彩のある目に戻り、呼吸を始めた。

ルーテシア「はあはあ……………危うく死ぬところだったわ……………何か川が見えたし」

ノーヴェエ「それは危ねえな、お嬢」

ノーヴェエはそう言いつつ笑っていた。まるでコントを見ている観客の人のような言い方だ。俺もそんな感じで答える。

ガイ「こんなところで死亡者が出なくて良かったな」

ノーヴェエ「まったくだ」

ルーテシア「ちょ、ちょっと、そのこの2人！言い方がおかしくないですか！？私たった今、死にかけていたのに！！！」

こんな感じの流れで絶景がよく見える場所へたどり着いた。そこは丘の上で草原がそこだけ拓けている。

そこから見る山はもはや絶景としか言い表わせないような光景だ。山の圧倒的な存在感が真正面から味わえるとでも言うところか。

ガイ「……………凄いな」

オリヴィエ「ええ」

俺やオリヴィエは驚きの表情を隠せないでいた。こんな絶景は都会では見る事なんて皆無に等しい。

ヴィヴィオ「うわ、ここは初めて来たよ、凄い光景だね」
ルーテシア「ええ、私のお気に入りの場所だもの。さ、お昼にしましよう」

そう言つて、ルーテシアはレジャーシートを引き始める。そして、中央にバスケットを置いて、レジャーシートに皆座り、バスケットを開ける。

ガイ「おお、旨そうだな。作ったのはメガー又さんだっけ？」

ノーヴェ「メガー又さんの手料理が不味いことなんてあったか？」
ガイ「ははっ、確かにな」

ノーヴェの意見には賛成だ。メガー又さんの手料理が不味いと持った事はこの合宿中では一度もない。

バスケットの中身は長方形型のサンドイッチがギッシリと詰まっていた。この人数なら丁度良いぐらいだ。

バリエーションが豊富な挟まっている具材をしっかりと見せることで食欲を引き立たせる。

料理もそうだが相手の食欲を引き立たせる技術をメガー又さんは持っている。ちよつと教わりたくなってきた。

リオ「いただきま〜す!!!」

リオがもう待てないつていう雰囲気を出して、バスケットからサンドイッチを1つ手に取り口に運んだ。

リオ「美味しい!!!」

リオは満面の笑みをして大喜びだ。

ルーテシア「まったく、リオは早いよ。まあ、いいわ。皆さんもい
ただきましよう」

ヴィヴィオ「うん、いただきます」

皆も食事を取り始めた。俺も頂く事にした。

ガイ「旨いな。この大自然の中だから更に美味しく感じるよ」

オリヴィエ「そうですね。メガーヌの料理は美味しい」

ルーテシア「自慢の母ですから」

えっへん、とルーテシアが自慢した。そして、皆は雑談を始めた。

俺はサンドイッチが美味しくてついつい手が伸びてしまい、気付け
ば飲み物が欲しくなってきた。

コロナ「ガイさん、どうぞ」

隣に居たコロナがお茶の入ったコップを渡してきた。

ガイ「ありがと、コロ。ちょうど飲みたかった」

コロナ「いえいえ。そんなに食べていると飲み物が欲しそうだと思
ったので」

俺が受け取るとコロナは何か満足げに微笑んでいた。俺はそのコッ
プを一口飲む。さっぱりとしたお茶が喉を通って潤った。

ガイ「ふう」

俺はコップをレジヤシートに置いて、空を見上げた。雲1つない
良い天気だ。外で食べるご飯というのも開放感があっつい。皆と

温かな食卓を取れる上にこの良い環境。俺にとっては贅沢すぎるな。

ガイ「そういえば、アイン」

アインハルト「むぐっ！」

俺はアインハルトの方を向いた。食べている最中に声を掛けてしまったからか喉にサンドイッチを詰まらせていた。

手で口元を押さえつつ、急いでコップに入っているお茶を飲んで息を落ち着かせた。

ガイ「わ、悪い。食べてる時に声かけて」

アインハルト「んっ……………ふう／＼い、いえ。御気になさらずに。それで何でしょうか？」

少し頬が赤くなっているが聞く態勢に入ったようだ。

ガイ「ああ、そう言えば朝方にはやてさんに新しいデバイスを頼んだんだよな」

アインハルト「はい。八神はやて司令とは初めて映像通信でお会いして頼みました。八神はやて司令はさまざまな事件を解決に導いた歴戦の御方と聞いて、怖い人かと思いましたが、気さくでとても優しい御方でした」

はやてさんか。そう言えば俺も一度も会った事ないな。なのはさんやヴィータさんからはちよくちよく聞いた事はあるけど。俺も後で一度お会いしたいものだ。

ガイ「ふ〜ん。ま、どんなデバイスになるのかちよつと楽しみだな」
アインハルト「……………はい」

嬉しいのか少し顔を伏せて答える。喜びの表情を皆に見られたくないのだろう。

ノーヴェ「ところでよ、ガイ」
ガイ「ん？」

コロナの反対側に居たノーヴェが俺の事を呼んだので俺は返事をし
てノーヴェの方を振り向き、再びコップのお茶を口に含む。表情は
なぜか小悪魔な笑みを浮かべている。

ノーヴェ「ガイはフェイトの事が好きなのか？」
ガイ「ぶっ！！！！」

飲んでいたお茶を思いっきり吹き出してしまった。それがノーヴェ
にかかる。

ノーヴェ「あ、てめえ！きつたねえな！！！！」
ガイ「ゴホツゴホツ！」

お茶が少し気管に入ってしまったようだ。喉が痛い。

コロナ「だ、大丈夫ですか！ガイさん！？」

コロナが優しく背中を擦ってくれる。俺は何度か喉を鳴らして何と
か落ち着く。そして、コロナの方を見る。

ガイ「あ、ありがと、コロ」
コロナ「もう大丈夫ですか？」

俺はずっと背中を擦ってくれたコロナに礼を言った。

ノーヴェ「……………あたしには何も言わねえのかよ？」
ガイ「ノーヴェが変な事を言うからだろ」

ノーヴェの方を向き直すと、ハンカチでお茶を拭きながら少し怒ったような表情を見せる。

リオ「ガ、ガイさん。フェイトさんの事が好きなんですか!？」

と、ノーヴェの話にリオが喰い付いてきた。他の子たちも何故か興味津津で俺の事を見てくる。

ガイ「え、え」と……………」

視線が俺に集まり、言葉に詰まる。そんなに聞きたい事なのか？俺は少し考えた。そして、俺はある結論に達したので立ち上がる。

ヴィヴィオ「ガイさん？」

ヴィヴィオが俺の行動にキョトンとした表情を向けてくる。

ガイ「そろそろ訓練に戻らないと。それじゃ」

逃げる結論に達した。フェイトさんの事を恋い焦がれているかもしれない自分の気持ちを他の人に伝えるなんてことは恥ずかしくて言えない。

ビジツと肘から右手を上げて、俺は駆け足でその場を去った。駆け足の時に背中から何か聞こえたような気がするが振り向かず訓練へと向かった。

「ヴィヴィオ「ガイさんに逃げられちゃった」
オリヴィエ「ガイは純粹ですからね」

ガイさんの走り去った後を皆が困惑した様子で見送っていた。

ノーヴェ「あれじゃ、フェイトの事を好きだと言っているようなもんなんだがな」

コロナ「や、やっぱり、ガイさんはフェイトさんの事が好きなんで

しょうか？」

ルーテシア「うん、どうなんだろう？」

ああ、と言って少し凹むコロナさん。

アインハルト「でも、元気そうでありよりです」

そう言いつつ私はオリヴィエの方を見る。

昨夜、ガイさんとなのはさんが外で話をしている所を聞いてしまった。何か大きな悩み事があり、それがオリヴィエとも関係しているらしい。

関係………しているのだろう。過去の人物が現代の世界に居る筈がない。それこそタイムマシンでも出来ない限り不可能に近い。

オリヴィエ「どうかしましたか、アインハルト？」

ずっと、オリヴィエの事を見ていたからかオリヴィエがこちらに声を掛けてきた。

アインハルト「いえ、なんでもありません」

ガイさんがフェイトさんの事が好きなのは気になりますが、元気そうだなによりです。

私は食事を再開した。

午後の訓練はノーヴェに言われた事が原因で、フェイトさんばかり意識してしまった。おかげでちょっとミスが多かった。まあ、仕方ないと言えば仕方ないが。

ガイ「はぁ……………」

俺はベッドに寝転がって天井を見た。蛍光灯と白い天井が視界に入る。

ガイ「まあ、こういう生活も悪くはないけどな」

ヴィヴィオ達と特訓して笑い合って、時には弄られて。部隊に入った時には思い描けなかった光景だ。

俺は右手を天井に伸ばす。その手の甲にはこれから起こる戦争から

逃げることの出来ない証が刻まれている。

何十回、何百回と“聖杯戦争”の事について考えた。だが、今の情報では決して答えに導く事が出来ない。その繰り返しで心に不安が、戦争というモノに恐怖が残っている。

オリヴィエが居ることでも少しは解消できる。しかし、いざ始まるとなったら俺はやれるのだろうか？

ガイ「はぁ……………」

先ほどのため息とは比べ物にならないくらいの重いため息を吐いた。

コンコン

と、考え事をしていた俺の耳にドアの叩く音が聞こえた。

ガイ「……………開いてるよ」

ドアを開けに行くのも面倒だったので相手に入ってきてもらおうように催促して、ドアの方を見る。オリヴィエがまた何か話をしに来たのだろう。俺はそう思っていたが入ってきた人物が俺の想像していた人物と違っていた。

ヴィヴィオ「ガイさん、こんばんは」

リオ「こんばんは！……！」

コロナ「こんばんは」

アインハルト「……………」

しかも、一人ではなく多数だ。アインハルトはペコリと頭を下げている。

ガイ「ん？どうした？」

寝ているのも悪いので俺は上半身を起こしてベッドに腰掛ける。ヴィヴィオが緊張した面持ちで言ってきた。

ヴィヴィオ「きよ、今日、い、一緒に皆で寝てもいいですか？」

ガイ「……………はい？」

良く見ると、コロナとリオは大きな枕を持っている。どうやら本気でここに寝るようだ。

ガイ「ここで寝たいのか？」

俺の言葉にコクコクとヴィヴィオ、コロナ、リオの三人は頷く。アインハルトは少し恥じらいながらも俺の事を見上げてくる。

そんな純粋な瞳で見られると断るに断りきれなくなる。俺は子供達から視線を外して答えた。

ガイ「……………まあ、いいが」

そう言った瞬間、リオがやった〜、と大喜びしてベッドへ飛び込んで横になった。

ヴィヴィオ「あ、ずる〜い」

コロナ「リオ、抜け駆けはだめだよ〜」

ヴィヴィオとコロナもベッドに潜り込む。

ガイ「元気だね〜」

アインハルト「それは年寄りのセリフですよ」

アインハルトはゆっくりとこちらに歩いてベッドに腰掛ける。本日、二回目の指摘をされてしまった。俺は頭を掻いて片目を瞑る。

ガイ「まあいい。俺もそろそろ寝たいんだが」

俺はベッドを見た。ヴィヴィオ達に占領されてスペースがアインハルトが入るぐらいの大きさしか無い。俺が横になれる場所なんて無い。

ヴィヴィオ「くっついて寝れば大丈夫だよ」

リオ「うん」

ガイ「……………」

まあ、確かに皆がくっついて寝れば寝れない事もない。だが、狭くないか？

ガイ「まあいいや。眠いし俺は寝るわ」

そう言つてベッドの隅で横になろうとした。

ヴィヴィオ「違いますよ、ガイさん。ガイさんは真ん中です」

ガイ「ん？」

コロナ「ガイさんは真ん中ですよ」

笑顔で答えてくる子供たち。真ん中にスペースが出来ている。俺はとりあえず真ん中で横になる事に。

コロナ「そ、それじゃあ失礼しますね／＼」

ヴィヴィオ「失礼します／＼」

恥ずかしながらも子供たちが俺と同じ向きで横になる。いつの間にか川の字のようになっていた。

アインハルト「……………」

アインハルトはベッドの端でこちらに背を向けて眠っている。

ガイ「寝づらくないか？」

ヴィヴィオ「ん〜、そうでもないよ。よいつしょっと」

ヴィヴィオが掛け声で俺の肩を動かして、肩から下に入ってきて俺の腕を枕代わりにした。

ヴィヴィオ「これでスペース確保しました」

にこやかに笑って俺の事を見てくる。そんなヴィヴィオの頭を撫でてやった。撫でたからか嬉しそうだ。

コロナ「わ、私もいいですか？」

ガイ「ああ。好きにしろ。俺はそろそろ限界かも」

そう言っただけ俺は目を閉じた。肩が動いているあたりコロナもヴィヴィオと同じことをしようとしているのだろう。だが、睡魔が来て俺は意識を手放した。

「????」……さ……い

暗闇の中、誰かが耳元で何かを呟いている気がした。

「????」……くださ……ガ……」

まただ。今度は軽く体を揺さぶられている。俺は目を開けるのも辛かったがこのまま体を揺さぶられるのは困るので静かに目を開けた。

オリヴィエ「あ、起きましたか、ガイ」

ガイ「オリ……ヴィエ？」

深い眠りのレム睡眠の時に起こされたからか、体が異様に重い……
…と思ったが、違った。

ガイ「なんで跨ってんだ、オリヴィエ？」

オリヴィエ「いえ、耳元で囁こうと思ったのですが左右には子供たちが幸せそうに眠っていたもので、上に跨るしか届かないのです」

オリヴィエが俺の上に乗っていたのが体が重い原因なのだろう。しかも顔が近い。

ガイ「と、とりあえず降りろよ」

オリヴィエ「ええ」

オリヴィエは俺の上から降りた。服装はなぜか浴衣ではなく上下の色が一緒の白いジャージ姿だ。

俺は静かに腕を動かして腕枕をしている子供たちを起こさないように抜いた。いつの間にかリオとアインハルトも俺の腕を使って眠っていたようだ。両腕の感覚が少し無い。

そして、ベッドから降りる。

オリヴィエ「ガイ、まだ特訓が終わってませんよ」

ガイ「え？なのはさんの特訓は終わったはずだが」

そう言ったがすぐに合宿をすることをオリヴィエに言った日の事を思い出した。

“虐め”鍛える、と言っていた。そう言えばオリヴィエの訓練は未だに受けていない。

オリヴィエ「明日には帰ってしまいますので、今しか時間はありません。やりましょう」

ガイ「……………いきなりだな。でも、特訓はやるうか」

オリヴィエ「では、外へ」

ガイ「ああ」

俺は一度、子供たちの寝顔を見る。確かにオリヴィエが言っていた通り幸せそうな表情だ。この表情を無くさないように頑張らないとな。

俺は寝巻きのTシャツとズボンのまま外へ移動した。オリヴィエも付いてくる。

森

ガイ「で、特訓ってのは？」

オリヴィエ「ええ、簡単に説明しますね」

森の中のちよつと拓いている場所。昨日俺が座禅を組んだ場所だ。そこに俺とオリヴィエは対立して立っていた。

オリヴィエ「まあ、単純な事なのですがひたすら私の攻撃を避け続けて下さい」

ガイ「オリヴィエの？」

俺の言葉にオリヴィエは頷く。

オリヴィエ「死の恐怖を体に直に覚えさせた方がよろしいと思いまして。前もって感じていれば死の予感を感じた時に動けます」

ガイ「……………まあ、確かに」

オリヴィエの口から死という言葉が出てきた瞬間、俺は一瞬だが体が竦んだのを覚えた。

やはり、戦争という未知のモノに足を突っ込むにはまだ覚悟が足りていないようだ。

ガイ「……………ああ、頼むわ」

これではオリヴィエの足を引っ張ってしまつ。そうならないためにも今から行く“虐め”の特訓はしっかりとやるべきだ。

オリヴィエ「ガイは反撃しないでなるべく避け続けて下さい。避ける事が無理だと悟ったらガードしてください」

ガイ「ああ」

オリヴィエが静かに構える。俺もセットアップして立ち居合の構え

に入る。この特訓では刀を抜く事は無さそうだ。

オリヴィエ「っふ！」

オリヴィエの一步が互いの距離を一気に〇にした。そのまま右ストレートを放つ。早い踏み込みだ。だが、それ以上に

ゾクッ

ガイ「!？」

オリヴィエから発せられる殺気が異常じゃないほど大きい。それで避ける一步がコンマ一秒だけ遅れた。

ガイ「つく」

オリヴィエが放った右ストレートを何とか紙一重で右に避ける。だが、オリヴィエはすぐに体を捻って左足の蹴りが飛んでくる。

ゾクッ

ガイ「つつ!？」

攻撃をするたびにオリヴィエから異常な殺気が飛んでくる。これが死への恐怖なのだろうか？

その左足の蹴りは避ける事が叶わないと悟ったので鞘でガードすることに。

ドガッ!!!

ものすごい衝撃だ。ガードしているのに手にしびれが伝わってきた。

オリヴィエ「二撃でガードしましたか」

オリヴィエは一言そう言って、俺から離れた。

オリヴィエ「どうですか？私から何か感じ取れましたか？」

ガイ「……………ああ、十分というほどにな」

そう言いつつ、鞘を握っていた左手を振った。しびれが未だにとれない。

ガイ「オリヴィエから殺気がかなり感じられたよ。その恐怖から一瞬体を止めてしまった」

オリヴィエ「ええ、ガイは殺し合いをしたことが無いので経験者からすれば格好的になります。殺し合いに慣れる……………とは言いませんが、殺気を放ち続ける私の攻撃を体を止めずに避け続けて下さい。きっとガイのためになりますから」

そう言って、再び構えるオリヴィエ。

ガイ「ああ、ありがとなオリヴィエ」

オリヴィエに礼を言いつつ、俺も再び構える。そして、いつもの口癖を言った。

ガイ「お手柔らかに」

ガイ「朝……………か」

オリヴィエ「ええ、そのようです」

俺たちは木の根元に背中を預けて座り込んでいた。あれからどのくらい特訓したのかはわからない。だが、地平線から赤い日の光が現れ、木々の間から漏れてきたので夜も終わりの時間帯のようだ。

俺のバリアジャケットはオリヴィエの拳や蹴りでかなりボロボロだ。

オリヴィエ「私の特訓はどうでしたか？」

ガイ「……………虐められたわ。結局、多くても4撃までしか避けられなかったし」

そう言うと、オリヴィエは苦笑してこちらに顔を向けて、拳をこちらに出してきた。

オリヴィエ「合宿も終わりです。“聖杯戦争”ももうすぐ始まると思います。気を引き締めていきましょう」

ガイ「……………ああ、そうだな」

俺もその拳に自分の拳をぶつけた。

ピピピッ

プリムラ「マスター、非通知で秘匿レベルが最大状態の通信が来ました。普通の通信ではなく別ルートからの接触です」

ガイ「……………」

拳をぶつけた後、プリムラから秘匿通信が来たとやってきた。

この通信を行った人物は過去に一人しかいない。俺は一度オリヴィエを見た。その虹彩異色の瞳は戸惑う色をしてい無く、凜と強い意志を持っていた。

俺はそれを見て安心感を抱き頷いて、プリムラに通信を開くように命令した。

目の前に真っ暗なモニターが現れる。

そして、そこから洪くて低い声が何の感情もなく言葉を発した。

管理者「マスターの登録はすべて完了した」

一瞬、ドクンッと心臓が跳ねたような錯覚に陥った。これからあれが始まるのだ。願望をかなえるための戦いを……………聖杯戦争を。

俺の日常は終わったのだと実感した。これから始まるのは非日常の世界だ。

俺は胸に手を置く。心臓の音が少し五月蠅いぐらいに聞こえてくる。そして、モニターの暗闇の中、管理者は開始の言葉を放った。逃れられない大きな戦争の開始の合図を。

“これよりミッドチルダの聖杯戦争を始める”

十三話“終わりと始まりの交差”（後書き）

始まってしまった、聖杯戦争。

日常編はこれで終了かな。

これからはダークな展開になるでしょうね。

自分の筆力でどこまで描けるか。

がんばって生きたいと思います。

何か一言ありますと物凄く嬉しいです。

では、また（・・）／

十四話“日常と非日常の交差”（前書き）

聖杯戦争編始まりました。

この編に入ったので文法を一度変えてみようと思います。

こちらの文法と日常編の文法はどちらが良いか、感想で教えてくださいと嬉しいです。

では、14話目入ります。

十四話 “日常と非日常の交差”

ミッドチルダ 首都次元港

おかしい。

私はガイさんの事を見て何か違和感を感じていた。

昨日はガイさんの部屋に皆で行って寝て、翌日に起きた時はガイさんはベッドに居なかった。

早朝訓練でもしているのかなと思っていた。そして、皆が目覚まして少しするとガイさんは戻ってきた。訓練の後なのか、服が少しボロボロだった。

だけど、その時に見たガイさんの雰囲気が変わっていた。

刺々しいというか、殺伐しているというか、何かに対して強い思い入れをしている印象だった。

フリージアさんとも会ったが何か雰囲気が変わっていた気がする。常に周りを警戒しているように気を研ぎ澄ませている様だった。

無限書庫に行った時の私達とは一歩下がって離れている、まるで他人のような感じにも似ていたが、今回はそれ以上に離れているような感じがする。

普通の会話でも上の空であまり聞いていない様子だし。

私はどうしたの？と聞いてみたが、ガイさんからは何でもないと言った。顔で返されてしまい深く追求できなかった。

少し寂しげな瞳で笑顔で何でもないとと言われても、何かあると思っ
ちやうよ。

「ミッドチルダ到着ー」

「車まわしてくるからちょっと待っててねー」

「……はい」「」

なのはママとフェイトママは車を動かしてくるから皆と離れ、外に出た。

私はもう一度ガイさんを見る。隣にはフリージアさんが居た。だが、何かを考えているのか少し顔を下げている。フリージアさんも常にガイさんの近くに居る気がする。

……ちよつと嫉妬しちゃったりもします。

けど、あの2人は周りの雰囲気からかけ離れて、まるで別次元に居るように思えた。

それが違和感に繋がっているのだろう。

このモヤモヤ感はこの雰囲気が消えない限り、消えることはない。

「でも皆明日からまた忙しくなるねえ」

「インターミドルに向けてはっちりトレーニングしなきゃ」

「はいっ！でも大丈夫です！」

「うちの師匠がトレーニングメニュー作ってくれますから！」

ティアナさんとスバルさんの話に私とコロナが笑顔で答える。

そこにノーヴェも会話に入ってくる。

「ま、しっかり鍛えていこうぜ」

「……はいっ！」「」

師匠のノーヴェが作ったトレーニングメニューだから私たちは安心して鍛えられる。

その信頼の証が先ほどの返事に繋がる。

「あ、そう言えば写真の交換しとかない？今朝取った奴、結構あるんだ」

「あ。欲しいです！」

「私もー！」

スバルさんは今朝、ティアナさんと山頂に行つて色々な自然を写真に収めていたのを知っていたので、私達はそれが欲しかった。

スバルさんはデバイスを出してきたので私達もデバイスを出して写真を交換した。そして、もう一度ガイさんの方を見る。

私たちが雑談して楽しんでいるのにガイさんはやっぱり考え事をし、視線を少し下げていた。

……何か深い悩み事があるんだ。

そんな様子を見て私は悲痛な気持ちになっていた。

「ガイは話に参加しないのですか？」
「ん？俺か？」

俺とオリヴィエは皆の輪から少し離れた所で立っていた。

皆はなのはさんとフェイトさんが車を取りに行った後、雑談を始めていた。

俺はその雑談に入る気分になれなかった。

理由は昨夜……というよりも早朝に管理者から“聖杯戦争”の開始の狼煙が言いわたされたからだ。

その瞬間から皆のいた時間が眩しく感じ始めた。

これは生きる保証の時に感じたモノと一緒に思う。

オリヴィエと拳をブツけて気を引き締めたつもりだが、臨行次元船の移動時間は四時間。その間に“聖杯戦争”の事について色々と試行錯誤していたので、気持ちは少しネガティブになっていた。

「皆、ガイのこと心配していますよ。ガイは表情に出やすいですか
らね」

「……そうなのか」

オリヴィエが微笑しながら俺の顔を覗き込む。オリヴィエから指摘

されて初めて分かった。

俺はどうやらポーカーフェイスをするのが無理らしい。

“聖杯戦争”への不安が表情に出ているようだ。きっとヴィヴィオ達にも心配をかけてしまったのだろう。

「俺の今の表情はどんな感じだ？」

「いろいろと思考しているように見えて、ですが、その思考中にも不安な表情を隠しきれずに出ていますね」

「……的確で」

やはり俺にはポーカーフェイスをする事は不可能だな。

オリヴィエに正確に当てられた。様々な事を考えていたのも事実だ。その思考の先にあるのはやはり“聖杯戦争”の不安だ。

気を引き締めたつもりなんだがな。

「ヴィヴィオ達と会話をした方が良いと思いますよ。開始の合図を言われてからガイは皆との会話中でも上の空ですから。“聖杯戦争”の事を考えずに皆と話した方が良いでしょう」

「……かもな」

「大丈夫です。ガイが狙われても私がしっかりと守りますから」

オリヴィエは右手をグッと握って自信のある笑みを浮かべる。それを見ていると不安な気持ち少しは薄らいだ。

「心強い事で」

俺は頭を掻きながらオリヴィエの意見に頷いた。そして、俺とオリヴィエは皆の所へ近寄った。

「あ、ガイとフリージアさん。私の取った写真が有るけどいる？」
「ええ、下さい」

皆の輪に入るきっかけはスバルさんの撮った写真を頂く事で難なく
終えた。

その時、ヴィヴィオ達を見たが、少し暗く悲しい表情をして俺の事
を見ていた。特にヴィヴィオ

。……皆には迷惑かけたな。この子たちには笑顔でいてもらいたい。

俺の事を心配してくれているのは凄く嬉しい。けど、俺がもっと嬉
しいのはこの子達が笑顔でいる事だ。

「でもインターミドルってかなり沢山の子が出場するんでしょ？予
選会とかあるんだっけ？」

「あ、ええと…確か地区選考会というのがあって」

ティアナさんがインターミドルの事についての疑問をアインハルト
に投げかけた。

アインハルトもうる覚え気味でうまく答えられていないようだ。

「そーです！選考会では健康チェックと体力テスト。後は簡単なス
パリング実技があつて」

「選考会の結果で予選の組み合わせが決まるんです」

そこにヴィヴィオとリオがフォローを入れ始めた。

「普通の人には“ノービスクラス”。選考会で優秀だったり、過去で

入賞歴があつたりする人は“エリートクラス”から地区予選がスタートします」

コロナも説明を始める。このインターミドルの話を始めることでヴィイオ達は笑顔になり始めた。

その事に俺はホツとした。

「勝ち抜き戦で地区代表が決まるまで戦い続けて……そうしてミッドチルダ中央部17区から20人の代表と前回の都市本戦優勝者が集まって……その21人でいよいよ夢の舞台、都市本戦ですよ！」

「ここでミッドチルダ中央部のナンバーワンが決まるんですよ！」

「TV中継も入ります！」

皆、説明をするにつれ、どんどんテンションが上がっていき、ティアナさんとスバルさんはちよつと引きつっている。

「まあ、流石に私たちのレベルだと……」

「本戦入賞とかは夢のまた夢なので」

「“都市本戦出場”を最高目標にしてるんですけど」

しかし、夢と現実は違う事を知っていた三人はテンションが一気に下がって、気持ちが沈んでいた。

「その……都市本戦で優勝したら終わりですか？」

「もちろんその上もありますよ。“都市選抜”で世界代表を決めて、選抜優勝者同士で“世界代表戦”です」

今度はアインハルトの疑問にコロナが答える。もはや、ティアナさんの事は関係ないようだ。

「そこまで行つて優勝できれば……文句無しに“次元世界最強の10代女子”だな」

と、言いながら後ろからアインハルトの両肩に両手を乗つけるノーヴェ。

そう言われた時にアインハルトの表情が一瞬、輝いていたような気がした。

最強という言葉に魅かれたか。

俺はアインハルトのその表情を見て笑っていた。

「でもそんなのは私たちにとっては遙か先の夢……」

「狙うなら10年計画で頑張らないと！」

「でもいつかきつとー！」

でも、ヴィヴィオ達の3人はそのかけ離れ過ぎた現実に先ほど以上にテンションが下がる。

「ノーヴェさん、率直な感想を伺いたいんですが。今の私たちはどこまで行けると思われませんか？」

「もともとミッド中央は激戦区なんだDSAARLの選手として能力以上に先鋭化してる奴も多い。その上での話として聞けよ」

今の自分の実力がどの位まで行けるのか気になったのか、アインハルトはノーヴェに聞いた。

ノーヴェは片目を閉じて答える。

「ヴィヴィオ達3人は地区予選前半まで。ノービスクラスならまだしもエリートクラス相手ならまず手も足も出ねー。アインハルトも

いいとこ地区予選の真ん中へんまで。エリートクラスで勝ち抜くのは難しいだろうな」

ノーヴェから見れば行けても地区予選の真ん中へんまでらしい。模擬戦の時は皆、凄い実力を持っていると思っただけだな。

ノーヴェから見ればまだまだなのだろう。

「ついでにガイ。もしお前が参加しても地区予選1回戦で落ちると思っぞ」

「……辛口だな」

「今のガイの実力から推測したものだ」

まあ、妥当だと思うけどな。でも、俺は参加はしないしな。

「……でも!」

だが、ヴィヴィオは声を張りつめてノーヴェの言葉に自分の意見をぶつける。

「まだ二ヶ月あるよね!?その間、全力で鍛えたら?」

「ま、どうなるかはわかんねーな。あたしも勝つための練習を用意する。頑張つてあたしの予想なんかひっくり返してみせろ」

「……はいっ!」

皆、明るい表情で良い眼をしている。大会を勝ち抜きたい気持ちが溢れて、それが表情に出ているのだろう。

「頑張れよ。俺も応援しているから」

「私も応援していますね」

俺とオリヴィエも皆に応援の言葉を掛ける。

「……はいつ!」「」

皆、嬉しそうでなによりだ。この子たちはやはり笑顔が似合う。

「んでな、まずは基礎メニューを作ってみたんだ。デバイスを出せ送るから」

「さ、流石ノーヴェッ!」

「仕事早ッ!」

ノーヴェエの仕事の速さに皆、驚きを隠せないでいる。

「……ほんとノーヴェエはコーチに向いてるな」

「うっせえ」

俺が片目をつぶって褒めるとノーヴェエは口で否定しながらも表情は嬉しそうだった。

「で、だ。基礎トレは今まで以上にしっかりやる。その上で……」

ノーヴェエは子供たちに振り向く。

「コロナはゴーレム召喚と操作の精度向上」

「はいつ」

「リオは春光拳と炎雷魔法の徹底強化。武器戦闘もやってくぞ」

「はいつ!」

「ヴィヴィオは格闘戦技全体のスキルアップとカウンターブローの秘密特訓!」

「はいっ！」

そして、最後のアインハルトには一度、呼吸を置いて言葉を発言する。

「で、アインハルトは……あたしが変に口を出して霸王流のスタイルを崩してもなんだ。かわりに公式試合経験のあるスパ―相手を山ほど探してきてやろう。お前は戦いの中で必要なものを見つけて掴む。それが一番かと思うんだが……どうだ？」

「ありがとうございます！」

アインハルトは表情を輝かせて勢いよく頭を下げた。

「えー？私もいろんな人とスパ―やりたい！」

「やりたいですー」

と、アインハルトの周りにヴィヴィオ達が囲んで駄々をこね始めた。

「お前らは順番があるの！コーチの言う事ちゃんと聞け！」

「……はいっ」「……」

もちろんそれは冗談だが、場はかなり和んでいる。俺はノーヴェエに声をかけた。

「ノーヴェエもコーチとして頑張れよ」

「はっ？ガイ、なに他人事のようにしてんだ？お前にもトレーニングメニュー作ってあんだからやっておけよ」

『ジェットエッジからトレーニングメニューを貰いました』

プリムラにトレーニングメニューが転送されたらしい。

「俺は出れないって」

「お前も参加資格はあるんだ。今の用事を終えて、大会に出ようと思った時でいいから、それやっつけよ。ガイ、お前は反射神経も動体視力は並外れている。けど、やはり魔力値の低さが原因だ。それによつていろいろと行動に制限が掛つているだろ？」

「……………まあな」

紛れもない事実には俺は頷くしかない。なのはさんもノーヴェエも相手の状態を見る洞察力は桁違いだ。

魔力の低さで戦闘では色々と制限をつけている。

「そのトレーニングメニューは魔力値を増幅させる事の出来るメニューだ。もし、大会に出れ無くてもお前のためになるだろ。しつかりやっつけ」

「……………」

……………ノーヴェエはコーチが天職なんじゃないか？

俺はそう思つてしまふ。弱点を見つけてそれをしっかりと補強するトレーニングメニューを作り出す。ノーヴェエも戦技官に向いている素質を持っている。なのはさんもそう思っているのではないだろうか。

「……………ま、時間が空いたらやっておくよ」

「本当だろうか？」

ノーヴェエがジト目で俺の顔を覗き込んでくる。

「……………ああ、ノーヴェエのトレーニングメニューを信じてやってみる

「え」

「そ、そうか。信じてくれんならいいけどよ」

やらないと思っていたのか、俺がやると言ったらノーヴェはちょっと照れくさそうだった。

「おまたせー」

そこに車を取ってきたのはさんが戻ってきた。フェイトさんは車で待機しているのだろう。

「それじゃ、帰ろっか」

「「「はいっ」「」」

皆が頷きなのはさんの後について行った。

「……ガイさん」

「ん？」

と、歩きながら近くに居たアインハルトが俺に声を掛けてきたのでアインハルトの方を見る。

その表情は寂しげな表情をしていた。

「大丈夫ですか？」

「……ああ、大丈夫だ」

何が大丈夫なのかは言っていない。

だが、アインハルトにも心配をかけている事が今の会話だけで分かった。

……迷惑かけ過ぎたな。

俺は心の中に罪悪感が残ったのを感じた。皆には言えないモノが周りからは心配かけてしまう理由なのだから。

俺の周りに居る人達はお人好しすぎるんだよな。

「……そうですか」

アインハルトは顔を下げて、表情を曇らせてしまった。

前にもこのような事があった気がする。

アインハルトも俺の事を心配してくれているから嬉しい。

「……もし、困ったことになったらアインに相談するかもしれないから」

俺の言った言葉にアインハルトは期待と驚きの表情をしながら俺の事を見上げた。

そ、そんなに驚くことか？

逆に俺がびっくりしていた。

「はい、私の力で出来る事がありましたら何でもします」

「ん、ありがとう」

ぼんぼんとアインの頭に手を乗つけて軽く叩く。

ちよっと嬉しそうな表情をしていた……ような気がした。

「アインハルトとガイは仲が良いですね。まるで恋人のようです」

そこにオリヴィエが会話に入ってくる。

「こ、ここに、恋人！？い、いえ、た、確かに私たちは仲が良いですが……」

「何、慌ててんだ、アイン？」

アインハルトが顔を真っ赤にして慌てていた。

俺たちはそんな風に見えていたのか？普通に会話しているだけなんだがな。

「ガ、ガイさん！アインハルトさんと恋人だったのですか！？」

「そうなんですか！？」

「ものすごく気になります！」

そこにヴィヴィオ、コロナ、リオが驚愕の表情で俺に近づいてきた。

「い、いや、フリーがそう見えるだけだと言ってきただけだ」

「そ、そうなんですか？」

ヴィヴィオがオリヴィエに聞いてくる。

オリヴィエはええ、と特に戸惑う事なく答える。

『ガイ君、ちょっと騒がしいよ。ここは公共の場なんだからもう少し静かにね』

『は、はい。す、すみません』

念話でなのはさんに注意されてしまった。

『で、ガイ君はアインハルトちゃんの事、好きなのかな？』
『なのはさん……貴方もですか』

目の前の騒動と念話からの会話で俺は二重の意味でため息をついた。
しかし、俺がアインハルトと付き合ったら……ねえ。ロリコン扱いは免れないな。まあ、確かにアインハルトは可愛いけどさ……フェイトさんが気になるのも事実だし。

「ガイさん？」

と、俺が変な思考の渦に入って考え込んでいたからか、アインハルトから顔を覗きこまれるように見上げて声を掛けられてた。

「あ、い、いや、何でもない」

今考えていたこととアインハルトが目の前に居るといふ現実には俺は視線を逸らした。

やばいやばい、心頭滅却だ。変な事を考えるな。

俺は頭を振って、歩きだす。ここは公共の場だ。
立ち止まっていたら周りに迷惑だ。
皆もそれが分かっていたからか変な騒動は何とか収まって歩きだした。

こうして皆と会話している日常は無くしたくないな。

俺は必然的にそう思ってしまった。これから始まる戦争で無くさないために。

こうして強化合宿は幕を閉じた。
そして、新しい舞台である“聖杯戦争”の幕が上がる。

マンション

皆と別れて、俺とオリヴィエは部屋に居た。
アインハルトも部屋戻って長旅の疲れなのか多分もう眠っているだ
ろう。

無人世界カルナージから首都次元港まで約4時間。時差も7時間あ

るので、朝にカルナージから出発してミッドチルダに戻ってくる
すでに夜に近い時間帯だ。

アインハルトがすぐに部屋に戻ったのも頷ける。

「ガイ」

「ん？」

テーブルの前に座っていたオリヴィエが対面に座っている俺に声を
かけた。

「気づいていましたか？車を降りてから私たちの事を見ていた人物
がいたことに」

「……マジか？」

ええ、とオリヴィエは答える。

「まあ、しばらく動いているとその視線も無くなったので、その人
物はあそこで挑発しているかのようにあからさまに気配を放ってい
る、と言ったところでしょうか」

「……釣りつてやつか。これ見よがしに気配を振りまいて、近づい
てくる相手を誘い出す……真っ向勝負をしたいサーヴァントってと
ころか」

「そのようですね」

そして、少しの沈黙が流れた。俺もオリヴィエも考え事をしている。

「どうしますか、ガイ？」

その沈黙をオリヴィエが破った。その瞳には揺るぎのない自信がみ
なぎっているのがわかる。

「……お招きにあうとするか。この戦争は早めに終わらせたい」

それに他のマスターもどのような気持ちで参加しているのかも聞けたら聞いてみたい。」

「はい、ガイのお役にたてるように努力します」

オリヴィエは立ち上がって、悠然と自信の足取りで玄関へと歩き出した。

その自信に充ち溢れた歩き方は安心感を得ることのできる動きだ。

「プリムラ、よろしくな」

『はい、マスターのお役にたてるように努力します』

プリムラはオリヴィエの言葉を真似て言ってきた。それを聞いて俺は笑みを浮かべながらオリヴィエの後について部屋を後にした。

アラル港湾埠頭 廃棄倉庫区画

オリヴィエに付いて来て、たどり着いた場所は少し前にヴィヴィオとアインハルトが対決をした場所だ。

今は夜なのでヴィヴィオ達の対決の時の風景とはまた違う。

無味乾燥なプレハブ倉庫が延々と連なる倉庫街ではあるが、廃棄倉庫区画なので夜ともなれば人通りも絶え、まばらな街灯が無益にアスファルトの路面を照らしている様が、よりいっそう景観を空虚にしている。

人目を忍んで行われるサーヴァント同士の対決には、なるほど、うつてつけの場所だ。

辺りには一般人は居ない。だが、ヴィヴィオ達が対決した大きな広場の中央には明らかに一般人でない人物がこちらを向いて静かに立っていた。

身長は150センチぐらいで、翡翠色の瞳に結い上げていてもなお軽さと柔らかさが見て取れる美しい金髪の人物だ。

服装は濃紺のドレスシャツにネクタイ、フレンチ・コンチネンタル風のダークスーツを着込んでいる。

その服装が凜とした硬質の雰囲気を引きしめられているのが第三者からでもわかる。あれはもはや浮世離れた絶世の美少年だろう。

「前にやられたやり方をしましたが、今日一日、この街を練り歩いて過ごしてみても、どのマスターも穴熊を決め込んで攻めてきません。私の誘いに応じた猛者は、貴方達だけです」

だが、その発した言葉はガラス玉のようにとても透き通っている綺麗な声であり、それである人物は男性ではなく女性だと分かった。

「じよ、女性なのか？」

俺は外見と中身のギャップの激しさに戸惑いを隠せずに呟いてしまった。

女性なのに何故男装しているのか？しかし、それでいてもその服装を着こなして絶景の美少年（美少女？）になっている様は神様が与えてくれたモノだと思ひ込んでしまう。

「女であることはあの時に捨てました。今ここに居るのはただの騎士」

その人物の瑠璃色の瞳がより一段と凜として俺たちを見据えた。その圧倒的な威圧感に俺は冷や汗を垂らし、喉を鳴らして唾をのみ込む。

「その清澄な闘気……セイバーと見受けませんが、如何に？」

だが、その圧倒的な威圧感に動じることなくオリヴィエは静かに問答する。

これが戦場の経験者と未経験者の差なのだろう。

「……いえ、私はマスターです」

少し戸惑いながらも、そう言って右手の甲をみせてくる。そこには俺の手の甲とは紋章が違うが赤く紋章が浮かび上がっている。

「ランサー」

彼女が七つのクラスの一つであるランサーを発言した。すると、彼女の隣から1人の巨躯の男性が何処となく現れた。

霊体化から実体化したのだろう。初めて見た。

ランサーは黒い髪に青い瞳。その瞳は据わっていて、俺たちの事を静かに見つめている。ちよつとした事では動じないだろう。

服装は放浪していたような薄汚いコートを羽織っているが、もともとが巨躯な体なのでそれが逆にその男の存在感がさらに大きくなり、ゾクリと背中に冷たい汗が流れる。

だが、その人物を見た時に俺は何処かで見たことがるような気がした。

「見たところ、少し幼げさが残るマスターだが」

その大男が俺を見て、凶太い声で俺の事を分析し始めた。

「……まだ、二十歳過ぎてないんでな」

「そうか。そんな年でこの戦いに参加したのならそれなりに理由があるのか？」

このサーヴァントは敵である俺に対して親身に話を掛けてきている。何故だろう？その真相が分からない。

「なぜ、敵である俺にそんな親身になる？」

俺はその疑問をランサーにぶつけてみた。

ランサーは少し言いにくそうに視線を逸らす。

「俺はこのミッドチルダの……」

「ダメです、ランサー！」

と、隣に居た金髪の女性がランサーの言葉をかき消した。

「敵に真名をバラすつもりですか？それではこの戦いは勝ちぬけて
いけません」

「……すまん、相手のマスターがミッドチルダの出身だと見て分か
つたので少し話をしたくてな」

俺がミッドチルダの出身だから話をしたい？となるとここ最近の人
物か。

俺はあの巨躯の人物を後で調べてみようと考え。あのような特徴
的な人物なら見つけやすいだろう。

「ランサーのマスター。1つ聞きたい事がある。質疑しても良いか
？」

「何でしょう？」

金髪のマスターは瑠璃色の瞳をこちらに向ける。その容姿は美しく、
普通に街中で出会ったら、一目惚れしてしまうぐらいだろう。

しかし、今は戦争の敵同士。そんな事を考えている暇はない。

このマスターは人の話を聞いてくれる用だ。マスターの中にもこの
ように話せる人物がいて俺はちょっとホッとした。

そして、俺が最も聞きたかった事を会話に入れた。

「君はなぜこの“聖杯戦争”に参加したんだ？」

「知れたこと。私には叶えるべき願望がある。それを叶える為に私は参加した」

さも当たり前のように答えるランサーのマスター。まあ、参加するのだから叶えたい願望が皆にはある。

だが、俺が聞きたいのはそんな事ではない。

「それは殺し合いをしてでも叶えたいものなのか？」

「……質疑の真相の意味が理解できない。貴方は迷っているのか？」

一瞬だが、マスターから威圧感が無くなった気がした。

「……かもな」

「でしたら、この戦いから身を引いて安全な場所で戦いが終わるまで隠れているべきだ」

「……」

痛いところを突かれた。質疑していたのにいつの間にか逆の立場になって答えていた。

確かに“聖杯戦争”に参加することは恐怖や不安がある。

だが、その戦争のせいで不幸な奴らが現れる可能性だってある。それを食い止めるために俺は立ち上がった。

なら、俺が取る道は最初から1つだ。

「忠告ありがと。でも、俺も叶えたい願望がある。だから、身を引く事は出来ない」

「……そうですか」

あの女性は何を思ったのだろうか。

凜とした表情が少し崩れ、困惑したような、僅かに眉間を寄せた硬い表情ではあるが、それが全く彼女の美貌を損なわってははいない。そして、その彼女はオリヴィエの方にその瑠璃色の瞳を向けた。

「この静寂なる闘志……あなたのクラスはこれまで呼ばれたことのない規格外のクラスですか？」

「ええ、私のクラスはファイターです。聖杯戦争では初のクラスでしょう」

相手のクラスも教えたのでこちらのクラスもオリヴィエは静かな微笑を浮かび上げてクラスを曝け出す。

しかし、あの圧倒的な威圧感を持っているのがマスターか。隣の巨躯の男はサーヴァントだからこの存在感はわかるが、あっちのマスターもサーヴァントと同等の実力を持っていそうな雰囲気を出しているな。

俺は2人の事を分析し始めた。金髪の女性は何故かサーヴァントと同等の力があると直感で感じた。

正直、俺でもオリヴィエでも勝てるのか分からなく不安を隠しきれない。

「ガイ、そんな不安がらなくても。私はランサーと武器を交えます。貴方はランサーのマスターを狙ってください。あのマスターもきつと白兵戦を主とする人物でしょう。ですが、あれは只のマスターではないと本能で感じます。気をつけて」

「……ファイターもな」

この戦いで敵と交戦するときはフリージアではなくクラス名で言う事にした。偽名でもそこからいろいろと調べられてしまう可能性がある。

そして、オリヴィエもどうやらあちらのマスターに対して何かを感じているようだ。あのマスターは要注意だ。
オリヴィエは少し前に出て右手を構えた。

「武装形態」

そう言った瞬間、オリヴィエの体を白い光で包まれて一瞬にして騎士甲冑の姿に変わった。

その姿は初めてオリヴィエと出会った時の白と青を強調した騎士甲冑だ。拳で戦うのでその鉄製の手甲はぱつと見でも5cmくらいあり、かなり厚い。

模擬戦の時はその手甲はめていなかった。それを維持するのも魔力が必要なのだろう。

だから、このような戦いの時にしか使わない。

「セットアップだ、プリムラ」

『了解です、マスター』

俺もプリムラに命令して、一瞬にしてバリアジャケットの魔法服に切り替わり、左手に鞘に収まっている刀を握る。

相手のマスターは魔力なのか竜巻のように渦を巻いてダークスーツを着ている自分自身を包み込み、次の瞬間、女性は白銀と紺碧に輝く甲冑に身を包んでいた。

「……バリアジャケットじゃない？」

俺は先入観にとらわれていたので目の前の真実に目を疑った。マスターならデバイスでバリアジャケットになると思っていた。しかし、あのマスターは神々しい甲冑を付けている。あれは明らかにバリアジャケットとは比ではない。あれこそ規格外のモノだろう。

「セットアップ」

あの巨躯の男はセットアップした。見た目は少しだけ変わり、両足と左手に装甲を装着している。

やはり、ミッドガル出身なのは間違いないようだ。となると対戦のカードは少し変えないといけない。

「ファイター。俺がランサーと戦う。見たところ空戦魔導師のようだ。ファイターは空中戦を行えないだろ」

「で、ですが……」

サーヴァントは英雄であり、彼らは基本的に人間がまともに戦って敵うような相手ではない。

多分あれの魔力値はオーバースランク。俺のようなCクラスでは足元にも及ばないだろう。だが、空戦を行えないオリヴィエの足を引っ張るわけにもいかない。

「行きます」

相手のマスターが一言、言った。俺とオリヴィエが会話している途中で不意打ちをしてこなかったたので、このマスターもやはり最初の狙い通り正々堂々と戦いたいのだろう。

その言葉で俺たちは構える。相手側も構えた。

だが、相手のマスターはどんな武器を持っているのか分からなかつ

た。何かを手に掴んで左に体を捻って構えているが、その武器が見えない。

あの巨躯の男は青龍円月刀のような槍を構えてはいるがあのマスタ
ーの武器は何なのかもわからない。

一瞬の静寂。そして、四つの影はほぼ同時に動き出した。

その影がぶつかり合った時、周囲に大きな衝撃と爆音が響いた。

私は目の前に居る金髪の女性と拳と剣で交えていた。

否、それが剣かどうかも分からない。それは肉眼では認識できない

不可視の剣。

何合交えただろう。超高速の剣戟を繰り広げていた。

私は構えからそれを剣と判断して、相手の拳動から太刀筋を読み取っていた。だが、刀身の長さが分からないので間合いを取るのが難しい。

風が唸る。この世界の物理法則に有るまじき狼藉に、大気がヒステリーをおこして絶叫している。

魔力同士がぶつかり合い、荒れ狂うハリケーンの直中にあるかのよう、ここの廃墟の倉庫街は容赦なく蹂躪され、破壊されつつある。

そして、最後の一撃を放った私の拳はその不可視の武器で受け止められたのか、相手の体まで届く事が無く、何も無いと思われる大気に受け止められて、私は大きく後ろへと下がった。

剣戟を行っていた時は倉庫の外装から引き剥がされたトタン材が、まるでアルミホイルの一片のように異様な形に歪んで軽々と宙を舞っていた。

今は舞っていたのが嘘のように地面に叩きつかれてただの瓦礫と化している。

あれはこの金髪の女性の剣と思われる武器で擦過したのだろう。だが、気になる事があった。

「貴方はマスターではないですね」

「……」

私の事を捕えていた瑠璃色の瞳を離して、空を見上げる。

私もガイの事が気になったので空を見上げた。

そこには人を包み込むぐらいの大きさのオレンジ色と黒色の魔力の

色がぶつかり合っていた。

剣と槍がぶつかり合うたびに周りには轟が走る。

先ほどまで宙を舞って飛ばされていた地面に落ちているトタン材が、その二つの魔力がぶつかる度にカタカタといつている。

そして、二つの色は中央でぶつかり合って鏢迫り合いを始めた。

だが、誰が見てもわかる。明からかに黒の方が押されている。

魔力の差が歴然としている結果が今の鏢迫り合いに表されている。

本来なら数合打ちあえばガイは落とされてしまうだろう。

しかし、ここまでできて未だに何合も打ちあっているのは、ガイの並ならぬ反射神経と動体視力が相手のクリーンヒットを防いでいる。

だが、それも時間の問題だ。

ここからでも確認できる。ガイの表情が険しくなってきた、冷や汗をかいている。

だが、空中戦だと助けに行けることも出来ない。

「……ガイ」

その事実には悲痛な気持ちになって、敵が目の前に居るというのに悲しい表情をしてしまった。

「……貴方はあのマスターをどのように思う？」

「え？」

相手の質問の真意が分からない質疑に私は少し戸惑った。

敵であるガイの事が気になっていようだ。その表情は何か懐かしさを感じているように思えた。

「あのようにサーヴァントに立ち向かうマスターを見たのはこれで三度目だ。あの人たちのようにあのマスターにもどんな状況でもあきらめない諦めない心を持っている」

「何が言いたいのですか？」

やはりその質問の真意が分からない。私は戸惑いを隠せないまま相手を促せた。ランサーのマスターはその容姿にあった絶世の笑みを浮かべながらこう答えた。

「私がサーヴァントでいた頃に巡り合った良いマスターに似ている」

一合目の競り合いで黒い刃にひびが入り、二合目の競り合いで鞘にひびが入った。

それを受けただけで分かる。この人物と競り合うのは危険だと。魔力の差が大きすぎる。

その後の数合のうち合いはこちらの武器に損傷が無いように衝撃の薄い部分で相手の攻撃を受け止めていたが、かなりキツイ。

俺は一度大きく離れた。しかし、相手は追ってこないので向き合う形で空中で立つ事になった。

俺は荒くなった息を整え始める。

「くっ……無事がプリムラ？」

『外部に損傷あり。ですが動かすことには問題ないです』

「そうか」

俺は抜刀している刀を鞘に納めて、相手を見る。相手は呼吸が乱れることもなく、汗一つ掻いていない。

最初の数合で……いや、最初から分かっていた事だがこの人物に勝つなんてことは無理に近い。

息が上がっている俺に対して相手は全く乱れていない。それだけでもわかりきっている事だ。

……ここで負けたら死ぬのかな。それはやっぱり嫌だな。ヴィヴィ達と会話をしたい。

戦争という現実を目の当たりにして俺の思考はネガティブになり始めた。脳裏には走馬灯のように日常の中でのヴィヴィオ達との会話が思い浮かぶ。

現実逃避をするのは止めるか。

俺は今考えている思考を停止して、対立している大男を見る。そして、その巨躯な容姿はやはりどこかで見たことがある。

「良い兵士だ」

「え？」

相手は矛先をこちらに向けていた武器を下げて、頑な表情はそのままで、しかし、相手から発せられていた雰囲気は少し暖かくなった。そして、視線を下に向ける。俺もつられて下を見た。

そこではハリケーンのような嵐の風がオリヴィエとこの巨躯の男のマスターが中心となって発生していた。

2人のぶつかり合う魔力の量が桁違いだ。

そのぶつかり合う余波で廃墟の倉庫街は容赦なく蹂躪され、破壊されつつある。

大気が悲鳴を上げている。その余波も少なからず俺らの戦場にも届いている。

「あのサーヴァントも良い騎士だ。お前たちは巡りに巡り合う存在なのかもしれんな」

「……何故この戦いの最中でも相手の事ばかり考えている？」

この巨躯の男の考えている事が分からなかった。常に相手の事を見て、相手の良いところを見つけ出そうとしている。

「……私は夢を描いて未来を見つめていた」

「未来？」

俺の言葉に巨躯な男は頷く。

「俺の世代では築きあげることが無理だったものだ。俺はいつも遅

すぎた。俺の居た部隊は敵の罠に合い全滅……大切な部下も私も死んだが二度目の生を受けた。だが、今度は親友を守ること出来なかった。そして、再び死が訪れようとしたとき、後輩に全てを託した」

そう言いながら、悲痛な表情で自分の持っている得物に目を向ける。その刃にはたくさんの返り血が付いていたのではないだろうか。

……英霊となるぐらいなのだからそのぐらいの事はしたんだろうな。

「そして、再びこの現世に舞い戻された。再び戻って来たのなら俺は描いた夢を突き進みたい」

「……なるほどな」

この男の考えている事は分かった。未来をいつも案じてより良い未来を築く為に今の生きている俺たちにしっかりと未来を築いてもらいたいのだ。

それが、行動に表れて、いつの間にか相手の長所を見つけるようになっていったのだろう。

ああ、この男はこんなにも未来の事に対して夢や思いを描いているんだな。

あつて間もないが、この男には好意を持てた。この人物の理想、あり方。その全てが素晴らしいと思ってしまう。

「俺にも夢はある」

「……どんな夢だ？」

このサーヴァントもマスターと同じで敵である俺との会話を止めようとはしないようだ。

「魔法で誰もが不幸にならないような世界” そんな世界を望んでいる」

「大変だぞ。その夢は」

「ああ、分かっている。だから俺はこの願望を望んでいる」

「ふっ、そうか」

そう言って、その巨躯な体は槍を構えた。

「お互いの貫き通す理想があるなら、後はぶつかり合うしかない」

「……出来ればあんたとはぶつかり合いたくなかった」

そう言いながらも俺は立ち居合で構える。

お互いが理想がぶつかり合う時もある。それが戦争というモノだ。

俺とその巨躯な男は飛行して再びぶつかり合った。

二合三合と回数を増やすにつれ、刀身と鞘にひびの亀裂が大きくなっていく。

俺はその大きな衝撃をヴィヴィオの砲撃の時のように刃を一番鋭い斬撃の垂直角度からズラすように手首を捻って、出来る限り外へと受け流してはいるが、無理をしすぎて手首に激痛が走る。

だが、こうでもしないと今頃は俺は現世に居ないだろう。

ゾクリと背筋が凍るような感覚もこのぶつかり合いで何度も味わった。

オリヴィエとの訓練が幸いしたからか、その感覚が着た瞬間でも俺は即座に体を動かせるようになっていた。

だが、未だにこの感覚は馴れていない。一步でも間違えれば即死だ。

そして、俺と巨躯の男は次の合で鏢迫り合いとなって、周囲に魔力

の余波がはじけ飛ぶ。

相手の衝撃を真正面から、鞘から刀を半分抜いている状態の刃の部分でマトモに受け止めている。

やはりここで問題になっているのは魔力値の差だ。ぶつかり合いでなら技量で何とかごまかせてきたが、単純な力比べなら魔力値が高い方が圧倒的に有利だ。

その結果が俺とこの巨躯の男と鏝迫り合いだ。

圧倒的な魔力量によって俺が押され始めている。

「くっ！」

「お前の夢はこんなものか？」

「な、なにお……」

ギシギシと刃と刃がぶつかり合って火花が発する。だが、プリムラの方が限界に近い。亀裂がまた一段と大きくなった。

「その夢もお前が弱ければ叶う事など出来ん！！」

「ぐっ！」

巨躯の男はそのままその押し出す威力のベクトルを下へと向けた。

「はあああああああ！！」

気合いの籠ったかけ声。その異常なベクトルの量にプリムラの刀身は真つ二つにされてしまい、俺は成すすべもなく、地面へと垂直落下していった。

飛行、間に合うか！？

俺は飛行するために魔力を込めた。

しかし、間に合わず背中から地面に叩きつかれてしまった。

「がはっ！」

地面には俺を中心としたクォーターが出来て、血反吐を吐いた。

飛行するために自由落下に抵抗した分、即死を免れる事は出来たが、体全体に鈍器で殴られたような激痛が走り、肺の空気が放出されて息が出来ない。

「ガイ!!!」

と、近くに居たオリヴィエが俺の方へ近づいて俺の上半身を起こす。

「ゴホツゴホツ……はあはあ」

俺は何とか呼吸をする事が出来た。だが、体中に激痛が走って思考がうまくまとめられない。

ここは戦場。ちょっとした隙を見せるだけで命を落とす。それが今だ。

だが、相手からの攻撃はやって追ってこなかった。

あの巨躯の男は相手のマスターの隣に着地したようだ。そのマスターも俺たちの事を見据えてはいるが攻撃を行おうとはしなかった。

理由は明らかだった。突然、ドンと腹の底に響くような爆音が今の路面のアスファルトが焔の敵のように掘り返されている戦場に響き渡ったからだ。

その正体は俺たちと相手側の間に突然、全身を白いプレートアーマーで包み込んでいる人物が飛び降りて来たのだ。

今は飛び降りた衝撃を逃がすために両手を地面につけて着地し、片膝をついている。

何処から来たのかもわからない。だが、一般人で無い事はその繕っている魔力が桁違いなのがわかる。

「……禍々しい魔力を発しているな」

「ええ。このような魔力を持ち得ているのは……“バーサーカー”か」

あちら側は突然現れた乱入者の事を分析し始めている。こんな状態でも俺は体を動かす事が出来ずにオリヴィエに支えられている。

そして、全身プレートアーマーの……“バーサーカー”はゆっくりと立ち上がる。そして、振り向いた方角はランサー達の方だ。

「ガイ、ここはいったん引いた方が良いです」

「あ、ああ……頼む」

オリヴィエは俺の肩を担いで立ちあがる。その動いた時の衝撃が体全体に痛みを走る。

そして、オリヴィエの足に魔力が収縮していくことが分かった。一気に飛ばうとしているのだろう。

俺は何とか戦場に居たランサーのマスターを見た。その瑠璃色の瞳と目が合った。

どうやら見逃してくれるようだ。早く行けと眼で言っている。

そして、オリヴィエの魔力を込めたジャンプで戦場を一気に離脱した。俺はその衝撃で激痛が走り気を失った。

「あのマスターはまだ若い」
「ですが、また会う時が楽しみです」

眼の前に禍々しい魔力を発している全身プレートアーマーの事は無視して、私達は先ほどの人物の事を評価していた。

確かに荒削りな部分も多いが、あれはきっと実戦で成長するタイプだと私は思いますね。次に合う時にどれほど強くなっているのか楽しみです。

と、私はようやく目の前の全身プレートアーマーの“バーサーカー”と思われるサーヴァントを見る。白色の甲冑は、何の特徴もない没個性で、装着者の素性を物語るような手掛かりは一切ない。

ひとたび英霊と契約しマスターとなった者ならば、他のサーヴァントのステータスを“読み取る”ための透視力を授けられる。

英霊を招いた聖杯から与えられる、マスターならではの特殊能力だ。

私も正規のマスターとなつたので見る事は出来ると思つたのですが……。

見えなかった。ステータスも何も読めない。わかる事だとしてたらくラスの“バーサーカー”だけだ。

「……そう言えば、あの時もライダーのマスターがバーサーカーのステータスを視れないと言っていましたね」

前々回の第四次聖杯戦争でバトルロワイヤルの時にバーサーカーのステータスを視ようとしたが無理だと言っていた。

その正体は……私が信賴していた円卓の騎士の1人、湖の騎士と言われたサー・ランスロット。

私に憎悪の恨みを持ってバーサーカーとして私の前に現れた。そして、その最後は私の剣でその胸を貫いた。

今回のバーサーカーも誰かに復讐や憎悪を持って現れたのだろうか。

バーサーカーが突然、こちらに向かって走り出した。助走もせずいきなりのトップスピードで私たちの目の前に一瞬にして到着して右拳を放った。

だが、それはゼストの槍で受け止められていた。

ゼストほどの大きさではないがそれでも成人男性の基準値ぐらいの高さなので私だと見上げるような形になる。

そして、ゼストが受け止めているので、私は風王結界を纏っているエクスカリバーで縦斬りをする。

だが、それをプレートアーマーをまとった左手の籠手で難なく受け止めた。

初見でありながらこの不可視の剣を受け止めましたか。

そして、力の押し合いになった。が、バーサーカーは全く怯むことなく、むしろ私たちを押し始めている。

「む、2対1で押されるか」

「ち、力が異常ですね」

私は冷や汗を掻いたのが分かった。

そして、どちらが……誰が押した力なのか分からないがお互いに弾き擦り下がった。

「いつきに片をつけるか？」

「ええ。この正体のわからないサーヴァントには早めのご退場を願いたいですね」

私とゼストは再び武器を構える。

だが相手の行動は私が予想を超えた行動をしてきた。何の武器も持たずに中距離で構えてきた。

何をしてくるのか全く分からない。

そして、拳を右拳を回転するように放った。

「アルトリア！」

「ええ、分かっています！」

ゼストが私の前に動き、プロテクションというオレンジのバリアを張ってくれる。張った瞬間、あのバーサーカーからあり得ない量の真空刃が飛んできた。

私はその間に剣先が背後に来るほどに大きく振りかぶった構えを取った。

そして、嵐のような斬撃の真空刃が止んだ瞬間、私は風王結界を解いた。

その解いた時に、聖なる宝剣を守っていた超高压縮の気圧の束が、不可視の帳という縛りから解き放たれて、私はゼストの真横からバーサーカーに向かって走り出す。

いや、走り出すというよりかは弾丸のように相手に向かって飛んでいく。

いつもの踏み込みよりも三倍に達している。解放された超高压縮の気圧の風を足で踏んで一気に跳んだのだ。

「はああああ！！！」

私の風王結界を解き放ったエクスカリバーで振り下ろす。

瞬きを一回した時には10メートル以上離れていた距離を一気に0に出来る速度だ。反応できるのは皆無に等しい。

だが、あのバーサーカーは反応した。

相手を真つ二つにする私の太刀筋に反応して無理やり左に動いた。だが、それでも私の太刀筋を避けきれずに右肩を少し抉った。

「A a …… A a a a a a a a ! !」

バーサーカーからは初めての声を聞いた。とてもこの世とは思えなほどの枯れきった声を発して、左手で右肩を押さえる。

どうやら痛覚は存在するようですね。

私は一度離れて、解き放たれたエクスカリバーを構える。後ろに居たゼストも私の隣まで来て、構える。

「A a a …… l a a …… a a a ! !」

バーサーカーの雄叫びは廃虚と化した倉庫街に響き渡った。一般人が聞いたら驚愕して失神してしまうほど禍々しい雄叫びだ。

だが、この2人はその悲痛な雄叫びを受け流して更に表情を頑なにする。

そして、バーサーカーの足に魔力が収束し始めたのがわかる。

一気に突進してくるのでしょうか？

私はバーサーカーの行動に十分注意を払って凝視していた。ドンっという大きな音がバーサーカーから聞こえてくる。

足に収縮した魔力が解放されたのだろう。だが、バーサーカーがこちらに飛んでくる事は無かった。

バーサーカーは上に飛んだのだ。そして、霊体化したのか姿を消し

た。

「……目標が消えましたね」

「そのようだな」

突然現れた乱入者。その素性も正体も不明なバーサーカーは今後、私たちにどのような影響を及ぼすのか分からなかった。

この戦場も最初の時とは比べ物にならないくらいに損傷していた。こんな大きな音をたてても一般人が来るような気配はない。

管理者が何か結界を張っているのでしょうか？

「一度戻るか」

「……そうですね」

私は騎士甲冑の姿からダークスーツに外装を戻し、ゼストは霊体化した。

「今回の“聖杯戦争”も一筋縄には行かない……か。ですが、あのファイターのマスターは……」

私はその変わり果てた戦場を後にして歩きだした。

マンション

「んっ……」

気づいたら俺はベッドで横になっていたようだ。
そして、目が覚めた瞬間

「っっ……」

痛みが体中に走った。俺は腹を押さえて何とかその痛みに耐える。

「ガイ、やっと起きましたか」

と、オリヴィエがキッチンから顔を覗きこんできた。今は私服姿で何かを作っている。

「あ、オ、オリヴィエ……」

痛みは少しだけ薄らいだので俺は壁に掛けてある時計を見る。今の時間帯は真夜中のようだ。

「簡単な治癒魔法しか出来ませんでした。なんとかガイの重傷だった部分は完治したと思います」

「あ、ああ、ありがと。治癒魔法が有ると無いじゃ随分違うからな」

俺は自分の体を見た。至る所に包帯を巻かれている。その上で何故か青い縦縞のパジャマ姿だ。

何故パジャマ服なのか。一瞬、分からなかったが、このように着替えさせれることが出来るのは目の前の人物しか居ない。

「……俺が気絶していた間に、そ、その、俺の服を脱がしたのか？」

「ええ、ガイが気を失った後はバリアジャケットが解かれて私服姿だったのですが、少し出血していましたので私が着替えさせてもらいました」

「……ま、まあ、ありがとっておくべきか」

裸を見られてしまって、ちょっと恥ずかしかったがオリヴィエが居なかったら多分ここには俺はいないのだろうと思うと羞恥心よりも感謝の方が強かった。

俺はベッドに腰掛けてオリヴィエに語る。

「今回は俺が弱すぎてすまなかったな」

「いえ、今回の相手は強すぎました。ガイのレベルではまだ渡り合うには無理だと思うでしょう」

「……そうだな」

レベルが違う。これは確かに紛れもない事実だ。今回の戦いで分か

った。

次元が違うとも天と地の差があるとも言える。俺は“聖杯戦争”を甘く見ていたのかもしれない。

ふと、テーブルにあるデバイスのプリムラを見る。

待機モードに戻って入るが所々に亀裂が走って、核にも亀裂が見て分かる。

「……大丈夫か、プリムラ？」

『今は自己修理中です。翌朝までには直ります』

核を点滅させて応答しているが、ちょっと辛そうな印象が残った。

「無理するなよ」

『ありがとうございます、マスター』

そして、オリヴィエがキッチンから何か料理を作ってオリヴィエがテーブルに置いた。

「お粥なんですけど、食べますか？」

「……ん、後で食べる。今はちょっと1人になりたいんだ」

そう言つて、俺は立ち上がってベランダへと足を運んだ。オリヴィエは食事を受け付けてくれなかったからか少し寂しげな表情をして顔を伏せてしまった。

俺はごめんね、とオリヴィエに一言、言つて窓を開けて外に出た。オリヴィエが止めに入らないので俺の気持ちを察してくれたのだろ

う。
俺はベランダの手すりに手をつけた。夜中となれば外気の温度も少し下がって肌に程良い夜風が当たる。

「……はあ」

今回の戦いで俺は自分が無力だという事が分かった。あの巨躯の男に対して何もできなかった。

体の激痛は残っているが特に痛むのが無理をしすぎた右手首だ。こ
うでもしないとまともに剣戟を行えなかった。

「その夢もお前が弱ければ叶う事など出来ん……か」

あの男の言葉が耳に残る。その紛れもない事実には俺は胸を痛めるし
かない。

全くその通りだった。

あの男と対峙した時、オリヴィエと特訓をした成果もあって、殺気
をまともに受けてもすぐに動かせる事が出来た。だが、きつといつ
もよりも動きが鈍っていたのだろう。

命の削り合い。それを目の当たりにした時に足が竦んでいたのも事
実。

「……なっさけね」

俺はもう一度ため息を吐いた。こんな気持ちではこの戦争に生きて
いけないのは事実だ。

そこに、ガララツと隣の窓が開いた音がした。そして、誰かがベラ
ンダに出てきた気配がした。

まあ、隣の住人が誰かなんてわかりきっていることなんだが。

「……ガイさん？」

その澄んでいる声を聞いて、俺は心に温かいモノを感じた。日常に

戻ってきた気がしたからだ。

「ああ、アインか。どうしたんだこんな真夜中に？」

今の俺は包帯を体中に巻いている。その姿はベランダ越しでは見られることはないのだからこのマンションの構築にちよつとホツとした。俺の方に覗きこまれたら困るけど、そのような事をはしてこなかった。

寝起きで身支度が整っていないから見られたくないのだろう。

「いえ、何か胸騒ぎがしたので星を眺めたくなったのですが、ガイさんが起きているとは思いませんでした」

「……俺もちよつと星を眺めたくなくてな」

戦いの時は夜空なんて全く見ている暇はなかったが今夜の空は快晴のようだ。星がよく見える。

「……ガイさん、大丈夫ですか？」

「ああ、大丈夫だ。でも、今は少しアインと会話をしたい気分……かな」

アインハルトと話をしているとあの“聖杯戦争”は嘘だったんじゃないかって思う。

しかし、日常の世界と非日常の世界。この二つの世界がいまこのミッドチルダで入り混ざっているのだ。

アインと話をしていると日常に居る感じがするから今はそれに縋りたかった。

「か、会話ですか……え、ええと……」

「そんな慌てなくてもいいから」

顔は見れないが慌てている姿のアインハルトが脳裏に浮かんで苦笑した。

そして、しばらくアインハルトと何気ない会話をして楽しんだ。

非日常の世界に居たから分かる。こんなにも日常の世界は素晴らしいモノだったんだな。

何気ない日常の有難みは離れてから分かる事が多い。

何時もの食事。何時もの訓練。何時もの遊び。何時ものお風呂。何時もの会話。何時もの就寝。

日常には有難みがありすぎて人は感じなくなっている。

それはかけ離れた時に改めてありがたいと感じる事が出来る。人間というのはそう言うところが図太いのだ。

「ありがとな、アイン。アインと話をしていて楽しかったよ」

「お、お役に立てて良かったです」

壁越しから聞こえる声は嬉しそうだった。

「……ですが、ガイさんの本当に困っているモノに力になれませんかでしょうか？」

「ん、困っていることもあるけど、アインとこうして話をしてくれるだけでも俺は嬉しいよ」

「……そ、そうですね」

今のアインハルトはどんな表情をしているのか壁越しではわからなかった。

「す、すみません、私、そろそろ寝ますね。もっと話をしたかった

ですけど」

「ああ、また明日でも話できるしな。おやすみ」

「おやすみなさい、ガイさん」

その言葉を聞いて、扉が閉まった音がした。部屋に戻ったのだろう。

少し夜風に当たりすぎたかな。

体が冷え込んでしまったので俺も部屋に戻った。

オリヴィエはどうやらソファーで眠っているようだ。規則正しい静かな寝息を立てている。

今日は俺がベッドで寝る。

オリヴィエが寝ぼけて入ってこないといいけどな。

俺はそう思いながらテーブルにある、お粥の入った鍋を開ける。少し冷めてしまったが、とても美味しそうだ。

オリヴィエもどうやら料理が出来るらしい。その事にちょっと驚きを隠せない。

王族育ちなのだからそのような事柄には無縁だと思っていた。

まあ、オリヴィエは要領がよいので、洗濯物の洗い方を一回教えただけ、すぐにマスターしたほどだしな。

オリヴィエの素晴らしいスキルを認識した所で、俺はお粥を一口食べた。

「……あま」

だが、要領がいいと言っても料理はいつ誰が教えたのだろうか？誰

も教えていないだろう。
オリヴィエは塩と砂糖を間違えたようだ。それにお粥にしては少し
ご飯も固かった。

「でも、気持ちは籠ってて嬉しいかな」

俺はその甘いお粥を残さずに食べた。オリヴィエが俺の為に作った
ものなのだから残さずに食べないと失礼だ。

『マスター』

「ん？」

と、食べ終えてコップの水を飲んでいた俺にテーブルの端でプリム
ラが俺の事と呼んだ。

『今回は私が弱くて申し訳ありませんでした』

「いや、プリムラは弱くないさ。よく頑張ってくれた。むしろ俺が
もっとプリムラをちゃんと使えばよかったんだ」

『……マスターは優しいですね』

「プリムラ？」

プリムラからいつもの機械的な音声と違ったような気がした。本当
に感情のこもっているような音声。そのように聞こえた。

『覚えていますか、マスター。マスターの魔力がBランクになれば
私の新しい力を使えることを？』

「ああ、覚えているよ」

俺がなかなかBランクにならないから、プリムラがC - のランクで
もその力を使えるように調整すると言ってきた。

俺の魔力の低さでオリヴィエだけでは無くプリムラにも迷惑をかけているとその時に思った。

『調整が終わりました。今は修復中なので使えませんが、明日から新しい力を使う事が出来ます』

「……………本当か？」

『ええ』

プリムラはどうやら調整が終わったようだ。俺に新しいモードを教えてくださいようだ。

「その力も使いこなせるようにしないとね」

『精一杯、調整しますね』

「ありがとな、プリムラ」

俺は待機モードになっているプリムラの十字架の核を撫でてやった。このデバイスには色々と助けられている。

今回の戦争は認識の甘さが原因だった。四年前のJS事件から何も変わっていなかった。

認識の甘さ。それが今の俺の弱点だ。

「わかったなら直さないとな」

俺は食器を持って立ち上がり、食器を水を浸した。予想通り、キッチン先は先の戦場のような光景が広がっていたのは分かっていた。

今はベッドで横になりたかったので、その後片づけは明日することにして、俺はベッドに行つて横になった。

「殺し合いに慣れないと生き残れない……………な」

聖杯戦争の初戦。俺は学ぶべきものを多く学んだ。それを次に生かさないと、死だ。
そうして、いろいろ考えているうちに思考が闇に沈んで行って、意識を手放した。

十四話“日常と非日常の交差”（後書き）

変更点

- ・台詞のときのキャラの名前を消去
- ・／／／の消去
- ・……や！！の統一化
- ・そのうち三人称入ります

あんまり変わっていない気がしたw

この編の最初の感想をいただけると有難いです。

では、また（・・）／

十五話 “魔術師と魔術師の交差” (前書き)

前回から三週間くらい間が空きまして申し訳ありませんm | | m

仕事が忙しくて時間がなかなか取れないです。

学生の頃の有り余る時間をもう少し有効活用できたらと思いました。

楽しみにしていてくれ居る方、お待たせしました。

え？居ない？さいですかw

では、15話目入ります。

十五話 “魔術師と魔術師の交差”

マンシヨン

「いててっ……」

俺はテーブルの前に座って、包帯を巻いてある腹部を擦っていた。昨日の一件で俺は高度20メートル以上の位置から急行落下して地面に激突した。落下速度に抵抗して飛行を行ったので即死は免れたが、痛みはまだ体に残っている。しかし、内臓は破裂していないようだ。五臓六腑とも正常に機能している、と、プリムラは言っていた。オリヴィエの治癒魔法が良かったのだろう。

「今日は仕事に行くのですか？」

と、対面に姿勢良く正座して座っていたオリヴィエが声を掛ける。

「……ちと、辛いから、休ませてもらおうかな」

俺は苦笑しながらオリヴィエに答えて、798航空隊へ連絡するためにモニターを目の前に出して操作する。少しして部隊長に繋がった。

『おお、ガイか。どうした？』

見た目は30歳前後の部隊長にしては若い年齢層だ。長い青を一つに纏った髪に青い瞳。右頬には刀の傷跡がクロスする様に傷ついている。

「おはようございます、隊長。今日は体調が優れないのでお休みをいただきたいのですが」

『合宿で鍛えられすぎたか？』

「……少し体を酷使したようです」

パツと思い浮かべた嘘で誤魔化す。だが、それを聞いた部隊長は小悪魔のような笑みを浮かべて、しかし、鋭く真剣な眼をして俺を見る。

『まあ、いい。なのはさんとのイチヤイチャ旅行をして疲れたから休みを下さいと言ってきたら、容赦なくお前のマンションの一室を砲撃で殲滅していたところだ』

「……ははっ」

俺は苦笑いするしかなかった。眼が本気だ。

この部隊長はなのはさんの事が好きらしい。798航空隊から強化合宿に俺だけが呼ばれて、とても悔しそうな表情をして俺にしがみ付いてきた事もあった。

この人に温泉でなのはさんとバツタリ会ったなんて言ったら、リアルにこの部屋を砲撃で攻撃してきそうで怖い。

『……お前、ほんとに大丈夫か？』

しかし、そんな会話の中で何かに気付いたのか部隊長の少しふざけた(?)口調から一変、少し控え目な声で、それでも相手の事を心配しているような雰囲気醸し出す。

「ええ、大丈夫です。少し体を酷使しすぎただけです」

『……そうか、そうならいいが』

画面には少し悲しげな表情をして俺の事を見つめてくる。だが、それも少しの間だけで、部隊長は表情を明るくして笑顔になる。

『今日はゆっくり休め。次の日からみっちり鍛えるからな』

「心遣い感謝します」

俺はモニター越しで敬礼した。なんだかんだ言ってもこの人は俺の上司。軍隊の礼儀は必要だ。

それを見て部隊長も満足げな表情から、にやにやと笑みをこぼし始めた。

「どうしました？隊長」

そんな不審な様子を見た俺はその理由を聞いてみた。

『……なあ、ガイ。ガイのデバイスになのはさんのポロリな映像とか保存さ……』

俺は部隊長の戯言を聞き終える前にモニターを閉じた。部隊長はなのはさんに対しては変態行為も行いそうで危ない。

時々、部隊長がなのはさんの訓練前に、部下になのはさんをローアングルから盗撮してくれっってお願ひ（命令）している場面を見たことがある。

その部下がやんわりと断った時の部隊長の眼から血の涙を流していたのを覚えている。

眼から血が出るって本当だったんだと確信した時でもある。

結論としてこの人はなのはさん絡みになると暴走を始めてしまうとしてもない人物だ。

いつか、俺の居る部隊からわいせつ行為で逮捕者が出るんじゃないか？

「…………たくつ、あの隊長は」

俺が軽く愚痴を零すとそれを見ていたオリヴィエが静かに笑った。

「楽しい人ですね」

「まあ、な。悪い人じゃないんだがな。なのはさんに好意を寄せているらしい」

俺はオリヴィエに適当にそう言いつつ、俺は普段あまりつけることのない液晶モニターのテレビにリモコンで電源を入れる。

画面に映し出されたのは報道ニュースで、女性のニュースキャスターが解説して右上に映像が流れ、下部にはテロップが右から左へ流れていた。

左上には“アラル港湾埠頭廃棄倉庫区画に突然の嵐!?”と報道され、アラル港湾埠頭の荒れた映像が流されていた。

『昨夜、アラル港湾埠頭の廃棄倉庫区画に突然の小型のハリケーンが発生しました。滞在時間は5分前後であると分かり、その影響で倉庫の外装から引き剥がされたトタン材が辺り一面に散らばり、現在撤去作業を行っております。この異常現象を専門家の…………』

ニュースは昨日マスターとサーヴァントがぶつかり合った変わり果てたアラル港湾埠頭の報道が流れていた。

「……隠蔽や情報操作されているとしか考えられないな。昨日は明らかにハリケーンとは違う大きな騒音と衝撃があったというのに周りはその事に気にする素振りを見せない」

「そうですね。あの管理者が何かこの世界の人たちでも気づけない結界でも張ったのでしょうか？」

俺たちは互いを見ないでモニターを覗いて話をしていた。専門家の偉い人は、最近の気圧の変化が著しく変化しているのでその影響ではないかと説明している。

「まあ、仮に管理者が元帥レベルだとしたら可能だろうな」

「もし、その管理者がマスターとして参戦してきたら辛い戦いになりますね」

ニユースキャスターの女性は、今後もこのように突発性のハリケーンが海岸付近に発生しやすいのですね、と結論付ける。その言葉に専門家は頷く。

「管理者が参加することは可能なのか？」

「可能性はあると思います。昨夜の私が戦ったランサーのマスターはどうやら、元はサーヴァントだったようです。生存している人物でなくてもマスターになるのですから、生存している管理者がマスターになるのはおかしくはありません」

「……マジか？」

「ええ」

『皆さんも海岸付近は十分に注意をしてください。それでは次のニユースです……』

「少し話がずれるがランサー組は2人のサーヴァントという事になるのか？」

「そうなります。ランサー組はかなり強敵だと認識してください」

ニユースはアラル港湾埠頭の報道を終了して、次にテーマパークの入場者数を去年との比べ合いの結果を報道していた。

「……他の組達に引けを取らないように死への耐性……をつけないと」

「特訓あるのみですね。後は実戦で慣れるしかありません」

オリヴィエと話し込んでしまったのでニユースの内容があまり頭に入っていなかった。なのでテレビのほうに注意を向ける。モニターはいつの間にかテーマパークの家族連れの入場者にインタビューをしている場面だ。

左下には入場者数を去年との比べ合いの結果が出ている。今年の方が入場者数が多いようだ。

「……世界は平和なんだな」

平和的なニユースを見ていると、無意識にそのような言葉が出た。

「この世界は平和に近いと思います。確かに犯罪事件が絶えたわけではありませんが、私の時代、古代ベルカ諸王時代で様々な国が入り混じった酷い戦争のようなものが無い分、かなり良い方だと思います」

「……戦場は怖かった」

「ガイ……」

俺はテレビからオリヴィエの方を向いて本音を重く吐いた。本当の

戦争だともつと人が入り混じって殺し合いをするのだが、昨夜の一騎打ちだつて殺し合いであるには変わらない。

命の取り合いはやはり怖いモノだった。

俺の重い本音にオリヴィエは表情を曇らせて困惑して、俺から視線を離した。

「でも、俺は自分の願望を叶えたい、叶えたいんだ。“魔法で誰もが不幸にならないような世界”そのためにも死に慣れてこの戦いを勝ち抜く」

だが、俺は視線を逸らしたオリヴィエの両肩を掴んで必死に俺の想いをぶつけた。

“聖杯戦争”に向けて何度も覚悟を決めたつもりだった。だが、昨夜の戦いでその覚悟は幻想で何の意味もない事が分かった。聞くのと見るのでは全く違う。実戦した内容も含めて、改めて覚悟を決める必要がある。

もう迷いたくない覚悟を持ちたい。

俺はその覚悟をパートナーであるオリヴィエに聞いてほしかったのだ。

オリヴィエはその覚悟を持った俺の眼を見て、驚きの表情をしていた。

多分、今の俺の眼には揺るぎない灯が映っているのだと思う。

「怖くはないんですか？」

「怖いさ。怖いモノは怖い。でも、いつまでも怖がっていたら俺は……成長できない。前に進めない。だから、オリヴィエ。君の力を貸してくれ」

俺はオリヴィエの両肩から手を離してテーブルに頭がぶつがるすれの所まで頭を下げた。

「……頭を上げてください、ガイ」

耳に透き通った声が聞こえたので俺は頭を上げる。そこには先ほどまで困惑した様子ではなく、優しく微笑んでいるオリヴィエが居た。

「私がガイに召喚された時からこの拳はガイの勝利のために振ると忠誠を誓っています。ですから、そのような当たり前な事に頭を下げないでください」

「……オリヴィエ」

オリヴィエは当たり前の事を聞くなといった態度を取って、テーブルにある湯呑を持って中に入っているお茶を飲む。

「ありがとな」

「……何のことでしょうか？」

オリヴィエは湯呑から口を離して俺を見て、ワザとらしく明るい声で首を傾げて微笑みながら言った。

そして、湯呑を置いて、絵に描いたような天使のような笑みを浮かべて

「もう少ししたら、訓練を行きましょう」

病み上がりな俺に対して悪魔な意見を言ってきた。

「……傷がまだ痛むんだが」

「ですが、ガイの傷の治り方が早いですね。私の治癒魔法もいらな
いくらいですよ」

「え？」

俺はオリヴィエの言った言葉に疑問が残った。この体中に付いた傷
ははっきり言って動けないほどの重傷だ。

だが、今は簡単に体を動かせるほどに回復している。オリヴィエが
治癒魔法を行ってくれたからだと思った。

だが、当の本人は自分の治癒魔法はいらなくらいだと言っている。
俺は先ほど痛みが残っていた腹部を軽く押してみる。

「……あまり痛くない？」

完全に痛みが消えたわけではないが先ほどよりは痛みが和らいで
いる。

「ガイの自己治癒力が比較的高いのではないのでしょうか？」

「大怪我を負った事はあの対戦をするまでは無かったから分からな
かったが、そうなの……かな」

俺も自分の体がよく分からなかった。だが、治癒力が高いのなら良
いに越したことはないのだろう。

「ですので、午前はゆっくり休んで午後から特訓しましょう」

「……ははっ」

眼の前の人物にはニッコリと笑って脅迫的な事を言ってしまう原因
にもなってしまうが。

S t ・ヒルデ魔法学院中等科 昼休み

「……ふう」

私の席は窓際なので机に右ひじをつけて、右手で右頬を支えるように右に体重を傾け、窓の外を見ている。それは見えているというよりただ視界に入れているという表現の方が正しい。事実、考え事をして外を眺めているのだ。外の光景などほとんど脳に入っていない。

昨夜のベランダ越しの会話は楽しかった。寝るときは下着姿の上に

Tシャツを着た姿だったのでベランダ越しからガイさんに覗かれたらどうしようとか少し慌ててしまいました。終始覗かれること無く何とか平常心を保って会話することが出来ました。ですが、昨夜の会話ではガイさんは少し元気が無さそうでした。それだけではなく合宿の四日目からガイさんらしい感じがしなかった。常に周りを警戒しているような雰囲気を感じていました。やはりオリヴィエ関係でしようか？

「……………はあ」

そして、私は何処となくため息が漏れていた。ガイさんのために何もできない自分に苛立ちを覚える。

私は机の中から一冊のノートを取り出しパラパラと捲る。そして、最後のページにたどりついたとき、その行動をやめて机に広げた。その最後のページ、そこにはトレーニングメニューがみっちりと書かれていた。

基礎トレーニングから魔法応用のトレーニングまで。

ガイさんに見られそうになった時はこんな筋トレや魔法トレばかりしている人だとは思われたくなくて、必死になってガイさんからノートを取ったこともありましたね。

その内容を見ながら、先日の勉強会の日の事を思い出した。

あの時のピアノの演奏……………また聞いてみたいです。

勉強会は私にとってとても有意義なモノだった。ガイさんの弾いたピアノの音は聞いててとても気持ち良かったし、ガイさんの事がいろいろと分かって嬉しかったという感情もあった。

だから私は困っているガイさんの手助けをしてあげたい。自然とそう思うようになりました。

「ん？映像通信？」

と、そこに考え事をしていた私の目の前にモニターが表示された。掛けてきた人物はヴィヴィオさんだ。私は出ることにした。

『今日はお休みなんだ』

「ええ、少し体調がすぐれないので」

お昼過ぎになのはさんから映像通信があった。どうやら今日出勤していない事に心配をかけられてしまったようだ。

『私の訓練はそんなに辛かったかな？』

「ええ、訓練に一生懸命励もうと思いましたが、体は正直なモノでついていけませんでした」

なのはさんまで嘘をついてしまった。だが、

『……本当に“大丈夫”？』

「……ええ」

最後の部分が強調されたかのように最後の大丈夫にひと間、置いて聞かれた。やはりなのはさんに隠し事するのは難しい。でも、これだけは隠さないと不味い。

『あゝ、イチヤイチヤな会話中わりいが……』

と、なのはさんの隣にヴィータさんも映り込んできた。なのはさんは少し驚いた表情をしてヴィータさんの方を向いて声をかけた。

『……そんな風に見えてた？』

『ああ。あそこの部隊長見てみな。眼から血の涙だけじゃなく、壁に藁人形を釘で打ちつけて“ガイめゝ、いつかあのマンションの一室を砲撃で破壊してやる”とか言ってるぞ、念を込めてるぞ』

「……怖いですね」

リアルにそう思った。なのはさんと普通の会話をしているだけでも部隊長から呪い殺されてしまいそうだ。

今までなのはさんと接した時もあんな風に俺の事を呪い殺そうとしていたのだろうか。

今朝のモニターでは心配してくれてたというのに。

本当の事を聞きたいが、聞くのが怖くて聞けねえ。

“聖杯戦争”ではない所で命の危険性を感じた瞬間だった。

『で、ヴィータちゃん、どうしたの？』

『別に大したことじゃねえよ』

そう言って、なのはさんの方を向いていたヴィータさんはモニター越しの俺にその凜とした蒼い眼つきを向けてくる。

『ガイ、疲れてんならしつかりと休んで疲れを取れよ』

どうやらヴィータさんにも俺の事を心配してくれているようだ。その事に少し嬉しさを感じた。

『へえ、ヴィータちゃんもガイ君のこと心配しているの？』

ヴィータさんの後ろに居たなのはさんは口元を軽く緩めてニヤニヤと笑っていた。

『あつたりめえだろ。ガイのような腐った根性を持っている奴なんかは徹底的に叩き潰さねえと直らねえからな。とつとつ、疲れを取って訓練に出て来いよ』

「……」

前言撤回。この人はあまり俺の事を心配してくれて無さそうだ。

それにしても俺は腐った根性を持つてるのか？

『グイータちゃんは本当に戦技教導官に向いてるよね。部下思いでいい子だよ』

『そんなんじゃないやねえよ！それに、いちいち子供扱いすんじゃないやねえよ！！』

なのはさんが左手でグイータさんの頭を子供を甘やかすように優しく撫でている。

そんな事をされてグイータさんは顔を赤くしながら抵抗している。こうして見てみると何とも微笑ましい風景の1枚だ。

『……なのはさんと仲の良いガイを呪ってやる』

なのはさん達の背後に居た、壁に藁人形を釘で叩きつけている部隊長の風景は切り取った。

「……話が変わりますが御二人に聞きたい事があるのですが聞いてもいいですか？」

『ん？聞きたい事？』

『何だ？言ってみる』

2人は微笑ましい風景の光景を終わりにして俺の写っているモニタ―に顔を向けてきた。

「男性でオーバーSランクの空戦魔導師の槍使いの人物ってどんな

人がいましたか？」

俺は過去形で聞いてみた。昨日のランサーはこのように言っていたからだ。

“俺の世代では築きあげることが無理だったものだ。俺はいつも遅すぎた。俺の居た部隊は敵の罠に合い全滅……大切な部下も私も死んだが二度目の生を受けた。だが、今度は親友を守ること出来なかった。そして、再び死が訪れようとしたとき、後輩に全てを託した”

何処かの部隊長だったのだろう。そして、原因は分からないが二度目の生を受けていると。

そんな事が果たして可能なのだろうか？

『オーバーSランク……うゝん』

『……空戦魔導師……槍使い……』

なのはさんは首をかしげて該当している人物を思い浮かべようとしている様子だが、なかなかヒットしていないようだ。

しかし、ヴィータさんは何か思い当たったように顔を下げ、地面をじっと見てぶつぶつと言っている。

「ヴィータさん、知っているのですか？」

『……まあ、一応な。JS事件の時に居た人物だ』

JS事件。その言葉を聞いた時に俺は自分の心臓が跳ね上がったのが分かるくらいにびっくりしていた。

俺が積み上げてきたモノが崩れてしまった事件。

何かがこみ上げてきそうな感覚だ。

「……どんな人だったのですか？」

それを何とか表情に出さずに冷静さを保って、俺はヴィータさんに追求した。モニター越しのヴィータさんは地面から俺の方へと視線を移す。

「名前はゼスト・グランガイツ。空戦航空隊のオーバーSランクの槍使いだ。あたしも一度武器を交えた事がある。あの時は負けちまつたけどな」

「ヴィータさんが負け……る？」

正直、想像出来ない。俺たちが束になっても敵う事が出来ないヴィータさんが負けたことがあるなんて。

「ヴィータちゃん。JS事件は極秘情報なんだからそれ以上は……」
「分かってるよ。まあ、でもあいつはそれほど悪い奴じゃねえってことは分かったけどな。で、なんでガイはそんな事を調べてんだ？」
「いえ、模擬戦の時にエリオの槍が凄まじかったので、それ以上の人物がいれば参考になればと思ひまして」

前もって考えていた嘘を2人に語る。

「でも、なんで過去形で聞いたの？」

しかし、なのはさんは過去形で聞いたことを見逃さなかったようだ。的確に俺の矛盾をついてきた。

「……すみません、言葉のあやです。気にしないで下さい」

俺は頭を下げた謝罪した。

『……まあ、いいけど……ガイ君。無理しないでね』
「……心遣い感謝します」

俺は頭を上げてモニターを見る。なのはさんが相手の事を思っている様な寂しげな表情をしていた。

やはり、なのはさんには迷惑をかけ過ぎるな。

『ガイ、早く戻ってこいよ。お前がいねえところじゃ、叩きがいのある奴がいねえんだからよ』

「……はい。ありがとうございます。それではそろそろ失礼しますね」

『うん、ちゃんと休むんだよ』

なのはさんの心配しそうな声を聞いて俺は笑みを浮かべてモニターを切った。

「……ゼスト・グランガイツ……ね」

モニターを切って俺は笑みが消えて真剣な表情に変わった。

その人物について後で調べる必要がある。それに……

「あのマスターについても素性を知っておいた方がいい……か」

元サーヴァントだったマスターだ。実力もかなりある。なので弱点を突く為に素性を知る必要がある。

「ガイ、そろそろ行きましょう」

「……ん、そうだな」

今まで沈黙を保ってくれてくれたオリヴィエが声を掛けてきた。

「隊長やなのはさんにはちゃんと休んでくれと言われてんだけどな」

「ですが、一度ガイを鍛え直さないといけませんし、そのデバイスの新しい力も試したいのでしょう?」

「まあ、ね」

俺はそう言いつつ立ち上がる。オリヴィエも立ち上がった。

「行くか」

「はい」

俺たちはマンションを後にした。

公共魔法練習場

「はあはあ」

俺はオリヴィエとここで特訓を行っていた。俺の息が上がっているのにオリヴィエは涼しそうな顔をして息一つ乱れていない。

「少し休憩しましょう。ガイは病み上がりなのですから」

「はあはあ……頼む」

俺はバリアジャケットを解除して元の私服姿に戻った。オリヴィエも騎士甲冑から元の私服姿に戻る。

「何か飲み物を買ってきます。ガイは木陰で休んでいてください」

「はあ……ああ」

何とか息を整えて俺はオリヴィエに小銭を渡して木陰へと移動した。オリヴィエは少し離れた所にある自動販売機へと王族らしい優雅な歩き方で向かって行った。

「ふう……」

俺は木に背中を預けて座り込んだ。体全体に疲労が溜まっているからか座った瞬間に体が重くなった。

「フリーの訓練はキツイわ」

オリヴィエの特訓は合宿の時と同じで殺気の籠った攻撃をひたすら避ける特訓だ。最初のころと比べれば大分体を動かせるようになってきた。

それでも5〜6撃あたりでガードしないと無理だが。

『私のセカンドモードはどうですか？』

と、首に下げている待機状態のデバイス……プリムラから音声が聞こえてきた。

「ああ、いい感じだった。ただ、あれは空中戦でしか使えないな」

『マスターは空戦魔導師ですからそれでいいと思います』

「だな」

先ほどの特訓の時にプリムラのセカンドモードを試してみた。だが、それで空中戦でないと使えない事が分かった。

それなのでオリヴィエとの特訓の時は普通のモードで行っていた。

「ま、後は俺が調整しないとな。あれも頑張れば地上戦でも使えるかもしれないし」

『その時もサポートします』

「ああ、頼むよ」

俺は心強いデバイスのサポートがあると分かって、安心感を得ていた。

「……ガイさん」

「ん？」

と、そこに後ろから透き通ったような女性の声が俺の名前を呼んできた。

俺は座っているので見上げながら右後ろへと首を向けた。

そこにはアインハルトが黒いバイザーを付けて顔だけを木から俺の事を覗き込むように視ていた。

背が高いな。おそらく武装形態の姿か。

「アインか」

「わ、わかりますか？」

「その長い碧銀の髪は目立つしな。それにその大きな赤いリボンも」

特徴的な事を言うと、アインハルトは俺の前に出てきた。

やはり武装形態の服装だ。はやてさんから新しくしてもらったのだろうか。合宿の時に見た姿より少し変わっている。髪型も少し変り、武装形態の時でもその特徴的な大きな赤いリボンが付いている。

しかし、アインハルト自体、何処となくいつもの雰囲気ではないような気がした。

バイザーを付けているから表情が読み取れない。

少し殺伐としているというか。初めてオリヴィエを見た時の雰囲気似ているな。

「どうしたんだ、アイン。今は学園に居るんじゃないのか？」

「…………ええ」

アインハルトは静かに答える。その殺伐とした雰囲気隠さずに。

「ガイさんに一度お会いしたくなりまして」

「…………拳を交えたいのか？」

そう言ったが、アインハルトは首を横に振った。

霸王の悲願を受け止めてくれるのは俺だと思って、拳を交えるために学園を抜け出したなんて言ったら少し怒ろうと思ったが、違ったようだ。

と、なると理由は何だ？

俺は首を傾げた。

「…………ただ、ガイさんにお会いしたかったです」

今一度アインハルトから同じ言葉を言ってきた。そう言われて嫌な気持ちにはならないが、アインハルトから出ている殺伐とした雰囲気、気が嬉しい気持ちになれずにいる。

「それではまた会いましょう。失礼します」

「あ、お、おい」

アインハルトは一度頭を下げて、俺の返事を待たずに後ろへと走って行った。俺も立ち上がり、後ろを振り向いたが、そこにはもうアインハルトは居なかった。

アインハルトは確かに突撃が早い。すぐ居なくなるのも説明が付く。

「……………なんだっただ？」

今の俺の頭の上には？マークが三つぐらい出ているだろう。

「ガイ？もう動けるのですか？」

「ん？フリーか」

そこにまた後ろから声が聞こえたので振り向くと缶ジュースを二つ手に持っているオリヴィエが立っていた。

「さっきまでアインが居てな。ただ俺に会いたかっただけと言ってすぐ居なくなっただよ」

「？……………アインハルトにしては良く分からない行動ですね」

そう言いつつ、俺に缶ジュースを1つ渡してくる。

俺はまっただ、と言ってそれを受け取り、一口飲む。

「それはさておいて、動けるのならこの後の訓練もみっちりやりましょう」

「……………」

天使のような笑みを浮かべながらその言葉を言っているのを聞いて、飲んでいるジュースが気管に入りそうになった。そして、缶ジュースから口を離す。

「……………お手柔らかに」

今後の訓練も大変な事になりそうだ。

マンション 夕方

俺とオリヴィエはテーブルを囲んで座っていた。

「疲れた……」

「まあ、病み上がりには上出来かと」

俺は満身創痍な状態で後ろに手を置いて天井を見上げるように体重を後ろに下げて明らかにダルそうな態勢をしているが、オリヴィエは正座をして何ともないかのように静かに紅茶を飲んでいる。

「……ま、オリヴィエに勝つのが無理って話か」
「ん？何か言いましたか、ガイ？」

小さく呟いた言葉にオリヴィエは耳を傾けていなかったようだ。
俺は首を振って、なんでもない、と言い返す。

「さて、晩飯を作らないとな」

俺は重くなっている体を起こそうと片膝をついて立ち上がろうとした。

そこに、ピンポンと質素な呼び鈴が部屋に鳴り響く。

「誰でしょうか？」

「見てくるよ」

立ったついでに玄関に足を進めて、ドアを開けた。

「」「」「こんばんは」「」「」

「……こんばんは」

そこにはヴィヴィオ達が制服姿で立っていた。俺はドアノブを握ったまま脳が停止した。何故こんな時間帯にヴィヴィオ達が来るのか分からなかったからだ。

「……どうした、こんな時間に？」

よじやく思考が動き出して何とか言葉を絞り出す。

「あのね、ガイさん。ガイさんはまだご飯食べてない？」

ヴィヴィオが笑顔で首を軽く傾げながら聞いてくる。

「これから作るうと思っていた」

「も、もし、良かったら私たちが作りますよ？」

コロナが少し緊張気味な表情で言ってきた。コロナとリオの手にはいろいろな食材が入ってるのか膨らんだビニール袋が一つずつ持っている。

「どうしたんだ急に？」

俺は軽く笑って聞き返してみた。

「ガイさんが体調がすぐれないとなのはさんから聞いたので私たちが料理を作ってあげようと思ったんです！！」

リオが八重歯をチラチラと見せながら笑って元気な声で答える。

ああ、そう言えばなのはさんにそう言っていたんだ。それをヴィヴィ達が聞いて来たというわけか。

食材まで買っているのに何もさせずに帰すのは気が引ける。

「事前に連絡しておいた方が良かったでしょう？」

アインハルトが心配そうに不安げな表情で片手を胸の前に置いて聞いてくる。

「いや、別に大丈夫だよ。んじゃ、お言葉に甘えようかな」

俺が了承するとヴィヴィオ達は嬉しいのか明るい笑顔を向けてきた。アインハルトは相変わらず笑顔の表情を見せてこないが。

「……おじゃまします」「」

「失礼します」

俺は最後に玄関の鍵を閉めるためにヴィヴィオ達を先に入れた。

「おや、ヴィヴィオ達ですか」

「こんばんは、フリージアさん」

オリヴィエとヴィヴィオ達も挨拶を交わすのが聞こえた。

玄関の鍵を閉めて俺も部屋に戻った。そして、最初に見たのはアインハルトだ。

今の雰囲気は特に何ともなく、アインハルトの独特な雰囲気はまだ。昼間に合った時の殺伐とした雰囲気はない。

ふと、アインハルトと目が合った。

「どうしました、ガイさん？」

視線に気づき、首を傾げてキョトンとした表情で声を掛けてきた。

「……いや、なんでもないよ」

アインハルトはきつと大会に向けて秘密の特訓でもしているのだろう。だから、あの殺伐とした雰囲気を持っていたと。

なので、俺は昼間の事は聞かない事にした。

廃棄都市区画 市街地

「さて、と」

私はビルの屋上から人が使う事が無くなったコンクリートの塊であるビルが軍隊のように列を連ねている廃棄都市を見下ろしていた。ここは魔導士たちがランクを上げるために行われる試験会場に使われていたりもする。

今は夜なので廃棄都市なので街灯などの光は無く、照らされているのは遠くにあるミッドチルダ首都からの光と星の光だけだ。

それだけでは薄暗く、この廃棄都市は不気味な雰囲気を漂わせている。

そして、私の視界には1人の人物が映っていた。

閉鎖され、所々にコンクリートのヒビや穴がある高速道路の中央線に人がいる。あちらも見上げるようにしてこちらを見ている。遠くからでは特徴的なモノが分からない。

『奏者よ、あれはキャスターだな』

「ええ、私のマスターの力でもキャスターってことは分かるわ」

頭に響いたセイバーの声に私も賛同する。

私は状況視察にこちら辺を散策していた。自分たちが戦うのに最もよい地域を探している最中だった。

だが、この地域に入ってから視線が私を貫いていた。殺気が異様に籠った視線。

常人の人間ならこの背筋が凍るような視線を1分でも感じていたら失神してしまうぐらいのモノだろう。

しかし、私はセイバーも居るからその視線を無視して散策を続けていた。いつ襲ってくるかはわからなかったが、いつでもセイバーを実体化出来るようにはしておいた。

この地域を散策して30分くらい経っただろうか。私は廃ビルの屋上に立っていた。

殺気の籠った視線は無くなり、先ほど代わりに高速道路にその人物が現れたのだ。

「あの異様な殺気はアイツから放たれていたって事で間違いないわね。常人な人物ではないわね。それにマスターの姿が居ない。どこ

かに隠れて様子見かしらね」

『うむ、十分に注意するのだぞマスター』

わかってるわ、と私は霊体化しているセイバーに返答して、靡いている髪を片手で押さえる。

今は軽く風が吹いているようだ。ビルの屋上なのでその影響を髪がもろに受けているようだ。

「!?!」

と、そこにドンッと何かがあ的人物から放たれた。

超圧縮された魔力の球!! しかもデカイし速い。

私は自分自身の危機を感じて廃ビルから飛び降りた。その瞬間、私が入っていた後ろのビルは黒い魔力の球を受けて、ビルの半分から上が粉々になり、破片が私にも飛んできた。

この廃ビルと廃棄高速道路の距離は200メートル弱。それを一瞬で飛んできたのだ。

「セイバー!!」

「心得ておる」

私がセイバーと叫ぶと同時に金髪の髪に翠の瞳、鮮やかな赤のドレスを着ているセイバーが実体化して、私に向かって飛んできた破片を左手に握っている赤と黒のラインの捻れた特徴的な剣で薙ぎ払う。

「余に掴まっておれ。一気に行くぞ」

「ええ」

私はセイバーの腰に手をまわした。セイバーは後ろのビルに足をつけて落ちながら壁走りをして、最後の一步を思いっきり踏んで高速道路側へと跳んだ。

その最後の一步の威力は凄まじく、その威力に耐えきれなかったビルは半壊から全壊へと変えざる負えなかった。

そして、高速道路に立っている人物から先ほどの超圧縮された高速の黒い魔弾が撃たれた。先ほどより近づいたから分かるが、どうやら杖みたいなモノから魔弾を放出しているようだ。

あれが“デバイス”というモノなのかしらね？

そんな思考を頭の隅に置いておいて、目の前には黒い魔弾が迫ってきていた。その黒い魔弾の速度は常人では決して反応できない速度だ。私も200メートル離れている所から反応するのが精一杯だった。

さらに、今は止まっているわけではなく相手に向かって跳んでいる。迎撃されている状態なので更に速く感じるのだろう。ここまで来るともはや反応できるのが無理に近い。

「ふん、温いぞ」

だが、私のサーヴァントはそれに反応して見切り、左手に持っている剣でそれを一太刀で切り捨てる。

ズドンと大気中に圧縮された黒い魔力が霧となる音がして拡散されていく。

「なっ!？」

だが、その霧が刀や槍、剣とさまざまな武器の形になって矛先をこちらに向けて再び襲いかかってくる。

再構築に遠隔操作！！“デバイス”ってそんなことも可能なの！？

「慌てるでない、奏者よ」

襲ってくる武器の嵐に慌てている私に対して、セイバーはいつもの冷静なセイバーだ。そして何かを呟いた。

「トレ・フオンターネ・テンプスフェイス時を纏う聖者の泉” 罪科の剣よ、ここに！」

外見は何も変わっているようには見えないが、セイバーの特徴的な剣に何かが宿ったのが分かった。

だが、その剣を襲ってくる武器に対して受け止めるための構えに入る。

「ちよ、ちよつと迎撃しなさいよー！！」

何かが宿ったので攻撃にするのかと思った私の考えが崩れて、文句をセイバーに投げつけた。

「これで良いのだ」

だが、帰ってきたのは自信満々な表情を横顔からでも分かるくらいに浮かべているセイバーの言葉だった。

そして、最初の武器である矛先が防御の姿勢でいるセイバーの剣に触れた瞬間、全ての武器が止まった。

「え？」

「……!？」

私は戸惑いながらも驚いていた。相手も驚いているようだ。いや、相手は驚いているというよりも僅かだが痺れたと言った感じだ。

いったいどういった原理で止まったのかしら。後で聞く必要があるわね。

そして、そのまま武器は霧へと戻った。

その間に私たちは廃棄高速道路へ跳び下りて、私はセイバーから離れ、パンパンとスカートについている埃を叩きながら相手を見た。

見た目は4〜50歳ぐらいの少し年配の掛った黒い瞳の男性だ。セミショートの黒い髪にも少し白髪が混じって入るがそれをオールバックにしているため年配という感じがしない。服装もバリアジャケットというモノなのか、黒いズボンに黒いインナーを着て黒いロングコート。ロングコートには僅かに装飾品が付いている。

その全ては武装型のような服装だ。そして、右手には先ほどの超圧縮された魔弾を放った杖を握っている。

「……やはり、視るのと実戦では違うな。セイバーの技に反応できなかった」

「……何を言ってるの？」

相手が呟いていた言葉を私は拾って聞き返す。その人物はどんな感情が込められているのか分からない眼をこちらに向けてくる。

「遠坂凜だな」

「……へえ、敵の情報は調査済みってわけ？」

この世界の住人ではない私の名前をどうやって調べたのかはわからないがこちらの事は調べられているようだ。

「君は“力の転換”によって宝石などに魔力を貯めこんだり一気に開放したりすることのできる魔術師だからな。それに相手を指差すことで人を呪う北欧の魔術“ガンド”を得意としている」

「!？」

私の魔術がバレている。一体どうやって？

私は心の中で驚いていた。遠坂家の魔術は秘匿されていて決して人前に出る事はないモノのはずだ。

「あなたもキャスターなのだから魔術師なのかしら？それとも魔法師か魔導師？」

私は驚きを何とか表に出さずに相手に聞き返す。魔術を知っているのなら魔術師という可能性が高い。

魔法や魔導師はまだ分からない部分が多いから魔法師や魔導師でも“聖杯戦争”に参戦出来るのかもしれないが私の中ではその可能性は低いと考えている。

「ああ。そうだ」

相手は隠す素振りを見せずに魔術師だと肯定した。やはり魔術師だったようだ。

だが、疑問が残る。先ほどの魔弾は明らかに“魔術”のモノではない。“魔法”なのか“魔導”なのかはまだ分からないが、魔術とは扱うチャンネルが違うから両方使える人物はたぶん存在しないと前に考えていた。1つの入れモノにそれと同じ質量で異なるチャンネルが2つあっても、2つは入らない。両方使えたら化け物かもしれないが“魔術”が暴走する。

魔術を使って更に魔法を行うための“概念”として^{マナ}いる魔力を大気から取り込んだら、魔術と併用して集め過ぎて自滅するからだ。

何にしても目の前の人物に関してはまだ情報が少なすぎる。私の求めているモノは“魔術”と“魔法”もしくは“魔導”の併用が出来るか出来ないか、それが知りたいわね。

魔法はその時代の科学力で再現できない未知数のモノとしてまだ考えていた方が良さそうね。まあ、この世界の科学では私たちの今の科学の力では証明できないモノの定義をしている魔法を再現できそうだけど。

「それって“デバイス”よね？」

私は今、考えていた思考を停止して最も聞きたかった事を相手の杖に指を指して聞く。

その返事の代わりにその人物は静かに構える。

「教えてくれないの？」

ニツコリと悪戯な頬笑みを向けながら相手の行動を伺う。

「教えるメリットもない」

その人物が言葉を発した瞬間、その人物から凄まじい殺気が放たれた。最初の時に背筋が凍るような殺気だ。

「マスターよ、下がっておれ」

それに臆することなく、セイバーは前に出て剣を構える。

「負けんじゃないわよ」

「わかっておる」

私の喝の言葉にセイバーは振り向かずとも頷いたのが分かった。

そして、ダンツとセイバーが地面を蹴った事で乾いた音が響き、一直線にキャスターに向かって走りだしたことが戦闘の開始の合図だった。

距離は10メートル弱。それをセイバーは一気に突き進み、気がつくとも既に剣を振り下ろしている場面だった。

キャスターはそれを杖で難なく受け止める。そして、鏑迫り合いの力の押し合いとなる。

「むっ、力は余と同じだと」

「……」

私はじつと相手の行動を観察していた。少しするとじりじりとセイバーが押され始めた。そして、キンツと武器を弾く音がしてセイバーはキャスターから大きく離れ私の前まで下がる。

「殺れ、ジャツカル」

『了解した、マスター』

しかし、その間にキャスターはあの杖に命令を下して魔弾のチャージを完了していた。あたり一面に魔弾が現れる。先ほどの魔弾よりかなり小さいが今度は数が多い。

「……多いどころじゃないわね」

私はその数を見て愕然とした。半径50メートル前後だろうか。魔弾で空が覆いつくされ、私たちをシエルターのように囲んでしまうほど展開されている。黒い魔弾なので高速道路を照らしていた僅かな光がさらに薄くなり、ほぼ暗黒な世界に変わった。

バチバチと魔弾の魔力が唸りを上げて、その影響を受けて大気も悲鳴を上げている音を全方位から聞くと神経がおかしくなりそうだ。

「そなたの技はあまり美しくないな」

「馬鹿ッ！そんな事言っている場合じゃないわよ！！」

視界が暗くなっている中、悠長な事を言っているセイバーに私は身の危険を感じながらも怒鳴った。

「さっきの技は！？」

「あちらも馬鹿ではないようだぞ。さっきの技を使っても意味がない」

先ほどの魔力で作られた武器の矛先がセイバーの剣に当たった瞬間に周りの武器が霧に戻ったカウンターの技なら止められると思っただが、今回はそうはいかないようだ。理由は分からないけど。

正直、私の今の手の内だとこの魔弾の弾幕を回避する手はない。持ってきた宝石は9個だが、今のこの状況では無意味だ。

「そう案ずるな、マスターよ」

「……ッ!」

と、敵の方を見ていたセイバーは振り向いてにっこりと笑う。私は一瞬、ここが戦場だという事を忘れて、薄暗い中でもその笑みに魅入られたかのように見惚れてしまった。そして、再び前を向いて剣を構えて呟く。

「トレ・フォンターネ・アーデント“燃え盛る聖者の泉” 集え、炎の泉よ!」

そして、またセイバーの剣に何かが宿った。だが、それは先ほどのモノとは質が違って違うモノだと分かった。

「伏せておれ、奏者よ!」

「えっ? きゃあ!」

セイバーが言葉を発した瞬間、周りの魔弾は一斉に私たちを貫く為に襲いかかってきた。光を遮るように並んでいた魔弾が動き出したので光が漏れ始めてキャスターを確認しようとしたが、身の危険が迫っているので私はセイバーに言われた通り身を低くするために伏せる。

セイバーは全方向から襲ってくる魔弾に対してその場で一回転して回転切りをした。その剣から放たれる剣圧は凄まじく、セイバーを中心にハリケーンのような大気の渦が発生し、襲ってきた全ての魔弾はその大気の壁を超す事が出来ずにブツかって霧状になっていた。

「……ほう」

キャスターは自分の魔弾が相手に届かなかった事に対して何かを感じていた。

そして、セイバーは再びキャスターに向かって走り出して、走りながら剣を横切りの態勢へと変えた。

「天幕よ、落ちよ！ 花散る天幕！！！」
ロサ・イクトウス

キャスターはガードの態勢に入ったが、セイバーはそのまま両手持ちで横切りを行い、居合抜きのように剣を振り抜き、キャスターのすぐ横を通り抜けた。

「……くっ！？」

セイバーの切り抜けた後にとても重い斬撃が飛んで来たのか、それを受け止めていたキャスターの表情が歪み、右肩が斬れたのか右肩から血が吹き出していた。

「な、なかなかだな。流石はセイバーと言っただけの事はある」

「ほう、敵から贅美を受け取れるとは思わなかったぞ。だが、そんなもやりおる。首を刎ねたつもりで振り切ったのだがな」

セイバーは振り向いてニヤリと笑った笑みと剣先をキャスターに向けた。キャスターは特に右肩に手を抑えようとせず、傷をほったらかしにしてセイバーを見る。

「……だが、やはり運命は変わっていないのだな」

「何を言っておる？」

その言葉を言った時、キャスターから発せられていた凄まじい殺気が消えていた。

「悪いがこれ以上は戦う理由はない。失礼する」

「逃がすと思うか!!」

セイバーはキャスターが逃げると分かったのか走り出して、大上段構えでキャスターを真つ二つにするために振り下ろした。

だが、その攻撃は大気を切っただけにすぎなかった。

すでに、そこにはキャスターという人物は居なかった。

私は伏せている体を起して立ち上がった。

その時、頭にキャスターの声が響いた。

『お前たちは定められた運命を変えられるか?』

「……何を言っているの?」

『……いや、愚問だった。失礼する』

その言葉を最後にキャスターの声は聞こえなくなり気配も消えた。

私は左手を腰に付けて、はあ、と肺に溜まった熱い息を噴き出した。

「目標ロスト……ね」

「ふん、舞台上上がるにはキャスターはまだ役不足だ」

セイバーはそう言いながら特徴的な剣を一度振って、霊体化させた。

「いえ、あれは間違いなく強敵よ」

私はセイバーに近づいて、セイバーの言葉を拾って否定した。

「むっ、そのようには見えなかったが本気ではなかったと申すのか？」

「ええ。一度キャスターと鏢迫り合いをしたでしょ？その時にキャスターの事をよく観察してみたんだけど、何か“魔術”を使っていたわ。外見から見ても特に変化が無かったから多分、身体的な何かを上げることのできる部類だと思うわ。だから、キャスターとの力比べでセイバーが押されていた」

「確かにあの時のキャスターの力は並大抵のものではなかった」

セイバーは先ほどまで剣を持っていた左手を見る。鏢迫り合いの時にキャスターの力が大きかったことを思い出しているのだろう。

「あの魔弾は“魔法”ね。いえ、“魔導”かしらね。あの杖が“デバイス”だとしたら魔導でしょうし。ああ、でもこの理論はまだ固まってるないし……」

私は口に手を添えてキャスターの攻撃してきたいろいろなパターンを分析する。

「ブツブツと考えるものではないぞ。次からはあのような小細工をしてきても余の敵ではない。大船に乗った気でいると良いぞ」

セイバーが大きな顔をして笑顔で私の事を見ている気がしたが、思考の渦から抜けていない私は見ている暇が無かった。

「……はあ、余のマスターはもう少し融通かきけば美しいモノなのだかな」

セイバーは頭に手を添えて今の凜を見て、ため息を漏らしていた。

マンション

ヴィヴィオ達が訪れて料理を作ってもらい、それを皆で食べた。料理はカレーとコーンポタージュのようだ。皆で食べる時には丁度良い。

「美味しかったよ、ごちそうさま」

俺は机で食べていたカレーとスープを平らげてスプーンを置いて手

を合わせた。

「お粗末さまです」

食器を水に浸しておくために持つて立ちあがり、振り向くと喜んで
いるのかテーブルの前で元気な笑みを浮かべているヴィヴィオ達。

確かに料理は食べてくれる人が美味しいって言うてくれるのが作る
側としては一番嬉しい事だからな。

皆はまだカレーを食べているようだ。俺が食べるのが早かったから
か皆はまだ半分も平らげていない。

「これは美味しいです。ヴィヴィオ達はきっと良いお嫁さんになり
ますね」

オリヴィエは口の端の方にご飯粒を付けながらヴィヴィオ達の事を
褒めている。

「えっ!!」

「お、お嫁さんですか!？」

「そ、それは……」

「……」

何故かオリヴィエの言葉に子供たちは顔を真っ赤にさせて、それぞ
れ様々な反応をしている。

ヴィヴィオはスプーンの端を咥えながらカレーを見つめているし、
コロナは両頬を両手で押さえている。

リオは必死に目を瞑って目の前に手を出して振っている。

アインハルトはチラチラとこちらを見ながらカレーを食べている。

「フリー、ご飯粒が付いてるぞ」

「えっ、あ、ホントですね」

オリヴィエは口の端を手で触り、ご飯粒が付いていたのがわかり、それを取り口に入れた。

俺はキッチンへ行って食器を水に浸した。

「うわああああ!!」

「り、リオ!何やってるの!!」

そして、何やら部屋からリオの慌てた声と食器が粉々に割れるような高い音がキッチンに響いてきた。

俺が部屋に戻るとテーブルが倒れており床はカレーとご飯とコーンポタージュ、割れた皿で汚れてしまい、皆がカレーやコーンポタージュなどを服や髪につけてしまっている。

「だ、大丈夫か?」

「ご、ごめんなさ〜い!!」

服や顔にカレーが付いているリオが俺の事を見た瞬間、真っ先に謝って来た。

「うつつ……髪の毛がベトベトする」

「ちょっと、気持ち悪いね」

ヴィヴィオとコロナは髪にカレーが付いて服にはコーンポタージュが付いてハンカチで取るうとしながら苦笑いしている。

「……………」

アインハルトも髪にコーンポタージユが付いているが、態度に出ないようにグツと堪えて体をふるふると震えさせている。

「皆のご飯が台無しですね」

オリヴィエは服にカレーが付いてしまっているが何とも思っていないのか、服よりもご飯が無くなってしまった事にシヨックを受けているようだ。

「と、とりあえず、皆が拭くモノ持ってくるよ」

俺は脱衣所から数枚タオルを取ってくる。そして、皆に一枚ずつ渡す。余ったタオルで床に散っている食器の破片を集める。

「どうしてこんな事になったんだ？」

その作業をしつつ皆に聞いてみた。

「ゴメンなさい、ガイさん。私が無我夢中で手を振っていたらいつの間にかテーブルに体重を乗せていました。それでテーブルが倒れてちゃって……本当にゴメンなさい」

シユンと申し訳なさそうな表情をして頭を下げるリオ。何か考えていたリオが興奮してリオらしくない行動をしたようだ。そんなリオに俺はリオの頭に手を置いて軽く撫でる。

「ま、気にしてないさ。次からは気を付けるよ」

「は、はい。本当にごめんなさい」

「でも、リオは何を考えていたんだい？こんな行動を起こすまで考

えていたものだろ？」

「そ、それは！？……言えません」

最初はビックリして俺の事を見て大きな声だったが、次の言葉は頬を赤く染めて少し俯きながら俺から視線を離して、聞き取るのがやつの小さな声だった。

「まあ、いいけど……どうする？風呂でも入っていくか？」

「え、お、お風呂！？」

今度はヴィヴィオがビックリしている。コロナも同じ表情だ。

何故そんなに驚く？

それにアインハルトが瞳孔を大きくさせて俺の事を見ている。アインハルトも別の意味で驚いているのだろうか。

「髪がそんなにベトベトだと気持ち悪いだろ。飯を食べた後に風呂オに入るうと思っただから既にお湯は沸いているよ。男の俺の風呂が嫌だったら女の子のアインの部屋の風呂の方が……」

「う、ううん。せ、せっかくだしガイさん家のお風呂に。そ、それじゃあ、お言葉に甘えさせてもらおうかな」

「そ、そうだね」

ヴィヴィオとコロナは何故か嬉しそうだ。俺は皿の欠片を集めたタオルを持って、ゴミ箱へ欠片を叩き落とす。

「服はどうする？洗濯機は貸すけど」

「ノーヴェの特訓で使った体操服があるから一先ずそれに着替えようかなと考えてるよ」

「でも、制服はどうする？」

「そうなんだよね。明日も学校あるし」

ヴィヴィオは困ったように首を傾げる。

「あ、あの、私の所には乾燥機がありますのでもしよろしかったらお使いになりますか？」

と、今まで沈黙を保ってきたアインハルトから言葉が出てきた。

「乾燥機？そりやまた随分と豪勢だな」

「練習ばかりしていると服が足りなくなる時がたまにありますので」

「……それは練習のしすぎじゃないのか？」

Tシャツが汗でびしょびしょになるほど練習をして、それでも他のTシャツも足りなく程まで汗をかいて練習をしているなんてな。

口ではああ言ったが、実際はアインハルトはものすごい努力家だっ
てことはよく分かっているので凄いと思っている。

「まるで私が練習バカみたいだと思ってませんか？」

「練習量が増えるのはいい事だと思うよ。ただ、体調管理は気を付けておけよ」

「……ええ、分かっています。心配してくださいましてありがとうございます
ございます」

アインハルトは俺から視線を離してペコリと頭を下げた。俺はそれを見て微笑む。

と、何か随分と話が逸れた気がした。話を戻すとアインハルトは乾燥機を貸してくれるとの事。

「俺の風呂に入るなら入る時に洗濯機を回すといいよ。止まったらアインの部屋にある乾燥機に入れておくけど」

そう言うと、なぜか子供たちは顔を真っ赤にして俯いてしまった。

「いえ、ガイ。それは私がやっておきます」

原因が分からないままだったが、そこにオリヴィエがその役を買って出た。

「ヴィヴィオ達も女の子です。男であるガイに自分が着ていた服が洗われている事に恥ずかしいのでしよう」

「……フリーのおかげでその事に疎くなりつつあったな」

オリヴィエの羞恥心の無い行動が女性に対しての接し方を少し忘れてしまっていたかもしれない。でも、相手はまだ子供だ。そんな事を気にするのはまだ早いと思っていたが。

「女性は常に乙女心を持っているのですよ」

「フリーからそんな言葉を聞くとは思わなかったわ」

オリヴィエに一番似合わなそうな言葉が出てきて軽く笑ってしまった。

「まあ、私は……女であることをあの時に捨てましたし」

ボソッとオリヴィエが俯いて何か言った気がした。誰もそれに気付いていない様子だ。俺だけ何かを言っていたのが分かったようだ。

「あ、それじゃあ、フリージアさん。洗濯物をお願いしてもよろしいですか？」

「え、ええ、わかりました。脱いだ服は洗濯機に入れておいてください」

「それじゃあ、皆で入ろうか」

皆で！？つと、アインハルトはびっくりして高い声を上げていた。そう言えば合宿のときも川遊びのときに水着！？と大声を上げていたな。アインハルトは少し恥ずかしがり屋だ。

「……そんなに広くないぞ。まあ、子供4人なら何とか入るか」

「それじゃあ、いつちばくん！！」

「あ、リオずるーい」

「では、失礼します」

「……」

ヴィヴィオ達が脱衣所に入っていった。アインハルトは何かもじもじしながらも入って行ったが。

「まあいいや。オリヴィエ、洗濯物任せるよ。俺はこの部屋を掃除しないと」

カレーやコーンポタージュによって床が2種類の色によって汚されている。幸いにもフローリングの所だけに零れていたから、拭き取るのは容易いだろう。

「ええ、では頼みます」

オリヴィエはそう言って、脱衣所へ入って洗濯物を洗濯機に入れ始めようだ。

風呂場からはヴィヴィオ達のじゃれ合うような声が聞こえてくる。

『アインハルトさんの胸、やっぱり大きいですね。温泉の時に見惚れてました』

『え、あ、あんまり見ないで下さい』

『アインハルトさんの凄いです』

『〜〜ッ』

『アインハルトさんの髪、綺麗』

主にアインハルトがヴィヴィオ達に弄ばれているようだ。

脳裏にはアインハルトが皆からいろいろと責められているような光景が思い浮かんだ。まあ、初等科のヴィヴィオ達に比べれば、中等科のアインハルトは皆と比べて色々と育っているのだろう。

「…………さて、軽く片付けますか」

俺は今考えていた事を強制終了して掃除を始める事にした。アインハルトの裸体を想像してしまって何か罪悪感を感じたから。でも、最後に一つ思った事があった。

アインハルトは自分の部屋にある風呂を使った方が良かったんじゃないか？

「「「「本当にすみませんでした」「」」」」

「え、えーと、どうした？」

風呂から上がってきた子供たちが俺の前で横一列に並んで正座して真剣な表情をして頭を下げていた。部屋はカレーとコーンポタージュの色が無くなって元に戻り、子供たちは体操服であるスパッツ姿だ。

オリヴィエは今、アインハルトの部屋に行つて乾燥機を回しているのだろう。

「お風呂の中で皆で話していたんですが、今日はガイさんのお見舞いに来たはずなのに逆にご迷惑ばかりかけてしまっているねって」

「気にするな。こういうのも何だかんだで面白かつたし」

「で、でも、やっぱり私たちが一度謝らないとダメだと思うのです」

ヴィヴィオを労うように気にすると言ったのだが、コロナはやはりケジメをつけた方がいいと思つてるようだ。

俺は少し考えて片目をつぶりながら頭を掻いた。

「それじゃ、気持ちだけ貰っておくよ。次からは気をつけるよ。しかし、お見舞いに来てくれたのは凄く嬉しいし、料理も作ってくれた。それだけでも十分さ。まあ、最後は確かに部屋を汚してしまっただけど、その分を差し引いても十分プラスさ」

「……ガイさんがそう言うのでしたら」

しびしびと言いながらもアインハルトは頷いてくれた。

「ただいま戻りました」

そこに、皆の乾いた洗濯物を持ってきたオリヴィエが戻ってきた。今の乾燥機は早いな。

服が戻って来たことに子供たちは真剣な表情から喜びの笑みへと変わった。

アインハルトは笑みを零さなかったが。

「ありがとうございます、フリージアさん」

ヴィヴィオが代表して受け取った。そして、頬を少し赤くしながらチラチラと俺の事を見る。

「ん？着替えるのか？なら、外に出てるよ」

「あ、ありがとうございます」

ぺこりと頭を下げるヴィヴィオ。

俺は皆の表情がすぐ変わるのが面白くて笑みをこぼした。

そして、俺は一度部屋から外に出た。夜ともなると外気の空気は少

しひんやりしている。それが皮膚に刺さって冷たく感じる。

こうして“日常”を堪能できるのはヴィヴィオ達のおかげだよな。そのことには感謝しないと。

少しして、制服姿に戻ったりオが玄関から出てきて入ってもいいと言われたので部屋に戻る事に。どうやら皆、制服姿に戻ったようだ。テーブルにはコロナが皆の分のお茶を出してあったので、それを一口飲んで一息つける。そして、皆で雑談を始めた。

その一つ一つが他愛のない事ばかりだ。今日の学園での出来事、ノーヴェの特訓の話など。

だが、たとえその一つ一つが他愛のない事だとしても“非日常”に居る俺にとってその“日常”な話はとても心が休まるように感じた。

「ところで、ガイさん」

「ん？」

俺はヴィヴィオに呼ばれたのでヴィヴィオの方を見る。その真剣な虹彩異色の眼で見られていたので只事ではないと直感で思った。

「何か困ってる事があるのですか？」

「……っ！？」

驚いた事を何とか表情に出さずに押さえつけた。なのはさんやアインハルトだけでは無くてヴィヴィオにも隠し事があるって分かってしまったか。

ほんと、俺はポーカーフェイスが出来ないな。

コロナもりオも話し込んでいた内容を止めて、ヴィヴィオの言葉に

頷きながら俺の方を見る。

オリヴィエは心配そうな表情をして俺を見てくる。ここでどのように答えるのか気になっているようだ。

ここで中途半端に答えてもヴィヴィオ達が余計に心配してしまうだろう。だから、安心する言葉をかけることにした。

「困っている事はある。でも、それはなかなか解決できないモノなんだ。だから、俺がやり続けて本当に手探り状態までになったらヴィヴィオ達に相談に乗るよ」

自分でも分かっていた。ヴィヴィオ達に相談することは今後一切ないと。前にアインハルトにも言った気がする。アインハルトは少しだがこちらの事情を知っている為、もしかしたら相談に乗ってほしい時があるかもしれない。だが、ヴィヴィオ達は全く知らない。だから、嘘をつくしかなかった。

俺の言葉にヴィヴィオ達は強い笑みを浮かべて笑う。嘘をついた事に胸にチクリと痛みが残ったが日常に居るヴィヴィオ達を非日常に連れていかせるわけにはいかない。

「本当に困った事があつたら言ってく下さいね」

「ああ」

上辺面だけで俺は頷く。

「あつ、ヴィヴィオ、リオ。そろそろ帰らないと」

「もうこんな時間なんだ」

コロナが腕時計の時間を見てヴィヴィオとリオに帰るように促す。時間は夜の八時過ぎ。そろそろ帰らないと不味いだろう。

「送って行くのか？」

「いえ、大丈夫です。ガイさんはゆっくり休んでいてくださいね」

コロナが笑みを浮かべてやんわりと否定する。

そして、初等科組は帰宅準備を終わらせた。とは言っても食材の分が無いので来た時よりかは軽くなっている。

「それじゃあ、またね〜、ガイさん、アインハルトさん、フリージアさん」

「失礼します」

「お邪魔しました」

「ああ、またな」

「また会いましょう」

「お疲れ様です」

初等科組が帰り、残ったのは俺とオリヴィエとアインハルト。しかし、アインハルトは何故か不機嫌な表情をしていた。

「どうした、アイン？」

「……私だけに相談に乗ってほしかったです」

「皆で相談にのった方が解決できるものもあるからな」

「そう言う意味ではないのですが……」

はあ、とアインハルトは疲れたような表情をしながらため息をついて立ち上がる。

「私もそろそろ失礼します」

「ああ、またな」

ぺこりと頭を下げてアインハルトも部屋から出て行った。

部屋には俺とオリヴィエだけとなった。

「……嘘をつくのは辛いですか？」

「まあ、な」

片目を瞑ってオリヴィエを見る。そこには不安と心配の色が表情に表れているオリヴィエが俺の事を見ていた。

「大丈夫ですか？」

「もう何度心配された事か」

俺は何度も心配されている事実苦笑した。

「ああ。戦場というモノを肌で感じたからな。覚悟は出来てる」

「……今のガイは強い眼をしています」

俺の強い意志を持った言葉にオリヴィエは不安と心配の色が消えて優しく微笑んだ。

「ああ、よろしく頼む」

「お任せください。この拳、ガイのために」

オリヴィエが忠誠を再び誓ってくれた。俺もそれに答えるように頑張らないとな。

俺はオリヴィエの忠誠に強く頷いた。

十五話“魔術師と魔術師の交差”（後書き）

セイバーの技を少しアレンジしています。

トレ・フォンターネ・テンブステイス

・時を纏う聖者の泉

ガードして攻撃を与えると相手を痺れさせる効果を付加した技でしたが、今回はガードしただけで相手を痺れさせられるというちょっと優れたものに。

切継の攻撃の技を防御に回した技って感じてでしょうか。まあ、切継の場合は相手の魔術回路をずたずたに引き裂くけどw

トレ・フォンターネ・アーデント

・燃え盛る聖者の泉

単純に攻撃力を上げる技でしたが、今回は剣の表面に大気中の窒素を集めて固めることによって剣を重くし、それを素早く振ることでかまいたちにもハリケーンにもなり得る技。

ゲーム中のステータスアップの技を小説で書くのって難しいですよ。考えた技なんか殆ど原作技と関係ないしw

こんな感じです。

後、キャスターや部隊長はオリキャラですが皆さんの脳裏にはそのキャラがちゃんと描かれていますかね？

自分の想像しているキャラと読者が想像しているキャラがズレているようだと、自分の筆力はまだまだって事ですかね。

何か一言ありますととても嬉しいです。

では、また（・）／

十六話“現代と未来の交差”（前書き）

また三週間ぶりの更新になってしまいまして申しわけありません m
（――） m

やりたいことがありすぎてなかなか書く時間が無かった。

L y c e e に E X V S に パ ソ ゲ ー に w

…：…ほんと申し訳ない m（――） m

合間を縫ってちょこちょこ書いてはいたんですが、なかなか。

まあ、何はともあれ 16 話目入ります。

十六話“現代と未来の交差”

798 航空隊 隊舎

なのはさんの訓練が厳しく、体が動かないというを部隊長に話を通して休みをもらってから一日が経ち、俺は自分の部隊に出勤するために玄関口である自動ドアを開いて中に入った。

空調が聞いているからか外との気温差があり、中からのひんやりとした空気が五月中旬の強い日差しの中を歩いて熱くなった体を冷やしてくれる。

ゼストから受けたダメージはほとんど完治している。今まで知らなかったが俺はどうやら自己治癒能力が高いようだ。

あれほどの重傷だった傷も二日経つとほぼ塞がっている。

「おお、ガイ、来たか」

と、冷たい空気に触れてホッと一息をついて体の事を考えていた時に、玄関の隅に置いてあるソファーにドカッと座っていた人物が入ってきた俺に気付いて、とても明るい笑顔で右手を上げて声を掛けしてきた。

「おはようございます、隊長」

その人物は部隊長だった。見た目は30歳前後。長い青を一つに纏った髪に青い瞳。右頬には刀の傷跡がクロスする様に傷ついているのが第一印象で残る印象だろう。

俺はソファーまで歩いて行って敬礼した。

「ああ、別にいちいち敬礼なんてやらなくていいぜ。まだ仕事も始まってないし、楽にしとけ」

「では、お言葉に甘えて」

俺は部隊長から許可（？）が下りたので敬礼していた手を下ろして、ソファーに座って足を組んだ。

「……順応が早いな。俺の前で堂々としてやがる」
「気のせいですよ」

この人は上司という感じがしない。フレンドリーに会話をするからか、この人の前だと軍の規律を気にしなくても良いので気楽だ。

しかし、この人は確かに尊敬できる人物ではあるが一つだけ難点がある。

と、不意に機械の扉が開く音がした。俺が入ってきた自動ドアが開いたようだ。

そちらに顔を向けると2人の人物が室内に入ってきた。部隊長はその人たちを見た瞬間、ドカツと座っていた態度から一変、ソファーから立ちあがり背筋を伸ばして表情を凛々しくしてその人たちに敬礼した。

「高町教導官、ヴィータ教導官、おはようございます!!」

その声は10歳代前半のスポーツをしている少年が言葉を発するよくな爽やかさがある。とても落ち着き感を持ち始める30歳代で聞けるような声ではない。

玄関から入って来た人物は青と白を強調している教導官の服装を着たなのはさんとヴィータさんだ。肩からはシヨルダーバックを下げ

ている。

2人を見ると額などに汗をかいている。今日は五月中旬にしては猛暑日だ。

部隊長の大きな声を聞いてその2人はこちらを見た。

部隊長は思いを募らせているなのはさんと会うたびにカッコよく決めるためにこのような行動に出る。

先ほど説明した難点はここだ。なのはさん絡みになるとかなり暴走してしまうのがこの人の悪いところだ。

それさえ無ければとても尊敬できる人物なんだがな。

部隊長が立って敬礼しているのにその部下である俺がソファで座っているのもよろしくないの俺も立ち上がって部隊長の横に動く。なのはさん達もこちらに来たようだ。

「おはようございます、高町教導官、ヴィータ教導官」

「おはようございます、部隊長、ガイ二等空士」

「ああ、おはよう、部隊長、ガイ」

ヴィータさんは相変わらずぶっきら棒だ。そして、愛嬌のある笑みをニッコリと浮かべるのはさん。

ああ、なのはさん。そんな表情を部隊長の前でしてしまうと部隊長が……。

「そげぶー!」

「!?!?!?!?!」

部隊長は意味の分からない言葉を発してこの場からものすごい勢いで離脱して、曲がり角をスピードを緩めることなく曲がり見えなくなった。デバイス無しであればどの速度を出せるのが凄い。

「な、なんだったの……」

なのはさんは走り去って行った部隊長の方を向いて苦笑いのまま表情が固まっていた。

『俺はトイレに行つてくるとなのはさん達に言っておいてくれ!!』

『そんな事で念話使わないでください!てか、自分で言え!!』

念話で先ほどの不可解な行動の言い訳を言っておいてくれと来たので俺は怒鳴り返して一方的に念話を切った。

そんな念話で俺は大きなため息をついた。

「また大きなため息ついてるね。何かあったの?」

「いえ、今思えばあんな隊長でよくこの部隊が纏まったなって改めて思いまして。これまでの行動を思い出すと……ため息が」

なのはさん絡みになると暴走してしまう部隊長だが、部隊長になるためにもそれ相応の努力が必要だ。

あの年で部隊長に上り詰めたのだ。きっと俺の気づかない所で頑張っているのかもしれない。

しかし、“また”大きなため息……ね。俺はため息つきすぎかな。

ため息を少し意識しようと思っただ。

「まあいいんじゃない?あれはあれで個性が溢れているしな」

「悪い人ではありませんからね」

ヴィータさんが意地悪そうな笑みを浮かべて言っているので俺はそれに何の迷いもなく同意した。

「そっぴいやガイ。オーバーSランクの槍使いの人物なんだけどな」

と、俺の顔を見て何かを思い出したのかヴィータさんが目の前にモニターを開いてくれた。

「該当した人物はやっぱり“ゼスト・グランガイツ”一人だけだ。首都防衛隊のストライカー級魔導師」

モニターに現れたのはゼスト・グランガイツの顔写真と局に入ってからの実績などが映し出されている。

その顔写真を見た瞬間、俺は確信した。一昨日に戦った人物と同一人物だ。ランサーはこの人物で間違いないだろう。

「調べてくれたのですか？」

「仕事のついでにちよこつと槍使いとの戦い方を纏めただけだ。ガイ、お前のためじゃねえよ。あたしが槍使いとの戦い方に不慣れだから調べただけだ」

そう言いつつ、少し頬を染めているヴィータさん。

「もう、ヴィータちゃんは素直じゃないね。ガイ君のために調べてくれたんでしょ」

なのはさんがヴィータさんに小悪魔のような笑みを浮かべてくる。

「そ、そんなんじゃないやねえよ!!変な事言うんじゃないやねえ!!」

更に真っ赤になった顔でなのはさんを怒鳴る。なのはさんはそれに怯むことなく、はいはい、と受け流す。

「ガイ、勘違いすんなよ。お前のためじゃねえからな。あたしが槍使いとの戦い方をシミュレートするために纏めただけだからな」
「わかってますよ。そんなムキにならなくても」

本当だろうな、と、顔を真っ赤にしつつもその凜とした蒼い瞳で睨んで言ってきたので少し怖かった。

そして、ヴィータさんは一息つけてから再びモニターを操作する。

「戦闘訓練の映像も残っているぜ。良かったら持っていくか?」

「貰ってもよろしいのですか?」

「ま、あんまりよろしくないけど、ガイが練習熱心だからこのぐらいはしてやろうとあたしはひと肌を脱いだわけだ。ただし、こんな無理は今後出来ないからな。そのデータは大事にしるよ」

本局のサーバーから個人データをコピーするのはあまり良くない。しかし、今回は殉職している人物だったので秘匿義務はそれほど制限を受けていないのか、ヴィータさんの位だと何とか許可が下りたのだろう。

俺の位では無理なハッキングをしないと取れるものではない。そう考えるとヴィータさんの位ぐらいが少し羨ましかった。

「ありがとうございます。参考にさせていただきますね」

俺はそんな考えを頭の隅に置いてヴィータさんに頭を下げた。

しかし、ヴィータさんが持ってきたデータは俺の嘘を信じて調べてくれたモノ。やはり後ろめたさが残る。まるで騙しているような…騙していることに間違いはないか。

「お、おう。そんなに喜んでくれるとは予想外だったぜ」

顔をあげるとヴィータさんが今の俺の反応にちよつと困ったような表情を見せてはいるが、表情には嬉しそうな色も表れている。そんな表情を見ると後ろめたさというより罪悪感に近いようなものを感じた。

「そう言えば、今日のニュースもまた嵐が発生したってあったね」
なのはさんが何かを思い出したかのように言葉を出して話題を変えてくる。

「ああ、アラル港湾埠頭廃棄倉庫区画に続いて今度は廃棄都市区画の市街地の所ですね」

そのニュースは今朝見たモノだ。アラル港湾埠頭で戦闘が起こったことがねつ造されてニュースに報道しているので、毎日ニュースを視ることにした。

そして、今朝方、突然の嵐が今度は廃棄都市区画で発生したと報道されていた。その原因はやはり“聖杯戦争”だ。そこでどの組が戦闘を行っていたかはわからないがその余波が建物の崩壊を招いた事に違いはないだろう。

後でオリヴィエと捜索に行こうと決めている。

「最近多いよな。異常な気象現象」

「そうですね」

「突然に起こる嵐らしいから十分に気をつけないとね。さて、それじゃあ今日も訓練頑張ろう」

「今日こそガイの腐った根性を徹底的に叩き潰さねえとな」

「……お手柔らかにお願いします」

今日の訓練はまた一段と厳しくなりそうだ。意気込んで俺にニヤリと笑みを浮かべているヴィータさんを見てそう思った。

お昼休み

『マスター。メールが着ています』

「おう、開いてくれ」

何時ものベンチでコーヒーを飲んでいるとメールが来たようだ。

先ほどの訓練は予想通り、一段と訓練が厳しくなっていた。主にヴァイターさんが俺に厳しく接してきた気がするが。

そんな事を考えているうちに目の前にモニターが現れた。

差出人……………ミカヤ・シユベル

件名……………最近

本文……………こんにちはだな、ガイ。こうやってメールするのは初めてだ。して内容だが、最近、道場に足を運んでこないが仕事が忙しいのか？時間に余裕があればたまに顔を出してくれると嬉しいぞ。ガイのような我流の使い手との試合をしたいしな。

「ミカヤからか。珍しいな」

メールの差出人は抜刀術天瞳流の師範代であるミカヤだ。確かに最近はいろいろあつて道場に行っている暇が無かった。

不定期ではあるが毎週一回は道場に通っている俺だったが、ここ二週間ぐらい寄っていない。“聖杯戦争”を調べるために都市のあちこちの書店に立ち寄ったり、合宿が始まったり、聖杯戦争が始まったりしてしまつたから道場に行く時間が無かつたのだ。

俺は少し考えた。道場までは少し距離があるが人目が多いところにあるので聖杯戦争に巻き込まれることは少ないはずだ。

「たまには顔を出すか」

『そのほうがよろしいです』

プリムラも行くことに肯定したので返すメールを作成する。

To……………ミカヤ・シュベル

件名……………Re：最近

本文……………久々だな、ミカヤ。ああ、最近は少し忙しくてなかなか道場に顔を出せなくてすまない。今日あたり寄って行こうと思うが大丈夫か？

メールの内容を作成してプリムラに送信を命令した。少ししてメールが帰ってきた。

差出人……………ミカヤ・シュベル

件名……………Re：Re：最近

本文……………そうか。今日来てくれるか。楽しみにしているぞ。

短い文章だったが脳裏には微笑んで嬉しそうな表情をしているミカヤが想像できた。

「……………自惚れ過ぎだな」

俺は軽く頭を振ってモニターを閉じた。

ミカヤは凜として威風堂々たる態度でいてこそ、ミカヤだ。無邪気に喜んでいるミカヤは

脳裏ではイメージしづらい。たまに年相応の笑みを浮かべてはく
が。

俺は今考えていたミカヤの性格に終止符を打って、空を見上げた。
朝は快晴だったが今は少し雲が現れて快晴とはいかないが晴れだ。
そして、やはり暑い。今日は猛暑日なので日の当たるこのベンチは
座っているだけでも汗を掻いてしまう。

俺はタオルで顔を拭き、コーヒーを一口飲む。

「ここはガイ君のお気に入りな場所なんだね。こんな暑い日にもこ
こで座ってるし」

「あ、高町きよ……なのはさん」

と、そこに俺の座っている長ベンチの後ろから背もたれに手をつけ
て身を乗り出し、俺にひよいつと顔を向けているなのはさんが居た。
昼休みは“なのはさん”でいいという事なので高町教導官と言いま
うになったところを訂正した。

「まあ、ここはのんびり出来ますからね」

「うん、確かにここは落ち着くね」

なのはさんは腕を組んで背もたれに両肘をつけてベンチに体重を預
けて、前かがみになるような形になって俺を覗き込んできた。

「何か俺に用でもありましたか？」

「うん。まあ、用ってほどのモノでも無いんだけどね」

なのはさんは笑みを作って俺の方を見た。その笑みは安心感を抱け
るような優しく温かい。包容力というのだろうか。

「なんかガイ君、顔つきが変わったなって思ってたね」

「顔つき……ですか？」

「うん。何か吹っ切れたって感じで。今はとても頼もしく見えるかなって。朝見た時にちょっと思ってたんだ」

「……」

なのはさんが少し頬を染めてそれでも先ほどの笑みを絶やさずに俺を見る。

聖杯戦争での覚悟を改めて決めたからだろうか。改めて覚悟を決めた事が顔に出ているようだ。

まったくもって俺はポーカークォフェイスがダメなようだな。

だが、なのはさんのような高位ランクの魔導師からそのように言われて内心はとても嬉しかった。

「そうですか。ありがとうございます」

俺も笑みを返した。

「ほえ？別にお礼を言われるような事は言っていないよ？」

「いえ、なのはさんにそのように言われて嬉しかったので」

「え、そ、そうなんだ」

なのはさんは視線を逸らしてにやはは、と、ちょっと戸惑いながらも軽く笑った。

「っ！？」

その時、背後から何か背筋の凍るような鋭い視線を感じた。そのお

かげでゾクツと一瞬体がビククリしたようだ。

聖杯戦争の参加者の誰かが俺を狙ってるのか!?

アインハルトとカラーコンタクトを買いに行つた帰りの殺気に満ちた視線を思い出す。だが、今回の視線は殺気を感じない。

俺はなのはさんに気付かれないよう、なるべく表情に出さずに振り向く。

そこには木の影から部隊長が羨ましそうに、しかし、さらにその上から恨めしそうな色が二乗で上書きされた複雑な表情で俺に鋭い視線で射抜いてる。

聖杯戦争に関係ないと分かつてホツとしたが部隊長の持っているモノが目に入った。

右手に持つてるのって……藁人形!? こええええ!! 左手は木に隠れて見えないけど、釘でも持つているんじゃないか!?

「ん? どうしたのガイ君?」

「い、いえ、なんでもないです」

なのはさんと話している時はいつも部隊長に鋭い視線で視られていたのだから。聖杯戦争が始まって、視線に敏感になつたからこそ、今日初めて気付いた。

そして、ある意味、身の危険を感じた俺は残っているコーヒを飲みほしてベンチから立ち上がった。

「うん、午後も頑張りましょう、なのはさん」

「うん、いっぱい訓練してあげるからね」

なのはさんの悪意のない清潔な頬笑みを見て俺は午後も頑張ろうと決めた。

後ろから木に何かを叩く音が同じリズムで聞こえてくるが聞かなかったことにした。

後曰。

部隊長が一枚の写真を見せてきた。長ベンチの後ろから背もたれに手をつけて身を乗り出し、俺に顔を向けているなのはさんを後ろから……むしろ下半身に重点を置くようにローアングルで写っており、生々しい太ももがニーソックスとスカートの間で強調されて、もう少しでそのスカートの中が見えそうだった。

部隊長がもつとなのはさんに腰を低くしてと言っておけよ、と、真顔で言われたので俺はその写真をバラバラに破り捨てた。

部隊長はまだ複製していないのに、とか言っただけで血の涙を流していた。俺の部隊から犯罪者が現れるのもそう遠くない未来にあるなど俺はこのとき確信した。

ミッドチルダ南部 抜刀術天瞳流 第4道場

「久々だな、ガイ」

「久しぶり、ミカヤ。それに、悪いな。最近顔を出せずにいて」

俺はデスクワークを終わらせて、久々にミカヤの道場に訪れた。袴に着替えて今は互いに正座をして居合の試合前のように見あっている。お互いの座っている横には得物が置かれている。

「いや、それでも来てくれて嬉しいよ。ガイのような剣術とも試合たいからな」

普段は凜として威風堂々なミカヤだが今は年相応の笑みを浮かべている。

「そうか。あ、そう言えばミカヤはインターミドルに参加するんだっけ？」

「ああ。今年はガイも参加するから楽しみだ」

「え？」

ミカヤの言葉からおかしな表現があったような気がした。俺は困惑してミカヤに聞いた。

「俺が参加？」

「ああ」

「インターミドルに？」

「参加者リストにガイの名前が載っていたぞ。知らなかったのか？」

俺はその言葉に頷く。いつの間に俺は参加していたのだろうか。勝手に受付をされてしまっているようだ。

まあ、確かに“聖杯戦争”で生き残って終われば参加できなくもない。ノーヴェ辺りが勝手に受付してしまったのだろう。

「……ガイは参加しないのか？」

ミカヤが子犬のつぶらな瞳のような眼で見上げて、少し寂しそうな表情をして俺を見てくる。今日は珍しい日だ。いつも凜としているミカヤの表情がいろいろと見られる。

俺の中のミカヤのイメージが変わるな。

昼休みに思っていたモノよりもミカヤは表情豊かのようにだ。

「今の仕事が忙しくてな。それが終わる時期によっては出れなくなるかもしれない」

「そうか、仕事では仕方ないな。ガイとも大会でぶつかり合ってたかったが」

「悪い。ぬか喜びさせてしまった」

「気にするな。ガイの好きなようにするといひさ」

ミカヤは寂しげな表情をしていたが、それを奥にしまって相手を安心させるような笑みを浮かべてくる。

「ミカヤ、この荷物はあっちに置いておけばいいのか？」

そこに、道場のドアが開いて両手で段ボールを抱えている1人の少年が現れた。薄い赤のかかった短髪に薄い黄色い眼が特徴的である。

「ああ、それは向こうの部屋に置いていってくれ。後で私が整理しないといけないモノだから」

「わかった。訓練中にすまない」

そう言って、薄い赤髪の少年はミカヤに向けていた視線を俺を向けた。

「……」
「……」

俺たちは互いを見つめた。その薄い黄色の眼からは何か深い感情の色が見えているような気がした。

そして、少年から視線をそらした。

「衛宮。訓練中だ」

「あ、ああ、すまない。邪魔したな」

そう言って、その少年は一度段ボールを置いてドアを閉めて視界から消えた。

俺は一度見た少年が気になった。

あの眼に映し出されている感情の色はなんだろうか。

そして、死線を掻い潜ってきたような……初めて会ったオリヴィエの時と似ている雰囲気があった。

「どうしたガイ？」

「ああ、さっきの少年は誰かなって思ってたさ」

俺が入口のドアをジッと見ていた事にミカヤが不審に思って声をかけて来たのだろう。一応この通っている生徒たちの事は全員覚えているがあの子は初めて見た。

「ああ、さっきの少年か。あの少年は衛宮士朗。10日ほど前にこの屋敷の庭で倒れていたのを発見してな。地球という所の惑星に住んでいたようだ。どのようにしてここに来たのかはわからないが、この世界では住む場所がないと言っているのでここにある空き部屋を使わせる事にした」

「衛宮……士朗……ね」

何故かまたどこかで会うような気がした。直感というモノだろうか。

「衛宮の作る料理はおいしいぞ。今度私と衛宮が作った時に食べに来るといい」

「そうだな。機会があったら行くよ」

楽しみにしてる、と付け足して、俺は隣に置いてあるプリムラに手を付ける。ミカヤも愛用のデバイス“晴嵐”に手を付ける。

それだけで次のやる事は決まっていた。雑談は終わりだ。

これからはここに来た本来の事情に入る。

ミカヤとの試合。この道場で主にやるモノはこれなのだから。

互いに得物を持って立ちあがる。

「久々で楽しみだぞ、ガイ」
「お手柔らかに」

ミカヤが軽く微笑んで構えたので、俺も笑みを作ってそれに答え構える。久々の居合の特訓。俺もミカヤと同じく胸が高鳴って楽しみだった。

街頭
夜

ミカヤとの試合を満足に行った俺は道場からマンションへと歩を進めた。帰り道は人気の多いところを通って歩く。平日なので仕事帰りのサラリーマンやOLの人たちばかりだったが、中には変則勤務のフリーターをしているようなアクセサリーをいろいろな所に付けている若者たちも混ざっている。

「あ、ガイさんだ!!」

「ん?」

と、そこに後ろから元気な声が聞こえてきた。俺はそれに気付き振り向くと、そこに居たのはヴィヴィオ達だった。ノーヴェやアインハルトも居る。そして……

「なんで、フリーもいるんだ?」

「“ストライクアーツ”をやっていたからに決まっているではないですか」

オリヴィエも居た。

「フリージアさんは凄いなだよ。私たちの格闘が全然通用しないし」

「うん、常に先を読まれているって感じだったね」

「うう、もう一回勝負したいです!!」

「ええ、また機会がありましたら」

初等科組は今回の特訓でオリヴィエの事をとても尊敬したようだ。表情が輝いている。

「ガイもあたしたちの訓練に参加すればよかったのに」

「今日は久々にミカヤの所へ行って居合の方をやって来た」

「ああ、ミカヤさんの所に行ったのか。ミカヤさん、最近ガイが

来ないなって呟いていたからな」

「まあな。訓練前にも言われたよ」

そう言いつつ、俺は手を組んで腕を伸ばす。

「ミカヤさんって、今度私がスパーリングの相手をしてくださる人ですか？」

「ああ、まだ時期は決まっていらないが居合の達人で結構強いぞ。頑張れよアインハルト」

口を挟んできたアインハルトにノーヴェは笑みを浮かべて答える。

「ガイさんと同じ居合の達人……」

「あ？俺は達人なんてモノじゃないから。我流の居合だし」

「い、いえ、そんな事はないです。ガイさんは立派な居合の達人です！……」

「あ、ああ」

アインハルトが珍しくグツと両手を握って熱を込めて力説しているので俺はちよつと戸惑いながらも肯定する。そして、自分が熱くなっている事に気付いたのかアインハルトはハツとした表情をして頬をみるみる赤い色に染めていき視線を逸らした。

普段お淑やかなアインハルトがいろいろな表情をするので、そんなアインハルトが面白いとやはり感じてしまう。

俺はコロコロと表情が変わるアインハルトを見て笑ってしまった。

「な、何笑っているんですか？」

頬を少し染めながらもアインハルトは笑われている事に気づき眉間を寄せて怒ったような表情を見せた。

「いいや、別に」

深く関わるともつと怒られそうなので俺は軽く受け流す。アインハルトは何か満足できていない様子でジッと俺の事を見てくる。

その時、ドクンと心臓が一回跳ねた。アインハルトの視線とは別の視線が俺に向けられている。ここに居る他の人物でもないようだ。

視線には途方もない量の殺気も含まれており心臓を掴まれているような感覚に近い。

その視線は経験したことのあるモノだ。

「……ま、帰ろうぜ。今日は疲れたよ」

「そうですね。帰ってガイの料理が食べたいです」

俺はその視線で受けた影響を何とか表情に出さずに歩きだした。その視線を感じたときに一瞬だけ驚いてしまったが。

この視線にオリヴィエは気づいているだろうか。

チラリとオリヴィエの方に視線を移す。オリヴィエは俺の視線に気づき小さく頷く。どうやらこの視線に気付いているようだ。

「ガイさん、聞いてますか？」

「ん、ええと、なんだっけ？」

何かに引っ張られているような感覚を受けたので、オリヴィエの反

対側に視線を移すとヴィヴィオが俺の裾を掴んで軽く引っ張って見上げていた。

「もう、聞いてなかったんですね」

「ああ、悪い悪い。何だっけ？」

どうやら俺は上の空だったようだ。ヴィヴィオの話がまったく頭に入っていないかった。

しかし、ヴィヴィオは俺の一瞬の変化に気づいていないようだ。その事に少し安心感を持てた。

ポーカーフェイスが下手な俺でも何とか表情に出さずに出来るもんだな。

アインハルトとも視線が合った。

「……………」

だが、先ほどの怒っている表情ではなく、俺の事を見て何か複雑な表情を浮かべて困惑しているように見えた。

俺の一瞬の変化に気づいたか。前にこの視線を感じた時もアインハルトが隣に居たし気づくか。

他を見ると、俺が一瞬驚いた事に気づいていないようだ。気づいたのはアインハルトとオリヴィエのみ。

どうするかと考えつつ俺はマンションへと歩を進めた。ヴィヴィオ達と雑談して進んでいるが、背中から刺さる視線が筋肉を緊張させて冷や汗を掻いてしまう。

「ガイさん、暑いんですか？結構汗を掻いてますよ？」

「今日は少し暑いからな」

リオに指摘されたが何とか誤魔化す。今日が猛暑日でよかったと、今日の気温に初めて感謝した。

「あ、ガイ。そういえばシャンプー切れていましたよね。私が買ってきますよ」

と、突然のオリヴィエの声に俺はオリヴィエに顔を向ける。一瞬だがオリヴィエが頷いて合図をした。

「……ああ。頼むわ。小銭渡しておくよ」

「お任せください」

胸の前に握りしめた右手を持ってきて自信満々な表情で頷いた。そして、俺は小銭を預けて、オリヴィエは来た道をUターンして皆から離れる。

ヴィヴィオ達が別れの挨拶をしているのでオリヴィエは笑顔で振り返ってそれに手を振って答え、雑踏の人ごみの中へと消えていった。

「……」

見失ってもインハルトはオリヴィエが消えた人ごみをじっと見つめていた。何か感じているのか分からないが、その表情から感情が読み取れない。

そして、背中越しに感じていた殺気の籠った視線は薄らいでいった。オリヴィエに注意が向かったのだろう。

その殺気の籠った視線が薄らいだおかげでホッと一息をつける事が出来て、汗をタオルで拭いた。

しかし、こうして皆と居るのに俺だけに殺気を集中させる事が出来るのだろうか？オリヴィエはその殺気に気付いたようだ。

“殺気”は放つと四方八方に放たれて、周りの人達に降り注いでしまふモノだが、この視線の殺気の人物は俺だけにその殺気を注ぎ込んでいる。

本当に可能なのか？

しかし、現実はそのをしている人物がいる。それだけでも分かる。その人物はかなりの強敵なのだろう。

俺も後からサポートに行かないとな。そんな危険な人物にでも負けるとは思わないがオリヴィエ1人で向かわせるわけにもいかないし。頃合いを図って俺も皆と別れるか。

「……………帰ってご飯の準備をしておくか」

俺は嘘の言葉を呟いて皆と帰った。

ビルの屋上

私はガイ達と別れてビルの屋上へと歩を進めた。

ガイ達と別れてからその視線は私に向けてきている。途方もない殺気を込められており、ガイはよくこれに粘れたと思う。

常人ではこの殺気は一分と持たないうちに失神してしまうでしょう。私は戦場で殺気に対しての免疫力は付いていますので、臆することなくその殺気の発生源である場所へと歩を進める事が出来ます。

コンクリートの階段を上り、ガムテープで四方に張ってある“立ち入り禁止”と書かれている紙の付いたドアを開ける。

ドアを開けると、そこは何もなかった。四方を全てフェンスで囲んでいる。地面には長年設備を整えていないのか所々にひびの入った灰色のコンクリートの海。

植木の木やベンチも無く、何の捻りもない無愛想な殺風景で少し寂しかった。ここをデザインする設計者が悪かったのかもとも何も

考えていなかったのかはわからないが、あまり人が好ましいと思える場所ではない。だが、そのおかげで人の目に触れる事はほぼ無いだろう。

そして、その殺風景に似つかわぬモノが目の前でこちらに目を向けていた。

1人の人物。

だが、全身から漂う刺々しい雰囲気は只者ではないと直感で感じた。

この人物こそが先ほどの途方もない殺気を含んで視線を送っていた張本人で間違いないだろう。

その者の背中には大きな星が二つ輝いており、こちらから見ると相手は逆光で薄暗く見えにくく、より一層不気味な雰囲気を醸し出す道具と化している。

「何者です？」

私の声に反応したのかその者が一歩ずつ近づく。

「止まれ！！それ以上近づくな」

私は魔力で一瞬にして長年愛用している騎士甲冑の姿に変えて構える。その様子を見て相手は動きを止めてマジマジと私の事を視察し始めた。

距離は7メートル弱。そのくらいの距離なら薄暗くても相手の全体像が確認できた。

見た目は整ったセミショート黒髪で黒い瞳の30〜40歳代ぐらいの男性。上着である灰色のスーツを脱いで左腕にかけて、灰色のネクタイに白い長そでのワイシャツに袖なしの黒いセーターを着込

んでいる。

第一印象とすればこの現代の社会人に見えますね。ですが、あの者から放たれる殺気の量が半端ない。

戦場を駆け巡って殺気に対して免疫が付いていた私でさえ、あの者とマトモに対峙すると背中に冷や汗が流れているのが分かった。

原因はあの眼ですね。何か強い意志を持っているようにも見える。それが闘志となって途方もない殺意を生み出す。その意志が何かの鍵を示すのでしょうか。

「もう一度言う。貴方は何者ですか？」

「……オリヴィエ・ゼーケブレヒト……だな」

「!？」

こちらの質問には答えず、帰ってきた返答は私の質問の答えではなく私の正体の名前だった。

声には何の感情も籠ってなく機械と話しているような感覚だ。

しかし、私の事を私の名前で呼ぶなんてことはこの世界でガイとアインハルト以外に居るとは思えなかった。

情報戦はしつかりとしてきたはずだ。私が外出するときはフリージア・ブレヒトとなっているので、決して私がオリヴィエだと世間が認識を持つなんてことは無かったはずだ。

なのに目の前の男は私の正体を知っていた。カマ掛けかと一瞬思ったが、私の他にも歴史で女性の名を残す者が多数いるのでそれは考えにくかった。

何処かで情報が漏れた？いえ、そんなはずは……。

「ガイ・テストロツサのサーヴァント。クラスはファイター」

「……！！……そこまで知っているのですね」

情報が漏れている筈がないと考えていたが、どうやら相手はこちらの情報がほとんど分かっているようだ。どこから漏れたのかはわからないがとにかく目の前の男を抑えないと情報がどんどん枝分かれ状に広がって戦況が不利になっていく。

「私の存在を知りたいか？」

「“聖杯戦争”のマスターですか？それともサーヴァント？」

その男は決して表情を崩すことなく笑みもなく怒りもなく無表情のまま、しかし、殺気は消えないまま答える。

「キャスターのマスターだ」

「キャスターの……マスター……」

マスターでこれほどの殺気を放つなんて……この聖杯戦争はマスターが強すぎですね。ランサーのマスターもサーヴァントである私と対等に渡り合えていましたし。

「キャスターはそこに居るのですか？」

「キャスターは傷を負ったから休養中だ。現れんさ」

「マスターである貴方がサーヴァントである私に勝てると思っっているのですか？」

「現にランサーのマスターも君と渡り合えただろう」

「……」

キャスト組は情報が豊富すぎる。先の戦いもキャスト組に漏れている。とても危険な組だ。早急に手を打たなくてはならない。

「……」

と、キャストのマスターに異変が起こった。キャストのマスターから刺々しい雰囲気が無くなり、静かな雰囲気に変わって右腕の前に出して内側に曲げ、右手を横にして手の内側をこちらに向けるように構える。

雰囲気が変わった？

私は今までのどす黒く感じていた雰囲気からいきなり穏やかな雰囲気に変わった事に戸惑いを感じた。しかし、そんな戸惑いは一瞬だった。

私は反射的に……いえ、本能的に横へと避けた。避けた瞬間、先ほどまで立っていた私の場所に何かが高速で通り過ぎて、入ってきた後ろのドアに何かがブツかってドアが破損した。

視認している暇が無かった。あれは……なんでしょう？魔弾？それにしてもなんて速い！！

キャストのマスターは魔法陣の展開も無しに“何か”を作成して発射まで一瞬で行ったのだ。

私はその事実には驚きつつ、再びキャストのマスターを視る。キャストのマスターは特に表情に色を表すことなく、静かな雰囲気のまま私の事を見つめている。

しかし、あの雰囲気は何処かで感じた事がありますね。 雰囲気……
というよりも似たような風景に。

そんな考えもしていたが私は一先ず今考えていた思考をやめて、予備動作もなくあの速度の“何か”を撃つてくることに留意し、手甲を握りしめてキャスターのマスターを見据えて構えた。

「行きます」

私はキャスターのマスターに向かって走り出した。

マンション

俺は途中で皆と別れる事が出来ずに部屋まで戻って、先ほどの嘘の言葉が現実となってキッチンに立っていた。

部屋に戻ってすぐにオリヴィエの後を追って行こうとしたのだが、行けなかった。その原因は……俺は隣を見た。隣には……

「……………」

トントンとリズムよく包丁で野菜を切っている、制服の上にエプロンを着たアインハルトが居た。

先ほどドアの前で別れようとしたらアインハルトが何故かこっちのドアに来て、一緒に料理を作りたいと言ってきた。

俺は否定してすぐにオリヴィエの後を追いたかったが、アインハルトの瞳を見ると何か別の強い意識を持っているように見えたので否定することが出来なかった。

「……………？ガイさん？どうかしましたか？」

と、俺の視線に気付いたのか包丁で野菜を切るのを一度やめて、アインハルトは顔をこちらに向けて首を傾げて聞いてきた。

「いや、何で一緒に料理を作りたいのかなって」

「オリヴィエに料理を作りたいと思ひまして」

即答で帰ってきた。だが俺は嘘だとすぐに分かった。いや、オリヴィエに料理を作りたいと思っているのは少しはあると思うけど、それが全てじゃない。

「なら俺が居なくても料理は作れるだろ」

「そ、それはそうですが……ガ、ガイさんの作る料理も参考にしなかったのだから」

「……本当の理由は？」

「うっ……」

少し声を低くしてアインハルトの真意を確かめる。アインハルトは言葉を詰まらせて包丁をまな板に置いて顔を少し伏せた。

「……オリヴィエと別れた時、霸王の記憶に残っていた一番悲しい時の……オリヴィエと死別した時の面影が被って見えました。その悲しい気持ちが私の胸を満たされてしまっ……」

「……」

アインハルトは眼から一筋の涙を流していた。

その光景はオリヴィエの記憶を見た時のやつだろう。ゆりかごにはオリヴィエが乗る事になったあの時の光景。オリヴィエにとっても辛い記憶のはずだ。

「だから、ガイさんにどうしたら良いかなって。なかなか口に出しずらくてズルズルとしてしまいましたって申し訳ありません」

アインハルトは涙を手で拭って、ペコリと俺に向いて頭を下げた。

「……心配するな。今からオリヴィエを迎えに行ってくるから、アインは美味しい料理を準備してくれ」

「で、でも……」

ニッコリと俺は笑って頭を撫でてやり、アインハルトの気持ちを紛

らわそうとした。

アインハルトは何か言いたそうな表情で俺を見ていたが俺の笑顔を見て口を結んだ。

「……ズルいですガイさん」

「何か言ったか？」

「いえ」

ボソツと何かを言った気がしたが気のせいだったようだ。

「それじゃあ、俺はオリヴィエを迎えに行ってくるから」

「はい。では、私は美味しい料理を作って待ってます。ちゃんとオリヴィエと一緒に帰ってきて下さい。約束です」

俺は、ああ、と言ってアインハルトに料理を任せて部屋を出た。

そして、玄関のドアを閉めて夜空を見上げる。大きな二つの星が輝きが欠けることのない晴天だ。昼間の雲は移動したようだ。

俺はアインハルトの話の聞いてから胸騒ぎが収まらなかった。オリヴィエに何かが起こっているのかは分からないが急いだ方がよさそうだ。

夜道で他のサーヴァントに会う可能性もあるがオリヴィエをほっとく訳にも行かない。

「頼むぜ、相棒」

『死力を尽くします』

首に掛けてあるプリムラの心強い言葉を聞いて、俺は階段を飛び降

りるくらいの勢いで駆け下りて、夜の街へと走り出した。

ビルの屋上

視界に映るのは灰色一色のみだった。

その原因は私は今、うつ伏せになってコンクリートの味を噛みしめているような状態だったからだ。五体満足ではあるが体の腹部と背中に激痛が走る。

私は気絶しそうなその激痛に何とか耐えて顔を見上げる。眼の前にはキャスターのマスターが無表情のまま、黒い瞳で私の事を見下ろしている。

鉄の味が広がる……どうやら唇を切ったようです……ね……つつ、腹部が痛む。

だが、痛みを感じている暇はない。今のキャスターのマスターは私を死の淵へ戻す“死神”と化している。それを避けるために今私は頭をフル回転させている。

私はあの時確かにキャスターのマスターに向かって今まで共に戦って来てくれた手甲をブツける気で殴ろうとした。

その時に何かを感じた。うまく言葉にはできないが何か違和感を感じた。

そして、私の拳が当たる瞬間、キャスターのマスターは何の呼び動作もなく私の拳をかわし、上着を持っていない右手で私の腹を殴った。

その拳はとても重くて衝撃は凄まじく、中の内臓が全て外に出てしまったのではないかという錯覚に陥ってしまうぐらいだ。

その間、0.05秒にも満たない速さ。人の反応速度を超えている。

何とか僅かに反応出来て、私は後ろへ下がったがそんなのは気休め程度。

その衝撃で私の体はへの字に曲がり、キャスターのマスターは私の背中にひじ打ちを上からかまされて、私はコンクリートの海に叩きつけられた。

「“聖王女”とやらも、こんな程度か」
「っぐ!!!」

侮辱されて黙っていられるほど王家は温厚ではない。その侮辱を受けて私は激痛を忘れるくらいに頭に血が上がり、その満身創痍の体を無理やりに起こして立ち上がり大きく後ろへ下がる。

「まだ動けるのか」

「ま、まだ、始まったばかりです!!!」

私は後ろに一発の魔弾に威力を込める“聖王聖空弾”を練成した。

「だが、遅いな」

「!?!」

キャストのマスターの声が後ろから聞こえた。その時にまた何か違和感を感じたが、それを模索している暇は無く、キャストのマスターは後ろ向きで私の後ろへ回り込んでいて、後ろ襟を右手で掴んで大きく振り投げるような形で私をフェンスへと投げ飛ばした。魔弾は集中することが出来なかつたので消滅してしまった。

「がはっ!!!」

ガシャンとフェンスの音が響き、私を中心にフェンスにクォーターが出来て、礫にされた。何とか金網が外れなかつたので漆黒の闇へ落ちる事は無かつたが、目の前には右手を横にして手の内側をこちらに向けるように構えるキャストのマスターが冷酷無比な表情で今、動けずにいる私に止めを刺そうとしていた。

私はまた何も守れずに終わるのでしょうか？こんなにも力が弱いから……大した実力もないのに“聖女王”になって、武技において最強とも言われた私は過去の人物。現代の人物においても最強とは限らない。

私は……なんて弱い……。

『いや、俺はこれほどのサーヴァントが居るならとても心強いと思っただが』

でも、ガイはこんな私の事を心強いと言ってくれた。こんな私に……自分の背中を預けなければならぬ弱い私にその言葉をかけてくれて、私は温かい気持ちで籠って嬉しく感じた。そんなガイのために私は死力を尽くしたかった。

だから、こんなところでは終われない。終わるわけにはいかない！！

しかし、そう思っているも体がもう動かせるような状態ではなかった。いくら力を入れてもぴくりと動かない。そして、キャスターのマスターから“何か”が放たれた。私にたどり着くまで0.1秒もかからないだろう。その“何か”が私の活動する肉体を破壊してこの体はただの肉塊と化す。

だが、その“何か”は0.1秒たった今でも私に届く事は無かった。

“何か”は真上から飛んできた白と青の強調された人ぐらいの大きな“盾”が私とキャスターのマスターとの間に……私を守るようにして私の命を削り取るはずの“何か”を防いだ。

「……………」

キャスターのマスターは僅かに表情を曇らせ空を見上げる。私も痛みをこらえて何とか上空を見上げた。

そこに1人の人物が居た。先ほどの攻撃を防いだ盾と似ている二枚の盾を浮遊させ、そのコアであるのか剣の切っ先のように鋭く紋章のような何かか盾よりもその人物の隣で浮遊している。その人物の左手に砲撃のような銃みたいな物を手にしている。

そして、バリアジャケットなのか盾と同じく白と青の強調した服装をしている。

ですが、あの栗色のサイドテールをしている人物は……。

その人物の特徴をとらえようと見据えたが脳裏には過去にあった1人の人物が浮かび上がってきた。

「なの……は？」

浮かび上がった人物は私の複製体であるヴィヴィオの母を務めている高町なのはだった。

街頭

俺はオリヴィエと別れた場所へと向かっていた。斜め上から殺気を感じていたのである。周辺のビルの内部か屋上辺りから放っていたと予測できるので目的地は必然とそこになる。

「……人が居ない？」

俺は周りの異常な雰囲気気付いた。さっき皆で帰った時には様々な人たちが行きかっていたはずだ。しかし、今俺の周りには誰一人居なかった。

「きやは……」

何処から声が聞こえた。笑い声とも言うのだろうか。その声を聞いて一瞬、背筋が震えあがったのを覚えた。まるで相手の事をどうとも思っていないく、四肢を一つ一つ刀や剣で切り裂いていき玩具のようにして笑っているような人物が漏らす残忍な声が連想された。

少し高い声からして女性だろう。

「きゃははは。君がファイターのマスター？何か弱そうだね。心臓に〜一刺ししたら死んじゃうくらいに脆そうだね、きゃははは！！」

そして、邪悪な感情的な笑みを表情に出して高笑いしながら目の前に1人の少女が現れた。

見た目は身長160センチぐらいでブラウン色でセミショート。瞳は薄汚れているような黄色で残忍な笑みとぴったり似合っていた。服装はピンクと白のアオザイを着ている。顔も整っているので残忍な笑みが無ければそのアオザイはその少女を引き立たせて美少女になるアイテムになっただろう。

しかし、あの視線の途方もない量の殺気を放っていないことからこの人物は先ほどの殺気を含んだ視線の張本人ではないと結論付ける。今俺の事を見ている少女にも殺気を感じるが、あの視線の殺気の質とはまた異なる。

「君は何者なんだ？」

俺は高笑いしている少女に声をかける。

「私い〜？私は何だかわかる〜？」

「いや、分からないから聞いている」

「しょうがないね〜。おバカなファイターのマスター……ガイに教えてあげ・る」

ウインクしながらも残忍な笑みを隠さずにいる少女の横に人物が音もなく現れた。

「……！？あの時の！？」

その人物は全身プレートアーマーを付けており、白色の甲冑は、何の特徴もない没個性だ。

「バーサーカー！！」

「きゃは、きゃはははは。そうだよ、私がバーサーカーのマスター、トレディよ。覚えといてね、ガイ。ああ、でもこれから直ぐに死んじゃうから関係ないか。ここ一帯は人避けの結界張ったから大声出しても人は来ないしね。きゃはははは！！」

その目障りな笑い声が耳に響いて不愉快だった。

しかし、今はこのバーサーカーを相手にしないといけない。バーサーカーに集中しているので不愉快なのは二の次だ。

そして、あのトレディと名乗る少女もどんな力を秘めているかわからない。

これは絶対絶命……か。

俺は絶望的な状況下に居ると判断したので直ぐにセットアップして居合の刀になったプリムラを構える。

いや、なんとしても血路を切り開いてオリヴィエと合流しないと。

「え？なに？ガイ一人でバーサーカーと戦う気なの？随分と自分の腕に自信があるんだねえ。そんなガイを見てると私はいるんな所が濡れちゃいそうだよ、きゃはははは！！」

トレディの戯言は聞くだけ無駄だ。今はバーサーカーの情報が欲しい。

バーサーカーから放たれる禍々しく黒いオーラが凄まじい。

邪悪な思念を持っているのか？

バーサーカーを見れば見るほど分からなくなっていく。

「きやは、殺っちゃいな、バーサーカー」

更に口元を歪めて笑いバーサーカーに指示を出すトレディ。その指示によって、バーサーカーは構えも無しに俺に向かって弾丸のような速度で突進して拳を放ってきた。

俺はそれを何とか反応し紙一重で避けて、鞘走りして抜刀した勢いで横斬りを行う。

だが、バーサーカーはしゃがんで俺の横斬りを避ける。そして、アツパー気味に拳を突き上げてくる。俺はそれを半歩下がって避け、左手に持っていた鞘でバーサーカーに横振りを行った。

バーサーカーはそれも避けて、大きくバックステップを取り距離を取った。

この動き……まさか、な。

俺は刀を鞘に収めながら考えていた。このような戦闘スタイルを行った人物と戦った事があった。

「きやははは、ガイは意外と動けるのね。ちよつと惚れちゃいそ
お」

トレディの戯言は無視して、バーサーカーを見据える。先ほどの動きを見る限り、地上戦の白兵戦に特化した英霊なのだろうと理論づける。

だから、こいつは多分空を飛べないと思う。

俺はそう思って、空に舞い上がった。

「ふうん、ガイは空中戦をご所望なのねえ」

「!?!」

俺は驚いた。全身に白いプレートアーマーが付いているバーサーカーが空を飛んで俺を追っていた。バーサーカーも空を飛べるようだ。

そして、バーサーカーは右の回し蹴りを俺に向かって下から放つ。

「っぐ!!」

それを何とか鞘で受け止めるが、その間にバーサーカーの左拳のストリートが俺の顔面を下から狙っていた。

プロテクションをギリギリ発動させる事が出来たのでそれで受け止める。が、威力が凄まじく、プロテクションが壊れ俺はさらに上空へと強制的に飛ばされた。

バーサーカーも一度体制を整えて少し離れた距離に居る俺を追ってきた。

「っく、プリムラ、セカンドモードだ!!」

『了解しました、マスター』

こうなつてはまだ不安定な状態ではあるがセカンドモードで戦うしかない。俺は飛ばされながらプリムラに指示をした。プリムラはすぐに答えて、セカンドモードに移行した。

刀が光り出して、一瞬にして形を変えた。いや、形を変えたと言うよりかは“伸びた”と言った方が正しい。

赤い鞘が約四倍に伸び、刃が黒くそりが白い刀身もそれに伴って伸びている。これでは普通に抜く事は出来ないだろう。普通なら。

「行くぞ、バーサーカー」

俺は向かってくるバーサーカーに対して急降下した。そして、そのまま鞘走りを行った。人間の構造上、鞘から抜刀するためには右手と左手が伸ばせる距離までの刀身と鞘が無いと抜く事が出来ない。

そして、このセカンドモードの刀は明からに右手と左手が伸ばせる距離を超えている。どのようにして抜くか。

答えは簡単だった。

俺は鞘走りから抜刀した……鞘をバインドして。

「……」

トレディは驚いている様子が視認出来たが、俺はバーサーカーに注意を向けて、そのまま刀身の長い刀を横斬りした。

バーサーカーはそれを右腕で防いだ。

「はあああああああ!!」

しかし、バーサーカーは受け止めた刀の衝撃が強くて、手のプレートが壊れて横に大きく飛んで行った。

鞘を持つ必要が無くなった左手も柄を握っているので両手持ちで居合抜きを行ったのだ。威力が高くなるのも当然の事だ。

「へえ、なかなかやるじゃない、ガイ」

「!?!」

さっきまで地上に居たトレイだったが、いつの間にか目の前に居て、俺に踵落としを喰らわそうとしていた。

トレイも空を飛べたのだ。

「っぐ!!」

俺は両手持ちで刀を握っていたのでガードする暇が無く、踵落としを左肩にまともに受けてしまい地面へ落ちていく。

俺は必死に飛行を行い、何とか地面にぶつかること無く着地した。

「はあああ、プ、プリムラ、ファーストモードに……」

『分かっています』

息が上がっていた。やはり戦況はまずい方へと傾いている。

俺は自分の身長以上ある刀を最初の状態に戻した。

あれほど長い刀と鞘は地上で使うのはかなり難しい。バインドをう

まく使えばやれなくはないが、長いすぎるので行動に制限が掛ってしまう。

本当に空中戦で使う武器だ。

音もなくトレディは俺より少し離れた地上に降りてきた。バーサーカーもトレディの隣に降りる。

再認識したが現状は1対2だ。どちらにも注意を払わないといけなのはとてもキツイ。

バーサーカーが中距離で構えてきた。俺はなるべくそっちに留意して警戒した。正直、あのバーサーカーは何をしてくるか全く予想が出来ない。

そして、バーサーカーは拳を右拳を回転するように放った。

無数の……かまいたち!?

バーサーカーの拳からあり得ない量の真空刃が飛んできた。全ては俺を切り裂く死神の鎌と化して。

俺はセカンドモードに魔力を使ったので、残りの魔力値は少ない。その残り少ない魔力を全て絞り出して、プロテクションを目の前に展開した。

ガリガガガッ、と、プロテクションに真空刃がぶつかる音が響く。そのプロテクションにひびが入った。

「つくー!!」

そして、パリンとプロテクションが割れて、まだ新品状態の真空刃

が俺を襲う。

顔を伏せて両手をクロスして頭や心臓などの急所の部分を何とか防ぐ。しかし、その他の至るところに刀で斬りつけたのような斬り傷が
についてしまった。

魔力をすべて使ってしまったのでバリアジャケットが維持できなく、
航空部隊の制服に戻っている。
航空部隊の制服がボロボロだ。

「!?!」

俺は足に力が入らなく、片膝をつく。魔力も肉体も限界なようだ。

「あらん、ガイはもう限界ねえ。これはこれは絶対絶命ねえ。
この戦争の最初のリタイアはガイかしらん?」

何とも楽しそうな声で残忍な笑みを溢すトレディ。

「……………楽しそうだな、トレディ」
「楽しいわね。相手に止めを刺す時が何とも言えない快感よねえ。
。こいつはまるで私に殺されるために生まれてきたんだってねえ
、きやはははは!!」
「……………」

こいつは危険な思考を持っている。
人殺しを何とも思っていない。そこら辺に生えている雑草をむしり
取るような感覚で人殺しを行っている。

トレディが居るだけでも不幸になる人物は現れる。こいつは手放し
に放っておいてはいけない。

「それじゃあ、ガイ、バイバイ」

トレディはニッコリと悪魔な笑みを浮かべ、手を振りながらバーサーカーに指示を出した。バーサーカーは俺に向かって走り出し、右拳を放ってきた。

その速さは見切れたが体が限界なのか動かす事が出来なかった。

目の前には避けることのできない死の感触。

俺は死ぬのか？まだ何も成し遂げていないのに……夢を実現させないままで終わってしまうのか？

『私がガイに召喚された時からこの拳はガイの勝利のために振ると忠誠を誓っています』

不意にオリヴィエの言葉が蘇ってきた。

弱い俺のために、昔の王家で羞恥心をあまり持たず、武技において最強を誇っていた王女が勝利を誓ってくれた。その言葉を聞いた時とても心強いと思った。

『では、私は美味しい料理を作って待っています。ちゃんとオリヴィエと一緒に帰ってきて下さい。約束です』

アインハルトの言葉も蘇った。料理を作って俺とオリヴィエの帰りを待っていてくれる。

帰らないと。アインの居るマンションへ。アインとのオリヴィエと帰る約束を守らないと……！

俺は細胞の一つ一つに動けと脳から電気信号を送って、動かすことのできない体を無理やり動かし、鞘走りをしてバーサーカーの右拳に合わせて鏢迫り合いの状態に持ち込んだ。

「まだ、そんな力が残ってるの？しぶといね〜」

だが、それもただの悪足掻き。鏢迫り合いも俺が押される形になる。

「つぐ!!」

「きやははは!!早く死んじやいなよ〜」

トレディのテンションは更に上がっていた。早く俺に止めを刺したいのだろう。

しかし、突然目の前のバーサーカーが視界から消えた。俺は一瞬何が起きたのか理解できなかった。

「……………」

眼の前にはバーサーカーの代わりにフードを深くかぶって顔を晒さずに、バーサーカーに横から拳を入れたのか、正拳を放ったモーシヨンのまま立っていた。

「なにい、あんた誰え〜?」

トレディは楽しみが奪われてしまったからか声を低くして不機嫌な声になっていた。

「A a a a …… A a a a a ! ! !」

「!!!」

だが突然、飛ばされて少し離れているバーサーカーが枯れきった声で雄叫びを上げた。その雄叫びを聞いて、フードを深くかぶった人物は僅かだが何かに反応した気がした。表情は相変わらず見えないが。

「ちょ、ちよつとおバーサーカー!?何、雄叫び上げてんのよぉ」
「L a a …… A a a a L a a …… A a a a ! !」

「ええい、まだバーサーカーのコントロールがまだ安定しないわねえ。まあいいわ。ガイ、殺すのはまだ後にしてあげる。今日は引いておくから次会う時まで自分の死に際を決めといてね。焼死、水死、圧死、斬死。何でもいいわよ、きゃははは!!!」
「……………」

そして、トレディは最後に残忍な笑みをこちらに向けて、バーサーカーと共に飛んでこの場から消えた。

この場に残ったのは俺と突然現れたフードを深くかぶった人物。

こいつは何者だ?まあ、ここに居るってことはやはりこの聖杯戦争のマスターかサーヴァントか?

俺はフードを深くかぶった人物が何者か知りたかった。しかし、助けてくれたのは事実なので礼だけでも言っておくことにした。

「さつきは助けてくれてありがとう。おかげで生き残れたよ」
「……………」

その人物は決してフードを取ることも無く、俺の返事の代わりに首を

縦に振った。

「でも、君が何者かはわからないけどここに居るってことはマスタ
ーかサーヴァントか？」

「……」

だが、その質問には何も反応を示さず、俺に近づいて、手を握る。
その手はとても暖かい温もりを感じた。

傷が僅かに癒えた？魔力も少しだが回復した。

そして、その人物は手を離し走り出して、あっという間に見えなくな
った。

「悪い奴じゃなさそうだが」

俺はよく分からない人物が現れて困惑してしまった。

俺を助けてくれた上に傷を少しだが癒してくれた。敵であることに
間違いは無いのだが、ここまで敵に塩を送るとは。

「っと、急いでフリーと合流しないと」

俺は傷が少し癒えても笑っている膝に喝を入れてオリヴィエと別れ
た場所へ歩き出した。こんな状態でオリヴィエの援護に行けるかは
わからないがとにかくオリヴィエが心配だ。

ビルの屋上

しかし、何故なのがこのに？しかも合宿の時に見た武装とはだいぶ違う。

「……“アーチャー”か」

「うん、私のクラスは“アーチャー”だよ」

キャスターのマスターが質問した返答にアーチャーは自分のクラスを隠さずに公表した。まあ、左手に持っている砲撃のような銃から簡単にアーチャーだと想定されてしまっただろう。そして、その声は紛れもなくなのはの声だった。

「そして“高町なのは”か」

「まあ、この世界じゃ結構名が知れ渡っちゃっているから隠し通せないもんね」

やはり浮遊している人物はなのはだった。

なのはも英霊になっていたのでしょうか？ですが、現代になのははまだ生存している………ということはあのなのはは未来のなのは？あの武器は初めて見ますし。盾が三つに見たこともない銃。

私は何とかフェンスから体を離して、左手で右肘を押えながら空を見上げる。やはりどう見てもなのはだ。見間違えることはない。だが、その武器は見たことも無い武装だった。

「そこまでだ」

「………」

と、更にキャスターのマスターの声でもなくなのはの声でも無い、第3者の声がこの戦場に響いた。

私はその声の発生源へ視線を移した。

そこには白と黒の二本の剣を持っている薄い赤のかかった短髪に薄い黄色い眼をした少年が、キャスターのマスターの後ろから片方の剣をキャスターのマスターの首筋に切っ先を当てていた。

「……衛宮士朗か」

「俺の名前までも調べているのか」

「魔術師の端くれでもありませんが、大禁呪である“固有結界”を使う事が出来る」

「………そこまで調べているとはな」

その少年の頬に汗を掻いていたのが分かった。驚きを隠せないでいるのだろう。

「1つ聞きたい事がある」

「……何だ？」

衛宮士朗という少年がキャスターのマスターに質問した。

「あんたは何のためにこの聖杯戦争に参加している？」

「……」

キャスターのマスターは考えているのか即答で帰ってこなかったが、少し顔を伏せたのが分かった。そして、答える。

「……因縁を断ち切るためだ」

私は耳を疑った。その言葉はとても優しい声に聞こえたからだ。

いや、実際に優しいげな声なのだろう。さっきまでは何の感情もないような声ばかりだったのが、今の言葉に優しさがあつたので私は耳を一瞬疑ったのだ。

「それは周りを巻き込まないと出来ない事なのか？」

「それ以上答える義務はない」

しかし、再び何の感情もこもっていない声に戻り、キャスターのマスターは突然に動きだした。

「……」

私はキャスターのマスターが移動したその時にも何か違和感を感じていた。

うまく説明できないこの違和感は何でしょう？

そして、衛宮士朗は相手が突然動いたので手に持っている得物を急いでキャスターのマスターに振ったがただ空を斬っただけだった。

キャスターのマスターは衛宮士朗の後ろに回り込んで、背中にあのもとも重い右拳を放つところだった。

だが、それはガシャンとキャスターのマスターと衛宮士朗の間に降りてきた盾によって防がれた。

「つく!!」

「マスター!!」

キャスターのマスターは拳が届かなかったことに表情を曇らせて、空中に待機していたのは衛宮士朗の所へ急降下してくる。私の目の前にあった盾も再び動き出して衛宮士朗の所へ飛んでいく。

「同調、トレースオン開始!!」

「!?!」

だが、私は飛んでいく盾よりもあの少年の動きに驚きを隠せないでいた。手に持っていた二本の剣を手放して、素手で戦うのかと思ったら何もないとところから武器が現れた。

その武器は鞘と刀のガイが居合で使うようなモノだった。

衛宮士朗はそれを居合のように構えて、キャスターのマスターに鞘走りしながら抜刀した。

「水月”！！”」

「つく！！」

“水月”？あれは天瞳流抜刀居合“水月”か？ガイが使っていた技と同じ？

居合は抜刀の瞬間こそ最速が完成する。静止した姿に勢いが秘められているモノ。天瞳流抜刀居合は抜刀時の最速が底上げされている流派だとガイから聞いた。

キャスターのマスターは避けようとしたようだが、周りにはいつの間にか三つの盾がキャスターのマスターの進路を防ぐように囲んでいたので身動きが取れなかった。目の前だけは開いていたが、そこには衛宮士朗の抜刀術が放たれているので、避ける事は出来ない。

キャスターのマスターはそれをプロテクションで何とか受け止める。

「つく、なかなかやるな、衛宮士朗。偽善者のくせに」

「確かに俺はこのまま理想を貫けば偽善者になるだろう。だけど俺は“あいつ”のように理想を抱き続ける。夢の果てにあるモノが偽物だとしても最後までその理想を貫き通したように。“あいつ”は自分には持ちえない理想だからこそ、その尊さに涙し憧れた。借り物の理想だとしても貫き通せばそれは……」

夢の果てにあるのは偽物……借り物の理想……あの少年は何か特別な理由が多そうですね。

さまざまな思考を巡り合わせている少年がとても儂げに見えた。

「……ふんっ」

「!?!」

まただ。また何か違和感をキャストのマスターから感じた。

「なっ!?!」

「消えた……」

それと同時にキャストのマスターが消えて、衛宮士朗となのはは驚いていた。

『そんな理想を抱いているからこそ……己自身を捨てる運命になると言つのに気付かないのか?』

そして、キャストのマスターの声が脳に直接聞こえてきた。

「俺は自分の理想を貫き通す。何が何でもな」

『……お前の理想、皆が幸福であってほしい願いなどおとき話だ』

その言葉を最後にキャストのマスターの声は聞こえなくなった。衛宮士朗はそれを聞いて歯切りを鳴らしていた。

「“あいつ”と同じことを言いやがって」

「……マスター。あの人物はかなりの情報を持っていると思うよ。早めの対策が必要だね」

「……ああ、そうだなアーチャー」

衛宮士朗は歯を喰いしばっていた事に気付き、一度冷静になって、

そう言いつつ、手に持っていた刀を消した。なのはは私の方を見て複雑な表情をした。

「貴方はフリージアさんだよな？」

「……ええ。あなたはこの世界だと……未来から来たのはでしょうか？」

このなのはは私の本名を知らないようだ。そして、私の質問にこくりと頷く。

「うん、私はこの世界だと未来の人になるね」

「お、おい、アーチャー。情報を少し漏らしすぎだぞ」

「あ、マスター。ごめんね」

衛宮士郎に指摘されて朗らかに笑うなのは。

「……どうか、ガイ君をちゃんと守ってあげてね」

「わかっていきます。ですが……なのは。私は貴方と敵同士になるし、ガイも貴方の敵になる」

私は少し視線を斜め下にズラした。マスターがガイだとバレている。このアーチャーが“高町なのは”だからか？

「それはしょうがないよ。でも、もしぶつかり合う事になったら容赦しないからね」

「……望むところです」

満面な笑顔を見せてくるなのはは、やはり現代に居るなのと同じ笑みだ。

「行こう、アーチャー。ああ、それとフリージアだっけ？」

衛宮士朗はなのはを霊体化させて、私の方を振り向く。

「はい、何でしょうか？」

「ガイの理想……叶うといいな」

「……」

その問いに私はなんて答えればよいか分からなかった。

『皆が幸福であってほしい願い』

『誰もが不幸にならないような世界』

衛宮士朗とガイの願いは何処となく類似点が多かった。

「そう……ですね」

「ああ、きつと叶うさ」

衛宮士朗は笑って、ビルの屋上を後にした。

私は夜空を見上げた。大きな二つの星が戦いの始まりの時と変わらず、輝きを失わずにこのビルの屋上を少しだけ照らしている。

「衛宮士朗の理想……ガイの理想……そして、私の理想……」

しかし、そんな光景など頭には入らず私の心中はかなり複雑だった。

俺はオリヴィエと別れた場所までやってきた。先ほどは人避けの結果を張っていたとトレデイが言っていたので人はいなかったが、ここはまだそれなりに人がいるようだ。

「どのビルだ？」

俺は周りを見渡す。ビルが道路に沿って延々と並んでいる。それを一つ一つ調べるのはかなり骨が折れる作業だ。

「ガイ……」

「ん？」

そこに、後ろから聞き覚えのある声が聞こえた。しかし、その声に

は何か覇気が無い。振り向くとオリヴィエが居た。

オリヴィエが生きていた事に俺はホツとした。

「……………無事か？」

「ええ」

だが、やはり覇気が無く元気も無さそうだ。こんなに落ち込んでいるオリヴィエを見るのは初めてだ。

「……………とりあえず、帰ろうか。アインが待ってる」

「アインハルトが？」

「美味しい料理を作っているってさ」

「そう……………ですか」

俺は人がまだ行きかっているここでいろいろ聞くのも良くないのでマンションに帰る事にした。オリヴィエも俺の後をついてくる。

今日の事を互い話し合わないと。俺の出来事も濃厚な内容だったが、オリヴィエの方が上かもしれないしな。

マンション

俺とオリヴィエはドアの前に立っていた。

「アインが居るんだ。そんなしけた顔はするなよ」

「ええ、分かっています」

オリヴィエは笑顔で答える。だが、まだ考え事をしているのか少し表情が浮かない。

「……開けるぞ」

「はい」

俺は少し心配したがいつまでも玄関前に立っているのかもしれないので、ドアを開けた。

「ただいま」

「ただいま戻りました」

そして、中からアインハルトが出迎えてくれた。

ここは俺の部屋なんだけどな。

とりあえず、俺はアインハルトとの約束が守れたことにホッとした。そして“ただいま”の言葉に返してくれる言葉がとても温かった。

「お帰りなさい” ガイさん、オリヴィエ」

「アインハルト、お腹が空きました。ガイがアインハルトが美味しい料理を作ってくれると聞いたので楽しみにしています」

「はい、テーブルに並べてあります。皆で食べましょう」

俺とオリヴィエは日常と非日常の拠点となる俺の部屋へと戻った。

十六話“現代と未来の交差”（後書き）

士郎さんが正式にマスターとし登場しました。

トレディと言うマスターも登場しました。

未来のなのはさんがサーヴァントとして登場しました。

やりたいことにまっしぐらな作者です、はいw

しかし、キャスターもキャスターのマスターもバーサーカーもフィドを被ったキャラも未だに謎めいているキャラですけどね、フラグだと思ってくださいね。

そこまで俺の筆力で書けるかは分かりませんが。

何か一言感想がありますと、とても喜びます。

では、また（．．）／

十七話“学園と非日常の交差”（前書き）

こんにちは。ガイルです。

週末に上げる予定でしたが、半年に一回の恒例イベントのために東京ビックサイトに行ってきたので上げている暇が無かったorz

ネタ探しにvivid本を買いに行ったら10冊ぐらいあったから良かった良かったw

色々イメージしやすくなりました。

……はい、どんな言い訳をしても投稿が遅れていたことに関しては誠にすいませんm(____)m

では、17話目入ります。

十七話 “学園と非日常の交差”

S t . ヒルデ魔法学院 中等科 教室

「え、ですから i を使った虚数式は……」

先生が黒板に高等科ぐらいに習う虚数の i を使った数式を書いている。生徒達もその授業に真面目に取り組んでノートにその数式を写していた。

普段、ふざけている生徒もこの日はとても真面目になる。いや、真面目で無くても真面目なふりをしていなければならない。

「……」

私ことガイ・テストロッサは何故かこの S t . ヒルデ魔法学院中等科の教室で一番後ろに立つてぼんやりと黒板を眺めている状況に立たされている。

周りにはこのクラスの生徒たちである親御さん達がひそひそ話をしながら授業を見学している。

そう、今は授業参観なのだ。子供たちが学校でどのような生活態度を送っているのかを授業の時に親御さんは見学して確認するための行事。

ふざけている生徒も親が後ろに立っているとみると、後で何を言われるか分からないから真面目なふりをするわけだ。

「あの〜貴方、とても若そうに見えますけどどちらのお子さんのお父さんですか？」

「いえ、兄です。両親とも仕事が忙しいので代わりにアインの事を見学しに来ました」

隣に居た化粧をして小綺麗な恰好をしている親御さんに疑問の色を表情に出して、授業の邪魔にならないように小さく声で俺に問いかけてくる。

確かに周りの親御さん達は見た目でも3〜40歳代の人たちだと分かる。その中でも俺は18という成人にもなっていない年なので見た目からしても少し浮いているのだろう。親御さん達から見れば疑問に思う事だろう。

周りの親御さんもちらちらと俺に視線を向けてくる。

「アインってアインハルトちゃん？あの窓際に居る可愛い子のこと？」

「ええ、あの子ですね」

その親御さんが窓際に視線を移したので俺もつられて窓際に視線を移す。

後ろ姿だが、背もたれに背を付けず姿勢を正したアインハルトが真剣な表情で授業を受けている光景が視界に入る。

文武両道と言っていたアインハルトは“文”においてもしっかりとしているようだ。

「家の子はアインハルトちゃんが好きなのよね〜」

「は、はあ……」

どうやらクラスの中にアインハルトに好意を持っている生徒が居るようだ。確かにアインハルトは顔も整っているし、物静かだし、成績も優秀だ。モテる理由はいくつもある。

「それにしても、あの子本当に可愛いわよね。あの赤くて大きなリボンもとっても似合ってるし」

「アインはクラスでモテているのかも知れませんね。それは兄としてちょっと嬉しいし、ちょっと嫉妬したりもしますけど」

いかにも兄妹っぽい話をしようと俺は頭の中で必死に言葉を探して会話に出す。

「ふふ、兄弟愛か過保護なお兄さんってやつかしらね。でも、それにしても貴方、本当にアインハルトちゃんのお兄さん？髪も眼の色も全然違うけど？」

「自分は養子なんです」

「あら、そうだったの？」

隣に居る親御さんと小声で雑談を続けた。

で、なぜ俺が授業参観でアインハルトの親の代わりにここに居るかというと、昨日帰って来た時にアインハルトからこんな話があったからだ。

マンション 夜

「授業参観？」

「はい」

俺とオリヴィエは俺の部屋に帰ってアインハルトの美味しい料理を食べて、一息ついていたところにアインハルトから授業参観の話を持ちかけてきた。

そのアインハルトは座って、少し頬を赤く染めて視線を斜め下に逸らし体をもじもじとしている。

「あ、あの、もしよろしければ……ですが、ガイさん、来ませんか？」

「ええと、アインの親御さんはどうしたの？」

「……あ、え……えと」

何やら言いにくそうな表情を見せてくるアインハルト。そう言えば海岸第六警防署でノーヴェと喧嘩両成敗にした時にアインハルトの親が来なかったとノーヴェから聞いた。

という事はアインハルトの親は……。

「ああ、悪い。失礼な事を聞いた」
「？」

アインハルトは先ほどの表情から一変、戸惑いの色を表情に出して首を傾げて俺を見上げてくる。

俺はアインハルトと親の話はやらないようにしようと思った。

そして、いろいろと表情を変えてくるアインハルトがやっぱり面白いと感じてしまう。そこに笑いの表情があれば一番良いが今のアインハルトにはそれが無い。

アインハルトは周りのクラスメイト達には親が居るから羨ましく思っているんだろうな。親たちと話をしているクラスメイトを見て寂しい気持ちが残るんだろう。それを感じたくないために俺を授業に呼ぼうとしているのかな。

「まあ、明日は土曜日だし俺でいいんなら行くよ」
「……はい。ありがとうございます」

俺から了承の言葉を受け取ったからか、アインハルトはその場で頭を下げた。そして、再び頭を上げて今度はオリヴィエの方を見る。

「あのオリヴィエも良かったらどうでしょうか？」
「……いえ、私は……」

今まで沈黙を保って俺たちの会話を聞いていたオリヴィエが少し重みのある沈んだ声で声を出した。

「すみません、アインハルト。明日は大事な用事があるので私は出る事が出来ません」
「そう……ですか」

オリヴィエも表情が少し硬く元気がない。

玄関前ではアインハルトの前でしけた表情はやめると言ったただけどな。
理由は分からないがああ殺気を出していた人物と何かあったのだろう。

そして、元気がないオリヴィエに行けないと言われ、残念そうな表情で顔を伏せるアインハルト。

「俺が明日行ってやるから、そんな残念そうな表情をするなよ」

そんなアインハルトを見ると何とかしてやりたいと思っけししまい、アインハルトの頭を撫でながら笑みを向ける。

「こ、子供扱いしないで下さい……」

口で否定しながらも頬を赤く染めて俺から視線を離す。俺の手を振り払わない限り、まんざら子供扱いされても嫌でもなさそうだ。

「で、では、明日、四限目の時間帯に来てください。一応、私の兄として振舞ってください」

そう言つて、アインハルトは俺の手から離れて立ち上がり、赤面のまま逃げるようにして俺の部屋を後にした。

「兄”……ね」

そのフレーズにはヴィヴィオ達に言われてちよつと違和感が残つたのを覚えている。明日がちよつと不安になった。

ついでに玄関からまた何かがぶつかった音がした気がするが気のせいとしておこつ。

「なので、虚数という i は二乗するとマイナスになるのです」

ああ、そういうえばこんなのやったな。

俺は隣に居た親御さんとの雑談を終わらせて、再び黒板に書かれている数式を眺めていた。

存在しない数字“？”を使った数式だ。

通常、数字はマイナスでも二乗することでプラスになる。だが、虚数という？は二乗したらマイナスになる存在するはずのない数字だ。訓練校の高等科に出てきた公式だ。今ではノートを見返さないと確信が持てないぐらいにおぼろげな公式だったが黒板を見て、確信が持てた。

と、そんな事を考えていると教室のスピーカーから鐘の音が鳴り響いた。

「ん、もうそんな時間か。では、今日はここまで。宿題ちゃんとやっつけよ」

鐘の音が鳴り響き、教師は教卓の上にある書類を整理して授業の終わりを告げた。教師が出ていくと、静かだった教室は緊張の糸が緩んだ生徒たちの雑談の声で活気が溢れた。

親たちも教室から出て行ったり、自分の子供に声をかけたりして雑

談の活気は更に大きくなった。

俺も行事が終わったし帰るかなと考えて、ふと、アインハルトの居た席を見ようとそちらに顔を向けると、いつの間にか目の前にアインハルトが俺の事を見上げて立っていた。周りからも視線がちらちらとこちらに向けられている。

あの人誰？とかアインハルトから近寄っていきなんてとかが聞こえる。

まあ、アインハルトは物静かでありちょっと内気な女の子でもあるから自分から寄って行く行動が珍しいのだろう。

「お昼です」

「ん？ああ、確かに四限目が終わったからお昼休みだな」

「ええ」

「俺は授業参観も終わったことだし帰ろうかなと思っているんだけど」

「……？いえ、まだ授業参観は終わってませんよ」

「え？」

授業参観は終わっていない？という事だ？確か今、授業が終わったはずだよな？

俺が疑問が湧いて首を傾げるとアインハルトは何かを思い出したかのように申し訳なさそうな表情をして視線を右下にそらした。

「も、申し訳ありません。昨日は確かに四限目に来て下さいと言いました、授業参観はお昼休みを挟んで四限目と五限目にあるので、まだ終わっていません」

「あ、そうだったの？」

どうやらこの学院の授業参観は二限分あるらしい。アインハルトは俺に視線を戻した。

「それにお昼休みに親子がコミュニケーションを取るのも目的の一つらしいです」

「なるほどね」

ああ、それには確かに納得できる。最近、子供への虐待行為を行っている親が増えてきているとニュースで見た事がある。その原因はやはり親と子のコミュニケーションがうまく取れていない事も原因の一つだと言っていた。

「ん〜、となると飯を持ってきてないな。アイン、ここに学食や購買部なんてものはあるのか？」

まあ、アインハルトとのコミュニケーションはひどいわけではないと俺は思っているのですがその話は横に置いて、今は午前で終わると思っていた授業参観が午後にもあると聞いて、お昼ご飯を用意してこなかった現状をどうしようかとアインハルトに問いかける。

すると、アインハルトはとても言いにくそうな表情で頬が赤くなっ
ていき、先ほどよりもさらに右下に視線を再び逸らした。

「も、もしよければですが、私のお弁当を食べませんか？」

「ん？アインの？」

「え、ええ」

アインハルトのお弁当を二人で分けるとアインハルトの分が少なく

なってしまう。今が成長期のアインハルトなのだから食事はしっかりと取った方がいいだろう。

しかし、そんな表情で問いかけられるとその好意を断るに断りづらい。

「そうするとアインの食べる量が少なくなるよ？」

「あ、え、えと、ガイさ……兄さんの分も作っておりますので大丈夫です」

俺の事をガイと呼ぼうとしたアインハルトは訂正してお兄さんと言い直す。どうやら俺の分も作っていたらしい。

“兄”のフレーズを聞いて背中が少しムズムズしたけど今は考えないでおこう。

「……用意してくれたのなら頂こうかな」

「はい」

アインハルトは俺が食べる事になって嬉しかったのか、急いで自分の席に戻って弁当を鞆から取り出す。

しかし、五限目にあつた事を忘れて弁当は用意してくれて……わざととか？

ちょっと疑問に思ったが、アインハルトは天然だと思ってその考えを終わりにした。

そして、アインハルトと話を始めた時に感じた生徒たちの視線は今は俺に集まっている。男女問わず、俺の事に関しての話し声が聞こえる。賛否両論だが。

「あれがアインハルトさんのお兄様？あまり上品では無さそう」
「でも、あの物静かなアインハルトさんとは仲が良さそうですね」
「アインハルトさんとは全然似ていないわね」
「あのアインハルトさんがあそこまで気を許せるなんて……その兄の立場を寄せ」
「顔が赤くなっているアインたん、マジ天使」
「アインハルトさんの兄か……一度ご挨拶をしておくかな。そして、その背後から……くっくっく」
「俺のアインたんが……！」

特に男子生徒たちからは批判の声が耳に入る。てか、最後の奴、アインハルトはお前のモノではないよ。
俺は乾いた笑みで表情が固まっていたのが自分でも分かった。アインハルトはやはり人気者のようだ。

「お待たせしました……兄さんどうかしましたか？」

弁当箱を手に持って戻ってきたアインハルトが俺の表情を見て疑問を投げかけてくる。

「……いや、何でもない。それじゃ、行こうか」
「え、ええ」

俺は年下でもある生徒達に殺気に近い視線を向けられたので、その場を逃げるために疾風の様に素早く教室から出ていく俺をちょっと戸惑いながらもアインハルトもついて来た。

出て行った後の教室の雑談がさらに大きくなったのはきつと気のせいだろう。

後から聞いた事なのだが、どうやらこの学園には非公認のインハルトのファンクラブが存在しているとの事。

アイドルに近い存在のインハルトなのだと分かった。

中庭

この学園の中庭には大きな木があり、その下の木陰になっている何個かのベンチが今の暑い時期に外に出るには涼しい場所だ。

毛虫とかの虫が落ちてこないらしく、定期的に薬剤を巻いているのだらう。

そのベンチの1つに俺とアインハルトは座っていた。

「木漏れ日がいいな」

俺はベンチから日の光を手で軽く遮って真上を見上げる。木々から漏れる日の光が何とも言えない幻想的なモノだ。

うちの隊舎のベンチの裏にもこんな大きな木があれば良かったんだけどな。

「そうですね」

隣に居たアインハルトも俺と同じような姿勢で見上げる。

少し風が吹けば葉と葉の擦れる音がまた良い。

「さて、飯でも食べるか」

「はい、お口に合うか分かりませんがどうぞ」

俺は視線をアインハルトに向ける。膝の上には弁当を包んである布を開いて、同じ形の弁当箱が二つ並んでいた。

アインハルトはそのうちの一つを俺に渡してくる。

「ありがと。んじゃ食べるか」

細丸いピンクの弁当箱の蓋を開ける。中は許容量の半分がご飯で詰

められて、卵焼きにタコのように切ったウィンナー二つ、そして、野菜炒めが詰められていた。

おかずの色が様々なので見た目がとても美味しそうだ。食欲をそそられる。

「いただきます」

「はい、いただきます」

俺は箸を持って、卵焼きを挟み口に入れる。アインハルトは自分のを食わずに俺の方を見ていた。どんな感想が聞けるのか気になるのだろう。

「うん、美味い」

「ほ、本当ですか？」

「嘘はつかないよ」

美味しい事が嘘でないとわかり、ホッと一息ついて自分の料理に手を付けた。

お世辞抜きでうまいのは確かだ。アインハルトは料理の腕がある。

「卵焼きにはやっぱりマヨネーズと水を入れているのか？」

「はい、ふつくらとした卵焼きを作りたいと思いましたので」

「うん、美味いわ」

アインハルトの卵焼きはやはり美味い。ご飯が進む。

「これならいい嫁さんになれるよな」

「むぐっ!?!?」

ご飯を食べていたアインハルトは俺の言葉に喉を詰まらせてしまい、急いで紙パックのジュースに挿してあるストローを口に付ける。

「だ、大丈夫か？」

俺はアインハルトの背中を軽く擦ってやる。アインハルトは口を右手で押さえつつ、左手で大丈夫だと手でレクチャーして真っ赤な顔をしたまま呼吸を整える。

そして、喉を鳴らして一呼吸を入れて未だに顔が赤いまま俺の方を睨みつけるように見る。

「へ、変な事言わないで下さい」

「……？何か変な事言ったか？」

「……いいいお嫁さんになれる……とか……」

最後の方の言葉が小さくなって聞き取りずらかったが何とか拾えた。

「変な事か？」

「……べ、別に変ではないですが……」

アインハルトは自分の言っている事が正論では無いと思い始めたからか、少し俯いて視線を逸らす。

「だろ？別に変なことではないと思うぞ」

「そ、それは確かにそうですが……」

アインハルトは語尾を濁して何か納得のいかない表情で考え込んでしまう。

「あゝ、そう言えば昼ごろに帰ると思っていたからフリーに昼飯を作って無かったな」

「え、そうだったんですか？」

アインハルトは納得していない表情から一変、オリヴィエの話になると俺に顔を近づけてきた。

相変わらずオリヴィエに対しては興味津々のようだ。これもアインハルトの中の覇王の血が原因だろう。

「まあ、最近のフリーは食事を作る事が出来るから大丈夫だとは思うけどな」

「なら良かったです」

お粥を作ってくれた事があったが、キッチンを見ると荒れ果てた戦場になっていた。

次の日の朝のキッチンの掃除が大変だったのは覚えている。あれは誰も教えていなかったからで、今は俺が簡単な料理のモノは教えているから今は大丈夫だ。

俺たちは雑談をそこそこに弁当箱に視線を戻して箸を進める。沈黙が続いたが居づらい雰囲気ではないので黙々とアインの料理を口に運ぶ。

「ガイさん」

「ん？」

少ししてアインハルトから声を掛けられた。

「ガイさんは何故親元から離れて1人暮らしをしているんですか？」

「えっ……」

意外な話に俺は一瞬言葉を詰まらせた。この沈黙を破りたいから何かを話そうと無意識にか気になっていたモノを話題にして振って来たのかもしれないが、その話題はちよつと困った。

「あ、言いたくなければ別に……」

「そういえば、アインには1人暮らししている理由を話していなかっただけかな」

「え、ええ」

俺は弁当箱に箸を置いて姿勢を正しているアインハルトを見る。アインハルトも静かな雰囲気を出してこちらに視線を向けていた。

「まず一つの訂正があるんだけど、俺は親元から離れたわけじゃないんだ」

「え？」

「気づいた時には孤児院に居た。園長から聞いた話だと玄関前に赤ん坊の俺が捨てられていたらしい」

「あ、す、すいません……変な事を聞きました」

「俺は気にしてないし、別にアインが謝る事じゃないよ」

アインハルトが悪いことを聞いたと思ったのか謝り始めたので俺は気にするなと声をかける。

「そんな訳でずっと孤児院生活を送っていたけど、10歳頃にいつまでも迷惑をかけるわけにいかないと思い始めた」

「い、意外と幼い時から自立心をお持ちなのですね」

「意外は余計だけどな」

俺が笑いながら言い返すとアインハルトは慌てて顔を真っ赤にして謝り始めた。まったくもってアインハルトの表情がコロコロ変わるのが楽しくて仕方ない。

「で、その頃に孤児院に魔力検査の人たちが来たんだ」

その楽しみもそこそこに話を戻す。

「リンカーコアの異常がないかを調べる行政機関の人たちですね」

「ああ。俺もそこで初めて魔力検査を行った。魔力の色は黒、ランクはE。魔力制御は安定しているので問題なかったんだが、魔力の色に機関の人たちは驚いていたよ」

「確かにガイさんの魔力の色は珍しいですよね」

「まあな。そして、その話が時空管理局に渡って訓練校にお呼ばれする事になった。訓練校は全寮制だし、卒業すれば軍で働けるから食いぶちに困らないしな。園長達に迷惑をかけたくない……そんな理由で1人暮らしを始めたようなものだ。そして、今に至るって感じかな」

「……ガイさんはしつかりしていますね」

そりゃあどうも、とアインハルトに相槌を打つ。

「もし……もし、今親に会えるとなりましたらガイさんはどうしますか？」

「……もし、か」

俺は地面を見るように視線を移して膝に肘を置いて手に顎を乗せて少し考えた。

もし、今親に会えることが出来るとしたら……俺は……。

「一発殴るかな」

「ええっ!？」

俺は再びアインハルトに視線を向けて笑いながら思っていることを言葉にした。

ビックリした声を無意識に出してしまった為か、その後すぐに口を押さえて周りを見る。今は周りに生徒が居ないようなので誰にも聞かれていなかったようだ。

その事にアインハルトはホッと一息つけて、少し頬が赤いまま俺に視線を戻す。

「いや、だって、生まれて間もないのに孤児院に捨てられていたんだから一発ぶん殴りたいだろ。何で俺の事を捨てたんだって」

「そ、そう言うモノでしょうか？感動の再会をするかと思っただけですが」

「親の顔なんて知らないんだ。あっても親だと実感が湧かないと思う。まあ、殴った後はたぶんアインの言った感動の再会をするんだろっね」

「そうだと思います。それが親子の形ですよ」
「……」

アインハルトはそう言って、少し儂げな表情で木漏れ日が射す空を見上げた。

その悲しみが入り混じっている儂げな表情を見ると不安な気持ちがかみ上げてくる。

アインも親が恋しいのかな？聞けない事だけど、アインの親は既に

お亡くなりになっている可能性が高いしな。今日の授業参観に来れないのもその可能性が高い。

「あ、ガイ君とアインハルトちゃんだ」

そこに、聞きなれた声が校舎から中庭に入るドアから聞こえてきた。

「ガイとアインハルトだ」

「こんにちは!!」

そちらに視線を向けると、ヴィヴィオとなのはさんとフェイトさんがいた。

なのはさんとフェイトさんも他の親御さんと一緒に服装をバシッと決めている。

特にフェイトさん。なのはさんは他の親御さんみたいに軽い服装なのだが、フェイトさんは黒いサングラスを胸元にかけて、ハイヒールに黒いストッキング。タイトスカートの切れ端から黒ストッキングを掴んでいるガーターベルトがちらちらと見える。

とても授業参観にきた親御さんの服装とは思えないんだがな。

そんな視線をなのはさんが気づき悪戯な笑みを向けてくる。

「そんなにフェイトちゃんの服装が気になる？特にこのタイトスカートの切れ端から見えるガーターベルトが気になっちゃうよね」
「ぶっ!?! な、なのはさん!へ、変な事言わないで下さいよ!!!」

今思っていた事がなのはさんの言葉で全て外に出てしまった。

「ふえ？ガ、ガイ……そんなところを見てたの？」

フェイトさんは顔を真っ赤にしながらスカートの上端を手で押さえてガーターベルトや見えている太ももを隠す。

「いえいえいえ！そんなこと思っただけです！」「

「早口で言うと自滅しちゃおうよ」

天使な笑みを向けてくるのはさんだが表情が笑いをこらえるのに必死な顔をしていた。

「……ガイさん」

「ガイさん」

そして、なのはさんでもなくフェイトさんでもない、俺の名前を呼ぶ低い声が前と後ろから聞こえた。

前にはヴィヴィオが、後ろにはアインハルトが何かに対して怒っているような表情をして俺を見上げている。

「ちょっと大変そうだね、ガイ君」

そんな中でもなのはさんは天使的な笑みを崩さずにいた。怒っているヴィヴィオとアインハルト、笑みを向けて笑いを堪えているなのはさんに顔を真っ赤にしているフェイトさん。この変な状況に俺は苦笑するしかなかった。

「なのはさんも聖杯戦争に参戦している？」

「ええ。正確には“未来”なのはですが。クラスはアーチャーです」

アインハルトに明日授業参観に行くと言って、帰ってからオリヴィエと聖杯戦争の事を話しあった。そして、なのはさんが参戦している事を聞いて驚きを隠せないでいた。

「あの殺気を放っていた人物がなのはさん？」

「いえ、あれとはまた違う人物がなのはですね。それにマスターは“衛宮士朗”という少年です」

「衛宮……士朗……」

さらにそのマスターはミカヤの道場に居た衛宮士朗だと言う。瞳に映っていた感情の色が分からなかった少年だ。

「何故かまたどこかで会うような直感はしていたがまさか“聖杯戦争”で会う事になるのか。」

「どちらも衝撃的な事実で表情を隠せないでいた。」

「何か心あたりでも？」

「俺がなのはさんだけではなく衛宮士朗の名前にも反応したのが分かったのかオリヴィエは問いかけてくる。」

「俺の通っている道場に衛宮士朗がいる。まさかマスターだったとは……これからは道場に行きづらくなったな」

「相手もガイの事を知っているようだったので道場に行くのは控えられた方がよろしいかと」

「ミカヤと衛宮士朗の料理を食べてみたかったけどな」

「今度、ミカヤと衛宮士朗が作った料理にお呼ばれしようかと思っただけど、それが叶うのは多分無いかな。」

「……俺の事を知っているのはなのはさんが居るからか？」

「かも知れませんが。推測の域は越えられません」

「“未来”のなのはさんがいるから俺の事を知っているのかも知れない。しかし、疑問が浮かび上がる。」

「もしそうだとすると、“現代”のなのはさんが俺が聖杯戦争に参加しているってこと知らないといけない」

「確かにそうですね」

そう、俺がこの聖杯戦争に参戦している事を知らなければ俺の事は分からない。俺が事をどのようにして知ったのかはわからないが、この推測が正しいと……

「“現代”のなのはさんがマスターなのか、それとも何かの理由で巻き込まれたか」

「可能性は無いとは言い切れません。“現代”のなのはにも注意を払ってください」

「……あまり敵として意識したくないんだけどな」

“現代”のなのはさんも聖杯戦争に関係があるのかもしれない。

「それにガイの事を知っていたのは士朗たちだけではないようです」
「あの半端ない殺気を出していた人物の事か？」

「はい。その人物はキャスターのマスターと名乗っております」

私の真名も知っていましたしマスターがガイだと言うことも」

「……情報が駄々漏れだな」

どうやら俺の事を知っているのは士朗たちだけではないようだ。キャスター組もかなりの情報量を持っている。それにオリヴィエの事も知っている。

「それにキャスターのマスターはなのはも衛宮士朗の事も知っている素振りを見せていました」

「キャスター組は要注意しないとダメか」

俺は肘をテーブルに乗つけて手首に顎を乗せてキャスター組に対して考え込む。

「ええ。そしてマスターとは思えないほどの実力を持っています。私では敵わないほどに」

「……マジか？」

「……ええ」

オリヴィエも敵わないほどの人物がマスターで参戦している。キャスターのマスターもランサーのマスターもサーヴァントであるオリヴィエと渡り合える。なんて規格外な人物たちだ。

そして、今のオリヴィエはとても申し訳なさそうな表情をしている。

「私が弱いばかりに……申し訳ありません」

オリヴィエは自分の弱さに気持ちが沈んでいるのだろう。表情が暗くなっている。

「……いや、オリヴィエは強いよ。ただ相手が悪かったただけだ。そんなに落ち込むな。俺はオリヴィエの事を強いと思っているから」

「……ガイ……ありがとうございます」

オリヴィエの表情から少し暗さが無くなった。俺だけではまだオリヴィエの落ちこんだ事柄に対して拭いきれないだろう。だけど、落ち込んでいる時も近くに居てやるのも必要だと俺は思う。

俺はオリヴィエに笑ってやった。それだけでもきつと違うだろう。

「だけど、キャスターのマスターは俺を狙っているかもしれないな。あの殺気は俺に向けられていたものだし」

「ええ。キャスター組は警戒を怠らないようにしましょう」

俺はああ、と答えて今後の動きについて話し合った。

「はい、ヴィヴィオ。お弁当だよ」
「ありがとう。なのはママ」

俺とアインハルトが座っているベンチの隣のベンチになのはさんとフェイトさんがヴィヴィオを挟むように座ってお弁当箱を広げていた。その光景はやはりほのぼのとした家族に見える。

やはり温かな食卓を家族で囲めるのはちょっと羨ましくも思える。

「“未来”のなのはさん……か」

「……？何か言いました、ガイ？」

俺は仲の良い三人家族を見て……特になのはさんの事を見て、昨夜オリヴィエとの会話で思った事をぼそりと小さく呟いていた。それをアインハルトは拾いかけていた。

「いいや、何でもない」

俺はベンチに座り直して、残り少ないお弁当箱の中身に手を付ける。

“現代”と“未来”のなのはさんにも注意を払わないといけない。でも、今のなのはさんを見ている限り、とても敵としてのイメージが沸きにくい。

出来れば敵として俺の前に現れないでほしいが、“未来”のなのはさんは近いうちに俺の前に敵として現れるだろう。

「あ、あの、ガイさん」

「ん？」

少しして俺の名前を呼ぶ声があったので、聞こえてきた方に首を向けるといつの間にかヴィヴィオが俺の横に座って俺の持っているお弁当を見ていた。

「これガイさんが作ったお弁当ですか」

「いや、アインが作ったお弁当だよ」

「え……アインハルトさんが？」

ヴィヴィオがお弁当から俺の隣に居るアインハルトに驚いた表情をしながら視線を移した。

「はい、私が作りました」

「お弁当……ガイさんに……むむむっ……」

アインハルトもヴィヴィオに気づき、ヴィヴィオの言葉に頷き返答した。するとヴィヴィオは何やら難しい表情をして唸り声を上げて視線を下ろした。

「どうかしたか、ヴィヴィ？」

そんなおかしな行動に俺は疑問に思っ、ヴィヴィオに声をかける。ヴィヴィオは俺の事絵を聞いて俺の事を見上げた。

「ガイさん……今度私が作ったお弁当を食べていただけますか？」

「お弁当？ああ、別にいいけど」

「本当ですか!？」

複雑な表情をしていたヴィヴィオはぱとても明るい笑顔になった。何か嬉しかったようだ。

「それでは今度一緒に練習するときに持ってきます 楽しみにしててください」

「ああ、わかった」

ヴィヴィオの声はかなり弾んでとても嬉しそうな表情をしてなのはさん達の所へ戻って行った。

「……………ガイさん」
「ん？」

今度はアインハルトに呼ばれたのでアインハルトの方を向く。アインハルトは両手の人差し指をツンツンと突きあいながら俺から視線を逸らして地面を見ていた。

「もしよろしければ、私も今度ガイさんと一緒に練習するとき、またガイさんのお弁当を作ってきてもよろしいですか？」

「皆の時間にか？」

「ええ」

「そうになると、ヴィヴィのお弁当も食べないといけないから二つはちよつとキツイかな」

「……………ダメですか」

肩をがっくりと落として暗い雰囲気アインハルトから溢れてくる。

そんな姿を見ると先ほどの行動に対して罪悪感を感じてしまう。

「ヴィヴィオさんはよろしくても私はダメですか……………」

「うっ……………」

その上、そんな事を言うてくるので胸の中に感じた罪悪感がさらに大きくなる。

『ガイ君。女の子をあんまり虐めちゃダメだよ』

『な、なのはさん！？』

そんな光景を見ていたのか更に追い打ちをかけるようになのはさん

が念話を繋げて俺のやったことに対して批判した。

『いえ、先にヴィヴィと約束してしまったので無理だと思ったので』

『男の子なんだからお弁当二つぐらい余裕なの！』

『……結構キツイと思うのですが』

『女の子の好意を無碍にしちゃダメだよ』

「……………」

なのはさんを見る。念話の中では説教モードだけど、表面上は戻ってきたヴィヴィオとフェイトさんと楽しく雑談をして笑っている。そのマルチタスクはやはり凄いと思ってしまう。そして、目が合うとニツコリと笑みを向けてくる。

その笑みは何故か断るに断りきれない静寂な威圧感を感じた。もし、女の子のアインハルトの気持ちを無碍にしたら後で承知しないと云わんばかりな圧倒的なモノがなのはさんからビシビシと伝わる。

その笑みを見ただけで冷や汗を掻いてしまう。

「……………まあ、二つでも食べられると思うから、お願いするよ」

「え？ほ、本当ですか？」

俺の言葉を聞いて、すぐにこちらに顔を向けてくるアインハルト。

「無理しなくても……………」

「まだ俺も成長期だと思ってくれればお弁当の二つや二つぐらいは……………ありがとうございます」

アインハルトはその場で頭を下げる。

『ガイ君、良くできました』

『……はい』

念話から聞こえてくるのはさんからOKを貰ったので心の中でため息をついた。

しかし、こんな風に接してくれる“現代”のなのはさんは敵でないと思いたい。やはり親しい人と戦うのは避けたい限りだ。

そして、話の結果としては今度一緒に練習するときはヴィヴィオとアインハルトのお弁当を食べる事になった。

その時は朝食を抜かないとな。

俺がそのイベントをうまく切り抜ける為には、その日は朝食を抜く事だけだった。

街頭

土曜日なのに五限目まである授業を参観して、俺は学園を後にした。
俺は賑やかな声が聞こえる後ろを振り向く。

「それでねリオがね……」

「わ、コ、コロナ！？そんな事、ヴィヴィオとアインハルトさんと
ガイさんに言っちゃダメだよ」

「え？何の話？気になるよ」

「ええ、私も」

そこにはヴィヴィオ、アインハルト、コロナ、リオが居る。

帰りに公民館の練習場でインターシップの為に練習していくらしい。
俺もたまには皆とやりたかったので一緒に行くことにした。
なのはさん達は聖王教会に用事があるとの事で一緒にいない。

後ろはリオがお茶目な行動をしたのかそれを口にしようとしている
コロナを必死に止めているリオ。

ヴィヴィオとアインハルトはその話に興味があるのか聞こうとして

いる。本当に仲が良い4人組みだ。

そんな皆の声を聞きながら俺は皆と歩いていた。

「ガイさん」

「ん？」

ヴィヴィオが皆から離れて俺の所へ寄って来て複雑な表情で見上げてくる。

「まだ困っていることがあるのですか？」

「……………」

また唐突な質問に俺はすぐに言葉を出す事が出来なかった。

「……………どうしてそんな事を聞くんのだ？」

どうにか言葉を絞り出して話す。ヴィヴィオは悲しげな表情をして俯く。

「ガイさんが…………合宿が終わってから様子が変でしたから。お見舞いするときも言いましたが無か困っている事があつたら言つて下さい。私で力になれることがありましたら力になりますから」

悲痛な表情でその虹彩異色の瞳を俺に向けてくる。

アインハルトだけではなくてヴィヴィオにも心配されているようだ。お見舞いするときにも言ってくれたのだが、何だか申し訳なく思つてしまつ。

「そうだな。それじゃあ、ヴィヴィにお願いしたい事がある」
「あ、はい！何でしょうか!？」

待っていたと言わんばかりに、嬉しそうな表情で透き通った声を大声で発するヴィヴィオ。

俺の頼みごとを聞くのがそんなに嬉しい事なのだろうか？

ヴィヴィオの後ろに居る三人も聞き耳を立てて、こちらを見ていた。

俺はヴィヴィオの頭に手を乗せて話す。

「笑っていてほしい」

「ふえい？」

「……なんだ、その気の抜けた声は？」

何かとても間の抜けた声がヴィヴィオから聞こえてきた。

予想外すぎる願い事に意気込んでいた分、大きく拍子抜けしてそんな声が出てしまったのだろうか？

「え、えつと、だって、ガイさんからのお願いだからもつと真面目なものかと思っただんですけど……」

「大真面目で言っているんだけどな。ヴィヴィ達の笑顔は行き詰っている時に見ると、温かな気持ちの胸の奥からこみ上げて来るんだ。だから、笑っていてほしいな。それに俺の夢もそんな感じだから」

「ガイさんの夢？それはいつたい何ですか？」

俺はまだ茜色に染まるには早い青空を見上げて片手を伸ばす。

「魔法で誰もが不幸にならない世界を作る。それが俺の夢さ」

俺は青空に伸ばしたその掌をグツと握りしめた。

「誰もが不幸にならない世界……」

「それがガイさんの夢なんですね」

「始めて聞きました」

後ろに居た三人も俺に近づいてきた。俺の夢を聞いたようだ。

「隠していたつもりはなかったんだが言う機会が無かったしな」

「その夢が叶う事はあるのですか？かなり曖昧な夢な気がします」

「まあ、な。曖昧な夢だとは分かっているさ。でも……あの時、決めたことだから」

アインハルトが曖昧だと聞いてくるが俺はそれに頷くしかない。何が基準なのか分からない夢なのだから。

だけど……だからこそこの夢を拠り所に俺は頑張れる。この目標が達成できるのいつなのかはわからないがメンタル面が強ければ挫折せずに向上心は高まる。

多分俺はメンタル面は大丈夫だと思う。

「「あつ……」」

と、そこに偶然なのか必然なのか目の前に1人の人物とバッタリ会い、俺とその人物は先ほどのヴィヴィオと同じぐらいに間の抜けた声を出してしまった。

身長は150センチぐらいで、翡翠色の瞳に前回に見た結い上げていたお軽さと柔らかさが見て取れるセミロングの美しい金髪は後ろで一つに縛って下ろしている。

ランサーのマスターだ。

服装は最初の戦いの前の時と同じで濃紺のドレスシャツにネクタイ、フレンチ・コンチネンタル風のダークスーツ。

その服装が凜とした硬質の雰囲気を引きしめられているのがわかる。そんな人物と街中で出会ってしまった。聖杯戦争での敵。しかし、聖杯戦争は人前では行われてはいけない。今はヴィヴィオ達が居るので俺たちは戦いあう事は出来ないだろう。

相手はそれが分かっているからか最初から構えている様子はなかった。

「……………？ガイさん、この人とお知り合いなのですか？」

「ん？あ、ああ。まあちよつとな……………」

コロナが聞いてきたので俺は少し言葉を濁しながら答えた。

「……………少し話をしていきませんか？」

コロナの言葉に返しているとランサーのマスターからお誘いの話が持ち上がった。

ランサーのマスターを見ると殺気や闘志は見受けられない。このマスターは聖杯のルールをしっかりと守るようだ。

「……ああ。わかった」

「ガ、ガイさん。皆と一緒に練習しないのですか？」

このマスターの情報も知りたかったので俺は受け入れた。しかし、リオが受け入れた俺を見て慌てて反論してきた。

「悪い。ちょっとこの人と重要な話があるんだ。練習はまた今度で」

「ガイさん……困っている事があるのですか？」

アインハルトが悲しそうな表情で俺を見てくる。

「いや、重要な話だけど困っている事ではないから気にしないで」

俺は無理やり笑って皆を心配かけさせないと努力した。

「……はい、わかりました」

何かを言いたそうな表情をしていたが口を塞ぎ込んで、何か納得できなさそうな表情をしながらも4人は頷く。

「一緒にやろうと言ったのに悪いな」

俺は最後に4人に謝ってランサーのマスターに顔を向ける。ランサーのマスターも何か申し訳なさそうな表情をして視線を俺から逸らしていた。

それを見て思った。このマスターは悪いやつではないと。敵である俺に対して自分から誘って他の人の予定が狂ってしまい申し訳なさそうになってしまうあたり、優しさがあるのかも知れない。

「喫茶店でいいか？」

「え、あ、はい」

俺の言葉にランサーのマスターは俺に顔を向けて頷く。

「じゃあ、行こうか」

「ええ」

俺とランサーのマスターは子供たちと別れて、近くの喫茶店へと移動を始めた。

喫茶店

俺とランサーのマスターは4人で座る窓際のテーブルに対面に相手がいるよう座った。少しして、ウェイトレスがお盆にお冷やを二つ乗せて運んできてテーブルに置いた。

「あ、俺はコーヒーで」
「私も同じモノを」

俺たちはその時に注文を頼んだ。ウェイトレスはかしくまりました、と言って厨房へ戻って行った。

「さて、君は俺に何の話があるんだ？」
「それはあの場から離れるための嘘にすぎません」

俺はテーブルに両肘をつけて手を絡ませて、ランサーのマスターを見据える。

ランサーのマスターは背中をソファアに付けず姿勢を正して、俺を静かに見返していた。

どうやら話があるのは俺をあの場から離れさせるための口実らしい。

「……隣にはランサーがいるのか？」
「ええ」

隣には霊体化したランサーが居る。俺はランサーのマスターに対して警戒心を強めて眉間を寄せた。

「警戒しなくても大丈夫です。ここで戦うなどルール違反ですから」

「律儀だな」

人気の多いところでは聖杯戦争を行ってはいけない。そのルールをこのマスターはしっかりと守っている。

融通が利かないのか、それとも自分の意志は曲げるつもりがないのか。直感ではあるがこのマスターは真つ向勝負を好んで行う人物なのだと思う。暗殺や卑怯な手などは使わないだろう。

「名前……聞いてもいいか？」

敵ながらも武士道的な意思を持つこのマスターの名前を聞いてみたくなつて俺は言葉を出した。

「……私の名を名乗っても良いですが、貴方も名乗ってくださいか？偽名ではなくて真名を」

「ああ、約束する」

少し渋りながらもこのマスターは瑠璃色の瞳を俺を睨むようにして真剣に見る。俺はこのマスターの言葉に頷く。

「お、おまたせしました」

と、そこにコーヒーのカップを二つ乗せたお盆を持ってきたウェイトレスが少し硬い営業スマイルでテーブルにカップを二つ置いて、ごゆっくりどうぞ、と言い慣れているはずの接客用語の言葉を早口で言つて逃げるかのように俺たちから離れていった。

「私の名はアルトリアです」

「アルトリア……」

ランサーのマスター……アルトリアは自分の名前を発言してカップに手を付けて一口飲む。

ウェイトレスが居た時も俺たちは真剣で表情が変わらなかった。第三者から見ればかなり入りずらい雰囲気を出していただろうけど、ウェイトレスの人も注文と料理を運ぶのが仕事なので俺たちの雰囲気には怖気ついては入れないなどは言えないのだろう。

さっきのウェイトレスの人に申し訳ないと思いつつも、俺もアルトリアと同じくコーヒーを一口飲む。

飲みながらアルトリアを見て考えた。このマスターの名前はアルトリア。予想だが正当法で戦うマスター。オリヴィエから聞いた話だとサーヴァントからマスターになったと。

そうなる何処かの英雄なのだろう。俺が調べた歴史の中でアルトリアという人物がいたか頭の中で検索する。しかし、その名前は一つも浮かび上がってこなかった。

「私の名は出しました。今度は貴方です。ファイターのマスターよ」
「ああ」

俺とアルトリアはカップを皿に置いた。今考えていた事は一先ず端に置いておき、今度は俺の名前を出す番なので言葉を出す。

「俺の名はガイ・テストロツサだ」
「ガイ・テストロツサ……嘘ではないですね」

瑠璃色の瞳が俺を鋭く見ている。その色は綺麗としか言いようがな

いほど透き通った色をしているが、まるで心の中まで見られているような鋭い眼力を感じる。その眼力が俺の戸惑いや後ろめたさがあるかどうか見ていたのだろう。

「よろしくとは言わないぞ。俺たちは敵同士だからな」

「ええ。それは分かっています」

俺たちは敵同士。慣れ合う事は先ず無いと考えるだろう。

同じ釜の飯を食べた仲間と殺し合うような事は無い。最初から敵同士なのだから戦いあうしかない。

「1つ聞いてもいいか？」

「はい。私もガイに聞きたい事がある」

アルトリアは頷いてその上に俺にも質問をしたいようだ。

「アルトリアの願望って何なんだ？」

「私の願望ですか……それは言えません」

「そうだよな。そこを狙って落とすしえることだって出来るしな」

愚問な事を聞いてしまった。願望もバレてしまったらそこを付け込んで来る可能性もある。でも、他のマスターがどのような願望を持っているのかも知ってみたかった。皆、何の願望を持ってこの戦いに参戦してきたのかを。

ランサーの夢である願望も知らない。それを貫き通すためにランサーもここに居る。

「私も聞いても？」

「ああ」

今度はアルトリアから俺に問いかける番だ。

「ガイは前の時とは雰囲気が違う。本当に覚悟を決めたかのように気を引き締めている雰囲気だ。何かあったのですか？」

聞いて来たのは俺が最初の戦いまでに中途半端な気持ちでこの戦いに参戦した時の感じと今の俺の感じが違っていてその理由を知りたいようだ。

嘘を言っても、あの眼力の前ではバレてしまっただろう。俺にも黙秘権はあるがこの事柄に関してはアルトリアに言っても良いと思った。いや、言っておきたかった。

「アルトリア達と戦ったのが最初の戦いだった。それまでは俺は心のどこかで聖杯戦争を甘く見ていた。そして、アルトリア達に負けて俺は覚悟を決め直した。変かもしれないがあの戦いが俺を気持ちよく固くした。このことに関してはアルトリアとランサーに礼を言う」

あの戦いで本当の覚悟を決めた。それはアルトリア達のおかげだ。

「いえ、それはガイ自身が見つけた覚悟です。その覚悟を忘れずに気を引き締めて戦場に立つべきです」

「……親しくして来るんだな。敵同士だと言うのに」

「貴方はどこか“ある人物”に似ている。だからかもしれない」

「ある人物……」

アルトリアは俺をその“ある人物”に被せて見ているようだ。その人物も俺と似ているというのなら色々と考えていたのかな。

「ランサー」

と、アルトリアは突然、低い声で自分のサーヴァントのクラス名を呟く。

すぐにランサーが実体化した。黒い髪に青い瞳は据わっている巨躯な体の男性が立っているだけでも威圧感が凄まじい。

「結界か……」

その巨躯な体に合った図太い声で短く言った。まだ、ヴィータさんから貰った資料を見ていなかったが、貰った顔写真がこの大男と一致するので、この人物はゼストで間違いない。

「ああ、周りから人が消えた」

俺も分かった。人避けの結界がこの喫茶店を中心に展開されている。対象の人物だけを結界内に閉じ込めて外部からの干渉を断ち切るモノ。

しかし、そんな結界を街中で行って管理局に知られないのだろうか？俺とトレディが戦った時も結界が張られていたが。

まあ、管理者が元帥レベルで地上の騒動は揉み消せると言っていたし、下っ端の者たちは気づけないのかもしれない。

「ガイとアルトリアか」

「……!？」

結界について考えていたが、突然窓の外から1人の男性が渋い声で

こちらを静かに見据えて立っていた。

見た目は4〜50歳ぐらいの少し年配の掛った男性。セミショート
の黒い髪にも少し白髪が混じって入るがそれをオールバックにして
いるため年配という感じがしない。黒いズボンに黒いインナーを着
て黒いロングコート。ロングコートには僅かに装飾品が付いている。
右手にはデバイスなのか杖を握っている。

だが、その人物の瞳を見てゾクリとした。放たれる殺気が半端ない。
この感覚は過去に二度味わったものだ。

「キャスターの……マスターか？」

俺はその放たれる殺気に何とか震える口を抑えつつ言葉を口に出す。

「……」

だが、その人物は何を思ったのか俺が言った言葉に対して一瞬だが
殺気が消えた。しかし、すぐに先ほどの殺気を表す。

「……俺はキャスターだ」

その言葉と同時にキャスターの身体全体からオーラなのか闘志なの
か、そのようなモノが放たれ窓ガラスが割れる。外からの衝撃なの
で内側に居る俺とアルトリア達にガラスの破片が襲ってくる。

俺たち三人はガラスの破片を避けるため喫茶店の内側へ下がる。

「ガイ、ここは一旦停戦協定を結びましょう。あのキャスター、只
者ではない」

「ああ。三竦み状態になるのも面倒だしな。それにアイツが一番やつかいなのも分かる。状況は三対一だがそれでも何故か五分五分だと感じてしまう」

「アルトリアがそう言うのならそれに従おう」

俺たちはすぐに同盟を結んだ。

割れた窓ガラスからキャスターが喫茶店の中へと音もなく悠然とした足取りで向かってくる。

その歩き方だけでも物凄い威圧感がヒシヒシと伝わる。

「ガイと言ったな。足手まといにはなるなよ」

「ああ、分かってるよ。ゼスト」

「……俺の真名を知ったか」

「グイータさんが調べてくれたんでな」

「……あの時の騎士か」

ゼストの声からはいつもの凶太い声ではなく、優しげで懐かしいようなモノを感じた。ゼストを見ると表情が少し緩んでいた。

グイータさんも一度戦った事があると聞いた。もしかしたらその時の事を思い出しているのかも知れない。

「来ます。ランサー、ガイ」

キャスターは少し距離を置いて杖を構えてきたのでいつの間にか騎士甲冑の姿に代わっていたアルトリアが話し合っていた俺たちに注意を促す。

「ああ、行くぞ」

「プリムラ、セットアップ」

『了解、マスター』

俺もバリアジャケット姿になって、構える。

距離は五メートルもない。そして、誰かが動き出したかはわからないがそれに連動して皆が動き四つの影がぶつかり合って衝撃が波紋のように広がり喫茶店は戦場と化した。

十七話“学園と非日常の交差”（後書き）

三人称をやる予定でしたが、一人称と二人称を使っているのだから三人称も入れたら分かりづらくなるので、やらない方向に。

戦闘シーンは三人称の方が読者にはイメージしやすいんですけどね。

恋愛絡みだと一人称の方がいいですし。

あれ二人称はw？

今回は戦闘シーンを入れるともうの凄く長くなりそうだったので戦闘前までにしました。

なんかキャスター組みが謎だらけだな。

フラグは一応立てているんだけど、その後の展開をうまく書けるかどうか。

そのときこそ俺の筆力が試されるわけですね^^

……もっと頑張ろうw

何か一言感想がありますとありがたいです。

では、また（・）／

十八話“戦場と混沌の交差”（前書き）

前回の十七話でヴィヴィオが十六話で同じ質問をしていたのにまた同じことを書いてしまったので、訂正してきました。

前回の内容を忘れてしまっていたとか駄目作者ですね（・・・）

この経験を生かしてしっかりと書いていきます。

では、十八話目入ります。

十八話 “戦場と混沌の交差”

???

オワラナイ……

「伝令！！ライオット中佐が討ち死に！！部隊も全滅です！！」
「東からの報告からはファラ大尉を率いる部隊も全滅との事！！」

オワラナイ……

「ええい！！何故これほどまでに敵の戦力が高いのだ！！」
「こちらの情報が漏れているのではないか！？」
「スパイが紛れているというのか！？」

オワラナイオワラナイ……

「伝令！！最前線に居たユーリ大佐までもが討ち死に！！」
「このままではユーリ大佐の部隊が全滅に合います！！」
「最前線は要だ！！突破させるわけにはいかん！！増援を送らねば
！！」

「だが、指揮を取られておるユーリ大佐がおらん！！兵士たちは浮
足立っており！！新しい指揮者が必要だ！！」

オワラナイオワラナイオワラナイ……

私は戦争の為、自陣の奥にある一番でかくて広いテントの中で作戦
の指揮を立てるために戦場の描かれた紙を眺めていた。伝令からは
悪報ばかりが飛んできて、味方の全滅した部隊の所にはバツ印が付

いている。

テント内は様々な状況の言葉が飛び交って慌ただしい雰囲気だ。悪報の伝令が来るたびに軍師の老臣達は頭を悩ませている。

「他の部隊はどうした!？」

「他の部隊も押されています!! 撤退させなければ全滅も時間の問題です!!」

「……ここは全部隊の一時撤退が必要だろう」

「しかし、他の部隊を撤退させるためにも最前線は突破させるわけにはいかん!!」

「最前線へ指揮を取れる者はおるか!？」

状況は刻一刻と劣勢へ傾いている。ライオット中佐、ファラ大尉、ユーリ大佐までもが戦死し兵士たちの士気に大きく響いている。

劣勢となった今の戦況を立て直すためにも一時撤退が必要となる。

そのためには最前線で敵を食い止めなければならない。

しかし、ユーリ大佐ほどの者を討ち死にした者が最前線に居る。そこへ指揮を取りに行かねばならない。

つまりは自分の命を捨てに行く覚悟を持って仲間の撤退をしなければならぬ。

「ええい、誰か最前線に行ける者はおらんか!!」

会議の賛否の権限を持っている頭の固い軍師達は待機している者たちに声をかけたが誰も挙手をしようとしなかった。

言葉が飛び交っていたテント内は誰も口から言葉を出さない為、あ

れほど騒がしかったのが嘘のように静まり返っていた。

オウラナイオウラナイオウラナイオウラナイ……

誰も行かないのなら……ユーリ大佐以上の人物が必要なら私が……。

私は挙手しようとした。

「私が行こう」

しかし、その行動よりも先に私の後ろに居た人物が私の肩に手を置きながら、何の曇りもない真っ直ぐな言葉を発言した。

そのおかげで挙手するタイミングを失ってしまった。

「へ、殿下！！殿下が最前線に行かれるなどもっての外ですぞ！！」

「ユーリ大佐ほどの人物が戦死したのだ。それ以上の人物でないと足止めにもならんさ」

「し、しかし、それでは……殿下が……」

「ん？お前は俺が負けると思っているのか？」

「い、いえ……ですが……」

「相変わらず頭が固い爺さんたちだ」

殿下は笑いながら私に顔を向けてきた。その表情は命を落とすかもしれない危険な最前線に行くと言ったのに不安を出さずに笑っていた。

そして、私に顔を向けながら他の者たちに話をする。

「それにこいつが挙手しようとしていたからな。流石に不味いと思

った」

「で、ですが……」

「……このまま仲間を死なせるわけにはいかない」

「……」

殿下の気迫のある低い声が流れていた軍師達を黙らせた。

「……殿下がそう仰られるなら、仰せのままに」

軍師達は何を言っても無駄だろうと思ったのか、納得のいかない表情をして困惑していたがしぶしぶ了承した。

殿下はうむ、と言ってテントから出ていく。殿下が最前線に行くとなったのでテント内の言葉の口論が始まった。急いで護衛兵を集めるとかやはり殿下を最前線へ行かせるのは不味いのではなど。

私は殿下の後について行くために口論で騒がしいテントから出た。

そして、馬に乗る殿下の元へと駆けつける。

殿下は私に気付いたらしく、こちらを見て笑みを零す。

「すぐに行かれるのですか？」

「ああ、1秒でも早く行かねば味方がどんどん戦死してしまうからな」

「……」

私は殿下の顔をまともに見れなく顔を伏せた。そして、瞳から一滴の雫が流れたのが自分でも分かった。最前線に行く……それは自分から死に行くような事なのだから。

「俺の為に泣いてくれるのか？」

殿下も私が泣いているのが分かり、キョトンとした表情をしていた。なぜ私が泣いているのかが分からないようだ。

「あ、当たり前です……たった一人の……もはや世界でたった一人の……」

「お前は小さいころから泣いてばかりだな……オリヴィエ……」

そう言いながら私の頭に手を乗っけて撫でてくる。

「お前の理解者が現れるといいな。お前の為に笑い、お前の為に戦い、お前の為に頑張ってくれる奴を」

「い、今はそんな事を言っている場合では……」

私はそう言っただけ涙を手で拭って顔を上げ、真面目な表情になる。陛下は笑っていた。

「……絶対戻ってきてください……“兄さん”」

「ああ、可愛い妹が待っているからな」

殿下……兄さんは聖王家の証である左眼が紅で、右眼が翠の瞳を細めて太陽の様に明るく笑みを私に向けて、そして自陣から疾風の如く馬に鞭をあて飛び出して行った。

それが最後に見た兄さんの表情だった。

兄さんは最前線でユーリ大佐を討ち死にした人物を倒し、味方の撤退に大いに時間を稼いでくれた。

しかし、最前線の兵たちも撤退させるために最後まで残った兄さんは、全身を突かれ絶命ながらも決して倒れることなく立っていたと

最前線にいた兵士たちが言っていた。最後まで仲間の事を思っ
て兄さんは最後まで立っていたのだ。

その兄さんの気迫に敵は怯み追撃をせずに一時撤退をしたのだ。

オワラナイオワラナイオワラナイオワラナイオワラナイ……

兄さんの最後が素晴らしかったのはわかった。だが、兄さんが戦死
したという事は聖王家は私、オリヴィエ・ゼーケブレヒトが最後の
一人となってしまった。

私の家族は全てこの乱世の中で命を落とした事になった。

私はこの乱世が憎かった。

オワラナイ……

必然的に兄さんの後継者となった私はこの乱世を1日でも早く終わ
らせようと再び戦場に立った。

血を血で洗うしかないこの世の中に……聖王女として。

オワラナイ……センソウガ……オワラナイ……

私の理想は……私の願望はこの時に固まった。

私はそれを叶える為に戦場を駆け巡った。

マンション

「んっ……」

私はベッドで目を覚ました。いつもは起きてからも少し寝ぼけてしまふ私だが今日は脳がハッキリと覚醒しているのが分かった。

昨夜はキャスターのマスターに酷くやられてしまい、傷を癒すために魔力をかなり使ってしまった。

ガイの魔力値が低く魔力のラインがうまく繋がっていない為、ガイからの魔力の補給が出来ない。

ですが、魔力の低さをどうこう言うつもりはないです。ガイは魔力値を上げようと何年も努力を積み重ねているのは知っている。それで、魔力値がC - という結果であるのだから。

「お、目が覚めたか」

「……いい匂いがしますね」

嗅覚にはとても美味しそうな匂いが、聴覚には何かを焼く音とガイの声が聞こえてきた。

「もう少しで出来上がるから待ってな」

私はベッドから体を起して立ち上がりキッチンの方を見る。そこにはフライパンにベーコンを炒めているガイが立っていた。

時間は六時前。私がこの時間で起きた時に朝食を作っているという事はもつと早く起きて準備をしていたのだろう。

「ガイ、いつもよりも早く起きていますね。その上、昨夜はソファで眠ったから完全に疲れが取れていないのでは？」

「今日はアインの授業参観に行かないといけないからな。普段着なれていない背広を着ないといけないから少し時間が欲しいんだ」

そう言いながら、片手で卵を割りフライパンへと落とす。

昨日の夜、アインハルトが授業参観に来ないかと誘われた。ガイは行くと言った。私はクラウスの子孫であるアインハルトの私生活にも興味は湧いていたが、何故か行く気が起きなかつたので断った。

その時に見せたアインハルトの寂しげな顔が脳裏に残っていますが、断らなければ良かったでしょうか……。

「オリヴィエは何で行かないんだ？」

「……少し調べたいものがあるので」

「……そう」

ガイは視線をフライパンに落としたまま、素っ気なく言う。

ガイは必要以上に私の事に関して聞いてこない。私の願望も知らずに一緒に居てくれる。

それでいいのかと思ってしまうほど。

「ん、出来た、と」

考え事をしている内にガイはベーコンの上に目玉焼きを乗つけたベークンエッグを皿に移す。それと同時にチンと音がして、トースターからキツネ色に焼けたトーストが二枚出てきた。

「後は盛りつけにミニトマトとキャベツを千切って完成か」

キャベツも盛り合わせて出来上がった料理をテーブルに運ぶ。私も朝食の主食であるトーストを皿に乗つけてテーブルに運ぶ。

「俺は一度外に出るから、着替えなよ」

「いえ、別にガイが出ていなくても私はここで着替えますよ」

寝起きのままでガイの青の縦縞のパジャマを着ていた私は胸元のボタンを外しながらそう言うと、ガイは慌てて顔を真っ赤にして私から視線を逸らした。

「……少しは恥じらいを持ってくれな」

そう言つて、顔を真っ赤にしたままガイは部屋を出て行ってしまった。

「……ふふっ」

そんなガイの様子を見ていると自然と笑ってしまった。昨夜から“理想”の事について考えて、ガイから言わせればしけた顔をしていたらしいが、ガイのあの慌てたような表情を見ると沈んだ心が温まったように思える。

「ガイがマスターで良かった」

本心からそう思える言葉を口にした。

しばらくして、ガイと朝食をとり、押入れの中からビニールのカバーを付けた背広を取り出して、それを着たガイはお昼までには戻ることから言つて、部屋を出て行った。

聖杯戦争中なので、もしもの時にはその右手の紋章に強く念じて下さい、と私は言っておいた。

そうすればその力を持って空間転移で私をすぐ呼ぶことも不可能ではない。

しかし、私もあの紋章はどれほどの力を持っているのかは分かっていない。壮大な魔力を秘めているのは知っているが、それを使えば私への魔力補給も出来なくはない。だが、三画しかないその貴重な紋章をそんな簡単に使う事は出来ないだろう。

それにあの紋章の名前すらも分かっていない。

「……さて、私も行きますか」

私もカラーコンタクトを付けて部屋を後にした。行先は1つだ。

聖王教会本部

ミットチルダ北部にある中世風の大きな建物が山々に囲まれた中で

威厳を放つように建っている。

周囲の自然に溶け込むようにそそり立つそれは何の違和感もなく、しかし、それでいて真正面から見ればその威厳の威圧に驚きを隠せないだろう。

それがこの聖王教会だ。

ここは観光スポットとしても有名らしく一般人の人もある程度なら中に入る事が出来るようだ。

「……懐かしいですね」

私は大きな門の入口の所でその建物を見上げて、自然と口から言葉が零れた。たぶん、今の私は微笑んでいると思う。

ここは私が小さい頃に育てられた場所だ。建造物が現代にそのまま残っているのは珍しい。その歴史的な建造物を残すために定期的に補強作業を行っているのだろう。

きっと、兄との背比べで柱に刻んだ傷とかも無いのでしょうね……
そう思うと少し寂しいですが。

胸に少し穴が開いた虚無感を抱きつつも、私は大きな門を潜った。
今日は土曜日なので観光客も少しばかり多い。

中に入ると大きな噴水が中央にある中庭に出た。噴水は壺を持った女性を模造した石像が壺から水を流しているように作られており、幻視的な姿に見惚れるほどだ。

椅子やテーブルもあるのでここは休息や憩いの場にはピッタシだろう。

「本当に懐かしい」

感情の籠った声が自然と出ててしまう。

私の居た時代の時もこの噴水はあった。家族全員でここで昼食を取ったこともあった。兄さんと追いかけて水をすることもあった。噴水の溜まっていて水を覗き込んで水の中に落ちてしまった事もあった。

ここにいるだけで思い出がぼろぼろと走馬灯のように蘇ってくる。思い出すものは何もかも平和で日常の一幕をくり抜いた様な光景ばかりだ。

ここに居た頃は本当に平和だった。この平和がいつまでも続くと思っていたこともあった。

しかし、乱世の時代が訪れたため、戦場に近いこの教会から離れるためにここを離れた。

長く思えたここの生活は簡単に終止符が打たれた。

「あれ？フリージアさん？」

「あ、ほんとだ」

「ん？」

と、物思いに耽っていると、この世界では偽名を使っている名がこの中庭に聞こえてきた。声のした方を見るとそこには2人の人物がこちらに向かって歩いて来ていた。私はその人物を見て一瞬だが警戒した。

「……ああ、なのはとフェイトですか。こんな所でどうしたのですか？」

“なのは”が居たからだ。サーヴァントとして“未来”のなのはが参戦しているため、“現代”でなのはに会ったら警戒だけはしておいた方が良くと昨日ガイと話し合った。

未来のなのはも目の前にいるなのはも瓜二つなのだから。

しかし、格好は戦闘とは皆無なおしゃれな感じの服装だ。とても戦いに来たとは思えない。それに雰囲気も和やかだ。目の前の“なのは”はきつと“現代”のなのはとして間違いはないだろう。

私は警戒を解く事にした。とは言っても相手からは分からないような心構えだが。

そして、フェイトの服装は決まりすぎてここでは少し場違いかもしれない。

「今日、ヴィヴィオの授業参観だったから行ってきたの。で、騎士カリムから話があるって連絡があったから、その帰りにここに寄ってきたんだよ」

「い、一度着替えてから来たかったんだけどね」

フェイトは顔を赤くしながら困ったように首を傾げる。

ハイヒールに黒いストッキング。タイトスカートの切れ端から黒ストッキングを掴んでいるガーターベルトがちらちらと見えるような格好をしている。

「ガイ君も来てただけで、ガイ君がフェイトちゃんのここをチラ

チラと見ていたから私が、ここが気になるんだよね、と口に出しちゃった。そしたらガイ君は必死に否定して来るんだもの。見てて面白かったよ」

なのはがフェイトのタイトスカートから見えるガーターベルトを指さす。

ガイがフェイトの太ももを見て、ガイもフェイトも顔を赤くして、隣でなのはが笑っている光景が思い浮かぶ。

「うつつ、それを言われてからこの服装が結構恥ずかしくなったよ。一度帰って着替えたかったけど、それだと騎士カリムとの時間が合わなくなっちゃうし」

その部分を手で隠しつつ、少し涙目な表情をしてくるフェイト。

「まあ、ガイは恥ずかしがり屋ですからね。私が部屋で着替えようとするたびに顔を真っ赤にして外に出てしまいますし」

「……そ、それは……」

「ガイが悪いわけじゃないと……」

2人はどのように答えたらいいかわからない表情をして苦笑しながら言葉に出す。

「まあ、ガイ君は純情な子だからね。フリージアさんと同居していたらなかなか大変なのかもしれないね」

「どっという意味ですか、なのは？」

「ふふっ、それは内緒だよ」

天使のような笑みを向けてはにかむなのは。内心はどんな事を考え

ているのだろうか？

「ところで、フリージアはここで何をしているの？」

「私ですか？私はここの見学に来ました」

フェイトが話を変えてきたのでフェイトの方へ顔を向ける。まだ顔が少し赤いようだ。

「留学生だもんね。いろいろと見て回るといいかもね。電車で来たの？」

「いえ、歩いてきました」

「えっ？」

当たり前のように答えたとお思ったのですが2人は絶句したように表情を固まって言葉に詰まっていた。

「ガイ君の住んでいるマンションからここに歩いて来たの？」

「ええ」

「あそこの最寄り駅でも駅からここまで40分ぐらいは掛るよ。どのくらい歩いたの？」

「七時間ぐらい……ですかね」

「……」

2人からは驚いているのか唖然としているのか分からない表情をして私を見ている。

「どうしたのですか？」

「う、ううん、何でもないよ。歩く人が好きな人もいるもんね」

「そ、そうだよ、なのは。たとえば七時間歩こうとそれが好きならね」

2人は互いの顔を見て苦笑しながらもうんうん、と頷く。

「あ、なのは。そろそろ時間」

「ほんとだ。騎士カリムに会わないと。それじゃあ、フリージアさん。またね」

「ええ、また」

なのはとフェイトは笑みを浮かべてお辞儀をして私から離れていった。

“現代”のなのはとても優しく思いやりのある人物だ。時々小悪魔な考えをしている時もありますが、ですが、そんなのはが聖杯戦争に参戦している。

なのはもいつかは英霊となって人々の記憶に残っていくのだろう。それが英雄なのか反英雄なのかは定かではないが。

「……敵として会いたくありませんね」

私はなのはの背中を複雑な思いで見つめていた。

喫茶店内

「はあああああ!!」

「……」

アルトリアが天井に踏み込んで真上からキャスターに向かって、素手のように思えるがまるで何か剣を握っているような手の構えでキャスターに攻撃を放っていた。

アルトリアの持ち方からして剣だろう。

何か特殊な力を持って不可視な剣になっているのかもしれない。

キャスターは杖を上に掲げてその不可視な剣に対して受けの態勢に入る。

ガキン、と金属のぶつかり合う音が店内に響き渡った。その余波が店内のテーブルや食器などを吹き飛ばす。

「ふんっ!!」

その間にゼストが好きな出来たキャスターの横から円月刀の形をし

た槍を横切り薙ぎ払うように踏み込んで放っていた。

「……ジャツカル」

『了解した、マスター』

しかし、キャスターは冷静に分析し、デバイスである“ジャツカル”に指示を出して黒い霧を瞬時に大気に散布した。あれは魔力が蒸気化したモノだろう。

それはまるで、その散布した魔力がキャスターを守るようにしてキャスターの周りで渦巻いている。

そして、それはキャスターとゼストの間に集まり凝固して擬似的な盾となってゼストの攻撃を受け止めた。

その間にアルトリアは床に着地して、不可視な剣を突きモーシヨンのようにしてキャスターに突き刺そうとする。

「ぐっ！！」

だが、それは届く事無く黒い霧が固まって出来たハンマーのような形によって、独立して動けるのか、それに殴られて後ろへ飛ばされ、そのまま厨房の中へ激突した。周囲にあつた食器類も衝撃を受けて割れ、ガシャンパリンという軽い音が戦闘中でも心に響く。

「ここだっ！！」

だが、そのおかげでキャスターに隙が出来た。俺はその隙を狙って鞘から鞘走りした刀でキャスターを狙う。

「踏み込みが甘いな」

だが、それも難なくアルトリアを止めていた杖で受け止められる。そして、黒い霧が俺の目の前で固まり両手剣のような武器となって矛先をこちらに向けていた。それはすぐ俺に向かって飛んでくるはずだろう。

「危険だぞ、ガイ!!」

隣にいたゼストが兜割りのように槍を振り下ろした。そのため、キヤスターの注意がゼストに向いた。

俺はその間に転がるようにして矛先から体を動かす。と、同時に先ほどまで居た場所に黒い両手剣は通過して飛んでいき後ろの壁へと突き刺さった。

間一髪だ。ゼストが注意を引かなかつたら死んでいただろう。

そして、ゼストの兜割りも受け止められ、その間にゼストに黒い霧が濃くなって押し寄せてくる。

「むっ!?!」

黒い霧は瞬時に二刀の長刀になりハサミのようにして左右からゼストに襲いかかってくる。

「ゼスト!!」

ダンツと後ろからものすごい音がしてアルトリアが叫んで走る……
というよりも弾丸のように跳んでゼストの隣へ着地して片方の長刀

を不可視の剣で受け止める。ゼストはもう一方の長刀を受け止める。俺はゼスト達の反対側から抜いてある刀を片手で振り下ろす。しかし、キャスターは見向きもせず杖を使ってそれを受け止める。

見なくても防御できんのか。更にあの黒い霧……ここは……。

俺は一つの結論に達したので大きく後ろへ下がった。アルトリア達も同じ考えをしていたのか、キャスターから離れ俺の方へ跳んできた。そして、そのままキャスターが割って入ってきた窓から外へと出た。

あの狭い喫茶店内で戦っているには満足に戦う事も出来ないし、あの黒い霧から出来る武器を避けるのも動きに制限が掛ると容易ではない。

それなので俺たちは外へ出る結論に達したのだ。

喫茶店内は人がリラックスできるような光景ではなく、荒れ果てた戦場となつてとても営業できるような所ではなくなっていた。

「あの霧……やっかいですね」

「瞬時に武器の形になりそれを飛ばせることが出来るとわかつただけでもいいだろう。予備知識があれば事前に動ける」

「ああ、そうだな」

先ほどの戦闘から得たモノを簡単にまとめていると、荒れ果てた喫茶店中からキャスターが殺気も十分に込めながらゆっくりと歩いてくる。

戦闘中もあの殺気を緩めることなく放っていたのだから冷静な判断

能力がああのは無かつたのかもしれない。
そして、キャスターの眼にはどす黒い殺気の他にも何か違う感情が
映っていたのも見えた。

あの眼に映る感情の色は……なんだろうか？

「中だと狭いと考え、外に出たか。だが、それは私にとっても好都合」

「……!?」

キャスターが右手を空に上げた。すると、黒い霧は更に増え、大きく展開し俺たちと喫茶店を囲い込むようなドーム状になり、光を遮って視界は暗闇に包まれた。俺たちは互いに背中を預けて武器を構える。

「いけ……」

キャスターが短く呟くと、その霧は様々な武器となって矛先を俺たちに向け飛んできた。俺の動体視力を持って軌道を見切れても10が限度だ。喫茶店を囲むほどの大きさの武器の数だ。200や300は当たり前前のようにあるだろう。

「俺に任せろ」

ゼストの声が背後から呟くように聞こえてきた。ゼストの方を向くと槍が輝いてこの暗闇の明かりになっている。槍に魔力を込めたのだろう。

「牙籠!!」

「わっ!!」

その槍先を下に向け思いっきりコンクリートに差し込んだ。大地を這うような衝撃がゼストを中心に波紋のように広がった。そして、コンクリートが吹き飛ぶぐらいの衝撃が俺たちの足元以外の所から湧き上がってくる。それが飛んでくる黒い武器にぶつかり勢いを殺し俺たちの身を守ってくれた。ぶつかり合ったので煙幕が巻きあがる。

「ぐっ!!」

「ぬわあ!!」

「ぬ!!」

だが、大気に舞い上がっている煙幕を吹き飛ばすほどのジャイロ回転のある黒い魔弾が三つ俺たちに飛んできて腹部に当たる。そのまま、それぞれ三方向に飛ばされた。威力がありすぎた。そして速い。バリアジャケットや騎士甲冑が付いていなければ腹部に風穴が開いていただろう。

「ぐっ!!」

その衝撃は強力すぎたので腹部に激痛が走る。服部のあたりのバリアジャケットが剥がれ落ち、うつ伏せの状態で腹部を押さえつつ顔を見上げる。目の前にはいつの間にかキャスターが見下ろすように冷たい目で俺を見ていた。

飛ばされた衝撃で鞘と刀が一对のプリムラを手放してしまった。

「貴様は弱い」

「くっ……」

キヤスターから言われた言葉は否定する気が起きなかった。事実、その通りなのだ。

だが、その事実を現実として受け止めてしまつと周りに迷惑をかけるてしまう。それが悔しい。

「ふん、その現実には否定する気はないようだが内心は悔しがっているようだな」

「ふ、ふざける……」

そう言い終える前に俺の右手の甲をキヤスターは足で踏ん付けて左右に動かす。

「ぐ、ぐあああー!!」

「この“令呪”もいらんだろ。私のマスターに渡してファイターでも使役するか」

キヤスターの左手に黒い霧が集まり凝固して刀となった。それを掴み俺の手に近づける。この紋章……令呪を狙っているようだ。このまま右手を切り取るつもりだ。

「ぐっ……」

俺は腹部と右手への激痛に耐えながらも黒い魔弾を真上に錬成する。

「意味ないぞ」

「!?」

だが、それは一瞬にして弾き飛んだ。キヤスターが左手の刀で一振り振っただけで俺の魔弾は弾き飛んだのだ。

「無駄な足掻きだ」

「ぐっ……い、いや……無駄なんかじゃない……さ」
「……ほう」

キャスターは感心したような声を放って俺から視線を離して真正面を見ながら大きく跳んで後退した。

「ガイ!!」

俺の後ろから聞き慣れた声が出た。そして俺を抱き起こす。騎士甲冑と手甲を付けたオリヴィエが起こしてくれたようだ。オリヴィエは心配そうな表情をして俺を見ていた。だが、それも怒りの表情に変わって、俺からキャスターに視線を移す。

「オリヴィエ・ゼーケブレヒトか」

「くっ……あなたがガイを……」

特に何の感情もなくキャスターはオリヴィエの真名を口にした。

俺はオリヴィエを呼んだのだ。

黒い魔弾は匣でキャスターがそちらに注意を払っているうちに俺はこの“令呪”に強く念を押ししていた。来いオリヴィエ!!と。そうすれば時空転移で俺の傍に来てくれると言っていた。

これで来るかと半信半疑だったが、どうやらちゃんと来てくれたようだ。

「天幕よ、落ちよ!花散る天幕!!」
ロサ・イクトウス

「……ふん」

そして、後ろへ下がったキャスターの更に後ろに紅く捻れた特徴的な剣を踏みこんで横斬りを放っている人物が居た。それをキャスターは振り返ることもせず、右手を右肩へ動かし杖を背中に持つていきその剣を受け止めた。そのまま鏢迫り合いのような形となって互いに動きが止まった。

「ふむ、不意を突いたつもりだったのだがな」

「来客が多いな。今度はセイバーか」

「えっ……」

その人物……セイバーはアルトリアにそっくりだった。胸当てがとれ、不可視な剣を地面に指して剣に体重を預けていたアルトリアも自分自身に似ている人物が目の前に居て驚きを隠せないでいた。

俺も痛みを耐えてオリヴィエに肩を借りて起き上がり、セイバーを改めて観察する。

金髪の髪に翠の瞳。そして、顔の輪郭も容姿もアルトリアにそっくりだ。

違うのは服装。鮮やかな赤のドレスに、随所に施された金の刺繍があり、大きく腰下まで開いた背中中のラインがある。スカートの前が半透明なシースルーになっており白い下着なのだろうか？それが丸見えになっている。

ドレスで戦うのか？まあ、それでもあの剣を使いこなしているのを見る限り疑問ではないが。だが、あのスカートが半透明なシースルーになっていて下着みたいのが見えるのがちょっと気になる。

「えっ？セ、セイバー？」

「凜！？なぜここに？」

あのセイバーの後ろにどこかで見たような美少女が驚きの表情を見て、セイバーと言いつつもアルトリアの方を見ていた。

黒い髪を黒いリボンでツインテールに縛り、翠の瞳。黒いニーソックスに黒く短いミニスカート。胸元に十字の紋章が付いている赤い服を着ている……ああ、思い出した。都市中の書店を漁るために移動していたら出会いがしらでぶつかった人物だ。あの子も聖杯戦争に参与しているのか？

「何故俺を狙う？」

「なに、前の対決に決着がついていなかったのな。余が最優先で終わらせたものはそなたとの決着だ。それにそなたは前回本気で戦っておらぬしな」

俺が思い出していると、こちらの鏢迫り合い状態のままでの2人は一言二言、会話した。それを俺は聞き取る。

前回の戦い？ 廃棄都市区画での戦いだろうか？ オリヴィエがキャスターのマスターと対決した時にはこのような人物がいるとは言っていないかったし。となるとその時に居た人物たちはキャスターとこの人物になるだろう。

と、なるとあのセイバーと同時に現れたあの凜って子はセイバーのマスターか？

脳内の情報整理が追いつかなくなる。俺の頭の中は得てきた情報を処理するためにフル回転中だ。

2人の鏢迫り合いに変化が起きた。セイバーの周りに黒い霧が寄っ

て来たのだ。セイバーはすぐに後ろへと下がってその霧から離れた。その間にキャスターは黒い霧から複数の武器の形を作り、矛先をセイバーに向けて飛ばした。それをセイバーは難なく薙ぎ払った。

「オリヴィエ、プリムラを取ってきてくれ。鞘と刀が転がっている」
「ガイ、無理しないで下さい」

俺はキャスターがセイバーに注意を向けている間にオリヴィエから離れて、左手でキャスターに踏みつけられた右手の甲を押えながらオリヴィエにプリムラを取ってきてもらおうように促す。

「アルトリア……ランサー組とは停戦協定を結んだ。だが、三対一でもあのキャスターに敵わなかった。しかし、あのセイバーが現れて状況も変化した。あのセイバーはキャスターと戦いたいらしいし、それにマスターであるアルトリアとあの凜って子も多分、知り合いだ。うまくいけば今度は六対一になる。キャスターは強敵だ。落とせる時に落とさないと不味い」

「その通りだ、ガイ」
「ランサー……！」

俺の隣にゼストが槍を杖代わりに立っていた。服部あたりのバリアジャケットが破れてしまっている。

俺もアルトリアもゼストも受けたあの黒い魔弾はかなり強力だと言う事が俺たちを見ることで物語っている。

オリヴィエは先ほど停戦協定を結んだと言ったとはいえ、少し前までは敵だったので俺の前に出てランサーを警戒していた。

「あれは強敵だ。共同戦線を張らない限り、この聖杯戦争はキャスターの勝ちになるだろう」

「ランサーも同じことを言いますか……で、ですが……」

「頼む、フリー。俺もフリーを呼んで何もせずに戦場からは撤退はしたくない」

「……分かりました。取ってきます」

何か納得のいかない表情をしていたが、俺の気持ちを掴むんでくれてオリヴィエは俺から離れてプリムラを回収に向かった。

「あのセイバーもなかなかの技量をもっているな」

「ああ、キャスターの動きについている」

キャスターとセイバーは武器を交えていた。とは言っても、キャスターが黒い霧から武器を作成し飛ばして、それをセイバーが薙ぎ払っているだけだが。時折、黒い魔弾も飛んでいくがそれは紙一重で避けている。

ふと、俺の右手の甲を見る。キャスターに思いつきり踏まれたので赤くなっているがその赤に劣ることなく紅い令呪は少し形が減っていた。

ライオンの形をしていたが今は耳と輪郭の部分が無くなっている。確かこれには絶対的命令権がある。

「使用回数に限りがあるってことか……」

残りの区画からして一回か二回だろう。残りが眼と鼻と口だけだ。

「きゃはは」

「……!?」

と、考え事をしていると背後からあまり聞きたくない笑い声が聞こえてきた。俺とゼストはそちらに振り向く。

「やつほ、ガイ。またまた殺しに来たよ」

いかにも楽しそうな声で残忍な笑みを向けている少女がいた。バーサーカーのマスター、トレディだ。

ブラウン色のセミショートに薄汚れているような黄色の瞳。服装もあの時と変わらずピンクと白のアオザイだ。

「トレディ!!!」

「なに、大きな声で私の名前を言っちゃって、そんなに私に会いたかったの？もう恥ずかしいわね」

高い声でそう言いつつも残忍な笑みを崩れないのでふざけているのはわかる。

「しっかし、令呪が反応したこの大きな結界に入ってみたら中はなかなか面白い状況ね」

「令呪が反応した？」

俺はこの結界に疑問が浮かび上がってきた。

対象の人物だけを結界内に閉じ込めて外部からの干渉を断ち切るモノだと結論付けたが例外も存在しているという事だろうか？それとも令呪の魔力が強くてここに反応出来たのだろうか？

いろいろと疑問が現れるがそれは一先ず脳の隅に置いておくことにした。

「来な、バーサーカー」
「バーサーカー……だと？」

トレディの真横には白い全身プレートアーマーのバーサーカーが実体化して現れた。俺が壊した手のプレートも修復して元の状態に戻っている。

そして、隣にいたゼストはその単語を聞いて見て驚いている様子だ。アラル港湾埠頭で俺とオリヴィエが離脱するときはこのバーサーカーとやりあっていたからな。

「ガイ!!」

オリヴィエが大声を出してプリムラを持って俺の元へと走って来ている。

「遅いよ、バーサーカー!!」

「A a a a a a a a!!」

「むっ!!」

バーサーカーは俺に向かって神速のような速さで俺に近づいてきた。俺に向かって死の拳を放つのだろう。

隣にいたゼストも傷の痛みが突然の動きに一瞬だが反応が遅れてしまった。だがそれだけで分かった。ゼストの行動では俺に向かってくる攻撃は止まらないと。

俺はプロテクションを展開させた。

「なっ!?!」

だが、読み違えた。神速で放たれたバーサーカーの拳は重くプロテ

クシヨンなどただの紙切れな状態だ。

一瞬にして破られてその死の拳は俺の目の前まで来ていた。それを止めようもなく俺は死ぬだろう。戦場での判断ミスは即死に繋がる。

それは確かに今、目の前の出来事だった。

だが、それは俺の所に来ること無く、人ぐらいの大きさの盾が俺の目の前に二つ現れてそれを防いだ。

「ふん……」

「この盾は……」

「むんっ!!」

トレディとオリヴィエはその盾の出現したことに注意が向いていたが、隣にいたゼストは兜割りのように槍をバーサーカーに振り下ろす。バーサーカーはそれを避けて大きく跳びトレディの真横に着地する。

その間にオリヴィエは俺の隣に来てプリムラを渡してくる。複雑な表情で上を見ながらだが。俺もプリムラを受け取り上を見上げる。

「……なのは……さん？それに……衛宮……士朗……」

そこには大きな砲撃銃を片手で持ちながら上空から俺たちを見ているのはさんの姿があった。周りには盾が1つと紋章のような形をしてコアが埋め込まれているモノが浮遊している。

盾の上には士朗が乗ってなのはさんと一緒に浮遊していた。

「シールドピッド、速度、安定、精密、どれも良好」

『これなら十分に戦えます』

「アーチャーの武装は相変わらず凄いな」

なのはさんの言葉に紋章のような形をした中心部にあるコアがピカピカと光って答える。音声が変わっていないとすれば、あれはレイジングハートだろう。

隣にいた土朗は感心したように俺たちがいる戦場を眺めている。そして、ある一点で凝視し驚いた表情のまま固まった。

「え？セイバーと凜？」

「な、今度は土朗ですか！？」

「あの馬鹿……やっぱりこの聖杯戦争に……」

あの三人はどうやら知り合いらしい。三人には様々な思いがあるのだろう。

「A a a a……L a a a……A a a a a a a a！」

様々な状況が訪れる中、今度はバーサーカーが枯れた声で叫び出し、半歩右足を下げて右腕を後ろへと振り回す。

「……………」

そこに居たのはフードを深くかぶって顔が見えない人物だ。前にバーサーカー戦で会って一度助けてもらった事がある。

その人物はバーサーカーの拳を片手で受け止める。

「へえ、私は感知タイプなのに気付かなかったんだけど。貴方、アサシン？それにバーサーカーの拳をそんな簡単に止めれるなんてえ」

「……………」

その人物は何も答えない。代わりにバーサーカーの右手をしつかりと掴んで、背負い投げのようなモーションでバーサーカーを投げ飛ばす……はずだったが、バーサーカーは円を描くようにして足から着地して、ブリッジのような格好になる。

「!?!」

「A a a a L a a a a a ! ! !」

そのまま、どのようにして力を入れたのかはわからないが、掴まれている手を今度はバーサーカーが掴み、足に踏み込みを入れて起き上がりその勢いでその人物を投げ飛ばす。

その人物も何とか着地して擦り下がりながら結界の端まで下がった。

「この結界内……かなり荒れそうだ」

「ええ、気を引き締めましょう、ガイ。私は前回の名誉挽回のチャンスだと思って動きます」

「……気にする事じゃないと思うが……負けるなよ、フリー」
「ガイも負けないで下さい」

俺のパートナーはまだ完全に傷が癒えていない。昨夜の戦いが響いた。俺もそうだが、俺以上にオリヴィエの傷は大きい。無理をさせないようにしないと。

「プリムラ行けるな?」

『お任せください』

俺は鞘に納刀してあるプリムラを掴み握りを確かめながら現在の状況を整理した。

- ・ガイ、オリヴィエ（ファイター）
- ・アルトリア、ゼスト（ランサー）
- ・キャスター
- ・凜？セイバー
- ・トレディ、バーサーカー
- ・士朗、なのは（アーチャー）
- ・フードをかぶった人物（マスターかアサシン？）

マスターは全て揃っているわけではないが七組全てがここに集結した。状況はバトルロワイヤルとなるだろう。

それぞれの思惑や思考が入り混じったこの戦場は混沌へと突入した。

十八話“戦場と混沌の交差”（後書き）

バトルロワイヤル始まりました。

結界内の広さは半径500メートルぐらいだと思ってくだされば。

何が起こるか作者にもわかりませんw

……ウソです。ちゃんと考えていますので見捨てないで下さいw

まだ、正体がわからないのがバーサーカー、キャスター、アサシン？ですかね。

アサシン？はマスターが一度も出てきてませんがw

しかし、戦闘シーンは本当に三人称の方がいいよね。

これを一人称と二人称でやって読者の人に伝わるだろうか？

そこは腕の見せ所ですね^^

うまく伝わると言いますが。

何か一言感想がありますと嬉しいです。

では、また（・・）ノ

十九話“騎士王と暴君の交差”（前書き）

更新が遅くなりまして申し訳ありません。

仕事の最中に腰を痛めまして、パソコンに向かってられなかった。

何とか、形にしましたので上げときます。

では、十九話目どうぞ。

十九話 “騎士王と暴君の交差”

聖王教会 執務室

「それで話というのは」

「ええ、御二人を呼んだのには訳があります」

私は騎士カリムからお話があるとの事でフェイトちゃんと聖王教会に訪れた。

来る途中の教会内でフリージアさんに会ったのも驚いた。

それに歩きで来たって言うてたし。今度フリージアさんがここに来るとなったらフェイトちゃんの車に乗せていこう。

でも、フリージアさんはよく異性であるガイ君の部屋にホームステイしようと思ったんだろう？もしかして、ガイ君に好意を持っているとか？

そうなるとガイ君、モテモテだね。家のヴィヴィオもガイ君に好意を持っているし。

「……なのは、聞いてる？」

「ふえ？」

フェイトちゃんから声をかけられて、自分でもなんて間の抜けた声を出してしまったのだらうと思った。

フリージアさんやガイ君の事を考えていたらいつの間にか周りが見えなかったようだ。心配そうな表情のフェイトちゃんと、笑みを崩

さないまま気品を保ち静かに見つめてくる騎士カリムの2人の視線が私に集まっていたようだ。

「あ、す、すいません」

「いえいえ。なのはさんもお疲れなのでしょう」

「あ、い、いえ……」

騎士カリムの話聞き洩らしていた事に申し訳なくなって頭を下げる。

この人はカリム・グラシア。

“古代ベルカ式魔法”の継承者で、聖王教会・教会騎士団所属の騎士。管理局にも少将として籍を置いている。

はやてちゃん“機動六課”を設立する際には尽力し、後見役を務めてくれた。

また希少技能“プロフェーティン・シュリフテン 予言者の著書”という詩文形式の予言能力を持ち、そのため滅多に教会の外に出ることがない。

予言は難解な古代ベルカ語であるが故に様々な解釈が可能で、その的中率は騎士カリム曰く

『よく当たる占い程度』

らしい。

「では、もう一度言いますね」

こほん、と咳を1つ吐いて騎士カリムは話を始める。

「私の“プロフェーティン・シュリフテン 予言者の著書”に新たなページが刻まれました。予言の中身も古代ベルカ語で解釈で意味が変わる難解な文章。世界に起こる

事件をランダムに書き出すだけですが、ここ数年は同じ内容と思われるものがストーリーのように刻まれていくのです」

「どんな内容なんですか？」

フェイトちゃんが聞いてみた。さっきはここまで話をしていたのだろう。騎士カリムは目を閉じて思い出すように語り始める。

「過去より死せる王達。未来より戻りし超人達。異の国よりし猛者達。大地の方の塔の黒人達。それら交わりし地にて静かなる聖の戦が起こり、大地の法の塔の地は混沌と化す。真か虚か、聖の戦は世の理を変える源を持ちえる。その先に待ちつけうるは……」

「……」

私とフェイトちゃんは固唾を飲んで、騎士カリムの次の言葉を待っていた。大地の法の塔とはここミットチルダにある中央管理局地上本部の事だ。機動六課の時に起きた事件もこの場所が現れていた。

しかし、カリムは目を瞑り軽く首を振った。

「すみません、ここから先はまだ表されていません」

「……また、このミットチルダで何かが起きるってこと？」

「かも……しれないね」

その内容を簡単に要約すると、人が集まり戦いが始まってミットチルダは混乱を招くことになるという。

「ミットチルダで戦いが始まるような内容です。そして、その先にあるモノが何なのかもわかりません」

「人が集まって戦いが始まるんですね」

私の言葉に騎士カリムは頷く。

「過去からは王達が……未来から戻ってくる人もいるし、別世界からも強い人が集まって来るんだね」

「ヴィヴィオやアインハルトちゃんとの関係性は？」

「……今のところは何とも言えません」

過去の王達は聖王家のクローンであるヴィヴィオや、覇王家の正統血統のアインハルトちゃんも含まれている可能性がある。

親としては娘であるヴィヴィオやその友達のアインハルトちゃんがかなり心配だ。

私は何とも言えない表情を浮かべて困惑した。

「なのは……」

フェイトちゃんがまた心配そうな表情を私に向けてきた。

「ヴィヴィオやアインハルトにも関係があるかもしれないので今回はヴィヴィオの保護者である御二人をお呼びしました。聖王教会で眠っていますイクスヴェリア殿下にも関係しているかも知れませんが今は手探り状態です。何が起こっているのかはわかりませんが十分に注意して下さい」

「わかりました」

「はやてにも伝えておきました。もし、ミットチルダに何かありましたら随時私に連絡を下さい」

そして、お話は解散となった。

結界内

騎士カリムの予言は正しくその通りだった。ミットチルダで聖の戦いが起きている。“聖杯戦争”。まさしくその名の通りだ。

「アーチャー？大丈夫か？」

「いえ、何でもないです、マスター。ちょっと昔の事を思い出しただけですから」

私の隣にいたマスターである薄い赤のかかった短髪に薄い黄色い眼が特徴的な衛宮君が盾の上に座って心配そうに私を見上げてくる。

「アーチャーの昔って、今のこの世界の事か？」

マスターの言葉に私は頷く。この戦いの場所を基準とすれば私は未来から来た人物になる。

“未来から戻りし超人達”とは私の事も含むのだろう。“達”だから私以外にも未来から来た人がいるはずだ。

「ガイの事か？」

「……うん、ガイ君は関係ないよ」

この戦いにはガイ君が参戦している。そのサーヴァントはフリージアさんと言うのも。それは知っていた。この時代の私がこの戦いに足を踏み入れて知りえる知識だ。それはまだもう少し先の事だが。

「この戦いにガイ君は参戦してほしくなかったな」

「だから、フリージアやガイの事を助けているんだな？」

「……うん」

フリージアさんがキャスターに倒されそうだった時、先ほどガイ君がバーサーカーに倒されそうだった時、私は盾を差し込んでそれらの攻撃を受け止めた。

知り合いが危なくなったら助けたくなる。それは人間としては当たり前の感情ではないだろうか？それがたとえ敵だとしても。

「ごめんなさい、マスター。私は甘い感情でこの戦いに臨んでいるのかも知れません」

「いや、俺もおとぎ話のような夢を持って進んでいるから、お前と大差変わらないさ」

「……ふふっ、マスターは優しいんですね」

私は笑って衛宮君を見ると、顔を少し赤くして視線を逸らした。

「と、とりあえず、俺は下に降りて凧達の所に行ってくる。俺の知り合いだからな」

「わかりました。私はここで他のサーヴァントの視察をしています。マスターが危なくなったらすぐに駆けつけますので」

衛宮君の知り合いがどうやらここに2人来ているようだ。“異の国よりし猛者達”とは衛宮君たちなのだろう。

衛宮君も私と同じで地球から来たらしい。経緯は“穴”に巻き込まれてこちらに来たと言っていた。

「ああ。アーチャーも気をつけるよ」

「はい」

そして、衛宮君の乗つけた盾を地面へと降下させていった。1人になった私は一度空を見上げた。

時間帯は昼なのだが、結界内という事なので紫色が一面に広がっているため空の色が変化しているが、昼間からでも見える大きな星二つはいつの時代も変わっていないかった。

「ガイ君、フリージアさん……そして……」

私はもう1人の名前を呟いたが、それは突然の突風で声の音がかき消された。

結界内

今、俺の目の前にはキャスターがその冷たい瞳で俺の事を途方もない量の殺気を含めて見据えていた。

その殺気は背筋に冷や汗が流れるくらいに気持ちが悪くなる。

「ガイ……大丈夫ですか？」
「……ああ」

俺に向けられている殺気を経験したことのあるオリヴィエは隣で心配そうに俺を見つめてくる。ゼストにバーサーカーを任せて、俺とオリヴィエはキャスターを追いかけた。6対1で戦えると思っていたが、状況がかなり変動した。

偶然なのか必然なのか全てのサーヴァントがこの結界内に集結したのだ。バトルロワイヤルな状況である。

キャスターの見た目は4〜50歳ぐらいの少し年配の掛った男性。セミショートの黒い髪にも少し白髪が混じって入るがそれをオールバックにしているため年配という感じがしない。服装もバリアジャケットで黒いズボンに黒いインナーを着て黒いロングコート。ロングコートには僅かに装飾品が付いている。

キャスターの周りには黒い霧を纏っている。あの黒い霧は黒い武器に瞬時に変わるといふ凶器の霧だ。おまけに何もなくとも飛ばせるという。

そして、右手にはそれを操っているだろう宝具であろうデバイスである杖が握られている。一度技を展開した時にデバイス名を言っていた。

確か、「ジャツカル」と。

「お前の相手は余ぞ。黒霧の使い手よ」

俺とキャスターが対峙していると真横から先ほどまで武器を交えて

いた紅いドレスを纏った金色の少女（女性？）、セイバーが弾丸のように飛び出てキャスターに捻れた特徴的な赤い剣を縦切りに振っていた。

セイバーは俺ではなくキャスターと対峙したいようだ。

「……」

キャスターはそれを難なく杖で受け止める。

「ふん、割り込んできたあのマスターばかり見て、余の事は無視か」

「今は貴様に用はない。暴君の姫君よ」

「……お主、奏者の名前を知っているだけではなく、余の真名までも知っておるのか？」

疑問と困惑の色がセイバーの表情に浮かび上がる。キャスターは答えるかわりに周りの黒い霧が様々な武器となってその矛先をセイバーに向けていた。

「ぬるい！“燃え盛る聖者の泉”トレ・フォンターネ・アーテント集え、炎の泉よ！！」

セイバーは疑問の色を消して表情を険しくして、キャスターの杖をはじき返し、向けられている武器を剣の一振りですげ飛ばす。

その剣に何かが宿っていたかのように思えた。

そして、弾き飛ばしたキャスターに向かって剣を振るう。

「ゆくぞ！“童女謳う華の帝政”ラウス・セント・クラウディウス！！」

傍から見ても分かる。とても重い衝撃をもった威圧感のある剣技だ。一振り振るごとに大気に風の切る音が轟音となり周囲に凄まじい衝

撃をまき散らす。それがキャスターに襲いかかる。

「暴君といわれるだけの事はあるな。剣技が暴力だ」

だが、キャスターは驚愕の表情に変わること事なく、それを何の動作もなく紙一重で避け続けた。

「……………ん？」

その戦いを見ていたが違和感をキャスターから感じた。だが、それをどう言葉に表現したらいいか分からない。分からないが違和感だと言う事は頭の中で分かっていた。

「ぬぐう！！」

少し考え事をしていたらガラスが割れる音とセイバーの声が聞こえた。

キャスターの攻撃で飛ばされて、セイバーはビルの上階の窓ガラスを割りながらビル内へ突っ込んだようだ。

あれほどの強烈な連撃を避けた上に返しに攻撃を加えてきたキャスター。やはり只者ではない。

その冷たい瞳がこちらに向けられる。その眼を見ただけでも身震いを覚える。殺気の量が半端ない。

「次は貴様達だ」

「……………」

俺は静かにプリムラを握り立ち居合で構える。オリヴィエも手甲を

握りしめて構える。

出来ればあのセイバーと協力関係でキャスターを迎撃したかったが、あのセイバーはキャスターと決着をつけたがっている。きつと1人で戦うつもりなのだろう。

その意志に俺もオリヴィエも意見を横入れする気はなかった。それもあのセイバーの生き様なのだから。

先ほどはアルトリアとゼストが居たが今度は俺とオリヴィエだ。

「ファイター、行くよ」

「ええ、ガイ」

一時の静寂。そこに一陣の突風が巻き起こる。

それが合図で俺たちは走り出した。

「凜！！何故ここに！？」

「あゝ、私にも分からないんだけどね」

凜がここにいるのには驚きを隠せなかった。ガイと同盟を組んでキャスターと対峙していたが、そこからさまざまな人たちが乱入してきた。

その中に凜とシロウが居た。私は少しの間、バーサーカーをゼストに任せて凜と話をなるべく移動した。

「もしかして、凜も“管理者”に会いましたか？」

「ええ、モニター越しでね」

凜は片目を瞑りながら頷く。

「おゝい、凜とセイバー」

「シロウ」

「結局あんたもこの戦いに参戦していたのね」

そこに、盾に乗ったシロウが私たちの所まで来て笑顔を私に向けてきた。

「まさか、セイバーに会えるとは思わなかった」
「私もこの世界で凜とシロウに会えるとは思いませんでした」

冬木の聖杯戦争では私は聖杯を破壊して消えた。あの後はどうなったか気になる。

ですが、今再び凜とシロウに会えてたことの嬉しさの方が疑問よりも勝っていた。

「冬木の聖杯ではなくここにも聖杯が存在しているらしいわね」

「ええ。だから、サーヴァント達が現世で実体化をする事が出来るわけですね」

聖杯はこの世界にも存在している。管理者から聞いた話だ。

「でも、そうなると聖堂教会がこちらの世界にも干渉しているというわけなのよね」

そう、聖杯は聖堂教会が監督を行っている。この世界にも聖杯があったという事がどのようにして分かったのかはわからない。私と同じで、“ワームホール理論”でこちらに来たのだろうか？

「それにしても、セイバーは今回はマスターなんだ」

「ええ。サーヴァントがマスターになれたという事例はありませんから私自身もそこは驚いています」

凜は私の中に魔術回路が埋め込まれているのに気付いたのか私を見据えていた。

「え？セイバーがマスターなのか？」

「ぬぐう！...！」

シロウも私に疑問をぶつけようとしたその時、バリンとガラスの割れる音と声が耳に響いた。割れる音の方を見ると、今度は壁を突き破る低い破壊音と再びガラスの割れる軽い音が聞こえてきた。

「セイバー!!」

セイバー？私……ではないですね。凜の新しいサーヴァントでしようか？私と瓜二つの顔を持っていた人物。

凜が声を高くして叫ぶ。窓ガラスの破片と共に赤いドレスを纏った金色の髪少女（女性？）が落ちてきて、何とか着地したが片膝をついた。

やはり私と瓜二つですね。

「え？セ、セイバー？」

シロウは初見で見る赤いドレスの少女（女性？）に驚きを隠せなかった。私は二度目なのでそれほど驚く事は無かった。しかし、やはり気になる。あの私と瓜二つの人物は誰なのだろうと。

「くっ、油断したのう。キャスターの威力が強すぎて余自身がビルを突き抜けるとは」

赤いセイバーは特徴的な剣を地面に刺して、それを杖代わりにして何とか立ち上がる。

「たく、無茶しないでよね」

「あのキャスター、やはり只者ではないようだの」

杖代わりにしていた剣を引き抜き、一度振って剣についた埃などを掃い捨てる。

「ん？」

そして、赤いセイバーは初めてこちらに視線を移した。そして、表情を驚きに変えて、わなわなと震え始める。

「な、何故余がもう1人そこにいるのじゃ!？」

ビシッと聞こえてきそうな音を決めて、人差し指を私に指した。

「いえ、私も聞きたいぐらいです」

何故私と瓜二つの人物が、しかも“セイバー”として召喚されているのかが気になる。ですが、なぜか一つだけ納得いかない部分があった。それは……

「ふむ、確かに余に似ておるが胸は随分と主張しないのだな」

赤いセイバーが私の胸をマジマジと見ながら語る。

そう、私と赤いセイバーの外見が全く似ていようと胸だけはなぜか大きさが違う。しかも、相手の方がでかい。

「……凜、この者に挑んでもよろしいですか？」

「い、いや、落ち着きなさいよ、セイバー」

「ん？奏者よ。余を呼んだか？」

「あ、あゝ、もう、紛らわしい!!」

凜は私の事を言ってきたと思いますが、「セイバー」の単語は赤いセイバーも反応した。そう言えば、凜には私の真名を教えていませんでしたね。

「ええい、余の容姿が美学というのなら愛でも良いが偽物は流石に要らぬ!」

そう言つて、特徴的な剣の切っ先を私に向ける。

「……それは宣戦布告という意味を表している行動と受け取つても?」

「うむ、構わぬぞ。フェイカーよ」

「……」

流石に胸が主張しないだのフェイカーだの言われて我慢が出来なかった。私も風王結界を纏つた約束された勝利の剣の切っ先を相手に向ける。エクスカリバー

「ふ、2人ともやめなさいよ!!」

「止めるな奏者よ。このフェイカーは余の美学に反する」

「ええ、凜。この者とはケリをつけなければなりません」

凜の停止に私も相手も聞く耳を持たない状態だ。お互いにお互いの事を許す気は無いのですから。

「せ、セイバー。ここは剣を納めて……」

「シロウ（おぬし）は黙って下さい（おれ）!」
「……」

私たちの無駄に息のあった発言にシロウは何も言い返せなかった。

「……令呪使うわよ？」

凜が声を低くして赤いセイバーを見ながら腕まくりして腕を見せてくる。そこには令呪が刻まれていた。

「マスターよ。それはもしもの時にとっておくモノだぞ」

「今が“もしも”の時じゃない？」

ニコツと小悪魔な笑みを浮かべながら赤いセイバーに何も言わせな
いような覇気を飛ばしている。

「し、しかしだな……」

「使うわよ？」

「う、うぬ……し、仕方あるまい。美少女であるマスターに嫌われ
るのも困る」

「へ、変な事言わないで！！」

凜は顔を真っ赤にしてそっぽを向く。赤いセイバーは剣を下ろして、
私に敵意が無いことを示す。納得いかない表情をしていたが。

「凜……口を挟まないで下さい。侮辱された数々。ここでキッチリ
と清算してもらおう」

ですが、私は剣を下ろす気はなくそのまま赤いセイバーに突っ込ん
で剣を振り下ろした。

「ふむ、不可視の剣とは面白いな。武器は余のフェイクではないよ
うだな」

だが、それは簡単に受け止められた。表情は何やら輝いている。

「凜よ。挑発は乗るぞ。たとえ令呪が使われても余は剣を振る」

「……はあ。もう勝手にしなさい」

「ははっ、凜も大変なんだな」

もう手に負えないと思ったのか凜は止めることを飽きられたようだ。シロウもそれに同情した。

赤いセイバーは私の剣を弾いて距離を置いた。表情は好奇心旺盛な少年みいだ。

「ゆくぞ、フエイカーよ」

「それは貴方ではないのですか？」

私達は再び得物を構えた。

「攻め立てる！！」

赤いセイバーが何の前触れもなく私に向かって直進して剣を振り下ろした。

「甘い！！」

「ぬう！！」

それを私は下から吸い上げるようにして弾き返した。その反動でやや後ろに下がった赤セイバーに私は追い打ちを仕掛けるように剣の連撃を繰り出す。

「不可視の剣とは何とやりづらい」

赤いセイバーはそう言いつつも私の剣の軌道を読んでいるのか本能的な感なのか私の攻撃を受け流している。

受け流された剣圧はそのまま人工物の建物であるビルなどにブツかり破壊音を立てながら半壊していく。

そして、次の攻撃は受け流すことなく、それを紅い剣で受け止め鏢迫り合いのような状態になった。

「ですが、私の攻撃が通りませんね」

「ふん、余を誰だと思っておる」

赤いセイバーは楽しいのか声が弾んで嬉しそうだ。

「しかし、フェイカーと言えどもなかなかの剣の腕を持っておる。褒美を与えようぞ」

「いえ、貴方もなかなかの腕をお持ちだ」

私も声が弾んでいるのが分かった。風王結界を付けている剣を見切れる上に剣の腕もかなりの使い手だ。

この聖杯戦争で未だに剣の使い手と交えていなかったこともあつてか、この者と武器を交え武勇を競い合う事に心が躍る。

動機は不純なものもありましたが真っ向勝負を受け入れてくれるこの人物には感謝を送りたい。ファイターも真っ向勝負をしてくれました。今回の聖杯戦争は騎士道的な意味で喜びを覚える。

「ふんっ!!!」

そして、赤いセイバーが私の剣を弾き一度距離を置いた。そのまま視線を凜に移す。

「マスターよ。少し魔力を使わせてもらうぞ」

「あんまり無駄遣いしないでよね。それと程々にしておきなさい。周りは敵だらけなんだから」

私たちの戦いを止める事を諦めていた凜は半ば投げやりのように言葉を放つ。シロウは苦笑いをしていた。

「うぬ、贅沢に使うぞ。余は儉約は嫌いだからな」

「ちよ、人の話聞いてた!？」

マスターである凜から魔力の許可(?)が下りたので紅いセイバーは笑みを零して再び私の方を見据える。

「この余の剣は“彼の円卓の騎士ガウエイン卿”に匹敵する武器なり。それに伴い、その剣の技量をも匹敵しよう」

「!？」

赤いセイバーが言葉を発した瞬間、雰囲気が変わった。

赤いセイバーが剣を構える。その構え方も先ほどとは変わっていた。その構えは昔の頃の記憶を思い出させる。

「ガウエ……イン？」

円卓の騎士の1人、ガウエイン卿の構え姿だ。忠勇を誓ってくれたガウエイン。

私の剣、“勝利された約束の剣”^{エクスカリバー}の姉妹剣である武器、“転輪する

エクスカリバー・ガラティーン
勝利の剣”を所持していた。

「皇帝特権”だ。ゆくぞ!」

その構えから赤いセイバーは走り出した。私は昔の事を思い出していたので反応が遅れてしまい、その剣を受け止める。反応が一瞬遅れてしまったため、そのまま防戦の剣戟が始まった。剣戟の最中といえど赤いセイバーは私に声をかける。

「ふん、考え事か?」

「何故、ガウエインの剣技を使えるのです?」

「何を戯けたことを。“皇帝特権”に決まっておろう。余に出来ぬことなど無い」

さも当たり前のように答える赤いセイバー。

皇帝特権……マスターである私の知識に新しく刻まれた。

クラス……セイバー

マスター……遠坂凜

真名……???

固有スキル

皇帝特権：EX

本来持ちえないスキルも、本人が主張することで短時間だけ獲得できる。

該当するスキルは騎乗、剣術、芸術、カリスマ、軍略、等。
ランクがAランク以上の場合、肉体面での負荷（神性など）すら獲得する。

「何だこれ？強すぎるスキルじゃないか？」
「私も初めて見たわ。これが“皇帝特権”」

同じマスターであるシロウと凜も驚きを隠せないでいた。

本人が主張することで獲得できる。

だから、先ほど“彼の円卓の騎士ガウエイン卿に匹敵する武器”と主張したことによってガウエインの武器にもなり、“それに伴い、その剣の技量をも匹敵しよう”と付け加えたのでガウエインの剣術をも獲得しているのだ。

「これは忠義を貫いた者の剣技だ。特と味わうが良い」

その言葉を最後に私の剣を弾く。その威力は“転輪する勝利の剣”
に匹敵するほど重く、私は体のバランスを崩してしまった。
その間に赤いセイバーは剣を構える。

その構えは……。

「全ては我が王の為に“忠義の剣閃”！！」

片手持ちで剣に太陽の灼熱を具現するぐらいの高温の炎を纏わせてそれを振り下ろす。太陽の聖剣だ。その灼熱で相手を燃やしつくすイメージが紅黒くなった剣から連想される。

この技はまさしくガウエインの技そのものだ。この技で何度も助けられた事か。

しかし、この赤いセイバーはそこまで使う事が出来るとは、なんて

強いスキルなのだろう。だが、このままでは私とその剣で燃やしつくされてしまう。

「くっ、風王結界よ!!」

私は急いで風王結界を解いた。

その解いた時に、聖なる宝剣を守っていた超高圧縮の気圧の束が、不可視の帳という縛りから解き放たれて、この周囲の大气に拡散された。

狙いを定めていなかった為、辺り一面にその強力な風圧が暴れるかのように縦横無尽に駆け巡る。

「なぬ!？」

振り下ろしていた赤いセイバーも突然の風圧に剣の軌跡がブレ、更に小柄な体格だったのでその風圧で軽く飛ばされた。

かくいう私も急いで解いたので踏みとどまるための準備もしていない、風王結界によって軽く飛ばされた。

「ぬつとと……」

赤いセイバーは何とか着地をして息を吐いて私の方を見る。私も着地して赤いセイバーを見た。

「そんな隠し玉を持っていたとは……それにしても、その輝きの剣、何と美しいモノだ!!」

赤いセイバーは再び好奇心に捕らわれていたのか眼を輝かせて私の剣を見る。今は風王結界を解き放ったので黄金に輝く剣がこれでもかと眩い光を主張してくる。

「ふむ、しかし、そうか。“英霊の座”にまで招かれた者ならば、その黄金の宝剣を見間違えはせぬな。おぬし、かの名高き騎士王であるか。となると、ガウエイン卿の技で戦いを仕掛けたことに関しては無礼を申そう」

そう言つて、赤いセイバーは申し訳ないような表情をした。我儘な姫君なのかと思つたが、意外と律儀な一面を見せてきたので私はあまり気にしないことにした。

「いえ、お気になさらずに。ですが、そう言う貴方は剣からでは人物像が全く想定できませんね」

ひとたび英霊として時間列から隔離された者たちは歴史の前後は関係ない。自分自身より後世の英雄についても聖杯のバックアップによつて知識を持ち合わせることが出来る。

あの者が私からして過去なのか未来なのかはわかりませんが。

しかし、あの剣は確かに特徴的な剣ではあるが、あれからの人物像が出てこない。

「余の事はよいではないか。しかし、おぬし、マスターではないのか？何故に古き王がマスターとしてこの戦いに参戦しておるのじゃ？」

「……いろいろありまして。一言で語るには時間が足りない」「ふむ、まあよい。今この武を交える喜びを分かち合おうぞ」

そう言つて再び剣を構える。先ほどのガウエインの構えとは違い、最初に交えた時の構え方だ。私もそれにこたえようと剣を構えよう

とした。

「はい、そこまで!」

パンと軽い音がして凜の声が聞こえた。凜の方を見ると手を叩いて私たちを先ほど以上の小悪魔的な笑みを見せてきた。隣にいるシロウが冷や汗をかいているのが分かる。

「これ以上、やると共倒れになるわよ?」

「い、いや、しかしだな……」

「敵は周りに“も”いるんだからね」

「う、うむ……」

“も” って所を思いつきり主張して赤いセイバーを黙らせる。

「セイバーもセイバーよ。何で挑発に乗るような事をしたの?」

そのセイバーはたぶん私の事を言っているのだろう。

「屈辱を重ねたこの者を許せませんでしたので」

「確かに騎士王とはわかったが何ゆえに余と同じ容姿なのじゃ!?
これではフェイカーといっても仕方あるまい」

「いえ、あなたが何者かは分かりませんがフェイカーとはあなたの
……」

「ええい、うるさいうるさい!」

「あはは……」

凜の言葉がこの辺り一面に響き渡った。

「とにかく、セイバー達は戦う事は禁止だからね」

「……で、ですが」

「私と共同関係を築こう事は出来なくなるわよ」

「そ、それは困る」

凜と組めるとなると聖杯戦争は大いに有利に傾く。凜の魔術師としての知識はかなり役立つ。凜と組むことが聖杯戦争に勝ち残りやすいのだ。

「し、仕方ありません。不本意ではありますが、今までの侮辱は忘れましょう」

「なんじゃ。おぬし、余との対決をつけないまま終わらせるのか」
「今はその時ではありませんから」

私は剣を霊体化させた。赤いセイバーも何故か納得のいかないような表情をしつつも同じく剣を霊体化させた。

「士郎。アンタももちろん組んでもらうわよ」

「ああ。わかってる」

赤いセイバーとはケリを付けずに凜達と同盟を結ぶことにした。

「あゝ、骨折り損だったのう。余は物足りぬ」

赤いセイバーは不機嫌な表情を隠すことなく晒し出していた。そして何かを思い出したような表情をして踵を翻した。

「忘れておった。キャスターとの対決を付けてこなければならぬ。行くぞ凜よ」

「え、ちょ、ちょっと待ちなさいよ。セイバー……！」

マスターである凜の許可を待つことなく歩き出す赤いセイバー。それについて行く凜。

「凜も大変なんですね」

「ほんとだな」

あの赤いセイバーは縦横無尽の我儘で唯我独尊な性格だとこの短い時間で分かった。あれを相手にするのは大変だとわかる。

凜……頑張ってください。

私は心の中で凜を応援して、私は凜達とは反対方向へ向いた。

「私は一度ランサーの所へ戻ります」

「俺も付いて行くよ」

「わ、わかったわ。また後で合流しましょう……って、待ちなさい……」

「奏者よ。早よせぬか」

そして、凜と赤いセイバーと別れて私はシロウと一緒にバーサーカーに立ち向かっているゼストの応援に行くために反対方向へ歩き出した。

アルトリアが戻るまで時間を稼ぐ。

私は心の中でそう決めていた。今、バーサーカーと剣戟を繰り広げていた……私が防戦一方の剣戟だが。

目の前のバーサーカーの力は強力だ。一撃一撃が強力で単純な力押しなら直ぐに負けてしまう。

アルトリアが戻るまで時間を稼げるか分からなくなってきた。

「きゃはは、おっさん。早く死んじゃいなよ」

バーサーカーの後ろにはトレディという少女でありバーサーカーのマスターが残忍な笑みを浮かべながら俺とバーサーカーの戦いを見ている。

アルトリアが離れてから随分と経った。アルトリアが戻るまで体力を温存させておくべくバーサーカーの攻撃に防戦一方でいた。

アルトリアと2人で攻めた時も苦戦していたというのに1人ではかなり厳しい。機会を窺って反撃をするのもいいが1人だとリスクも伴う。

やはり、アルトリアが戻るまでは防戦一方で守るしかない。

「バーサーカーに1人で立ち向かっても死ぬだけだよ。きゃははは！まあ、ガイには不意打ちを撃たれたし邪魔者入ったから生き残ったけど次は無いやねん」

やたらと頭に響くトレディの高い声が不愉快と感じつつもそれを無視してバーサーカーと対峙する。

「ふんっ！」

振りかぶってきたバーサーカーの右拳を私は槍の刃を上に向けて振り上げた。その刃は相手の厚い手甲によって止められてしまっただろ

「流星”！！”」

『ドライブ・スタート』

だが、デバイスも分かっていたのか私が一言呟いただけで瞬時に槍に魔力を込めてバーサーカーを空中に吹き飛ばすぐらいの勢いをつけて手甲ブツけた。

「……へえ、おっさん。やるわね」

「Aaaaaaa!」

バーサーカーの拳を受け止め、そのまま思いつきり空中へと受け飛

ばした。バーサーカーの枯れた声が少しずつ遠くなる。

私は追撃を行わずにトレディへと加速した。

「きゃは、私を狙うのねん おっさんなんかにもテても嬉しくないわねん」

トレディの戯言は聞かず、加速したまま刃を横にして突きのモーシヨンでトレディを貫こうとした。

「!?!」

「一応、私も武の嗜み程度は受けているから、それを受け止めるのも楽よ」

その突きを行った槍はトレディの肘と膝に挟まれて威力を殺されていた。

「殺りな、バーサーカー」

「むっ!?!」

いつの間にか飛ばしたはずのバーサーカーがすきだらけになった私の上から右足を振り下ろしていた。自重の力も相まってかそれを喰らったただでは済まない事は分かっていた。

「ランサー!?!」

だが、それはアルトリアが私の後ろに駆けつけて来てくれてエクスカリバーでその攻撃を受け止めてくれた。

「来たか」

「遅くなりまして申し訳ありません、ランサー」

そう言いつつ、受け止めていたバーサーカーを弾き飛ばす。

「ふんっ、逃げたと思ったけど戻ってきたんだ」

少し不機嫌になったトレディは私の槍を離して距離を置いた。

「……見ない顔が居るな」

「彼は衛宮士朗。仲間です。それよりも……」

アルトリアが何かを言おうとしたとき、ドンっと、地面が一度大きく揺れた。その後、すぐに激しい揺れが後になってやってきた。

「な、なんだ？」

衛宮士朗が困惑した表情を顔に表す。アルトリアも同じ表情だ。

「きゃはは、何が起きても楽しめて濡れちゃいそ」

そんな中、トレディのやたらと高い声だけは楽しそうだった。

違和感。

キャスターを始めて見た時に感じたモノ。その違和感が何なのか分からないまま、俺はオリヴィエとともにキャスターと戦いをしていった。

「はあっ！！」

俺は鞘から鞘走りをして抜いた刀をキャスターに放つ。

「……………」

だが、それも杖で何なく受け止められてしまう。

「“聖連拳”！！」

オリヴィエも俺とは逆の位置からキャスターを狙ってはいるが、それも黒い霧に遮られてキャスターに届く事が無い。

「……時間か」
「何のことだ？」

キャスターがボソツと呟いたのを俺は聞き逃さなかった。

「ふんっ」
「「!？」」

キャスターはくいつと首を軽く振った。ただそれだけで、キャスターの周りを纏っていた黒い霧が幾つもの武器となって矛先を俺とオリヴィエに向ける。
そして、何の予備動作もなくそれが俺たちに向かって飛んでくる。

それも、事前に分かっていた事だったので、何とか避ける。オリヴィエもこういう攻撃だと分かっていたのか飛ばせるという知識が無くとも避けていた。

全くもって英霊って凄いモノだ。

「……おまえは……」
「……」

だが、俺たちが避けている間にキャスターの懐にフードを深くかぶったパーカー姿のアサシン？が居て拳をアッパー気味に振り上げた。
キャスターも最初だけは驚いていたが、そのアッパー気味の拳を冷静に避けた。

「ぐっ!？」

だが、アサシン？はアッパー気味に上げた拳の勢いに任せて体を少し浮かせて、膝蹴りをキャスターの顔面にクリーンヒットさせた。

始めからアッパーの拳は囷だったのだ。避けられると分かってそれを組み込んで次の攻撃をしたのだ。

予想外の攻撃方法にキャスターは顔面を片手で押えながら、少し後退しつつ黒い霧を武器に変えてアサシン？に飛ばした。

だが、それをアサシン？はキャスターの激しい武器の雨を紙一重で避けつつ距離を縮めていた。

「貴様……」

「……」

3対1でも対等か負けているぐらいに強かったキャスターが明らかに顔の色を変えていた。焦りの色だ。どんな武器を作ろうが、どんなに刃の面積が大きい武器を作ろうがそれはアサシン？の前では簡単に避けられてしまう。

セイバーの時も弾かれていたりしたがここまで焦りの色を見せたキャスターは初めて見た。セイバーと何かが違うのだろうか？

「あれは誰なんだ？」

「わかりません。ですが、この場合だと味方だと思ってもよさそうですね」

オリヴィエは俺の隣に来て、その戦いを見ていた。

アサシン？は顔こそ見えないが余裕を持って避けているのが見て分かる。ちゃんと見てはいなかったが、アサシン？の格好は今見ると異様とも言えた。

膝まであるニーソックスにアサシン？よりも一回りも二回りも大きいパーカー。それなので晒し出している太ももの先は直にパーカーの裾になっている。絶対領域というものだろうか？

しかし、裾からもチラチラと衣服見たいのが見えたりするので、あのパーカーは顔を隠すために来ているだけなのだろう。

「あれは女性……か？」

「おそらく」

オリヴィエも女性だと言う事に否定は無いようだ。

ニーソックスを履いた男性なんて想像したくないしな。

「……イレギュラーか……それに時間か」

「……」

キャスターが何かを呟いていた。それでもアサシン？の行動は変わることなく、キャスターに近づく。

「……煌きの型“楼蘭”」

アサシン？の両手を開いて合わせて指先を左右に開けるような形の掌停を作り、右足を思いつき踏み込んでそれをキャスターの胸に向かって放った。

「ぐっ！！」

その掌底がキャスターの胸に当たった時、周囲に凄まじいほどの衝撃が一度だけ伝わった。核爆弾が爆発したのではないかと言っぐらゐの破壊音と衝撃。

威力は凄まじいモノものだとキャスターの苦痛の表情から読み取れた。

そして、キャスターは口から血反吐を吐いた。

「ぐっ！！強……烈な一撃だ」

「……」

アサシン？は何も言わず、右手で上げて手刀の形にしてそれを振り下ろした。それが止めを刺す死神の鎌なのだろう。

だが、目の前に自分に振り下ろされるであろう死神の鎌が迫っているようにもキャスターは笑っていた。

「タイム……リミットだ」

『タイマー式ゲート、開きます』

「……」

アサシン？は何かを感じ取ったのか、手刀を振り下ろすのをやめその場からジャンプして大きく後退した。

それと同時にキャスターの目の前に何かが現れた。いや、現れたと言っのもおかしい。

あれは空間を割いて“開いた”というべきか。黒い“穴”があった。

その穴の大気と周囲の大気が絡み合う事が出来ないのか、バチバチと音を立てて周囲の大気を少しずつそれは侵食していく。

その振動は凄まじく、この結界内では地面を激しく揺さぶる縦揺れの大規模な地震が起きているのではないかと錯覚してしまうほどだ。ちよつとでも油断してしまうと地面からの激しい震動で空中に投げ飛ばされそうだ。

「ファイター!!!」

「ガイ、空へ!!!」

俺は地面に立っているのが困難だとわかり、オリヴィエの肩に手を回して空へと飛んだ。

そして、その異質な穴は人が一人入れるぐらいの大きさになって浸食をやめた。

そこにキャスターは入ろうとして、一度俺の方を見上げてきた。

「お前は……」

最初の部分だけは聞き取れたが最後の方は何を言っていたのか分からなかった。口は動いていたが、生憎と口先の動きだけでは何を言っているのかは読み取れない。

そして、言うだけ言ったのかキャスターはその穴に入った。

次の瞬間、その穴は瞬時に閉じて、張っていた結界は無くなり周り

からは活気の溢れる音が聞こえ始めてた。

「そう言えば、この結界はキャスターが張ったんだっただな」

俺はそう言いつつ、地上に降りてオリヴィエを下ろした。いつの間にかオリヴィエは私服姿に戻っていた事に驚きはしたが、日常に戻って来たのなら丁度良い。

俺もバリアジャケットを解いて授業参観で着ていた背広を着込んだ。

「大きな地震みたいのがあったと思ったら、いきなり元の世界に戻されちゃったわね。それにキャスターもロストしたし」

「ん？」

そこに、黒い髪を黒いリボンでツインテールに縛り、翠の瞳の少女……確か凜と言っていたな。

その子がやって来た。

黒いニーソックスに黒く短いミニスカート。胸元に十字の紋章が付いている赤い服を着ている。

綺麗とも可愛いとも思えるこの美少女もこの聖杯戦争の参加者なのだ。俺は油断せずに相手を見据えた。

「ああ、別に今からあんた達と戦おうって気はないから安心して」

ニコツと笑う凜。

……そういつ風に笑うととても可愛いんだが。

「ガイ……あまり油断しないで下さい」

「あ、ああ。す、すまん」

何やら不機嫌そうなオリヴィエの声を聞いて、今の考えていたものを忘れようとした。

気を緩めないつもりが無意識に緩んでいたようだ。美少女って恐ろしい。

「まあ、キャスターが居なくなっただのならここには用はないわね」

「なあ、凜って言ったか？聞きたい事がある」

「ん？なに？」

足を翻して来た道を戻ろうとした凜を俺は呼び止めた。

「君はなんでこの聖杯戦争に参戦したんだ？」

「うん、何でって言われてもね」

凜はこちらに振り向いて視線を右下に向けて考えるポーズを取った。そして、意外と簡単な一言が飛んできた。

「家系の悲願だから……かな。この聖杯戦争でも私たちの求め来た聖杯と同じだと思うし、この聖杯も悲願よね」

この？求めてきた聖杯と同じ？

その単語から推測するに他にも聖杯戦争というのはあったという事になる。そう言えば、管理者も言っていた。

前は第五次聖杯戦争で管理外第97世界の地球のとある土地で行われていた、と。

どのような気持ちを持ってこの戦いに参戦したのか聞いてみたかったが、このマスターはどうやら前回の聖杯戦争からの参戦者という事になる。

その時から家系の悲願というモノが心に決まっていたようだ。

「話は終わり？それじゃあ、私は行くわよ。また戦場で会いましょう。貴方とは敵同士なのだから」

「あ、ああ」

そう言つて、凜は何の未練もなくその場から離れて人混みの雑踏の中へ消えて行つた。

「……家系の悲願か。凜つて子も凄いな」

「代々の悲願ですか。まるでアインハルトみたいですね」
「だな」

あの凜は何となく霸王の悲願の為に一生懸命になっているアインハルトと被つて見えた。被らせるのもおかしい話だが、それでもアインハルトと似ていると思うと口元が緩んで笑つてしまう。

「そういえば、あのフードを被つた人物が居なくなりましたね」
「確かに」

俺たちはきよろきよろと周りを見渡した。突然現れたあのアサシン？はこれまた突然に姿を消したようだ。

「あれはアサシンのクラスのサーヴァントって事でいいのかな？」

「消極法で行けばライダーかアサシンですが、あれはアサシンで間違いないかと思えます。乗り物ありませんでしたし、気配をあまり感じませんでしたしから」
「だな」

この戦いで得た情報もかなりあった。後で整理をしなければならぬ。アルトリア達とも一度会っておきたかったが、今は夕刻時。

部屋に戻って、体を休めたい。

「とりあえず、帰るか。アインも呼んで三人で夕食を食べるか」

「ええ、その方がアインハルトも喜ぶかと」

そして、俺たちは帰路に沿って歩き出した。

「なあ、フリー」

「はい、なんでしょう？」

歩きながら俺はオリヴィエに声をかけた。

「昨日から元気は無かったけど、今はそうでもないみたいだな。何かあったのか？」

「いえ、それほど重大な問題ではないので気にしないで下さい。このモヤモヤ感を取り払うために一度、思い出のある聖王教会へ赴きました」

「へえ、あそこに行ったんだ。後で一緒に行こうと言ってたけどなかなか時間が取れなくて悪かったな」

昔の思い出に親しんで辛い思いを消し去ったのだろうか？まあ、オリヴィエは普通に強いからそのくらい訳がないか。

「いえ、また後でガイと行ってみたいです。歩きで行くのも大変でしたから、ガイに紋章で呼ばれた時は移動が楽でしたね」
「……はい？歩きで？」

思わぬ単語に俺は驚きを隠せなかった。

そんな何でもないような話を続けながら俺たちは日常の一環であるマンションへと帰って行った。

十九話“騎士王と暴君の交差”（後書き）

今月のコンプエースにオリヴィエの過去話がチラッと出てきた。

たぶん来月号はその話の核心に迫ると思うからそこを見ないと（切実w

今回はセイバーと赤セイバーの対決を主にしています。

この二人の対決を一度、書いてみたかったw

同じ容姿をしたセイバーですからね、書いてて楽しかった。

しかし、今度、FATE/EXTRA CCC と言うものが出るらしいね。

今度は白セイバーか……セイバー商法やめろしw

いや、セイバーはカッコいいからいいけどねw

番外編で白セイバー出そうかな〜とか思ってみたり。

何か一言感想がありますと幸いです。

では、また（・・）／

二十話“練習と戦争の交差”（前書き）

ああ、気づかなかつた……社会人ってこんなにも……

大変だったんだ。

b y働き出した 志貴

どうもガイドです。

まずはお詫びを。

前の更新から一ヶ月半経ってしまってますいませんでしたm | |
m

会社が忙しい時期に入ってしまったい、まともな休みを今日やっと取れました。

今月はまだ一日しか休んでいなかったし体が重かった……。

忙しい時期は本当に10時間残業とか発生するんだな〜(´・`・´
)

それでも合間をぬってちょこちょこ書いていたので何とか纏められ

ました。

この小説を読んでもくださる人も少しずつ増えていきますので何とか頑張っ
張って行きたいものです。

作者の日常なんかどうでもいいから読ませろ？

全くですねw

では、二十話目入ります。

二十話 “練習と戦争の交差”

結界が解かれた後、いつの間にかバーサーカーとトレディは姿を消していた。

左右は高いビルによって光が遮られ、入口の夕日の光が少しだけ照らしているうす暗い路地裏に私は居た。

耳に周りの都会の音が戻ってきた。

人々の話し声。車のエンジン音。携帯音。それらが重なり合って1つだけの音が分からないような雑音が路地裏の入口から聞こえてくる。

先ほどまでとは無縁の音達が戻ってきて私はホッと一息をついて夕日の照らされていない壁に背中を預けた。

『大丈夫か？アルトリア？』

『ええ、寧ろゼスト。貴方の方こそ大丈夫ですか？』

結界が解かれたと同時にゼストは霊体化して、私の脳に直接語り出した。私も結界が解かれたと同時に服装をダークスーツに戻した。

『アルトリアがタイミング良く来てくれたから私は大丈夫だ』

『すいません、ゼスト。あなた1人でバーサーカーに立ち向かわせてしまって』

バーサーカーが現れた後、凜とシロウもあの戦場に現れたので少しの間、バーサーカーの相手をゼストに任せて、2人に会おうとした。徐々に2人の姿を見て、驚いたがそれ以上に会いたい気持ちが抑え

られなかった。

『気にするな。別れた友に会いたいという気持ちは誰にでも持っているモノだ。その気持ちを大事にする事だ』

『……ゼストもその気持ちを？』

『……ああ、あつた』

ゼストにも親友という者が居たらしい。その親友を思い出しているのだろう。ゼストの低い声が柔らかくなっていた気がした。

『……今は休んでいて下さい。バーサーカー相手に1人で対決していたのですから』

『ああ、言葉に甘えさせてもらっ』

その言葉を最後にゼストからは何も言っでこなくなった。やはりバーサーカー相手に1人は厳しいようだ。

前の聖杯戦争でもヘラクレスの英霊がバーサーカーとして現れて、一対一で対決したことがあつた。あの暴力の嵐に捌き切れずに負傷した。

バーサーカーは並大抵の実力と覚悟では対等に戦う事は無理に近い。

「なあ、セイバー」

「はい？」

思考の渦に入りいつていた私に声を掛けられた。目の前にはシロウがマジマジと私の全体を見るように視察していた。

考え事から離れて周りを見た。この路地裏にはシロウ以外に他の人はいないようだ。

「そのスーツ似合うな」

「……いえ、このスーツは私には似合いません」

シロウは私のダークスーツに興味を持ったようだ。

「……ですが、これはあの方が選んでくれた服装ですから」

「ん？何か言ったか？」

「……いえ。何でもありません、シロウ」

小さな呟きにシロウは拾いかけていたが私はこの服装の話を膨らませる気はなかった。この服装を着ていた頃の思い出はあまりいいモノでは無かった。

だが、この服装はあの切嗣の理解人であった今は亡き人の心優しいアイリスフィールが選んでくれたモノだ。

そこは誇りを持って胸を張って着こなしたい。

「しかし、また聖杯戦争が始まったな……」

「そうですね……」

シロウは私の服装から視線を離し、神妙な表情になって私を見た。

「俺も気がついたら右手に令呪が刻まれてサーヴァントが居た。いつの間にか巻き込まれたようだ」

「巻き込まれた！？」

と、私たちの話に女性の驚いたような高い声が聞こえてきた。私とシロウは声のした方に顔を向けると、凜が居て驚きの表情でシロウ

の方に顔を向けていた。

「あんだ、自分から参戦したんじゃないの？」

「い、いや、気がついたら何処かの道場の庭で倒れていて、その人に助けてもらった。今はそこに住まわせてもらっている」

「……それっていつ頃？」

「ん、10日ほど前ぐらいかな」

「……」

シロウの言葉を聞いて、凜は驚きから真剣な表情になって顎に手を添えて考え始めた。

「どうかしましたか、凜？」

そんな様子には声をかける。

「ん？ええ、ちょっとね。私がここに来たのはそれよりも大分前から、時間軸が私と士朗ではちょっとズレているわ。セイバーはサーヴァントだから時間跳躍したと言っても理屈は通るけど、私と士朗は同じ時間軸で来ないと説明が出来ない」

「……それも聖杯の力だとしたら？」

「聖杯の……力……」

シロウの指摘に再び考え込む凜。今回の聖杯は冬木の聖杯ではない。管理者の話だと冬木の聖杯は不純物が混ざり欠陥品だが。しかし、この世界の聖杯は純粋なモノだと。

だから、前の聖杯よりも予想外の出来事が起きるのかもしれない。

「今回の聖杯は冬木のとは思わない方がいいのかもしれないわね。」

予想外の事が起きそう」

凜も同じ結論に達したのか私と同じ考えの事を話した。

「とりあえず、これからは俺たちは手を組んでこの聖杯に……」

「え、あ？ああ、もう五月蠅い！！」

シロウが何か手を組もうと言ってくる音を凜の怒鳴り声でかき消された。シロウは目を大きくして凜を見る。凜は誰もいない隣に顔を向け怒った表情をしていた。

「凜のセイバーですか？」

「え、ええ。やっぱりあんたとは組みたくないってゴネてるのよ」

凜のセイバー……赤いセイバーは私と瓜二つの容姿を持った人物。唯一違うとしたら胸の大きさですか。しかもあちらの方が大きい。

「ええい、いくら騎士王といえども余の瓜二つの顔を持たれていては困る！！」

「い、いきなり出てくんな〜！！」

気高き声と共に赤セイバーが凜の隣に実体化して現れた。容姿は本当に私に似ている……胸以外は。

この者とは名誉ある戦いが出来ると思っていたが、このように接してみると自分の意見に対しては直進的なモノが多いので人間的には微妙な人物だと分かった。

「本当にセイバーと似ているよな。ああ、でも……」

マジマジと赤いセイバーを見るシロウ。特に胸を見ていないだろうか？そして私を見る。いや、正確には私の胸のあたりを見ているのがわかる。

「……シロウ、変な事を考えていませんか？」

「え、い、いや……変なことなんて考えてないぞ」

私の問いにシロウは顔を引きつらせて若干慌てる。

「奏者よ。本当にこの者たちと組むのか？」

「ええ、異論は？」

「……むう、異論はあるが奏者に嫌われるのも嫌じゃ。いたしかたない。寛大な余がそなた達との同盟をすることを許そう」

「……」

えっへんと胸を張って威張る赤いセイバーに私たちは呆れ顔でため息を吐いた。

まあ、これが凜のサーヴァントなのだろう。我儘で唯我独尊なサーヴァント。

「……何でしょうか。凜にピッタリなサーヴァントな気がします」

我儘なあたりが。

「え？どういう意味よ？」

「いえ、深い意味はありません。所でシロウのサーヴァントはどのような人物なのですか？」

「俺のサーヴァント？」

急に話しを振られて少し驚き視線を逸らすシロウ。ああ、うん、と聞こえてくるあたり、サーヴァントと話し合っている様子だ。

そして、少し間を置いてから答えた。

「クラスはアーチャー。真名は一度見たらわかると思うがこの世界のエースオブエースだ」

「アーチャー……で、その真名は……ああ、“高町なのは”ね。雑誌で見たことあるわ。となると“英霊タカマチ”か。でも、アーチャー……ねえ」

その単語に凜は少し遠くを見つめた。凜が言っているアーチャーというのはたぶん前のサーヴァントであった“英霊エミヤ”の事だろう。

切嗣の影響を受けて出来たシロウの理想。それを貫いた未来の姿。

“誰でもが幸福であってほしい願い”。その願い叶える為に“正義の味方”を演じ貫き通して、しかし、その果てに残ったモノは後悔だけだったと。出来るだけ多くの人間を救うために多くの人間を殺すという矛盾に悩み続けて、それでも突き進んだ英霊。

その無意味さを理解し、シロウの前に現れて自分殺しを行い全てを無かったモノにしようとしたアーチャー。

……あのアーチャーは私が消えた後どうなったのか後で凜に聞いてみたいですね。

聖杯を破壊しようとして凜を待っていたら、凜を助けるために“投影”で作りだした武器で聖杯の不純物に妨害されていた凜の進む道を作ったのだから、あの聖杯では私よりもまだ後に居たのは確かだ。

「アーチャー”って本当に一癖も二癖もある英霊ばかりね」

「その“英霊タカマチ”とは凄い人物なのですか？」

「別にそんなんじゃないんだけどね」

「!？」

音もなく士朗の隣にその“タカマチ”が笑みを浮かべながら実体化して現れた。

おそらくゼストと同じの防護服姿だろう。同じく白と青の強調した服装。あの栗色のサイドテールをしている。

「……ごくっ」

私は近くでこの人物を見たとき、思わず喉を鳴らした。膨大な魔力がタカマチから感じ取れるのだ。タカマチは先ほどの戦いではかなり高度な場所で見下ろしていたので魔力の数値が測る事が出来なかった。しかし、目の前に居るとその驚異的な量の魔力や質の高さが嫌というほどに伝わってくる。

これほどの魔力の持ち主では“キャスター”にクラス分けされなかったのでしょうか？

などと、驚きと疑問が頭の中で交差していた。

だが、赤いセイバーは……

「何と美しい容姿をしておるのだ!!」

「ふえ？」

眼を輝かせながら喜んでいた。凜はまた始まったと頭を抱えながら

呟く。タカマチはキョトンとした表情で首をかしげた。

「お主の美は素晴らしい!!」

「え、あ、ありがとう」

タカマチは困惑した表情でしかし、顔を赤くして赤いセイバーにお礼を言った。

「それにしても流石は“エースオブエース”ね。魔力値がオーバー
Sランクと言われても過言ではないわ」

凜はマジマジとタカマチを観察する。

「“エースオブエース”なんて周りから勝手に言われた評価だよ。
私以上の実力を持った人物だっているし」

「ふうん、そうなの？あ、そうだ。魔法か魔導を使う貴方からその
事について聞きたいんだけど」

「魔法か魔導ですか？私の場合は魔法ではなく魔導ですね」

ええ、と凜は頷く。

「構いません。ですが一つ私からもお願い事があるの」

「ん？何かしら？」

「私にも魔術というモノを教えてほしいの」

「魔術を？」

タカマチは真剣な表情でこくりと一回首を縦に振る。その強い眼からは感情の深い何かがあったのが私には分かった。

「……うん、魔術は本来は秘匿するものなんだけど相手はサーヴ

アントだし……等価交換つてどこか。うん、私の家系の魔術は教えられないけど基本的なものなら教えてあげられる。それでいいかしら？」

「うん、十分だよ。ありがとう」

タカマチは愛嬌のある笑みを浮かべて頭を下げた。

「ぬづづうううう……この者をお持ち帰りしたい」

赤いセイバーはその仕草に見とれたのか唸りを上げて手をソワソワさせながら何か変な事を言っていた。

「それじゃ、その件はまた後でね。それとセイバーのサーヴァントはランサーなのかしら？」

「ええ」

赤いセイバーの唸りを無視した凜が私に声をかける。私はその言葉に頷く。

「光の皇子・クー・フリーン？」

「いえ、前のランサーではありません」

「そう……あの英霊は結構気に入っていたんだけど今回は出てこないか」

凜が残念そうな表情を浮かべて思い出しているのか眼を瞑った。凜の思っている時間帯とは違うと思うが私もランサーとの出来事を思い出す。

シロウに召喚された時に目の前にランサーが居た。何合か斬りあったが決着はつかず、ランサーは宝具を解放した。

あのランサーの一撃は凄まじい。

必中必殺の呪いの槍を使用して因果を逆転し “敵の心臓に命中している” という事実を作った後に攻撃を放つ対人宝具 “刺し穿つ死刺の槍”^{ゲイボルグ}。

あれを避けられなかったら冬木の聖杯戦争では最初に脱落していただろう。

保有スキル“直感”が無かったら避けられなかった。

あのランサーはとても強かった。

「まあ、とりあえずここは三人で何とか乗り越えていきましょう」

「待つて下さい凜」

思い出に浸っていると凜が私たち三人で同盟するような声が聞こえてきたので割って入る。

三人で同盟を結ぼうと凜は話を進めたが私は1つ賛成できない部分があった。

「どうしたのセイバー？」

「私はガイとの同盟を組んでいます。なのでガイもこの同盟に加えてほしいのですが」

ガイという単語にタカマチの表情が一瞬変わったのが分かった。タカマチもガイに何かあるのだろうか？

それはさておき、先の戦いが始まる前に私とガイは同盟を結んだ。

そうしなければあの凶悪なキャスターに勝てる見込みが薄かったからだ。

「ガイ？」

凜の頭の上には？マークが浮かび上がっているのだろう。脳裏にガイという少年の姿が浮かばないようだ。

「あの者か。余とキャスターとの戦いに水を指して……はおらんか。だが、微妙な少年だったの」

「ああ、あの冴えなさそうな男の子？」

「にゃ、はは……ガ、ガイ君、凄い言われようだね」
「まったくだ」

ガイが居ない前で言いたい放題の凜と赤いセイバー。だが、そのうち凜が神妙な表情になって考え込む。

タカマチとシロウは苦笑いしながら笑っていた。

「でも、あの男の子、会うたびに不思議な感じがしていた。うまく説明できないけど、違和感があるのが分かった」

「ガイが……ですか？」

そんな違和感があつただろうか？少なくとも私には分からなかった。魔術師的な何かを凜は感じたのだろうか。

「ええ、だからそのガイって人とは手を組めない。その違和感が無くない限り」

「そうなりますと必然的に凜とも同盟を組むことが出来ない。同盟というモノは全ての者たち同意を得て組むものだから」

「まあ、確かに」

ガイと組んでいる以上、ガイを否定している凜の違和感を払拭しない限り凜とは組むことが出来ない。

「余は別に構わぬが？」

「あんたにとつては都合がいいでしょうけどね……はあ〜」

赤いセイバーはむしろ喜んで、それを見た凜は深いため息をついた。そして、シロウの方を見る。

「それじゃあ、セイバーとの同盟は保留って事にしておいて私と士朗でひとまず手を組んでおくわ」

「ああ、そうだな」

「う〜ん、出来ればガイ君達と組みたかったけど仕方ないかな」

タカマチは少し納得のいかなそうな表情をしていたがマスターのシロウが凜と組むことになったので了解した。

「すみません、凜。一度契約したモノはそう簡単には解約できません」

「まあ、しょうがないわよ」

「うむ、仕方あるまいな」

凜は苦笑して私に温かい笑みを向けてくるが、赤いセイバーは上機嫌なのか声が弾んでいた。

タカマチと同じく少し納得がいきませんが仕方ありませんね。

「では、シロウ、凜。ご武運を」

私は2人に一礼をしてその場から離れて表通りへと歩き出した。

シロウと凜との同盟はひとまず保留となった。

マンション

「はふう……」

俺はオリヴィエと共にマンションへと戻りテーブルの前に座ると、緊張の糸が切れて気が抜けたからか疲労感が一気に押し寄せてきた。

息を吐くと強張っていた体が少し柔らかくなったような気がした。

「今日の戦いは複雑でしたね」

「ああ。キャスターとの対決だと思っただら全てのサーヴァントが集まったからな」

最初はアルトリア達と手を組んでキャスターと対決するはずだったが、セイバーが現れ、バーサーカーが現れ、アーチャー……：“なのはさん”が現れて、アサシンが現れて……。

「まあ、そのおかげで少し情報が多くなったな」

「ええ、情報が手に入っただけでも今日の戦いの収穫はありました」

「しかし、キャスターはアサシンが苦手なのか？俺たちが束になっても汗一つ掻かなかったキャスターが明らかにアサシン相手に慌てていたような気がする」

「キャスターに関しては謎が多いですね。そして、キャスターを押ししていたアサシンも」

「だな。それにバーサーカーの正体も知っておきたいところだが……」

と、アルトリアと今日の戦いの話をしていると、ピンポンとチャイムが鳴った。

「ん？誰だろう？」

「油断しないで下さい」

「ああ、分かってる」

俺は立ち上がって玄関先まで歩きだす。先ほどまで聖杯戦争をしていたので俺たちは警戒心が高くなっている。

俺は緊張感を高めて用心してドアを開けた。

「あ、ガ、ガイさん、こんばんは」

「アイン？」

だが、ドアを開けて居たのは同じく緊張気味な様子で少し頬を赤くしたアインハルトだった。俺は聖杯戦争と関係ないと分かって警戒を緩めた。

アインハルトはステンレスの鍋を両手で持って俺の事を見上げていた。

「あ、あの、ガイさん。御夕飯はもう食べましたか？」

「ん？ああ、そう言えばまだ何も用意していないな」

時計を見ると、いつの間にか外の日は落ちて夕食の時間帯だった。

「あ、あの、もし、よ、良かったらこれどうぞ。ビーフシチューですけど」

アインハルトは視線を俺から逸らしながらズイッと鍋を前に差し出す。

「アインが作ったのか？」

「……はい」

頬を染めたままモジモジしている姿は愛嬌があっという。こういうアインハルトの姿を見ると日常に帰ってきたと実感する。

俺はそういうアインハルトを見て嬉しくなって頭を撫でた。

「え？え？」

アインハルトは何故、頭を撫でられたのか分からない様子だったがそれでも良かった。

「ああ、食べるよ。一緒に食べるか？」

「あ、はい」

決して笑う事はないが表情は嬉しそうだろうとわかった。アインハルトを部屋へ入れた。

「アインハルトですか」

「オリヴィエ、ご飯を作ってきました」

アインハルトが中に入るとオリヴィエが頬笑みを向けてきた。それにアインハルトは頬をさらに赤くしてご飯を作ってきたことを述べた。

「今度は俺が料理を作らないとな」

「あ、そんなこと気にしないで下さい。それではすぐ温め直します」

そう言つて、アインハルトはキッチンへと向かった。

「アインハルトの手料理は美味しいです」

「ああ、アインの料理は確かに美味しい。今日の授業参観の時に弁当を作ってもらったけど、本当に美味しかった。これなら良いお嫁さんになれると言ったら、アインは驚いていたけどな」

「……それは確かに驚くのではないでしょうか？」

「え？そうか？」

オリヴィエとアインハルトの話をしていると気が楽だ。戦いとは別の話だからだろう。

「お待たせしました」

話で盛り上がっていると、アインハルトがビーフシチューを盛った皿を運んできた。

「へえ、美味しそうだ」

「ええ、食欲がそそられます」

「ガイさん。パンはありますか？」

「ああ、戸棚に入ってるよ」

アインハルトは俺の話の話を聞くと戸棚から食パンを持ってきた。

「んじゃ、食べるか」

「ええ」

「どうぞ」

俺とオリヴィエはスプーンでビーフシチューを一口食べる。アインハルトは俺たちの感想を待っているからか食べずに俺たちの事を見ている。わかっていた事だが、やはりアインハルトの作った料理は美味しい。

「うん、美味しい」

「ええ、とても美味しい」

「あ、ありがとうございます」

頬を少し赤くしてお礼を言うアインハルト。

「むしろ、夕飯を作ってくれてお礼を言いたいのこっただけだね」
「で、でも、作ってくれたモノに美味しいと言ってくれるのは嬉しいですから」

「まあ、確かにな」

喋りながらもスプーンを持った手は止まらなかった。パンにつけるとこれまた違った感触でビーフシチューを味わえる。

そんなこんなであつという間に俺とオリヴィエは皿を空にしてしまった。

「ふ、2人ともよほどお腹が空いていたのですね」

まだ半分も減っていないビーフシチューの皿で食べているインハルトは驚きを隠せないでいた。

「ええ、お腹が空いていたもので」

「俺もな」

聖杯戦争ではかなりカロリーが消費されたからか体が栄養を求めていた。主に精神からカロリーが消費したんじゃないかと思うが。魔力補給の出来ないオリヴィエも食事の栄養で補おうとしているし、俺と同じく戦いに参加していたからお腹も減っているのだろう。

「お粗末さまでした」

『マスター。メールが来ています』

少しして、インハルトも皿を空にした。それとほぼ同時にテーブルの隅に置いておいたプリムラがメールが来たと伝えてきた。

開いてくれと言うと、目の前にモニターが現れた。

差出人……………高町ヴィヴィオ

件名……………明日

本文……………こんばんはガイさん、ヴィヴィオです。あの、明日なんですけど中央第4区公民館のストライクアーツ練習場で格闘技の練習しませんか？大会に向けて有段者であるガイさんとストライクアーツの練習をしたいのです。お時間があればお相手したいのですがダメでしょうか？

ヴィヴィオからの練習のお誘いだ。

「ヴィヴィオからか」

「ヴィヴィオさんからですか。どんな内容ですか？」

アインハルトもヴィヴィオから来たと分かって興味があるようだ。

「明日、大会に向けて練習しないかって話だ」

「え？ガイさんも練習に来るのですか！？」

「い、いや、今誘われたんだが」

アインハルトは少し声を高くして早口になっていた。それにすぐ気づき、顔がすぐに赤くなつた。

「まあ、特に予定もないし大丈夫か……………」

「なら私も行きましょう」

「ああ、オリヴィエも来てくれ」

聖杯戦争が起きている今、パートナーであるオリヴィエともあまり離れない方がよい。先ほどの戦いで理解した。

いつどこで起こるか分からないのだから、なるべくオリヴィエとは別れない方が良く。オリヴィエを呼ぶためにこの紋章……“令呪”を一回使ったしな。

「アインもヴィヴィ達の練習には参加しているんだよね？」

「あ、はい。“チームナカジマ”で頑張らせて頂いてます」

まだ、顔が少し赤いが俺の話に答えてくる。で、今、アインハルトから変な単語を耳にした。そのままオウム返しで聞き返すことにした。

「チームナカジマ？」

「ヴィヴィオさん達と考えて決めたチーム名です」

「……」

何故だろう。不機嫌そうな表情で顔を赤くしながら目を背けているノーヴェが脳裏に浮かんだ。

まあ、ノーヴェもナカジマ家に養子で入ったとか言ってたからな。コーチであるノーヴェを名前に入れてのチームね。単純というかやはり子供の発想というか……チームノーヴェよりはマシか。いや、ニュアンス的にノーヴェチームか？

「今、私たちのチームの名前に笑いませんでしたか？」

「いや、気のせいだ」

いつの間にかアインハルトは表情を不機嫌にし口を尖らせて俺の事を見ていた。そして一呼吸置いてから話を続けた。

「ガイさんも入りませんか？」

「チームナカジマにか？」

こくりと頷くアインハルト。不機嫌な表情は消えていた。

「……ま、大会に出れたらな」

「わかりました。ガイさんが来てくれることを心から楽しみにしています」

やんわりとお世辞的な事を言ったがその言葉は本当の気持ちで言っているように聞こえた。

「ああ、出れるように仕事を頑張るから」

そう言いつつ、ヴィヴィオに返信用のメールを作成した。

件名……………Re：明日

本文……………それじゃあ、お誘いに乗らせてもらおうかな。あとフリーも付いて行くけどいいか？それとヴィヴィオ達の練習内容や相手はコーチであるノーヴェが決めているんじゃないか？

メールの内容を打ちながら練習内容はノーヴェが決めていたはずだったと思いだし、付け足した。

この内容で送信した。

「ところでガイさん」

「ん？」

モニターを消すとアインハルトに声を掛けられたのでそちらを向く。表情は何やら真剣なのだが迷っているように見えた。

そして、口を開く。

「今日の帰りにお会いした黒いスーツを着た人は誰なんでしょうか？」

「……あゝ、あれね」

アインハルト達との帰り道に出会ったのはダークスーツ姿のアルトリア。聖杯戦争の関係者だから皆から半ば強制的に離れたけど、その時に起きたと思われる不信感が残ったままなのだろう。

「んゝ、仕事関係の人……かな」

「……随分と齒切れが悪いですね」

聖杯戦争と言えるわけでもないのに嘘の考えを口にしたが考えながら発してしまったので語尾を濁したような口調になり、アインハルトは何か納得のいかない表情だった。

「仕事関係さ。企業秘密だから深くは言えないけど」

「それはそうですが……あんな綺麗な人がガイさんと……」

「ん？何か言ったか？」

「何でもないです！！」

「あ、ああ……」

最後の方が声が小さく聞き取れなかったので聞き返したが、何かに怒ったような声で強くして否定されてそっぽを向いてしまったので追求できなかった。

何か気まずい雰囲気部屋に漂った。

『マスター、メールです』

ちょうど良い所にメールが返ってきたようだ。俺は少しホッとしてモニターを目の前に開いた。

差出人……………高町ヴィヴィオ

件名……………Re:Re:明日

本文……………もちろんフリージアさんも歓迎です!!では、明日楽しみにしてますね 集合時間は朝9時で。それと、この事ですが既にノーヴェに教えています。ガイさんも誘えたら誘えつと言っているのです。たぶんガイさんが来たらガイさんを含めた練習内容に変更になるのではないかと。あ、それと丸1日練習なのでお昼御飯が必要だと思えます。もし良かったらこの前約束したお弁当を作ろうと思うのですがいいですか？

……………ノーヴェからの連絡はないんだけどな。

しかし、俺が来たら俺も含めた練習内容に変更ね……………ノーヴェならやりそうだ。ノーヴェは本当にコーチって天職なんじゃないか？

それと今日のお昼に約束したお弁当の話がここで上がってきた。まあ、否定する理由もないしヴィヴィオにお弁当を作ってもらおうかな。

「……………ヴィヴィオさんからですか……………お弁当……………」

そこに先ほどまでそっぽを向いていたインハルトがモニターに覗きこんできた。お弁当と表示されていたのが気になったのか口に出てきた。

「まあ、否定する必要もないし頼もうかなと」

「な、なら私も作りましゅ!？」

アインハルトは何に慌てたのか分からないが言葉が早口になり、誤って舌を嚙んで涙目になりながら顔を真っ赤にして口元を押さえた。

「そんなに慌てるなよ……」

「あ、あにゃわてにゃどと……うっ……」

多分『慌ててなどと』と言っていると思うのだが、上手く呂律が回らず喋れないのか落ち着くまで俺に背を向けてしまった。

「ふふっ……2人を見てると楽しいですね」

「見物人に見せるような見世物じゃないよ」

ベッドに腰掛けながら俺たちの事を静かに見ていたオリヴィエは静かに笑みをこちらに向けていた。

「今のアインハルトは……霸王とか聖王とか忘れてるように見える……ガイのおかげでしょうか……」

「ん?なんだって?」

何かを呟いていたような気がしたが声が小さくて聞き返した。

「何でもありません」

オリヴィエは何かに納得したような笑みを浮かべたまま目を瞑った。

「ガイさん……私もお弁当を作ります」

オリヴィエからアインハルトの方を向くとまだ少し涙目になりながらも先ほどの言いきれなかった内容を口にした。

「ああ、分かったから。楽しみにしているよ、アインの弁当」

「……はい」

アインハルトともお昼にお弁当の約束をしたので否定する理由はない。

笑みこそ見せないがアインハルトからは嬉しそうなオーラが漂ってきたのが分かった。

そして、アインハルトは立ち上がった。

「では、私は部屋に戻ります。ビーフシチューはまだ余っていますので良かったら朝食にでもどうぞ」

「ああ、ありがとな」

俺がお礼を言うとアインハルトは一度頭を下げたあと俺の部屋を後にした。

……と、ヴィヴィオにメール返しておかないと。

俺は再びモニターを開いた。

件名…………… Re: Re: Re: 明日

本文…………… 明日9時ね、わかった。あとお弁当頼むわ。楽しみにしてる。

受信してから少し経って送ったがすぐにメールが返ってきた。

差出人…………… 高町ヴィヴィオ

件名…………… Re:Re:Re:Re:明日

本文…………… 楽しみにしてて下さい ちなみに何か苦手なものとかアレルギーなモノとかありますか？

苦手なものもないしアレルギーなど起きたこともないな。孤児院の時も特に野菜とかも気にすること無く食べれたし。

そんな昔の事を思い出しつつ内容をまとめて送る。

件名…………… Re:Re:Re:Re:Re:Re:明日

本文…………… いや特には無いよ。

送って、一分ぐらいで帰ってきた。

差出人…………… 高町ヴィヴィオ

件名…………… Re:Re:Re:Re:Re:Re:Re:明日

本文…………… わかりました。頑張つて作りますね^^あ、それと1つ聞きたい事があるのですが、今日会った黒いスーツを着た金髪の人って誰なのですか？

「……………」

だが、その内容に少し困った。ヴィヴィオも学院帰りに会ったアルトリアの事が気になったようだ。

…………… とりあえずあえずインハルトと同じ回答で答えるか。

件名…………… Re:Re:Re:Re:Re:Re:Re:Re:Re:明日

本文…………… ああ、よろしくな。それと黒いスーツの人の事なんだけど、あの人は仕事関係の人だよ。企業秘密が多いから細かい事は言

えないけど。

最近言い訳が多いな。聖杯絡みだと仕方ない事か。

そう思いつつ送信する。

今度は送って、十秒足らずで帰ってきた。早っ！！

差出人……………高町ヴィヴィオ

件名……………Re:Re:Re:Re:Re:Re:Re:Re:Re:Re:明日

本文……………なら、仕方ないです。では、明日楽しみにしてますね^^

ヴィヴィオにしては引き際があっさりしている気がした。まあ、深く追求してくれないのはありがたい事だが。

「……………お湯沸かして風呂入って寝るか。オリヴィエ、先に入るか？」

「ええ、先に頂きます」

あいよ、と言って俺は風呂場へ行って洗ってお湯を入れ始めた。オリヴィエが先に入って出た後に俺も風呂に入った。

風呂から出た後もかなりの疲労感が体全体に感じたので今日はベッドで寝ることにした。オリヴィエは潔く受け入れてくれてソファで寝てくれるようだ。くれぐれも寝ぼけて忍び込んでこないようにと釘を刺しておいたがちよっと不安だ。

そして、明日は格闘技の練習だ。頑張るか。

弁当は二つか……………やっぱり朝食は抜いておくべきかな。ごめんなアインハルト。ビーフシチューは明日の夜にでも食べるよ。

昼間に導いた結論を思い出しつつ、さっき貰ったビーフシチューを
食べれなくなった事に関してアインハルトに心の中で謝りながら俺
の思考は闇へと落ちて行った。

次の日 中央第4区公民館 ストライクアーツ練習場

「よし、みんな揃ってるな?」

「「「はい!」」」

ノーヴェの言葉に子供たちは元気に答える。今日はここで練習のようだ。

「元気だね」

「また年寄りのようなセリフを」

その様子を見ていた俺の隣で白いジャージ姿のオリヴィエが呆れたような表情で俺の言葉に返事を返した。

「んじゃ、もう年か」

「それだと私たちはもうオバサンだよね」

「あっ……え、ええと……す、すみません」

その反対側にはなのはさんとフェイトさんが苦笑しながら立っていた。なのはさんはピンク、フェイトさんは黒いジャージ姿だ。

2人は今日は保護者としてこの訓練に来たようだ。

なのはさんを凝視して見たが、いつものなのはさんで特に変化はない。

なのはさんは……“現代”のなのはさんで間違いないかな。

俺は結論付けた。

そして、そのジャージ姿は女性としての魅力が損なわっていないのか周りから注目的になっっている。その注目的に容姿端麗なオリヴィエも視界に入るのだから注目度は更に倍増している。

……俺にはどす黒い殺気がふつつつと伝わっているんだけどな。

「私たちはガイから見たらもうオバサン？」

「い、いえ、そんな事は……なのはさんもフェイトさんもまだまだ美しいですよ！！オ、オバサンなど……」

少し寂しげな表情をして言ってくるフェイトさんを見て、俺は必死に早口で返す。だが、途中で何か恥ずかしい事を言った気がして言葉が詰まった。

「そ、そう？そう言ってくれるなら嬉しいな」

「……っ」

先ほどの表情からは一変、少し頬を赤くしながら笑みを零すフェイトさんの表情に俺は何も言えなくなつた。

やっぱり俺はこの人の事が好きなのかな？

「でも、この前ネットで見たんだけど、19歳でオバサンって呼ばれちゃうこともあるんだってよ」

「えっ!?!」

そこになのはさんから何か変な言葉が飛んできた。

19歳でオバサンと言われてしまう……だと……!?!?

フェイトさんも驚く事ながら俺も驚きを隠せなかった。そんな話があるとする俺も後一回年を取ったらオッサンになってしまう。

「それは本当なのですか？なのは？」

「うーん、ネットで見つけたモノだから信憑性は薄いと思うけど、

一部ではそんな事を言う人もいるらしいね」
「ガイも私の事をオバサンだと思いませんか？」

なのはさんに向いていた21歳のオリヴィエが俺の方を向いて子犬のように俺の事を見上げて首を少し傾けてくる。その仕草にちょっとドキツとした。

「い、いや、そんな事は……無いぞ」

「そうですね。なら良かったです」

「……ふん」

俺の言葉に何か嬉しそうなオリヴィエだった。それを見ていたなのはさんは何を思ったのか模索しているような表情をしている。

「よし、それじゃ練習始めるぞ」

「……はい!!」

子供たちは練習を始めたようだ。子供たちの元気な声を聞いて練習場へ顔を向ける。子供たちは2人組を作ってストレッチを始めたようだ。

「んじゃ、俺も練習するかな」

「では、私も」

「頑張つてね」

「頑張れ」

俺とオリヴィエはなのはさん達から離れて練習場へ足を運んだ。

「ガイ君はやっぱり隅に置けないよね」

「え、そうなの？」

「ふふっ、鈍いね〜フェイトちゃん」

私の主観で見た限りだとフリージアさんもガイ君に好意を持っている気がする。2人を見ていると本当にそう思う。

「そっか。ガイ……モテモテだね。子供たちもガイの事が好きなんだよね」

「うん。でも、ガイ君が好きなのは……」

そう言いつつとフェイトちゃんの方を振り向く。それでフェイトち

やんに伝わったのか徐々に頬を赤く染めていく。

「ま、前の温泉の時に言ったよね。私なんかよりもフリージアの方が良いって」

「でも、フェイトちゃんの本心を聞いたこと無いよ」

「え、そ、そそそ、それは……内緒だよ!!」

そんなに慌てなくてもいいのに。

「じゃあ、話をちよつと変えて……ガイ君の事が好き？」

「え、えつと……」

今のフェイトちゃんから聞くと誤魔化せられそうなので単刀直入に聞いてみた。

「そ、それも内緒」

「あゝ、ずるいよゝフェイトちゃん」

私はわざと頬を膨らませて怒ったように言う。

「じゃ、じゃあなのははどう？ガイの事好き？」

「ふえ？」

思わぬ返しに私は間の抜けた声を出してしまった。

私はガイ君の事が好きなのか……そう言われても良く分からない。確かにガイ君は何事も諦めない不屈の心がある。子供たちとも仲が良いし悪い印象はない。

「あゝ、ヴィヴィオがガイ君の事が好きだから」

「それは温泉の時に聞いたよ。私が聞いているのはなのの本心」
「え、あ、う、うん……内緒？」

私の恋人がガイ君……ちょっと想像してみたけど結構いいかもしれない。でも、それは何か違う気がした。その違和感も分からないのに好きと口に出すのは変なので、フェイトちゃんには内緒として貫き通すことにした。

「なのは……」

「あ、う、うん。ごめんね、変な事聞いて」

「もう、なのはもじゃない」

「じゃ、はは」

フェイトちゃんはフェイトちゃんと同じ答えだったのか呆れていたようだ。

苦笑しながらガイ君達の方を見る。ガイ君はリオちゃんの頭を撫でているようだ。何かうまく言った事でもあったのだろう。リオちゃんは嬉しそうだが周りにいる子供たちは何か不満そうな表情をしているのが離れていても分かった。

「……ほんと、モテモテだね」

そんな状況下でもガイ君は自然とそこにいる事が嬉しいのか笑っていた。まるで自分の居場所に戻ってきたような……。

「……でも、私にも皆にも話せないモノがあるんだよね……」

「え？何か言った、なのは？」

フェイトちゃんが私の小さな呟きを言葉を拾いかけていたが、首を

横に振ってなんでもない、と言り返す。

話せない内容はきつとフリージアさんが関係していると思うんだけどね。確証できる材料は揃っても無いし……。

そして、私は再びガイ君達を見る。

子供たちに囲まれて笑っているガイ君は本当に楽しそうな表情をしていた。

自分の居場所に戻ってきたような……ね。

「へえ、リオは春光拳の技をまた一つ習得したんだ。すごいな」

「えへへ、ありがとうガイさん」

リオが新しい技を覚えたからしく、それを俺に言ってきた。“技”は習得するには差こそあれども習得するにはそれなりの時間がかかる。習得できたのなら褒めてやるのがいい。

だから、俺はリオの頭を撫でて褒めてやった。それによってリオは頬を少し染めて上目使いで嬉しそうな表情をしながらお礼を言ってきた。

やっぱりこの子達の笑顔はいいものだ。

それを見て、俺も自然と笑顔が零れる。

「む、リオばかり」

「負けられない」

「……」

周りからは何か不満そうな声が聞こえてきた。

「よし、ガイとフリージアも来た事だし、まずは組手をやるぞ」

「……はい!!」

それでも、今は練習中。コーチであるノーヴェの指示が来ると皆はそれに従う。

内容は魔力抜きの組手だ。ストライクアーツ専用のグローブナック

ルに足から膝までカバーをしている膝当てを付けて準備万端だ。

「ガイさん、よろしくお願いします」

「ああ、ヴィヴィ。お手柔らかに」

最初に組手をしたのはヴィヴィオだ。体格差こそあれどヴィヴィオはそれを気にすることもなく真っ直ぐな攻撃で俺にしかけてくる。

ヴィヴィオの拳を受け止めるたびにパシッパシッと乾いた音が響く。周りも組手を始めたようだ。

そういえば、ヴィヴィオとの出会いってこのイベントの時だったな。

ヴィヴィオと組手をしながらあの時の事を思い出していた。

1年前

「トーナメント？」

公民館のストライクアーツ練習場の掲示板に張り出されていたのは“開催アーツトーナメント”というタイトルの文字をでっかく書いてその下に詳細が書かれているA4サイズの紙だった。

俺はその紙を眺めていた。

開催日は今日？まあ、相手は誰でもいいんだけど面白うだし出てみるか。

そんな軽い気持ちで受付を済ませてそのトーナメントに出た。公民館で行われるようなものなのでそこまで華やかな大会ではないし、ストライクアーツの有段を取った俺にとっては強い相手が居なく、難なく決勝戦まで上り詰めてしまった。

「決勝戦にはあの子が出るんだってよ」

「マジかよ。あの子強かったけど、まさかここまで上り詰めてくるとは凄いな」

「ああ、俺たちも負けてらんねえよな」

「まっただ」

廊下を歩いていると反対からやってきた男二人がそんな事を言いながらすれ違って行った。

決勝戦は俺も出るんだが話に夢中になっていた2人は俺の事に気付かなかつたのだろう。

決勝戦の相手か……どんな人だろうか。まあ、今までの奴らより強いと信じたいところだが。

そんな事を考えながら会場に足を進めた。

そして、決勝戦。決勝戦と言うだけあって観客はそれなりに居た。公民館といえども興味があるものがあれば人は集まるモノだ。

「なっ!?!」

そして、対戦相手を見た時は驚きを隠せなかった。左眼が赤く右眼が緑の虹彩異色の小さな女の子だったからだ。

「では、決勝戦。ガイ・テストロツサと高町ヴィヴィオの対決を始めます。射撃砲と拘束は無し。4分ラウンド。1本取ったら勝ちです」

レフリーがルールの説明を軽くした。

「よろしく願います」

「あ、ああ。お手柔らかに」

その子は丁寧に頭を下げる。実によく出来た子だ。そして、デバイ

スを取り出した。

あれはなのはさんが使っているデバイスに似ている？名字も“高町”……まさかな。

「セットアップー!!」

だが、今考えていた事がどんどん確信に近づいて来たのが分かった。

その子……ヴィヴィオは変身魔法で大人になった。なのはさんと同じサイドテールだし。なのはさんの関係者で間違いないと思った。

とりあえず、この話は頭の隅に置いておくことにした。

そして、俺とその子は構える。トントンと足でリズムを作っている。

「試合開始!!」

レフリーの気合の籠った声が練習場に響き渡る。と、同時にヴィヴィオは何の躊躇いもなく俺に体制を低くして突進してきた。

速いが……見える。

動体視力を鍛えていた俺にはその動きが見えていた。ならその動きに合わせてカウンターを合わせようと、そのギリギリまで待つ。

「はあああああ!!」

ヴィヴィオは突進したまま右ストレートを放つ。それを俺は右に避けたと同時に左回し蹴りを合わせた。

「!?!」

ガッツという音が響いた。クリーンヒットしたらこれで一本で終わっただろう。だが、ヴィヴィオはそれを左拳で顔面に当たる前にギリギリ止めた。なかなか反射神経だ。

「っぐ!?!」

そして、左手で俺の左足を掴み今度は右拳廻打で俺に放ってくる。左足が掴まれているので避けるという選択肢は無く、それを受け止めるか受け流すしかない。

ガシツとそれを左手で掴む。そして、ヴィヴィオの両手が塞がっていたので右掌打でヴィヴィオの胸部に放つ。

「きゃ!?!」

それが軽くヒットしてヴィヴィオは擦り下がった。レフリーが一本と言わないってことは確実に当たったわけではないようだ。当たる瞬間、ヴィヴィオは僅かながら避けたのだろう。

キレのある攻撃に良い反射神経。この子は大きくなったら化けるな……今は大きいけど。

最後に変な事を思ったが、俺は対戦相手の将来性に楽しみが出来ていた。今だけでもこれほど強いのもっと成長したらどうなるのだろうと。

ワクワクした気持ちは向こうも同じなようだ。俺の事を嬉しそうに

見ている。

そして、今度は俺から仕掛けた。空いていた距離を数歩で縮めて、その勢いに乗せて右拳を居合のようなモーションで内側から放つ。格闘技にも居合の癖が出てしまいが、寧ろそれが俺にとっては何に合っている。

だが、それは簡単に避けられた。ヴィヴィオはそれをカウンターのように左拳で的確に俺を狙っていた。

避けるのは無理だとわかり、ならそれをこちらからも相手にはばれない様に頭突きをしてワザと受けることにした。

こめかみが痛い……。

だが、頭突きによって何割かの痛みを減らせたので次の手を放つ。ヴィヴィオはクリーンヒットしたと思いついで、喜びの表情を見せて一瞬の隙が出来ていたのが分かった。

俺は右拳を直ぐに戻し、両手を開いて合わせて指先を左右に開けるような形の掌停を作り、それをヴィヴィオの胸部に向かって放った。

「！！！」

ヴィヴィオはその動きに気付いたようだが一歩遅い。その放たれた拳はヴィヴィオにクリーンヒットして放物線を描くようにして宙を舞った。

「一本！！それまで」

試合はギリギリ勝つことが出来た。周りから歓声の声と拍手が送られてくる。ヴィヴィオは何とか着地して肺に溜まっていた空気を一息で吐いた。そして、俺の事を尊敬の眼差しで笑みを浮かべながら見てきた。

そのまま変身魔法を解いて俺に小走りで近づいてきた。俺の前で立ち止まる。

「お手合わせありがとうございました。とてもお強いんですね」

「いや、お前の方がそ強いよ」

「あ、ありがとうございます!!」

強いと言われて嬉しかったのか天使のような笑みを作って頭を下げた。

愛嬌のある子供だな。それにこんなに強い子だ。

「また、組手の相手が出来るといいな」

「あ、ではアドレスを交換しませんか？お互いに組手をしたい時に連絡すれば会えますし」

「……知らない人にはついて行っちゃ駄目だって親に言われなかったか？」

「あゝ、確かに“なのはママ”から言われました。でも、ついて行くというわけではなく、ここで会ったりするわけですから大丈夫だと思います」

……ああ、やっぱりなのはさんの関係者なんだ。デバイスもレイジングハートそっくりだからな。今度、会った時に一言言っておくか。

「……初対面の相手に対して警戒しないの？」

「ん、でも対戦している時にこの人はきつと頑張っている人なんだな、って伝わってきました。だから大丈夫です」

何処からその根拠が出てくるのだろうか？俺の技だって人間の中心に衝撃を与えた方が威力がよいとはいえ、大人のヴィヴィオの胸辺りを狙って放った拳だ。

胸の感触を感じている暇はなかったが、触れてしまった事は事実なんだぞ。

それなのにこの子は……そんな事を気にせず、人見知りすることもなく積極的な上に一生懸命な子だ。

出会って、数十分ぐらいだがヴィヴィオにとっても好感を持てた。今時珍しい子だ。

「……とりあえずアドレスだけでも交換しておく？ unnecessary になった消せばいいから」

「あ、はい。交換しましょう」

これが俺とヴィヴィオが交差した瞬間だった。

あれから1年か。随分と最近のような気がしたが時間は立っていたようだ。

ヴィヴィオと組手をしながら昔の事を思い出していた俺は現実に戻ってきた。今のヴィヴィオの組手は1年前とは比べ物にならないほど上達している。子供の上達は早いつて聞くがその話はどうやら本当のようだ。

一心不乱に一生懸命、真面目に俺と組手をしているヴィヴィオ。その姿勢があるからこそここまで上達したのだろう。

魔法戦でも勝てないのに格闘技戦も抜かれてしまったら俺の威厳ってのは無くなっちゃうな。

……あの交差が無かったら俺はこいつ等とも出会う事もなかったのかもしれない。

少なくともオリヴィエとは会う事は出来なかっただろう。ヴィヴィ

オが持つて来てくれたブレスレッドが無かったら、偶然とはいえオリヴィエを召喚することなんて無かったのだから。

でも、逆に考えるとそれが無かったら聖杯戦争に足を踏み入れる事は無かったのではないだろうか？

そんな事を考えてしまったが、その考えはすぐに止めることにした。この戦いは参加しておかなければ犠牲者は増えるかもしれない。何を考えているか分からないキャスターや明らかに正気の沙汰を持っていないバーサーカー辺りが勝ち残り、変な願い事で人々が苦しめられることだつてあるかもしれないのだが、勝ち残つて変な願い事をさせない様にしないと。

「ガイさん……考え事ですか？」

「ん？」

と、組手をしていたヴィヴィオから声をかけられた。

「少し動きが鈍ってました」

「そうか。悪かった」

「……それも相談できないものですか？」

「……まあ、な」

俺が肯定するとヴィヴィオは寂しげな表情をしてしまったが、すぐに笑顔に戻った。

「でも、私は笑っています。ガイさんはそうして欲しいって昨日言われましたから」

「……ああ、ありがとな、ヴィヴィ」

「ガイさんの夢、“誰もが不幸にならない世界”……頑張つて下さ

い！！ガイさんならきつと出来ます！！応援しています！！」

ヴィヴィオからの激励は何か心に響いた。ヴィヴィオの言葉にとっても嬉しく感じたからだろうか。

俺は組手をいったん止めてヴィヴィオの頭を撫でてやった。

「うにゃ〜、ガイさんに頭を撫でられるのって何かいいです」「ん？そうか？」

それでいいのなら俺はいくらでも撫でてやるけど。

ヴィヴィオは表情をトロンとして本当に気持ちよさそうだった。

「おい、そこ。組手を止めてねえでやれ」

「あ、悪い」

「ご、ごめん、ノーヴェ」

ノーヴェに指摘されてハツと表情を戻すヴィヴィオ。こつこつ仕草も愛嬌があつていいし面白い。

「応援してくれてありがとな、ヴィヴィ。それじゃ、続きやるか」「うん！！」

今日一番の大きな声で返事をした。元気な子供で何よりだ。

「で……」

自分でも顔を引きつららせていると分かっていた。目の前の光景が予想よりも斜め上に行く光景なのだから。

「……なんで、弁当が四つ？」

「私も作りました」

「私も作ったよ」

お昼の時間。俺たちは特訓を終わらせて昼食を取ることにした。自由に使える食堂の一角を占領して皆で弁当を広げる事になったのだが、なぜか俺の目の前には弁当が四つあった。

内二つはヴィヴィオとアインハルトで間違いない。

で、残り二つはどつやらコロナとリオのようだ。2人は手を上げて各自の弁当に指をさして作って来たことを主張してきた。

「……マジで？」

「マジです」

「大マジだよ」

2人ともなぜか嬉しそうだ。

「ぜひ食べて下さい」

「きつと美味しいですよ」

何故こうなった？弁当二つだと予想していたから朝食を抜かして来たのだが、これでは意味がない。朝食は抜いていたので腹は減っていたが、流石に四つは入らないだろう。

「あ、あの、私はガイさんにお弁当を作るって昨日メールしたら、『私も作る』ってコロナとリオから返信が……」

「そ、そうか……」

ヴィヴィオが何か申し訳ないように視線を俺から外して説明してくれた。

ああ、だからか。コロナとリオからは昨日のアルトリアの事に関して話してこなかったのは。ヴィヴィオからその時に聞いたわけか。

まあ、こつちも深く追求してくれなくて助かるけどな。

で、話を戻すが、つまりはヴィヴィオ、アインハルト、コロナ、リオが俺にお弁当を作ってきてくれたのだ。四つとも色とりどりの

お弁当箱でいかにも女の子っぽいモノだ。

気持ちは嬉しいのだが……弁当四つか。キツいな。

「ガイ君、ご飯がいっぱいだね」

「あ、ははは……」

なのはさんが天使のような笑みを見せてくるのだが、小悪魔な思考を孕ませて笑っているのではないかと思う。いや、絶対あの思考が孕ませている。

『女の子の好意を無碍にしちゃダメ、だよ』

やっぱり。なのはさんから念話が飛んできた。

『でも、弁当四つは流石に……』

『男の子なら余裕なの!!』

『フードファイターじゃない限り、普通の人の胃袋では無理ですよ!?!』

『……ヴィヴィオは朝早く起きてガイ君の為に台所に立って、一生懸命料理をしていたんだよ』

『つつ……』

『きっと、アインハルトちゃんやコロナちゃん、リオちゃんだって

……』

『つつつつ……』

何故、念話で俺は怒られているのだろうか。肉眼でなのはさんを見ると、笑みを絶やすことなく俺にニコニコ顔を向けていた。

その笑顔がとても怖いですよ、なのはさん。

「ガイ、それとヴィヴィオ、アインハルト、コロナ、リオ」

と、そこに今までの様子を見ていたオリヴィエが俺の事を呼んだ。皆がオリヴィエに振り向く。

「私も皆のお弁当を食べてみたいです。もし宜しかったら私も食べても？」

オリヴィエが助け船を出してくれた。ありがたい。

「俺は構わないけど他は？」

「あゝ、うん、フリージアさんにも食べてもらいたい……かな？」

何か納得のいかないような表情を見せるヴィヴィオ。

「……でも、ガイさんはいっぱい食べて下さい」

ちよつと不機嫌そうな表情になったアインハルト。

「んゝ、ガイさんがそう言うのでしたら」

コロナは少し困惑した様子だが笑みは崩していなかった。

「まあ、フリージアさんにもお世話になってるから……いいかな」

少し無理やりに自分を納得させたりオ。

え？何で皆そんなに微妙な反応なの？

『ガイ君、65点』

『何の点数です?』

『内緒』

念話からも良く分からない話が飛んできた。

「ガイ、良かったら食べる?皆で摘めるように作ったサンドイッチ
だけど」

「ああ、はい。頂きます」

そこにフェイトさんからバスケットに入ったタッパーを取り出して、
中に入っているサンドイッチを見せてきた。

フェイトさんが作ってくれた料理と聞くだけで食べたくなってきた。

「む〜」

「……なんで、即答……」

「やっぱり、ガイさんは……」

「……勝てない」

その行動で何故か子供たちは各々の反応を示した。

ヴィヴィオは唸って頭を抱えているし、アインハルトは冷たい目で
俺の事を見てるし、コロナは何か思い出したのか思い耽っている
し、リオは大きなため息を吐いている。

『ガイ君、それは0点』

念話からも意味の分からない採点が飛んでくる。

「あゝ、子供たちの心のケアもコーチの務めか?」

「ん？何を言ってるんだノーヴェ？」

そんな俺たちの光景を微笑んで眺めていたノーヴェが口を挟んでくる。

「いーや、なんでもねえよ。ただ、第三者から見ると面白いな、と思っただけだ」

「？」

ノーヴェは軽く笑いながら自分の弁当を食べ始めた。

俺は困惑しながらも皆から貰った弁当をオリヴィエと一緒にちよこちよここと食べ始めた。

「あ、うまい」

「ええ、ほんとに」

俺とオリヴィエがお弁当の事を褒めると子供たちの機嫌の悪さも無くなっていた。

午後からはインターバルの模擬戦って事で本格的に対戦が始まった。ただし格闘技限定でのこと。主に制限を受けたのは俺とコロナだ。刀とゴーレム操作が使えないからだ。

「よろしく願います、ガイさん」

「ああ、よろしくな、アイン」

そして、俺の対戦相手はアインハルトだ。

「ガイさんとは全力で勝負をしたかったのですが……」

「ま、そのうち出来るだろ。コーチのノーヴェもそんなふうに考えていると思っさ」

アインハルトは未だに俺との対決を心待ちにしているのかな？ してもいいけど、霸王の悲願云々は無しでやりたいものだ。

「……武装形態」

アインハルトは不満げな表情をしていたが、気を取り直して碧銀のベルカ式の魔法陣を展開させて大人モードへと変わった。

「…………あれ？」

だが、そのアインハルトの大人モードになった姿を見て、違和感を感ずて思わず口に出してしまった。

「ガイさん、どうかしましたか？」

「…………ああ、いや、アインの武装形態の姿って赤いリボンが付いていなかったか？」

「？…………いえ、赤いリボンはこのモードでは邪魔なので付けていないですよ」

「…………そうなのか？」

確か、前見た時は赤いリボンが付いていた気がした。何故だろうか。たったそれだけの事なのに拭いきれない違和感を感ずた。

…………何か歯車がひとつズレているような感ずだ。

「…………ガイさん？」

「あ、ああ。悪い、何でもない」

考えごとに耽つてしまった俺に戸惑つたような表情で声をかけるアインハルト。その声で再びアインハルトを見る。

その姿は確かに間違いなくアインハルトだ。ちょっと内気だが、霸王の悲願を成すために一生懸命な頑張り屋さんな女の子。

その何処に違和感が現れてしまうのだろうか？

「…………ま、考えても仕方ないか。アイン、格闘技戦は初めての対決だが負けねえぞ」

「ええ、こちらこそ」

アインハルトは右へ体を捻らせて、左手を手刀のようにして前に出し、右手を胸の前で握りこめ下げて構える。これが霸王流のスタイルなのだろう。

俺は居合の癖があるからか、左へ体を捻り、左手を握り、右手は開いて左手の前で構える。本当にそこに納刀している刀があるような構えだ。

これがストライクアーツでの俺の構え。

「……そう言えばガイさんも有段者でしたね。楽しみです」

「アインは霸王流のスタイル……そう言えば、最近は霸王の悲願とか言わなくなつたな。新しい目標が出来たからか？」

「……いえ、霸王の悲願は未だに私の中にあります。霸王流の強さを証明すること。ですが、ヴィヴィオさん達から教えてもらったインターミドル。そこで私はそれを証明したい!!」

表情もより一層閉まり、その言葉には気迫が籠っているのが分かった。

霸王流の強さを証明するために公式魔法戦に目を向けたわけだ。街灯試合などのチンプラがやるようなものではなく、公の場での戦いに……その曇りのない真っ直ぐな気持ちを持つて。

ああ、いつの間にかこの子も本当に強くなつたな。最近の若者は成長スピードが速くていいな……俺もまだ18なんだけど。あまり成長していると実感出来ないし。

「……うん、そっか。頑張れよ、アイン」

「……はいっ」

ひとまず俺の事は頭の隅に置いておいて、アインハルトに激励をとばしておいた。アインハルトからは気合の籠った返事が返ってきた。

「では、改めてよろしくお願いします」

「ああ、お手柔らかに」

そして、俺とアインは拳を交えた。

「はあ……」

休憩時間、俺は自動販売機の隣にある長椅子に座って缶ジュースを飲んでいた。座って気を抜く体中の疲労がどっと押し寄せてきた。

昨日の戦いでは重傷を負うような傷は追っていないが精神的にも疲れが残っているようだ。自己治癒能力は高いようなのでゼストから受けた傷は完治していた。肉体は治っても精神からの疲れはそう簡単に取れない。

俺は壁に頭を預けて天井を見上げた。

「ガイさん」

「ん？」

呼ばれたので再び正面を見ると、コロナとリオが居た。何やら複雑そうな表情だ。

「どうした？」

「今のガイさんは何か疲れているように見えます」
「……」

今、思っていた事がコロナの口から告げられてしまった。その事に一瞬頭が真っ白になり思考が止まってしまった。

「そう……見えるか？」

「はいっ」

リオが俺の言葉に頷いてくる。

「合宿の後からガイさんの様子が変わった気がします」

「うん、常に周りを警戒している気がして殺伐としている雰囲気を持っているような感じですよ。それでも、ガイさんから寄ってきて褒めてくれたのは嬉しかったです!!」

リオはさっきの事を言っているのか八重歯を見せて笑みを見せてくる。いい笑顔だ。

「そうか、そんな風に思われていたか。悪かった」

子供たちとの“日常”は楽しいんだけど、“非日常”の聖杯戦争がある。この二つの境界線を跨いでいる俺は向こう側の影響があればこちら側に表れてしまうことだってある。

例えば、戦闘で追った傷。向こうで受けてしまえばこちら側でもその傷は残ったままだ。

例えば、向こう側で決めた覚悟。それがこちらにも影響して表情や雰囲気に出してしまう事もある。

コロナやリオが言っているのはこの後者の事を言っている。

聖杯戦争で決めた覚悟が子供たちとの日常にも表れてしまう時もある。それをコロナやリオは感じ取っているのだ。

ヴィヴィオもアインハルトも例外じゃない。もちろん、勘の鋭いなのはさんだって。

「でも、あの時、ガイさんが笑顔でいてくれと言ってくれたのって私たちへの初めてのお願いごとだったんですね。とっても嬉しい

かったです。だから、私達は笑顔でいようと思います」

「無理強いはしないでいいんだぞ？自然な笑みを見せてくれれば」
「……ガイさんと居れば自然と……」

コロナは最後の方は俺から視線を離してボソボソと喋っていたので良く聞き取れなかった。

「ん？何か言ったか？」

「い、いえ、何でもありません！」

「でも、ガイさんも笑顔でいて下さいね。ガイさんが楽しそうにしてくれると私達も嬉しいですから」

コロナは慌てていたが、リオが誰が見ても100点満点を付けるような笑みを見せた。それを見て俺は安心感を持つ事が出来たので笑みを零した。

やっぱり、ここの居場所はいいな。心が落ち着く。

こいつらと一緒にインターシップに向けて練習して大会に出る……そんな光景を思い浮かべる。それはきつと楽しい事なのだろう。そして、その未来はあるかも知れないのだ。

そのためにも聖杯戦争……勝ち抜いて生き残らないとな。

こちら側でもあちら側の方へ影響を与えるモノがあった。こちらの事象であちら側への覚悟が固まったこの工程だ。

コロナとリオには感謝だ。なので頭を撫でてやった。

「ありがとな、2人とも」

「あ、は、はい」
「えへへ〜」

2人とも撫でられてとても嬉しそうな表情だ。

「!?!」

だが、突然大きな地響きがこの会場を襲った。地の底から何かが唸るような、そんな錯覚さえ覚える大きな振動の地響き。

あのキャスターが次元を割いて出来た黒い“穴”が現れたような地響きに似ている!!!

俺はまさかと思って皆の所へ戻ろうとして、コロナとリオを見た。

「なっ!!!」

2人ともいつの間にか前のめりになって地面に倒れていた。

「コロ!!!リオ!!!つく………プリムラ!!!」

『迅速に診断します!!!』

俺はその2人を仰向けに直してプリムラと叫んだ。プリムラも俺の指示が分かっていたのか早速診断を始めた。プリムラは魔力の状態や人体の症状などの簡単な診断は行える。

俺は肉眼で2人の様子を観察する。呼吸は小さいが息はしている。だが、少し顔色が悪い。

『マスター、診断終わりました』

「どうだった!?!」

本当に迅速で診断したようだ。言われてから10秒も経っていない。

『体に影響はありません。ですが、魔力が少しずつですが搾りとられています。徐々にですが外部へと放出されています』

「何……!?!」

魔力を絞り取られている?何故?

「あつ……」

俺はコロナとリオに気を取られて周りが見えていなかった。廊下を見ると他にも何人が倒れている姿があった。

この感覚……。

「結……界?またか?」

『おそろく』

「くつ……!?!」

その事実に関自分の心臓が跳ねたのが分かった。また聖杯戦争が始まったのだ。しかも今度はコロナとリオを巻き込んでしまった。

「ヴィヴィ達はどうなってる!?!」

『わかりません。ですが急いだ方が良いかと』

「くつ……!?!」

俺は歯ぎしりを鳴らして、この状況を招いてしまった事に悔しさと後悔を感じた。あの時、ヴィヴィオの誘いを断つとけば良かったの

ではないかと思ってしまった。

だが、その事を考えるのは後にしてコロナとリオを長椅子に寝かせた。

「悪い。少しの間、そこに居てくれ」

俺は意識のない2人に言葉をかけてヴィヴィ達の所へ走って行った。

この結界の感覚……あいつか。

脳裏には1人の人物が映し出されていた。

「うっ……」

練習場に戻ると、そこは先ほどの風景とは全く異なっており思わず吐き気を感じた。俺は口に手を押さえて何とか落ち着かせる。

練習場に居た人は皆倒れており意識が無いのか誰も動いていない。

死んでいるのではないかと一瞬思ってしまったが、コロナとリオを見た限りだとそんな事は無いはずだ。

だが、この光景だって見方を一つ変えるだけで死屍累々の地獄絵図にだって成り替わる。

「ガイ!!」

その中で俺の名前を呼ぶ声が聞こえた。その聞こえてきた方角を見るとオリヴィエが切羽詰まったような表情で俺の元へ駆けつけてきた。

「フリー!! 無事か!?!」

「はい。ですがこの結果は……」

「ああ、あいつで間違いないだろう。ヴィヴィ達は?」

「長椅子で横にさせておきました。ヴィヴィオもアインハルトもなのはもフェイトもノーヴェも……皆を聖杯戦争に巻き込んでしまった」

オリヴィエは後悔の色を表情に出し、がっくりと項垂れてしまった。

「後悔するのは後だ。今はこの結界を……」
「どうする気だ？」

後ろから突然聞こえた言葉にゾクリと背筋が凍った。目の前にいるオリヴィエも緊張の色を表情に出していた。

俺はゆっくりと振り向いた。そこに居たのは……

「キャスター……またか」

やはり先ほど想像していた通りの人物、キャスターだった。いつの間にか音もなく先ほどまで地獄絵図にもなるうとしていた口径の真ん中に立っていた。

そして、キャスターと目が合った瞬間、空気が凍った。

比喩表現では無く、本当に大気が凍ったのではないかと思わせる。そこまで冷酷な殺気を放つ人物はそうそういない。

このキャスターの正体は本当に一体……。

「なっ!？」

ここに来てもう何度目の驚きだろうか。数えるのも面倒だ。だが、これが今日の最大の驚きだろう。

キャスターの右腕の中にはヴィヴィオ、肩に担いでいるのはアインハルトだと分かったからだ。2人とも気を失っているからか動いていない。

非日常という世界の人物が日常の人物に侵食を始めた。そう思わせる光景だ。

「ヴィヴィオ……アインハルト……先ほどまで長椅子に寝かせていたはずだ！貴様とすれ違った記憶など無いぞ！？」

「……………」

オリヴィエが皆を寝かせた長椅子の場所はこの練習場の場所と一本の廊下で繋がっている。オリヴィエがこっちに来るまでにキャスターに遭遇しないはずが無かった。

「……………てめえ、その2人をどうするつもりだ？」

だが、そんな事はどうでもよい。今は目の前の状況が最悪なのだから。

そして、苛立っているからかなり低い声で話していたのが自分でも分かった。

「“聖王”と“霸王”……後は分かるな？」

「その力をその子たちから奪うのか？」

「教える気はない……だが………」

「ああ!？」

キャスターは俺の事を頭のとっぺんから足のつま先まで目を通した。

「ふっ……………」

そして、鼻で笑った。バカにされたのだろうか？だが、そんな事よ

りも……

「その2人を離せっ!!」

「武装形態!!」

俺は瞬時にバリアジャケットに切り替え、オリヴィエも騎士甲冑に変わる。

「そんなに大事か？この2人は？」

「てめえには関係ない」

刀になったプリムラの鞘を掴んで立ち居合構える。オリヴィエも拳を握り込めて構える。

「……邪魔だな」

「?!？」

キヤスターを中心に何かが衝撃が波紋の様に広まった。激しい突風のような衝撃に目を閉じる。眼を閉じていてもその衝撃は体でまともを受けた。

「ガイっ!!」

だが、それも少し和らいだ。視界で確認していないがオリヴィエが俺の前に立ってくれたのだろう。オリヴィエは目を開けているのか？

そして、その衝撃は徐々に弱まり、少しして終わりを告げた。俺は眼を開ける。

「……っ!!」

「じ、ここは!？」

驚きは今日の内に後、何回体験すればいいのだろうか？

俺は目の前の光景に言葉が出なかった。

「……………ここが“世界の実存外”だ」
アウトオブザワールド

キャスターが何かを言っていた。

一言で言うのなら“漆黒の世界”。地面も黒ければ空も黒い。360度見渡す限り、漆黒の闇だ。近くにいるオリヴィエでさえ目を凝らさないと見えないくらいに黒という色の密度は高い。こんな所にズツと居ると平衡感覚が危うくなってくる。

しかし、先ほどまで練習場に居たのにここは一体？

「……………二重結界……………やはり負担は大きかったが、取れた魔力が良かったな」

漆黒の闇の中、キャスターの洪い声が耳に響く。

「……………取れた魔力？」

「あの練習場の中にも優秀な魔導師が居たわけだ」
「……………」

その魔導師というのはきつとなのはさんやフェイトさんのことだろう。

「てめえ……………」

怒りが体の全体から込み上げてくる。皆を巻き込んでしまった自分も苛立ちを感じるが、巻き込む原因となったキャスターにも苛立ちを覚えた。

「ふんっ……“固有結界”というのを知っているか？」

「……なに？」

漆黒の闇の中、キャスターの言葉が脳に響く。

「“固有結界”……心象風景を具現化し、現実を侵食する大禁呪……」

「心象風景……つまりお前の心の中は漆黒の闇とでもいうのか」

「まあ、正解に近い。だが、少し違う。そして、先ほどの結界内にこの固有結界……“世界の実存外”アウトオブザワールドを展開させた。良い補給源が一つ目の結界内に居るので作りやすかったがな」

世界の実在外……世界の外側って意味か？となるとここが世界の外側……なんて殺風景な景色だ。

そして、パチンと指を鳴らす音が漆黒の中に響き渡った。その音に俺とオリヴィエは警戒心を高めた。

そのうち視界に何かが浮かび上がってきた。白い十字架だ。それも二つ。そこに張り付けられているのは……

「ヴィヴィオにアインハルト？」

「ヴィヴィー！！アイン！！」

「あ、ま、待って下さい！！ガイ！！迂闊に動いては……！！」

張り付けられているヴィヴィオとアインハルトを見て俺は後先を考

えずその十字架に向かって走り出した。

「つくぐ!!」

だが、腹部に何か重い衝撃が当たった。その衝撃で来た道をリターンする様に飛ばされた。

「ガイ!!」

飛ばされたがオリヴィエが俺の勢いをうまく殺してキャッチしてくれたようだ。

「我を失っては勝てる勝負も勝てません!!しっかしして下さい!!」

「……つく、あ、ああ。悪かった」

眼前にヴィヴィオとアインハルトが気を失って捕まっているというのに何も出来ない事に不甲斐無さを感じたが、確かにオリヴィエの言う通りだ。冷静さを失っては勝機も無くなってしまう。

俺は一度落ち着かせて周りを確認した。白い十字架のおかげで、少しだけ周りが明るくなっていた。

俺が衝撃を受けていた場所にはキャスターが立っていた。キャスターに殴られたか蹴られたのだろうか。

「この2人はとても貴重な魔力だ。慎重に絞り取らねばなるまい」
「……」

ダメだ、冷静になれ。怒りの沸点の限界地は越えていたが、何とか

自分自身を制御した。

ヴィヴィオ……アインハルト……巻き込んで本当にゴメンな。

俺は心の中で2人に謝った。

「後はこの中でお前たちを仕留めて一気に聖杯戦争を勝ち抜く」

そう言いつつ、キャスターは自分の周りに黒い霧を発生させる。周りが漆黒の闇なので肉眼ではその霧が見づらい。

「オリヴィエ……助けるぞ、あの2人を」

「ええ。絶対助けましょう」

俺とオリヴィエは拳をブツけて構えた。

絶対にヴィヴィオとアインハルトを助けてやる。

その思いを胸に刻み込んでキャスターを見据えた。

二十話“練習と戦争の交差”（後書き）

キャスターがマジでチートっぽい。

固有結界まで使い出しましたよ。

キャスターはそろそろネタバレをする時期になってきたな。

何か一言感想がありますと作者の気力がかなりとり戻ります（割と
事実w

今年中に後三回は更新することを目標として頑張ります。

では、また（・・）／

二十一話 “覚醒と真実の交差” (前書き)

……ポカーン。(。)

どうもガイドです。

11〜12月の会社はクソ忙しい時期になって更新が遅れてしまいました。

申し訳ありませんm(´▽´)m

EXVSのゲームも出だし、Lyceeは今月は雲雀丘由貴杯だし、なのはのゲームも出るし。

何もかも時間が足りないな、と思った今日この頃です。

作者の近況はどうでもいいですね、はいw

では、二十二話目入ります。

二十一話 “覚醒と真実の交差”

????

闇。

キャスターが作り上げた固有結界…… “世界のアウトオブザワールド実在外” は一言でいえば本当に闇そのもの。

上下左右360度見渡しても暗黒の暗闇が延々と続いている。この中を一生歩き続けてもこの世界の果てには届かないのではないかと思ってしまう。

そんな中、唯一のオブジェクトがある。それは二つの白い十字架。そこに張り付けられているのはヴィヴィオとアインハルト。

白という色がこの暗闇の中、浮かび上がっているのでその周りだけは気休め程度だが少し明るく見える。

あの2人を助けるためにこの塗りつぶされた暗闇の中、俺とアルトリアはキャスターと対峙する。

炎の変換資質でもあれば明かり程度にはなるんだが、生憎とそのようなモノは俺の中には無い。それに俺の魔力の色は黒。魔力を展開しても周りの闇と同化して明かりにすらならない。

光になるモノがなければここは十字架を除き、黒という一色のしかない世界なので視覚からの情報はほぼ0になる。そして、キャスターの黒い霧が周りの暗黒の暗闇と同化してほとんど肉眼では捕えら

れない。ちよつとでも反応が遅れたら串刺しにされてしまう。

逆に俺の魔弾も同化してキャスターに闇討ちを出来るのではないかと思うが、あのキャスター相手に通じるとも思えない。

「……状況は最悪か」

「ガイ……冷静になってなりよりです……ですが、こういう時だからこそ私の時の訓練を思い出して下さい」

「オリヴィエとの？」

オリヴィエとの特訓を思い出す。

オリヴィエとの組手で死の恐怖を肌で感じさせられ、それでもって死を感じても決して動きを止めないで避け続けるための特訓。

「……視覚が使えないこの状況だとあの特訓の更にも上のレベルの状況下だけだな」

「応用編だと思えば、このくらい……来ます!!」

「……!？」

会話の途中、オリヴィエはキャスターの方に振り向いて拳を動かした。バシユッと何か固体の物体が霧状になった音が聞こえて来たので、おそらく飛んできたキャスターの武器を手甲で弾いたのだろう。

キャスターの武器が全く見えねえ……だが、飛んでくる方角からの気配は感じた。

俺はオリヴィエが黒い武器を弾いている間、この状況の打破に模索し続けた。本当は今すぐにもヴィヴィオとアインハルトを助けに行きたいが、その溢れ出す気持ちを何とか抑え込む。

「闇の雨」ダークレイン
「!?!」

キャスターの低い声が暗闇の中に静かに響き渡る。

すると幾つもの気配を上空から感じ取れた。それが一気に俺たちの居るこの場所へと向かってくるのが分かった。

漆黒の闇。その中でキャスターによって錬成された鋭い闇が俺たちに襲いかかってくる。

「ガイ!!!」

そんな中、オリヴィエが動いた。瞬時に俺を掴みその場から大きく跳んで後退した。それと同時に俺たちの居た場所の闇がみるみる濃くなっていった。

数多の武器がその場に刺さり、さらに濃い闇へ埋め尽くされたのだろう。

「っと、着地が難しいな」

「ガイは何も見えていない……夜目を持っていないのですね」

「この距離で辛うじてオリヴィエの体の輪郭が分かる程度だ」

俺とオリヴィエは闇の上に着地した。

360度間に覆われたこの世界で着地するにも距離感がいまいち掴めない。この中で飛行をしたら平衡感覚が全く分からなくなって、全力スピードで地面にぶつかる可能性もある。

「オリヴィエは視覚は利くのか？」

「ええ。普段よりかは視覚が狭まっていますが問題ないです」

「凄いな、英霊って。」

オリヴィエがこの世界の中で見えるとなれば、オリヴィエとは離れないようにしないと見えない俺はあつという間にキャスターの武器で串刺しだ。

「……この世界を何とかしないと」

「ガイ、一つ提案があります。乗ってくださいませんか？」

「提案？」

隣にいたオリヴィエが少し不安げな様子で頷いていた。

「乗ってくださいませんか？」

「……ああ、乗ろう」

そして、僅かな話し合いの後、俺たちは再び十字架を目指して走り出した。

???

「オリヴィエ！！これ以上体に負担をかける事はしないでくれ！！」
「……………」

後ろから悲鳴に近いような怒鳴り声が聞こえてきた。その声の主は間違えるはずもない。

私は後ろを振り向いた。

「クラウス……………」

その声はシュトゥラの国の霸王の王子、クラウス・イングヴァルドだ。周りには幾人もの護衛兵がクラウスを守るように立っていた。

私には護衛兵が居ない。

「それ以上、戦う必要はないはずだ」

「ですが、戦わなければこの乱世に終わりはありません」

私の周りには既に亡くなっている敵兵が何人も倒れていた。私が殺したのだ。

倒れている敵兵の中に私に付いていた何人もの護衛兵も倒れている。護衛兵が殺されてしまってその弔いの為の戦いだっただけだ。

しかし、敵兵を倒したからと言って護衛兵が戻ってくるわけでもない。ただ、私自身が前線で戦う必要があったからだ。そのの付けたしで護衛兵の弔いなのだ。弔いなど二次的な理由にすぎない。

この戦乱の中、私が率先して前線で戦わなければ味方は怖気づいてしまふし士気も上がらない。

戦争とは人の心理戦でもある。相手の行動を読み、戦況を読みとり、勝てる戦い方を味方に教えて士気を上げさせる。

私が前線に立つことにも意味はある。

「だが、オリヴィエ。貴方の体はとうに限界を超している。それを無理して動かしているのは……」

「いいのです、クラウス」

クラウスの悲痛の声を私は遮って止める。

シュトウラと国交がある聖王家では戦争の時も同盟軍として同じ戦場に立つ事がある。それが今だ。

「兄さんのようにはいかないけど、私は私なりのやり方でこの乱世を鎮めたい。たとえこの体が壊れようとも……」

「オリヴィエー!!」

私は右手を握りこめる。手甲には返り血が付いている。服装もかなりボロボロだ。体も限界を超えて悲鳴を上げている。それでもあの兄の最後を思うと不思議と気持ちが引き締まる。

「兄さんは味方の為に殿を務めて最後まで最前線で戦って味方の危機を脱してくれた。兄さんは凄いと思いました。私も兄さんのような覚悟を持ちたい。聖王家最後の聖王、オリヴィエ・ゼーケブレヒトは只の聖王ではない」

「オリヴィエの兄上の事に関しては不幸の事態だったと思う。だが、聖王家最後の聖王なら……最後の聖王なら生きる選択肢も必要だ。死を急いだって何もならない」

「……ありがとう、クラウド」

最前線へ行こうとする私を必死な表情で引き止めようとしていくれているクラウドには感謝の気持ちで一杯だ。

兄さんの言っていた“お前の為に笑い、お前の為に戦い、お前の為に頑張ってくれる奴”は今だとクラウドに当てはまるだろう。

私はクラウドに近づいてクラウドの頬に手を添えた。

「大丈夫ですよ。こう見えても私とっても強いんですから」

いつか、クラウドの居た城の庭で語った言葉と同じ言葉を微笑みながら呟く。

その時は笑ってくれてたクラウドだが、今は……

「……オリヴィエ……」

歯切りを鳴らして悲痛の表情を浮かべて私の事を見ていた。

「その技は危険だ……」

「それも承知の上です」

私は目を瞑って頷いた。

「では、私は最前線へ行きます」

そして、クラウスに背を向ける。そのまま戦場の激戦区へ進みだした。

ガイはヴィヴィオとアインハルトが張り付けにされている十字架へ一直線に走っていた。直線的な動きは相手にとっては読みやすい行動なので危険な行為だ。だが、それでもガイは一直線に走っていた。私は少し後ろから後をつけるように続いた。

キャスターが動いたのが闇の中で分かった。黒い霧が武器へと変化してガイに向かって飛ばしている行動だ。“闇の雨”というものだろう。上空から数多の武器がガイ目掛けて襲ってくる。私は夜目があるのでこの闇の中、その動きも見ることが出来た。

『前方より、多数の魔力熱源の反応有り』

ガイの持っているデバイスのプリムラがキャスターの魔力に反応した。

私は体内の魔力を放出した。すると、ガイはその武器の雨を掻い潜って全て避けたのだ。キャスターは驚きを隠せていない表情だ。ガイは背中を向けていて表情が読み取れないが多分驚いている。

「お前、見えるのか？」

キャスターの疑問が言葉に現れた。

「……何とかな」

嘘です。

私は笑みを溢しつつ心の中で呟いた。

身体自動操作。

今のこの世界では“ネフィリムフィスト”と言われているようだが、昔にはそんな名前は付いていなかった。

コロナのようなゴーレム操作を自分の体に行い、自動操作にする事が骨が折れようと腕が千切れようと戦える。

それをゴーレム操作と同じようにガイに繋げた。私の意志でガイを動かせる事が出来る。夜目の無いガイにとって相手の武器がとても厄介だ。それを夜目の利く私がガイを動かしてそれらを避ける。

ガイにとっては外部から動かされて戸惑いを感じるようですがそれでもこの闇の中、攻撃を避けれると言うのは大きい。

ただ、ガイの体が限界を超えても動かしてしまうので体への負担は大きい。最悪、昔の私のように動かせなくなってしまうかもしれない。いえ、昔の私は体に無理をさせてしまい壊してしまっただけで、この自動身体操作で動かしていたわけですが。

「ガイ、無理はせずに」

「ああ、分かってる」

ガイの隣に並んだ。目の前には二つの白い十字架。その前にキャスターが暗闇の中こちらに顔を向けていた。

オリヴィエの外部自動身体操作には驚きを隠せなかった。暗闇の中、一直線に進むと言つのは恐怖を捨てきれない。

それでも俺は一直線に進んだ。そして、暗闇の中、キャスターが何か攻撃をして来たのが分かった。

プリムラからも反応ありと伝えてきた。

それが分かるだけでも視覚の利かない今の心境では、心の中にある恐怖が何倍にも膨れ上る。

何かがやってくる気配を感じる。そして、それが俺の眼と鼻の先ま

で来て、恐怖に襲われながらも避けようと思ったとき、己の意志とは別に体が思っていた方向と逆の方角に勝手に動き出した。

その動きでそれらの気配を避け続ける事が出来た。オリヴィエが俺を動かしているのだ。俺が思っていた動きだと串刺し確定コースだったのだろう。

鍛えた反射神経と動体視力はこの世界では通用しない。オリヴィエが居てくれて本当に助かった。

そして、この操り人形のような動きで、その気配を全て避けた。キャストもそれには驚いた様子を隠せないだろう。

「いくぞ、キャスト」

「……」

キャストからは何の反応も無かった。そして、俺とオリヴィエはキャストに向かって走り出す。

オリヴィエが先頭だ。俺は夜目が無いためオリヴィエの後について行くしかない。

プリムラは探知能力に全ての動力を注ぎ込んでいるので会話は出来ない。最低元の言葉で探知した最大限の情報を与えてくれる。

オリヴィエと同じくこの暗闇の中で頼りになる。

「 聖王聖空弾 」

オリヴィエは走りながら一発の白い魔弾を頭上に精製する。オリヴ

イエのベルカ式の白い魔法陣が展開されて周りが少しだが明るくなった。

それを二つの白い十字架の手前にたどり着く直線的な軌道で飛ばした。

暗闇の中、1つの白い魔弾が飛んでいく様は流れ星のようにも見えた。そして、それは暗闇の場所で止まっていた。

その白の色でキャスターがこちらに向いて立っているのが見える。

右手に持っているデバイス・ジャツカルを前で掲げてプロテクションを展開させ、オリヴィエの魔弾を受け止めていた。

「聖王聖……」

そして、いつの間にかキャスターの背後に走り込んでいたオリヴィエが魔力を込めた拳を放っていた。

キャスターはそれを黒い霧で受け止めていた。その霧のおかげで白い色が黒で塗りつぶされ、再び暗黒の世界へ戻った。

オリヴィエの白い魔弾が消えたので視覚からの情報は皆無に近かった。

「えっ……!?!」

俺は驚きを隠せず言葉が出てしまった。体が勝手に動いたのだ。

俺の先ほど居た場所には黒が濃くなっていた。黒い武器が飛んで来

たのдарろつ。だから、オリヴィエが動かした。

気配は……感じなかった。そして、オリヴィエが動かしたのは分かった。だが、ものすごい違和感がある。

その避ける動きを終えると近くにオリヴィエが着地した。そして、こちらに必死な表情で口が動いていた。

「……！！」

だが、その言葉が俺の“耳”に届く事は無かった。

「ガイ!!!」

キャスターの背後に居た私はガイにも黒い霧が武器となって飛んで行ったのが見えた。

『前方より複数の魔力反応有り』

プリムラが反応してくれた。

それによってガイも警戒してくれるはず……だった。だが、何も反応をしていない。

「つく……」

私はキャスターから離れて“身体自動操作”を発動させる。

「えっ……!？」

それはギリギリ間に合い、ガイは黒い武器を避けた。しかし、ガイは何故か呆けた様な表情をしていた。

「ガイ!!!何をやっているのですか!？」

私はガイの隣に着地して必死に叫んでいた。プリムラが反応したのに何もしなかったガイは私がほんの少しでも遅れていたら串刺しだった。

ガイが何もしていない事に腹が立った。だが、帰ってきた言葉は思

わぬ台詞だった。

「きこ……えない」

「え？」

きこえない？聞こえない？音がという事ですか？

「オリヴィエがなんて言っているのか分からない。耳が聞こえない！！」

「ガイ……くっ！！」

私の瞳に必死に訴えてくるガイは不安な表情を顔に出している。

この暗闇で視覚が利かない上に今度は原因が分からないが聴覚もダメになっている。五感のうちの一つが無い状態だ。これでは精神的にかなり辛いのだろう。

「ガイを動かしていたのはやはり貴様か。オリヴィエ・ゼーケブレヒト」

背後からキャスターの音が聞こえたので振りかえる。

「ガイに何をした！？」

「私は何も……何もしていない……だが……」

キャスターは一息を吐いてから次を語る。

「この“世界の^{アウトオブザワールド}実在外”は世界の外の空間だ。時間の縛りもなく、この暗闇なので視覚も必要ない。そして、この空間では元より音というもが存在しない。空気を振動させる要因が無いからな。更に付

け足すと宇宙の膨張とは違いこの空間は動かない。この動かない空間では嗅覚も味覚も、更には触覚ですら意味はなくなる。私たちのようなこの空間にとつての部外者は動いていたり空気を振動させたりすると、排除するような形として五感を侵食し始める」

「な……に？」

この空間は時間の流れが存在しない。停止している空間なのだ。

停止している空間とは想像するのも難しいが、黒に塗りつぶされた暗闇の絵の中に私たちは居ると考えるのが分かりやすいか？そして、その絵は動いている私達を危険と判断して少しずつ必要としない五感を侵し始める。

時間に縛られていない私やキャスターのような英霊にはそれほど関係ないが生身を持つガイにとってはこの空間は五感を侵される毒の世界のようなものだ。

ガシャンとガイの居た後ろから何かが落ちた音が聞こえた。今度はガイの方を向くと左手に持っていた鞆に収まっているプリムラを落としていた。それに気づいていないガイは私を不安げに見ている。

「ガイ……触覚まで……！！」

歯切りを鳴らして再びキャスターを見る。一刻も早くこの世界から動いてはいるがヴィヴィオとアインハルト……そして侵食され始めたガイをも脱出させなければならぬ。

ヴィヴィオもアインハルトもこの世界は危険だ。早急に脱出しなければ……！！

「……ジャツカル」
「!?!」

そして、キャスターは一瞬にして私の目の前に移動して腹部に杖の先端を向けた。

『了解した、マスター』

「ぐっ……!!」

反応している暇もなく出力された魔力が私の隙だらけの腹部に重たい衝撃を与えて思いつきり飛ばされた。

衝撃が凄まじい。時速100kmは超えるくらいの勢いで私は成す術もなく暗闇の中を駆け抜ける羽目になった。

ガイ……ガイ!!

「ガイイイイイイイイ!!」

キャスターの目の前に残されたガイが殺されてしまう不安が頭の中をよぎり、停止しているこの暗闇の空間の中、木霊するぐらいの勢いでガイの名前を叫んだ。

目の前でオリヴィエがキャスターに飛ばされた光景を辛うじて視界に入れる事が出来た。だが、それは心の中にあつた恐怖が増加するだけのモノだった。その死神はこちらに向きを変える。

音も感覚も……ない。おそらく嗅覚や味覚も。

俺は何も聞こえてはいないが自分の五感が段々と鈍くなっていくのが分かった。左手に握っていたはずのプリムラを落としていたのを気付いたのもついさっきだ。

拾おうと思った矢先にオリヴィエが飛ばされてしまった。

「
」

キャスターの口が動いていたのが分かった。何を喋っているのか分からない。表情はひどく不機嫌で飛んで行ったオリヴィエの方を一度見た。

耳が聞こえなくなったのはオリヴィエがキャスターの背後を取って、技を繰り出す時だった。

途中から聞こえなくなっていた。

そこから音が無くなっていった。気配も五感から感じ取るモノだ。五感が鈍り始めたら気配何か読めなくなるのも当然だ。

キャスターは再びこちらを向く。

「……………」

五感が無くなりつつあるのにキャスターから向けられる膨大な量の殺気は何の変化もなく、俺は息に詰まった。体を動かそうにもその殺気からの恐怖心が俺の許容を越えて金縛り無状態になって動けない。

そして、キャスターの右手に1つの武器を握っていた。おそらく剣だろうか？周りの闇に同化しすぎて分かりづらい。

キャスターは無表情のまま、その切先を俺の胸に向けた。

もう死神の鎌は目の前にある。後はそれを振るだけだ。おそらく、その剣らしきもので俺の心臓を貫くのだろう。

ここで死ぬ……のか？この聖杯戦争で何も出来ずに終わってしまうのか？

嫌……だ……嫌だ……嫌だ嫌だ嫌だ嫌だ嫌だ嫌だ嫌だ嫌だ嫌だ嫌だ嫌だ嫌だ

嫌だ！！死にたくない！！まだ死ねない！！

まだ夢をかなえていない！！ヴィヴィ達との日常にも戻りたい！！
この聖杯戦争にだって終止符を打ちたい！！

まだ……終われない。

頭の中で必死に死ぬことに対して否定しているが現実では何も変わらない。

「
」

じゃあな、我が……、とキャスターが口を動かして何か言葉に出していたが不思議とそれは聞こえてきた。いや、俺がそう言っているのでは無いかと憶測で感じたのかもしれない。

そして、キャスターの剣は俺の心臓に一突きする様に真っ直ぐ向かって来た。

終わ……る……死ぬ……この武器が俺の心臓を一突きして終わる……。

死ぬ時は何故か心に恐怖というモノは存在しなく、涼しげな心境になると言われていた。今がそのときなのだろう。

先ほどのパニック無状態とは違くえらく落ち着いていた。

落ち着いていた俺は心臓に剣が刺さるイメージをした。それで終わるのだと分かって。

……カチリ。

だが、そのイメージをした瞬間、ズレていた歯車が其処にハマったような音がした。すると心臓から体に何か波紋のように広がって、それは体全体を包み込んだ。そして、変化が起きた。キヤスターの握っていた剣のような武器の速度がスピードを落とし、スローモーションのような速度になった。

なんだ？何が起こった……ぐっ……胸が……痛い……。

俺は心臓を握りつぶされるような激痛に膝を付いて前のめりになっ頭を地に付けた。その痛みは次第に体全体に侵食された。

本当に体全体を握りつぶされるのではないかと思っくらしい錯覚の痛みだ。

熱……い！！痛い！！……なんだ……こ……れ？

痛みによって思考がうまく働いてくれない。

だが、疑問だけは思う事が出来た。こうしている間にも俺はキヤスターの武器によって命を絶たれるはずなのだが未だにそれは無い。

俺は何とか顔を上げる。

キヤスターは未だに俺に向かって剣の武器をさつきまで心臓の位置にあった場所に向かって突きをスローモーションで行っていた。

「なんだ……これ？」

訳が分からなくなった。

痛みが少しずつ薄らいで行ったので、隣に落ちているプリムラを掴んだ。そして、また違和感を感じた。

感覚が……ある？　そういえば、さっきも膝をついた時に感覚があった。触覚が戻ってきたって事か。

ありえない現状が続いているが俺は何とかそれらを理解しようと思いをフル回転させる。

と、思った矢先、キャスターの動きが突然早く速くなり、突きを放っていた剣は俺の頭上を通り過ぎた。

「!？」

キャスターは驚きを隠せていない。俺は状況が追いついていないが、今はキャスターと対峙することだけを考えて、膝立ちのまま刀を抜いた。

「ぬっ!!」

俺の横切りは空を切っただけだ。キャスターは俺の刀の軌道から少し離れて下がったから。

そのまま立ち上がって、刀を収める。

音も聞こえる……五感が戻ってきたってことか。

「プリムラ、通常モードへ」

『了解しました。探知モードから通常モードへ移行します』

プリムラを探知モードから通常モードへ戻した。プリムラの無機質な音声の声も聞こえる。相棒の声を聞いて俺は安心感を持てた。

プリムラを通常モードへ戻した理由は今の俺には探知は必要としなかったからだ。

「お前、見えているのか？」

「何とかな」

さつきも同じ会話をした気がする。だが、今回はオリヴィエが動かしただけでもないので嘘ではない。

実際に先ほどのよりもこの暗闇の中、キャストと離れていようとキャストを見る事が出来る。

あの痛みの後から夜目があるようだ。痛みも消えたが体はまるで自分のものではないような不思議な感覚だった。

『マスター！！それは一体なんですか？』

「それって？」

予想外な事態なのか会話が出来なくなった通常モードのプリムラからも疑問が飛んでくる。

『マスター自身です。マスターの中の魔力が別のモノになっています』

「えっ？」

プリムラから思わぬ言葉が出てきて目を白黒させた。

俺の魔力が別のモノ？どういう事だろうか？

「……覚醒したか」

その疑問に対して言ってきたのは今対峙しているキャスターからだ
った。

「覚……醒？」

プリムラからキャスターの方を見ると凜としていた表情が少し緩ん
でいた。

「……自分で調べるのだな」

そう言つて、自分の周りに纏いだした黒い霧を無数の武器に変える。
そのまま俺に向かって飛ばした。

「ガイ!!!」

だが、それはあり得ないほどの速度で飛んできたオリヴィエが俺の
前に立ち、その全ての武器に手甲で殴り霧状にさせた。

何故だろうか。今まで見ていたオリヴィエとは比べ物にならないほ
ど動きが速い。

そして、俺に振り向く。表情は気が緩んでホッとしている表情だ。

「無事でありよりです」

「俺も何故無事だったのか分からないがな」

「私の声が聞こえるのですか！？それにガイからの魔力のパスがちゃんと繋がっています！！」

「え？」

興奮気味のオリヴィエが語る。本当に今日は驚きデーだ。あと何度驚けば今日を乗り過ごせるのだろうか？

「それって……俺の魔力が上がったってことか？」

「おそらく」

オリヴィエとの魔力パスがちゃんと繋がらなかったのは俺の魔力が低かったからと言っていた。

だが、今はしっかりと繋がっているようだ。その恩恵でオリヴィエは俺が今まで見ていた速度以上の動きで俺の所へやってきた。

しかし、疑問は残る。

プリムラから魔力とは別のもの変わったと言っているし、キャスターからは覚醒と言われた。そして、何より一番の疑問はこの俺の体だ。本当に自分のものではないのかと思うくらいに違和感がありすぎる。

肉体と精神が分離しているような……そんな感覚は味わった事ないけど。

「ガイの五感はなんとも？」

「ああ、今のところはな。でも、この世界は危ないな」

「この空間自体が私たちの事を否定しているようです。なるべく長

居はしない方が良いです」

否定している世界に俺たちを引き込むとは……キヤスターも嫌なモノを持っていやがる。

俺とオリヴィエはキヤスターを見据えた。その後ろには十字架に張り付いているヴィヴィオとアインハルトが気を失っている。

「ヴィヴィとアインも早くこの世界から出さないと不味いだろう」

「ええ、急ぎましょう」

オリヴィエは軽く微笑んで、構える。

「ガイに本当の聖王オリヴィエ・ゼーケブレヒトをお見せします」

そう言い残して、キヤスターに突進した。その速度は今まで見たことも無い早い速度だ。これが本当のオリヴィエの速さなのだろう。

キヤスターは黒い霧を複数の武器にして突進してくるオリヴィエに切っ先を向けて飛ばした。

「遅い!!」

だが、それはオリヴィエにとっては止まって見えるのか速度を全く落とさずに向かってくる武器を最小限の動きで避けてキヤスターに向かった。

「はああああ!!」

そして、気合いのこもった右拳をキヤスターに放つ。キヤスターは

黒い霧を纏い防御に走る。オリヴィエの拳が黒い霧に当たった。

「!?!」

その瞬間、キャスターに纏っていた黒い霧が散布して吹き飛んだ。威力が先ほどとはけた違いに大きいのだろう。

そのまま、キャスターの腹部にオリヴィエの右拳がクリーンヒットしてキャスターを二つの十字架の間を通るようにして飛ばした。

先ほどの状況とは逆だ。

オリヴィエ・ゼーケブレヒト。かつて武技において最強を誇っていた人物。今なら本当に納得できる。

あれほど苦戦していたキャスター相手にこつも簡単に攻撃を与える事が出来たのだから。

俺は改めて凄いパートナーなのだと分かった。

「ガイ。今のうちにヴィヴィオ達の所へ行きましょう!!」

「あ、ああ」

眼の前の光景に驚きながらも俺はオリヴィエに付いて行き、十字架まで移動した。

そして、張り付いている手と足の紐を解き、2人を地面に寝かせた。

「プリムラ」

『2人とも魔力の潤滑に影響はありません。少し弱まっているよう

ですが正常です』

俺が診査を頼む前にプリムラは診査を終わらせていたようだ。

2人とも無事だと言う事に緊張の糸が少し緩くなった。

「後はキャスターをぶっ飛ばして、早くこの世界から出る事だな」
「ええ、そうですね。この2人もここに長居させてはいけない」

だが、一つ気になる事があった。それを確かめるためにも……。

「オリヴィエ。悪いが2人を見ていてくれないか？」
「え？」

思わぬ言葉にオリヴィエは面食らっていた。

「キャスターには気になる事が出来た」
「危険です。私が行きますので2人を……」
「悪い、オリヴィエ。どうしても気になるんだ」

オリヴィエの言葉を打ち消して俺は話す。

「もし、危ないと思ったら駆けつけてくれ」
「……その気になるモノとはとても重要な事なのですか？」
「ああ。今、知っておかないと俺は多分一生後悔する」

俺は真面目な表情になって語っていたのだろう。それがオリヴィエにも伝わり、戸惑いの色をしていた表情は笑顔に変わった。

「わかりました。身体自動操作は今のガイにはなぜか使えません。」

なので私も見える範囲でキャスターに立ち向かって下さい。状況が悪くなったらすぐに駆けつけます」

「ああ、わかった。ありがとう」

俺はオリヴィエに礼を言つて、ヴィヴィオとアインハルトを見る。

今の表情は穏やかだ。なるべくこの世界に居させたくない。

「2人をよろしくな」

「ええ、ご武運を」

俺は三人に背を向けて、飛んで行ったキャスターの方向へ歩き出した。

少し進むと暗闇の中、キャスターがポツンとこちらに顔を向けて立っていた。表情は冷たく、そして、あの膨大な殺気もある。だが、今の俺にはそれに怯む事は無かった。気になることの方が強いからだ。

俺はキャスターから少し離れた所で歩みを止める。

「聞きたい事がある」

「……なんだ？」

キャスターはどんな質問が来るのか分かっていたのだろう。だが、あえて質問することにした。

「俺に武器で心臓を刺す時に音は聞こえない状況下だったのに何故かあなたの言葉が聞こえた。そして、その事が真実なのか嘘なのか知りたい」

「……聞こえていたか」

少しだが、殺気が薄くなった気がした。そして、目を瞑った。

今すぐ武器が飛んでくるというわけでもないのに俺は話をする。その真実を知るために。

あの言葉を脳裏に再生する。

“じゃあな、我が……”

キャスターは目を開けた。その黒い瞳は複雑な思いの色があったのが分かる。そして、静かに呟いた。

その真実に俺は予想はしていたが驚きを隠せずに表情に出してしまった。

「俺の名前はヴァンス・テストロッサ」

“ かつてお前の父親だった者だ ”

二十一話“覚醒と真実の交差”（後書き）

戦闘の描写は本当に難しい。

今回は戦闘オンリーですから書くのが大変だった。

そして、キャスターの真名オープン。

わかっていた人も居るかな？

多分、ガイ自身だと思っていた人も居るはず。

次も戦闘シーンが多いのか〜……頑張るぞ〜。

一言感想をいただけると頑張れます。

今年中に後二回は更新したい。

頑張るぞ〜w

では、また（．．）ノ

以下、各サーヴァントのステータスです（今更かよw

クラス：ファイター
マスター：ガイ・テストロツサ
真名：オリヴィエ・ゼーケブレヒト
性別：女性

筋力：A
魔力：B
耐久：B
幸運：C
敏捷：A
宝具：A+

・クラス別能力

対魔力：B

魔術発動における詠唱が三節以下のモノを無効化する。大魔術、儀礼呪法等を以つてしても、傷つけるのは難しい。

白兵戦：B A+

接近戦において、自分の理想とする動きに展開して戦えることができるスキル。

このランクにもなると接近戦での一対一では敗北する可能性は0に近い。

ガイからの魔力パスが繋がったのでランクが上昇した。

・保有スキル

第六感：C A+

研ぎ澄まされた第六感は不本意な状況下に陥っても致命傷を避ける事ができ、五感に干渉する妨害を軽減させる。

ガイからの魔力パスが繋がったのでランクが上昇した。

身体自動操作：B

自動操作を自分の体に行い、戦うスキル。骨が折れようと腕が千切れようと戦うことが出来る。

修得：C

必要とされたものなら、それほど時間をかけずに習得することができるスキル。

戦闘で必要となる技術はB以上なので新しく技を習得するのは難しい。

カリスマ：C

軍団を指揮する天性の才能。一国の王としてはCランクでは少し心もとない。

・宝具

“ 聖王騎士甲冑 ”

ランク：B

種別：対人宝具

レンジ：-

聖王家の特殊な仕様を施した騎士甲冑。オリヴィエが聖王流の技を最大限に発揮できるように精密に作られた代物。乱世のベルカ時代

でこの甲冑に傷を付ける事が出来た人物は少ない。

“ 聖王のゆりかご ”

ランク：E X

種別：対軍宝具

レンジ：？

最大捕捉：？

古代ベルカの遺産の一つ。旧暦において一度は世界を滅ぼした強大な質量兵器、巨大飛行戦艦。それは聖王のみが操る事が可能で、制御中枢である玉座に座らせる事で起動する。

クラス：セイバー

マスター：遠坂凜

真名：？？？

性別：女性

筋力：A

魔力：A

耐久：B

幸運：C

敏捷：B

宝具：A +

・クラス別能力

対魔力：C

二工程以下の詠唱による魔術を無効化する。大魔術、儀礼呪法等、大がかりな魔術は防げない。
彼女自身に対魔力が皆無なため、セイバーのクラスにあるまじき低さを誇る。

・保有スキル

皇帝特権：EX

本来持ち得ないスキルも、本人が主張することで短期間だけ獲得できる。

該当するスキルは騎乗、剣術、芸術、カリスマ、軍略、等。

ランクがA以上の場合、肉体面での負荷（神性など）すら獲得する。

頭痛持ち：B

生前の出自から受け継いだ呪い。

慢性的な頭痛持ちのため、精神スキルの成功率を著しく低下させてしまう。

せつかくの芸術の才能も、このスキルがあるため十全には発揮されにくい。

・宝具

？

クラス：アーチャー

マスター：衛宮士郎

真名：高町なのは

性別：女性

筋力：B

魔力：EX

耐久：C

幸運：C

敏捷：B

宝具：A+

・クラス別能力

対魔力：C

二節以下の詠唱による魔術を無効化する。大魔術、儀礼呪法など大掛かりな魔術は防げない。

単独行動：A

マスター不在でも行動できる。ただし宝具の使用など膨大な魔力を必要とする場合はマスターのバックアップが必要。

・保有スキル

不屈の心：A++

決して諦める事の無い精神面での強さ。このランクになるとたとへどんな状況下に置かれても心が折れることはまず無い。

心眼：A

修行、鍛錬によって培った洞察力。戦闘時、常に最高の戦闘理論を持ち出し、有利な状況へ導く。

軍略：B

一対一の戦闘ではなく、多人数を動員した戦場における戦術的直感力。自らの対軍宝具の行使や、逆に相手の対軍宝具に対処する場合に有効な補正が与えられる。

・宝具

“CX - A E C 0 2 X”
ストライクカノン

ランク：A +

種別：対軍宝具

レンジ：？

最大捕捉：？

陸ノ空両対応型の中距離砲戦端末。カートリッジシステム搭載型。かなり大型の機体で、腕に装着した手甲とジョイントすることで保持される。単体でも使用可能だが、“フォートレス”との連結機能も備えている。機体の大半を占める長大な砲身は、展開状態では砲弾の加速レールになるが、綴束状態では“突撃槍”“重剣”として用いられる。

“A E C - 0 0 X”
フォートレス

ランク：A +

種別：対軍宝具

レンジ：？

最大捕捉：？

CW社製の、航空魔道師用総合総合ユニット。魔力非結合状況化での飛行制御・火砲制御を行なうメインユニットと、三機の“多目的盾”で構成される武装で、それぞれの盾は“砲戦用の大型粒子砲”

“中距離戦用プラズマ砲”“近接近用実体剣”を内蔵している。

いずれの盾も独立飛行が可能で、腕部に装備して使用することも出

来る。

“ レイジングハート・エクセリオン（単独飛行形態） ”

ランク：B

種別：対人宝具

レンジ：-

ストライクカノンとフォートレスの使用によって、両手がふさがってしまいう高町なのはをサポートするため、レイジングハートが自ら申請した形態。

この形態のまま、“杖”として振る舞い、高町なのはの魔力をその身から撃ち出すことが可能となっているほか、機体保護と安定翼を兼ねるブレードエッジは“切断武器”としての特性も持つ。

第五世代端末のシステムを一部組み込んでおり、魔力阻害状況下でも活動が可能となっている。

クラス：ランサー

マスター：アルトリア

真名：ゼスト・グランガイッ

性別：男性

筋力：A

魔力：A+

耐久：B

幸運：E

敏捷：B

宝具：B

・クラス別能力

対魔力：B

魔術発動における詠唱が三節以下のモノを無効化する。大魔術、儀礼呪法等を以つてしても、傷つけるのは難しい。

・保有スキル

カリスマ：A

大軍団を指揮する天性の才能。

Aランクはおよそ人間として会得しうる最高峰の人望と言える。

魔力放出：B

武器、ないし自身の肉体に魔力を帯びさせ、瞬間的に放出することによって能力を向上させる。カートリッジシステムとはまた違う。

直感：B

戦闘時、常に自身にとって最適な展開を“感じ取る”能力。視覚、聴覚に干渉する妨害を軽減させる。

・宝具

“ベルカ式槍型デバイス”

ランク：B

種別：対人宝具

レンジ：2～5

最大捕捉：1人

ベルカ式のデバイス。名は無く、必要なこと以上を話さないのも寡黙。フルドライブを使うことで爆発的に所有者の能力を向上させることが出来るが、フルドライブは体への負担が大きく、命を削る一撃であるため安易には使用できない。

クラス：キャスター

マスター：???

真名：ヴァンス・テストロツサ

性別：男性

筋力：C

魔力：B

耐久：C

幸運：A

敏捷：B

宝具：A+

・クラス別能力

陣地傾城：A+

魔術師として、自らに有利な陣地を作り上げる。

“工房”の形成が可能。

ここまでランクが上がると壮大な魔術を作り出すことが出来る。

・個別スキル

殺気：A+

対立するだけでも相手を失神させるほどの殺気を放つことが出来る。

・宝具

“ジャツカル”

ランク：B

種別：対人宝具

レンジ：2～5

最大捕捉：1～50人

所有者の命令に対して瞬時に魔力を展開させることの出来るミットチルダ式の杖。

魔力を込めた黒い霧を所有者を中心に散布させることが可能。その黒い霧は様々な武器の形にすることができ、それを飛ばすこともできる。時には所有者に纏わりついて敵からの攻撃をとめる事も出来る。

アウトオブザワールド

“世界の実存外”

ランク：EX

種別：結界宝具

レンジ：1～99

最大捕捉：1000人

世界の外側を結界内で発動させる宝具。時間という概念がない。暗闇の世界であるが宇宙の膨張とは違いこの空間は動かないので人間の五感は無に近い。

外側にも意思は存在し、止まっているこの世界で動いている異物を見つけるとこの世界の肌に合うように犯し始める。生きているものなら五感が犯される。

霊的存在である英霊たちはこの世界に居ても大した影響は無い。

クラス：アサシン
マスター：?????
真名：?????
性別：女性？

筋力：A++
魔力：B
耐久：A
幸運：B
敏捷：A
宝具：C

・クラス別能力

気配遮断：A++

完全に気配を断てば発見することは不可能に近い。ただし、自らが攻撃態勢に移ると気配遮断のランクは大きく落ちる。

・保有スキル

？

・宝具

？

クラス：バーサーカー

マスター：M | ?

真名：?????

性別：?????

筋力：「@

魔力：- ¥

耐久：¥」

幸運：# \$

敏捷：、 ||

宝具：| へ

・クラス別能力

狂化：C

幸運と魔力以外のパラメータを上昇させるが、言語能力が失われ、複雑な思考が出来なくなる。

・固有スキル

?

・宝具

?

とりあえずセイバーは真名と宝具を伏せたけど意味無いかなw?

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7933r/>

魔法少女リリカルなのはvivid～過去と未来と現代の交差～

2011年12月19日02時54分発行